つ。（起句）五十歳ほどの客、夜興と二十歳ほどの客仁三郎とが、吉原仲の町の茶屋で飲んでゐる。仁三の馴染の女郎綾絹は病氣のため來ず、夜興の馴染の唐松だけが來てゐる。折から夜興は急用で去り、あとに仁三と唐松を殘す。かねて仁三に惚れてゐる唐松は竊かに喜ぶ。（承句）唐松の座敷。仁三、夜興の歸つて來るのを待つ間、寝轉つてゐる中、いつか眠つてしまふ。そこへ夜興の友達流行が遊

「起承轉合」（口繪）

びに來て、頻りに洒落口を叩くをかしさがある。（轉句）同じ座敷。唐松つひに仁三を口說く。仁三は年上の女の手におちる。（合句）綾絹の病室。仁三と綾絹忍び逢ふ。心なき新造がさき程夜興が歸つて來て、仁三と唐松との仲を推して大に怒つたことを綾絹に話したので、大拵事となつたが、惚れ込んでゐる綾みから、綾絹は仁三にこの後供して唐松と口をきゝ合はないと誓はせて仲直りする。

【解說】唐松の岡惚から事起り、遂に仁三が綾絹に背いて唐松に氣をそらせたのが、又元の綾絹に收まる三角關係の經緯を、詩の起承轉合の順序で書いた所に趣向がある。作者一九はまづ初めに自序に於て、詩の起承轉合を抽象的に廓の色事に附會して寫實的に滑稽の筋を運ぶ。しかも事件にも人情をからませてゐる。本文に於て具體化して滑稽を見せ、更に洒落本の常格を守ると共に、滑稽本の要素、又人情本の要素を配合するのが、一九の洒落本の常であつて、これも亦その一つである。

【附記】「起承轉合」の後編として、同年に刊行された「滑稽[illegible]郎」がある。唐松が綾絹をも夜興をも巧みにとりなして、表面に仁三と絕つたやうに見せかけながら、手管で仁三と忍び逢ふこと、それを感づいて綾絹が怒ることを本筋とする。續編作意の眼目は唐松の老猾ぶりの描寫であるが、綾絹が怒つて密會の場へ飛び込まうとするのを作者が出掛けて留め立てしたり、居續けの仁三を迎ひに來た年配者が却つて浮れ出したりする事を配して滑稽味を多大に發揮させる。これが外題に滑稽を標榜する所以である。一九はなほ續稿「青樓色唐紙」を書く豫定であつたが果さず、寬江舍島丸が書いて文政十一年にその名で刊行した。これには、唐松が深く詫びて仁三との絕緣を誓ひながらなほ忍び逢ふこと、仁三が勘當されたのを二人が貢ぐこと、夜興が仁三に知らさずに二人を身請しておき、仁三の勘當赦免を機會に二人を妹分として、綾絹を仁三の妻、唐松を妾とすることが筋である。その趣向は純然たる人情本になつてゐる。體裁も形だけは洒落本常格の小本であるが、四冊仕立である。　（山口）

起請文（きしやうもん）　古文書

【名義】元來起請とは、事を發起して上に請ひ奉る事であるが、また神佛を勸請して誓約する事に用ひられ、この場合の文書が普通の起請文である。【異稱】誓狀・誓文・誓書・誓詞・誓紙・神文などとも稱へる。【解說】神佛に對して誓約するものと人間同士の信義を神佛掛けて誓約するものとがある。前者の例は、

東南院

定置院主所起請事

右件院、元是寺家別當進義律師、以延喜四年移立香摘寺字佐伯院、納大衆中所付屬也、以同五年、氏人故參議正三位太宰帥佐伯宿禰今毛人等孫、付屬、因茲　同六年　東調政所判、但寺住房者、寺家請破塗聖田一字移立、領家寄代代院主師、永讓於一門、是皆斷來世嘆、起請如件、

延喜七年二月十三日

僧正法印大和尚位聖寶

然るに保元平治以後、世の亂れと共に後者の例多くなり、爾來起請文と云へば、專らこれを指して云ふやうになつた。殊に「吾妻鏡」に

織田信長朱印起請文（西本願寺藏）

見えたる源賴朝起請文及び「貞永式目」の起請文は比較的古い整つた例である。

敬白

起請文事

右、爲御代官度々向戰場畢、平朝敵盡忠旦畢、全無貳、殊賀御子孫將來、又且可存貞節者也、且亦無御疑叶御意之條、且見先々誓札、神明所照覽有所、底、雖今更不誤而預此御疑、不便次第也、所詮云前時、云後代、不可挿不忠、早以此趣可誡子孫者也、萬之一存此旨令違犯此文者、上梵天帝釋、下界伊勢春日賀茂、別氏神正八幡大菩薩等之神罰於可罷蒙身也、仍爲後鑑以起請文如件、

建久四年八月　日

參河守源範賴

起請

御評定間理非決斷事

右、愚暗之身、依了見之不及、若旁輙相違事、更非心之所曲、其外或沈人之方人、乍知道理之旨、搆申無道之由、又乍非據、事實有證跡、或寄不備人之短、乍知子細、付善惡不申之者、事與意相違、後日之証出來歟、凡御評定之間、於理非者、不可有親疎、不可有好惡、只道理之所推、心中存知、不憚傍輩、不恐權門、可出詞也、御成敗事切、縱雖不違道理、一同憲法也、讓訴被行非據、

一同之趣度也、自今以後、相向訴人並其緣者、自身爲存道理、雖爲傍輩之中、以其人之說、聊被露顯之由申出之者、已非一味之儀、殆貽諸人之嘲者歟、兼又依無道理、評議之時、雖被棄置、評定衆之中被書入一行者、自餘人々皆同被道之由、縱雖被存之輩者、猶々子細如此、此內若雖一事、存曲折、令違犯者、梵天帝釋、四大天王、惣日本國中六十餘州大小神祇、別伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬神罰冥罰於各可罷蒙也、仍起請如件、

貞永元年七月十日

沙彌淨圓

相模大掾藤原業時

玄蕃允三善康連

左衛門尉藤原朝臣基綱

沙彌行然

散位三善朝臣倫重

加賀守三善朝臣康俊

沙彌行西

前出羽守藤原朝臣家長

前駿河守平朝臣義村

攝津守中原朝臣師員

武藏守平朝臣泰時

相模守平朝臣時房

この後世の普通の起請文は前書と神文（罰文）とから出來てゐる。（嚴密に云へば、日付・署名が入る。）前書は起請の條件を書いた部分で、初に來り、多く箇條書となつて居り、神文は右の條件を神佛掛けて違犯せざる事を誓つた文句の部分で、後に來る。普通前揭「貞永式目」の起請の神文の如きものであるが、豐臣時代を中心に行はれた靈社上卷起請文は、あらゆる神佛冥王等を勸請した最も鄭重なものである。而して初は前書も神文以下も牛王寶印と稱する神聖な用紙の裏を反して書いたのであるが、後（殊に戰國以後）には前書の長い場合はこれを白紙に書き、それに裏を反して貼り繼いだ牛王寶印に神文以下を記したものである。牛王寶印は東大寺二月堂を始め處々から發行されたが、就中熊野三社のが最も多く行はれた。所謂熊野の烏牛王である。なほ起請文の種類には傳授起請（神道文武諸藝等の傳授の場合）・南蠻起請（吉利支丹改宗の時のもので、神文には同宗門の神名等を記す）などもある。　（伊木）

稀書複製會（きしよふくせいくわい）

【解說】稀覯の古本、未刊の自筆稿本等をすべて原本通りに複製して、他日の亡佚に備へる目的を以て、市島謙吉・和田萬吉・坪內逍遙・內田魯庵・安田善之助諸氏が發起人兼同人となり、米山堂主山田清作氏を主事として、大正七年六月東京で設立されたもの。爾後二年を一期とし、昭和五年十月迄に六期を重ね、毎月一兩册の複製本（最初は三百部限定、第四期より五百部限定）を頒つて、總計百七十二部、二百四十七册に及び、他に每期の終りに解說一册宛を刊行した。

【刊行書】刊行書は、全部を木版又は玻璃版とし、日本紙に印刷し、裝潢も能ふ限り原本を摸してゐる。內容は主として江戶時代文藝の刊本、自筆稿本であるが、初期から元祿前後までのものが多い。その種類は、多種に亙るが、今その中から二三を例示する。これ等の中には、大正大震災によつて原本の烏有に歸したもの、又現に原本ただ一種しか知られぬものも尠なくない。

繪本類では菱川師宣の「月次のあそび」「[illegible]」等、西川祐信の「繪本玉かつら」その他、小說類では「南總里見八犬傳」「偐紫田舍源氏」「[illegible]」等の各著者自筆草稿を始め、假名草紙・洒落本・黃表紙・咄本・黑本・赤本など數種。演劇關係書では「劍野老」「野郎蟲」「難波草」「奈良繪本阿國歌舞伎」「古今四場居百人一首」その他、狂言本評判記の類。淨瑠璃は「賢女かるかや」「たかたち」「文七一周忌」その他。音曲關係では「風流諸年代記」「長歌古今集」「松保寶はやり唄」等、遊里物では「吉原戀の道引」「朱雀遠目鏡」「長崎土産」その他があり、吉利支丹關係書に「こんてむつす・むんぢ」「鬼理至端破却論傳」その他、俳書には「新花摘」「大坂俳數仙」「休息句合」「いなご」その他があり、これ等の外にも「人倫訓蒙圖彙」、「言海寺山の「遊相日記」（自筆稿本）、「文福茶釜」「ろしやのいろは」「蟲の歌合」「明曆江戶圖」「讀謂薪竈草」「相撲之圖式」「繪本江戶土產」等々。　（積松）

鬼女物の謠曲（きぢよものの えうきよく）

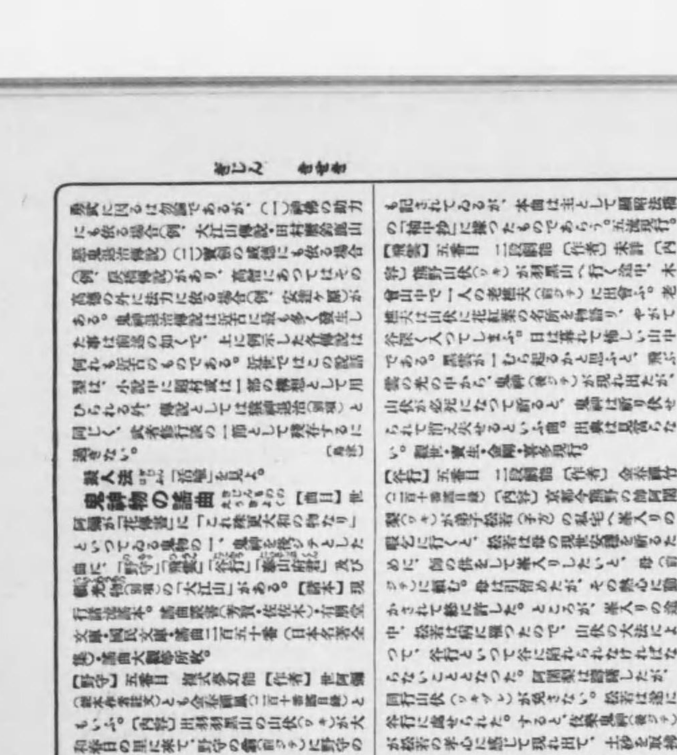
【曲目】鬼女の現はれるものに「安達原」「紅葉狩」「山姥」、初め普通の女人であつたものが、嫉妬のあまり鬼形と化したものに、「鐵輪」「道成寺」及び源氏物語物（別項）の「葵上」がある。

【諸本】現行謠流新古謠本。謠曲叢書（芳賀・佐佐木）・日本文學大系・有朋堂文庫・國民文庫・謠曲二百五十番集・日本名著全集・謠曲大觀等所收。

【安達原】五番目　二段劇能　〔作者〕近江能（能本作者註文）とも金春禪竹（二百十番謠目錄）ともいふ。古く近江猿樂で演じてゐたものを觀世流が改作したのであらうか。〔別名〕觀世流以外では「黑塚」といふ。〔題材〕「拾遺集」平兼盛の歌「陸奧の安達が原の黑塚に鬼こもれりといふはまことか」を敷衍した「大和物語」の記事に基いたもの。〔內容〕熊野山伏東光坊祐慶（ワキ）が廻國行脚して、陸奧國安達原で一夜の宿を求めると、宿主の老婆（前ジテ）は糸繰りなどして、浮世のはかなさを述懷したが、やがて焚火の薪をとるために山へ出かけた。その時、老婆は留守の間に閨の內を見てくれるなと頼んで置くが、隨行の能力（狂言）が密かに覗いて、その怖しい樣に驚き、これを山伏に告げ知らせた。山伏は閨の內に死屍の累々と積み重なつてゐるのを見て、これこそ安達が原の黑塚の鬼の栖家であつたと、驚き怖れて逃げて行く。老婆はこれを知つて、鬼女の正體（後ジテ）を現はし、山伏を喰ひ殺さうとしたが、山伏に祈り伏せられて消え失せたといふ曲。五流現行。

【紅葉狩】五番目　二段劇能　〔作者〕觀世小次郎（二百十番謠目錄）〔內容〕信濃國戶隱山で或る上﨟（前ジテ）が侍女（ツレ）と共に、紅葉狩りをして酒宴を催してゐるところへ、平維茂（ワキ）が鹿狩りをして來合せると、上﨟は維茂に酒を勸めて舞を舞うて見せ、維茂の醉ひ伏したのを見すまして立ち去る。そこへ男山八幡の末社神（狂言）が現れて、今の女は鬼神であるぞと維茂の夢に告げ知らせたので、維茂は驚いて目をさまし、あたりを見ると、先程の女は既に鬼女の姿（後ジテ）に變つてゐる。維茂は少しも騷がず、八幡大菩薩に祈念して劍を拔き、遂に鬼女を平らげたといふ曲。出典は見當らない。五流現行。

【山姥】五番目　二段劇能　〔作者〕世阿彌（能本作者註文）とも金春禪竹（二百十番謠目錄）ともいふ。〔內容〕都の遊女ひやくま山姥（ツレ）が從者（ワキ）と共に信濃國善光寺に參詣する途次、越後國上路山で一老女（前ジテ）に會ふ。老女は遊女に一夜の宿を勸め、自分はそなたの名にする實の山姥である。今夜山姥の曲舞を一節謠つて下されば、實の姿を現して移り舞を舞つて見せようといつて消え失せる。それで、遊女がいはれたまゝに歌を謠ふと、山



【口絵】　本朝二十四孝　土蜘蛛

以上のうち、元之巻の図話は全くの想像であるが、本朝二十四孝の図話には原拠本がある。本朝二十四孝は、元之巻の第二話と第三話とを合せて一話とし、これに新しい一話を加えて二十四孝としたものであるが、その新しい一話というのは、武田信玄の家臣高坂弾正昌信が、信玄の命を受けて、越後の上杉謙信の間者と疑われる山本勘助を、甲府の町で討ち取ったという話である。この話は、元之巻の第二話の後半部を改作したものであるが、その改作の仕方は、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとし、昌信は、勘助の首を持って来た家来を、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋にしたのである。

本朝二十四孝の原拠本は、元之巻の第二話と第三話とを合せて一話としたものであるが、その合せ方は、元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのである。元之巻の第二話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているが、第三話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、昌信の家来ではなくて、昌信自身であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているのである。

元之巻の第二話の後半部と第三話の後半部とを、このように改作したのは、元之巻の第二話の後半部では、勘助を討ち取ったのは、昌信の家来であったとしたために、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋が、不自然になったからであろう。

本朝二十四孝の原拠本は、元之巻の第二話と第三話とを合せて一話としたものであるが、その合せ方は、元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのである。元之巻の第二話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているが、第三話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、昌信の家来ではなくて、昌信自身であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているのである。

元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのは、元之巻の第二話の後半部では、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとしたために、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋が、不自然になったからであろう。

本朝二十四孝の原拠本は、元之巻の第二話と第三話とを合せて一話としたものであるが、その合せ方は、元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのである。元之巻の第二話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているが、第三話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、昌信の家来ではなくて、昌信自身であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているのである。

元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのは、元之巻の第二話の後半部では、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとしたために、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋が、不自然になったからであろう。

本朝二十四孝の原拠本は、元之巻の第二話と第三話とを合せて一話としたものであるが、その合せ方は、元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのである。元之巻の第二話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているが、第三話の後半部は、勘助を討ち取ったのは、昌信の家来ではなくて、昌信自身であったとし、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋になっているのである。

元之巻の第二話の後半部を、第三話の後半部の前に置いたのは、元之巻の第二話の後半部では、勘助を討ち取ったのは、実は昌信ではなくて、昌信の家来であったとしたために、昌信は、勘助の首を偽物だといって叱りつけ、その家来を追い出すという筋が、不自然になったからであろう。

けれど、二十年代の新詩に早くも一種清新の調と響きとを伴へ、當時の青年が内に感じてそれを意識する所以を知らず、又それに形象を附する方法を知らなかつた時代に、いち早くもその具體的文學形式を以てこれを指示した點、彼はこの小さき明治ルネサンスの開拓的建設者の一人であつたといへよう。透谷に輝くものは直觀力の秀拔と想像力の豐富とであり、内に溢れる情緒はこれに言葉を以て形を與へたけれども、なほもどかしい感があつた。その詩が大成に及ばなかつた理由の一つはこゝにもある。透谷に與へた感化として特に取上げて見るべきは、バイロンの「マンフリッド」とゲエテの「ファウスト」とであらう。その何れをも讀んだか、一方に偏したかどうかは分らない。マンフリッドは明かに熟讀したあとがある。「マンフレッド及びフォースト」といふその斷篇が殘つてゐるが、これを見ると厭世家としてのバイロンはゲエテに過ぎるものがあるといふ口吻の裏に、バイロンに寄せた情熱を見ることも出來る。英吉利浪漫期の豪壯は明治二十年代に至つて、透谷にその移入を見たといへよう。（以上日夏）

【參考】藤村成和集島崎藤村○明治大正詩史日夏耿之介

義太夫大鑑（ぎだゆふおほかがみ） 演劇書 二卷

【著者】秋山木芳（著）【刊行】大正六年十二月【解說】上卷は「淨瑠璃と操り芝居」と題して、淨瑠璃操芝居の歷史的記述である。淨瑠璃操りの起原から創始時代を經て近松門左衞門・竹本義太夫に及び、竹豐兩座の興亡から明治時代の義太夫節に至る。この方面の諸文獻を始め、各種隨筆・雜書等の多くを引用して、該博な著述ではあるが、著者獨自の考說に乏しい。ただこの方面の諸文獻の蒐集の意味で便利な書物である。下卷は技藝篇とも言ふべきもので、實際上の曲節に關する記事で、「音曲口傳書」「淨瑠璃早合點」「淨瑠璃秘曲抄」、その他この方面の文獻、近世の斯道の達人の藝談などを基として記してある。別に附錄として「淨瑠璃各派系統調表」がある。（増田）

義太夫節（ぎだいふぶし） 淨瑠璃【性質】竹本義太夫（別項）によつて大成された淨瑠璃の一種で、井上播磨掾（別項）の播磨節の莊重と、宇治加賀掾（別項）の嘉太夫節の艷麗とを併せ、更に、當時流行の他の淨瑠璃節や謠ひものの類を合流同化した語りものの一派で、淨瑠璃節の發生上、人形劇に伴つて發達して來たといふ點から見れば、その脚本である。即ち、これ等二種の特性が、共に毀損されず調和されて來たところに、義太夫節としての圓滿な發達がある。後者に多く傾く時は、歌舞伎劇の脚本に接近し、前者に傾く時は、歌謠或は謠ひもの式淨瑠璃に誘惑される危險がある。語る態度から二種に分たれ、西即ち竹本座がしつとりと語り出して、一歩一歩進む地味な藝風であるに反し、東即ち豐竹座は華聲を遣つて華美な態度を示した。後世に及んで、この兩方面の特徴は多少の混入があつたが、現今に傳はる流は後者に屬する。【曲節】種類は非常に多いが、標準として地合に四種（地色、地ハル、地中・地ウ）、三重に七種（三重、大三重、吟三重、怒三重、猛三重、中怒三重、韻三重）、ヲクリに八種（ヲクリ、歌ヲクリ、小ヲクリ、ツキヲクリ、ウヲクリ、アタリヲクリ、色ヲクリ、ギンヲクリ）等の外にも、ユリ、カヽリ、ギンの類があり、又は、文彌・一中・道具屋など他流派の淨瑠璃を表はすものもある。これ等は、又、一の規準であつて、世話物・時代物・時代世話物等脚色の種類によつて、同一の曲節をも別な扱ひ方がなされ、或は年代の隔りによつて、同一作品にも異つた曲節で語られる場合がある（淨瑠璃參照）。【沿革】元祿十六年「曾根崎心中」（別項）の興行以後、世話物と時代物との語り口の相違が漸次具體化して行くが、一方、竹本座から分離獨立した豐竹若太夫の華美な語り口と、二代目義太夫事竹本政太夫の堅實な語り口との對抗的な藝風の競爭も現れた。兩座の競爭時代を經て、合作淨瑠璃の時代に入るや、漸次に淨瑠璃は歌舞伎脚本に接近する傾向を示して、地の部分を減じて曲節の上に大改革が行はれた結果、自身の本質を破壞せんとする危機に臨んだ。延享元年「假名手本忠臣藏」（別項）上演に際し未曾有の大事件が發生して、竹本此太夫が豐竹座に走つたため、その後は兩座間の藝風の特徴は失はれ、時代の寫實的傾向と相俟つて、竹本流は豐竹流に併合されるに至つたのである。寶曆以後、さしも榮えた竹豐兩座にも衰運が襲ひ、當時から義太夫節の江戸扶植が盛になり、新作淨瑠璃が江戸に姿を見せて來たが、これは江戸淨瑠璃の影響もあつて、語るより謠ふ要素が豐富であるため、淨瑠璃本來の特質とは相當な隔りを示し、「東もの」と呼ばれて上方からは特殊視された。かゝる上方と江戸との藝風の相違は、今日まだ明かに存續してゐる（竹本座・豐竹座參照）。【作者】元祿年代、竹本座の近松門左衞門、豐竹座の紀海音對立期は概して文學的價値多き作を得たが、その後の合作時代に入つては、演出本位に遊んだため、文學的價値の極めて乏しい作に變化して行つた。作者としては、竹本座には竹田出雲が主として活躍し、長谷川千四・文耕堂・三好松洛・近松半二等これに次ぎ、豐竹座の西澤一風・田中千柳・安田蛙文・並木宗輔・爲永太郎兵衞等が、これに對した。而して遂に合作淨瑠璃の弊は、作者をして多く歌舞伎劇界に轉向せしめ、或は歌舞伎作者の餘技として淨瑠璃が作られるに至つた。當時、江戸に於て淨瑠璃に名作を殘したのは、福内鬼外・紀上太郎等であり、末期に活動した作者には、菅專助・佐川藤太等が算へられる（作者は各別項）。【太夫・三味線】竹本筑後掾の高弟としては、早く竹本頼母がゐたが、筑後の死後は、跡を襲つた竹本政太夫（播磨少掾）と豐竹若太夫（越前少掾）との對立期に入り、竹豐兩座が拮抗相讓らざる時代を現出して義太夫節の最も堅實な活動期であつた。合作時代に入つて、吉田文三郎の横暴によつて竹本此太夫が去つた跡の竹本座を引受けたのは竹本大隅掾である。當時豐竹座には若太夫の高弟で美音家の豐竹駒太夫とその門弟麓太夫とが中堅に位してゐた。豐竹座としては、この二人によつて竹本座に對して、始めて三年越の當り作「祇園祭禮信仰記」の成功を見ることが出來た。その頃の衰退期を維持したのは、竹本染太夫・竹本島太夫等である。かくて、兩座退轉後の義太夫節は、小芝居時代を經て明治年代に入り、美音に過ぎたため淨瑠璃太夫としては非難の的ともなつた竹本越路太夫と、堅實一方に淨瑠璃本來の語り口を聴かせた竹本大隅太夫とが、最後の命脈を保つたのである。なほ三味線の優れた名手は、元祿年代に竹澤權右衞門がゐたが、竹本義太夫の死後引退して野澤友次郎が跡を襲ひ、豐竹座は鶴澤喜八郎を立ててこれに對した。明治に入つては名人豐澤團平がゐた（人名は各別項）（操・人形淨瑠璃參照）。

【參考】今昔操年代記 正木屋九左衞門○竹豐故事 一樂子○新撰閑書往來（天明頃）○聲曲類纂 齋藤月岑○操淨瑠璃史 水谷不倒○義太夫大鑑 秋山木芳○邦樂年表 義太夫節之部（守隨）

喜多流（きたりう） 能樂【名義】能樂シテ方の流名。もと北とも書いた。德川秀忠の時一流の樹立を許されたものである。【由來】未詳。或は金剛氏正の門人喜多七太郎が秀吉の威を假りて金剛七太夫と稱し、後更に一流を起したのであるともいひ、或は秀吉に仕へた檜細工の喜多喜左衞門の二男龜丸が、秀吉の命により金春から分傳したものであるともいふ。

【系譜】初代七太夫（長能）——二代十太夫（宗能、初代の二男）——三代七太夫（宗能、十太夫の甥、觀世に誅木に取立てられ中條丹波守と稱し入道して紹山と號した）——四代七太夫（初十太夫長寬）——五代十太夫（長義、別家より入る。近習役となり中條市右衞門と稱した）——六代七太夫（成能、別家より入る）——七代十太夫（長能、一旗より入る）——八代十太夫（初桑之丞寂能、紀州家臣より入る）——九代七太夫（初八之丞古能、號寒叟、隱居號、面目利等著書が多い）——十代十太夫（能静、前代の子）——十一代七太夫（初八之丞）——十二代六平太（初晉司、明治の時宮に仕へた）——十三代喜多次郎（養子、家督を繼がない）——十四代六平太（先代六平太の外孫、家督を繼ぐ、現存）（作成）

奇謀青葉笛（きぼうあをばのふえ）「青葉笛」を見よ。

奇談七部之書（きだんしちぶのしよ）「席錦」を見よ。

氣違草子（きちがひざうし）「狐の草子」を見よ。

鬼畜物（きちくもの）「能樂」を見よ。

熙朝詩薈（きてうしくわい） 漢詩集 百十卷【編者】友野霞舟【解說】霞舟が大學頭林復齋の命を受け、淸の朱竹垞の「明詩綜」に倣つて作つたもので、藤原惺窩以下二百餘家の詩を蒐集し、漢文で一々その小傳を附し、評論を加へてゐる。原本は寫本で、紅葉山文庫の舊藏に係り、今は内閣文庫の所藏である。刊本はないが、本書中から作者の小傳と諸家の評論とを摘錄したものを「錦天山房詩話」と題し、日本詩話叢書の中に收められてゐる。（佐久）

橘庵漫筆（きつあんまんぴつ）「東牖子」を見よ。

龜甲鶴（きつかふづる） 小說【作者】小栗風葉【發表】明治二十九年六月「新小說」【刊行】風葉集（春陽堂）所收。【梗概】尾張知多半島の龜甲鶴の釀造元野杜廉右衞門は、千五百石の桶で二千石を釀造しようとした。その秘密を知つた杜氏源作から過分の要求を持ち出されたので、廉右衞門は怒つて、杜氏を始め、代師や倉働などを逐ひ出して了つた。ところが倉働の一人又六は、廉右衞門の娘お杉に戀をしてゐるので、一人途中から引返し、生命がけで二千石の酒を造つた。折柄、收稅吏影澤倉之助が來て、檢査の際、密造の浸桶を見出したので、廉右衞門は倉之助をお杉の婿にする約束をして、口を噤ませた。野呂又といはれた愚直な又六は、お杉を倉之助に奪はれたのに絶望し、お杉の結婚の夜、熱酒が一ぱい滿ちてゐる大桶に身を投げて死んだ。【批評】酒の釀造地である作者の故鄕に取材して、釀造家及び釀酒のことを題材としたのは珍しく、好着眼たるを失はない。主人公ともいふべき又六の苦悶も力強く描かれ、その他の人物、背景の取り合せも無理がない。身分が卑しいか、もしくは心理的、生理的に缺陷のある若者が、名家・豪家の娘を慕うて苦悶するといふ筋は、何故か明治の作家に流行的に取扱はれたが、これもその一つで當時の傑作である。造酒の通をうるさく列べたあたりが、冗漫ともいへるが、「かつら下地」（別項）で芝居の觀客を細記したやうに、この作家の特殊な趣味として見れば興味がある。風葉が文壇的に認められた最初の名篇と云へる。（高須）

吉水院樂書（きつすゐゐんがくしよ）「吉野吉水院樂書」を見よ。

吉左右踊（きつさうをどり）【名義】よき音信を得た時の踊の意【解說】文祿元年飛驒高山の領主金森法印が豐臣秀吉の征韓軍に從つて肥前の唐津に在陣の時、そこから國許へ吉左右を傳へた時、領民がこれを祝つて城下に群集して踊つたのに起る。所用の歌八首を「飛州志」に載せてゐるが、當代の世情を知るべきものがある。

空たつ鳥が日本へ行かば、言傳しよもの文そへて。
天に照る月は十五夜が盛り、我が君さまはいつも盛り。
お寺樣の御門に鶴が巣をかけた、鶴千年と。
思ひもよらぬたくらだに、岳證で貫たよ、知行を五千五萬石。
小豆餅に砂糖をつけて、ふくさに包で、封をつけてやりたや大野孝馬殿へ。
國分寺で踊れはお館化めがきいはちを。
しんとろ〳〵と眠る目もいとし、とりをけ嬉。
今宵も踊の子、あすの夜も踊の子、めしかへてござれ。（高野）

橘窗茶話（きつさうさわ） 漢文隨筆 三卷【著者】雨森東（芳洲）【刊行】天明六年【解說】篠崎三島（應道）の所校で、同人の序がある。漢土の經史子集及び國書に關した古來の疑義を稽へ、子弟に對して學問の要旨を說き、古賢聖を評論し、また時人の詩文類を品騭し、更に朝鮮の事物や唐音等に及んで自家の見を發表した漢文隨筆で、著者の篤學博識を窺ふに足りる。但、標目を設けてない。（和田）

橘窗自語（きつさうじご） 隨筆 九卷【著者】橋本經亮【成立】卷三の末に「享和元年辛酉冬」とある。【諸本】鼠璞十種（國書刊行會本）・日本隨筆大成卷二に所收。【解說】禁中諸行事、その他、有職故實に係る事、京都及び畿内社寺の事、近代公卿諸家の逸話、文學・和歌・古樂・書畫等あらゆる藝術の談を雜錄したもの、殊に京都の地理・風習に關する事項が多い。同じ著者の別著「梅窓筆記」に比して更に雜駁である。（和田）

狐塚（きつねづか） 能狂言【作者】今春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）【内容】主の命で太郎冠者が怖る怖る狐塚の田へ來て鳴子をかけて鳥を追つてゐると、日暮方、次郎冠者が見舞に來る。太郎冠者は狐が化けて來たと思つて鳴子繩で縛つてしまふ。其處へ又主が臆病な太郎冠者を氣遣つて見舞に來るが、太郎冠者は友狐であらうと言つて同じく縛り上げ、果は靑松葉で燻して、煙たくば尾を出せの、こん〳〵と鳴けのと言ふので二人は致し方もなく、こん〳〵くわい〳〵と鳴いてみせる。太郎冠者はこの上は鎌で皮を剝ぎ引敷にしようと言つて鎌を借りに行く間に、二人は繩を解いて太郎冠者を待受け、詰めて逃入る。【解說】「小唄入」と云ふ小書が附くと、九番智の中に入る。和泉流でも、これに倣つて普通は小智になつてゐる物が、「小唄入」では一番智になる。この小書の時は、在來の「狐塚」の中へ狂言「鳴子」の小唄を入れて歌ふ

ので、筋は寧ろ古來の「鳴子」と見るべき風に、つまり、太郎・次郎が、主を嚇し出すことになつてゐる。又大藏流の現行の演じ方は「鳴子」と「狐塚」との形式上の類似から思ひついた明治初年の新式なのであるが、今日和泉流までが「小唄入」の小書を作つてゐるのは、理由なき摸倣の譏を免れないと思ふ。（織田）

狐の裁判（きつねのさいばん） 翻譯小說 【譯者】井上勤 【原作】ゲエテの長詩「ライネッケ・フックス」【角書】開卷奇書 【刊行】明治十七年七月、繪入自由出版社。同十九年再版春陽堂。明治文化全集（翻譯文藝篇）所收 【解說】譯文は甚だ流暢で、殆ど翻譯書たることを覺えしめない位であるが、原文は詩であつてそれを散文に意譯したものであるから、原文を讀むのと感じを異にするのは止むを得ない。ライネッケといふ狐が餘りに姦惡害毒を逞しくするので、多勢の禽獸がイゼグリムといふ狼を代表としてこれを獅子王に訴へる。獅子王は怒り狐を召喚して糺問する。狐は詭辯を弄して放免される。だがやはり姦虐が止まないので再び捕へられ、一時獸類の裁判沙汰とまでなつたが、生來の狡智によつて又々放免され、遂に原告たる狼との單身決鬪によつて正邪を決することになる。ところが狐はやはり狡智によつて狼に打勝ち、却つて獅子王の信任を得るといふ物語で、即ち惡が善に勝つことを諷刺した比喩譚である。本書は明治初期に於ける獨逸文學の代表的翻譯といつてもよい。明治十五年にシルレルの「ウィルヘルム・テル」（譯名「[illegible]」山田[illegible]譯）なども出てゐるが、僅に一部分の抄譯で、到底續出する英佛物の翻譯に比肩するに足りない。「狐の裁判」が出て、初めて獨逸文學が明治の文學界に確實な地歩を占めるに至つた。その意味でこの書は注意すべきものである。なほ、譯者井上勤は、内田魯庵の親戚であつた關係から、本書の翻譯なども魯庵の手に俟つたところが多いと云ふことである。（柳田（泉））

狐の草子（きつねのさうし） 御伽草子 一卷 【別名】狐物語・狂僧草子・氣遣草子 【作者・成立】未詳。「近古小說解題」には、「三條西實隆公記」明應六年十月十五日の條に、「中山大納言來談、滋野井繪二卷令見之。一卷狐繪（常樂院眞惠僧都物也）一卷八幡臨幸繪等也」とある「狐繪」は、この草子のことではないかと疑つてある。さうならば年代推定の一の手がかりにもならう。「言繼卿記」天文十一年正月二十二日の條には、「狐繪」を二卷、女房衆に貸し遣はした由が見えるが、それと前記の繪卷と同じいか、又本書と全然同一物か判明しない。又「古畫目錄」「古畫類聚目錄」「倭繪」等には、繪を土佐光信とし、住吉廣道の極書も附いてゐるし、「狂僧草子」の筆者としても、「本朝畫圖品目」「好古小錄」等は光信としてゐるが、否定說もあり、「倭繪」には土佐叡濟と見えてゐる。詞書に關しては「訂正增補考古畫譜」に「賞雄曰、住吉家藏、詞書筆者、了伴爲『甘露寺親長卿』、檜山成德爲『甘露寺親長卿』」とある。【諸本】「狐雙紙」又は「狐物語繪」として傳へられるもの、「狂僧雙紙」又は「氣遣草子」の名で傳はるもの、何れも一卷の繪卷物。「狂僧（又は氣遣）草子」の名は、外題の失はれたため何人かが繪の趣に由つて附した名ではあるまいかと、「近古小說解題」の著者は言つてゐる。飛鳥井曾衣筆詞書を寫した「寬文九年文月中旬」の奧書ある無題の繪卷もある。明治以後、詞書だけ「新編御伽草子」下卷に所收。【題材】本地物、靈驗談、怪異說話。狐に誑された僧侶が地藏の本誓によつて救はれる話。「新編御伽本」荻野博士の解題には、「扶桑略記」所引の「善家秘記」に見える賀陽良藤が狐に化かされたのを觀音に救はれた傳說が、その本據であらうと推定してゐる。「近古小說解題」はこれを「如何にや」と言つてゐるが、確にこの傳說に基くものがある事は疑を容れない。右の傳說は「今昔物語」（卷十六第十七話）にも載せ、これは明かに「善家秘記」から出てゐる。又それを繪卷にした「賀陽良藤物語」一卷（考古畫譜卷三）もある。「元亨釋書」（卷二十九）にも良藤の話は出てゐる。なほ「日本靈異記」（卷上第二話）「水鏡」（卷上欽明天皇）等に見える類話と交渉があらうし、後の葛の葉傳說の源流を成すものと考へられるが、本書ではこの事はない。

【梗概】某の僧都へ使者の女が來て、主の女君からの懸文を傳へ、その夜八葉の車を遣はして迎へたので、好色の僧都は喜んで赴くと、棟門のある立派な邸に着いた。美しい女主は歡待して、二人は遂に契を結び、僧都足を留むる事七年に及んだ。或る日突然錫杖を持つた若僧が三四人門外から走り入つて來ると、女主をはじめ狼狽して逃げ散る邸の者共の姿を見れば悉く狐であつた。夢から覺めたやうな僧都は、今まであつた邸は消え、簾・疊は毬・藏切れと變り、琵琶・箏は牛馬の骨、盤や調度は鞍臺の剝れや髑髏に變じてゐる中に、身を金剛聖院の大床の下に見出した。漸く這ひ出して童共に笑ひ囃され乍ら步いてゐるのを、知己の近衞殿の侍が見付けて、裝服のつもりで着てゐた反古を脫がせ、自分の直垂の上を着せてやると、放心した儘の僧都はをかしな樣子で家に歸つて行つた。娘の喜びは一通りでなかつた。これ偕かの若僧と化現した地藏菩薩の御利益に依るとの事である。僧都が七年の樂と思つたのは、僅に七日のことだつた。

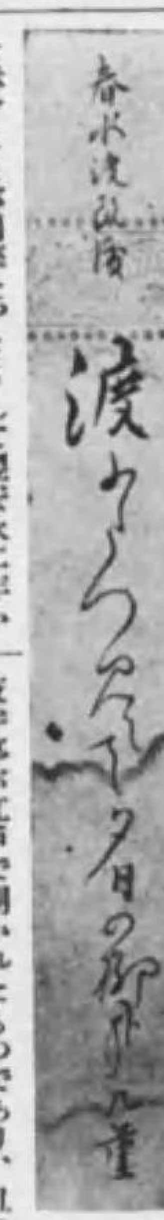
「狐　の　草　子」（寬文九年書寫）

【參考】訂正增補考古畫譜卷四（狂僧雙紙・氣遣雙紙・狐物語・狐隣の作等）◯近古小說解題（島津）

紀傳體（きでんたい） 【解說】歷史の一形式。本紀・列傳・志・表等の部分に分ち、本紀に於て天子の事を敍し、列傳に於て諸王・諸臣の傳記を述べ、志に於て天文・地理・制度・典禮その他の事物を類め記し、表に於て年表・世系等を以て他の記述を補ひ得べきものを加へる。尤も「史記」を初め二三の書に於ては、別に世家の部を設けて諸侯の行動を敍し、或る書に於ては、志・表はこれを缺く場合もあり、又は名目を異にする場合もあるが、本紀・列傳の存在は絕對である。この形式は編年體（別項）よりも遙に進步した歷史の體といふべく、本紀の大綱は列傳の委曲と相俟つて史實を闡明し、志の如きは近代の文化史的敍述と共通する所さへ認められる。「史通」の著者劉知幾はこの體の短所を論じて、同一事の分れて數篇に存すること、同類を編次して年月の相つゞかざることを擧げてゐるけれど、それほど憂ふべき短所とも思はれない。この體は司馬遷の「史記」に始まつて、以後「前漢書」「後漢書」等、支那歷代の正史の循用するところであり、我が國では水戶の「大日本史」これを採用し、飯田忠彥の「野史」亦これに從つてゐる。（秋本）

紀傳道（きでんだう） 「四部の博士」を見よ。

几董（きとう） 俳人 【姓】高井 【幼名】小八郎 【別號】晋明・高子舍・春夜樓・春秋庵・雷山亭・三世夜半亭・詐善居士 【生歿】寬保元年京都に生れ、寬政元年（二四四九）十月二十三日攝津伊丹に客死した。享年四十九。【法名】高秀院詐善日亊居士 【墓所】京都本能寺 【閱歷】巴人門の高弟几圭（別項）の子として生れたが、二十歲で父に死別した。三十歲の時、父と同門の蕪村が京都に定住して畫と俳諧とに專心し、夜半亭二世を繼いだので、彼はその門に入つた（明和七年の事）。彼が終生常に忠實な筆錄を絕たなかつた自筆句帖の第一冊たる「日發句集」は、實にこの時から始められてゐる。その發端に、巴人・几圭・蕪村の句數十章を錄し、この句帖を以て、俳諧修行の草稿たらしめようと自ら序してゐるのを見れば、彼が師蕪村に賴つて先師先人の衣鉢を繼がうといふ決心の堅かつた樣が窺はれる。蕪村の門に入つて後は、召波・太祇・百池などの亭で月々催された社中の例會にも缺かさず出席し、馬南（大魯）・斗文等を友として切磋怠らなかつた。されば明和九年（安永元年）には早くも父几圭の十三回忌追善集「其雪影」（別項）を撰び、而も「蕪村七部集」の最初に數へられる程の內容を示すことが出來た。さうして翌安永二年からは、自ら別に「初懷紙」（別項）を撰ぶほどの門友をも得、又その年夏には西海の行脚から歸つた馬南と一夜兩吟を催して、師蕪村から「明烏」（別項）の題號を得た。彼に取つてその當時こそは、最も修業に油の乘つて來た時代であつたらう。今や几董は蕪村門の高足として、自他共に相許すべき地位を確保するに至つた。この年の秋には樗良と兩吟歌仙を催し、また大阪に下つて二柳を訪ね、折から滯在中の麥水と三吟の連句があつた。かの竹護の病中を慰めるために、蕪村・樗良と四吟流行のをかしみを探つた「このほとり」（一名「一夜四歌仙」別項）も、同じ秋に成つた。爾來彼は愈々精進の步みを續け、同五年には「蕪村七部集」中の「續明烏」（別項）を大成し、同九年には師と共に彫心鏤骨の苦心を重ねた「桃李」（別項）が出版された。天明三年冬蕪村が病んで歿するや、厚く冥福を弔ひ、直ちに追善集「から檜葉」（別項）を撰んだ。翌四年には、例年の「初懷紙」も服喪のため二月に催されたが、その仲秋の頃、洛東聖護院の傍に雷山亭を營み、こゝに閑居することになつた。蕪村亡き後のその一派は彼を中心として集まり、その年四月、伏見任口上人の百回忌集として「桃の雫」を撰んだ時には、同門月居などにさへ春夜先生と敬稱されて、俳諧法會の導師を勤めた位であつた。かうして京都に於ける夜半亭一門の間には、彼が夜半亭三世たるべき貫祿は十分認められてゐた。併し元來夜半亭が江戶で開かれたものであり、且つは江戶俳人達の間に實力を示して置く必要もあつた爲めか、天明五年の秋東行の途に上つた。途中粟津の芭蕉堂で近風法師の剃刀に薙髮して詐善居士と號し、木曾路を經て善光寺に詣人・柳莊を訪ひ、十月中旬江戶に着いた。そして深川芭蕉庵の翁の正當會に列し、續いて雪門の人々を始め、古友尼・泰里・成美等と風交の席を重ねたが、遂に巴人が昔夜半亭を結んだ石町の邊に旅寓し、蓼太の推擧によつて夜半亭三世の統を繼いだ。この江戶滯在中人々と應酬した俳諧二十二卷と、更に西歸の後門友と催した卷々及び東西の發句を合せて上梓したのが、「續一夜松」の前後二集である。一體「續一夜松」の編は、師蕪村が企てて成るに至らなかつた遺志を繼いだものである。歸來洛東の居を春秋庵と呼んで、なほかの森蔭に隱れてゐたが、門人等の集りに不便なため、天明七年九月堺町通二條に新に詞壇を構へた。その折記念に撰ばれたのが「きくの宿」である。翌天明八年正月の大火に再び洛東の舊居に引込んだ。その後、一時大阪に住んだ事もある。寬政元年三月池田の門人左言と吉野に遊び、「よし野紀行」を撰んだ。又四月には宇治田原の野菊亭毛條の許に杖を留め、十月には大阪圓成寺で、不二庵二柳と共に芭蕉忌を營んだりしたが、それから僅か旬日の後、敏馬の門人大石士川に誘はれて、池田にあるその別莊に滯在中、突然病を發して歿した。



几董筆蹟

【人物・俳風】几董は常に其角の風骨を慕つて自らその別號を晋明と言つた程であつた。かの「五元集」（別項）の板下に見るやうな洒脫な筆致が、そのまゝに几董の編著に再現されてゐたり、「雜談集」の體裁に擬して「新雜談集」を撰んだりしたのは、全くこの其角崇拜の結果であつた。併し几董は決して其角の如き豪放磊落もしくは才氣煥發の人でなく、實は頗る敦厚篤實な士であつた。隨つて彼が師蕪村から「惟ふに汝が信ずるや晋子なり」と忠言はれたにも拘はらず、その其角信仰は結局云はば形式的の摸倣に止つて、藝術の本質的な所迄には及ばなかつた。實に几董が信じて步いて行つた道は、やはり蕪村の示した道に外ならなかつた。併し彼には又彼だけに與へられた獨自の境地を持つてゐた。それは彼の篤實な性格から生ずる自然の眞實さであつた。

嵐山や小松が中を春の水
門口に風呂たく春のとまり哉
葉がくれに鳥籠見えけり庭の秋

方に、古語本の変るもの（元禄校本異変版）は
はこの註がある。朝井来禽著『古今集正義』
いが、完備校本に比べるとやや見劣りする。
これは本安政の中期以前に何から離所あつ
た人である。【国語】一時安倍王（安倍家第三・四・八代の当
の著となつてゐる。【作品】上記の「紀友則追悼歌」
三首」で見るごとく、後に王の変えるために書明さ
れたのではないかと想像される。そしてその
後、友則は、大伴家持（万葉）と同様であつた
ろしい。即ち「言ひ出しは誰なるか、小山
の代水の中空にして」（春歌）の歌によつ
て、古くから安倍王の歌として知られ、
また、この歌は、安倍王が別れてから
が、二人の夫の生存期間（安倍王は延喜の末
年に没）と時代（友則は寛平の末年に没）
とが、ほぼ一致するからである。【国語】一時安倍王（安倍家第三・四・八代の当
の著となつてゐる。【国語】一時安倍王（安倍家第三・四・八代の当

紀友則（きのとものり）　歌人【生没】紀
名】紀ノ本貫【生没】未詳【官歴】【本
帝四年頃部の「紀友則追悼歌」の題詞の下
に出てゐる。歌人名の最初部の第十三首が「紀ノ
に出てゐる。歌人名の最初部の第十三首が「紀ノ

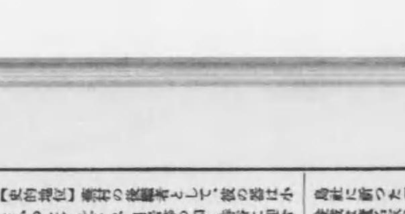
貴種（きしゅ）　語彙【名称】【定義】高貴な家
柄。中古、高貴な家柄の人に限り、舞があり、
一人で舞ひ、男に手（おこ）れた人が出して出る。舞者
は特殊な装束を用ひ、力ある姿で、威容をした
の舞を持つて舞楽に出てこれを舞者に渡す。そ
の作法は定舞の故手と似てゐる。舞者は故手。
【名称】起源不明。古書には「貴家」を引いて、
最古中に初見の日逝王が来に使り、彼はこれ
をその種種家に対したという記事を以て、この
ように、それは単に種種なる名を記してあるのみ
から、これを以て直にこの曲の起源とすることは
出来ない。即ち「仁賀保家」には阿弥陀経
とあり、阿弥陀仏を賀と解する説と、或種族
即ち「貴家国記」に載せた所の「国名」を「要する説とある。大意は
王たちなら心も言り難し。会話ぶ、出曲も本来は
家なるべし。【国語】種族種類の意（名詞）と共に、
「貴種なれば」（自動）とある如く、
即ちそのままの意である。【国語】

紀友則追悼歌（きのとものりついとうか）　【歌
の成立を示すために行ふもので、その歌
言をたたへその死を悼むその哀
古いのは、「新撰万葉集」（寛平五年頃）で、その中
三年藤原菅根の依頼で出来た。次に式部大
を含つたものは、今川氏歌が永正元年伊豆三

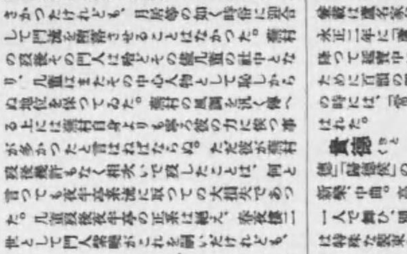
はれる。「紀行文学」の大部分は九重の手に
よつて開はれ、最下までも書かれた。しかし
ただけを除いて、特に立派な初期歌を出したり
してゐるのでも、その九重風な称力の絵は認
められる。「紀行文学」の大部分は九重の手に
よつて開はれ、最下までも書かれた。しかし
ただけを除いて、特に立派な初期歌を出したり
してゐるのでも、その九重風な称力の絵は認
められる。「紀行文学」の大部分は九重の手に

きのふはけふの物語　書名【成立】室中に慶安
頃か【作者】未詳【版元】【刊行】元
禄頃か【体裁】半紙本・二巻二冊【内容】
【評価】【伝来】

きのふの物語　書名【成立】室中に慶安
頃か【作者】未詳【版元】【刊行】元
禄頃か【体裁】半紙本・二巻二冊【内容】
【評価】【伝来】



（木版彫刻）上巻の一段



（木版彫刻）上巻の一段

く、享保九年に銅屋の家督をついだが、作者生活はその前年で終つてゐる。

【作目録】記載に殘つてゐる最も早い作品としては元祿十五年上演されたらしい「傾城懐子」の名が傳へられてゐるが、正本も發見されず、正確な上演記錄もなく、なほ今日では傳說に過ぎない。その他推定作はあるが、作者名の明記された作品では、寶永五年三月三日上演「椀久末松山」（別項）が最も古い。以後、毎年二三篇を發表して、享保八年七月上演「傾城無間鐘」（別項）まで、ほぼ五十篇に達してゐる。それらの主な作品を左に列記する。

紀海音自畫自賛（狂歌所聞の戒歌）

〔世話物〕椀久末松山（寶永五年三月）○久松於夏の白しぼり（正德元年四月）○心中二つ腹帯（享保七年四月）○八百屋お七（上演年月未詳）〔名別項〕他約十篇〔時代物〕愛護若時雨（正德四年十月）○傾城酒呑童（享保三年正月）○義經新高館（同四年正月）○賣仁現王鏡崎錦（同六年十月）〔各別項〕○東山殿榮行合戰（同七年十二月、山名細川の兵亂。時代物として異色ある作柄である）○傾城無間鐘（享保八年七月か×別項。その他約三十五篇を數する。）〔時代世話物〕信田森女占（信田妻參照、正德三年秋）○傾城國性爺（同五年か×別項）等。

本名野邨全集）関木鼎蓮　○紀海音研究自上（日本文學講座）

紀定丸　きのさだまる　狂歌師

通稱儀助【別號】初め野原雲輔、後に本田原勝業。晩年己人又爲丸と改む。【生歿】寶暦十年江戸に生れ、天保十二年（二四一）正月十六日歿す。享年八十二。【法名】昇進院萬年生日勤敏翁居士【墓所】本應元町三念寺【閲歷】父は吉見佐吉といふ幕府淸水家小十人、母は狛江人の姉である。安永七年父の殘後家督を相續して小普請方となり、寶政七年御本丸に召されて淸水家勤番となり、文化二年御勘定役、同四年御勘定組頭に進み、勤續五十八年の長きに亘つてゐる。家は小川町から牛込軽子坂上豆腐屋數といふ所に移つた。これを流浪して豆腐を賣く家に寄寓す。」と誤り傳へた書がある。狂歌は天明の初から狛山人の教を受けて、晩年までこれを棄てなかつたが、著書としては「狂月望」一冊を撰んだだけで、外に狛山人の「五里巴人集」に序文を書いてゐる。辭世「狂歌師もけふあすかと成にけりきの定丸も定めなき世に。

木下尚江　きのしたなおえ　小說家

【生】明治二年九月八日、信州松本町安原に生る。【閲歷】先祖が大阪役所の士木下某と知つて、幼少から儒和の呪詛者、明治革命の謀叛者であつた。土地の小學校教育を敬遠的なものと考へ、それによつて、儒善と虚偽とを呪ふ心を生じ、生家が寺院に近かつたので、夙くから死の神祕を考へさせられたといふ。又少年ながら當時の民權家の演說に血を湧かしたいふ。初め醫者か農業家にならうと思つたが、松本中學在學中、萬國史の時間に、クロムウェルが國王を裁判した壯烈さを知るに及んで心機一轉し、法律を學んで政治家にならうとし、明治十九年の春上京して東京專門學校法律科に英法を學んだ。同二十一年夏卒業、歸郷して信府日報の主筆となり、藝來の政治的地盤を築きかけたが、長野縣廳移轉問題で、土地の人と妥協が出來ず、憤めて辯護士となつた。この頃の彼は心靈の苦悶から聖書を讀み、敎會に出入する一方、戀に陷り、肉慾に我を汚し、自殺を考へたと告白してゐる。而も他方、功名野心の火が消えず、友人と共に普通選擧の運動に着手したが、幾ばくもなく奇嗣を買つて入獄した。精神無訾とはなつたが、この一年半の未決監生活は彼に多大の敎訓を與へた。最も大きなそれは、妹伊和子の差入れた聖書の餘白の「神の愛常に汝に伴ふ」の一句で、彼が神を得たことである。同三十二年の春、知人石川半山の周旋で、東京毎日新聞に入り、新聞記者として社會惡と戰つた。特に星亨攻撃と、廢娼問題と、足尾鑛毒問題に健筆の筆を揮つた。かくて彼の思想は民主主義的傾向から次第に社會主義的になり、同三十四年の社會黨宣言を機として社會主義運動の第一步を踏み出した。同三十六年冬には、幸德秋水・堺枯川等を助けて平民社を創め、平民新聞を發行し、我國の社會主義運動史に一時代を劃した。日露の役には、幸德・堺等と非戰論を唱へ、言論に文章に大に努めた。平民社の解散後、雜誌「新紀元」によつて基督敎的共產主義を標榜したが、同志の不和から廢刊した。この前後、彼の思想は又一轉した。そして自己の生活の虛僞を痛感する餘り、世間的な運動一切から退き、枯淡な信仰生活に入つたまゝ、求道の人として今日に及んでゐる。

木下尚江

【業績】彼は社會運動に努むる傍ら、小說を書いた。それは、明治三十七年の「火の柱」（別項）を處女作として、以下「良人の自白」（別項）「懺かん内か」「乞食」（別項）「火宅」などがある。不知庵に創まり蘆花に興つた社會主義的小說は、尚江に至つて大成した觀がある。尚江は自らも小說家を以て居らず、當時の批評

家からも本格文壇人としては遇されなかつたが、今日から見て明治文學史上不朽の存在をもつ一人である。彼は自ら意識しない大きな藝術家の一人であつた。概して純情に溢れた初期社會主義の苦悶と惱みを背景に、當時の青年人の煩悶と絶叫を血と熱と力との湧きたぎつた筆で描いたもの、それが尚江の小說であつた。その大衆的魅惑と藝術的香味と思想的背景とを渾然一打してゐる點で、實に秀れた作品である。【著作】以上の小說の外に、自傳の「懺悔」「悔悟」「愛野」「野人語」「創造」等の文集、「日淸談」「法然と親鸞」「義人田中正造翁」等の史論・傳記がある。【卽田・鳳】

木下杢太郎　きのしたもくたろう　劇作家・詩人

【本名】太田正雄【別號】きしのあかしや・地下一尺生・北村淸六【出生】明治十八年八月伊豆伊東に生る。【閲歷】小學校を卒へて上京、本鄕西片町に假寓、獨逸協會中學に入學した。同級に長田秀雄がゐた。中學卒業後、文學者にならうか醫者にならうか、それとも美術家にならうかと迷つたが、結局醫學を修めることになつて、第一高等學校を經て東京帝大に學んだ。初め「明星」同人として詩壇に出で、「スバル」同人として享樂詩禮の中心詩人となり、その耽美的傾向を凝縮せしめた詩誌「屋上庭園」（別項）を、自秋・秀雄等と發刊したが、「スバル」廢刊前後から詩作を長く麼するに至つた。又明治四十二三年の自然主義勃興時代から「スバル」によつて戯曲小說を書き始めた。彼の持つ傾向は一種のネオ・ロマンティシズムである。卽ち四十一年九州天草に遊び、當時の歷史に趣味を感じ、「南蠻寺門前」（一幕）を書いた（大正三年十一月市村座上演）。異國情緒を感つた形式主義的な作品である。その後「和泉屋染物店」（別項）、「柏屋傳右衞門」（三幕十場）、「天草四郎と山田右衞門作」などの作品を發表した。大學卒業後、南滿醫學堂の敎授として赴任、その後獨逸に留學、醫學の傍ら南蠻文化の日本渡來の文獻を研究した。大正十三年歸朝、醫學博士となり、愛知醫大敎授を經て現在は東北帝大醫學部敎授。歸朝後の作品には、戯曲「當長」「御屋」などがある。共に南蠻渡來時代を取扱つた美しい戯曲で、「當長」は謠曲の形式を以て支倉六右衞門を書いた夢幻的な作品、「御屋」は狂言の形式を執つて市井の出來事をユーモラスに描いたものである。なほその他、多くの詩集・詩論集・小說集・紀行文集がある。

【業績】詩人としては「食後の唄」（別項）の小曲詩風と夫刊詩集「鑛金草木調」の直叙體とで、「スバル」初期文學詩の頂點を示し、自秋よりは知的に富き異風の詩品を示した。戯曲家としては、森鷗外の影響の下に、その「二幕物」以後の新戯曲の有力作家の一人であり、「和泉屋染物店」の如きは、若い作家達に尠からず影響を與へた。また美術批評家としては、黒田淸輝門に出入した頃より石井柏亭等と西洋美術紹介に努めた。また南蠻文學の研究家としても、多くの新材料を學界に提供した。なほその小說も反自然派的立場に立ち、鷗外・漱石の感化を受けて一種の風格を示し、また紀行隨筆等にも非凡な手腕を示した。筑中「支那南北記」の如きは推奬すべきものである。【著作】前記の外「唐草表紙」「小鍋美」「印象派以後」、（美術評論及飜譯）「十九世紀佛國美術史」、その他「地下一尺集」「えすぱにやほるつがる記」等。

木下利玄　きのしたりげん　歌人【生歿】明治十九年一月一日、岡山縣賀陽郡（今の吉備郡）足守町に生れ、大正十四年二月十五日、相模鎌倉大町の自邸で病歿した。享年四十。【法名】天意院嚴溫良利玄大居士【墓所】岡山縣足守町大光寺【閲歷】明治二十三年（五歳）、伯父子爵木下利恭の養嗣子となり父母に別れて上京、學習院に學ぶ。同三十一年（十三歳）、佐佐木信綱に就いて作歌を始む。同三十四年二月發行の竹柏園集第一編に初めて「折にふれて」五首載せらる。同三十九年九月、東京帝大文科に入學。同四十三年、雜誌「白樺」の同人となる。翌四十四年、大學文科卒業。大正元年九月、日白中學の國文講師となる。同三年三月、敎職を辭し、同六月東京を出でて、山陰・山陽・九州に遊び、半歳を旅に暮らす。同八年七月、第二歌集「紅玉」（別項）刊行。同十一年春、肺結核にかかり、歸來病臥を續けた。同十三年十二月、第三歌集「一路」刊行。翌年一月下旬より病勢增進し、二月十五日逝去。同年五月、生前自選した歌集「立春」を、同年十二月、歌文集「手帳」を、相次いで刊行された。【作風】初めは信綱の歌風を承けて溫雅流麗の域を出なかつたが、三十七歳の夏、箱根仙石原に遊んで、「蓋山」の歌十七首を得た時、自ら「作歌の本道に出た」と言つたほど、その作風に著しい變化を來した。「山の中の賓は たけなはしんかんたるいまをきゝゝみづからを堪ゆ」はその時の一つである。彼は傳統短歌に懐らなくなつて、獨自の境地に志したのである。そして病臥期に入つてからは、漸次その傾向を深め、「一瓶の牡丹うすくれなゐを匂ふ二花のおのづからもてるけぢめを愛す」この室のしづもりみだるものもなく床の牡丹のほしいまゝに紅き」の如きものとなつた。

紀上太郎　きのじょうたろう　浮瀏璃作者・狂歌師

【本名】三井元之助。又は治郎右衞門。雅は高業、字は公勤。【別號】狂歌名は、仙果亭嘉果が名高く、外に由甲寮・四貫・由平等がある。【生歿】延享三年生、寶政十一年（二四五九）四月二十四日歿、享年五十三。【墓所】大阪生玉西方寺【閲歷】三井南家の當主として大阪に生れ、後江戸に下り靈河町に住み、幕府の傳奏御用達を勤めたが、紀州家との事件あつて後は、隱居して趣味生活に生き、大田南畝・平秩東作・四山龐鬼等の文人墨客と往來し、自身また學殖廣く諸藝に通じ、狂歌は浅慮齋貞柳（別項）に師事して名吟を殘した。紀上太郎と名乘つたのも、貞柳の弟紀海音（別項）によつたと傳へられる。趣味生活の一面として浮瀏璃をも書いたので、關内鬼外（浮瀏璃内參照）・島亭寫馬・吉田文三郎（各別項）等を按じて、操浮瀏璃が漸く江戸に興隆せんとする機運を助長した功は尠からぬものがある。

【作品】〔浮瀏璃〕志賀の敵討（安永五年八月繪摩小平太芝居豐竹肇太夫座、忠臣は伊賀を到かせたので、伊賀越（別項）の改作。それに、敵討の一人の武士が俗を變れ伊達に入つて活ろう、その家來が其角と改めて弟子となる補助を加へる。）○糸櫻本町實入（別項）○石琴納太刀拳儘（安永八年七月、繪摩小平太芝居豐竹肇太夫座、「鉢の木」の改作に大山體を入れる）○恭太平記白石噺（別項）等がある。〔狂歌〕貞柳傳三冊（寶政二年、貞柳の談記實料として詳細な點に於て唯一の著書である）○狂歌ならびの岡一冊（安永六年）○狂歌辰巳芥二冊（寶政十年）等。

【作風・人物】浮瀏璃作の中、「志賀の敵討」と「納太刀拳儘」とは時代物であり、「糸櫻本

町育」と「慕太平記白石噺」とは時代世話であつて、全体として彼は時代物作者と見られるのは、町人ではあるが、準確や細歴の自ら致す所であらう。但、浮瑠璃界盛時に於ける時代物とは全く作風を異にし、地の部分が少く奢詞の部分が多いため、浮瑠璃特有の詩的な感銘は甚しく殺がれた。これは一般謡曲の様式への接近であつて、また、歌舞伎脚本への迎合とも解せられ、当年の成功もその後の永続性もそこにあるであらうが、浮瑠璃本来の径路をとつたものではない。特定な時代と地方との条件の下に産まれた浮瑠璃であると見ねばならぬ。併し、それを許して彼の作品を観察するならば、部分的の闘色態度には、いかに町人社会への接触を保たんとして苦心したかが理解される。「自石噺」の新吉原の段は馬の作であるが、そこの農州説を研究のために、彼が馬場を農州に遣つた話がある。又、場面に江戸町人に親しい地域を利用してゐる。浅草が屢々眼に触れる外、大山詣を闘色の一部に入れるなどは、この立場から最も効果的であつたと思はれる。作の柔くが、着作の腐案でありながら異常な成功を収め得たのは、かゝる部分的なところに原因すると思ふ。

【参考】江戸作者浮瑠璃集解題（続帝国文庫）水谷不倒○浮瑠璃名作集下解題（日本名著全集）

【宇】

乙寺縁起（おとのらんでら）　時代【解説】越後北蒲原郡乙寺（おとでら）と寺ともいふには文化年間、谷文晁・喜多武清等数人の合作に成る「乙寺縁起」一巻を蔵するが、これは貞和三年の奥書ある「乙寺縁起」の古写本二巻に基いたものである。この「乙寺縁起」は、この寺草創に伴せて当寺仏舎利の奇瑞を叙してゐるが早く原本を以て名付く。【沿革】創始者は岸本芳秀。徳川時代に岡山藩主池田家では雅楽に関る重きを置いた為め、優れた楽人が多くゐた。明治三年にその楽人の中の岸本芳秀・久山義雄・見垣正香・御船宮氣の四人が、藩主池田茂政の命によつて、春日神社へ大和舞を伝習に行つたが、翌四年に廃藩となり、従つて藩の楽人は悉く廃されてしまつた。そこで岸本芳秀は、岡山に帰つてから、大和国に大和舞といふのがあるやうに、吉備地方にも吉備楽といふのが欲しいといふ所から、翌五年、雅楽より出立して一種の新音楽を工夫したのが即ちこの吉備楽である。時に彼は五十二歳であつた。その時最初に作つたのが、雅楽の「越天楽」の今様に、「四季の今様」の詞を配したところの「四季の楽色」といふ曲である。その後、追々と苦心の結果多くの曲が出来た。初めは楽曲のみであつたが、同十一年頃に播州楽路の黒住教信者たる村上直道の尽力で、振付師の浅田源兵衛や又能の名人などを集めて研究の結果優美高尚なる舞が出来るやうになつた。これを吉備舞といふ。同年にこの事が天聴に達し、皇后宮に召されて上京し、九月十一日に青山御所に於て、英照皇太后陛下及び昭憲皇太后陛下（皇后の皇后陛下）の御前に於て、光栄ある演奏をなし、国楽名家の作歌を得て発達した。同十六年に至り、この楽は黒住教の式楽として採用され、又その後、金光教の式楽としても採用された。岸本芳秀はかくして吉備楽を大成して同二十三年に世を去つた。

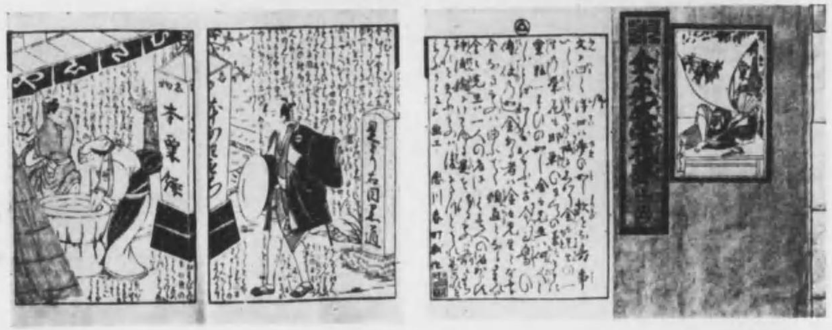
【組織】凡て歌を主とし、楽器の伴奏としては笛を主とし、笙・篳篥・笛を伴つて居る。楽曲のみの曲もあり、又舞を伴うたものもある。楽及び舞は共に男女裁れにも通して居る。大体に於て三様の曲がある。即ち甲は主として神祭に用ひるもの、その舞手は巫子風の服装をなし、扇子を持つて舞ふ。乙は家庭的の楽舞であつて、平服で扇子を持つて舞ふ。丙は劇的の舞楽であつて、特殊な装束で扇子を持つて舞ふ。この第三の劇的の曲の中で有名なものは「櫻井の里」（楠公父子の訣別）、「湊川」（正成兄弟の忠死）、「作楽詞」（見良高徳の忠勲）、「鞆の梅」（関羽張飛太皇事の梅の武勇）等である。【田邊】

【参考】日本音楽講話田邊尚雄○吉備楽譜岸本芳武

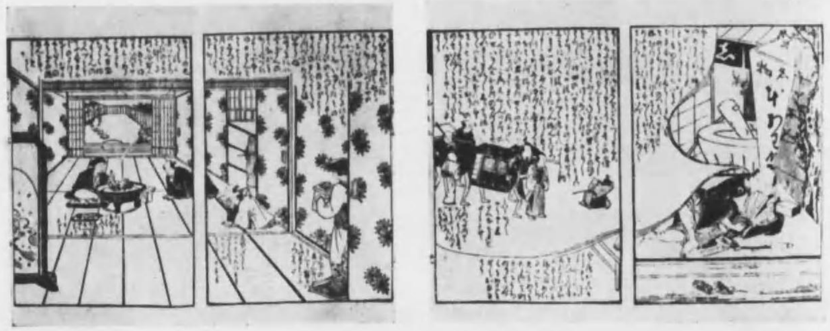
吉備大臣入唐絵詞（きびだいじんにっとうえことば）　絵巻【解説】もと二巻。早く下巻を逸し、上巻も最近まで若狭松平伯爵家に蔵せられてゐたが、今は他に轉じてゐるといふ。吉備真備が遣唐使として唐に渡つた時、彼国で多くの難題を持ち出してその才芸を試みたが、阿部仲麻呂の霊が鬼に化して真備を助けてこれを勝たせたといふ話を叙いたもので、土佐光長筆と傳へられてゐる。その描写には「伴大納言絵詞」（別項）に類する特徴もあるので、同じく光長筆と擬せられたことであらうが、併し同系統と称すべき同筆とは言ひ難い。異国の風俗を取扱つて、その描写態度も注目されるが、人物の動相や表情などには一種の特徴があつてなかく〳〵利いてゐる。製作年代は、「伴大納言絵詞」より後であらうが、鎌倉中期までは下らぬものと思はれる。【田邊】

黄表紙（きびょうし）　草双紙の一種【名義】一に青本とも稱せられる。この場合は無義にいふ青本（別項）を含めて、その範囲は廣きに亙る。江戸時代は唐義の青本で呼ぶことが多かつたが、今日では青本と區別していふのが例になつてゐる。【性質】黄表紙とは赤本・黒本（各別

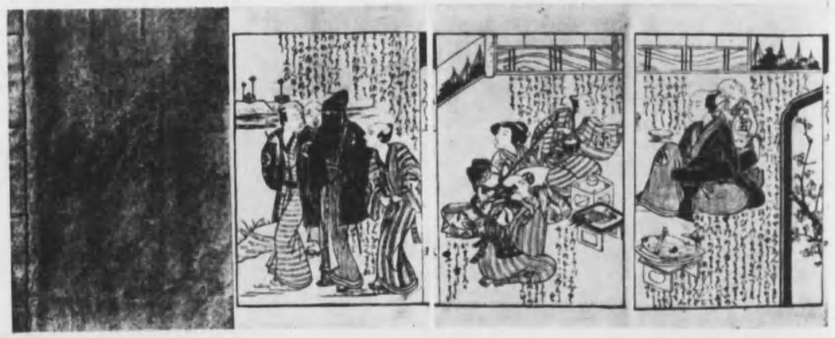
黄表紙「金々先生栄花夢」上巻



表紙　一ノ表　一ノ裏　二ノ表



二ノ裏　三ノ表　三ノ裏　四ノ表



四ノ裏　五ノ表　五ノ裏

（二）

形式の均衡が現はれる。(二)美的要求に從ふ技巧によるもの。波狀線・平行線・ヂグザグ線等。リズムの形式原理が發見される。而して器物裝飾は時として宗敎的象徵として魔力の表徵となり、或は社會的標識、記念又は意志傳達の表徵として用ひられる。原始の器物裝飾に於ける波狀線等もやはり自然摸倣から說く者もあり、又ヴォリンガアは、原始人の自然觀照に於ては、不安恐怖があり、自然離脫の要求が必然的に强く、こゝから自然の抽象化が生じ、非有機的幾何學的形式が求められると說明する。ハッドンはニューギニヤ民族の裝飾を研究して、多くの動機を擧げてゐる。(一)快感表現として形・色・線の結合が利用される。(二)意志傳達のために、(三)富の欲望滿足のために所有する器物に裝飾する、(四)宗敎的動機。要するに原始藝術の器物裝飾發生の動機は、純美的でなく非美的動因によると見られる。(美的動因・原始藝術參照)　（村田）

【參考】「藝術の始源」グローセ(安藤弘譯)

寄物陳思 きぶつちんし　「物に寄せ心を陳ぶる歌」を見よ。

貴船の本地 きふねのほんち　御伽草子　三卷【作者】未詳【成立】室町末【諸本】新編御伽草子上卷・日本文學大系第十九卷所收【題材】本地物。貴船大明神の緣起。一種の怪婚說話で、英雄求婚神話の佛敎化した一異型。節分の追儺及び五節供の由來の說明が附せられ、地上と地下の各々の遍歷說話を含む。部分的には新羅說話に於て「おもかげ物語」(別項)と、父の鬼大王に發見される件に於て「天稚彥物語」(別項)と、鬼大王の件と龍女の死を知る件とに於て「御曹子島渡り」(別項)と相似し、鬼國行は「天狗の內裏」(別項)とも似た敍述があるが、諸佛、大國主命黃泉行神話にも連り、地獄極樂の觀念とも混化してゐる。鬼神は「酒顚童子」(別項)と殆ど擇ばず、本院の中將定平は恐らく時平と定文とを併せ作るか。全體としては佛敎色と童話的空想が著しい。【梗槪】寬平法皇の御代、宇治大臣の子に、本院の中將定平といふ威勢他を壓する人があつた。帝は御寵愛の餘り都に聞えた美女の假令

「貴船本地」挿畫

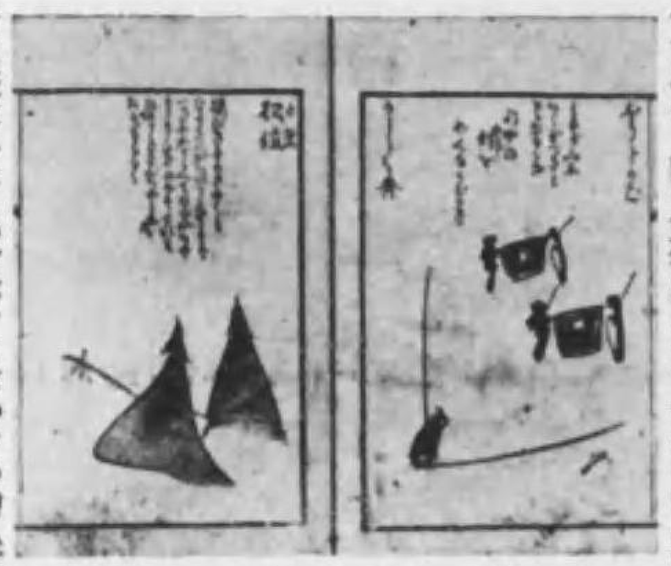
夫のある者にさへ戯れる事を許されたので、三年の間、諸家の姬君達を迎へては返して、理想の人を得たいと心を碎いてゐると、內裏で催された扇合の節、源氏の大臣の出した扇の繪の上﨟に魅せられて、定平は出仕もえせず、せめて描かれた女の誰なるかを知りたく、扇の主を訪ねた。大臣は笑ひながら、慰めに美人の話をしようと、鞍馬の奧、みぞろが池の下にある鬼國王の女、十郞御前、龍女の宮といふ姉妹は吉祥天女より秀で、扇の繪には十倍も勝れてゐることを語り、凡夫の事故神佛に祈誓をすれば夢ぐらゐには見られようと言つたので、中將は淸水を初めありとあらゆる神佛を拜み廻つたが、示現なく三年經つてしまつた。長谷へ參つてなほ祈ると漸く鞍馬へ行けとの御告あり、參籠して命をかけての祈誓に、毘沙門天も切なる願を納受し、正面の扉の中を開かせて示したのは、天人の影向か、光るばかりの女人であつた。懷から扇を出して比べると、實に十倍の美しさである。これがかの龍女の宮であつた。佛の御計らひ故、何處までも伴つて呉れと賴む中將を、一度は命が危いからと斷つた龍女も、遂に否み難く、穴の中の闇路五十里を辿つて鬼國へ案內した。日本國を五つ六つ併せた位の廣さで、山川面白く、遙かな邊に鐵の築地があり、銅の築地、銀の築地を經て花の都に入ると、金殿玉樓の奧、七重の屛風、八重の几帳、九重十重の臺の內に比翼の語らひを結ぶ間もなく、父大王から召の使を受けた宮は、留めて置けば他の鬼に取られてしまふ中將を、慧簸杖の杖で擲つて三寸ばかりにし肌の守に入れて出掛けた。大王は藍婆に命じて娘の前に御酒を參らせ、肴には人一人を生きながら料理させて勸めさせるうち、その秘密を見拔いてしまひ、后の菲躑女の執成でその場は宥されたが、翌日の饗を期し、男か宮自身か二人に一人は必ず供御に取る申渡しがあつた。元の所に歸つて二人は互に讓り合つたが、宮はこの國には死後を浮ぶ佛法なく、その上、姉十郞御前の例を見ても、男だけでなく續いて自分も逃れられない事を言ひ、我が後世の供養を賴んで中將を都へ送つた。次の日の正午、大王は娘を食べてしまつた。約した時刻に幽かに最期の響を聞き、且つ牛插に入れた水の赤くなつたのを見て、宮の臨終を知つた中將は、法皇に出家の御暇を願つたが御許しがないので、俗ながら五戒を保ち厚くその菩提を弔つた。その頃中將の父方の伯母二位の局は七月の御產をしたが、三十二相を備へた姬にも拘らず左の指が一つ無いので蓮臺野に捨てた。行き合せた中將が拾ひ歸り乳母を付けて册き育てると、これが龍女の宮の再生であつた。十三年なかつた指を開くとかたみの鬘の帶の切れが出で、同族であるが勅許を得て再び契を結んだ目出たさ。鬼國の鬼はこれを憎み二人を害しようとしたが、鞍馬の毘沙門天の示現を受けた別當の奏聞あつて、明法道の衆徒の例文を徵し、節分の夜に來襲する鬼を禦ぐため、七人の博士にて四十九軒の家の物をとつて、鞍馬の奧僧正が谷みぞろ池のかの穴を封じ塞ぎ、三石三斗の煎豆で鬼の眼を撲ち、鰯の燒串を五門に立てて追ひ拂つた。天から攻めようと藍婆總王八萬四千の鬼を引連れて再び來るとの重ねての告に、これを免れる爲めに五節供を始めた。正月七日の七草、三月三日の桃の花、草餠、五月五日のあやめの根と粽、七月七日の素麵、九月九日の菊の花など皆鬼を欺く手段である。宮は百二十の齡を重ねた後、北山に貴船の大明神と現はれ、中將も客人神とな

つて衆生を守つた。　（島津）

氣分描寫 きぶんびやうしや　文學論【語義】事件や情景を客觀的に、ありのまゝに寫實するのが目的ではなく、寧ろその事件や情景に依つて惹起された情緖卽ち氣分を僞りなく描き出す表現上の一手法である。そしてこの描寫を主とした藝術は、一般に氣分乃至情緖藝術(Stimmungskunst)と云はれる。【沿革】近代人の情緖は、强烈な外界の刺戟に出遇つていよ〳〵複雜になり、捕捉すべからざるものとなり、それだけに又精神生活の內容は深奧幽玄なものにならざるを得ない。この深奧幽玄な生活內容は、到底單純な外形描寫や誇張的な感情表現などによつては把握されるものではない。どうしても刹那々々の氣分乃至情調を捉へ、これを表現するにあらざれば、人生の奧底を究める譯にはゆかない。かうした主張が、自然主義以後の歐洲文藝界の一角に象徵主義として現はれた。そこでこの氣分描寫は、象徵派の作家達に依つて試み出されるに至つたのである。卽ち最初は、フランスのマラルメ、ヴェルハーレン等に依つて採用された。又、オースタリーのホフマンスタアル等の若きウヰーン派(Jung-Wiener)の情緖氣分の描寫も注目に値する。英國に於てはやゝ遲れて、頹廢派の作家、例へばシモンズ、ダウスン、ワイルドの如きが情緖藝術として勝れたものを書いてゐる。更にベルギイのメーテルリンクの戯曲は全篇が殆ど氣分描寫から成り立つてゐると云つてよい。特に「群盲」の如きはそれである。なほ氣分を主とした戯曲は特に氣分劇と呼ばれてゐる。アイルランドのイエツやグレゴリイやシングの戯曲にはその名稱に相應はしいものがある。日本では久保田万太郞の作品、又は秋田雨雀の初期の戯曲や小說に、この氣分描寫が多い。だが眞の意味では氣分描寫を主とした情緖藝術は未だ現はれてゐないと云つていゝ。　（宮島）

基本義 きほんぎ　「美的樣態」を見よ。

奇妙圖彙 きめうづゐ　滑稽本　一册【作者】山東京傳【名稱】訓蒙圖彙の音を利かせたもの。【成立】享和三年【諸本】滑稽本集(日本名著全集)所收【解說】所謂文字繪が主となつてゐる。卽ち文字によつてそのものの形を



「奇妙圖彙」

繪に表はしたものだが、こぢつけの繪(文字を用ひぬもの)も相應の數に上つてゐる。總計五十八圖で、各圖に註釋的戯文をも附けてゐる。古法として人丸やヘマムシ入道等を先に擧げ、新法として自身創案のものを揭げてゐる。　（小島）

木村園夫 きむらゑんぶ　脚本作者【本名】未詳【別名】初めは主として園次、寬政十年紅粉助と改め、更に園夫または假名でゑんぶと記す。俳名に遠見、松好堂等ある。【生歿】元文三年生れ、文化初年日本橋住吉町に歿す。【閱歷・作品】初代櫻田治助(別項)の門に出で、初め小佐川常世に附き、市川團藏江戶下りの後は、團藏附きとして寬政享和に活躍した。笠縫專助・村山金八(各別項)等の次席にゐて、專ら常磐津淨瑠璃に名作を殘し、寬政末年立作者に上つた。書を松花堂に學ぶ。江戶人風な性急な缺點を持つてゐたが、また頗る頓才に秀れて、よく〳〵人の意表に出た。「市川團藏侍講話」(寬政十年二月森田座、忠臣藏と加々見山の綯交ぜ)の名題は彼の命じた所だが、大に評判を博した。享和元年九月中村座の二番目狂言「操抽隅田川」の切の常磐津淨瑠璃「兩面月姿繪」(双面參照)は、俗に「双面」と呼ばれて現に行はれてゐるが、彼が一代の傑作である。門人木村松六は、後、出來島松鶴と改めた。

【參考】役者年中行事三升屋二三治　○傳奇作書拾遺西澤一鳳　○狂言作者略傳著者未詳　（守隨）

木村鷹太郎 きむらたかたらう　評論家・飜譯家【生歿】明治三年九月愛媛縣宇和島町に生れ、昭和六年七月東京に歿す。享年六十二歲。【閱歷】明治學院より轉じて東京帝大に學び、哲學選科を卒業した。明治三十年、井上哲次郞・高山林次郞等と共に日本主義を唱へ、大日本協會を創立して雜誌「日本主義」を發行、日本精神を高調すると共に、佛敎及び基督敎を排擊した。「日本主義」廢刊後も依然その信念が固く、「日本國敎論」「日本太古史」等を著はして益々日本精神を闡明した。大正五年日本民族協會を組織し、パンフレット「日本民族叢書」を刊行、「仁德帝の埃及浪華」「高天原」「來目歌は編句歌」「日本民族東漸史」「常世の國」等を次々に公にした。その他プラトンに傾倒して「プラトン全集」を、バイロンを讃美して「バイロン傑作集」を譯した。【著書】以上の外に「統合世界史」「東洋倫理學史」「希臘羅馬神話」等がある。彼は希臘語を研究した結果、日本民族の原始性に就いて諸種の新說を提出し、日本の歷史上の人名や地理を中央亞細亞或は歐洲のそれに跡づけて、奇拔な對比を絕えず發表して社會を驚かした。　（高須）

木村正辭 きむらまさこと　國學者【幼名】莊之助、字は埴滿【號】欟齋・集古葉堂・三十二陣庵・岡珠鑒屋・兩谷【生歿】文政十年四月六日下總國埴生郡成田町に生れ、大正二年四月十四日東京市下谷區入谷町に歿す。享年八十七。【墓所】東京下谷谷中墓地【閱歷】父濟宮仁右衞門は、妙法院宮一品親王の家臣木村孝之助。正辭は初め、下總國佐原の人伊能穎則に就いて國學及び詠歌の法を、寺門靜軒に漢學を學び、後、幕臣岡本保孝の門に入つて和漢學及び韻學を修めた。文久三年三十七歲、幕府和學講談所會頭助役、慶應三年水戶藩彰考館出仕を兼ね、明治二年史料編輯・大學大助敎に任ぜられ、その後神祇官・太政官・文部省・司法省・宮內省等の諸官、及び東京大學文科大學敎授・高等師範學校敎授等に歷任、同二十六年退官、同三十五年文部省國語調査委員會委員となる。これより先、明治二十三年東京學士會院會員に擧げられ、同三十四年文學博士の學位を授けられた。【業績】壯年の頃から「萬葉集」研究に志し、この方面に幾多の優れた功績を遺した。卽ち近世萬葉研究家の多くが、妄りに本文を改訂して新說を出したのに對し、廣く諸本を蒐集して、嚴密なる本文批評を行ひ、あるがまゝの姿に基いて訓釋を工夫した。又、日本及び支那に於ける古代の文字及び音韻の知識によつて、獨創の說を立て

たものが少なくない。その學風は孝道學に勝する。

【著作】萬葉集書目 一冊(明治□年刊)○萬葉集書目提要二卷 一冊(明治二十二年刊)○萬葉集文字辨證(安政二年三月成、明治三十七年刊)○萬葉集訓義辨證(同上)○萬葉集字音辨證(安政二年八月成稿、明治三十七年刊、以上三書木村正辭校訂「萬葉集代匠記」附錄)○萬葉集美夫君志(卷一上下二冊、明治二十二年卷一の假名刊行、同三十四年卷一刊)、卷二上中下三冊(同四十四年刊)、首卷一冊、卷一・二別記二冊、計八冊)○萬葉集略解補正十六冊(安政文政成、卷一より卷十四まで及び卷二十の略解を補正したもの)○萬葉集古義拾遺○萬葉集左注日本紀年紀考○萬葉集古注漢文○萬葉集異乙○萬葉集新木阿考○萬葉集攷文○萬葉集講義○別本萬葉集抄言(纂著)○眞名假字考○假字考○字音轉例○字音假字考○未定假字辨○千載字書攷○玉篇攷○本草和名刊誤○金光明最勝王經音義攷證○日本紀の攷○國書纂攷(漢文)國語序集○國語別集○國語集○國語後集○播磨の浦づと○隨經漫筆(その他)國史案 二冊○靈法志料三十六卷首卷一卷

【參考】木村正辭傳(帝國學士院會報)○木村正辭博士傳 佐佐木信綱(萬葉集美夫君志)○萬葉註釋書の研究 久松潛一(萬葉集講座第□卷下)○萬葉集研究史 佐佐木信綱(同上)○萬葉集諸本系統の研究 武田祐吉(同上卷上) 〔吉〕

義門 ぎもん 國語學者【姓名】東條氏。若い頃一時名を伐淨と言つた。【號】霊伴・白雪樓。【生歿】天明六年七月七日生れ、天保十四年(一八四三)八月十五日歿す。享年五十八。【墓所】若狹國小濱町妙玄寺。【閲歴】少年の頃から聰明で、學問を好んだ。叔父慶海(若狹小濱専光寺住職)や、兄の友人霊曠(名古屋東本寺住職)などに就いて佛學を受けた。寛政十一年(十四歳)丹後田邊の瑞光寺隆悅の養子になり、名を伐淨と云つた。養父の歿後、寺務のために佛學が意の如くならないので、若狹の妙蓮寺の智道を養子として寺務を執らしめた。然るに享和四年七月、兄實傳が歿したので、止むなく妙玄寺へ歸つてその住職となり、生涯妙玄寺に住した。義門が國語學に志したのは、何歳頃であるか明かでないが、「玉緒繰分」(別項)の奧書、「詞の八衢疑問」(後出)等から見れば、遲くも二十歳頃であつたやうである。そして若い頃から藤井高尚を師とし歌文の添削をしてもらつたりしたが、國語學の方は全く獨學であつた。

【系圖】
智敎(始め三河國寶飯郡の人、[illegible])
　├敎順 ─ 敎傳([illegible]) ─(二代略)
　│　└顯壽([illegible])
　└慶傳([illegible]) ─ 智傳([illegible])
　　　├女
　　　├實傳([illegible])
　　　├女
　　　└義門 ─ 誠傳 ─ 敎學 ─ 義山

尤もその研究は、本居宣長・同春庭の研究を基礎としたものであるから、廣い意味から言へば本居系と云ふことが出來るが、直接師事したのではない(義門を本居大平の門下と言つてゐる人があるが、それは誤である)。彼は多くその家に於て勉學したが、京都へは佛學修業その他の事で屢々出て行つた。妙玄寺は、もと藩主酒井家の祖、酒井讚岐守忠勝の室妙玄尼の歸依によつて出來た寺であるが、その妙玄尼が忠勝の正室か姿か明かでなく、義門の父慶傳、兄實傳等が、當時の藩侯の命によつて調査したけれども、判明しなかつた。義門は父兄の志を繼いで、その調査に從事し、二度も江戶に行き、近藤重藏等の助によつて、妙玄尼が正親の正室であることを明かにした。而して、この旅行中、岡本保孝・太田全齋(各別項)等と交を結ぶに至り、又鈴木朖(別項)に會ふなど、學問の爲に益することも少なくなかつた。天保十四年には妙玄寺の傳記調査及び藤井高尚の遺稿整理が主たる目的で四國及び中國へ旅行した。この旅行中病に罹り、歸國後、間もなく歿した。

【業績】第一に擧げねばならぬのは、用言の活用と手爾乎波の呼應に關する研究である。即ち活用研究に於ては、活用形に將然・連用・截斷・連體・已然・希求の名稱を附して、その性質を明かにした事、先人が僅に手をつけたのみであつた形容詞の活用を十分明かにした事、助動詞(義門は助動詞を一品詞として獨立させてゐない)の活用を十分研究した事、良行變格を變格として獨立せしめた事、及び活用と手爾波の關係を簡單明瞭な圖表に纏めた事(和語說略圖等)は、その著名な點である。尤もこれは「詞の八衢」(別項)を根據としたものであるが、義門の研究によつて、中古語を對象とする用言の活用は、大體完全の域に達したのであるから、その功績は甚大なものである。手爾乎波の呼應の研究は、活用の研究と離すことの出來ぬものであるが、宣長の「詞の玉緒」(別項)を增補訂正した「玉緒繰分」、「てにをは紐鏡」を補正した「友鏡」の如きは、宣長の不備誤謬を十分に正し得たものである。第二は音韻に關する研究である。この方面では宣長が、ン音は日本の上古には無かつたと言つたのに反して、ン音の存在を立證し、ンとムの別を明かにしたこと(男信參照)、及び宣長が「字音假字用格」(別項)に於て、オ・ヲの所屬を改めたが、義門は更にこれに大增補をした(於乎輕重義參照)。これ亦國語音韻學上大に注意すべきことである。第三に義門は品詞を活用の有無によつて體言と用言とに分けた。この分け方は單語の形態のみによつて分けたものであるが、義門以前に品詞の分類をした二人の學者(富士谷成章・鈴木朖)の如く自家撞着に陷らなかつた。その分け方は今日から見れば不十分ではあるが、品詞の分類をした第三番目の學者であること、及び後の學者に少なからぬ影響を與へてゐることは注目すべきことである。この外、字音假名遣・國語假名遣に於ても、注意すべき研究がある。義門は眞宗の僧であるが、それが國語研究に志したのは、國語の研究を以て、眞宗の研究に資しようとしたのである。而してその著「山口栞」「和語說略圖」「男信」の如き純國語學的研究も、義門に於ては畢竟眞宗研究のための著作であつた。親鸞や蓮如の著作の研究は、國語學上の知識を必要とすることは論ずるまでもないことである。義門はこの必要にして而も從來全く閑却せられてゐた方面を新たに開拓したのであつて、その功績は實に大なるものである。

【著書】〔國語學に關するもの〕(一、活用及び手爾乎波)詞の八衢疑問(詞の八衢の條參照)○言葉の道しるべ 一冊(文化六年成。詞の八衢の不備誤謬を增訂したもの)○友鏡 一舖(文政六年刊「てにをは紐鏡」參照)○和語說略圖 一舖(別項)○山口栞 三冊(別項)○活語指南 二冊(別項)○玉緒繰分五冊(天保十二年刊、詞の玉緒の增補

版)。(二、活用手爾波を主とし、假名遣等にも及ぶもの)指出廼磯 一卷(別項)○蓮の添枝 一卷(別項)○眞宗聖教和語說五卷(別項)○和語說略圖國語假名遣四冊(天保十年六月に義門の試した講義を門人が筆記したもので、活用・手爾波に關する概要なものであるが、一派ずつ獨立したもの)○語辭抄本記 一冊(山口栞會讀とも和語說略圖解などとも云ふ。天保十一年五月二日から京都の高倉學寮で、十回に互つて行つた講義で、活用・手爾波を主とするもの)○末代無智御文和語說 一卷(眞宗全書の中「義門叢書」に收めて大正四年刊。天保十三年九月大阪で試した講義の筆記で、內容は蓮如の御文「末代無智」の一文を七日に互つて國語學上から講義したものである)○友鏡說疏鈔 二冊(詞の八衢を大に增訂したものであるが、生前に完成しなかつたもので、誤謬のものは門弟未の增減である)。(三、音韻に關するもの)於乎輕重義 二卷(別項)○男信(なましな) 三冊(別項)○韻字例の評(天保十三年成。撰者方の韻字例に批評を書き入れたもの。これに關する彼方の答と併せて韻字例評論と題して一冊になつてゐるものがある)。(四、假名遣に關するもの)宣長の「字音假字用格」に書き入れたもの(內容は白井寬蔭の音韻假字用格(別項)に「義門の字音假字用格の書入に曰く」として引用してゐるものと同じであらうから、字音假字用格標註と題したこともあるのではなからうか)○假名遣千世之古道(今傳はつてゐない)。(五、語學)類聚雅俗言 一冊(文化十一年成。雅言に口語譯を附したもので、口語に關係を有してゐるものの二部から成る。國語は五十音引きの辭書)。(六、その他)活語雜話 三冊(別項)○活語餘論 三冊(別項)

〔國語學以外の著書〕(一、眞宗學に關するもの)改邪鈔遊湖 一冊(文化十一年三月十一日に互つてなした講義の筆記。眞宗全書の中、假名聖教註釋に收めて大正三年刊)○唯信鈔講說二卷(文政五年九月になした講義の筆記。眞宗全書の中、假名聖教註釋に收めて同年刊)○宗名御文講義一冊(同九年三月になした講義の筆記。「眞宗大系註[illegible]」に收めて同七年刊)○御誓願像文講說二卷(天保十年九月になした講義の筆記。眞宗全書の假名聖教註釋に收めて大正三年刊)○御歎鈔講說(今傳はつてゐない)(二、天文學に關するもの)須彌山儀器說弁說評 一冊(文化十二年成)(三、日記・紀行文)遭清水 一冊(文化十一年十月三日成。この年九月十七日小濱から京都田邊へ行き、養父の十三回忌を營み、瑞光寺の新立を見物して十月三日に歸郷するまでの紀行文)○義門の日記(文政六年成)妙玄尼公の傳記調査のため、文政六年九月二日に小濱を立つて江戶へ行き、同年十二月二十五日小濱へ歸つた。その間の日記であるが、これに二種あつて、一は往復及び江戶滯在中の話題を日記で一冊、一は小濱から江戶へ行くまでを韻文で綴つたもので一冊である)○旅遊瑣日記 一冊(天保十四年成。同年二月十八日小濱を出て、京都へ行き、次いで四國へ行き、中國へ渡り、六月二十四日大阪へ歸りて、大阪滯七月で休養するまで(同月二十八日)の日記である。これは後に、旅寓の爲めに擬が録されなかつたのである)。(四、その他)同宗餘談略 一冊(天保十二年成る。義門が妻女に與へたもので、旅行中の心得、日常の注意等を記したもの)○白雪樓集[illegible] 一冊(義門の歌集で題詠の部分)○その他「古今集書入」(二冊、寫)。「妙玄尼公御由緒和分り集」「付言十之條々」(一冊、寫)。「月草」「富士石宮」「いとなし考」(各々萬葉集卷一に收められた考文)「衣の袖の事」(各々萬葉集卷一所收)。「萬葉という文字の調きまの考」(萬葉集記卷一所收)「義門子のかつてといふ詞の考」(同上)。

【參考】先考義門略傳(寫)東條義□○妙玄寺藏世系譜(寫)東條義證 ○東條義門傳及參考資料(信濃教育會誌□ノ五)○義門法師年譜 大島長三(心の花八ノ七)○義門法師 松尾捨治郎 ○東條義門の國語學 福田良輔(國語國文八ノ四)○東條義門傳說 多屋賴俊(國語國文八ノ四)○[illegible]一[illegible]○男信(編者)一[illegible](心の花八ノ三)○山口栞の初稿と當時の批評 安藤正次(國學院雜誌一五ノ六)○義門法師に關する事見聞 雜錄(同上一八ノ二)○眞宗々學と義門 桂田[illegible](國語國文八ノ四)○和漢語學より見た義門[illegible](同上)○語辭抄本記を讀みつゝ[illegible](同上)○東條義門の三語學書の初刊について 福田良輔(國文一七ノ三)○義門上人と政方大人 [illegible](國語國文の研究六)○東條義門の三品詞說について [illegible](國語と國文學五ノ四・六)○義門語とその[illegible] 同上(大谷大學研究九三・九五・九六)○活語指南成立考 同上(國語國文の研究四〇・四一) 〔福田〕

疑問假名遣 ぎもんかなづかひ 辭書 二冊

【著者】國語調査委員會(但し同會委員本居清造、專ら調査す)。【刊行】前編大正元年九月。後編同四年一月。【解說】契沖が所謂歷史的假名遣を唱道して以來、假名遣の標準は延喜・天曆以前の古書に求める事になつたが、今日の普通語に於て、或は古語に於ても、古書に例證を求め難いものがある。從つてそれ等の假名遣は學者により說が二三になつてゐて、何れが正しいか疑問となる。本書はこれら疑問の假名遣研究の資料を蒐集し研究したものである。前編は學說の部で假名遣に疑問のある語を五十音順に配列し、各語に就て諸學者の說を年代順に列擧してゐる。後編は實例の部で、前編に擧げた語の實例を古書から集めて時代順に列擧してその假名遣を考證し、卷末には引用書中特殊なものの解題がある。この種のものとして最も詳しいのみならず、假名遣變遷史の研究にも資する所がある。〔福田〕

寄語 ぎご 「文」を見よ。

客者評判記 きやくしやひやうばんき 洒落本 三冊

【作者】[illegible]栗山人椿發齊([illegible])【畫工】無署名【名稱】役者評判記のもぢり。客者評判記の意。【刊行】安永九年【諸本】洒落本大系第三卷所收【內容】上卷、序語。勸當された息子、吉原で狂言に仕立をして男を見せようとして、却つて大恥辱をつけた上争ひ、集めて諸の老人その他と客衆遊女の評判をする。中卷・下卷は、その評判の記錄である。中卷は大通以下、素性のよい客を立役とし、色客・半可通等の鼻つまみ客を實惡としての評判。下卷は朝廷、きいた風などの素性の惡い客を敵役、ぞめき連などを道化形とし、吉原及び岡場所の遊女を女形とし、芳町・湯島の若衆買ひの客を若衆形としての評判。【解說】この書の特色は內容形共に役者評判記に擬した點にある。板本仕立の如き、洒落本の體裁からいへば異數である。卷末に「神田新町おいらんじや仲ノ町通中八文字屋より出入」とあるのも、評判記の本屋八文字屋といつてもよい八文字屋の名前のもぢりである。芝居好きの作者がこの趣向を洒落本にとり入れる事は最も得意であつた。全體を通じて、作者自身が樂々として筆を弄してゐる樣が想像される。客衆の分類、また役柄にかなりの工夫があるが、これを無理に芝居に附會するため、折角の穿ちが作者の獨り合點になつてゐるのも少くない。又すべての役柄の見立を當世の流行に寄せてゐる點に芝居を離れた洒落本としての

細かい工夫がある。たとへば大通を大緑上々吉に推して、何にしても緑の字は黒二羽といふ類である。この書に於いて評判された遊所は、吉原・深川・土手側・大橋・おたび・市谷・氷川・根津・音羽・千住・本所下モ・品川・芳町・湯島であつて、同場所研究資料として參考するに足るものである。（山口）

客衆肝膽鏡 きやくしゆきもかゞみ　洒落本　一冊

【作者】山東京傳【畫工】北尾政演（京傳）【刊行】天明六年【名稱】奥附の廣告に客衆肝照子とある。本居宣長の「古今集遠鏡」のもぢり。【諸本】洒落本大系第六巻所收【題材】當時擧色物眞似の名手、三樂・一蝶・白兎・富士藏等の男藝者がゐたので、これ等に眞似て遊里に出入する男女の風俗と口吻とを寫生したのである。前に「役者氷面鏡」の作があり、役者の態度口吻を寫生したのを更に遊里に持つて行つたもの。【內容】振新（振袖新造）、かぶろ、おゐらん、きほひ肌、はんか（半可通）、河岸（吉原の河岸女郎）、舟宿、茶屋、日洲、やりて、きいたふう、引込かぶろ、武士、吳服商人、坊主、踊子、地廻り、廓の屋人などの、男女の風俗習癖と口吻とを描き出してある。

【解說】前年に京傳の洒落本の處女作たる「令子洞房」（別項）が發表され、洒落本の一方面なる遊女買ひの秘傳心得とも稱すべきものを書いたので、轉じて茲に遊里に出入する男女の風俗口吻を概括的に描いたのである。その描寫態度は、要するに八文字屋本中の氣質物（別項）と同じ傾向であつて、遊女や半可通の日常の態度はこんなものと云ふ所謂屬性描寫、類性描寫である。從來の洒落本に現はれた男女の痴態口吻を集成して活寫したものとも稱し得るのである。ただ洒落本と云ふ制限せられた小冊子に、多くの男女を盛り込まんとしたので、凝り性の京傳にも似ず、比較的簡單に叙述してゐる。【影響】よく鄕を穿つ所の寫生的描寫は當時喝采されたらしい。後の作者で、京傳に私淑した式亭三馬には、本書の影響が少くない。彼の「無而七癖」「四十八癖」「古今百馬鹿」「當世七癖上戸」（各別項）の如き、皆本書に暗示を得たに違ひない。（山崎）

「客衆肝膽鏡」

脚色餘錄 きやくしよくよろく　演劇書　九巻　三編【著者】西澤一鳳（西澤文庫）【成立】嘉永五年か。【諸本】新群書類從卷二所收。【解說】一鳳が「傳奇作書」（別項）完成後、更にその餘筆を以て錄したので、書名にも餘錄と附けた。內容は「傳奇作書」と同樣、劇界諸方面の雜筆的隨筆であるが、戲曲の題材脚色に關する記事を中心とする。他の文獻に傳へられぬ事實の、これによつて傳へられたもの尠くなく、この方面の考證的研究資料としては、價値の高い文獻である。（守随）

脚本 きやくほん　「戲曲」「臺帳」「文學の種類」を見よ。

脚本作者 きやくほんさくしや　演劇【異稱】狂言作者、又は單に作者【解說】歌舞伎劇に於て原則として各劇場に專屬し、榮座の一隅に作者部屋を構へて、歌舞伎狂言の作をする。明治の中頃から、歌舞伎劇場は漸く外部からの脚本を採用する端緒を開き、今日では狂言作者の仕事は、本來の劇作から殆ど全く離れて、幕內の雜務、演出の世話一切となつた。

【任務】狂言作者には、歌舞伎劇場の傳統主義に基づく種々の拘束があり、一日の狂言を京阪では口明け、中入り（小幕）、世話場、大切と分け、江戸では序開・二建目・三建目・一番目・二番目・大切等に分けるなど、立て方の約束がある。また顏見世狂言から始めて、春狂言・夏狂言・秋狂言等、四季それ〴〵の狂言の趣向にも季節の約束があり、或は芝居等の緣起に由つて、外題文字の末にまで約束があつた。なほ作劇以外の狂言方の雜務としては、舞臺內外に用ふる一切の書き物、即ち手紙・證文・書置・表札・番附（別項）・看板の下書等から、每日の舞臺の幕切れ、道具替り、下座の合圖、拍子木を打つこと、初日から三日目頃までは役者に座で臺詞をつけること、又黒衣を着て、後見を勤めることから、更に各役者受持の臺詞の部分の書抜き（別項）を作ること、及びその狂言の演出に必要なものの一切をそれ〴〵の分業に注文する書出し、即ち獨吟附・淨瑠璃附・下座附・衣裳附・大道具附・小道具・附鬘附など、凡て狂言方を代表する仕事である。いよ〳〵脚本の趣向が出來上つて、臺帳（別項）或は正本（別項）が作成されてから上演迄の稽古等、一切の面倒を見る事もまた狂言作者に課せられた任務である。先づ臺帳を以て最初に座頭役者、興行主等、主なる者に「內讀」して、その意見を聞いて多少の添削をする。その上で一座の全員を集めて「本讀」（別項）を行ひ、書拔きを渡す。それから讀合せ、立稽古、惣ざらひ等、一切狂言方の任務である。

【沿革】（歌舞伎參照）【組織】座の主席作者を立作者と稱し、次席を二枚目の作者、第三席を三枚目の作者といふ。立作者と同格の作者が特に補助の意味で參加する時は、スケと稱して客分に扱く。三枚目以下見習作者に至るまで十名に餘る一團が作者部屋を構成してゐるが、實際の作劇や脚色にあづかるのは、三枚目以上の作者に限られ、それ以下は狂言方と稱して舞臺內外の雜務を司る。作をする順序は、原則として先づ立作者が三枚目以上の作者を召集して、各自の腹案を以て協議の上大體の趣向を立て、筋書を各々に渡せば、立作者が各幕の分擔を定めて狂言を綴るのであるが、立作者は最も主要な幕を受持ち、三枚目は三立目と稱する發端を受持つのが定式である。（飯塚）

伽羅枕 きやらまくら　小說【作者】尾崎紅葉【發表】明治二十三年七月より讀賣新聞に連載。【刊行】同二十四年十月春陽堂。紅葉全

集第二卷、明治大正文學全集第五卷所收。

【梗概】「またしても女物語」——お仙は、祇園の舞子と京都在勤中の旗本水野石見守との間に出來た子だが、母の死んだ後を西岡屋といふ米相場師に養はれて贅澤に育てられた。十二の年養家が破產したので、いつそ「玉の輿への踏臺」と島原の禿に賣られて行つた。十四の霜月九日、里花太夫と名乘つて突き出し、「この日が一代の大邪淫、大妄語、大殺生、大食婪、世間にあらゆる惡業仕盡しの發端」だつた。十六で大阪の隱居に根引きされたもののそれとも死に別れて、京在勤中の侍の妾となつた。そしてまだ見ぬ父親に一度は逢ひたい願ひから、せがんで一緒に江戸へ下る。しかし間もなく一人の忘れ形見を殘してその侍も世を去つてしまつた。お仙は途方に暮れて、おづ〳〵石見守の邸を訪ねると、父親はもう十七年前に亡くなつてゐるのだつた。ただ大身の奧方になつてゐる腹ちがひの姉がかねて自分を懷しがつてゐることを知り、約束をきめて寺に逢ふことにする。その刻限に上野山下で待つてゐると美々しい行列が來、鋲打の駕籠に乘つた姉と窓ごしの對面をしたが、供の者に叱られて近寄ることも出來ず勿論語り合ふことも出來なかつた。それにつけても同じ石見守の娘ながら、かうも隔てある境涯を顧みて淺ましく情なかつた。二十二の女の身で糊口の途を知らないお仙は、一つは生き行くためと一つは反撥と對抗の心から、赤兒を里子に出して遂に吉原に身を沈めて佐太夫といふ花魁になつた。地道の出世は望がないからせめては色里で名を揚げようと決心した。「仔細あつて黄金好まず、好男子を好まず、一癖ものとの名は廓中に隱れもなし。情意氣張づくにては隨分此命を吝まず、見事立派といはるゝほどの事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の傾言の中に引かれたき身の願」を現はし、從つて萬華鏡のやうな多彩的な波瀾のある年月を遊女の意氣と手管に送つたが、二十八の年甲府へ落ち、その果は鰍澤で六十七の癩病の老人の召使になつて「作りける罪の無量なるを消滅せしむるため」の心願から深切に看病して全快させた。そして再び男は持たないと黒髮を切拂ひ、六十二の今日まで團子坂の寮に籠つて、三十四名の遊客の亡魂を祀つてゐる。

【解說】彼が、西鶴に傾倒してゐた最中の作とて、構想文章ともにその影響の著しいものである。併し同じく情生活の追憶を書いた西鶴の「一代女」と較べると、それは最後まで寫實の筆を進めてゐるが、この作は殊に後半で、理想を描いてゐることが認められる。江戸文化の生んだ粹と俠氣とを中心思想とし、これを具現する者として佐太夫を理想化した事は否まれない。但しそのためには、文飾し過ぎた嫌ひある西鶴調の文章も、反つて効果的だと云ふことが出來よう。華麗な才筆を存分に揮つて堂々たる大作をなし、而も作者の豐かな感情の流れを味はせる點で、この時代に於ける傑作として推すべきものである。（小島）

木遣 きやり　歌謠【名義】木材を運搬する時に謠ふ歌、木遣歌の略。多く音頭形式によるを以て木遣音頭と呼ぶこともある。【沿革】起原は何時代まで溯るか明かでない。「近代世事談」（菊岡沾凉著）には「後鳥羽院文治三年、建仁寺の榮西和尚宋へ渡り、建久二年に歸る。大禪法を弘め、建仁二年に建仁寺をたつる。大材を上ぐるに、榮西人夫に下知して、我が名を呼びて引上ぐべしとなり。ゑいさい〳〵と唱ぶことは、これより始まる」とあつて、この說を引用するものもあるが、古く「榮華物語」卷十五、御堂建築の條に「御堂の上を見上ぐれば、たくみども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには、太き綱をつけて、聲を合せて、えいさまさと引上げ騷ぐ。」とあつて、えさまさ、えいさい共に掛聲である。而してこれに用ひた歌は、永正年中の書「閑吟集」に、それと認むべきもの次の一首がある。

あら美しの塗壺笠や。これこそ河內陣土產、エイトロエイト、エイトロエトナ。湯（蜀イ）口がわれた。心得て踏まひ申。（本ノマヽ）トトラ、エイトロエイト、エイトロエトナ。

呼掛と謂とあるので、疑もなく木遣歌である。木遣歌は石曳にも用ひられた。「重編應仁記」に「二條ノ御所御普請云々、故細川氏綱ガ舊宅ニ藤戸石トテ名石ノ有ケルヲ、信長自身奉行ヲシテ、綾錦ヲ以テ石ヲ包マセ、花ヲ餝リ、木遣ヲ謠ハセ、笛太鼓ニテ囃立、多勢ニ引セテ、此大石ヲ即時ニ御所ヘ引付サセタリ」と見えて居り、後世もそれであつた。木遣歌は織田豐臣時代築城の盛行と共に發達したもので、時に流行歌ともなつた。「尤の草子」に載せた「申そ〳〵赤い事申そ、紫野の鬼門額に妙覺寺の二王門……」といふ長篇の歌は聚樂城の時分、京童の小歌だと記してあるので、木遣歌だらうかといふ（嬉遊笑覽）。慶長十五年に、名古屋の城普請手傳に出てゐた阿波德島の城主蜂須賀至鎭が、國許へ送つた手紙の中に、老若共にうたふ流行歌だと叙して、次の歌を記してゐる。

おれが思ふ人は名ごやにござる。長の留守すりや辛苦でならぬ。エイ〳〵エイサラ〳〵と石を曳くエイ〳〵エイといふて引綱は夢たんぺいな。エイト〳〵いうて曳かば、なびこかのといふた。

三味線の葉手組の歌、「比良や小松」の中に「ここは三條かやれ釜の座か、一夜とまりてしげりまゐらしよ……」とあるのは、この石曳歌から出たのであつて、名古屋を釜師の名越に通はせたのである。江戸の初世はなほ築城時代で、木遣歌も盛りであり、やゝ後には當時流行の口說と合して口說木遣と呼ばれて踊歌としても行はれた。寬永時代より延寶までの流行小歌を集めた「淋敷座之慰」に、

忍び口說木遣　秋の夜口說木遣　吉原太夫口說木遣　野郞口說木遣　春駒口說木遣　きりぎりす口說木遣　數物揃口說木遣　島口說木遣　柳木口說木遣　醫者口說木遣　道盛口說木遣　西行口說木遣　北野天神口說木遣

の十三篇を載せてゐる。

さて物うきは秋の夜の君を松蟲くつわ蟲。一よはかりはきり〴〵す。二夜もさんやに君はかうろぎ、逗ひかけ中の鐘、撃をかけよや、あれ先の鐘えい（秋の夜口說木遣）

の如きは、原意をやゝ保有するものであるが、他は座敷用に供せられて勞作の苦を輕減する趣旨のものでない。けれどもその世相を反映してゐる上に少なからぬ價値を有する。木遣は元來勇ましい聲調と哀婉な曲節とに富むので、他の謠ひ物又は淨瑠璃に取入れられて、そこが聽かせ場として喜ばれてゐる。殊に勞作に伴ふものは節調上に深い用意があつて、音頭取の出す掛と、共同作業をなすものの請とあつて、はずみを利用するに都合よき構造をとつてゐる。

（音頭）ホンエー、三吉獺つたか、ヨーヤヨー。（視子聞）ヤットコセー、ヨーイヤナ。（音頭）きりと

しては嘆ったら下りるなヨーイトセー。（曳子謡）ハーレハ、ハリヤリヤリヤリヤー、ヨイソコ、ヨイソコセー。

は伊勢兩宮式年遷宮前、神木奉曳木遣歌の一首であるが、曳子の謡はいづれの地方にあつても歌の文句でなく、囃子詞とでも命名すべきものを多く用ひ、殊に問答より成るものもある。歌の内容は各地様々で、賀意を含むもの、滑稽に富むもの、物は盡し、新古の說話を材とせるものなどもある。全國中これの行はれない所はない。【歌の集】「木やりくづし」（延寶年中刊）「地方用文章」（安政二年版）「木遣大全」等があり、又俚謡を集めた書には概ねこれが掲げてある。

【參考】淋敷座之慰 編者不明（日本歌謡集成第六所收）○浮かれ草 松井譲屋編（近世文藝叢書所收）○俚謡集 文部省編○俚謡集拾遺 高野辰之・大竹　（高野）

黄表紙

侠太平記向鉢巻（きやんたいへいきむかふはちまき）

草雙紙　黄表紙　三册　十五丁十七圖【作者】式亭三馬【畫工】歌川豐國【角書】大楠木 是嘘氣【刊行】寛政十一年、西宮板【名稱】侠太平記とは火消人足の喧嘩騒ぎの記事を意味し、角書は嘘氣茶右衛門といふ人物を楠正成に擬したためである。【諸本】黄表紙集（近代日本文學全集所收【題材】寛政十年に於ける一番組二番組の火消人足の喧嘩事件。【梗概】〔上册〕（一）自序。（二）嘘氣茶右衛門宮の者に軍書を講じてゐる。（三）わいわい天王等を僭して嘘氣の草庵を訪ふ。天王は兄宮よいよい天王に對して謀反を起し、戰負けて嘘氣を味方につけようとの考である。（四）嘘氣味方となる。部下の者勢揃へしてお酒を頂戴してゐる。（五）よいよい天王のよくはら勢嘘氣の籠る氣早城を圍み、寶女（編物）のために袖を引かれて後退する。（六）兩軍睨合の間、軍卒ども文身などをしてゐる。〔中册〕（七）寄手退屈の折、嘘氣方幟を張り、口上をいふ。戲場口上の見得。（八）寄手城際に攻め寄せる。空腹の折柄、間者菓子辨當を賣る。切落しの見得。（九）首人形のせり出しに寄手驚いて逃げる。（十）嘘氣方流行の影繪人形を使って、空しく寄手に碟をうたせる。（十一）寄手の勢、間者が流した鯱取鯱に轉倒する。城内から長竿の先に鍋をつけたので軍兵をさらひ込む。（十二）敵兵附子の上から嘘氣の陣の物見

「侠太平記向鉢巻」（表紙）

をする。附子乗りの見得。〔下册〕（十三）嘘氣勢陥穽を設けておき小判などで敵兵をおびき寄せる。（十四）寄手おしの山の城を攻める。城は引道具の大仕掛に寄手ただ呆れかへる。（十五）嘘氣勝に乗ってよいよい天王を攻める時、質屋の番頭の鶚馬武者現はれ、嘘氣躊躇する。（十六）嘘氣芥子之助の見得でいろいろの藝をする。寄手丸くなって見てゐる。機を計つて大きな地引網で殘らず生捕る。（十七）大屋山に御隱居のむだいご天王、兄弟の宮を仲直りさせる。嘘氣には恩賞數多く下され、又大矢野伴太郎後の名を賜ふ。（十八）作者三馬の軍書讀みの見得。

【構想】（十八）に於ける三馬の軍書讀みの見得の圖に於て、作の趣向の底を割つてゐるやうに、全篇が「太平記」所載の楠正成の千早・赤坂城防守の際の智略を滑稽化したものである。嘘氣茶右衛門の楠正成のもぢりであることも極めて明瞭である。尤もこのもぢりは春町の「楠無益委記」（別項）の角書「夫は楠木是は嘘木」から暗示を得たやうである。本書の角書は又その「嘘木」を「嘘氣」に改めただけで、それを踏襲してゐる。「太平記」滑稽化の一つに、繪の趣向として敵味方を問はず、甲冑姿の軍兵に角繋ぎの股引を穿かせてゐる。文中の言葉書きも鳶言葉になつてゐるのは、火消人足を暗示して、題材をこの作の前年の、火消人足の喧嘩沙汰にとつてゐることを見せてゐる。【史的地位】正成の智略を假り用ひて、黄表紙の趣向としたものは多いが、火消の喧嘩事件の如きをその輪廓に篏め込んだものは少ない。そこに流行の軍書講釋を當込んだ三馬の機智と、特に火消の喧嘩に興味を寄せる三馬の性癖が見られる。この作はそこに意義があると共に、更に三馬の出世作として意義を有つ。この作が出板されて間もなく、モデルにされた火消人足は憤慨して、三馬及び板元西宮の家を散々に破壊した。ために人足數名は入牢し、板元は過料、三馬は手鎖五十日の刑に處せられた。三馬の名はこの事件以來高められたのである。（山口）

窮友（きふいう）「水井堂窮友」を見よ。

笈埃隨筆（きふあいずゐひつ）　隨筆　十二卷　寫【著者】百井塘雨【解說】著名の隨筆であるに拘らず未だ刊本がなく、傳寫で行はれてゐるので、とかく誤脱などが多い。卷一に鳥類之變以下十一條、卷二に異木以下十二條、卷三に世諺以下十五條、卷四に蝦夷以下十七條、卷五に善光寺以下十二條、卷六に諏訪湖以下六條、卷七に渡り鷹以下十五條、卷八に隱岐以下二十四條、卷九に志賀山越以下二十一條、卷十に洛陽名物器書以下十六條、卷十一に長崎以下十八條、卷十二に闇斧侍以下十七條を收めてゐる。著者は旅行を好んで足跡海内に遍く、到る處に自然の奇勝を賞し、又陵墓・舊址を弔ひ、珍器・名什を觀などして、長い年月の間にその要を錄したものが、即ち本書である。往々怪異の談も交つてゐるけれど、なほ實錄たるを失はない。簡筆に虚飾も誇張も無いところが本書の喜ばれる所以であらう。地誌・風俗志・物産志などを兼ねた奇趣ある隨筆である。但、佳本の乏しいのは遺憾である。【著者小傳】京都の富賈萬屋の二男、通稱左右二、俳號五井。漫遊家として名高く、諸國の紀行をも草したが、脫稿に至らぬうちに寛政年間に歿したと云ふ。享年未詳。（和田）

舊雨社（きうしや）【解說】漢詩文作家の結社。明治五年、藤野海南が重野成齋・岡鹿門・阪谷朗廬・小野湖山・鱸松塘等と創立したもので、毎月一回不忍池畔の長酡亭に會し、社友の詩文を品評した。社友中名あるものは、青山鐵槍・南摩羽峯・秋月韋軒・木原老谷・鷲津毅堂・那珂梧樓・小山春山・川田甕江・三島中洲・中村敬宇・依田學海・信夫恕軒・龜谷省軒・島田篁村・岡松甕谷・日下勺水等である。（佐久）

鳩翁（きうをう）　心學者【姓名】柴田亨。字は陽方。通稱謙藏。幼名吉十郎。【別號】眉山・維鳩庵【生歿】天明三年五月五日京都に生れ天保十年（一八三九）五月三日同地に歿した。享年五十七。【墓所】京都東山延年寺【學統】手島堵庵に學んだ。【閲歷】父は玄證といって、

醫者であつた。十一の歲、父の命で奈良屋といふ呉服店の徒弟となつたが、その性讀書を好み、少しの暇にも書卷に親しんだ。後父の死に會つて商家を去り、江戸に出て經書を學ぶこと七年、二十五の歲、歸京して門戸を開いたが、生計豐かならず、傍ら賣藥業を營んだ。文政四年三十九歲にして、初めて心學に入つたが、一兩年にしてその名大に擧り、殊に講說の巧妙を以て聞え、招聘に應じて各地に布敎した。公卿・大名等の間にも、尊信する者が多かつた。文政十年眼病を患つて失明し、晩年十餘年は盲人として終つた。「鳩翁道話」（別項）の著がある。

【參考】石門心學の研究 白石正邦○京都名家墳墓錄 寺田貞次　（白石・義）

鳩翁道話（きうをうだうわ）　心學書　正編三卷・續編三卷・續々編三卷【著者】柴田鳩翁【刊行】天保より文久に至る。【解說】著者の道話を子武修が忠實に筆記したもの。好評を以て迎へられて、續編・續々編を編刻し、各編とも版を重ね、明治以後活版本も出來、廣く行はれてゐる。本書が心學書の中で特に異彩を放つてゐるのは、その例話が極めて興味が多く、或は一の說話集とも見られ得る點にある。中にイソップの喩言と同一の話の見えてゐる事なども注目に値する。心學書の內、本書は最も文學味の豐かなものである。（白石・義）

舊觀帖（きうくわんでふ）　滑稽本　三編九册（但、初刷は上下二編四册らしい）【作者】感和亭鬼武【名稱】角書に「有耶無耶物眞似」とある。その物眞似の意味で、九官鳥を擬つたのである。【刊行】文化二年より同六年に及ぶ。【諸本】滑稽名作集上（帝國文庫）所收【題材】田舍者の江戸見物を記し、「膝栗毛」を逆にして、田舍者の江戸觀察といふ點に、興味を求めようとしたもの。

【梗概】奥州沼黒村の老婆と甥の鬮介とが、江戸見物に出て、老婆は江戸の繁華に驚き、田舍言葉を使ひながら失敗の數々を演ずる。錢湯へ行つては上氣して手古摺らせ、介抱されてもぶつぶつ言ふ。同宿の甲州者と越後者と懇意になつて共に見物して歩く。國言葉の丸出しの滑稽がある。案內人の忠次を連れて堺町の芝居見物をし、芝居の最中に舞臺に飛出して看客に怒鳴られる。日本橋では慾張根性から瀬戸物早接ぎの粉を嘗めて商人と喧嘩する。愛宕山では遠目鏡屋の筒を壞して悶着を起す。芝山内から神明を參拜してその日の見物は終る。翌日は又例の同勢で柳原堤に出て老婆が占師を愚弄する。筋違橋・神田明神・湯島天神を經て下谷に出で、錦袋圓を買ふ。黒門に出て附近の見世物の繁華に驚く。道で迷子札を拾うて小判と思つて失敗する。門跡では法事の繁華にあづかり人眞似をして笑はれる。江戸逗留の日數も重なり、皐月二十八日兩國の花火を見物する。老婆は四ツ目屋の長命丸を長壽の藥と思つて買ひ、越後者は守宮の黒燒を買ふ。幾世餅を喉につかへさせて醫者騒ぎを演ずる。花火見物中、突然の驟雨で舟から上つたが、一行は老婆を見失ふ。老婆は鬮介を探し、往來の人に訊いて人形屋で見かけたと聞き、人形屋へ行つて、人形の鬮介を見て驚く。そのうち連衆に巡り合つて宿に戻る。

【構想】「膝栗毛」の趣向を逆にして、田舍者の眼から江戸生活を觀察させてゐるが、併し江戸生活を愚弄し得ないで、江戸又は江戸生活に對する驚異となつてしまつてゐる。さうして「膝栗毛」と同様に無智で、頑迷で、吝嗇で、多欲で、出しやばりな田舍老婆の愚弄となり、田舍言葉の滑稽化となつてゐる。從つてその滑稽は多くは諷刺や皮肉のない無邪氣なそれで終始してゐる。【影響】上編が感和亭鬼武で下編は十返舍一九が書く筈の豫告があるが、一九作の後編なるものを見ない。そして一九は別に「金の草鞋」（別項）を出してゐる。この間に「舊觀帖」の影響と見るべきものがあるのではあるまいか。「金の草鞋」もその初めの部は江戸見物で同趣向である。兎も角も、鬼武の構想は膝栗毛物を展開さする上に無意味ではなかつたやうである。（小柴）

九桂草堂隨筆（きうけいさうだうずゐひつ）　隨筆　九卷【著者】廣瀬謙【成立】安政二年から同四年に至る間に記したもの【諸本】百家隨筆第一（國書刊行會本）所收【解說】もと十卷の物だが今九卷を存してゐる。經史子集についての考說・論評、和漢洋人物の月旦、天文・地理・考古・文字に關する感想等から、自己を中心としての廣瀬家の情況に及び、幼時以來の經歷を叙してゐる。著者の學問・性行を窺ふには、頗る有用の資料である。門人長光太郎筆錄、男廣瀬孝之助校正とある。安政四年柳橋春陰の序が添つてゐる。（和田）

臼岡先生（きうかうせんせい）　戲作者【解說】明和六年刊洒落本「郭中奇譚」の作者として知らるる外詳でない。一に淡海先生ともいふ。（山口）

丘山（きうざん）　讀本作者【姓名】八島春信。通稱丸屋宇之吉、また斧吉【號】岳亭丘山・堀川多樓・陽亭・陽齋南山・定岡【生歿】未詳。略傳に「文政の頃」とある。著作の刊行は文政より天保の方が多い。【閲歷】江戸の人、微祿の御家人で青山邊に住したが、後、役を離れて人形町の表店に移り、挿畫と戲作を業とした。窓村武（別項）に狂歌を學び畫を堤秋栄・葛飾北齋に學んだらしい。【著作】七變人笑顔兵竹六册（文化十二年）○民翼丹合羽三册（同十二年）○春山短花鉞三册（同十三年）○寄愛度金寶吉事六册（同十三年）○天人羽衣松二册（同十四年）○神稻水滸傳初編五册（文政十一年）○本朝悪狐傳十册（天保元年）○俊傑神稻水滸傳二編五册（同十二年）○梅川仙家月五册（同十四年）○狂歌奇人傳○百家琦行傳四册○猿著聞集一册○尼子七馬士傳六册。【人物・作風】江戸末期戲作者の一人と言へば足りるであらう。ただ武家の出で畫家と作者を兼ねた。挿畫は自作の外、東里山人の「白髪草紙」（別項）、白頭子柳魚の「半月夜話」等に、その名が見える。作品は「神稻水滸傳」と「西遊記」が大作であるが、何れも支那小說の飜案或は飜譯で、取り立てて言ふべきほどのものではない。馬琴が「江戸作者部類」にその作品「一篇も記憶せず、世に聞えたるものなければ也」と言つてゐるが、馬琴の筆鋒を割引しても、丘山の位置はこれで窺はれさうに思ふ。【參考】近世物之本江戸作者部類○江戸時代戲曲小說通志　（笹野）

九山（きうざん）　儒者【姓名】松郁良敏、字は公識【別號】栖雲【生歿】寛保三年七月二十三日、勝山に生れ、文政五年（一八二二）五月十三日、越前の大野で歿した。享年八十。【閲歷】越前大野藩の醫官。傍ら子弟を教育し、五十餘年一日の如くであつた。【著書】方針。豈好辨。剛塘骨鯁。蘊國餌案等。八十（佐久）

九秋（きうしう）「花卉名數」を見よ。

嬉遊笑覽（きいうせうらん）　隨筆　十二卷附錄一

巻二十二冊【著者】喜多村信節【評本】刊本には追慕山の「我自刊我書」と近藤圭造の「存採叢書」とに編入の二種があつて、後者は原本巻首の總目の外に細目を添へ、また巻中上層の標目を加へて檢索に便してある。これは明治三十年初版。

【解說】著者が群籍を渉獵する間に、何くれとなく抄録して簡短な考案を添へたのを類別整輯したもので、隨筆にして類書を兼ねた大部物である。巻一上は居所の部で、むろ・掘立・内室作り以下の數十目、同下は宮儀の部で、上古のさま、みづら・あげまき以下、巻二上は服飾の部で、古服・紅袴・大口以下、同中は器用の部で、屐・草履・わらぐつ以下、同下は同部で、食・飛食・船の名以下、巻三は書籍・詩歌の部で、書籍の下に、書・ふるひ筆・早書以下、詩歌の下にゐんふたき、へんつき、文字合以下、巻四上は武事で、犬追物・牛追物、三十三間堂通し矢以下、同下は雜伎の部で、繩松、歌かるた、貝覆以下、巻五上は宴會・歌舞の部で、宴會の下に、宴、とりこた舞、設樂舞以下、歌舞の下に神樂、大角・小角、わざをぎ以下、同下は歌舞伎、名護屋山三郎、傳助が系より以下、物眞似服色の下に、にはか、茶番、吉原のにはか以下、巻六上は音曲の部で、管絃、琴、青葉笛以下、同下は歌舟の部で、兒餓、あはく、かふく以下、巻七は行遊・祭祀の部で、行遊の下に行遊、手向、鹿島立以下、祭祀の下に祭會、御師、御紙一萬度以下、巻八は慶賀・方術の部で、慶賀の下に忌詞、五月忌、正五九月に婚姻を忌む事以下、方術の下に嚏の頌、小兒衣の守り、とく萬歳以下、巻九上下は諺戯・言語の部で、上巻に古原の起原、元吉原の再興、鈴の森以下、下巻にうかれめ、あそび、遊女傘をさす以下、同巻言語の下に、詞に古今雅俗の異あり、さゝじん、まちかね以下、巻十上は飲食の部で、飯、蕎、ひめ以下、同下は火燭の部で、きり燈蕎、結ひ燈籠、高坏以下、巻十一は商買・乞士の部で、商買の下に、呼聲、みせ店、厨子棚以下、乞士の下に、乞食、阿彌陀の袈、喜捨以下、巻十二上は禽獣の部で、見せ物、永右衛門、鷹屋長以下、同下は漁獵・草木の部で、漁獵の下に、鷹狩、犬、鵜飼つかひ以下、草木の下に、草合、すまひ草、馬庭桃祖撲以下合數十目を立て、別に戯間附錄の一巻下に、和歌三神、しづをかけたる雪の笠、武家のみつゆび等數十項を擧げてゐる。畢竟皆確かな出典があつて、その書は和漢雜俗を通じて數百部に渉るが、比較的近古以降のものが多い。文政十三年漢文、無年紀和文の兩自序がある。【和田】

九如館鈍永（きゅうじょかんどんえい） 狂歌師【本名】鷹田茂兵衛、官名讃岐【生歿】享保八年に生れ、明和四年（一七六七）八月九日歿す。享年四十五。【墓所】京都出水千本西長遍寺【法名】鈍永聰雲居士【閲歴】鈍永は京都仁和寺家の諸大夫で、初め押小路に住し後木屋町に徙る。自然軒鈍全に狂歌を學んで出藍の譽あり、その門下より得閑斎業雅（別項）・蓼里坊貞也・中井吐虹等を出したといふ外は、その傳は詳かでない。一書に、或る武家の子息が蓼を描いてゐたが、これを褒め終らぬ前に一首を詠みたまへとて蓼の如きものを描いたので、鈍永立どころに「瓜の蔕に」と初五文字を詠出した時、子息は忽ちその蓼に葡萄をかき添へたので「茄子はならぬ世の中にぶだう見事に遊ばされけり」と詠んだとの逸話を傳へてゐるが、これもその師鈍全の事だといふ人もあつて、何れが是なるか不明である。【著述】老の胡馬一册（寶暦元年刊）○興太郎（同六年刊）○雉源安博、瑰麗典雅である。江村北海は「五言古體陶潛（明）を學んで未だその自然を得ず。七言古風・五言近體は少陵（杜）に師法して、なほ垣墻を隔つ。七言近體は盛唐諸家を祖襲して、往々明人の窠臼に出づ。若し夫れ五言排律は

奉賀　壽仙翁五十壽
石法王母寫南極壽
星高搖下忘憂草　堂
洞中新老桃春　屋
記七日熟熟　鳩
年勞飛機閑儀　巢
昭　著兄生俊髦
　　遠家宝直清書

争力才氣と相寫し、豪健朧蔚、最も當行となす」と評してゐる。【代久】

鳩巣逸話（きゅうそういつわ） 隨筆 五巻 官【著者】室直清【解說】最國時代の末頃から、江戸開府後七八十年間に於ける徳川將軍・諸侯・諸士の逸行・佳言軼事、その他一般人の教訓となるべき逸話等を集めたもので、室直清・家光時代の記事が多い。新井君美の評論を引くところ

が屢々ある。大石良雄以下赤穂義士に關する話もある。【和田】

奇遊談（きゆうだん） 隨筆 三巻四冊【著者】川口好和、通稱猶三郎、京都の人。【負債】諸國とある。【刊行】寛政十一年【解說】京洛を中心として山城國内の社寺・舊墟・名跡その他の處に存する異事・奇物の記載で、往々怪談に類したことも交つてゐる。巻一に愛宕等東雪以下十二項、巻二に小栗栖村古瓦以下二十一項、巻三之上に三銘寺鐘銘以下十七項、同下に堀川老人上天以下十六項を收めてゐる。すべて實地について親聞した所を記したもので、多く圖寫を挿んである。寛政十一年信美の序がある。【和田】

牛南（ぎゅうなん） 儒者【姓名】雨森宗眞、字は牙卿【別號】松茶・鵬齋【生歿】延享二年に生れ、文化十二年二月五十二月歿す。享年六十。【閲歴】越前大野藩の醫官、山本北山に從つて學び、最も詩を善くした。【著書】詩話蒲鞭○牛南詩鈔。【代久】

牛肉と馬鈴薯（ぎゅうにくとばれいしょ） 小說【作者】國木田獨歩【發表】明治三十四年十一月雜誌「小天地」【刊行】同三十八年「獨歩集」に收錄。現代日本文學全集（國木田獨歩集）・國木田獨歩全集第一巻所收。

【梗概】明治倶樂部といふ芝櫻田本郷町の遊蕩なる或る建物へ、時々集まる若い定連が元氣な談話を交はしてゐる。その中で上村といふ青年は、曾て同志社にゐた頃から理想に憧れ、その憧れの地北海道へ、開拓地を求めて行く。而も「北國の冬」といふのがまた一種詩的な情緒を撥き立てる言葉である。然るに實際に行つて見ると、寒さと寂しさと悦びしさに耐へられなくなつて、彼はその理想を捨てしまはねばならなかつた。燃ゆるやうな憧れと憂めたる現實の悦びしさに譬めをつけずにはゐられない。馬鈴薯ばかりでは生きてゐられない。理想や信仰だけでは生きてゐられない。實際主義で行かうといふのである。近藤といふ法律家は、最初から馬鈴薯黨でも牛肉黨でもない。主義に生きるのでなく現實に生きてゐる實行家である。その他に井山だの松木だのと何れも多少づつ詩人肌を有つては居るが、彼は皆の中に岡本といふ一人の寡年がある。彼は皆の話を熱心に聽いてゐたが、最後に自分の絶望としてゐる事を語り出す。彼は皆て一人の少女と戀をした。その少女も人生の不可解に惱んでゐたが、岡本を知ると共に二人は知己の悦びから深い愛情へと身を委かせてゐた。岡本もまた上村の如く北海道へ理想の土地を求めて行つた。けれどその實現を待たないで相手の少女は病死してしまつた。戀人の死が岡本の心へ深い打擊と共に、一層深い目覺めを起させた。戀人に喞られようが、妻を辱はれ子が取喰はれようが、いかなる大望野心にも更へて果したい要求が生じて來た。それは何であるか。「呼聲」したいといふのが僕の願ひなんですと「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない。不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です！」彼は戀をした。けれど戀より更に力強い死なるものに逢着しても、その死そのものは何か、唯死といふ現象を現はしても、死そのものは直觀出來ず、感得せられずにゐる。やがて智慧の額の中に包まれてその現象すらも忘れてしまふ。智的に究めるといふのでなく、全身的に驚異を感得したいといふのである。牛肉でも馬鈴薯でもない、そのどちらをも眞に感得したいといふのである。【解說】これは獨歩のロマンティク哲學の現はれである。同本といふのは作者その人を現はしてゐる。宇宙對個人の境に於て、宇宙現象を個人の生命に於て感得したいといふ要求を示してゐるのである。「同本の手帖」といふ作もあるが、いつもこの同本の願ひは獨歩の作中を流るゝ基調をなすところの思想である。そしてこの會話の中で、人々の性格や思想の傾向を示して行くことは、獨歩の最も得意な表現法の一つである。モオパッサンの影響なぞも多少は見られる。【吉江】

書約全書（しょやくぜんしょ） 「聖書」を見よ。

胡瓜遺（つぼかり） 滑稽本 初編上下 二冊【作者】假名垣魯文【集工】河鍋曉齋【名稱】詳しくは「河童胡瓜遺」。鳳澤聽吉の「窮理圖解」をもぢつたもの。【刊行】序文に、明治第五壬申孟春とある。明治文化全集（文明開化篇）所收。【解說】本書の外題并に版權に就いては、前年（明治四年）巻の「西洋道中膝栗毛」第五編の巻末と第六編とに見えてゐる。内容は第一章運氣の事、附り開運の身上話では、方今西洋窮理の學問行はれ、經驗實學の世の中と變り、孔子や釋迦の迂遠な道は廢れ、文明開化日に進み、膃肭臍は九月の栗林の如く、洋店軒を並べ、日印の旗幡は七夕の竹を飛くが如く、日本橋で「輕子々々」と呼び立てられて、朝市から夕河岸まで天秤棒を舁いでゐた男が、横濱の開港當時に流れ込み、埋立の土掘ぎをしたのが開運の始まりで、それからトン〳〵拍子に儲けた話。第二章食氣の事、附り下卑の食風では、大食家の男が市中の飲食店を食ひ廻るといふ趣向で、元御原から廣小路へかけての盛り場の光景がよく描かれてゐる。天

保錢五十文を以て、一日に食ひ盡すといふ趣向で、元吉原の再興、鈴の森以下、下巻にうかれめ、あそび、遊女傘をさす以下、同巻言語の下に、詞に古今雅俗の異あり、さゝじん、まちかね以下、巻十上は飲食の部で、飯、蕎、ひめ以下、同下は火燭の部で、きり燈蕎、結ひ燈籠、高坏以下、巻十一は商買・乞士の部で、商買の下に、呼聲、みせ店、厨子棚以下、乞士の下に、乞食、阿彌陀の袈、喜捨以下、巻十二上は禽獣の部で、見せ物、永右衛門、鷹屋長以下、同下は漁獵・草木の部で、漁獵の下に、鷹狩、犬、鵜飼つかひ以下、草木の下に、草合、すまひ草、馬庭桃祖撲以下合數十目を立て、別に戯間附錄の一巻下に、和歌三神、しづをかけたる雪の笠、武家のみつゆび等數十項を擧げてゐる。畢竟皆確かな出典があつて、その書は和漢雜俗を通じて數百部に渉るが、比較的近古以降のものが多い。文政十三年漢文、無年紀和文の兩自序がある。【和田】

九如館鈍永（きゅうじょかんどんえい） 狂歌師【本名】鷹田茂兵衛、官名讃岐【生歿】享保八年に生れ、明和四年（一七六七）八月九日歿す。享年四十五。【墓所】京都出水千本西長遍寺【法名】鈍永聰雲居士【閲歴】鈍永は京都仁和寺家の諸大夫で、初め押小路に住し後木屋町に徙る。自然軒鈍全に狂歌を學んで出藍の譽あり、その門下より得閑斎業雅（別項）・蓼里坊貞也・中井吐虹等を出したといふ外は、その傳は詳かでない。一書に、或る武家の子息が蓼を描いてゐたが、これを褒め終らぬ前に一首を詠みたまへとて蓼の如きものを描いたので、鈍永立どころに「瓜の蔕に」と初五文字を詠出した時、子息は忽ちその蓼に葡萄をかき添へたので「茄子はならぬ世の中にぶだう見事に遊ばされけり」と詠んだとの逸話を傳へてゐるが、これもその師鈍全の事だといふ人もあつて、何れが是なるか不明である。【著述】老の胡馬一册（寶暦元年刊）○興太郎（同六年刊）○狂歌河内羽二重一册（明和五年刊）○狂歌野夫餐一册（同年刊）○以上の外、門人得閑斎業雅の著した「無歌野中の水」（寛政四年刊）には、鈍永の遺詠が載せてある。【野崎】

求心的文學（きゅうしんてきぶんがく） 「文學構成」を見よ。

宮川舍漫筆（きゅうせんしゃまんぴつ） 隨筆 五巻【著者】宮川政運【刊行】文久二年【解說】著者の弟原德齋（號）の補訂にかゝるもので、安政五年叩鐘山人（自序）及び同年著者の兩序がある。今古見聞の雜事を錄したもので、巻一に義士大石瀧左衛門手紙以下十五件、巻二に系圖の奇聞以下十件、巻三に前原德現靈驗以下十二件、巻三に狐山人壁書以下十四件、巻四に浪士如恥死以下十二件を掲げ、所々に圖を挿んでゐる。記事中怪力亂神に係るものあり、その外俗説が多いけれど、まゝ讀むに足るものがある。【著者小傳】志賀理齋の男で、出でて宮川氏を嗣いだ。通稱は未詳。本齋の師兼工二代柳川重信（號谷雄）も補訂者原德齋と共にその弟である。即ち本書は理齋の子三人の合作とも觀るべきである。【和田】

鳩巣（きゅうそう） 儒者【氏名】室直清。字は師禮。新助と稱す。【別號】倉浪・鹿峯【生歿】萬治元年江戸に生れ、享保十九年（一七三四）八月十二日歿す。享年七十七。【閲歴】父玄棟は備中の人、號は草庵、醫を業とし、後江戸に移つた。鳩巣始め木下順庵に就いて學び、學成つて加賀侯に仕へた。正德元年新井白石の推薦によつて幕府の儒員となり、將軍吉宗の時、殿中侍講となり善邊長に厚かつた。明治四十二年九月從四位を贈られた。【著述】駿

かもその大部分は叙事簡略といふより寧ろ單に項目の列記と言つた方が適當と思はれる位である。それで星野恆博士は、「西宮記」恆例部に五十八條、臨時部に八條引用してあることの書の記事が詳細であることから推して、原書はもと數十卷にも及んだのであらうが、世亂によつて亡佚して、偶にこんな略抄の零本を傳へたのであらう。そして傳寫する者が煩勞を厭ふのあまり、原文を除いて、欄外に記してあつた毎條の要旨のみを抄寫したのであらうと述べてゐる。（和田）

【參考】歷世記錄考 星野恆（史學叢說第一集）

吸露庵 きふろあん 「綾足」を見よ。

行阿 ぎやうあ 歌學者・語學者【姓名】源知行、行阿は法號【別號】嶋杖隱士【生歿】未詳。後醍醐・後村上兩天皇の御代の人。【閱歷・業績】行阿の曾祖父源光行は、歌を藤原俊成に學び、「源氏物語」の研究者として有名である（河內本「源氏物語」を編纂し、又「水原抄」を起草した）。祖父親行（別項）も亦「源氏物語」の異本を校合し、「水原抄」を補訂し、「原中最祕抄」を作つて父の遺業を完成した。又藤原定家と親交があり、所謂定家假名遣の根源を定めたやうである。父義行も家業をつぎ「源氏物語」を研究した。行阿も亦「源氏」の校合を行ひ、「水原抄」を補訂し、「原中最祕抄」を完成した。後醍醐天皇の御代、御武者所に候し、題を賜つて歌を詠んだこともあり（新千載集）、天皇の仰せを蒙つて家に傳はる「源氏」の校本を書寫して獻上したこともある。又祖父親行が起稿し定家の允許を得た假名遣書に不足な條項と例とを增補し、所謂「行阿假名遣」を撰んだが、それは普通「定家假名遣」と呼ばれ、定家の名によつて、その後長く假名遣の規準として用ひられた。（假名遣・親行參照）

【參考】水原抄、紫明抄の撰者 山脇毅（國文一二ノ一二）○源氏物語研究史の新資料 橋本進吉（國語と國文學二ノ一〇）○定家の假名遣 吉澤義則（國文一二ノ五）○假名遣の歷史 山田孝雄（同上）（和田）

杏庵 きやうあん 儒者【姓名】堀正意。字は敬夫、通稱は與十郎【別號】杏隱【生歿】天正十三年に生れ、寛永十九年（二三〇二）十一月二十五日江戶で歿した。享年五十八。【閱歷】近江の人。初め醫を學び、後、藤原惺窩に從つて儒を學び、林羅山・松永尺五・那波活所と併せて四天王と稱せられた。尾張侯に仕へて法眼となり、寛永中江戶に來り、次いで幕命を受けて弘文院に入り、諸家の系譜を編修し、別に自ら「武家系圖」三十卷を著はした。外に「杏庵文集」十卷がある。（佐久）

教育と宗教の衝突 けういくとしうけうのしようとつ 論文【著者】井上哲次郎【刊行】明治二十六年四月。これより先、著者は同二十四年十一月、「教育時論」誌上で、この問題を論じて、クリスト教徒の攻擊を受けたので、それに答へるため、再び長論文を同雜誌その他二十有餘の雜誌に發表し、後、これを一冊に纏めたものである。

【內容】明治二十三年十月、教育勅語が發布された折、極く少數ではあるが、基督教徒の中に、その旨趣を辨へぬ不敬な言動をなす者が出て、いはゆる基督教と我國體とは相容れないといふ論難が、思想家・教育家の中に囂然として起つた。本論は、それらの所論中の最も有名なもので、要旨は、「教育勅語は一家の中に行ふべき孝悌の道に始まり、忠君愛國を以て最後の德としてある。それは全く國家主義に基づいた世間門の道德であるが、耶蘇教は絕然たる出世間の道德を說き、更に國家意識がなく、無差別の愛を說き、忠孝の二德を說かぬ。依つて耶蘇教は本邦人の性質と相容れない」といふにあつた。【解說】わが國思想界の明治二十年後は、前代の歐化主義に對する反動期として、國家主義擡頭時代である。外教、即ち耶蘇教に對するこの論爭は、宗教方面に現はれた國家主義思想の一面で、著者が一度戰端を開くや、佛教神道の人々も進んでこれを助け、基督教徒の論客が、また起つて反駁した。明治の思想界に於ける最も記錄さるべき大思想戰であつた。しかして著者のこの所論が代表的なものとされたのは、彼の國家主義の立場から下した基督教の嚴正批判が、甚だ卓直明快を極めたものであつて、何人にも理解され、また傳統的な國民精神を高調して、熱烈なる鬪爭的意氣に溢れてゐたからである。結局基督教徒派を屈伏させることが出來なかつたにしても、爾後、日清戰爭までに續く國民的自覺に影響した力は極めて大きかつた。（高須）

強印象主義 きやういんしやうしゆぎ Virile impressionism【語義】藝術論（米）近代繪畫上の一樣式の名稱。この名稱は近代美術に於ける印象主義・新印象主義・後期印象主義と區別して、強い（virile）線を以て描く印象主義といふ意味で、アーサー・ジェローム・エッディー（Arthur Jerome Eddy）といふ米國の美術評論家が、米國に起つた一流派の繪畫運動に與へた名稱である。この主義は、米國に於ける印象主義であるといふ理由で、米國印象主義（American impressionism）ともいはれる。

【解說】一九一三年の春ニューヨークとシカゴで、近代美術國際展覽會（The International Exhibition of Modern Arts）が開かれた。この展覽會に於て印象主義のモネー、後期印象主義のセザンヌ等の作品が展覽された。そして、モネーの色彩、セザンヌの形象が米國の若い畫家達に感動を與へた。彼等は、この印象主義の色彩と後期印象主義の形象を折衷しようと企てた。即ちこの主義の目的は、印象主義に於ける寫實的研究の結果たる色彩乃至光と、後期印象主義に於ける表現的追求の結果たる形象乃至構圖とを平等に折衷することにある。この強印象主義の運動は單に繪畫のみに限られ、而も他國に直接の影響を與へなかつた。

【參考】A. J. Eddy: *Cubists and Post-Impressionism*, I ed.（高須）

狂雲集 きやううんしふ 詩偈集 二卷【著者】一休宗純【解說】この書は、一休宗純和尚の一代の詩偈を輯錄したもので、上卷の末に、龍寶大德禪寺法語等を收載してある。詩偈は、拈香あり、頌古あり、示衆あり、佛祖贊あり、自贊あり、和尚の宗風を發揚するものである。然るにその大に異なるものは、題婬坊示婬色人、婬坊頌以辱得法知識、美色傾城、婦人多欲、以婬欲換詩文、寄近侍美妾等の題にて賦したる詩偈あり。大德寺眞珠庵に古寫本を藏す。いま活版本行はる。（鷲尾）

共演者型 きようえんしやがた 藝術論（獨）Mitspielerische Typus【解說】美的受用に於ける主觀の態度を分類して、ミュラー・フライエンフェルスは、共演者型と傍觀者型と名づけた。彼によれば美的態度には二つの型があり、（一）傍觀者型は、對象に對して對象を享樂し、受用しつゝあることを意識して我及び現象自身を判斷してゐる主觀の態度である。心理的に見れば、單純感情乃至氣分情緒が活動する場合である。對象は靜觀的に現はれる。（二）共演者型。對象に現はれてゐるところの自然或は人生を、そのまゝに自ら體驗し共感し表現されたものの中に、自らを溶け込ませる態度である。心理的に見れば、意志的活動乃至衝動的な激しい情緒が作用する。內面的共體驗が行はれる共感の程度の最高の極である。對象はこの場合感情移入性を有するものとして現はれる。前者の型は靜的氣質の人、美に馴れた人に多く見られる型であり、後者は小兒或は婦人の如く動的氣質乃至衝動的情緒に豐かな人に見る型である。しかし、（イ）この兩型は同時に美的主觀個人にあることが許される。即ち（ロ）この二つの反對の極の間に於て美的受用は一般に完全に行はれるといふ。かくして彼は對象に移入せられる感情は現實感情である場合を許す點で、リップスの考（對象感情・感情移入參照）に反對し、他方假象說に反對する。

【參考】Müller-Freienfels: *Psychol. d. Kunst. Bd. I.*; *Persönlichkeit u. Weltanschauung*（村田）

俠艷錄 けふえんろく 新派脚本 七幕九場【作者】佐藤紅綠【初演】明治三十九年十一月本鄉座。

（役割）犀木弓彥 佐藤歌市（高田實）、瀨尾富士雄（藤澤淺二郎）、寺崎國之進（佐藤歲三）、市川紅藏（青木千八郎）、力枝母おくら（木村操平）、山林虎一（深澤恆造）、夫人雪江（木下吉之助）、鐵子鶴代・妹お靜（兒島文衞）、坂東力枝（喜多村綠郎）等。

【梗概】瀨尾子爵家の相續人富士雄が、伯父親子のために生家を追はれ流浪してゐるうち女役者の坂東力枝に救はれ、素性をいはず夫婦になつて富美太郎といふ子まで儲ける。八九年して子爵家の風波も納まり、富士雄を尋ね出して子爵家へ歸つてくれといつて來るが肯んじない。ところが、富士雄を快く思つてゐない力枝の母おくらの策動によつて、富士雄は歸らざるを得なくなつた。飽かぬ別れをした力枝は、夫戀しさに身も世もなく、たまたま久富座で「戀女房染分手綱」の重の井子別れを演ずるに當り、七年前矢張りおくらの策動で手離した富美太郎のことを思ひ出し、激しく我とわが身の上につまされた結果、舞臺で重の井に扮したまゝ發狂した。しかもその三吉に扮したぼたんといふ子役は富美太郎であつた。さうした筋の富士雄を瀨尾家から追つた弓彥の惡行と、力枝に懸想した按摩德市の可笑しみの狂情を摘めて、結局力枝と富美太郎は雪江の情によつて瀨尾家へ引取られることになる。

【解說】題材が小栗風葉の「戀下地」（別項）と廣津柳浪の「亂菊物語」（別項）とから出てゐるといはれるが、その前に高田と喜多村とが大阪で演じて賞てた「女紙治」に、そもそもの構想を得てゐる。人物の役柄なども、すでにそれぞれあつた。作者は俳優側の註文を容れてただ筆を執つたのださうで、初演の時に作者の名を出してゐないのはその爲めらしい。しかしこの作はこの作者の新派脚本の第一作であり、初演以來二十餘年、いまだに舞臺生命を保つて、「不如歸」「己が罪」「金色夜叉」（各別項）についでの代表的新派劇になつてゐる。但しその後幾多の補訂改竄を經て、現在行はれてゐる作には、お家騷動の條はすべて省かれ、力枝と富士雄を主とした場面のみが殘され、主要な役の一つだつた弓彥は全くなくなり、夫人雪江、寺崎國之進もほんの附合に過ぎなくなつてゐる。【附記】明治四十五年一月、この作を小說に書き改め、同じく「俠艷錄」の名で新潮社から發行された。（久保田）

狂歌 きやうか【名義】狂體の和歌、即ち純正ならざる和歌の義。狂歌の名は古く「和歌式」や「和歌肝要」に見えてゐる。【異名】戲歌・戲振・えびす歌・狂言歌・ざれごと歌・たはれ歌・ざれ歌・俳諧歌・興歌・へなぶり等。【性質】形は短歌と同樣であるが短歌の如く古雅典麗でなく取材も短歌の如く狹く拘束されず、用語も亦雅俗を併用する。多く卑近の事物、日常の生活に材を採つて、滑稽洒落の想を詠出する。その滑稽は多くは機智頓才による當意即妙の諧謔で、有情滑稽は少い。又パロヂーに依るものが多く、高雅を化して卑俗とし、嚴肅を化して遊戲とするが如き、その最も得意とするところである。要するに一種の遊戲的文學で、作者の號にも、集の名にも遊戲的な態度を示してゐる。四方赤良・濱邊黑人・大屋裏住・頭ひかる・智惠內子・宿屋飯盛・鹿都部眞顏（以上作者號）、「吾吟我集」「故混馬鹿集」「才藏集」（以上集名）等はそれである。

【沿革】狂歌の義を廣く取れば、「萬葉集」の戲咲歌、「古今集」の俳諧歌も狂歌と見られる。作者は滑稽の想を表現する意識なく和歌を作らうとして作つた歌が、偶々讀者に狂體の歌と見え、滑稽の感を與ふるやうなものをも取るならば、隨分古くからあつた事になる。若し又意識して狂體の歌を作り、滑稽の想を詠まうとしたものに就いて、その起原を求めるならば、軍記物語の落書又は落首と稱せられるものを狂歌の祖とすべきであるとする說は傾聽するに足る。鎌倉時代に於ては院中に柿本衆に對して栗本衆を置かれた事もあり、又同じ頃、曉月坊（別項）といふ者があて、酒百首等の狂歌を口吟したこともあつて、狂歌の存在が漸く世に明かになつた。足利時代には「永正狂歌合」「十二類歌合」「調度歌合」等があり、室町の末には山崎宗鑑（別項）が連歌の傍に、好んで狂歌を詠じた。德川期に入つて松永貞德（別項）の「狂歌百首」、雄長老（別項）の「新撰狂歌集」等が世に行はれ、やゝ後れて江戶に石田未得・半井卜養（各別項）等が出て盛んに作り、關西地方には天和の頃、山城男山の豐藏坊信海（別項）が起つて狂歌を鼓吹し、門人油煙齋貞柳（別項）がその衣鉢を傳へて、關西の狂歌壇を風靡するに至つた。この時に當つて注目すべきは從來歌人・連歌師・俳諧師等の餘技に過ぎなかつた狂歌が、これ等の手を離れて獨立し、又その專門の職業者を輩出せしめたことである。貞柳の門よりは、芥河貞佐・栗柯亭木端（各別項）を出し、京都には九如館鈍永（別項）の一派があつて、關西の狂歌界は十數年間殷賑を極めたが、明和年間江戶に唐衣橘洲・四方赤良・朱樂菅江（各別項）等の好事家が一時の興に狂歌の會を催したのが導火となつて、これに雷同する者四方より起り、天明・寛政年間には流行の頂點に達し、世人は天明調狂歌と名づけてこれを稱揚した。この時より狂歌の主權は關西を去つて關東に移り、且つその口調も輕快洒脫なものに一變した。然るにその後赤良の門人鹿都部眞顏（別項）が、狂歌は古への俳諧歌と同體のものだとして、狂歌の名を俳諧歌と改め、纖巧一方の歌體を唱道したので、文化・文政年間にはこれ亦大に流行し、狂歌師の數に於ては天明時代を凌駕したが、そ

の實質は何等價値なきものに下落した。又文政年間には芍藥亭長根（別項）が文政調なるものを唱道したが、これも一時の流行に止まり、東西ともに嘉永頃には漸く凋落し、明治維新後は、東京では天明調派と俳諧歌派の一小部、大阪では貞柳から傳はつた丸派の一部が僅にその名殘を留めてゐた。（狂歌師參照）

【參考】狂歌而言狂歌根附風（國民之友二五〇・二五二）○天明の狂歌武島羽衣（帝國文學四五―七號）○狂歌文庫狄島屋主人○狂歌神髓菅竹浦○狂歌一夕話野崎左文○天明の狂歌に就て野崎城雄（明治聖德記念學會紀要二五卷）○日本文學史上の狂歌野崎左文（日本文學講座）○狂歌狂文研究菅竹浦（江戸時代文化一ノ四・五）○狂歌狂文の本質山崎麓（國語國文學本質研究）（野崎）

行誡 ぎやうかい 歌人【姓】福田氏、字は晉阿【號】建蓮社立譽【生歿】文化三年武藏國豐島に生れ、明治二十一年四月二十五日寂す。享年八十三。【寺所】京都知恩院【閲歷】幼時、小石川の無量山に入り、剃髪修行した。後、京都に上り、嵯峨の立道隠士に就いて學んだ。やがて小石川に歸り、鸞州上人に就いて宗乘及び相宗の蘊底を盡し、東叡山の慧澄和尚に參じて、天台及び倶舍の奥旨を究めた。後、兩國回向院の主席となり、明治の初め大教院の出來た時には、推されてその教頭となり、間もなく傳通院に移り、更に増上寺に移り、大教正に補せられた。明治十二年、弘教書院が興され、大藏經の校訂縮刷が企てられた時には、院の貫主となり、同十八年の冬その業を完成した。同二十年四月、遂に知恩院の門主となり、淨土宗の管長となつた。學德ともにすぐれた近世の名僧で、淨門に籍をおいてゐても、宗派を超越して八宗の泰斗と仰がれた。常に葛城の慈雲尊者の跡を慕ひ、十善法語を講演すること數回に及んでゐる。【作風】行誡の和歌には師傳はなく、餘技自ら一家を成したのである。曾て高崎正風に入門を乞ふと、正風は、この道に師はないと言つて辭した。「いたづらに枕をてらすともし火もおもへば人の油なりけり」の詠を正風が嘆稱措かず、明治天皇の乙夜の覽に入れ奉つたといふ事である。「釋教百首」「於知葉集」「續於知葉集」などの作があり、佛教思想に實感味を添へようとするのが、その作の特徴である。その意味で、「釋教百首」は代表的のものである。

【著書】雪窓答問○いり日の光○術權瑞像傳○大日本國法傳○法語筆話○緣山法語換註○傳語○をみなへし○死牛洩○寒林集○釋教百首○於知葉集○續於知葉集（窪田）

匡郭 きやうくわく 「刊本」を見よ。

侠客傳 けふかくでん 「開卷驚奇侠客傳」を見よ。

侠客春雨傘 けふかくはるさめがさ 脚本 六幕十四場 世話物【作者】福地櫻痴【名稱】發表當時は、「侠客」を「をとこだて」と讀んだ。【諸本】櫻痴集上卷、日本戯曲全集（現代篇）所收。【興行】初演、明治三十年四月二十一日初日、歌舞伎座。

【役割】大口屋治兵衞後に曉雨（市川團十郎）、今西玄之進（片岡市藏）、釣鐘庄兵衞（市川八百藏）、逸見一角後に鴫鶴組首領鐵心齋（市川猿之助）、天野叔貫（市川染五郎）、松葉屋與兵衞（市川[illegible]）、傾城丁山（澤村源之助）、今西玄之進の娘お鶴後に傾城薄雲（市川女寅）、傾城葛城（中村福助）等。

【題材】享保年間淺草藏前の札差、大口屋曉雨の話を骨子として、櫻痴は明治二十七年「小說春雨傘」と題して出版した。後、守田勘彌や團十郎と協議して脚色したものである。大口屋曉雨（後に曉雨）に就いては、二代目團十郎と親交あり、團十郎の創造になる助六を眞似た衣裳で吉原へ出入したり、金鍔を操らせた上で無頼漢の手を捩ぢ上げたりしたといふ話が殘つてゐる。卽ち實在の曉雨は、侠客としての性格より、通人としてのそれを、より多く所有してゐたことと思ふ。櫻痴はその二者を不離不即に調和させて、理想的に市井の英雄「大口屋曉雨」を創作した。

【梗概】（序幕）（大口屋店先、奥座敷）享保年間、藏前札差大口屋へ、御家人逸見一角が金子を借りに來て拒絶され狼藉する。治兵衞は町人の無力なるを慨き、家督を弟に讓つて曉雨と號し、侠客にならうと決心する。（二幕）（向島）鴫鶴組の首領鐵心齋は、一角の後身、向島へ梅見に來り、天野叔貫の色若衆らしい容姿を見て言ひ寄るのを、今西玄之進に妨げられる。（吉原松葉屋二階）傾城丁山に通ふ曉雨は、色めいた事はなく、引込み新造お鶴の病氣を見舞つて金子を與へた後、釣鐘庄兵衞の近づきになりたいと云ふ申出を斥ける。（三幕）（阿部川町浪宅、卵塔場の敵討）向島の遺恨に依り、今西玄之進は鐵心齋に殺害される。天野叔貫と父民部とは吉原に遊女奉公してゐる今西の娘に知らせんと、出入りの曉雨を呼び寄せる。（松葉屋内證）お鶴は、貰つた金子のために丁山より折檻される。曉雨に事情を明かされて丁山は却つて嫉妬する。傾城葛城が出て、お鶴を世話して太夫に仕立てることを約束する。（四幕）（新吉原揚屋）鐵心齋は驛と見せて、お鶴の薄雲を口說き、自分を親の仇と知つてゐるか否かを探る。そして薄雲の後見曉雨をなきものにしようと、釣鐘庄兵衞と密談する。（仲の町の喧嘩）庄兵衞は曉雨が自分の前身が身分違ひの者なることを知つてゐるに驚き引上げる。鐵心齋は曉雨に向つて理不盡に喧嘩を賣る。曉雨も森よく貰つてその額を傷つけ、以前店先での遺恨を晴らし、仲裁に入つた葛城の顏を立てて別れる。（五幕）（淺草並木闇討）庄兵衞は子分を連れて曉雨を闇討するが、遂に曉雨に組敷かれ、その言葉の儘に隨いて行く。（諏訪町立田屋門口、その二階）庄兵衞は曉雨が身分違ひの自分に隔てを置かず、世界の人は皆兄弟だといふ寛大な心持に感激して曉雨へ詫び入り、また今西玄之進がわが恩人と知つて切腹する。（六幕大詰）（薄雲忍出の場）薄雲は松葉屋を忍び出る。若い衆たちの騷ぐのを、葛城が花魁の權式で斥けてしまふ。（今戸八幡の敵討）目出たく本懷を遂げる。

【解說】櫻痴はこの作によつて武士の不當なる權力に對する町人の不屈な反抗を描いた。同時にその時代にあつての階級意識の打破を說いた。卽ち五幕目の立田屋奥座敷の場の釣鐘庄兵衞を說得する曉雨の臺詞「……大小さした侍に頭を下げぬその代り、世界の人は皆兄弟、士農工商××××、世間の奴等が勝手につけた身分の符牒、それに頓着する樣な曉雨ぢやア無エよ」がそれを語つてゐる。作者がこの作をなすにあたつての意圖の半ばは、懸つてその一點にあつたと云つていゝ。德川通吉原通の作者の面貌がいゝ意味にも惡い意味にもこの作によつてはつきり感じられる。吉原の華やかな場面の多いのがこの作の壽命を長くしてゐる。この作者の代表作である。

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義編○歌舞伎（歌舞伎座發行・昭和二ノ四）○棧敷から書齋へ

伊原青々園○市川團十郎同上（尾崎）

侠客物 けふかくもの 歌舞伎・淨瑠璃【別名】男達狂言【性質】題材より分類した一種で、主題を侠客の達引に置いたものをいふ。これには幡隨院長兵衞・夢の市郎兵衞・腕の喜三郎等から十八大通の筆頭大口屋曉雨の如き、江戸ッ子氣質の典型的の人物もあるが、それ等の氣質から變化した賊徒、無頼漢の梅の由兵衞・雁金五人男・團七九郎兵衞・直侍等にも及んでをり、奴の小萬等の如き女達をすら生んだ。達引の對手としては侠客同士の場合以外に、力士や武士なども尠くない。【沿革】歌舞伎では元祿三年正月大阪岩井座「梅の由兵衞」（別項）や同十一年冬、同座「宿無團七時雨傘」（別項）、又は正德の「黑船忠右衞門」の狂言等が名高い。操では、同十五年九月の岡本文彌の「雁金文七秋の霜」（別項）等が古い方である。寶暦期に入つて一時に隆盛となり、以後、幕末まで流行を極めた。左にその主要の種目を擧げる。

【幡隨院長兵衞】驪山比翼塚（別項）○思花街[illegible]容性（天明四年八月、大阪角の芝居、作者並木五瓶）○幡隨長兵衞（同八年四月、江戸中村座、作者櫻田治助）○幡隨長兵衞精進俎板（享和三年八月、江戸中村座、作者櫻田治助）○[illegible]曾我祭（文化六年四月、江戸市村座、作者四代鶴屋南北）○比翼稲寒曾我菊（別項）○浮世柄比翼稲妻（別項）○御國入曾我中村（鶴屋南北參照）○極附幡隨長兵衞（默阿彌參照）

【梅の由兵衞】[illegible]曾我（享保二十一年正月、江戸中村座、作者藤本斗文）○茜染野中の隱井（別項）○男伊達初買曾我（別項）○梅茶染綠出小紋（明和六年五月、大阪中の芝居、作者並木十輔等）○隅田春妓女容性（別項）○句兄弟菖蒲帷子等。

【雁金五人男】雁金文七秋の霜（別項）○男作五人組（享保十一年十二月、大阪中の芝居、作者松尾五八等）○男作五雁金（淨―寛保二年七月、大阪竹本座、作者竹田出雲）○艶衣五人男（寛延元年四月、江戸中村座、作者草川傳四郎等）○夏衣雁金染（淨―明和七年閏六月、大阪豐竹座、作者寺田兵藏）○艶結棹雁金五紋（安永三年七月、大阪角の芝居、作者並木松壽軒等）○仕入曾我雁金染（文政三年正月、江戸中村座、作者二代櫻田治助）○紋盡五人男（文政八年四月、江戸中村座、作者四代鶴屋南北等）。

【黑船忠右衞門】（黑船參照）

【團七九郎兵衞】高津男作（享保六年七月、大阪角の芝居、作者中田嘉右衞門等）○夏祭浪花鑑（別項）○難波湯鉢香入船（安永六年四月、江戸市村座、作者櫻田治助）○綾合團七縞（天明七年六月、大阪竹本座、作者梅野下風等）○月友宵宮五百崎（天明八年九月、江戸中村座、作者櫻田治助）○櫻鯛魚一寸鈎船（寛政四年閏二月、江戸中村座、作者櫻田治助）○謎帶一寸德兵衞（別項）○男作女吉原（別項）○紅色桔梗女團七（西澤一鳳參照）等。

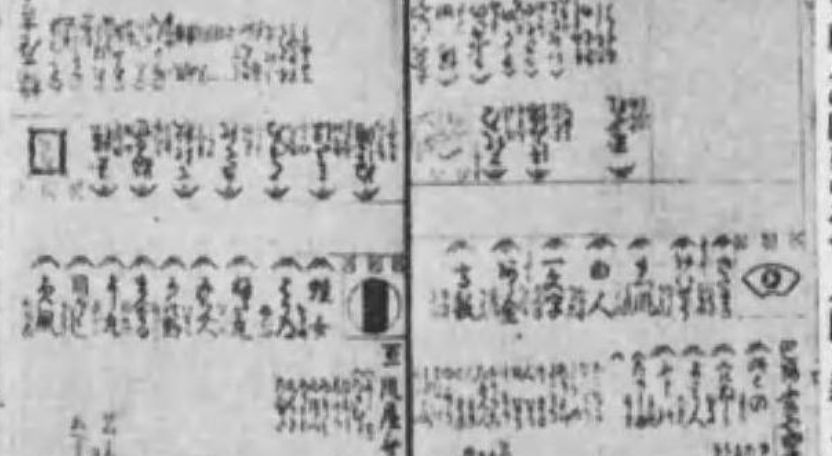
【木津勘助】今織蔭貫島（寛保元年十二月、大阪中の芝居、作者並木永輔等）○棹歌木津川八景（安永七年七月、大阪角の芝居、作者並木五瓶）○浪花木津川八景（明治二十二年七月、大阪中座、作者竹柴諺藏等）。

【夢の市郎兵衞】往昔元吉原（文化四年三月、江戸市村座、作者並木五瓶）○樽太鼓鳴音吉原（慶應二年二月、江戸市村座、作者古河默阿彌）○男達廓夜櫻（明治二十八年五月、東京明治座、作者竹柴其水等）。

【一心太助と松前屋五郎兵衞】名高手毬諷實録（安政二年七月、江戸中村座、作者三代櫻田治助）○芽出柳綠翠松前（明治十六年一月、東京新富座、作者古河默阿彌等）。○その他、腕の喜三郎は「鼓江戸小腕達引」（別項）、唐犬權兵衞は「水滸傳雪挑唐犬」（明治三十四年十月、東京明治座、作者竹柴其水）。黑手組助六は「江戸櫻清水清玄」（後、「黑手組曲輪達引」（別項）と改む）。大口屋曉雨は「侠客春雨傘」（別項）。金看板甚九郎は「金看板侠客本店」（明治十六年四月、東京新富座、作者古河默阿彌）。御所の五郎藏は「曾我綉侠御所染」（別項）。野晒悟助は「蝶千鳥曾我門松」（後、「酔奮提婆道野晒」と改む。元治二年正月、江戸市村座、作者古河默阿彌）。め組の辰五郎は「神明惠和合取組」（別項）、加賀鳶梅吉は「盲長屋梅加賀鳶」（別項）、河内山と直侍は「天衣紛上野初花」（別項）。伊勢力富五郎は「群清瀧贔屓勢力」（慶應三年十月、江戸森田座、作者古河默阿彌）。國定忠次は「上州織侠客大縞」（明治十七年七月、東京市村座、作者三代河竹新七）。新門辰五郎は「新門辰巳小金井」（別項）等がある。なほ歌舞伎十八番の「助六」（別項）や「不破」（別項）等も侠客物に屬する。（秋葉）

狂歌師 きやうかし【名義】狂歌を專門的に詠む人【解說】往古は狂歌の專門家なく、歌人・連歌師・俳諧師等が、その片手間に吟唱するに過ぎなかつたが、享保以降、大阪に狂歌を職業とする者が出て、始めて狂歌師の名稱が起り、次で安永の頃より江戸に狂歌が勃興して狂歌師輩出し、四方赤良をして「世の中の人には時の狂歌師と呼ばるゝ名こそをかしかりけれ」と歌はしむるに至つた。その頭立ちたる判者を關西では宗匠と稱し、關東では大人と呼んで一般作者から區別する稱とした。而して天明三年には、江戸の狂歌師は三百五六十名あつたが、享和年間には判者ばかりで約五十名を算し、文化年間には飯盛・眞顏（各別項）兩人の門弟のみで、全國を通じて各三千人と注されてゐる。又同八年の「道の栞」の調査に據ると、大阪及び堺に於ける狂歌師だけでも八百七十餘名を數へ、この頃が數に於て狂歌師全盛の時代であつた。

【參考】狂歌人名辭書狩野快庵編（野崎）



「狂歌師細見」

狂歌師細見 きやうかしさいけん 一冊【著者】平秩東作【刊行】天明三年【解說】「吉原細見五葉の松」に擬し、狂歌の社中を大店小店に見

今日歌集（けふかしふ）【書名】 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 安永末年頃

【解説】 安永末年頃の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。その序文で、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 天明三年【解説】 天明三年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻中に名を重ねた狂歌師は前後あわせて六十人、巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

今日歌集（こんにちかしふ） 狂歌集 一冊 【著者】 大田南畝（おほたなんぽ）【刊行】 文化十一年【解説】 文化十一年の狂歌集で、作者百十七人の作品を収める。巻頭に四方赤良（よものあからの）（大田南畝）、巻末に元木網（もとのきあみ）（加藤千蔭）の名があるので、この二人が当時の狂歌壇の中心人物であったことがわかる。巻頭の四方赤良の序文は、「狂歌ニて文を作り詩を賦するハ、ちと手間のいる事なり、且つ書物の巻数を積んで、官府に上たらんハさのみ句数多しとハいハじ。それもたゞ一人ニ而あらハよし。其時の作ハ其時ニ而果ぬれバ、跡ニ残るハ其人の名斗也。」と記している。【参考】 狂歌集目録（きやうかしふもくろく）

歌舞口傳五卷。第一、姚家相傳舞曲 公事曲。第二、同 大曲部。第三、同 中曲部。第四、伶家相傳舞曲物語 中曲部。第五、高麗曲物語。
伶樂口傳五卷。第六、舞曲源物語。第七、管絃物語。第八、無舞曲樂物語。第九、打物部口傳物語。第十、打物案譜法 口傳記錄。

【附記】續群書類從管絃部（大正刊本）に收載せられてゐる「教訓抄」は全然別本で、極めて零細な小篇であつて、琵琶の由來、音調その他琵琶學習上の注意等に就て記した書である。而して、本書の著者は、前內大臣殿道光、衣笠大納言、仁和寺の大夫僧都泡覺、京純の法印会賢等に教授したと記してゐるから、「琵琶血脈」によつて、これ等の人の師に當る琵琶の名手藤原孝道（別項）の手記たることは明かである。（吉野吉水院樂書參照）　（藤田）

教訓雜長持（けうくんざふながもち）　滑稽本　前篇五冊、後篇未刻【作者】伊藤單朴【刊行】前篇、寶曆二年。

【梗概】遠江國濱松に、强慾非道の海鹿の九藏といふ富者がゐて、土器坂の寄作といふ者と內密に金儲の相談のため觀音堂へ行つた。然るに彼等より先に大勢集まつてゐる樣子なので、二人は賽錢箱の蔭に身を隱して覗いてゐた。集まつたものは天狗達で、破戒放逸の僧侶、父兄の敎に背く子弟、老父母を持ちながら遠出し、また魚釣に赴くもの、藪醫者・町人の女房の奢侈、淫亂な後家等を是非懲らされねばならぬと相談してゐた。二人は驚いて逃げ戻る（以上、卷一・二）。淺草で俳諧師の寄合があり、その供をして來た下男達が主人達の無藝振、吝嗇を語り合ふ。中にただ一人、武士方の供をした鎗奴が、使はれる者は苦勞するのが當然で、こんな事に不平を持つのは親の躾が悪いからだといふ（卷三）。還曆の僧が行脚の途次、江戶小網町の行德河岸から舟に乘る。時宛も七月十六日で、護摩に包まれた精靈達が、沙婆の冷遇を憤慨してゐるのを見る（卷四）。次節乞食と言はれる托鉢坊主が集まつて各々身の上話をする。或る者は酒故に零落したといひ、或る者は驕りが過ぎて今日になつたといひ、博奕のため或は無慈悲のためと懺悔話をする。廿利用內といふ手習師匠が柳原で買ひ求めた布袋の像の幅を床に飾つて一睡すると、布袋が枕上に立つて、用內の正直を愛で、福を授けてやるとて、一切に亙る敎訓書を列舉し、これを熟讀して、飽くまで仁を基とし、堪忍の二字を忘れねば、福は自然に汝に具はつて來ると告げられると見て夢は覺める。そこへ物持の家から弟子入りの到來物が來る（卷五）。

【解說】本書は寶曆二年板の靜觀房好阿の「當世下手談義」に倣つて作られたものである。嚴密にいへば、敎訓書であつて、文學としては高い價値を持たないが、嚴粛な敎訓を洒落な滑稽に包み、固い理義を柔い說話の中に含めた所に、滑稽本として又文學として取扱はれる理由がある。殊に、「下手談義」と共に、この種の滑稽本の源頭に立つものとして、歷史的價値を認められてゐる。　（小池）

教化（けうげ）　佛教歌謠【名義】說法敎導して、衆生を化益するの謂であるが、轉じて解明の節調で朗唱する佛會讃頌文をいふ。【性質】敎化と云ふと普通、國文體のある佛會朗唱文を指すのであるが、もと漢文の散文體からなる或る佛會朗讃文をも敎化と云つた。敎化には散文體のものと、律語體のものと二種あつて、律語體のものには、今樣形式のものと、短歌體のものとがある。散文的敎化の形は、四句を基本とし、これを片句と云ひ、四句二聯で完全するものを諸句と稱してゐる。散文體の敎化の例を舉げると、「昔ノ大王ハ仙人ノタメニ千歲ノ給仕ヲ致シテ一乘ノ妙法ヲツタヘ今ノ諸德ハ權現ノ御タメニ八軸ノ眞文ヲ講シ御スソ貴カリケレ」（法花八講敎化）、「迎佛ノ香ノ煙リ只今ヤ大師ノ寶刹ニ薰スラム。五分法身句ヲ添ヘテ影向シ給フハ貴物ナリケリ」（天台大師供敎化）の如きものである。律語體の例としては「龍女ハ佛ニナリニケリナトカ我等モナラサラム五障ノ雲コソアツクトモ如來月輪カクサレヌモノコソアリケレ」（眞言宗用）これは今樣形式のもの、「世手須天天阿彌陀保登介乎多能無美八乎波利於毛不曾字歲之加利介留」（往生講式敎化）は短歌形式のものである。敎化には獨特の語法がある。即ち結末の用語法であるが、普通多く用ひられるものは、「マシマスソ貴カリケレ」「モノコソアリケレ」「モノナリケリ」であつて、「モノコソアリケレ」の類には「物ニソアリケル」がある。「コソアリケレ」の用法は最も多く、その結果「給フベケレバコソアリケレ」「給ヘバコソアリケレ」「給ヒケレバコソアリケレ」の如く、强ひて「コソアリケレ」を附した用法があり、また敎化の結末を命令形で結ぶ場合にも、「コソアリケレ」を附して、意味を失ふ用法も生じて來てゐて、「コソアリケレ」の用法が全く定型化してしまつた。又「コソアリケレ」は、ソアが約されて「コサリケレ」となつてゐるものがある。又「ヲ」とあるべきを、音便で「罪業ノ霜雪ノ融ケル身ハ」の如く「ノ」となつてゐる場合が屢々見える。更に獨特の用語は「衛者」「然者」であつて、この用法によつて文脈が中斷されてしまふやうな異樣なもので、これに類したものに「併ラ」がある。志田義秀氏は、この用法は唱へる上の節調の都合によつたものであらうと云はれてゐる。（「聲明國文たる敎化について」）

【沿革】傳へでは、天台宗所用の「昔ノ大王ハ」を行基作とするのであるが、これは鎌倉期の作であつて新しい。古く慈覺大師（延曆十三―貞觀六年）作と云はれる天台大師供敎化がある。作者に就て確證はないが、「日本歌謠史」にこれを慈覺大師の作であらうとある。さすれば敎化なるものは、かなり早くから存したものとなる。平安朝中期頃には盛んに作られて來たやうで、「西宮記」季御讀經、御佛名の條には敎化の名が見え、「小右記」寬弘九年五月十七日の條には新敎化なる語も見えてくる。なほ當時の作として現在內容の知られるものに、寬和二年頃の作と思はれる「眞寂律師沙彌戒導師之詞」なる敎化があり、また後冷泉天皇天喜二年から、白河天皇の永保二年に至る二十九ケ年に用ひられた敎化を集錄せる「敎化之文章色々」等があり、以て古敎化の面目を覗ふことが出來る。

【敎化の諸例】「八字ノ眉鮮クシテヤ齋ノ庭ニハ臨ミ給フラム止觀窓靜カニシテ荊州ノ昔ヲ移セハコサリケレ重瞳ノ眼鮮ニシテヤ法ノ莚ニハ來リ給フラム慈悲ノ室閑カニシテ台嶺ノ古ニ似タレハコサリケレ」（天台大師供敎化の一節）「釋迦ハ底沙佛ヲ讃ヒテ九劫ノ生死ヲソ超シケル殿下ハ大日尊ヲ崇メ奉リテ萬歲ノ觸齋ヲ持給フヘキ者也ケリ」（敎化之文章色々の一節）「極樂程遙ニシテ雖レ隔ツト十萬億之佛土二念佛三昧水澄メリ彌陀ノ月輪影ヲ浮フヘキ者ナリケリ安養遠ツト雖モ去ル此不レ遠ト說クヌレハ月蓋カ莊嚴ニ准ヘテ無量ノ光ヲ顯シ給フヘキ者也ケリ」（建春門院御余佛供養敎化）「壇上ノ菊ノ花アマツ星ニソニタリケル星モ星タヽノ星カハ老年星ノ出給ヘルコサリケレ」。【所收本】日本歌謠集成卷四。

【參考】日本歌謠史 高野辰之○日本歌謠集成序文 同上○聲明國文たる敎化について 志田義秀（現代佛敎大正一五ノ九・一〇）○宗敎詩歌の研究 同上（日本文學講座）○心の花（大正一二ノ六・一三ノ三・二七ノ七）等。　（筑土）

狂藝人（きやうげいにん）　戲曲【作者】吉井勇【發表】大正三年一月號「三田文學」。【刊行】日本戲曲全集現代篇所收【初演】同九年三月二十六日、帝國劇場（文藝座公演）。

（役割）俳諧亭句樂（守田勘彌）、妹おとし（鈴木瓣子）、山崎新太郎（阪東三吉）、おぎん（音羽榮子）、淸元延美津（初瀨浪子）

【梗概】〔一幕〕（稻場附近の山崎の家）文科大學生の新太郎は、堅苦しい生活を厭つて頻りに自由な世界に憧憬しては、學校はまるで休んで、落語家の句樂などと往來してゐた。二月ほど前から小間使のおぎんと情を通じてから、一層その氣持が激しくなつた。今日も書齋で創作の筆を執つてゐるところへ來たおぎんと情熱的な接吻を交してゐると、それを計らずも母親に見られて、おぎんは遂に暇を出される。新太郎は女と別れて一人でゐるに堪へ兼ね、自分も跡を追つて家出をする。〔二幕〕（馬道の句樂の家）夕方おぎんは新太郎の手紙を持つて貸間を探して貰ひに來る。間もなく新太郎もやつて來る。氣違ひが治まつてだ師樂を續けてゐる落語家の句樂は、この二人を前にして死んだ情婦の紫君（吉原の女郎）の思ひ出に耽り、醫者にとめられてゐる酒杯を久し振りで手にして語りつづける。妹のおとしが貸二階を見つけて來たので、句樂は二人と出て行く。隣の延美津が來て、おとしに果敢ない身の上話をしてゐると、醉つて歸つて來た句樂は又氣が變になつたらしく、惚れてゐる延美津をすつかり紫君だと思ひこんでしまふ。そして遂に跣足のまゝ戶外に飛び出して行く。〔三幕〕（馬道の煙草屋の二階）新太郎とおぎんは小さい洋燈の灯影にたつた二人の世界を營みはじめたばかりである。そこへ再び狂つた句樂が泥まみれになつて上つて來て、取りとめのない話をして、迎ひに來たおとしに連れられて行く。やがて新太郎はしみじみ世の中の寂しさを感じて、おぎんがいぢらしくなり、遠火事の半鐘を聞きながら、二人は接吻をつづけて恍惚として戀の陶醉に身をまかせる。

【解說】この作者の市井劇のうちに、主として落語家を取扱つた「句樂もの」と呼ばれる一群があるが、それには、蝶花樓馬樂・柳家小せん・金原亭馬生等がモデルにされ、作中では俳諧亭句樂・小しん・瑞馬となつて、よくその人物や生活が寫されてゐる。多くは一幕物であるが、これは三幕物であり、又新太郎を主人公に句樂が挿話的に書かれてゐるにも拘らず、この狂へる落語家が巧に描き出されてゐる。作者の劇作を通じて「句樂もの」が最も傑出してゐる中でも、この作は若き男女の情痴の姿を點綴して、落語家の生活のみを描いて單彩的になることから救はれてゐる。舞臺に於ても勘彌は句樂の役をし生かして、見事な成功を收めた。　（水木）

曉月房（げうげつばう）　狂歌師【本名】冷泉爲守【別號】商珍【生歿】文永二年に生れ、嘉曆三年（一九八八）十一月八日歿す。享年六十四。

【閱歷】曉月は藤原爲家の次男で、定家卿の孫に當り、母は安嘉門院の四條といひ後に阿佛尼と稱し、かの「十六夜日記」の作者である。身は鎌倉時代の歌人の家に生れ、その歌は「玉葉」「風雅」の勅撰集に入つた程であるのに、世を捨てて淸水寺の法師となつてからは、好んで狂體の歌のみを詠じ、或る人が歌人には不似合なりと詰つた時、「曉月に毛のむくむくと生えよかしさる歌よみと人にいはれん」と答へたと傳へられてゐる。この人には「百酒狂歌」（別項）の作があつて、世に傳はり、別に「蟲氣百首」もあつたといふが詳かでない。辭世と傳へられるのに「六十あまり四とせの冬の長き夜に浮世の夢を見はてぬる哉」といふのがある。當時はまだ狂歌師といふ名稱はなかつたが、後に謂ふ狂歌師の元祖としては、この人を推すべきであらう。　（野崎）

狂言（きやうげん）　「能狂言」を見よ。

狂言田舍操（きやうげんゐなかあやつり）　滑稽本　四册【作者】式亭三馬・樂亭馬笑【成立】文化八年【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收。

【梗概】旅興行に出た操一座の中の旅本旅籠太夫と人形遣ひの木偶藏の二人が興行地の樣村指して田舍道を無駄口をいひながら行く。殊に旅籠太夫は上方者、木偶藏は江戶者で、上方鼻と江戶鼻とで各々國自慢をし、茶化し合うて行く。一方、村の景氣は大したもので、權十が率領で役者の宿割や舞臺のことで一所懸命になり、漸く一安心してゐる所へ、式亭三馬の弟子と名乗る酒氣亭三盃なる田舍俳諧師が來て、利いた風に振舞つて、權十等に面皮を剝がれる。愈々役者一行の乘込み、芝居の開場となり、見物が押掛け、盛に彌次を飛ばす。その上に雨さへ降つて芝居は滅茶苦茶になる。

【構想】三馬作品の演劇物に屬するものであるが、門人との合作であることが面白い。三馬の作品に合作はないわけではなく、「人間萬事嘘計」（別項）の如きは、鯉丈との分擔がはつきりしてゐるが、本書はそれらの點が明瞭でない。三馬の芝居上の知識は「劇場訓蒙圖彙」（別項）等にその蘊蓄を示してゐるが、本書にも人形の分擔調を始めとし、操座連中の隱語や術語に斯道の通をあらはしてゐる。作そのものは新奇なものとはいへない。　（小池）

狂言記（きやうげんき）　能狂言【名稱】能狂言（別項）の臺本をさすのであるが、これは板本に依つて行はれた名で、斯道では單に傳書と云ひ、また和泉流では特に六義とも稱してゐる。

【成立・由來】狂言は、世に傳ふる玄惠法印・金春四郎次郞・宇治彌太郎の如き、或る作者の手に成つたものとは考へられない。恐らく演者に依つて協定された一つの筋が舞臺で洗練され、ほぼ一つの定つた形となつて傳承されたものであらう。しかも、この口傳の遺風は漸く傳統を墨守する狂言師の因襲ともなつて、容易に記錄書物の形で傳はらなかつたのであるが、萬治三年以降德川末期に至るまで、屢々狂言記が刊行されてゐる。

繪入狂言記	萬治三年刊 寬文二年再版	大本	五册
繪入狂言記	寬文五年刊	半紙本	二册
新板繪入狂言記外五十番	元祿十三年刊	半紙本	五册
繪入狂言記	元祿十二年刊	橫本	五册
繪入續狂言記	元祿十三年刊	橫本	五册
繪入狂言記拾遺	享保十五年刊	橫本	五册

橫本狂言記・續狂言記・狂言記拾遺十五册が、文化・

天保・弘化・嘉永に再版され、又この十五番を「繪入狂言記」（六冊）と題して明治初年に刊行された。

しかし既に狂言の大藏・鷺・和泉の各流共に流傳を爲し、殊に狂言の本文を尊重してゐたから、如何にしても刊行流布されるといふことはあり得なかつた。そしてそれらの狂言記は讀み物とする意識の加はつてゐるもので、狂言の何流ともつかぬもののやうである。從來の狂言の研究は、この狂言記を正本視して行はれてゐたが、近來正本の價値が昂揚され、それを根本資料とする研究に向つてゐる。重要な古正本の知られてゐるものには、〔大藏流〕大藏彌右衞門虎明傳書（寛永十九年寫、大本八冊）〔鷺流〕鷺傳右衞門保教傳書（正德頃寫、大本十五冊）〔和泉流〕波形本（横本十六冊）、雲形本（半紙本二十冊、共に德川末期寫）等がある。實に舞臺で洗練され彫琢されて、よく對話の妙を盡し得た詞章を基礎とする研究には、斯うした正確な資料によつて味讀しなければならない。ただ狂言が近世文學、殊に滑稽本・落語・小唄・歌淨瑠璃に影響する所あつたのは、狂言記に依ることが多かつたと思ふ。

【內容】狂言は主役に據つて分類される。大藏流では脇狂言（末廣・餅酒）、大名狂言（今參・萩大名）、小名狂言（千鳥・口眞似）、聟女狂言（八幡前・鈍太郎）、出家座頭狂言（宗論・猿座頭）、鬼山伏狂言（節分・蟹山伏）、集狂言（[illegible]・茶壺）に類別されてゐるが、便宜的のもので、鷺・和泉流、それぞれ精粗の差がある。その題材は好笑を旨として室町時代の民衆の生活に關する事象、前時代及び同時代の文學說話に採り、ほぼ類似した形式に表現されてゐる。その詞章は、詞と謠文とに大別されるが、謠文の部分は、それによつて筋が仕組まれてゐる特殊な舞狂言、或は謠狂言と稱するもの（通圓・樂阿彌）を除いては、單に一部分の可笑分子をなしてゐるか、或は筋を助成し裝飾してゐるかであつて、狂言の重大な要素は重要な事件を仕組むところの詞で、多く室町時代の口語に取つた。併しそれらは、決して文學的作品にしようとしての表現意識を以てしたものではなく、また詞章が流動し、說明的になり、樣式化されたけれども、どこまでも舞臺を通して全く鑑賞さるべきものである。これの讀者は、ただ原本的に單純に類型的にのみ滑稽を感ずる。なほ近世期に分立して流儀を樹てた大藏・鷺・和泉流の詞章には、それぞれ異同がある。

大藏流傳書（寛永十九年寫）

【所收本】狂言全集（附大藏流）三冊 幸田露伴編、狂言五十番（鷺流）芳賀矢一編（名著文庫）、狂言全集（附鷺流）一冊 古谷知新編（國民文庫）、謠曲文庫[illegible]（鷺流）一冊 [illegible]編、和泉流狂言大成四冊 山脇和泉編、新撰狂言集（和泉流）二冊 野村八良編、狂言集成（和泉流）一冊 野々村戒三・安藤常次郎編、狂言記二冊 野村八良校（有朋堂文庫）、狂言記一冊 尾上八郎校（日本文學大系）。

【參考】能狂言の詞章 笹野堅（國語と國文學七ノ四）○狂言能形態論 同上（同八ノ一〇）○狂言集成說 （笹野）

狂言綺語 きやうげんきぎよ 滑稽本 二冊【編者】式亭三馬【角書】下卷に「戲文報條」とある。【成立】文化元年【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）所收

【解說】上卷には鳥亭焉馬（別項）の六十賀に因んだ諸家の狂文もあるが、主とするものは烏亭焉馬が商品廣告文卽ち報條とも引札とも言はれるものである。下卷には三馬作の報條を收めてある。當時廣告文は文士に賴んで作つて貰ふ習慣があつて、文士も喜んでその求めに應じてゐた。故に戲文・狂文として優秀なものも少くない。本書に採錄されたものには料理に關するものが最も多い。焉馬の國姓爺御料理、泰平御料理報條、三馬の手打新蕎麥卽席御料理報條、同卽席料理報條、同大蒲燒報條、卽席御料理報條、相生鮓など。次いで菓子に關するものが多い。焉馬の市川團十郎煎餅、日本一の君だんご報條。三馬の鄙もち（おはあ團子）報條、七色座禪豆報條、壽落雁報條。その他三馬の化粧品（京白粉・御洗粉）の報條や、延命日切艾、仙方長壽綿温石の報條等がある。報條以外の賀の狂文や宇蘭などもある。 （小野）

萬治三年版「繪入狂言記」挿畫

狂言小舞 きやうげんこまひ 「小舞」を見よ。

狂言作者概略 きやうげんさくしやがいりやく 演劇書【著者】未詳【成立】記事は明治十七年を最後とするからその頃か。【諸本】帝國圖書館本に二種あつて、一種は草稿樣の粗末なものである。同種のもので「狂言作者考」と題する詳細な寫本が、東京帝大圖書館にあつたが、大震災で燒失した。【解說】書名の示す如く、歌舞伎芝居の狂言作者の列傳である。收むる所、都傳內・早川傳四郎・中村傳七・中村清五郎・中村清三郎・津打治兵衞・錦道興惣兵衞（二代治兵衞）・藤本斗文・壕越二三治・金井三笑・中村重助（初、二、三、四代）・櫻田治助（初、二、三代）・中村岡幸次・木村園夫・清水正七・笠縫專助・鶴屋南北（四代）・勝俵藏・鶴屋孫太郎（五代南北）・並木五瓶・並木正三・二代五瓶・三代五瓶・辰岡万作・近松德叟・奈河七五三助・奈河篤助・奈河晴助・瀨川如皐（初、二、三代）・勝井源八・松井幸三（初、二代）・綱森久助・（初、二代）・櫻島新造（花笠文京）・三升屋二三治・烏亭焉馬・劍神仙（二代）・松井由輔（初、二、三代）・奈川本助・錦條勝助（老眼文來齋）・二世焉馬・河竹新七（初、二、三、四代）の順で、總て五十五人、各人の略歷と當り作、逸事、法名、墓地等を記してある。三升屋二三治の「作者店おろし」（別項）、「技藝諸人錄」等を引用した箇所も散見するが、他に見えぬ詳細な部分もあつて、比較的詳しいこの方面の資料として珍重するに足りよう。默阿彌を三世新七とし、二世は松本幸二であると記してゐるなども注目される。 （守随）

狂言師 きやうげんし 「能狂言」を見よ。

狂言不審紙 きやうげんふしんがみ 能狂言 四冊【著者】大藏虎光【內容】第一冊は春の卷で、卷首に、狂言道のことを述べた文政六年初秋の序文が附いてゐる。本文の冒頭にこの手錄をものした所以を記して、「抑狂言の意味は、花傳書又は童舞、肝要集などにとほつ祖のしめし置れし書より、流を汲るもろ人不審の數を恥れど答へず。押て問に、大昔より傳りしわざの祕事口傳を守る、ふしんは去る事になん。狂ふ詞と書を知らずやと答しと聞侍れば、唯いつ迄も不審のまゝに守り、おのれが愚習にまよひ、今樣のことわざに類べからず。ふしんの儘に守るこそ肝要ならめ。さはあれ、その驗として、其業の不審を捨置も本意ならず。我愚鈍に侍れば、諸人にも問、亦は愚なる考も彼是となく記ぬ」といつてゐる。それからこの道では、七事の調子と云つて、神・賓（大名）・賤（下郎）・佾（[illegible]）・山（山伏）・女・鬼の程位の大事な事、師弟授受の眼目、修業上の要領、大藏流に於ける諸役、服飾等に及んで說明してゐる。以上は先づ總說と目すべき部分である。次に一番立の狂言に就てそれ〴〵解說してゐる。この卷には「麻生」以下二十四番を列ねてゐる。第二冊の夏の卷には「[illegible]」以下五十八番を擧げ、第三冊の秋の卷には「神鳴」以下四十八番を註し、第四冊の冬の卷には「宗論」以下三十七番を釋し、最終に文政十年三月の自跋を添へてゐる。各番註記する所は多くは語釋や故事で、それと共にその季節的關係を記したり、傳說に隨つて、作者の事を註したりしてゐる。

【價値】總計百六十七番の狂言に就て註釋的研究をしてゐるのが特異とすべきで、類書の殆ど絕無な點からも本書の存在は注目すべきである。併し未勘のまゝの詞交もあり、又考證にも十分信憑し難い點がある。 （野村）

狂言本 きやうげんぼん 歌舞伎【名義】歌舞伎狂言を印行した書籍の意【異稱】殆ど例外なしに挿繪のある所から、繪入狂言本ともいふ。【性質・內容】歌舞伎劇の發達期とも見るべき元祿時代に、始めて生じた歌舞伎脚本の版本をいふ。享保度に至るまで、三都に流行した特殊な筋書風の書である。歌舞伎劇の各要素の未整頓な時代に、當時の歌舞伎狂言そのものを脚本と見做して、これを書籍の樣式で發表せんとしたため、又一方に小說の樣式は相當完備してゐた時代であつたために、狂言本は浮世草子（別項）に極めて近似した內容と形式とを以て成立した。脚本の文章は、當然臺詞とト書きと舞臺書きとに區分さるべきであるが、狂言本にはこの區別が亂れ勝ちである。殊に地の文、卽ち作者の主觀性を多く含む點等、一見小說と異る所がない。「好色傳受」（別項）の如き、純脚本樣式のものは例外である。幕毎に記す題名の文や、その傍に附記する小書きが暗示的な美文を列ねた樣式も、直接には浮世草子の影響と見られる。又必ず數葉の挿繪を收めるが、繪師は浮世草子の場合と同じく、師宣・師重・牛兵衞等一流の浮世繪師が擔當して、小說の挿繪と同樣である。卽ち後世の繪入根本（別項）に見うけるやうな、舞臺圖式の描法を採用してゐない。挿繪としてのかゝる描法も古くあつたに拘らず、不注意に過ぎた事は、全然小說意識に據る成立であつたからかと思ふ。【體裁】表紙は、全く特殊の形式を示して、上方の本を標準に言ふと、題簽は淨瑠璃本に類するが、狂言名題の上に座元名を入れ、臨時に立者の繪姿を入れたりする。この題簽より右に當つてやゝ長方形の紙を貼り、名題座元等を中央に、立役立女方等の名を左右に記したりする。この形式は古い通り札からの案出であらうとの說もある。但、江戸の本には、狂言の圖を描くのが普通である。奧附として、江戸の本には、淨瑠璃正本にあるやうな極め書きが添へてある。一冊十丁乃至十五丁で、一冊本が普通だが、稀に二冊本の時もある。狂言が大評判の時は、普通の本の外に、相當詳しい上本と稱へるものを出すことがある。

狂言本「くわんとう小六」表紙・挿畫（元祿十年版）

【沿革】狂言なる語の內容は、强ち脚本卽ち筋の部分に止まらず、演技と舞臺に演ぜられるすべてを指したので、狂言本の語も、從つて脚本の書籍といふ以外に、もつと自由な解釋を持つてゐたのであるが、後に自づと一定の內容を示すに至つたものである。現存するものから察するに、天和・貞享の頃發生したと見られる。隆盛期は元祿・寶永年代で、享保に入ると操芝居の繁昌に壓倒されて作の不振を來した結果、主體が繪に移り、內容が全く破壞されて、後の繪本番附（番附參照）に變形してしまつた。【影響】挿繪の方は、繪本番附によつて傳へられたが、他の筋の部分は小說方面に影響を與へた。八文字屋本の中期以後に於ける歌舞伎物飜案の流行がこれである。勿論小說的要素が濃いが、筋書としても相當詳細を盡してゐる。後世の合卷物の一部を占める歌舞伎飜案物も、似た點はあるが、こゝにいふ如き狂言本の影響とは見られない。

【參考】歌舞伎圖說 守隨憲治・秋葉芳美編 （守隨）

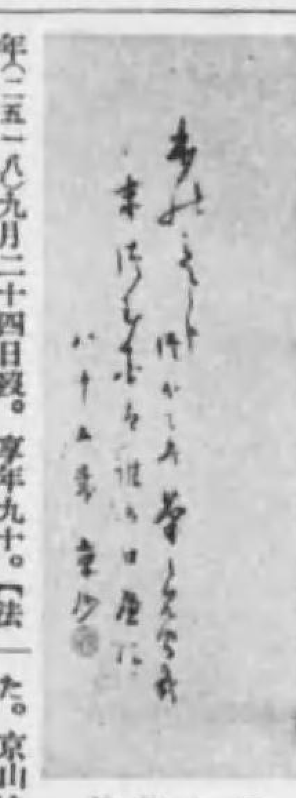
京極家 きやうごくけ 和歌 【解說】和歌史上で京極家と言ふは、藤原爲家（別項）の子爲敎に始まる歌の家筋である。爲家の後、爲氏・爲敎・爲相の三子各々家を立て、二條（爲氏）・京極（爲敎）・冷泉（爲相）の三家に分れたが、爲敎は爲氏の同母弟ながらこれとよからず、二條家對冷泉家（各別項）の領地爭起るや、異母弟たる爲相（母、阿佛尼）に味方して二條・京極兩家確執の種を蒔いた。爲氏の子爲世（別項）、爲敎の子爲兼（別項）に至り、兩家の爭は明かに歌道の宗家爭となり、爲世は大覺寺統に、爲兼は持明院統に庇護せられて互に排擠抗爭した。「延慶兩卿訴陳狀」（別項）はその產物である。爲兼には又「爲兼卿和歌抄」（別項）の著があつて、これにより彼の立場を知る事が出來る。爲世及び二條家が父祖の庭訓を唯一の信條とし爲家の穩健正雅の歌風を宗として、これより一歩も出でざらんとし、制禁の詞などを設け專ら保守的態度を執つたに對し、爲兼はこれ卻つて定家の眞意に悖るものとして「京極入道中納言（定家）……鎌倉右府將軍（實朝）に歌の道を授け申すにも寬平以往の歌にたちならはむと詠むべき由を申し云々」と言ひ、又「心を先として詞をほしきまゝにする時同事をも詠み、先達の詠まぬ詞をも憚る所なく詠める事は、入道皇太后宮大夫（俊成）、京極入道中納言（定家）、西行、慈鎭和尚などまで殊に多し」などと言つて（爲兼卿和歌抄）、進取的態度を示し、當時の歌壇にあつて一異彩を放つた。併し二條家が爲世の後もなほ宗家・門下に後繼者相ついで出で、勅撰歌集第十二（續拾遺）より第二十（新後拾遺）に至る九集中七集まで自派で撰進したに對して、京極家は僅に爲兼の「玉葉集」を唯一のものとし、また爲兼の傾向により花園上皇の撰せられた風雅集があるに過ぎなかつた。爲兼の猶子忠兼が本流閑院家に復するに及んで遂に絕家し、歌壇は二條家の支配下に歸した。

【參考】日本歌學史 佐佐木信綱○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎 （中島）

京極大納言物語 きやうごくだいなごんものがたり 御伽草子【解說】「文鳳堂雜纂」卷百十六雜記に收む。目錄に「京極大納言物語」とあるが、原名でなく、「秋月物語」の異本である。「室町時代小說集」所收。（秋月物語參照） （島津）

況齋雜話 きやうさいざつわ 隨筆 三卷 寫【著者】岡本保孝【諸本】「百家隨筆」第二冊（國書刊行會）所收【解說】廣く和漢の史籍を涉獵して事蹟の似たものを比照し、或は世諺の出所を指示し、或は古書中の難義を釋明し、その他和漢事物稱謂の所由を擧げ、一般に書誌學上より書籍の良否眞僞を判ずるなど、凡て讀書家のために好指針たらんとしたものである。卷一に秀句以下百五十一條、卷二に瓜子金以下百四十二條、卷三に雙小兒或以乳或粥以下七十七條を收めてゐる。但、卷三には前卷所出と重複する數條がある。本書或は未定稿で終つたものか。 （和田）

京山 きやうざん 草雙紙作者【姓名】岩瀨百樹。字は鐵梅。通稱は相四郞・利（又は鐵）一郞・利市（又は一）【號】涼仙・涼山・鬱山・蘭山・覺山・鐵筆堂・醉々亭・方半居士・山東舍・山東庵・狂山人・涼仙堂【生歿】明和六年生、安政五年（二五一八）九月二十四日歿。享年九十。【法名】榮隆院自默京山居士【墓所】本所回向院【閱歷】山東京傳（別項）の弟で、傳左衞門の二男。幼くして漢學を學び、書を佐野東洲に習つた。寬政三年、外叔母鵜飼氏の養子となり、助之丞と改名。同十一年には、更に佐野東洲方へ婿に入り、榮助と改名。又出でて町人となり、淺草馬道邊に住み、新吉原江戸町長島屋の遊女を妻にした。兄に勸められて戲作を試み、又篆刻を業とした。居を京橋一丁目河岸に移した。文化十四年四月十五日より十一月まで、伊勢・京攝に遊んだ。その前年病歿した兄の遺產に關して嫂と衝突したが、嫂が發狂したので、兄の家に移り、嫂の歿後、同十五年には伜筆之助（「作者部類」「伊波傳毛乃記」には筆吉）を二世京屋傳藏として兄の家を繼がせ、自分は後見となつた。京山調製の十三味藥洗粉水晶粉は、文化七年頃から兄の店で賣出し、鼎術藥は同十一年から賣出してゐたが、兄の家を繼いで後は兄の商品以外に、種々の賣藥化粧品を發賣し、實行の惡い煙草入・煙管類をやめることにした。彼は舊山家の舊臣と稱して帶刀しながら、一面は拔目の無い商人で、合卷中に巧妙な臆面のない廣告を書き込んで讀者の購買心を刺戟して相應の儲けをなし、一廉の蓄財をもなし得た。趣味は廣く、野村休成の弟子で石州流の茶を學んだ。體質は兄京傳に似て年よりも若く、白髮なく齒も丈夫で、酒は嗜まなかつた。遊女上りの妻であるが家庭は亂れてもゐなかつた。二男三女あつて、女子は皆武家屋敷奉公のしつかり者であるが、息子は道樂者で、長男筆之助は、行方不明となつた。京山は次男京水に期待すること多く、夙く繪を習はせ、天保七年越後の鈴木牧之訪問の際は同伴したほどであつたが、これも後に自殺した。弘化四年までに三度類燒したが、資產も有り。老年になつての創作は、妻、娘から屢々とめられたが筆を離さなかつた。安政五年の夏コレラに罹り一旦全快したが、秋卒中で死んだ。彼は兄京傳に對する馬琴の批評から、馬琴と反目し、更に鈴木牧之の「北越雪譜」問題から一段と惡化した。馬琴の「伊波傳毛乃記」と、京山の「蜘蛛の絲卷」の記事の對立は、その現はれの一端である。【作品】（合卷）文化四年「復讐妹背山物語」（豐國畫）の處女作以下五十數部、その中注意す



京山筆蹟

べき作は次の如くである。○菊酒屋娘庭訓（文化四年豐國畫）○五人女都紅粉筆（同六年、擠春畫）○淺草凾稗樣（同七年、國貞畫）○江之島物利生對管笠（同七年、春扇畫）○彥根古今晴鱗女房氣質（同年、國貞畫）○高尾丸鰒稻妻（同年、同畫）○先讀三國小女郎（同八年、國貞畫）○信其後稻妻物語（同年、國貞畫）○花角力白藤源太（同年、同畫）○奴勝山愛玉丹前（同年、豐國・國滿畫）○染和解手綱（同年、國貞・春扇畫）○女將門七變化粧（同九年、春扇畫）○庚申待女房献立（同十年、美丸畫）○赤前垂紙閑女御（同十一年、國直畫）○絹半切ふしの文月（同年、同畫）○信夫寶對縞理抽（同年、重信畫）○兩面摺娘年代記（同十二年、國貞畫）○花貌花粧櫻（同年、國信畫）○昔唄猿狂言（同十四年、重信畫）○二人若衆對紫色（同年、春亭畫）○隅田春藝者氣質（文政二年、豐國畫）（別項）○朝櫻曙草紙（同三年、國丸畫）○小說由井倚濱（同四年、國貞畫）○藤節四季の拵狀（同七年、國丸畫）○明烏雪物花（同八年、國貞畫）○菊壽盃猴盃（自初編至十編、文政十年—嘉永二年、同畫）○繪圖自慢歌妓かたぎ（文政十年、同畫）○稗史水滸傳（自初編至六編、文政十二年頃、國芳畫）○浮世源氏繪（自初編至十五編、天保元年—嘉永元年、國貞畫）○つれづれ草玉の盃（初編天保三年—九年、國芳畫）○昔模樣娘評判記（自初編至六編、天保六年—十三年、國貞畫）○竹取物語（初編・二編、天保九年、同畫）（別項）○大晦日曙草紙（初編・二編、天保十年、同畫）（別項）○敎訓乳母草紙（自初編至十編、弘化元年—嘉永六年、國芳畫）○敎草女房形氣（初編・二編、弘化三年、豐國畫）（別項）○琴聲美人錄（自初編至十六編、弘化四年—安政六年、同畫）（讀本）小櫻姬風月奇觀（文化六年刊、國貞畫）○桃花流水（同年刊、豐國畫）（滑稽本）腹住話鸚鵡八藝（同年刊、豐國畫）○螢草二抄（同七年刊、國貞畫）

京山草編（異類編）

同上原本

【作風】（第一期）（自文化五年刊至同十年刊）京傳の弟であることを表看板とする期間で、讀本・洒落本をも試作したが、共に京傳を摸して到らぬことを知り、草雙紙に自己を見出した。（第二期）（自文化十一年刊至文政二年刊）漸く獨立の位置を保つた期間で、作には敵討の色彩が薄くなると共に、人情本・洒落本の持味を加へ、更に敎訓の態度が擡頭した。（第三期）（自文政三年刊至安政六年刊）京傳の後繼者を以て自任し、京山自身の角印を捨てて京傳の牡丹餅印をも擬用した期間である。敵討物は痕跡のみを止め、敎訓味が高潮した。「菊壽盃」を初作として長篇に着手し、「浮世源氏繪」以來、柳亭種彥に倣はうと努力しはじめた。天保十三年頃から浮世草子の氣質物を飜案して「敎訓乳母草紙」「敎草女房形氣」「大晦日曙草紙」等を作つた。晩年、頻りに長篇を書いたが、老耄は作品の上に濃く反映して、徒に說話を累ねるに過ぎず、構想に於ても前後の矛盾が甚しかつた。蓋し永い間の書肆との關係上、心にもない執筆が特にさうさせたのであらう。この三期を通じて京山の作品を檢討すれば、題材は院本・正本から古物語、軍記類、更に支那の稗史に至るまで涉獵の範圍は廣く、構想は院本・正本の影響を受けて、相應な複雜性を見せてゐるが、元來兩立の才能を缺いてゐることと、濫作の甚しいこととによつて、變化の妙を發揮せず、傑作と稱すべきものは割合に少ない。彼の扱ふ事件は多く大名又は富豪の家に事端を起し、漸次下降して庶民階級に入り、主として庶民階級中の人物によつて解決を遂げる事になつてゐる。その倫理上の主張は、馬琴の如く固執することなく、極めて融通の利く現實肯定であつた。例へば、武家階級の戀愛を描く場合にも、不義はお家の法度と言ひ立てながら、必ず幾多の曲折の後に愛人同士を添ひ遂げさせる類である。これはまた作中の武士がその社會的地位に執着しながら一面には町人の氣易さを羨望する態度と呼應してゐる。そこに多少京山その人を反映してゐるやうである。處女作以來敎訓物の作は最後まで持續されたが、忠義を內容の根柢とするよりも、孝行を基礎とするものが多かつた。忠義を理想的形式的と解し、孝行を本能的內容的と解し、前者よりも後者に重きをおく結果である。かういふ態度をとる京山の作が、婦女を對象とする敎訓物に於て好い落ちつきを見せることは當然の歸趨であつた。實に京山の作の特性はこの敎訓を女の氣質物に結びつけた點にあると言ひ得る。敎訓は怜悧でよく事を捌く武家屋敷奉公の女中型を理想としてゐる。こゝには京山の自己の娘だちに於ける誇りがかすかに見られる。そして大體筋が平明で、氣分が朗かであることを狙つたので、妖怪怨靈の陰慘味の如きは、努めてこれを避けた。これが一部の婦女の間に歡迎された所以であらう。割合に多く探り容れた學問的興味も平易を害はぬ範圍內に止めてゐた。得意とする漢學方面を抑へて、和學方面を主としたことにも用意が見られる。近世風俗の考證の見えることは、當時の流行であるが、彼もしばしばこれをなしてゐた。特にその方面では「歷世女裝考」（弘化四年刊四卷）の如き考證の好著を出した。（京傳參照）

【參考】三養雜錄 平亭銀鶏 （山口・小池）

京三吟（きやうさんぎん） 俳書 横本一冊【編者】伊藤信德【名稱】題簽には「俳京三吟 信德 政定 仙庵」とある。【刊行】延寶六年八月、京都重德板【内容】信德・政定・仙庵三吟の百韻三卷を收めてある。信德はこの年春、江戸で桃青・信章と共に三吟を催し、「江戸三吟」(別項)と題して出版した。本書はこれに對して京都の知友との三吟の意味で公にしたのである。 (頴原)

曉山集（げうざんしふ） 俳諧式目 二冊【撰者】潜方山【本名】誹諧曉山集【名義】序によると、撰者が師説を聞いて胸中の疑雲を開き、曉の山の姿も踏木の姿もそれ〴〵眼に映じ初めた如き思がした所から、かく名づけたのである。【成立】元祿十二年初秋【刊行】同十三年初春【解説】貞德流俳諧の式法を解說した書である。序にある如く、時折に門生の問に對して、師説をその儘答へたものであるが、連歌の起原より始めて俳諧の字義を解き、發句・脇・第三以下、或は賦物・六義のこと、或は眞・行・草、皮・骨・肉、四道、無心所着のこと、或は切字、手爾波のこと等、總て百六項に及んで、連句一卷の法式作法の全般に亙り、微に入り細を穿つて叙説せられてゐる。その中、切字・手爾波、及びこれに關聯した項目の解説には最も重きを置いたものの如く、分量から云へば全體の凡そ三分の一を領してゐる。本書が世に出た元祿十三年は、蕉風俳諧が殆ど全國を風靡し、談林の勢力も漸く微となり、貞門は既に衰滅に瀕してゐた。この時に當つて出た本書は、式目書として一般に流行したものではないが、貞德や野々口立圃等を祖述した青木鷺水の「誹諧新式」(別項)等と共に、滅びゆく貞德流の式目を遺し、他派の參考ともなつた事は、俳諧史上注目に値するであらう。殊に解説の懇切を極めたことは、後人の貞門式目の研究に益する所が少くない。

【撰者小傳】方山は芳山、また峰山とも書く。京都の人。通稱主水、招鳩軒・應々翁と號し、初め松江重頼、後、宮尾似船門。東六條御門主の家士を勤めた。享保十五年五月二十二日歿す。 (各務)

狂詩（きやうし）【性質】滑稽を主とした漢詩風の韻脚を踏み、平仄を正すなど概ね漢詩の作法に則り、用語には我が俗語を用ひた狂體の詩で、律・絕・排律・長篇等の諸體がある。【沿革】起原は詳かでないが、足利時代に一休禪師があつて狂體の詩を吟じ、その作は「狂雲集」(別項)に載つてゐる。それより遙か後寬永年間の「寛永諸書」中にも狂體の詩があり、享保年間には「十番狂詩合」といふものも出てゐるが、その最も盛に行はれたのは、明和年間以後の事である。當時京都に銅脈山人(畠中頼母)が出て狂詩を主唱し、これと同時に江戸に寢惚先生(蜀山人)が起つて東西相應じ、狂詩集數部の發行を見るに至つたが、その中の「二大家風雅」と題するものは、銅脈・寢惚二子唱和の狂詩を集めたものである。それより江戸の狂歌師中から狂詩を作る者も續出し、又關西には安穴道人・與倫先生・兆載坊・雲輔等の作家も輩出した。然るに天保の初、江戸に方外道人(木下梅庵)・半可山人(植木八三郎)が出て狂詩に一生面を開き、方外は「茶菓詩」「江戸名物詩」を、半可は「半可山人詩抄」を著して氣焔を揚げた。殊に從來の狂詩は平仄を正さなかつたのを、二子は凡て平仄合格のものを作り、且つその用語にも生硬なる文字を避けて專ら平易流暢なる字句を用ひて、その範を示したので、格調一變して始めて狂詩の體を整ふるに至つた。明治時代に入つては漢學者の成島柳北・石井南橋等が頻りにこれを獎勵して、屢々詩會を開き、又新聞雜誌等に掲げる事も流行し、その後、市川玩球・闘梅癡・三木愛花・眞木痴囊等も專門的に狂詩を作つて居たが、今は全く凋落して殆ど跡を絕つに至つた。 (野崎)

行書（ぎやうしよ）「書體」を見よ。

行助（ぎやうじよ） 連歌作者【別名】坊號を總持坊と云つた(「明翰抄」には惣持院とあるが、「梅庵古筆傳」には惣持坊とある)。【生歿】應永十二年に生れ、文明元年(二一二九)三月二十四日寂す。享年六十五(梅庵古筆傳)。【閲歷】比叡山延暦寺の僧で法印であつた。「竹林抄」(別項)の七人(所謂連歌の七賢)に選ばれて、多くの附句や發句が採られて居り、「新撰菟玖波集」(別項)には二十四句採られてゐる。宗祇はなほ「竹林抄」の七人の作を「老のすさみ」にも選び、行助の作も多く採つてゐる。宗祇は殊く行助を重く見たが、兼載は優れた作者とは見なかつた。 (志田)

狂女物の謠曲（きやうぢよもののえうきよく）【曲目】世阿彌が「花傳書」に九種の物眞似を擧げて、その中でも「この道の第一の面白づくの藝能なり」といつてゐる物狂。女性の物狂を主題とした狂女物の中、子の行方が分らなくて心の亂れたものに、「三井寺」「百萬」「櫻川」「柏崎」「隅田川」があり、これらとやゝ相似たものに「飛鳥川」「花筐」「班女」「水無月祓」「賀茂物狂」があり、身の不幸から狂亂したものに「蟬丸」があり、狂亂を裝ふものに「籠太鼓」がある。【諸本】現行諸流新古謠本。謠曲叢書(芳賀・佐佐木編)・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番(日本名著全集)等所收。

【三井寺】四番目 二段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・二百十番謠目錄)〔内容〕一人の女性(前ジテ)が京都清水觀音に參り、わが子の行方を教へさせ給へと祈つてまどろむと、「わが子に逢はんと思はば、三井寺へ參れ」との靈夢を蒙つたので、喜んで三井寺の方へ出て行く。三井寺では、住僧(ワキ)が稚兒(子方)を伴つて庭に出で、八月十五夜の月を眺めてゐる。そこへ、心の亂れたかの女(後ジテ)が迫り着き、月に興じて寺の鐘をつく。僧が叱ると、狂女は月夜に鐘をついて詩狂と答へた故事などを擧げて、なほもうち興ずる。稚兒はその狂女がわが母であることに氣がついた。母子の詞によれば、二人は駿河國清見が關の者で、稚兒の名は千滿といひ、人商人の手に渡つたが、今はこの寺に養はれてゐるのであつた。母子は不思議の再會を喜び、うち連れて故郷に歸り、やがて富貴の家になつたといふ曲。五流現行。

【百萬】四番目 一段劇能〔作者〕「嵯峨の大念佛の女物狂」の古曲を、世阿彌が改作したもの(申樂談儀)。〔内容〕大和國吉野の男(ワキ)が奈良西大寺で拾つた子(子方)を連れて、嵯峨大念佛に參ると、一人の狂女(シテ)が參り合せて、わが子に逢はさせ給へと祈る。子はこれを見て、男にあれはわが母であるといふ。男が狂女にその所を聞くと、奈良の百萬といふ者で、夫に死別した上にただ一人子に生き別れたので、心が亂れたのだと答へる。そして、法樂に「百萬」の曲舞を舞ふ。その樣が餘りに痛はしいので、男が子を狂女に引合せると、狂女はこれこそ佛德であると喜んで、二人うち連れて歸るといふ曲。五流現行。

【櫻川】四番目 二段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・二百十番謠目錄、申樂談儀に曲名見ゆ)。〔内容〕東國方の人商人(ワキヅレ)は日向國で櫻子といふ子を買ひとり、その文と身代を母(前ジテ)に屆けて立去る。母は悲しんでわが子の後を追ひ、故郷を迷ひ出る。そして三年は過ぎた。常陸國磯邊寺の住僧(ワキ)は自分を頼つて來た稚兒(子方)を連れて、櫻川へ花見に行く。そこへ狂女(後ジテ)が來て、川に流れる花を網に掬つてはなつかしみ、木の花の散るを見ては、面白う狂ふ。この狂女が僧に伴はれた稚兒、櫻子の母であつたのである。母子はこゝに再會を得て、故郷に歸り佛道に入つたといふ曲。五流現行。

【柏崎】四番目 二段劇能〔作者〕榎並左衞門五郎原作、世阿彌改作(申樂談儀)〔内容〕越後國柏崎殿御内の者小太郎(ワキ)は、訴訟の爲めに鎌倉に來てゐた主人が病死し、その子花若が遁世したので、花若の文と形見の品とを持つて故郷に歸り、柏崎の妻(前ジテ)に渡す。柏崎の妻は夫の死と子の遁世とを一時に聞いて悲歎にくれる。花若(子方)は今は信濃國善光寺にゐて、住僧(ワキヅレ)に伴はれて如來堂に參ると、花若の母(後ジテ)は心も亂れて故郷を狂ひ出で、わが子の行方を尋ねて善光寺に辿りつき、夫の形見の烏帽子・直垂を着て狂ひ舞ふ。そしてこゝに母子の對面を遂げるといふ曲。五流現行。

【隅田川】四番目 一段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・申樂談儀に曲名見ゆ。二百十番謠目錄には元雅の作といふ)〔内容〕武藏國隅田川の畔で、今日はこの在所で大念佛があるといふので、人を集めてゐる。そこに旅人(ツレ)が來て渡舟に乘る。また都の狂女(シテ)が來てこれも舟に乘る。舟の中で渡守(ワキ)は旅人の尋ねるがまゝに、今日の大念佛の謂れ、去年三月十五日、人商人に拐かされた都の子がこゝで病死したので、あたりの者が憐み葬つてやつた。今日はその一周忌で回向をするのだと語る。狂女がその子の名を尋ねると、京都北白河吉田何某の子梅若丸で、年は十二と答へる。狂女はそれこそわが尋ねる子よといつて泣く。渡守は驚き憐んで、狂女をその墓所に連れて行き、念佛を唱へさせると、梅若の亡靈(子方)が幻の如くに現れるが、手に取る事は出來ない。そのうちに夜が明けると、ただ塚の上に草が茫々と生えてゐるばかりであつたといふ。五流現行。

【飛鳥川】四番目 一段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文)〔内容〕母の行方を失つた友若(子方)が京の男(ワキ)に伴はれて、吉野金峯山に參り、母との再會を祈つて、その歸途飛鳥川の畔へ來ると、田植女の一人(シテ)が川の淵の昨日と變つてゐる事を注意し、飛鳥川の古歌を語つてわが身の上を述懐する。そして早苗とる田植歌を謠ひながらわが子の事を想ひ歎く。友若はその女がわが母である事を知つて、めでたく母子再會する。金剛・喜多現行。

【花筐】四番目 二段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・申樂談儀に曲名見ゆ)とも、觀阿彌(二百十番謠目錄)ともいふ。〔内容〕越後國味眞野におはした大迹邊皇子は、都より御迎へが參つて御上洛遊ばされ、御使(ワキヅレ)を遣して照日前(前シテ)に御文と御花筐とを賜つた。皇子(子方)は、既に御即位遊ばされ、供奉官人(ワキ)を隨へて紅葉の行幸を遊ばす。帝を慕ひ來つて狂亂した照日前(後シテ)は侍女(ツレ)に御花筐を持たせて、都をさして狂ひ出で、今しも行幸の御道筋に參り合せた。帝はその心根を不便に思し召し、もとの如く召し使はんとの宣旨を賜つたといふ曲。五流現行。

【班女】四番目 二段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・二百十番謠目錄、申樂談儀に曲名見ゆ)〔内容〕美濃國野上宿の遊女花子(前ジテ)は、この春、都から東へ下る途次立寄つた吉田少將を戀ひ慕つて、他の客に出ないので、宿の長(狂言)は怒つて花子を追出してしまつた。吉田少將(ワキ)は秋にもなつたので都に歸らうと、野上に立寄つたが、もはや花子は居ないので、そのまゝ都に歸り、賀茂の社に參詣した。そこへ狂亂した花子(後シテ)が參り合せ、少將と取交はした扇から班女の故事を思ひ起し、曲舞を演ずる。少將はその扇を見て花子である事を確め、こゝに二人は樂しい契りに歸る事が出來たといふ曲。五流現行。

【水無月祓】四番目 一段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文)とも日吉安清(二百十番謠目錄)ともいふ。〔内容〕下京の男(ワキ)が播磨國室津で相馴れた女を迎へにやつたところ、既に居ないので、今日の夏越の祓に賀茂の社に參詣して、女との再會を祈ると、狂女(シテ)が水無月祓の輪を持つて、人々に茅の輪の謂れを語り、面白う物狂ひを演ずる。よく見れば、それはかの室の女であつたので、喜んでうち連れて歸るといふ曲。觀世現行。

【賀茂物狂】四番目 一段劇能〔作者〕不明(謡本作者註文)〔内容〕都の男(ワキ)が東國見物に三年を過し、都に歸つて賀茂の神事に參ると、狂女(シテ)が面白う狂つてゐる。よく見れば、それはわが妻であつたが、人目を憚つて、その場では他人を裝うて舞を舞はせなどする。そのうちに女もわが夫に氣がついたが、互にそれとなく別れて、やがてもとの契りに歸つたといふ曲。寶生・金剛・喜多現行。

【蟬丸】四番目 一段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・二百十番謠目錄)〔古名〕「逆髮」(申樂談儀)〔内容〕延喜帝第四の皇子蟬丸の宮(ツレ)は盲目であらせられたので、叡慮により、捨てられ給ふ事となり、清貫(ワキ)が逢坂山に御供して、宮の御髮を下し、蓑笠を參らせて都に歸つた。御姉宮逆髮(シテ)も亦、御名の如く御髮が上ざまに生ひ上つて、御心も亂れがちであつた。そして狂ひ狂ひ逢坂山にお出でになると、庵の中に妙なる撥音が聞えるので、不思議に思つてお立寄りになると、それは蟬丸の宮であつた。御姉弟は互に御不運を歎かせられ、やがて泣く泣く逆髮は都にお歸りになつたといふ曲。五流現行。

【籠太鼓】四番目 一段劇能〔作者〕世阿彌(謡本作者註文・二百十番謠目錄)〔内容〕九州松浦の何某(ワキ)は、召使關清次が他郷の者を討つたので、入牢させて置いたところ、牢を破つて逃げてしまつたので、その妻(シテ)を召捕つて夫の在所を糺したが、全く知らないといふので、牢に入れ、從者(狂言)に命じ、一時ごとに鼓を打つて嚴重に番をさせた。すると、彼女は心が亂れて、鼓を數へては舞ひ狂ひ、夫を戀ひ慕ふので、松浦もその心情を憐んで、夫婦ともに助けてやらうといふ。女は實は狂氣を裝うてゐたのであるが、今の詞を聞いて喜び、初めて夫の在所を明かし、すぐさま夫を尋ねて、もとの住家に歸るといふ曲。五流現行。

【構想】以上十一曲、「蟬丸」を除いて、他の十曲には出典といふべきほどのものはない。蟬丸傳說の原據は、「今昔物語」卷二十四「源博雅朝臣行二會坂盲許一語」にあるが、この盲人蟬丸

は雜色で皇子ではない。ところが「平家物語」卷十「海道下り」に「延喜第四の皇子蟬丸」と語つてゐるので、謠曲作者はこれに據つて、更に逆髮といふ狂亂の姉宮まで想像して、身の不運は地位の高下に拘はるものではない事を說かうとしたのであらう。出典のない他の曲にも、それぐ一曲のやまがある。「三井寺」の鐘、「百萬」の曲舞、「櫻川」の櫻、「柏崎」の烏帽子・直垂、「隅田川」の伊勢物語の歌、「花筐」の花筐、「班女」の扇、「飛鳥川」の田植歌などがそれである。子の行方の知れなくなつたのは、大抵人商人の爲めであるが、「柏崎」だけは遁世によることとなつてゐる。母子物は大抵子の名を出して、母の名は知られないのであるが、「百萬」だけはその逆になつてゐる。夫婦物は多くその關係が正式のものでない。一時の馴染であるから、當然別れなければならない。別れた夫を戀慕する餘り、女が狂ふこととなるのであるが、正式の夫婦である「賀茂物狂」だけは、夫が三年の間、東國見物に行つた爲めに妻が狂亂した事としてゐる。母子物も夫婦物も皆再會の喜びを得てゐるのに、「隅田川」の梅若丸だけこの世にゐないのは悲痛であるが、劇としてはそれだけ深刻である。「班女」の夫と「隅田川」の父とは共に吉田少將であるので、後世の文藝には、これを結び合せて採つたものが多い。いづれも劇能として興味の深い。從つて後世の文藝に大きな影響を與へてゐるが、「賀茂物狂」の夫婦は、他のものに比べて、世間を憚り過ぎた情愛の薄いものであり、殊に「飛鳥川」の母は子の行方を尋ねようともせず、烈しい狂亂に陷つてゐない、母性愛の稀薄なものである。

【參考】謠曲評釋 大和田建樹○謠曲大觀 佐成謙太郎 〔佐成〕

狂僧草子 きやうそうのさうし 「狐の草子」を見よ。

行尊 ぎやうそん 歌人 【通稱】行尊大僧正・平等院大僧正 【俗姓】源 【生歿】天喜三年に生れ、保延元年（一七九五）二月寂す。享年八十一。【閲歷】十歳にて父を失ひ、十二歳にて三井寺に入つて出家したが、十七歳の時、三井寺を出て諸國を遍歷した。この頃既に奇蹟があり、

三條院―小一條院―源基平―┬行尊
　　　　　　　　　　　　　└基子

山中に宿ると童が出て枕を進め、河を渡らうとすれば童が現れて舟を用意したと傳へられる。永久四年園城寺長吏に補し、保安四年延曆寺の座主に任じ、天治二年大僧正となり、牛車の宣旨を蒙り、長承三年勅によつて衆僧の上座とされた。加持祈禱によつて病魔を降伏し、靈驗は甚だあらたかであつたといふ。朝廷の護持僧として御歸信が厚く、殊に白河院の御歸依を蒙り、昇進榮達は儕輩を越えた。和歌の外音樂にも堪能であつた。

【作品】行尊大僧正集。圖書寮に二種の傳本がある。一本は歌の數二百十七首、內三首は連歌で、卷頭に「十六とかや申しゝ年の九月ばかりに修行にいでて道にて」とあり、卷末に行尊の略傳を載せ、建久四年弘安七年及び永仁二年の奧書がある。他の一本は歌の數百三十五首にて連歌はなく、內題に「平等院大僧正集」とあり、奧書はない。兩者に共通な歌は七十三首あるが、後者に於てはそれが始めの七十九首の內にあつて八十首以下は凡て前者にない歌である。前者に於ては七十八首目より百二十六首目に至る迄に於て四十八首、百九十三首目以下卷末に至る迄に於て二十五首、合計七十三首が他本の歌と共通する。共通の歌は詞書も歌もほぼ一致する。兩本共に部類はないが、最初は部類のあつたものが錯簡したものと見え部分的には部類がある。共通する歌は順序が一致し、錯簡のために部類が破壞されたと考へられる點からすると、兩者は或は同一系統のものが分裂したものではないかと考へられる。所載の歌は近畿を遍歷した時のものが多く、那智・熊野・高野・粉河・大峯等の靈場を始め、多くの歌枕が詠まれてゐる。遍歷中は親しい同行者があつて慰められたやうであるが、遂に京を偲ぶ心や、俗世を捨てた寂しさや、益々精進しようとして勤循する心や、捉はれない心の內に平和を求めようとする心などを盛んに詠んでゐる。仁和寺の宮、加賀の左衞門との贈答歌は注目すべく、代表作「もろともに哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」は「金葉和歌集」中に見える。勅撰集に入つた歌は、金葉十、詞花二、千載一、新古今十、新勅撰集以下凡そ二十四首、合計凡そ五十四首。【作風】彼の歌は、靜かな心境を詠んだものが多く、趣向を凝らしたり、技巧に苦心したりするところがなく、積極的に或る感動を强く詠まうともしてゐない。平易な用語と平坦な調子で質朴な心持を詠んでゐる。「八雲御抄」には、「行尊僧正ときにつけたる金玉はあれどもうちはへて此みちをむねとする事なし」とある。

【參考】元亨釋書十二○本朝高僧傳○僧綱補任○十訓抄二 〔西下〕

曉臺 げうたい 俳人 【姓名】加藤、また久村（一說くむら）、名は周擧、通稱平兵衞、又吳一。【別號】暮雨巷・亦夜庵・買夜子・白一居・龍門 【生歿】享保十七年に生れ寬政四年（二四五二）正月二十日京都に歿す。享年六十一。【法名】春光院曉臺居士 【墓所】京都寺町四條下ル大雲院 【家系】野々垣平右衞門の子、加藤仲右衞門（初名平兵衞）の第三子（名古屋洞仙寺の過去帖には、岸上林右衞門子息とあるといふ）。【閲歷】曉臺は、初め名古屋泰名町一丁目に住み、壯年の頃江戸に出て尾張江戸屋敷の御祐筆部屋物書方に勤めたが、小吏の生活を屑しとせず、轉て致仕して俳諧を專らとするやうになつた。その初め師事したのは名古屋の巴阿坊武藤白尼であつた。卽ち美濃派の俳統を承けた譯であるが、自ら中興の士を以て任じ、敢て師の風に泥まなかつた。寶曆十三年の「蛙口亭集」（三州矢矧の醫者が蛙合を催して芭蕉の遺風を慕つた時の記念集）に據れば、當時既に曉臺が三尾地方に相當の勢力を有してゐたことが分り、明和五年に至つては士朗・白圖・都貢・宰馬・壺滿・臥央・祿城等の社中と「秋の日」（別項）の歌仙を興行し、玆に「冬の日」の光を挑げて蕉風中興の實を舉げようとした。橫井也有の如き先輩も、曉臺の實力には推重の詞を惜しまずして、これがために序を書いた位であつた。かうして尾陽に隱然たる勢力を得た彼は更に各地の遊歷を志し、明和七年遠く奧羽から北越に吟杖を巡らし、松島では「松島や我はもぬけて夜の鶴」の句を吐いた（しをり萩）。安永四年には、越後出雲崎の且水と佐渡に遊び（佐渡日記）、同六年には再び松島を訪ねて風羅庵に杖を留めたりしたが（[illegible]集）、就中京都には屢々足を留め、木屋町五條（後藤小路新屋町）に別業さへ構へてゐた。そして蕪村・几董・樗良・青蘿等と來往して風交を重ねた。特に蕪村一派の人々との交渉は最も深かつた。斯くて天明三年には、自ら主催して湖南の幻住庵と洛東圓山に席を設け、蕉翁百回の遠忌を盛大

に營んだ。その時には彼は前年から江戸に在つて諸好士に歌仙を勸進し、發句を求め、法會の卷と共に「風羅念佛」三十三冊の大撰集を完成した。彼の蕉風崇敬察するに足るものがある。後寬政二年九月二條相公から召されて花の下宗匠の免許を受けた。天明八年火災に遭つて別業を失ひ、一時熱田の衣の浦に假寓したが、寬政二年春には吉野に花を見、又翌三年には門人五周を倶して北國に行脚し、若狹から京都に歸り、門人桃睡の許に杖を留めた。門人等は豫て曉臺に咽喉の痼疾があるのでその保養をも兼ねさすために、白山通三條の北に一閑室を設け、その居に龍門の扁額を揭げた。龍門は嘗に名古屋前津に營んだ別墅の名で、眺望の中、特に暮雨に宜かつたので暮雨巷とも稱した所であるが（服部梅庵の龍門書記）、今その名をこゝに移したのである。その年十一月頃から痼疾が重くなり、遂に翌年正月ここで歿した。その病中及び終焉の樣は門人桃睡の「曉臺終焉記」（落梅花）に詳しい。

【作風】曉臺は、麥水と同じく支麥の門から出て、而もその風に滿足せず、新に一家の格調を成したものである。併しその過程には二家各々異なる所があつた。麥水は麥水の如く奇矯に過ぎず、徐々と步を進めて行つた。彼の人物が何事にも丁寧懇切であつた事は、嘗て京の龍門で句筵を催した時、各々通題が調つたのに彼一人句がないので、座にあつた蕪村が、「目明千人盲目千人の世也。十分ならずとも出詠あれかし」と言つたのに、「もしそが中に一人の目明あらむ。其一人に恥づるのみ」と答へて、句案に時を移したといふ逸話（大鶴庵作草稿）に據つても分る。隨つて彼の開拓の步は常に堅實であつた。又その句風も「尾張は五歌仙に冬の日の光を挑んとす」（秋の日序跋）と言はれた如く、麥水と同じく先づ貞享の古に復らうと志したのではあるが、「虛栗」の調をその儘眞似るやうな事はしなかつた。彼は其角よりも丈草を慕つたといふ（風羅念佛跋秋の序）。それはやがて曉臺と麥水の傾向の相異を語るものであらう。彼が丈草に私淑したといふのは麥水の如く革新の手段を主として表現樣式に求めないで、寧ろ詩材としてより

曉臺自畫贊

藝術的なものを選ぶ事に努めようとした傾向が看取される。「梅に月朗詠うたふ人あらむ」「きのふ見し妹が垣根の花あやめ」「門たゝく狂僧寒し夕紅葉」等、彼が典雅優艶な詩材を選ぶ事によつて卑俗さを免れようと努めた點など、蕪村と相通ずる所が多かつた。併し曉臺には、蕪村ほどの詩人的敏感さがなかつた。隨つてその選ばれた詩材を自家の藝術的心境の中に十分醱酵させることが出來ないで、材料の儘ただ投げ出されてゐるといふ嫌も伴つた。道彥が「曉臺は雄女の風也。人に思はるゝの姿をつくしたれども、人を思ふの實情薄し」と評したのは、この點で當つてゐる。併し彼の篤實な性格がそれを浮華纖弱にまで墮さなかつた。「日暮れたり三井寺下る春の人」「花暮れて月を抱けり白牡丹」「曉や鯨の吼ゆる霜の海」「すら〳〵と杉の日裏行く時雨」等、幽艷・豪華・遒勁・蕭條等の情趣を、それ〴〵十分に言ひ了せてゐる手腕に至つては、やはり俳諧史上の大人物たるを失はぬ。【史的地位】梅間の「力草」に「蕪村・曉臺、心を合せて樗良・白雄・闌更・青蘿など勸めて正風吹起りし也」とある一節は、從來俳諧史に屢々引用されてゐる。それは決して誤ではない。併し安永・天明時代に於ける實際的勢力から言へば、蕪村と曉臺とは同一には扱はれない。固より曉臺の方が遙に有力であり世間的であつた。門人の範圍から言つても、曉臺は名古屋と京都を中心として可なり汎く亘つてゐた。特に蕪村系統は、蕪村が歿した後、後繼者の几董が早世した爲め、その直系は早く絕えたのに反し、曉臺系統は士朗を始め有力な門人が多くて、長くその俳系を保つことが出來た。當時の俳壇を大觀すれば、東は蓼太、西は曉臺の二派に依つて先づその中心勢力が支持されてゐたと言つても、大した過言ではなからう。隨つて時代に多くの交渉を持ち影響を及ぼしてゐる點から言へば、曉臺の歷史的地位は寧ろ蕪村に優るものがある。特にその俳風が蓼太の如く俗化的傾向を帶びてゐなかつただけに、交渉といふも影響といふも共に善い意味に於てであつたことは、一層曉臺の地位を高くするであらう。

【編著】秋の日（別項）○しをり萩○熊坂集○夜の柱○佐渡日記（以上曉臺七部集所收）○曉臺七部集（別項）○風羅念佛三十三卷（天明三年。蕉翁百回追善集）○蛙口亭集一冊（寶曆十三年）○熱田三歌仙一冊（安永四年。貞享元・二年芭蕉が熱田の俳人と催した歌仙三卷を世に傳へるため出版したもの）○その他「去來抄」「幽蘭集」等を編纂したが、これ等は曉臺が芭蕉の遺志を顯揚しようと努めた精神を見るべきで、かの闌更が諸種の翻刻をやつたのと共に、又時代の復古的精神の現はれとも言ふ事が出來る。なほその作品を集めたものに「曉臺句集」（別項）がある。

【門流】門人の主なものを舉げると、暮雨巷二世を繼ぎ、又師のために追善集「落梅花」や「曉臺句集」を編した井上士朗（別項）を始め、名古屋名聲を博した權田臥央、門下中最も世間的には國枝庵祿城・仁木白圖・渡邊岱青・岳輅・村瀨帶梅・臥六・都貢・壺瀛・宰馬・少孜・大阜等があり、そのうち帶梅は後に暮雨巷三世を繼ぎ、岱青・岳輅の二人は、寬政十年師の七回忌追善集「法華經」を編した。又京都には師の終焉記をものした曲江亭桃睡を始め、鷹羽・嵐月等があり、大津の青蘿居麒道、坂本の三津川子當も亦暮雨巷門で、京都の寺村百池も蕪村歿後は專ら曉臺に師事してゐた。なほ信濃に藤森素檗、伊豫に栗田樗堂の如き有力な人々があり、その門流は實に多士濟々であつた。

【參考】力草前篇○曉臺雜話 花屋一佐（俳諧あかた所載）○曉臺の事 星野麥人（末太刀大正一六ノ一） 〔潁原〕

曉臺句集 げうたいくしふ 俳句集 二冊 【著者】久村曉臺 【編者】暮雨巷臥央 【別名】內題には「曉臺先生發句集」とある。【刊行】文化六年仲秋日の跋がある。名古屋風月堂孫助等刊。【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・天明名家句選（俳書大系）所收 【解說】「發句三傑集」（別項）の中に收められた曉臺の句は、僅に六百餘句、而もその中百七十餘句は文字の誤あるを慨し、臥央が師の發句を新たに蒐集整

が京傳署名のはじめである。この試作期の作には、政演の署名のみを示したのが多いが、後年の作品の諸傾向はすでに指摘される。例へば「遊人三幅對」の「三筋緯客気植田」の如きこれである。ただ洒落は重く、筋の附會も鈍い。しかし草雙紙畫工として可笑・喜三二・築蘭等の作に執筆したことが、その畫に寫實の風格を加へると共に、著作の鍊磨に得るところが多大であつた。その結果は天明二年の「御存商賣物」の如き佳作を出して、蜀山人の「岡目八目」に紹介され、京傳の名は戯作界に認められた。かくして贏ち得た名聲を維持するための努力は翌三年には作を出すことなく、四年には苦心の跡は歴々と見ゆるものの、結局趣向倒れに過ぎない「不案配即席料理」その他の作を出した。かういふ苦心は、同五年の「江戸生艶氣樺燒」に於て酬いられた。洒落本と共通の題材を以て、巧みに通生活裏面の暴露を試み、滑稽の面白味を縦横に見せたもので、しかも實在の人物をも暗示することが多いので大に歡迎せられた。その歡迎によつて、續編また類型の作の幾つかを作つた。更にこの作風は、寛政初年にまで引き續き、その期間の傑作は、これと作の態度や趣向を同じうして居る。「艶氣樺燒」によつて盛名を得た京傳は、同六年から自作に、山東鶏告・山東庵京傳・魚毛など架空の人物を山東門人として署名した。これは、當時行はれた戯れの一つであるが、また一面、世に弟子持を承認されるほどの實錄を得たのである。京傳が通生活の暴露は、寛政の政治改革と共に時事の方面に轉じて、こゝに幾多の諷刺の傑作をなし得た。しかし大體は諷刺を茶かしの蔭に隱して、諷刺本來の色調を極めて淡くした。その態度は、また心學の教訓を表に見せながら裏に滑稽を盛る「心學早染草」にも見られた。しかし寛政

(新美人合自筆鏡)(政演畫)

四年の作品以後、京傳の態度は一變した。三年に洒落本の禁を犯して處刑された結果、これまで蔭にした教訓を表面に見せるどころか、それを標榜するに至つた。こゝに讀本の作風を多分に採り容れて、敵討物に專らになり、對象も大人より小人へと向つたがために傾つて赤本の性質を採り容れようとした。この時から文化三年まで京傳はその限られた範圍に於て、努めて興味を發揮するために、或は「通氣智之錢光記」外三部の作を一聯とする圖案式裁を工夫し、或は繪趣向を骨子とする新體の作をも出した。彼は依然として、黄表紙界の先驅をなしてゐた。同四年以後は合巻期に入り、主として敵討物を書いたが、題材は歌舞伎種が多く、まゝ自作の黄表紙・讀本を改作したものも少なくない。敵討物で最も活躍するのは、忠僕また緣續きの若者である「於六櫛木曾仇討」(別項)の又八の如きが、その典型である。これ等は多くの場合主人よりはその忠節を認められず、却つて冷遇されてゐるに拘はらず、義のために努めてゐる。けれど彼の最も太い線で示さうとしたのは、忠義よりも、それに伴ふ人情の纏綿にあつた。人情の中でも親子の恩愛であつた。例へば「女達磨由來文法語」の如きが、その特例である。彼の草雙紙は甚だ多くして約三百部、分つて云へば黄表紙二百十餘部、合巻八十餘部である。

【洒落本作者として】 閲歴・人物・才能の上から考へれば、京傳は殆ど洒落本を書くために生れたと云つてもよいほどで、その傑作の多いのは當然であり、又その作品は黄表紙より遲れてゐるだけに、黄表紙界で贏ち得た名聲は、直ちに洒落本の作をも蔽うて、いち早く世に認められた。而も作の進歩の速さも亦これに伴つてゐた。その初作たる天明五年の「令子洞房」に於て遊びの極意を輪廓的に說き、同六年の「客衆肝照子」に於て遊女遊客その他の遊廓の人物の氣質・風俗・言葉遣ひを斷片的ながら書き分けたのが、同七年には「通言總籬」のやうに、それ等を或る趣向の中に浮び出させ、又「古契三娼」のやうに吉原とその他の遊里の地方色を明かに示して、穿ちを縦横に振舞ひ、更に又寛政二年の「傾城買四十八手」のやうに遊びの極意を話例を以て如實に示すものをも出すやうになつた。かくして、洒落本の覇を以て稱せられた。洒落本作者中輕くまた正確に遊びの呼吸と遊女遊客の魂膽を描き出すこと京傳の如きものはなかつた。けれど洒落本の禁を犯して、「仕懸文庫」その他を書いて處刑せられてからは、遂に洒落本の筆を絶つた。この方面では僅かに三十部の傑作を殘すに過ぎなかつた。

【讀本作者として】 洒落本の筆を絶ち、草雙紙に洒落本的興味を切り離した後の京傳は、草雙紙に讀本的要素を加へると共に讀本の作に力を盡した。處刑に怯ぢた彼が心おきなく向ひ得るのは、この一途であつた。しかし最初は勝手が違つて「忠臣水滸傳」の如き生硬な作を出したが、漸く呼吸を心得て「櫻姫全傳曙草紙」「昔話稻妻表紙」「本朝醉菩提」の如き佳作を出した。彼の讀本には馬琴の作に見るやうな整然たる組織がない。これは讀本として重大な缺陷であるが、それをば部分的に趣味多き挿話を嵌め込むことに於いて補足した。その手法は大方歌舞伎に倣つてゐた。その挿話の題材は多く歌舞伎、また歌舞伎脚本の素材から出てゐた。故に構想に於ては分裂の狀にありながら、氣分に於ては統一があつた。これが馬琴の作に於ては見られない興趣を溢れさせた。その興趣は作者の耽奇的な近世風俗のあしらひと、繪畫的な點出に於いて一段の妙を發揮した。京傳の讀本は十餘部に過ぎないが、しかしその特質はそのまゝに合巻に利用されてゐるものが多い。京傳の讀本と合巻との關係は、なほその黄表紙と洒落本の關係

に似てゐる。

【滑稽本作者として】 一面畫工であつた京傳は、滑稽本に於て圖案式の妙趣を以て他の追隨を許さぬものがあつた。例へば「奇妙圖彙」の如きがそれである。これ等はその黄表紙の或る物、例へば「多羅實緣起」などと密接な交渉を有つてゐる。また文の趣向が附會によつて活きた「和歌始衣抄」の如き作もあつた。これには一種の考證的態度が濃厚に見られる。

【近世風俗研究家として】 畫工としての京傳は夙に古い風俗畫の鑑賞研究に從事してゐたが、讀本・合巻の制作に心を盡すと共に、その研究の必要を感じ、なほ當時の好學的傾向につれられて近世風俗考證の書を出した。「骨董集」「近世奇跡考」がそれである。考證の緻密と趣味的な筆致は類書中の白眉である。晩年は特にこれ等の著述に親しんでゐた。

【參考】 伊波傳毛乃記(新燕石十種第四)○山東京傳一代記(續燕石十種第二)○江戸作者部類(近古文藝温知叢書第五編)○蜘蛛の絲卷(燕石十種第二)○戯作六家撰(同上第二)○新增補浮世繪類考(日本隨筆大成第二期卷六)○松屋筆記(國書刊行會本第一卷)○戯作者撰集(寫本、帝國圖書館)○明和誌(鼠璞十種第二)○列傳體小說史下卷(水谷不倒)○戯曲小說通史(雙木園主人)○山東京傳(宮武外骨) (山口・小池)

京傳憂世之醉醒 (きやうでんうきよのゑひざめ)

草雙紙 黄表紙 三冊 十五丁十七圖 【作者】山東京傳 【畫工】京傳門人魚毛とあるが、京傳(政演)であらう。【刊行】寛政二年、大和田出店版。再版は榎本屋版で、外題は「京傳浮世之醉醒」【諸本】黄表紙百種(續々帝國文庫)、黄表紙集(近代日本文學大系)所收。

【梗概】江戸中橋の邊に京傳と云ふ者があり、商賣もなく今年二十七歳になる。一角仙人から授かつた仙通丸の通力で、名代の菓子を打出し、深川・品川の色里を探り、芝居、相撲を見廻り、妾を置くなど、日頃の願望を悉く滿足させたが、更に金づくでは出來ない事を思ひ立ち、美しい大名の姫君の乘物の中に忍び入つて立ち出る所を從者の侍に捕へられたが、和尚の詫で坊主にされる。一陣の風に覺めて狐に化されたとわかる。家へ歸れば掛取が詰掛ける。珍菓は中橋のはらぶと、大木戸の牡丹餅の類、遊里は芝三田の安見世、芝居は下谷の乞食芝居、妾は吉田町の夜鷹とわかり、京傳は大悟して清貧に安んじ、心豐かな春を迎へる。

【構想】「一粒萬金談」(後出)の流を酌み、「女嫌變豆男」(後出)の惡戯を遊びに擬變へ、「金々先生榮花夢」「京傳予誌」(各別項)の悟に落してゐる。【史的地位】「浮世榮花一代男」、「魂膽色遊懷男」(各別項)の隱蓑隱笠や豆男の趣向は、本作と同年の「即席耳學問」(後出)となり、「女嫌變豆男」となり、「六通半略巻」(寛政五年版、七珍萬寶作)、「魂膽夢輔譚」(別項)に、その系を引いてゐる。なほ本作は「一粒萬金談」と共に、この本流から別れて、一支流を作つてゐる。

【備考】「一粒萬金談」(天明元年版 朋誠堂喜三二作)六十四郎は、父から分與された一萬兩を細く長く消費しようとし、先づ長生藥の處方を千兩で買ひ、その藥種を調へたところ、一萬兩が千兩不足となり、家屋敷一切が人手に渡り乞食となる。實は親の慈悲から書かれた狂言で、處方も藥種もみな嘘。

「女嫌變豆男」(安永六年版 朋誠堂喜三二作)慾が深くて女嫌の止右衞門は淺草觀音に祈つて五粒の豆を授かり、他の者に魂を入替へる術を知つて、對手の金を奪はんとし、屢々失敗する。相撲取の體に魂を入替へて散々な目に逢ひ、遊女から奪つた五十兩を出して漸く赦される。生物には皆苦があることを知らすための觀世書の御慈悲とわかる。

【即席耳學問】(寛政二年版 市場通笑作)德田屋新右衞門は獨息子を溺愛する。大黒天から隱蓑隱笠を貸與され、諸方を廻つて、生物にはそれぞれの苦があることを知る。家へ歸ると大黒天から倅に學問をさせよとのお告げを蒙る。(小池)

京傳予誌 (きやうでんよし)

洒落本 一冊 【作者】山東京傳 【畫工】同上 【名稱】戯作四書と角書がある。四書註解書の一なる「經典餘師」のもぢり。【刊行】寛政二年【諸本】京傳傑作集(帝國文庫)・洒落本代表作集(近代日本文學大系)所收。【題材】四書の解釋に擬し、大學を大樂ともぢり、「大樂、功者之虛言而兎角入レ慈門也」と洒落れてあるし、中庸を通用ともぢり、「若衆曰無レ錢之謂レ通、不レ追之謂レ用、通者半化之貫乎、用者紋日之出入」と洒落れてあり、論語を豐後ともぢり、「此長義、茶番而時語レ之、不二亦肌觸一乎。有レ隙日待夜來、未二茶飯食一乎。人不レ聞而不レ喜、不二亦樂人一乎」と洒落れ、孟子を申ともぢり、「傾日主不レ違二千里一而來、亦將レ有三以見二讀書一乎」と洒落れてある。通用は質屋の廉の質物の精が現はれて物語る筋で、「吉原楊枝」(別項)に既に古楊枝の情が現はれる着想があり、それ以前に「契國策」(安永五年)、「風流仙女傳」(安永九年)がある(吉原楊枝參照)。豐後は稽古所の描寫で、既に前に「淨瑠璃稽古風流」(安永六年)及び「一向不通替善運」(天明八年)がある。申は大岸屋花衣が情人富士井田鶴吉と情死せんとして、地藏尊に誡められる話であるが、これは明かに天明五年七月九日、旗下藤枝外記(祿四千石)と吉原大菱屋抱遊女綾衣と、彼女の部屋で情死した事實を採つたので、人名もそのもぢりである。

【梗概】大樂、通用、豐後、申の四章に分つてある。大樂は狂文、通用にはやゝ脚色があり、豐後は洒落本の典型たる寫實、申は通用と同じ程度のものである。〔大樂〕つまる所、人生の樂みは女色に在る。しかし更につまる所は金である。では金がなければ樂みは出來ぬかと云ふに、左樣でもない。これを思へば樂みはただ心である。その心の樂みは世の常の俗物には出來難い。されば樂みはその身に應ずる所に存するのだ。〔通用〕爰に雅鏡を烏有といふ者があつた。或る夜不圖枕上に異類異形の怪物あまた現はれた。その頭と思はるゝ物が苦しげな聲して云ふやう、「吾等は質物の精である。世のたはけ共にぶち殺され、傾日の恥をうけ、七ッ屋の藏に沈められ、浮みもやらず流れもあへず逢ふ事はや八ケ月に及んだ。質を置いてうける事なきは、恩を受けて恩を知らざると同じ、この恨みをはらさんには貧乏神の末社となり、かの忘恩の徒の皮肉にわけ入り、長く彼等を苦しめよう云々」と言ふかと思へば、南風に逢つた海月の如くふわりふわりと消え失せた。〔豐後〕豐後節の窟である。さる新道に淨瑠璃の稽古所がある。表札に羅波津野路梅と記してある。今しも年季者二人、一人は伊八で前からの弟子、一人は源介、今日弟子入りをするのである。師匠はお梅と呼ぶ町藝者、早速「老松」を教へる。折柄入り來る紙問屋の手代半六と云ふ上方者、お梅ができるやうな出來ぬやうな事を云つてうまく綾なすので、一心に入れ上げてゐる。話

するうち四つの拍子木に驚き、前の二人は歸る。半六も歸らうとする時、お梅母に知れぬやう、背中を叩く、半六嬉しき思ひ入れで去る。(申)富士井田藝吉、大坪屋遊女花衣と馴染を重ね、遂に心中の覺悟を定め、淺草中田圃で自害せんとする折、石の地藏尊にさとされ、思ひ止まつて、すご〳〵廓へ立ち歸る。【構想】脚色のない狂文を「大乘」に示し、純自然物が現はれて何か說くと云ふ洒落本の形式を「通用」及び「申」で用ひ、洒落本の本格たる寫實を「豐後」で綴つてゐる。多才多方面なる京傳が、洒落本各種の見本を示す意味で書いたものかと推測される。この中最も勝れてゐるのは「豐後」である。【影響】「通用」で質屋の庫の質物の精が現はれる趣向は、曲亭馬琴が讀本「昔語質屋庫」(別項)にこれを襲用し、大和吉野郡六田郷に住む好事屋寶樹の質庫に納めてある龍笛、友切丸、曾我十郎の小袖、諸葛孔明の陣太鼓等の精が物語るといふ筋である。稽古所の描寫は、式亭三馬の「人間萬事虛誕計」(別項)中に稽古所の虛と實の描寫、爲永春水の「花名所懷中暦」(別項)に宮薗節豐浪の稽古所が比較的精細に描かれてゐる。これ等は本書の直接影響とは斷言し得ぬが、同じ系統を引けるものとは云はれよう。他に一筆庵主人作「稽古三味撰」(文化三年)がある。これは全く本書から脫化したもので、文章に所々類似な點が見える。(山崎)

鄉土藝術 きやうどげいじゆつ 【獨】Heimatkunst 【解說】一國の地方的な特異な風土・風物・氣分・習慣等を表現した藝術を云ふが、單に地方の特異性のみを誇張した表現は、特殊の美の關心によつてのみ藝術的興味をつなぐ結果、材料的興味とか好奇に傾く、寧ろ眞の鄉土藝術は廣く民族藝術、即ち國民的藝術的特徵の表現に達する時に、文化史的意義を得るものと云へよう。ロシヤの地方藝術の如きと、新興國チェコ・スロヴァキアの民族藝術運動による藝術とは、現在そこに大きな差異を認め得る。(民俗藝術參照)(村田)

京都叢書 きやうとさうしよ 十四卷(索引二卷)【編者】京都叢書刊行會【刊行】大正三年十一月より六年三月に至る。【解說】江戶時代に於ける京都の地誌・風俗書を集めたもので、「京童」(中川喜雲)「跡追」(同上)「京雀跡追」(北村季吟)、「出來齋京土產」「堀河之水」(宮尾儀軒)、「洛陽名所集」(山本泰順)「京都巡覽集」(舞丈)「近畿歷覽記」(黑川道祐)「扶桑京華志」(松野元敬)「名所都鳥」「京町鑑」(白露)「山城名勝志」(大島武好)「京雀」(淺井了意)「山城名跡巡行志」(釋淨慧)「京城勝覽」(貝原益軒)「都名所車一卷」「京羽二重」「京羽二重織留」「山城名所寺社物語」「洛陽十二社靈驗記」「京都坊目誌首卷索引」(碓井小三郎)「同上京都」(同上)「同下京都」(同上)「都名所圖會」(秋里籬島)「拾遺都名所圖會」(同上)「雍州府志」(黑川道祐)「日次紀事」(同上)索引一卷より成る。(石村)

鄉土舞踊 きやうどぶよう 【名稱】民謠に對し、地方民間の舞踊をいふ。【解說】古く風俗歌、風俗歌舞、風俗舞、土風歌舞と記したものに當るが、風俗の語の古い意味が失はれたため、鄉土藝術等の新語の成立と共に、鄉土舞踊といふやうになつた。(小寺)

鄉土文學 きやうどぶんがく 「文學の制約」を見よ。

京日記 きやうにつき 俳書 一册【編者】池西言水【刊行】撰者の獨吟歌仙の前書に「貞享四年彌生中旬」とあるから、同年中の刊行と推定される。【解說】言水が駒角・湖春・仙庵・淸風・女鼎・如琴・鐵文・秋宵・貞道等と唱和した連句八卷、及び言水の自句合二十五番と獨吟歌仙一卷とを收めてある。編者が嘗に江戶にあつて撰んだ「東日記」(別項)に對して、京都に移り住んだ後の風調を示したもので、その句風は連句・發句共に全く談林の餘弊を脫し、蕉門の「冬の日」「春の日」等よりも却つて一步を先んじてゐる感さへある。試にその自句合から二三を抄出すると、「山茶花に囮鳴く日の夕かな」「草흖して蟬のとりつく鳥居哉」「牛部屋に蠢みる草の螢かな」「百舌鳴いて朝餌かわく木槿哉」等溫雅な作が多く見られる。(潁原)

京人形 きやうにんぎやう 「左甚五郎」を見よ。

京縫鎖帷子 きやうぬひくさりかたびら 浮世草子 四册【作者】森本東烏【刊行】寶永三年仲秋【名稱】自序に依れば、初め「京都女曾我」と題したのを「京縫鎖帷子」と改めて刊行したものである。何れも京都に於ける女の敵討に就いて書かれたものである意を表はしてゐる。【諸本】德川文藝類聚第一(事實小說)所收。【題材】因幡鳥取藩藏所役人大藏彥八郞事、中山傳左衞門が、妻敵宮井傳右衞門を見知れる妹くら、不義の妻の妹ふうを同伴して、寶永三年六月七日、京都堀川の宮井の宅に於いて、傳右衞門を討つた事件を材としたものである。實說は「月堂見聞集」(國書刊行會、近世風俗見聞集一所收)寶永三年六月七日の條に出てゐる。なほ本事實は、「熊谷女編笠」「堀川波鼓」(各別項)の材ともなつてゐる。【梗概】京の吉野屋寶右衞門の次男淸六、容貌勝れ、藝に敏く、小鼓に長じたので、鳥取に下つて宮井傳右衞門と名のつて鼓の指南をしてゐた。同藩有本の邸に六七人の武士集まりたる折、奧村平藏といふもの、宮井傳右衞門と笹部折右衞門妻げんとの不義の噂をしたのを、折右衞門と因みある長尾新六、不問に附し難しと噂の出所を詰問し、且つ平藏自身の不義の噂は世上に隱れなしといひしより爭となつたが、漸く友人の仲裁で事無きを得た。平藏はこの事を含み、新六の邸に入つて果し合うて二人共に死んだが、傳右衞門等の不義の噂もいよ〳〵高くなつたので、傳右衞門はげんと諜し合せ、げんは折を見て逃亡することにして、傳右衞門のみ先に逐電してしまつた。これより先き、折右衞門は江戶在番のため不在になつたので、傳右衞門に留守のことを託しておいた間に、傳右衞門と妻げんとは、不義の仲となつたのであつた。傳右衞門は大阪に出て、笹遣指南をしてゐる伯父の早部源內を賴つた。好色の傳右衞門はこゝでも源內の娘ふさと通じたが、伯父は當世風に幹に辟けて二人を夫婦とした。然るにふさが間もなく病死すると、傳右衞門は又もや或る遊女に深くなり、これを盜み出して京に逃げ、堀川邊に隱れて鼓の師匠をしてゐた。笹部折右衞門は寶永二年の秋江戶より鳥取に歸つた。兼て江戶で噂を聞いてゐた妻不義の件は確實な證據もあつて疑がないので、自ら手に掛けて殺し、妻敵傳右衞門を討つべき決心をした。げんの妹梅は父不慮の死後、叔母の夫、備中の安井金右衞門の許に養はれて十七歲になつてゐた。梅は姉の不義を恥ぢ、且つ傳右衞門を憎んでこれを討たうと備中大守の許可を得、金右衞門の伜金助同道で鳥取に行つた。是迄で妻敵討の門出を遲延してゐた折右衞門も、この時は既に出發の後であつたので、お梅等はその後を追うて、大阪で妻敵討の同伴を求め、共に伏見より京に入り、參宮と稱して宿を求めて、日々敵を穿鑿するうち、ふと折右衞門は知人に逢うて、その口からたぐつて、傳右衞門の堀川の隱家を知り、六月七日の朝、三人同家に踏み込んで、首尾よく傳右衞門を討取つた。

【解說】第一の「正說御前鑑」の章は、この說話の序とも稱すべきもので、その中に「寶永三の六月七日に、或る女姉の敵を討し事、都鄙暴て其沙汰まち〳〵なりといへども、百足蜈蚣の違ありて、本說は九牛が一毛だになし。……されば此書は洛の東烏證據正しきを集、京縫鎖帷子と題し、自これを梓けるを、予聞傳へてこれを求、櫻木に花を咲せ、千歲に傳へたしと請、東烏笑て……總じて詞章に力を盡せば、本意は悉なくなるものなり、只此まゝにて書とせよ、俚言を正し文辭を美する事は、僕が及ぶところにあらず、……予其正說の違ぬ事の嬉しくて、かく梓にちりばむるものなり」とあるのは、本書の性質によく當つてゐる。詞章の見るべきものもなく、又義理、人情の描寫の勝れたものもない。さうして說話の中には、卷一第二章、新六平藏口論のこと、第三章、無實な平藏不義の噂の出所、及び新六の家に忍び入つて互に討ち果したこと、卷三第二章の松島源左衞門書置の寫、第三章、櫻井金彌書置の寫などは、實錄としてならばとにかく、妻敵討說話の一節としては殆ど無用のことである。一言にしていへば、實說に卽し過ぎたのと、作者創作の才の不足とから、「堀川波鼓」や「熊谷女編笠」に比べて、最も拙い作品である。併し恐らく實說には最も近いものであらう。(藤村)

けふの昔 俳諧集 一册【撰者】朱拙【名義】朱拙の序に「誰か知る、往年の是は今年の非となり、今年の非は來年の是とならん事を。春は秋にあらず、きのふはけふの昔なり」とある所から出てゐるのであらう。【諸本】菊舍の「俳諧七部拾遺」(享和二年)に誤つて本書を「初便」と題して收めてゐるが、元祿本と比較すると非常な脫落があり、竄入もあつて信じ難い。大正に至り野田別天樓解題、安井小洒校訂の「蕉門珍書百種」に覆刻された。【解說】卷頭に定家・守武・宗鑑・貞德・貞室・宗因等の發句を掲げ、內に俳話・俳論十六條、芭蕉・洒堂・去來・其角・丈草・嵐雪・乙州・浪化・支考・惟然等蕉門の知名な俳人の發句三百餘句、芭蕉の「十八樓記」「閉關之說」を收め、末に土芳・猿雖より贈られた猿雖亭夜席の歌仙一卷(猿雖・芭蕉・配力・望翠・土芳・卓袋等)を添へてゐる。朱拙が豐後日田の如き邊陬の地にあつて蕉門の俳諧を忠實に研究し、書中揭出の句も秀逸多く、俳諧に對して一隻眼を持つてゐたことが分る。(荻原)

狂俳 きやうはい 雜俳【解說】五文字(別項)と殆ど同樣な冠附の一種。強ひて異なる點をいへば、五文字の附句は殆ど字數に拘泥せず、且つ表裏二樣の意義を含むものであるが、これはほゞ七五調の形式に據り、且つ意味は比較的單純である等である。そして狂俳は濃尾參地方に多く流行したものである。例

今の一番—伜アどうでもわしが去る
明き屋敷—鶴岡の跡で金を掘る
新世帶—釣手にしごきさがつてる (西原)

京羽二重 きやうはぶたへ 俳諧式目 四册(二册本もある。これは四册本の前半のみの行はれるものである【編者】堀江林鴻。林鴻は近江國大津の人、名は重則、桐月堂・雲風子と號した。松永貞德の孫弟宮尾似船の門。【本稱】新撰京羽二重【刊行】元祿四年九月【諸本】俳諧系譜逸話集(俳書大系)所收【解說】元祿四年七月下旬の自敍に、京都の新點者や俳諧師の姓名・居處を明かにし、一人毎にその傑作一句を採つて類編したとあるが、本書に就いて見ると、これは本書の前半のみを云つてゐるものである。第二册の終には信德・和及・言水・晚山・似船・只丸・淸白・冲佐・常牧・好春・方山・蘭水・重德・松春、以上十三家の跋を附し、更に第四册の末には齋藤如泉の漢文跋及び如泉の句を立句とした林鴻・素雲・蕉林・重德・南枝の歌仙表を附し、更に第二册末の跋中の常牧・言水・淸白・似船の同じ跋を再びその儘附してある。(靜峰晋風氏は、第四册末のこれ等四人の跋は追刷の際再錄したものであらうと推してゐる)。本文の前半は、京都の新點者、俳諧師の居所・氏名を記し、一人毎にその發句一句を採つて類編してある。編者のいふ點者とは、點料を以て生活する職業的俳諧師、俳諧師とは、點料に賴らぬ點者或は點業を許されぬ者の謂である。斯くて京都を七區に分ち、その一區毎にその區內の點者それ〳〵の住所並に發句の眞蹟一側づつを模寫し、俳諧師の住所並にそれ〳〵の發句一章を揭げ、更に點者・俳諧師以外の作者で、同一區內に住する者の名錄を附してある。これ等を見ると、當時の俳諧流派の勢力關係を窺ふ事が出來る。卽ち玆に錄された點者の大部分は貞門、俳諧師の大部分は談林に屬する者で、蕉風俳家は數も少く、芭蕉・去來・凡兆の如きが、僅に俳諧師に加へられてゐる位である。編者が貞門の人であることに關係を持つことは否まれないが、又、これを以て當時の流派の京都に於ける勢力關係を測る程度までトすることが出來る(京都以外に就ては、また別に考へねばならぬが)。本書の後半は、最初に貞門道統の略系及び貞德の柿園のことを記し、次に貞門の式目・詞寄、並に作法等を記してある。その式目・詞寄は、賦物・發句切字・手爾於葉・五義・八體に關する解說、夢想・本式の俳諧の心得、句數の事・去嫌の詞寄である。去嫌の詞は、打越・二句・三句・五句・七句に嫌ふ物を、その詞

「京羽二重」(元祿四年版)

十一月森田座）○姿の鐘鋳寺小町（通稱、鬮寺）（小町參照）○梅紅葉二人物狂（大鬮興、常磐津掛合。明和三年十一月中村座）○狂須磨友千鳥（松風參照）○其面影二人椀久（通稱、二人椀久（新））（椀久參照）○狂亂袖井袖（通稱、仲藏狂亂。天明四年十一月桐座）傳存。○狂亂雪吹の鐘形（通稱、鐘助狂亂。寛政十一年十一月市村座）○濱松風戀歌（通稱、濱松風）（松風參照）○七枚續花の姿繪（常磐津掛合。變化物。汐汲）（松風參照）○戀男調松風（通稱、調松風。又は勇次郎汐汲）（松風參照）○狂亂雲井袖（清元掛合。變化物。通稱、枕物狂。文政三年九月中村座）曲のみ傳存。○一奏今様部郡（通稱、今様部郡。又は義經の部郡。文政四年十一月河原崎座）曲のみ傳存。○七小町姿綵（變化物。狂亂の鬮寺）（小町參照）○八重霞賤機帯（通稱、賤機）（別項）○狂亂似媚大和風（文政十二年十一月河原崎座）○亂心花成駒（別名、狂亂雀百迄。常磐津掛合。弘化二年三月中村座）○梅花王鏡猪香頼（別名、廻事四季猿（變化物。通稱、角田川）（隅田川參照）○この外、新しいものとしては坪内逍遙の「お夏狂亂」（常磐津）や、岩田實彥の「文ひろげ」（長唄）等が行はれてゐる。（曾我物參照）　（秋葉）

【參考】劇代集（二代鶴田左交）○近世邦樂年表（長唄・常磐津・富本・清元）○日本歌謠集成（卷九・十一〇・一二）○歌舞伎圖説（守隨憲治・秋葉芳美共編）

狂連歌 きやうれんが　「有心無心連歌」を見よ。

技癢錄 ぎやうろく　隨筆　二卷【著者】南部彝【解説】備後南部伯民の漢文隨筆で、支那の經史・詩文等から會心の事項を引いて、所見を加へたり、又は自己の感想を述べたりしたもの。警道に關する事も多い。卷一に、周秦・紀年・唐詩・清平調詞・詩貴清穿・以賦爲餘・羊角両上・支蘭・治積・時習・醫治未病・素問・醫不可不貴・秋飽黑甜・孟浩然詩・俗諺・和漢通名・黃巴梧・求子方・男子乳汁等、卷二に爲學之道・婁圃莿蟹・赤馬・短鋏・篆印篆・樂量・五幡・少女風・腕犬・騎附・李太白詩・韋蘇州詩・杜審言詩・二句八意・影略・仁齋・東崖・保生術・節色慾・無神光等、各數十條を收む。享和二年藤原輿孝、同三年菅晉帥（茶山）の序、同年關衛の跋がある。【著者小傳】字は伯民、周防の人、儒學を井川淇園に受け、醫を業として名手と稱せられた。歿年未詳。　（和田）

京童 きやうわらべ　名所記　六卷【作者】中川喜雲【名稱】序文に、賢い少年に案内させて都見物するとある。書名は、卽ち案内者の意。

（「京童」插畫（北野天神））

【諸本】流布本に、凡そ三種の版本がある。第一は序に、中川喜雲撰と作者の名あるもので、「明暦四年七月吉日 さはらぎ町通烏丸東へ入町山森六兵衞刊」。これが初版である。第二は年月はその儘で、版も同じだが、序に作者の名が削られて、書肆が八文字屋五兵衞になつてゐる。これが再版。第三はすべて再版通りであるが、書肆だけが平野屋佐兵衞になつてゐる。近世文藝叢書第一のは、再版本である。

【解説】假名草子中には、名所巡り、京内參りなどいふ、道行ぶり又は紀行文は、往々綴込まれてはゐたが、まだ一部と纏まつた名所記は刊行されなかつたが、「京童」が出て、名所記單行の新例が開かれた。この書は京都を中心として、山城一圓に亙る地誌で、卷一・二には内裏を始め洛中の名所を收め、卷三以下に近郊山地の勝地を網羅し、神社佛閣を主としてその由來を述べ、神佛の緣起・傳説までも記し、一勝區ごとに繪を入れて興を添へ、古歌を引き、自詠の狂歌・俳句を記し、又興に乘じて、折句・長歌の類を挿んでゐる。例へば本能寺では南無妙法蓮華經、眞如堂では南無阿彌陀佛の折句を列ね、或は滑稽を弄するなど、頗る遊戲氣分に富んだもの。而して勝地の記敍には、前後の聯絡を缺き、各勝地を手當り次第に記し、これを一つに集めた趣があつて、綱羅上や、散漫を免れず、眞面目な地誌とはいはれぬが、名所記・名所圖會等、爾來行はれた趣味的地誌の先驅として、一機軸を出したものである。一例として、

羅生門

大内裏の時の南門也、猶先の前にて、渡邊の綱と保昌あらそひて鬼平けんと、しるしの札をもて、綱のまかりしも此也、むかし又都良香といふ人、氣はれては風新柳の髮をけづり、といふ句をもとめ、末の句いかゞあらんとあんじける時、此門を通り侍るに、門のうへより、氷きえては波舊苔のひげをあらふとつぎたり、これこゝにすみし鬼神の句なり

むぐら生ひてあれたる門のいにしへは
かりにも鬼のすむくまあひ

槪ねこの類で、緣起傳説等に力を注ぎ、風俗人情を寫すことなどは、疎かになつてゐる。【影響】了意の「東海道名所記」（別項）が、「京童」に刺戟されたかどうかは疑問であるが、名所記の流行は「京童」の影響と言はねばならぬ。喜雲も萬治二年「鎌倉物語」、寛文七年には「京童跡追」を著してゐる。

【參考】古版地誌解題和田萬吉　（水谷）

炬火 きよくわ　俳句集【著者】臼田亞浪【刊行】大正六年四月【内容】大正四年三月より同五年十月までの句集。乙字の嚴選を經たものである。句數二千六十句。卷頭に乙字の序文、亞浪の例言がある。例言に云ふ如く、類別に於て、春夏秋冬の各季間に、新年の外、更に晩春初夏・晩夏初秋・晩秋初冬・晩冬初春の中間季節を挾み、又從來の類別の天文と氣候とは、科學的に見て根柢を等しうするといふ理由から、合せて天象となし、地理の名目も内容にふさはしくないといふので地象と改め、部目の編次を天象・地象・植物・動物・人事としてゐるのは、從來の句集に見ない新し試みである。當時の新復古派たる乙字派の句集で、所謂新傾向（別項）を脱して新しい句境を開かうとする傾向のものである。大正期前期の俳壇に於ける代表的な一句集である。　（志田）

清上 きよかみ　雅樂家【氏姓】阿部、大戸首【別名】良枝宿禰清上【生歿】未詳【閲歴】傳記は殆ど知られてゐない。唯「續日本後紀」に次の三つの記事があるのみである。卽ちその一は、承和元年正月辛未（十九日）、仁明天皇仁壽殿に內宴を催され、敎坊が種々の樂を奏した時に、勅によつて正六位上大戸首清上に

外從五位下を授け給うた。これは清上が橫笛を吹くことを善くするからであるといふ事、その二は、同年十二月乙未（十五日）に、散位外從五位下大戸首清上及び雅樂笙師正六位上同姓朝臣等十三人に良枝宿禰といふ姓を賜うたが、これは安倍氏の枝別であるといふ事、その三は、承和三年閏五月丙子（十九日）に、河内國人遣唐音聲長外從五位下良枝宿禰清上に、本居を改めて右京七條二坊の居を賜はつたといふことである。又「三代實錄」の貞觀七年十月、和邇部太田麿の傳を記した中に、その死のことが次のやうに記してある。それは承和の初めに清上が聘唐使に從つて大唐に入つたが、その歸朝の日に船が逆風に遭ひ、南海の賊地に漂着して、賊のために殺されたといふことである。以上は正史に書いてある記事であるが、樂家の信ずべき記錄には、清上は嵯峨天皇より仁明天皇の頃に亙つて、非常に多くの新作曲をなし、又尾張濱主と共に、殆ど大部分の唐樂の改修を行ひ、當時樂制改革の中心人物であり、且つ橫笛の蘊奥を極め、笛に於ては當時の第一人者であつたといふことが記されて居る。なほ「諸樂書」によれば、清上は笛を瀧浪宮繼に學んで、その蘊奥を極めたとあるが、この宮繼の傳は全く不明である。

【作品】「拾翠樂」（一名拾翠樂）「應天樂」「壹弄樂」（一名萬天樂）「承和樂」（一名冬明樂）「壹團嬌」「左撲樂」「海青樂」（一名海仙樂又清和樂）「清上樂」（一名聖德樂）「感秋樂」の作曲。その他多數の唐樂の改作。

【參考】續日本後紀○敎訓抄○續敎訓抄○體源抄○樂家錄○日本音樂史考（東儀季治）○日本音樂史（田邊尚雄）（日本風俗史講座）　（田邊）

清公 きよきみ　漢學者【姓】菅原朝臣、清公は「きよただ」又は「きよとも」とも訓む。【生歿】光仁帝の寶龜元年に生れ、仁明帝の承和九年（一五〇二）歿す。享年七十三。【家系】野見宿禰の後裔である。

宇庭 ― 秋篠安人
　　 ― 古人 ― 清公 ― 善主
　　　　　　　　　 ― 是善 ― 道眞
　　　　　 ― 清岡
　　　　　 ― 清人
　　 ― 眞仲

【閲歴】家が貧しかつたため、少年時代を辛苦の中に送つた。延暦三年十五歳の時、東宮早良親王に陪從した。この頃桓武帝は、清公の父、古人の侍讀としての功を追賞して、その男四人に衣糧を給して學業を勉めしめられた。その後、文章生に補せられ、續いて秀才に擧げられた。同十七年對策に及第し大學少允となり、次で遣唐判官となつて同二十三年七月（三十五歳）唐に渡つた。德宗の知遇を得たといふ。翌年歸朝、從五位下大學助となるや、官に請うて大學寮内に文章院を設立した。その後尾張介、左京亮、大學頭等を經て式部少輔に任ぜられ、弘仁七年阿波守を兼ね、更に文章博士を兼ねた。同十二年式部大輔、左中辨となる。同十四年彈正大弼、翌天長元年一時播磨權守となつたが、再び召返されて文章博士を兼ねた。同十年（六十四歳）清原夏野と共に「令義解」を撰した。承和二年（六十六歳）紫宸殿に於て後漢書を侍讀、同六年（七十歳）從三位、この頃より老病のため、牛車を許されたが、その後は病に託して次第に參內を絕つに至つた。

【著作】菅家集六卷（菅家後集の菅家集狀に見えて居る。本朝書籍目錄、詩家の條には、是善の菅相公集十卷、道眞の菅家文章十二卷を合して菅家三代集二十八卷と記して居る。今傳はらない）○新定酒式一卷幷序（本朝書籍目錄、政要の條には、式部大輔菅清公撰と見えて居る。式部大輔は弘仁十二年以後である。恐らく弘仁末年の撰であらう。今傳はらない。）○令義解（清原夏野と共に撰す）○なほ「凌雲新集」一卷、「文華秀麗集」三卷、「經國集」（各別項）の撰にも參與した。「凌雲新集」「文華秀麗集」「經國集」等に詩が見え、「經國集」には賦も載つてゐる。

【人物】天性の好學と、嵯峨帝の後援とで刻苦勉勵し、天賦の質を更に琢磨した。性格は仁慈に厚く、尾張介の在任中、決して刑罰を用ひなかつたと云ふ。弘仁九年詔書があつて天下の儀式、男女衣服は悉く唐法に依り、五位以上の位記は改めて漢樣に從ふ事となり、又百官に舞踏を習はせられる事になつた時など何れも清公は顧問の如くこれに關與してゐた。天長元年播磨權守に任ぜらるゝや時人深く憂ひ惜しんだ爲め、翌年八月公卿會議があつて「清公は國の元老なり。遠く離るべからず」と奏して召還せられる事になつた。帝の信任も亦甚だ厚かつた。

【參考】續日本後紀卷十二○公卿補任○扶桑略記卷二十　（山岸）

玉雲齋貞右 ぎよくうんさいていいう　狂歌師【本名】雄崎氏。諱は勝房、通稱尾屋彌兵衞【別號】混沌軒國丸【生歿】享保十九年八月十五日に生れ、寛政二年（二四五〇）二月十四日歿す。享年五十七。【法名】玉雲齋昇譽貞右居士【墓所】大阪逢坂一心寺【閲歷】大阪數屋町の商家に生れ幼名を定丸と云ふ。狂歌を芥河貞佐（別項）に學んで混沌軒國丸と呼び、後師貞佐より、足下の狂歌は貞柳翁の右に出づるものだとて貞右と命名され、又玉雲齋の號は信海の別號を取つて烏丸光胤卿より賜はつたのである。天明年間浪花の狂歌界隆盛の頃は、所謂丸派の祖として原案館初丸・如睛軒虹丸・蜂雄軒蜜丸・三日坊鰹丸・市中庵木丸・五中庵鯉丸等の高足を從へ、その他の門人千三百人を有して、堂々と門戸を張つてゐたので、今もその流れを汲む狂歌師が關西に殘つてゐる。貞右は性温厚で師表として立つ德望があり、その家も亦富裕で狂歌のために財を散じたことも少くなかつた。辭世「一たんは藥に治して而して後にきするも定まる壽命じや」

玉雲齋貞右

【著書】○總葉眞曲歌集　二册（天明六年刊）○狂歌玉雲集　一册（寛政二年刊）○狂歌泰平樂　一册（同四年刊）○狂歌寢覺の花　一册（同上）○狂歌三部集　三册（同六年刊）○狂歌拾葉集　一册（寛政年刊）　（野崎）

玉海 ぎよくかい　「玉葉」を見よ。

玉海集 ぎよくかいしふ　俳諧集　七册【撰者】松永貞德・安原貞室【名義】正式の序に「昆山の光を千尋のそこまでかゞやかせる玉海」とあるやうに、玉海千尋窮映するも漏らるゝ莫しといふ故事から、貞門の俳諧の清く深き事を暗示した義で、昆山に對して玉海と云つたのであらう。【刊行】明曆二年八月【諸本】貞門俳諧集（俳書大系）所收【解説】序跋によると、貞德が生前「昆山」「玉海」といふ二集の撰を企て、「昆山集」（別項）は先づ出來たが、「玉海集」は業半にして歿したので、愛弟子貞室が師の遺言を承け、これを增補大成したの

である。「昆山集」が前集で、「玉海集」は後集に當り、弘く貞門の俳諧を網羅したものである。集中「先師點」と記せる句は貞徳の選句。「點削」と記せるは、貞室の增補したものである。發句二千六百二十餘句。附句五百八十餘句。作者六百五十八人。卷之一より四までは四季の發句を部立にし、五之卷以下は附句であつて、卷五の上卷は四季、卷六の下卷は雜・神祇・釋教・述懷・哀傷付無常・離・賀の部に分ち、卷七に作者次第本國井句數と題して、山城・大和・河內・攝津・伊賀・伊勢・尾張・參河・遠江・駿河・相模・武藏・近江・美濃・出羽・越前・加賀・越中・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・播磨・備前・備中・備後・周防・紀伊・阿波・讃岐・土佐・豐後・肥前・薩摩・國不知等の貞門作者の姓氏・住所を記し、且つ古德（五人）を記してゐる。卷頭に明曆二年三月二十二日池田氏正式序。卷六末に明曆二年孟春穀旦誹諧堂昌易、同年八月一齋軒貞室の跋がある。【價値】撰者が貞德で、それを更に高弟の貞室が增補し、句數も作者も非常に多く集められ、「昆山集」の姉妹篇として編まれたものであるから、貞門俳諧の純正な撰集として代表的な地位を占めるものであることは云ふまでもない。貞德の古參の門人で貞德を離れた立圃（別項）と重頼（別項）の作の出てゐない事や、貞室の俳友でその尊き貞德に就いた正式（別項）が序を書いてゐる事なども、史實研究上參考になることであり、正式の序は、なほ貞德・貞室に關する參考資料を含んでゐる。又集中、作者名の脇に住所姓名の記入されてゐることは、後學に益するところが多く、巻末の作者國分け及び句數も、貞門の勢力の地方的分布を知る上によい參考になる。【參照】俳諧集　七册

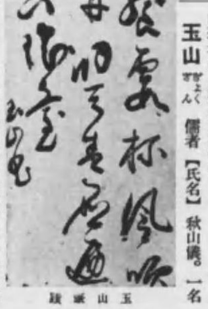
玉海集卷第一
春卷
（玉海集（明暦二年版））

玉海集追加（ぎよくかいしゆうついか）【編者】安原貞室。【刊行】寛文七年。【解說】「玉海集」（別項）の追加で、貞室が「玉海集」の出版後に多大の神益を與へる。

玉函叢說（ぎよくかんそうせつ）【著者】田宮宗武。【解說】宗武が晩年自己を近侍の士に書かせて置いた草稿に就て、その子治寮が修寫せしめたものと云ふ。主として有職故實及び國學語學上の考說で、卷一に令私考、法親王衣體并上童裝束以下七條、卷二に鳥緋考・平文の事以下十二條、卷三に靴の事・牛靴の事・靴帶の事以下十一條、卷四に五十鈴音の辨・假字大本以下十條、卷五に本朝肉食辨・亦食の事以下六條、卷六に、衝重寸法并三方・衝重考以下八條、卷七に雜澁排の歌の論・梅のめで樣に異なる論以下七條、卷八に女子須知といふ書の誤りを正す、むつき問答以下四條を收めてゐる。外に附錄があり、宗武の歌論の問答將實、歌論等を收めてゐる。安永六年丁酉二月二十二日、無名氏の序がある。【和田】

玉吟集（ぎよくぎんしゆう）　隨筆　四卷三册【著者】未詳【刊行】弘化三年。【解說】七冨の談說を集めた知きもので、一貫の主旨は無い。その七冨は、卷一に蜜の月、類城の辨、卷二に易學の辨、仙人の說、卷三に酒茗論、卷四に琴の辨、夜話の三笑である。序者の言に「儒士の筆記は儒に偏し、佛法の談義は佛に涅して、編集博からず。此書や經子百家に渉りて言語卑近を旨とし、よく末學後進に利益ある、問隨筆中の圖説といふべくにや」とあるのは聊か凝笑の嫌があるが、文章の平俗は確かである。天保十四年春關西民の序がある。【和田】

玉山（ぎよくざん）　俳者【氏名】秋山儀。一名


玉山遺跡

定敏。字は子羽。通稱儀右衛門。【生歿】元祿十五年に生れ、寶曆十三年六二四三十二月十一日殁す。享年六十二。【閲歴】父定勝は世々肥後侯に仕へた。玉山は長じて叔父秋山雪庵

の養子となり醫を學んだ。初め屋水足羽山に從つて儒學を受け、後落主に隨つて江戸に至り林鳳岡に就て學ぶこと前後十年、鳳岡その才學を許とした。玉山の國に歸るに及んで從遊する者千人を超え、聘げられて落主の侍讀となり、礫數百石を賜はり、寶曆四年建議して落學時習館を藩本に建て、大に人才の養成に務めた。大正五年四月正五位を贈られた。【著作】玉山詩集六卷の時習館學規一卷【作風】詩及び古文辭に長じ、嘗て富士山に登つて記文三千餘言を作り世に傳誦せられた。その詩を作るや一字一句苟もせず、理かならぬ所があれば忽思して年を累ね、定まつて後始めて人に示した。組山陽の論詩絶句に、「羽檄何及玉山先、野鷺家雞枉抑揚、不解蒼砧鴻雁語、醉吟猶欠白鬚翁」と言つて（玉山と服部南郭（別項）とを比較して、南郭の「墨砧鴻雁」の一聯が、玉山の「秋士關關雁太白」美人纖上織、流黄」の一聯に勝るとは思はれぬといふ意。南郭は芝の赤羽橋に住んでゐたから羽檄といつた）當時南郭を壓かした南郭を斥けて玉山の方に軍配を擧げてゐる。（佐久）

曲山人（きよくさんじん）　人情本作者【本名】未詳【別號】司馬山人、三文舍自樂。書家としては筑波仙橋。【閲歴】傳記は略ぼ明かにし難い。【娘太平記操之草引】（別項）の初篇は彼の執筆で、二篇以下は彼の死により、松亭金水（別項）が執筆補遺してゐるが、その二篇の序文に、「吾友なる曲山人、別名を三文舍自樂といふ。性來筆道に巧にして、文をよくし、書を能くす。且世間の人情に渉りて常に遠行の書を著し、其名をさ〳〵聞えたりしに、憎哉殺故して云々」と記されてゐる。これは天保八年の正月の序である故、その殁年は天保七年頃かと思はれる。而して初篇には曲山人が「すみだ川數月庵の窓下に筆を採つて」とあり「娘太平記操之草引」第三齣に叙して、「ここに筑波仙橋子は、文筆の道に賢くて、弱冠より文字を能くせり。さればその譽れ四方に聞えて、書賈千里の遠きを厭はず、競ひて書をとひて上梓にす。また其の暇ある時は、戯墨を好んで、和漢の故事、或は人の線の振を取合はして、見戯の册子を綴るものから、人もて是れを珍奇となし、やゝ其の名を喜しく云々」とある。故に本職は書家であるらしく、且つ自ら挿繪をも執筆したのである。然しその筆續から見ると時は人情本作家と見るべきである。即ち爲永春水（別項）によつて創始せられた人情本を大成し、普及せしめ、殊に「假名文章娘節用」（別項）の作を遺してゐる。不幸にして短命であつたため、作品數は少いが、作家としての質に於ては確かに爲永春水よりも優れてゐたと思はれる。著作は前記の外、「人情女大學」（前篇文政十二年、後篇天保元年）がある。【小説】

玉樹後庭花（ぎよくじゅこうていか）　雅樂舞曲【異稱】「玉樹曲子」「陳宮怨」（樂家錄）には別名として、「金釵兩臂垂」「寶裝羽衣」等の名を擧げてあるが、「文獻通考」によると、「玉樹後庭花」「金釵兩臂垂」と「寶裝羽衣」とは別曲であるとしてある。「壹越盤渉調」。【性質】唐樂。新樂の中曲、壹越調曲に屬す。曲は八帖より成り女舞があつたが、舞は今は全く絶えた。樂も亦完全に傳はつてはゐない。番舞は無い

ともいひ、又綾切を用ひた事もある。【沿革】南北朝の時、陳の後主の作るところで、支那史上極めて有名な曲である。「通典」巻百四十五の雜歌曲の中に、「玉樹後庭花」「堂堂黄鵠留」「金釵兩臂垂」は并びに陳の後主の造るところ、恒に宮女學士及び朝臣と與に相唱和して詩を賦す。太樂令何胥、その最も輕艷なる者を採つて以てこの曲を爲すと記してある。「北夢瑣言」巻三十二に、「太宗の間に對して御史大夫杜淹對へて曰く、前代の興亡實に樂に由る。陳の將に亡びんとするや玉樹後庭花を爲り、齊の將に亡びんとするや伴侶曲を爲す。行路之を聞いて悲泣せざるは莫し。所謂亡國の音なり」と述べてある。我が國に傳へられたのは何時頃か明かでないが、仁明天皇の頃らしい。「敎訓抄」には、「承和遣唐使歸生、件歸朝之間此樂忘れたりければ、又つかはして此朝には習ひとゞめたり」とある。平安朝の間には屢々行はれたが、その後舞は絶えた。【目連】

曲翠（きよくすい）　俳人【本名】菅沼定常。通稱外記【號】はじめ曲水と記し、元祿六年頃から曲翠と記すやうになつた。別號、馬指堂【生歿】生年未詳。享保二年七月二十日殁。【家系】父は定澄といふ。曲翠には竹助・桀といふ子があつたらしい（芭蕉書簡）。竹助は内記の幼名であらうか。寐は孫助して破鐵尼と云ひ、和歌を能くし、筑紫箏の名手であつたといふ。同藩士で同じ芭蕉門の水田正秀は伯父に當る。【師傳】芭蕉門【閲歴】江州膳所本多侯の臣。側用人と云ふ。作句は貞享四年の「雜虚栗」から見えるので、芭蕉に入門したのはその頃からであらうか。芭蕉殁後の享保二年（五年とする說は誤）に、その同僚會我權太夫といふ奸臣が、君寵に驕つて國政を亂したので、竊かに己が家に呼び寄せ、惡事を諫責して殺害し、己れも亦自殺した。そのため嗣子内記も死を賜はり、一家斷絶した。後年その至忠が顯れ、本多家でその家を取立てようとして探したが、跡がなかつたといふ事である。【人物】一身一家を犧牲にして奸臣を誅したといふのだから、忠誠剛毅な人物であつたらしく、芭蕉は既に「勇士振沼氏曲水子」（幻住庵記）と云つてゐる。芭蕉は前後度々曲翠に文通してゐるが、その中、元祿五年（推定）二月十八日に認つた長文の書簡は、風雅の三等を說いたもので、後に蝶夢によつて「芭蕉翁三等之文」と命じて書肆の上梓出版され、有名になつてゐるものであるが、この三等中最上位の等級の風雅に屬する者は、「わづかに都鄙かぞへて十ヲの指をふさず。君も則十ヲの指たるべし」と推稱されてゐる。されば一介の武弁ではなく、俳道に於ても貳面目な作者であり、又芭蕉に對しても、幻住庵の提供と共に忠實な道門者であつたことが知られる。【備考】近江膳土史研究者の說によると、父定澄の兄菅沼修理定知は、法名幻住宗仁居士と云つたが、晩年國分山八幡宮の傍に草庵を構へてゐた。芭蕉の「幻住庵記」に記す幻住庵はこれで、曲翠が修理して芭蕉を栖ましめたのである。なほ曲翠は、芭蕉の再度の入庵を期してか、芭蕉の出庵した後も、修理したらしく、膳所の鬱棒といふ者が預つて住んでゐた。【參考】幻住庵記　松尾芭蕉○花見車　高島輔一○芭蕉翁三等之文（曲翠宛）○俳諧一葉集　滑稽之卷）

旭荘（きょくそう）　漢詩人【氏名】廣瀬謙。字は吉甫。通称謙吉【別號】秋村・梅墅。文政先生と謚す【生没】文化四年五月十七日巳後の日田に生れ、文久三年二月二十三日歿す。享年五十七。【閲歴】文政六年十七歳の時、筑前の亀井昭陽の門に入り、檜島石蘂・菅茶山と交遊し、天保二年兄淡窓（別項）に代つてその家塾咸宜園を管し、後、東西に移居すること數回、晩年居を大阪に卜して教授を業とした。大正十三年二月従五位を贈られた。【著作】梅墅詩鈔十五巻【詩風】清の大儒翁覃溪は、「東瀛詩選」を編して、我が邦の詩人の作を選錄したが、その中で、一人で一巻を占めてゐるのは、服部南郭・菅茶山・梁川星巌（各別項）・市河寛斎・舟は頼の讃ぢあらう。六如（各別項）の四人で、一人で二巻を占めてゐるのは旭荘一人のみである。且つ彼の詩を激賞して「其の詩才氣横溢、變幻百出、長篇大作は五花八陣の奇を縦む。而も片言單語又斬永味ふべし。總研學人宜備讀熟すらく、其の構思泉の湧が若く、その口吻に發し筆端に上るに及んでは、馬の疾に注ぐが若く雲の空に翔りて風の葉を巻くが若く、多しと雖も蔓ならず、長しと雖も冗ならずと。抑に其の詩を知る者なり。吉甫愚物を擯斥して仕途に入らず。親む所は則ち墨客騒人、好む所は則ち江山風月、宜なりその東國詩人の冠たるや。」と言つた。【佐久】

旭荘筆蹟

曲亭傳奇花叙見（きょくていでんきはなのじょけん）　讀本二巻【作者】曲亭馬琴【挿畫】歌川豊國【名義】支那の傳奇の體に擬したもの、一名を「彼我合葬曲」ともいふ。【刊行】享和四年。【梗概】足利義輝は神崎の名妓桂見と契り、他日迎へ取る證據の花簪を持ち歸るが、途中これを失ひ、證據三好長慶・松永久秀に適する名波武紋の娘玉笛の手に渡る。後義輝は桂見を迎へんとし、證據の品なきを以て拒まれるので、近臣伊勢十郎、桂見を疎ね、相似たる玉笛をそれと見違へて連れ歸るが、管領細川勝元は、その玉笛なるを知つて首を刎ね武政を自滅させ、士氣を鼓舞して三好・松永の亂を鎮めた。かくて桂見は前將軍の功臣大館晴光の娘である事がわかり、玉笛と名を改めて義輝の室となつた。【解説】足利義輝に關する史實により、變亂の間に義輝と桂見との戀愛談を描いてゐるが、その構想は單純で、男女の色情を理外の幻境だとしてゐる事など後年の讀本に現はれてゐるその主要と併せ考へて注目される。併し、作者は主として力を形式に注ぎ、中本二册、元禄に做つて、生むし 粉いたら 足利義輝、且や 扮いでたら 舞妓桂見等とし、五齣に分ち、花信風 柔生大ぢいづる 等と註して彼我を對照させ、意匠を凝してゐる。馬琴も後来に評論を附して、これを「作者一番の藤蔓也」と言つてゐる。【書誌】見世物雑誌○江戸見草○小歌志彙集○能楽評判記目錄○浮塵子外題いろは分○尾陽名蹟年中行事○どいつふし根元集○俗の統に「古今句鑑」に俳諧類句辨」等がある。【前田】

曲亭傳奇花叙見上集　東都　曲亭馬琴編次

玉晃（ぎょくこう）　儒文家【氏名】小寺廣路。通稱九右衛門。字は好古【別號】蓬蔵亭・蟠學舎・珍文館・東杉舎【生没】寛政十二年に生れ、明治十一年九月二十六日歿す。享年七十九。【墓所】名古屋市覺王町安養寺【閲歴】尾州藩の儒臣。初め野呂家、後高橋家に仕へ、嘗を養高雅に、香道を紹智宗寂に學ぶ。名古屋の風俗に精しく、これに關した著述が尠くない。【著書】

玉葉（ぎょくよう）　日記　三巻【著者】藤原兼實【名義】世に「玉海」の名で知られてゐるが、これは後の名で、「玉葉」が原名である。一條家・九條家の藏本は「玉葉」と題してあり、ただ二條家の傳寫本には「玉海」としてあるが、二條家は是利時代に世に重んぜられたので、「玉海」の名も、それで世に廣まつたものであらう。伊藤東涯の「紫陽譜」には、「玉葉」は、藤原忠通の日記を「玉林」と言つたのに因んだもので、二條關白良基が新寫して「玉海」と改めたのだとある。【諸本】流布本の

外、九條家傳存古鈔本五十册、二條家所傳玉海二百二十册目錄十册、祕閣本六十八册、帝國圖書館本九十一册、柳原伯爵藏本五十册等がある。活版本では國書刊行會本がある。刊行會本は、もと管學會院で、祕閣本を底本として、前田家本その他の異本に據つて校正し、更に九條家所藏の古鈔本と參照し、時に世に出さんとして果さなかつたものを訂正したもので、完本に近いと謂はれてゐる。【内容】長寛二年から正治二年に至る三十七年間の日記で、國書刊行會本によつて解説すると、第一巻は、長寛二年から安元二年まで、第二巻は、安元三年から壽永二年まで、第三巻は、壽永三年から正治二年までを載せてある。また、「建久別記」（建久元年十二月二十六日記）は、九條家古鈔本になく、愛宕の讃記では無いとの説があるものであるが、その年次の條に附載して讀者の取捨にまかす旨が記してある。また第一巻の巻頭には、九條家古鈔本の摹影一葉、及び愛宕公請を掲げ、第二巻の巻頭には、九條公爵家藏幅の愛宕の肖像が載せてある。【價値】この日記に採れる記事は、二條・六條・高倉・安德・後鳥羽・土御門六帝の間に亘り、平家の盛衰、細朝・義仲の擧兵、鎌倉幕府の創設等、史上大變亂の際に當り、しかも秘賞が重要の位置に在つて見聞した所を詳記したものであるから、その史學研究上、又有職講究上、重要の資料であるのは言ふまでもなく、「吾妻鏡」「平家物語」「源平盛衰記」等の史實の誤脱を糺すに足るものである。星野恒博士の批評にも「本書時事に於て、大となく小となく悉曲記述して、遺漏永く墨證止まず、諸家の記錄中に在りて實に異樣特色とす。況や其の人質にして重職に居り、又變亂の際に當り、記する所の文と事と皆尋常唐人見筆の及ぶ所に非ざれば、其の貴重必須の材料たるは固より言を待たず。加之通篇缺巻少く首尾實穿本末具備す。これを記錄中第一と稱するも、決して失當に非ざるべし。」とある。

【參考】國書刊行會本例言○歴世記錄考○星野恒

九條家本【玉葉】奥書

玉葉和歌集（ぎょくようわかしゅう）　歌集　二十巻【撰者】藤原爲家【成立】花園天皇御宇、正和元年（一九七二）三月二十八日に成る（奥書）。「拾芥抄」「勅撰次第」二本には、二十九日とある。なほ「勅撰次第」には、正和三年三月十九日、爲家三十三回忌、從三位源親子三十二回、西園寺實氏二十九回、貫之二十六回、人麿二十五回、慈鎮二十一回、宗尊親王・基忠各二十回、朝恒十六首、後伏見院・式子内親王・家隆・爲氏各十五首等で、僧侶・定家・爲家と家祖の歌を多く撰入した點を除けば、伏見院・後三位爲子（永福門院に降すこと實家・永福門院（伏見天皇の后、實俊の女）等、所謂持明院統に關係深きものを多く撰入して居り、二條家の人々のは、爲氏十五首、爲世八首、爲藤五首、爲定・定藤法印各一首の如く尠く、また爲家の撰した「新後撰集」に多くの歌を入れたところの、爲氏・亀山院・後宇多院・後三條院・國助・家良・道玄・爲世・爲氏・性助法親王等は、それ〳〵本集に入ること少く、彼の集に入ること比較的夥かつた持明院統の人々、京極・冷泉家の人々及び新古今歌人の歌を取ること多きは顯著である。これ兩統の氣運を背景とし、京極家が二條家に對して積極的に獨自の歌風を揚げ示したものと解すべく、又その流風が優美華麗なる新古今風を好んだ一面をも示すものであらう。又、貫之・人麿等を始め、「金葉集」以前の作者の歌を收めた點も、「新後撰集」の場合と異なつてゐる。【解説】從來二條家にてほぼ獨占した勅撰集の歌風と異なるものがあり、種々の批評がある。「增鏡」（うら千鳥）には、當時の評として、「限りなき院の御おぼえ人にて、かく（玉葉が）撰者にも定まりにけり。それも人々多かりしかど、さはらむやは。この院のう〳〵好みよませ給ふ御歌のすがたは、前泰大納言爲世の心地にはかはりてなむありける」と見え、伏見院が特に御好意をもたれた歌風であるとし、爲世の歌風と異なることを指示してゐる。集の成れるより三年後、正和四年八月、爲世派の人々は、「歌苑連署事書」一巻（別項）を奏はして、「玉葉」といふ題名を疑に、集中の三十七首を拔きて「狂じたる體」「狂歌」「下品の歌」「ただ詞にて物をいひたらむやうなり。歌とは

いひがたし」など、謂はゆる爲兼の「今やう姿」を難じ、更に、「續後拾遺集」(別項)の成れる正中二年の翌年嘉暦元年には、爲世は、「和歌庭訓抄」一卷を著はして、極力、爲兼の新風を毀した。二條家の人々は、「雨中吟」の中に、本集中の「そよ暮れぬ楢の木葉に」(玉葉十五、實家の歌)「峯の雲霧の靡も」(玉葉五、同上)の二首を擧げて、かゝる風體の歌あるは、歌道のすたるべき世だと評するに至つた。しかし、爲兼等の歌は、自由闊達で、格調複雜、淸新の趣があり、新古今のおもかげを、再びこゝに出した點など、十分に二條家歌風と對抗し得る理由をもつてゐた。花山院は、この歌風を慕はれ、その「宸記」に、「伏見院並爲兼卿所レ立之義、寔是正義也、世人不レ知レ之云々」と記されてある。爲兼は本集成つて三年、正和四年六十三歲にして再び土佐に配流された。降つて、三光院は、「集のうちに風體わろきは風雅集、歌のわろきは玉葉集云々」と評せられたと傳へ(詳書二雙)、本居宣長も「玉葉」「風雅」の風惡しと云つた。けれども「新勅撰集」以來の勅撰集の單調をやぶり、また風雅の一集を嗣ぎ起らしめた點、集の成立が政治上の軋轢と深い交渉をもつ點など、特殊の地位を有する集である。なほ本居宣長の「美濃の家苞折添」中卷に、本集の歌二十首を抜き評註を加へてゐる。

【參考】續玉葉集(寫) 松平定信 ○自得和歌集 ○歷代和歌勅撰考卷四○國歌大系第六卷解題　(松浦)

玉嶺叢談 ぎよくれいそうだん　隨筆　四卷【著者】納街堅。字は實好、玉嶺はその號、備前義明の人、傳未詳。【刊行】文政三年の序がある。その頃の刊行であらう。【解說】廣く和漢の故事・古語・古諺等を多くの史籍より引いて評釋を加へ、學生博識の資としようとしたもので、詩歌を紹介し史蹟を考說する事も少くなく、概ね教訓の意を寓してゐる。卷一に大織冠之事以下二十二條、卷二に朝封之事以下四十六條、卷三に臨錫之事以下四十一條、卷四に寒鈴之事以下四十三條を收めてゐる。　(和田)

居行子 きよかうし　隨筆　正編後編新話各五卷【著者】西村遠里【刊行】安永四年より八年に至る。【解說】一般庶民のために、知識を擴め修養に資する事を旨とした論辨數十篇を輯めたものである。正編卷一に人相の辨、天狗の辨、醫ことば、易學の辨、仙人の辨。卷二に長生の辨、形勢の辨、宜加の辨、まどの月、傾城の辨。卷三に儒者の說、犬莊子、酒茗論。卷四に花見のことば、雷の說、地震の說、溫泉の說、物產の辨、龍宮の說。卷五に俗文鬼神論、奢の辨、夜話の三笑を收め、後編卷一に鬼門之辨、上代末世の辨、俗文說雜之說、老之坂。卷二に淨瑠璃三絃之說、蠻方古學後世之辨、一角木乃伊之說、正五九七夕之說。卷三に一寸向者晴衣之辨、一七日之說、痘瘡之說、嫂の瞞瞞。卷四に佛神時勢之盛衰、向風之辨、妖怪之說、戲場之濫觴。卷五に抄に追付貧乏なし之辨、年號改元留入梅之說、損料借之辨、欲物語を收め、新話(第三編)卷一に徒然草諸注之話、天地之終の話、和漢國初之話、月體中黑影の話。卷二に理學曆象天學之話、桃花源記之話、山海經の話、實永山之話、雪日之話。卷三に老人狂歌六首の話、大峯詣之話、七寶之話。卷四に人之呼吸の話、人丸赤人の話、小町之話、儒釋道差別之話、知命之話、大地圓體の話。卷五に虎鶴子之話、富士湖水之話、運氣之辨を收めてゐる。正編は明和九年岡本隆の序があつて、安永四年の刊行、後編は安永五年の自序があつて同八年の刊行、新話は天明五年檢齋主人の序があつて同年の刊行にかゝる。【著者小傳】西村遠里は京都の和學者で居行子と號した。儒釋二道に通じ、また星學・曆術にも達してゐた。本書中に、外國の地理・物產等に關する說話も見受けられ、殊に大地圓體の談など、時流に超越した識見を見るに足る。歿年未詳。本書の外に、「雨中問答」「數度宵談」等の著述がある。　(和田)

淸澤滿之 きよざはまんし　評論家【生歿】文久三年六月二十六日名古屋市黑門町に生れ、明治三十六年六月六日歿す。享年四十一。【閲歷】父は德永永則、母はたき。幼名は滿之助、初め醫學に志し、本派本願寺別院の醫學校に學んだ。當時尾張にゐた東本願寺の學者點華空書の勸めで、十六歲の春佛門に入るに決し、大谷本願寺で得度、名を賢了と改め、育英教校に學んだ。明治十四年、十九歲の十一月、本願寺より選ばれて東上、大學豫備門に入り、二十一歲の時帝國大學文科大學に進み、同二十年七月その哲學科を卒業した。後、更に大學院に入つて宗教哲學を專攻し、傍ら第一高等學校及び哲學館に教鞭を執つた。翌年夫人やす子を迎へたが、この前後に、佛教・哲學に關する二三の論文を發表した。同年春、東本願寺の招きによつて入洛、京都府尋常中學校長の職に就き、傍ら高倉大學寮に哲學を講じ、この歲、三河國大濱西方寺に入つて淸澤の姓を冒した。同二十二年、二十七歲の時「純正哲學」を著した。翌二十三年は滿之に取つて精神上の一轉期を劃した時代で、中學校長を辭して著述に沒頭し、「信願要義」「願生偈」等の著があつた。同二十七年肺を病み、屢々喀血した爲め京を去つて、須磨舞子に療養した。この時代に「保養在記」「病床懺悔錄」等の著がある。その後二十八年、雜誌「無盡燈」を發行、二十九年、更に「教界時言」を刊行し、これによつて東本願寺の革新を企てた。同志に今川覺神・稻葉昌丸、その他諸氏あり。滿之が洛北白河に居を構へてゐたので白河黨と稱された。それは本願寺が門徒の財を集むるにのみ汲々として、布教・勸學を顧みず、親鸞の精神は蕩然として沒し去らんとするを見るに堪へず、壯年の熱情を以て革新を叫んだのであるが、その主張は多數の僧侶・門徒の共鳴を得たので、當時の本願寺の内閣も遂に崩壞せざるを得なかつた。爾後彼は、講演・著述に力を注いでゐたが、三十二年、東本願寺新法主が東京に赴く際、その指導の任を託せられて上京、翌年本郷森川町の寓居を浩々洞と稱し、二三の門弟子と共に、雜誌「精神界」を發行し、精神主義を唱道した。同年十月、眞宗大學の東京に移轉するや、推されてその學監となつた。同三十五年十一月、病の故を以て職を辭し、三河の大濱に退いて療養の日を送つたが、翌年遂に歿した。辭世「血をはきて病の牀にほとゝぎす」。

【業績】滿之の本領は、精神主義にあつた。精神主義とは、人間の幸福が環境や物質的設備を改造する事によつて得られず、一に自己の精神開展に基くことを主張するにある。その精神開展に當つて、萬物一體の原理を信じ、且つパンの問題に心を煩はさぬやうに爲すべきであるとした。滿之の主張は、單に宗教界の人々を動かしたのみならず、物質萬能主義に心醉して、他を顧みるところなき人々に對する痛烈なる警告となつて、「精神界」は佛教徒は勿論、佛門外の青年層にも愛讀された。淸楚で熱情に溢れたその文章が、獨特な風格で人に迫つたためもある。門下に、佐々木月樵・曉烏敏・多田鼎などの逸足あり、その流風は、今もなほ眞宗學徒の間に殘つてゐる。彼は大なる業績を殘した以上に、人格において感化を與へたところが多大であつた。【著書】單行本として「精神主義」「精神講話」「佛教講話」「懺悔錄」「修養時感」等の外、安藤州一編「淸澤先生信仰座談」がある。なほ「淸澤全集」(大正十二年、無我山房)、「淸澤滿之文集」(岩波文庫)があり、別に傳記としては「淸澤滿之」([illegible]社)が出た。　(高須)

虛子 きよし　俳人・小說家【本名】高濱淸【流派】日本派子規門【出生】明治七年二月二十二日、愛媛縣松山市に生る。【閲歷】池内庄四郎の末子で、祖母の家系を嗣いで高濱姓を名乘つた。明治二十四年松山中學在學中、河東碧梧桐を介して正岡子規と知り、勸められて俳句を作り、遙かに東京なる子規の教を受けるやうになつた。二十五年中學を卒へて京都高等中學校に入り、二十七年同校解散後、碧梧桐と共に仙臺高等學校に轉じたが、同年又共に退學して上京、親しく子規に就くに至り、相携へて文學並に俳句の研究に專念し、殊に俳壇革新の業には、子規を助けて盡すところ多かつた。子規は當時、日本新聞社員として、常にその紙上に俳句俳話を發表してゐたが、虛子も明治二十九年から雜誌「日本人」に俳話を連載し、後纏めて「俳句入門」と題して三十一年四月に刊行した。これが虛子の第一の著述である。三十年一月、松山市から柳原極堂の手によつて雜誌「ホトヽギス」(別項)が創刊され、子規を始め鳴雪・飄亭・虛子・碧梧桐等皆これを援けて、翌年の八月、二十號まで刊行したが、遂に廢刊の止むなきに至つたので、同十月虛子はこれを引繼いで、東京で發行した。爾來今日まで主宰經營をつゞけてゐるが、新俳句革新の事業は、新聞「日本」と、この雜誌「ホトヽギス」との二つによつて成就されたといつてもいゝ。日本派といひ、ホトヽギス派といはれるのも、一にこれに據るものに外ならない。その頭目ともいふべきは無論子規であつたが、子規が三十五年九月病歿してからは、名實共に「ホトヽギス」は虛子の主宰するところとなつた。四十年前後から、俳壇に新傾向(別項)運動が起り、一時俳壇を

高濱虛子

席捲するほどの勢力であつたが、當時虛子は漸く俳句と遠ざかり、專ら寫生文に沒頭し、小說の諸作に從事してゐた。寫生文はもと〳〵子規と共に、その創始に協力したのであるが、やがて夏目漱石と親近するに至つて、更に、小說にまで力を伸ばして行つた。國民新聞社に入つて、國民文學欄を擔當したのもこの頃で、四十一年十月から約二年間に亙つた。同じく擔當してゐた國民俳句欄は、これを松根東洋城に代らせるといふ風で、一時は全く俳句を忘れたかの觀があつたが、明治が大正と變る前後から、又再び俳壇に戾つて、專ら「ホトヽギス」に據つて新傾向に對峙するに至つた。かくて大正年間の前半は主としてその勢力の挽回に努め、門下の指導誘掖に當つてゐたが、その功漸く成つた結果として現はれたものが、大正七年十月に刊行された「進むべき俳句の道」の著である。これは進むべき俳句の道を說き、その門下の有力な作家等を評論したもので、以後大正の後半は、益々その流風の普及擴張を加へて行つて昭和に入つた。

【業績】主張とするところは子規の紹述で、主として客觀寫生を唱道してゐるが、近時、花鳥諷詠論なるものを揭げて「少くとも今日以後の俳句はさういふ標識の下に進むべきものだ」と唱へ、あるがまゝに自然を觀照すべき所以の道を指示した。要するに客觀寫生論の延長に外ならないものであるが、これを俳句の內容的方面に關するこの派の主張とすれば、同じ頃發表した「古壺新酒論」なるものは、俳句の形式的方面に關する意見を明かにしたものである。つまり自由律を主張するものに對して、俳句の十七字といふ定型律を把持すべき所以を說き、古き壺なほ新たなる酒を容るるに毫も適しないものでないことを明かにしたのである。なほ一方連句に於ては、明治三十七年九月、「ホトヽギス」誌上に「連句論」を發表し、子規以來非文學なりとして排斥され來つた連句を又一種の文學なりと說いたが、鳴雪・碧梧桐はこれを反駁した。虛子は續いて「俳體詩論」なるものを發表し、漱石これに贊同し、しきりに俳體詩の創作を試みた。又寫生文から進んで行つた虛子の小說は、いふまでもなくその描寫法に一種淸新な特色をもつてゐるものであるが、寫生文に對してはより多く小說であり、小說に對してはより多く寫生文であるといはれ、漱石はこれに低徊趣味(別項)なる稱を與へた。作品としては「俳諧師」の代表作から、「朝鮮」「柿二つ」と長篇にまで進んで行つたが、俳句運動に復歸すると共に、次第に小說に筆を絶ち、「ホトヽギス」誌上に戾つて寫生文の短篇をものするにとゞまるといふやうな現在に至つた。文章も年を追うて枯淡に赴き、老熟を示すといふものの、多くは內容外形共に潑剌たる生氣を失ひつゝあるかの觀がある。

【著作】(俳句)俳句入門○虛子句集○俳諧馬の糞○虛子選雜詠選集(各別項)○俳諧一口噺○俳句の大道○ホトヽギス雜詠集○進むべき俳句の道○現代俳句評釋(寫生文集・文集)寸紅集 子規共編(別項)○寒玉集○寫生文集○帆立貝 四方太共編(別項)○新寫生文(別項)○虛子小品○十五代將軍(別項)○道○二三片(小說集)○俳諧師(別項)○續俳諧師○雞頭(別項)○凡人○朝鮮(別項)○柿二つ(別項)○お丁と○風流懺法(別項)　(島田)

虛字解 きよじかい　語學書　二卷【著者】皆川淇園【刊行】寛政四年【解說】漢字の虛字(實字及び助字以外の字、即ち動詞又は形容詞として用ひらるゝもの)を五十音順に類別して、註解を加へたもの。爾・用・音等に始まり、噫・私等に終る。その說は盡く信ずべからざるも、字義を精確に研究する風を開いた功績は偉とするに足る。【附記】別に「虛字詳解」と題するものが十五卷ある。　(佐久)

虛子句集 きよしくしふ　俳句集【著者】高濱虛子【刊行】昭和三年六月【內容】虛子の自選に係る句集で、明治二十五六年頃から昭和三年に至る全作句の中から、約二千五百句を選び、季題別にしたものである。即ち虛子の句作に入つた當初から最近に至るまでの作風の全容を窺ひ得るもので、日本派が天明諸家

に傾倒した明治三十年頃、虛子が清新闊敏を以て稱せられた頃の作風、大正の初め頃、碧梧桐の新傾向に對峙した頃の作風、近く客觀寫生を唱道するに至つた以來の作風等を窺ふことが出來る。【附記】外に大正四年十月に刊行された「虛子句集」がある。これは虛子の自選から渡邊水巴が選拔したものである。昭和三年の句集は、その後の時期にも渉つて更に選び直したものである。（水原）

清重 きよしげ　幸若舞曲（三十六番の一）一卷【成立】室町期【諸本】寛永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に所收。【解說】判官物、武勇傳說。義經の臣、伊勢三郎義盛・駿河次郎清重の兩名、山伏姿で奧州關東の諸大名を說いて味方にせんため廻文を携へて高館を發したが、途に分れた後、清重は鎌倉片瀨川の邊で梶原景季に怪しまれ、笈に隱した御判を燒いて力戰自刄し、清重梟首の由を耳にした義盛も赤鎌倉方に擒まれ、これも御判を破つた後奮鬪切腹した。謠曲「清重」と同材。義盛は史實では義經都落の際、郷里伊勢に歸り守護首藤經俊と戰つて鈴鹿山で自殺した事になつてゐるが、傳說では奧州落に從つてゐる。（島津）

虛子選雜詠選集 きよしせんざつえいせんしふ　俳句集【編者】高濱虛子【刊行】第一集昭和三年三月、第二集昭和三年六月實業之日本社【內容】虛子の選によつて雜誌「ホトヽギス」に掲載された俳句雜詠を、更に虛子が嚴選したものである。初め同誌第十二卷第一號から第十號に至る雜詠及び第十五卷第十號から第十八卷第六號に至る雜詠から選拔して大正四年十月に「雜詠集」が發行され、次で第十八卷第七號から第二十一卷第十二號に至る雜詠から選拔して、同十一年九月に「雜詠選集」が發行されたが、昭和三年に至つて、以上の兩集を合併して一集としたものが、第一集なのである。これは雜誌が客觀寫生からやゝ主觀的にならうとする頃の作を蒐めたもので、季題は新曆によつて配列されてゐる。主なる作者は、鬼城・水巴・石鼎・普羅・月舟・泊雲・泊月・蛇笏・元・たけし等である。第二集は、「ホトヽギス」第二十二卷第一號から第二十四卷第十二號に至る雜詠から選拔されたもので、客觀寫生の技が漸く熟し來つた頃の作が蒐められてゐる。主なる作者は、泊雲・蛇笏・元・たけし・橙黃子・草城等である。（水原）

馭戎慨言 ぎよじゆうがいげん　「からをさめのうれたみごと」を見よ。

擧狀 きよじやう　古文書【解說】吹擧狀（すゐきよじやう）ともいふ。官位・所職等の競望、或は訴訟等の場合に於ける推薦狀である。鎌倉室町兩幕府ともに、守護地頭などより、事を朝廷に奏する場合には、幕府の擧狀を要し、名主・莊官以下の庶民より幕府に上申する場合には、領家の擧狀を必要とした。（伊木）

觀心寺住僧等申寺座主職事、中狀副具書 謹進上之、子細載狀歟、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
三月三日　左衞門少尉正儀（楠）
進上　御奉行所

巨人傳說 きよじんでんせつ　「大人彌五郎」を見よ。

清輔 きよすけ　歌人・歌學者【姓】藤原【別號】袖下朝臣（無名抄）・山澤宿禰（袋草紙）・和歌得業生（古今集書寫の奧書）、鳥羽院は和歌丸と仰せられた（袋草紙）。【生歿】長治元年に生れ治承元年（一八三七）六月二十日歿す（玉葉）。享年七十四。【閲歷】顯輔の子、太皇太后宮大進の任にあること年久しく、偶々亮があいたので、望んだけれども許されなかつた（家集）。歌に優れたために從四位下まで進んだが、弟重家よりも後れた（袋草紙・家集）。次いで順次三位まで進んだやうである（顯輔集）が、「公卿補任」には見えない。昇殿も容易に許されなかつたが、康保二年三月、中宮の御方で貝合が行はれるので急に聽された。父顯輔が「詞花集」を撰修する頃は、清輔と不和であつたので、少しもその意見を用ひなかつたのみならず、その歌を一首も採らなかつた。清輔はこれを甚だ不滿に思つて、敎長が「詞花集」を嘲る意味で「拾遺」「古今」を撰するのを助力したといはれてゐる（正治奏狀）。但し敎經が「後葉集」（別項）を撰して「詞花集」を難じた時は、「牧笛記」を撰して反駁したといふ。康保二年の中宮貝合では、顯廣（俊成）・範兼と論じて力量を示した（袋草紙）。長寛二年の頃、「續詞花集」（別項）を撰して二條院に奉り、清書の上、改めて奏上するやう仰せ下されたが、永萬元年二條院の崩御によつてその儘となつた。承安二年（六十九歲）三月十九日白河の寶莊嚴院に尙齒會を主催し、敎頼（道因）以下七人の老人と重家以下九人の垣下の人々を集め、自らは四位でありながら三位の重家に下襲の裾をとらせ、又季經に沓をとらせて、老年を歎じながらも、長生を悅んで一日を過した。歌合の判者となつたことは三回ほどあるが、俊成の歌を判じたことはなく、俊成に判されたことはある。

【著作】奧義抄三卷〇和歌疑談抄二卷〇和歌初學抄（花月抄と同書か）四卷〇和歌一字抄二卷（以上各別項）〇その他、「萬葉集」「古今集」を始め、「後撰」「拾遺」「後拾遺」「金葉」「詞花」等の勅撰集「伊勢物語」「大和物語」「古今六帖」等に就いての解說註釋をはじめ、撰集の故實、和歌會や歌人遺話等を記した「袋草紙」がある。〇歌では、清輔朝臣集（別項）の外に、勅撰集に入れる歌、千載十九、新古今十二、新勅撰九、その他凡そ四十九首、又、後葉集五首、月詣集五首等がある。

【人物】やゝ狹量で、自說に反對されることを忌み（長明無名抄）、妥協的な俊成に比べると見劣りがして、官位も低かつた。この二人は自ら對抗の位置に立ち、肌合が合はなかつた。俊成は「源氏物語」も「白氏文集」も讀んでゐない清輔の不見識を笑つてゐる（正治奏狀）。併し彼は學問に熱心で、書物に對する愛着も深く、承安四年六月、家が類燒した時も、和歌文書は一紙も燒かなかつたといふ。【歌風】觀念的な作が多く、特殊な情趣も個性もなく、新味もない。寧ろ詞を弄してゐる所が見える。語彙は豐富で萬葉語を用ひた萬葉風の歌や、助詞・助動詞の變化を巧に用ひて、複雜な表現を試みた歌もあるが、修辭上の調和があるのみで詩心に乏しい。大體の傾向は顯輔の情趣主義に似てゐるが、美的感動が乏しい。歌合の判は聯想の統一のない歌、聯想の不十分な表現、調子の拔けてゐる歌等を指摘してゐるが、歌の病と見るべきものも、多少は指摘してゐる。總じて彼の歌に對する態度は部分から全體を推す傾向、情味よりも文法用例等を重んずる傾向があつて、俊成とは正反對である。

【業績】和歌學問、ともに俊成と相並んで平安朝末期に於ける雙璧であつた。和歌では俊成に劣るが學問では彼に優り、六條家の學風を開いた。或は歌人といふよりは學者といふ方が正當であらう。清輔は宮中（特に二條院）並に權門（特に忠通一家）の愛顧を蒙ることが深かつた。「奧義抄」以下二條院に奉つたもの多く、「初學抄」は基房の命によつて撰したものであり、袋草紙は彼の學識を碩揚してゐる（玉葉）。彼の古典研究は、資料の精密な調査と、該博な考證とによつて、解說・抄註・本文整定等をなした。その研究は綜合的な考察には乏しいが、常識の判斷を主とする俊成の態度に比べると科學的であるといへよう。彼は國文學を組織的に研究した最初の人として、後世への影響が多い。

【參考】袋草紙〇玉葉（承安三―安元三年）〇正治奏狀〇僻案抄〇近代秀歌〇長明無名抄〇古今著聞集〇尊卑分脈〇大日本史（二百二十）〇百人一首一夕話〇國文學全史平安朝篇（藤岡作太郎）〇日本歌學史（佐佐木信綱）〇國文學研究史（野村八良）〇六條家の歌人と其の歌學思想（能勢朝次、國語國文の研究昭和三ノ一二）（西下）

清輔朝臣集 きよすけあそんしふ　歌集　一卷【著者】藤原清輔【別稱】藤原清輔家集・藤原清輔朝臣家集【傳本】（一）群書類從卷二五六所載本、（二）六條家二代和歌集本、（三）元祿十二年刊の版本等。二は半紙判三册で、上册に顯輔集を、中下の兩册に清輔集を收めてあるが、清輔集は拾遺を附し、奧に泉清行の稿本をその歿後、西村貞爽が手を加へ、清水濱臣の序を添へて、文化十一年開版したものである。三は半紙判三册で一面九行、一首を二行に記し、卷頭に清輔の系圖を載せてゐる。三本は大體に於て同系統と認められるが小異があり、二代和歌集本は最もよく整頓してゐるが、元祿本は誤謬・剝脫等が相當にある。【內容】部類を春・夏・秋・冬・戀・雜の六に分けてゐる。歌の數は（一）類從本四四三首、（二）二代和歌集四四七首及び拾遺七五首、（三）元祿刊本四三八首であるが、相互の間に歌の出入がかなりある。又歌の順序の相違、語句の相違等も多少ある。集の最後の歌は大和國石上の柿本寺にある人丸の墓に卒都婆を立てた時のものである。本集成立の事情は不明であるが、整頓好きの清輔の事であるから、彼自ら書き集めたものであらう。よく整へられた集でありながら、藝術味は乏しい。（西下）

季寄 きよせ　俳諧【名義】四季の詞寄の省略である。【解說】四季の題目を集めた書の名である。元は詞の式を示した書や俳諧の作法を說いた書の中に入つてゐたけれど、後四季の題目だけ集めたものも刊行されるに至つた。それは、一方に詞の俳諧が廢れると同時に、發句の必須條件として季題を入れる事が句作の習慣となつて來たから、四季の題目に關する知識が必要となり、從つて季寄が流行したのである。【沿革】古い所では北村季吟の「山之井」（別項）が纏まつてゐる。延享以後相調貞山の「誹諧手挑燈」が廣く行はれるやうになつて、專ら四季の題目を集めたものが刊行された。卽ち麁文の「華實年浪草」、洞齋の「月令博物筌」、二柳庵校の「俳諧季寄大全」「俳諧歷屋刷」、來發の「俳諧季寄圖考」、蘆中の「季寄袖鑑」等が出た。その中「年浪草」は弘く季題に渉つて說明したもので、有名である。又、藍亭青藍の「增補俳諧歲時記栞草」も、瀧澤馬琴の「歲時記」を增補したもので、後世に非常に流布した。【附記】明治三十年以後新派の俳諧が盛に行はれるやうになつて、季題研究が勃興し、一方に又曆法の改正や新季題の增加等によつて、從來の季寄に大修正を加へるやうになつた。

【參考】山之井補註（伊佐賀羅宗）〇細訂增續栞山之井（高井蘭山）〇季寄袖鑑（蘆中）（荻原）

許多脚色帖 きよたきやくしよくでふ　演劇書　四十帖（內、四帖未完成、附錄二册）【編者】五代吉野五運【由來】幕末の頃、現大阪鰻谷吉野五運の先代が芝居好きなところから、研究的興味も手傳つて本書の編纂を思ひ立つたものである。當時出入りの文人畫家、藝人等の補佐するところ尠からず、特に濱松歌國の助力が多かつたと傳へるが、歌國一人の編と云ふのは、もとより誤りである。書中の文字はすべて儒者の篠崎小竹の筆であるので、書名もキョタと因く讀むべきかと言はれる。

【形式】上方、殊に大阪を中心として蒐集された歌舞伎劇の資料であるが、萬治・寬文の交より幕末に及び、年代順に帖を逐ふ樣式で、表紙の裏との綴板にはその一帖に揭げられる名優數人の紋所を極彩色で表はし、各帖別人の序跋を附し、各帖に含まれた年代を槪說した數行の文を短册樣の枠にはめて目次としてある。序跋や目次の部分は天地に華美な模樣が描かれてゐる。【內容】主として番附であるが、評判記一枚刷の類も含まれてゐる。元祿以前の部分には、特に各種の資料が集められ、寛政以後には時に似顏繪も含まれる。編者が三代中村歌右衛門を後援してゐたので、彼に關する資料は周到に整理されてゐる。上方歌舞伎の基礎資料は極めて尠い中に、大阪に關してかくまで多量に纏められてあるものは他にその例を見ない。又、現在傳はる書籍に記錄されてゐない古い文獻が多く發見されるので、大阪歌舞伎の歷史を考へる爲めには、根本資料の一といふべきである。（守隨）

清正 きよただ　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【生歿】生年未詳、天德二年七月歿す。【閲歷】兼輔の二子。延長八年、從五位下に敍し、承平四年、紀伊權守に任じ、備前權守・右兵衞權佐・藏人・藏人頭・齋院長官・修理權亮・近江介・左近衞少將・紀伊守を歷任し、從五位上に陞つた。【作品】家集に「清正集」があり、勅撰集に入る歌は、後撰集九首、拾遺集以下凡そ二十首である。【歌風】歌ひ方は幼稚であるが、歌意は平明で、自然の景物を詠んだものが多い。父に比較すれば歌人としての技量は劣る。

【參考】歌仙傳（西下）

魚鳥平家 ぎよてうへいけ　「精進魚類物語」を見よ。

清經 きよつね　「平家物の謠曲」を見よ。

清行 きよつら　漢學者【姓名】姓は三善宿禰、唐名を居逸といひ、善居逸と稱した。清行は「きよゆき」又は「きよいき」とも訓んだ。字は耀又は三耀。【生歿】承和十四年に生れ、延喜十八年（一五七八）十二月七日歿す（日本紀略）。享年七十二。【家系】三善宿禰は百濟の遠古大王の後である。歸化後の系圖は詳かでない。父は淡路守從五位下三善氏吉、母は佐伯氏、清行はその三男である。【學統】始め菅原是善（道眞の父）に學び、また巨勢文雄（民部少輔・文章博士等に歷任、大學頭に至る）にも師事した。【閲歷】貞觀十六年（二十八歲）文章得業生となり、元慶六年（三十七歲）對策に及第、翌年大學少允となる。仁和三年從五位下大內記に進み（四十一歲）、翌年長谷雄・佐世と共に阿衡の官職を勘申した（政治要略卷三十）。その後肥後介・備中介を經て、昌泰三年（五十四歲）刑部大輔に至り文章博士を兼ねた。この年「史記」を進講せしめられた。又菅原道眞に書を送つて辭職を勸告した（本朝文粹）。同四年（延喜元年）

(五十五歲)道眞左遷せられ、藤原時平の、道眞の門弟子及び文章生・學生を放逐するや、これに書を贈つて諫めた(奉左丞相書)。同年大學頭となり、また辛酉革命によつて再度改元の議を奉り、遂に改元された。翌二年智證大師の傳を著く。同三年式部少輔、同五年式部權大輔、三善朝臣の姓を賜はつた。同七年藤原保則傳を書き、又「延喜格」十二卷の撰に參與した。同十四年(六十八歲)從四位上式部大輔となる。翌々年邸宅を道場とし善法寺と稱した。十七年(七十一歲)參議に進み宮內卿を兼ね、翌年更に播磨權守を兼ねた。晚年は眼を病んで、日光をすら辨じ得なかつたといふ。【著作】善家集一往(卷か)(二本朝書籍目錄」詩家の部に見えるが現存せず)○善家祕記一卷(同上、但し「扶桑略記」卷二十二に引用してゐる)○善家異說(「政治要略」に「可制是非式占有設論事」(卷九五)、「服喪駐老記」(卷九五)等を「善家異說」として載せてゐる。「善家祕記」の異名か又は全然別個のものか不明)○藤原保則傳一卷(完本は傳らない。續群書類從一九一、存採要害の逸傳六種及び前田家に寫本がある)○比叡山延曆寺座主圓珍和尙傳一卷(圓珍卽ち智證大師の傳である。淸行は大師と親交があつた。保則傳と共にその文の典雅を以て古來稱せられてゐる。續群書類從二一二、大日本佛敎全書二八所收)○革命勘文(「請ニ改元ニ應ニ天道ニ之狀」)がそれである。群書類從四六一所收)○延喜元年の意見封事(現存せず、但し意見封事十二箇條の末に「具載ニ去延喜元年所ニ獻意見之中ニ不ニ更重陳ニ」とある)○意見封事十二箇條(當時の弊風を剔抉して、その救濟策を述べたもの。卽ち祭祀を重んじ、奢侈を禁じ、又僧徒の濫惡と衞士の兇暴を論じ、更に口分田や大學の學田、中國の舟楫等に關して十二箇條に亘り只管時弊を矯正すべきことを論じてゐる。群書類從四七七、本朝文粹第二所收)○世說私記(紀長谷雄と共に作つたと傳へるが現存せず)○その他、「本朝文粹」「政治要略」等にその文が見えてゐる。

【人物】理智の人、正義の人で、權勢にも左右されなかつた。微昇不遇に見えたのもその性格から來たものであらう。道眞や時平に書を贈つた事などその一つの表はれである。彼がこの性格のため甚だ不遇であつたことも事實で、官位の淹滯はよくこの邊の消息を語つてゐる。【業績】詩人としての淸行は、古來紀長谷雄・大藏善行と並稱せられてゐるが、江村北海はその詩を激賞して、「長谷雄、善行、豈に其の影響を望むを得んや」と言つてゐる(日本詩史卷二)。その詩の今日存するものは多くないが、時流に超然たるものであつた事は疑ない。文に於ても卓越せる手腕を有し、典雅を以て知られてゐる。又その政治家としての活躍には殊に顯著なるものがある。意見封事、預論革命議、請改元議等を始め、勘申阿衡事や、請禁深紅服奏議等に至るまで、何れも時務に關するものである。賴山陽は「以ニ實用之才ニ、爲ニ實用之學ニ、菅原相公、恐若ニ不ニ及」(日本政記卷七)と、口を極めて推稱してゐる。なほ彼は算道、陰陽道等にも精通してゐた。要するに政治家としての彼は、時世の觀見ではなかつた爲めに、經綸胸に滿ちて而も自らこれを實行するの地位と機會とに惠まれなかつたのである。　(山岸)

【參考】桂林遺芳抄卷一○頑鼠漫筆卷一○江談抄卷二・三・五○拾遺往生傳卷中○撰集抄卷六○三國傳記卷六○扶桑略記卷二四○公卿補任○十訓抄卷中、第六○神皇正統記○今昔物語卷二四・二七○伊呂波字類抄○日本漢文學史(岡田正之)○藤原保則傳(星野恒)(史學雜誌四ノ三八○同追考同上(同上四ノ四○)

擧白集（きよはくしふ）　歌集　十卷五冊　【著者】木下長嘯子【編者】門弟公軌が編纂し、公軌の歿後その子景軌が集め、山本春正これを刊行する由、跋文に記してある。【刊行】慶安二年【諸本】慶安三年の刊行もある。近古諸家集(校註國歌大系)所收。外に校註本もある。【解說】四季・戀・雜・別旅・哀傷・物名・俳諧・賀に部類別してゐる。「擧白集」は元來八冊で、第一冊より第五冊は歌集、餘の三冊は文集である。而して歌集五冊は十卷に分つてある。その歌風は新しみのある點で當代に異彩を放つた。滑稽諧謔味あり、無造作な表現と用語句法の自在で奇拔な所とがその特色である。蓋し正徹以後の傑出した歌人で、當時の歌壇の新派と稱すべきもの、隨つて時流からは非難攻擊せられたが、德川初期の最も注意すべき歌集である。

聲の聲に散る花のしづかに語つる事の夕暮
天地やさらに開くる海山も玉もて造る秋の夜の月

〔附記〕下河邊長流が拔萃編纂せる「長嘯歌選」は三家和歌集の一で、長流全集に入つてゐる。「擧白集」を論難した書に、「擬擧白集」(また擧白集不審といふ)があり、更にそれを辨駁した書に「擧白心評」(擧白雜々)がある。　(佐佐木)

清正誠忠錄（きよまさせいちうろく）　脚本　時代物四幕五場【作者】三代河竹新七【通稱】毒饅頭【題材】大阪落城前の淸正の苦衷譚を取扱つたもの。【興行】初演は明治八年十月芝新堀座(九代團十郞等)。この時の名題は「實成鉢淸正傳記」。但し現行のものは、同二十七年三月明治座再演の際に改訂された臺本によつてをり、それが定本として傳はつてゐる。

〔役割〕內府家康公・加藤淸正(九代市川團十郞)、鎗川八右衞門・隱取式部少輔讓政(先代市川左團次)、平野長康(市川小團次)、片桐且元(市川權十郞)、池田三左衞門・大野道犬(先代市川壽美藏)、鎗川切腹・鎗川妻菊野(市川竹若)、淺野彈正・加藤の家臣佛藏(市川段四郞)等。

【梗概】(序幕)關東方に對し、大阪方は他意なきを表明するため、京都二條城に秀賴が家康を訪問した時のことである。秀賴に供奉して行つた加藤淸正・片桐且元・池田三左衞門輝政・淺野彈正幸長の四人に對し、書院に於て老臣鎗川八左衞門が饗應をなし、娘楓に薄茶を立てさせ、妻菊野をして饅頭を菓子として差出させたが、四人が警戒して口にしないので、鎗川は自ら食して勸める。先づ加藤はその心根に感じて快く食し、池田・淺野も食し、片桐は、老母にも賞翫させたいといふので、持歸る。四人の家臣は秀賴歸邸の合圖と共に立歸つたが、老體の鎗川は鴆毒を仕込んだその毒饅頭のために落命する。密かにこの情景を見、四勇士を見送つた家康は、鎗川の功勞を賞する。(二幕)果して三人共身體に異常を覺えるので、言ひ合はしたやうに、各々阿彌陀ヶ峯なる豐國大明神の廟に詣でる。池田・淺野は、今日豐國神社に差上げたといふ供物の饅頭に中毒したのは、秀吉公に殉死するも同樣だから、こゝで切腹せんといふを、淸正に止められ、今、事を荒立てなば却つて關東方に口實を設けさせる事にもならうから、國許へ退身する事に致さうと申合せる。(三幕)毒饅頭の一條から、大野道犬等一味は家康に討手を差向けんとまで極論するが、且元・淸正等はこれを鎭撫するに心勞してゐる。淺野・池田は間もなく國許で病死してしまふ。淸正も過激論者を說得したので、熊本へ退身の儀を願ひ出で、

大阪城內に參り、淀殿・秀賴にも暇を告げる。幼年の秀賴は淸正の膝に上り、髭に取縋つて名殘りを惜しむ。淸正も落淚し、秀賴は形見に中啓を與へ、淸正は「梅が枯るれば尾花が茂る、いつも都に花は咲く」といふ諷刺的の流行歌を唄ひながら、舞を舞つて悲しき別れを告げる。と見たのは夢で、覺めた淸正は大阪方の運命の迫れる事を悟る。〔四幕〕德川方から淸正の樣子を榊原康政が探りに來る。淸正は熊本へ旅立つたと披露して實は過激論者の無謀なる出陣を憂ひて尙も蟄居してゐたが、風雲急なるを知つて、竹田街道に於て康政と對面し、大阪方に對しては自分が必ず輕擧妄動を愼ませるが、貴殿は家康公に、ただただ秀賴公に恙なきやう取計はれたいとお傳へ下されたしと言葉を番へて別れる。

【價値】活歷物の一である。默阿彌以外の狂言作者の手になつた活歷的時代物としては、先づこの作及び「文覺勸進帳」の外にはない。その意味から注目すべきものであらう。　(河竹)

【參考】歌舞伎新報(一一四九―一一五五、一一五五四―一一五五九)○續々歌舞伎年代記(田村成義)○市川團十郞(伊原青々園)

清水寺緣起（きよみづでらえんぎ）　繪卷　【解說】帝室博物館所藏三卷。京都淸水寺草創の緣起に併せてこれに因む種々の靈驗譚を上中下の三卷に描いたもので、繪はすべて土佐右近衞將監光信の筆、詞書は近衞太政大臣尙通、中御門大納言宣胤、三條太政大臣實香、甘露寺大納言元長、三條西內大臣實隆、東山左大臣義政の六筆であると傳へられてゐる。「宣胤卿記」永正十四年五月及び九月の條によると、當時「淸水寺緣起」の詞書を、甘露寺元長と共に淸書した事が見え、繪は土佐光信の作であるとも記してゐるから、繪が光信で、詞書に宣胤・元長兩者の筆のある事は確かである。光信は足利末に於ける土佐派の直流で繪所預となりこの派中興の人として聞えてゐる。その作品の今

淸水寺緣起圖（東京帝室博物館藏）

日に遺存するものも少くないが、繪卷としては北野神社所藏の「天神緣起」や、この「淸水寺緣起」は、製作年代も確かなもので、彼の作風を知る上にも貴重なものである。この緣起を「宣胤卿記」によつて永正十四年前後のものとすれば、當時光信は八十餘歲の老齡であつたらしい。その描寫もさう思へば老筆らしい一種枯淡な調子が見られる。總じて構圖も筆致もあまり生氣に富むものでなく、鎌倉以來の土佐繪の典型とも多少違つて筆致に淺薄の感化も窺はれ、さすがに時代的特色がほの見えるものである。ただ當時、ともすれば神經的末梢的になり易い土佐派の中に在つて、割合に危な氣のないしつかりした描寫はさすがに當時の名家の老熟の筆と首肯される。なほこの繪卷の詞書に將軍義政が淸水觀音に寄進したものと記してゐるが、義政は永正十四年以前に薨じてゐるので、「考古畫譜」にもこれを疑つてゐる。　(田中〈一〉)

清水連歌（きよみづれんが）【解說】洛東音羽山淸水寺で本式(別項)によつて行はれる連歌である。曆應四年、救濟法師がこゝで連歌を行つた事が「莬玖波集」に見えてゐる。後、同寺に古傳の本式目を藏したといふことで、飯尾宗祇は明應三年三月九日及び同五年正月九日に、その本式目に由つて百韻を獻したものが今に寫本で遺つてゐる。永祿の頃、六波羅普門院で連歌興行の時、東山淸水寺に殘存する本式を借り出して百韻を終へた後、紹巴がこれを筆記して禁中に納めたといふ事實がある。昌休聞書の「連歌新式聞書」には、「本式目、東山淸水寺に殘存之云々」とある。斯くてなほ同寺に本式目が傳へられて江戶時代に入り、江戶時代では、いつの頃からか、毎月二十八日に本式連歌が催されることになつたものらしい。　(福井)

虛無主義（きよむしゆぎ）【英】Nihilism.【佛】Nihilisme.【獨】Nihilismus.【語義】哲學的には、一切の知識と規範との客觀性を否定する說である。ゴルギアスの所論の如き、又老子の或る說の如き、皆これに屬する。政治的には、無政府主義と密接な關聯を有し、主としてロシヤのアレキサンダー二世治下の初期に起つた革命的社會主義の一運動を指す。併し初めてこの言語が使用されたのは、ツルゲーネフの小說「父と子」(1862)に於てである。その思想的根據は、當時ロシヤに存在してゐた政治的組織に反對し、これを否定し、自由な共產主義を以てこれに代らしめんとして、その實行のためには極端な破壞的行動に出づるも差支へなしとする所に存する。

【文學に於ける虛無主義】これは、主としてロシヤ文學に現はれてゐるが、必ずしも政治的の意味のみではなく、生活全體に對する否定的態度を示すものである。而も各作家に依つてそれぞれその內容を異にしてゐて、一概には云へない。けれども先づ代表的な虛無主義の文學としては、前記の「父と子」を擧げねばならぬ。ツルゲーネフは、當時の大學や高等專門學校の學生の間に、在來の妥協的・因襲的社會生活を嘲笑し、嚴密な科學的原則に基づいた新社會の建設を口にする若い男女の新しいタイプを發見した。彼等は在來の慣習を何から何まで顚倒して、男子は髮を長くし、女子は斷髮となり、時には青眼鏡などをかけることもあつた。彼等は輿論を全く無視し、儀禮を輕侮し、極端な功利主義を唱へて、技術の秀れた靴屋ならシェークスピアやゲーテよりも偉大だ。蓋し、詩よりも靴の必要が人類には多いからだといふやうな言說をさへ吐いた。主人公バザーロフを中心とする斯かる青年男女が、ツルゲーネフから「虛無主義者」と

呼ばれたのである。彼等は要するに、ロシヤの知識階級の間に起つた道徳的覺醒及び重大な知識運動の純論なる代表者達であつた。バザーロフは、虚無主義者であつて、宗教・哲學・藝術を一笑に附し、あらゆる權威を否定し、研究の對象として、自分が選んだ科學でさへも、その絶對價値を無條件で信ずることが出來ない位であつた。ツルゲーネフは、その作「煙」に於いても、夜汽車の中から、外の白い煙を見た失戀の男リトヒノフをして、「すべては煙だ！」と嘆ぜしめて、虚無主義の思想を表はしてゐる。斯くの如き虚無主義の思想の包藏されてゐる作品は、外にも澤山あつて、その形態や色彩の上に於ては、各々多少の相違はあるが、兎に角、ゴーゴリから、ツルゲーネフを經て、トルストイ、ドストエフスキイに至るまで、彼等は各々或る意味で虚無主義の思想を抱いてゐる。ただ注意を要することは、虚無主義を以て、すべてを全然否定し去るものであるとなすのは誤りで、この思想の奥底には、何等かの光明が輝いてゐることを忘れてはならない。（宮島）

清元延壽太夫 きよもとえんじゆだゆう 「清元節」を見よ。

清元節 きよもとぶし 淨瑠璃の流派【名稱】流祖清元延壽太夫の名による。【傳系】（富本延壽）本名、清水權次郎、また太兵衞。幼名、德兵衞。法名、師樂泰岳延壽信士。享保十二年筑前に生れ、享和二年（二四六二）五月十八日江戸に病歿す。享年七十六（一說に七十三、又七十七とも）。墓所、江戸本所中の郷（但し現今は東京府下南葛飾郡小松川町字逆井に移轉）成就寺。九州筑前の藩士、清水多左衞門の次男（一說に、野州都賀郡久保町の材木商、清水太左衞門の次男）で、寛保三年十七歳の時、江戸へ出て宮古路小文字太夫（後の初代富本豐前掾）に入門、延享二年、宮古路齋宮太夫となり、寛延元年八月小文字太夫が富本の一派を樹立すると同時に富本齋宮太夫と改めた。翌二年、小文字太夫が富本豐前掾となつて、江戸の各座に出勤するに及び、その脇語として勤めた。寶曆十二年、故あつて町人となり、清水屋太兵衞と稱へ、米商を營んだが、明和三年七月、中村座の「文月恋一夜」から、師の伜午之助（後の二代豐前掾）の後見として、清水權次郎事富本齋宮太夫の名で出勤。天明七年、一時、清水太兵衞ともいつたが、寛政六年二月、剃髪して延壽齋と稱へ、同九年更に延壽と改め、同十一年十一月、中村座で、一世一代として「歌枕雪鉢木」を勤めた。時に七十三。彼は二代豐前太夫と共に斯流の基礎を固め、また諸流の淨瑠璃に精通し、富本の曲附に改訂を加へ、新機軸を出したのが、後年の清元の源泉で、晩年には清元節の狙ひ所をそつくり體現してゐたといふ。紋所滿巻の中に三柏、後に糸輪に三柏。替紋は觀世水。〔初代〕本名、岡村藤兵衞。幼名、吉五郎。別號、紫雲庵。法名、妙德院響譽日延信士。安永六年江戸に生れ、文政八年（二四八五）五月二十六日中村座よりの歸途殺さる。享年四十九。墓所深川淨心寺。江戸横山町、茶油商岡村藤兵衞の子（一說に日本橋村木町の鰹節屋の長男）。寛政六年十八歳の時に富本延壽齋の門下（一說に延壽齋の養子で、初名、齋宮吉）となり、同九年二代富本齋宮太夫と稱へた。同十一年三月、森田座に初舞臺。享和初年の頃、宗家と不和になつたらしく、文化九年、全く富本と分離して豐後路清海太夫と名乘り、同十一年、清水氏の末裔がその姓の絶えんことを歎いたので、改めて清水を名乘る事になつたが、御三卿の名に憚つて町奉行からその姓を差止められたので、下に、富本の本の音を採つて清元と稱したと傳へる。又元の字は居所元飯田町の町名からとつたともいはれる。かくて清元延壽太夫と稱へて、同年十一月、市村座の「御攝花吉野拾遺」（女夫蓑）に出勤、一派を開くこととなつた（或は常に謙遜して自ら二代と稱へたといふ）。時に三十八。これより清元節とて世に持囃され、就中「北州」「保名」「鳥羽繪」「子守」「かさね」等に喝采を博し、文政七年九月、剃髪して延壽齋と改めた。

清元節正本「旅路の花聟」（天保四年）

翌八年五月中村座出勤中、歸途、乘物町邊で刺客に要せられ、歸宅後急死した。妻のお悦は又、清元の名人で、その作は頗る多く、中にも「其小唄夢廓」（權八）は名曲である。〔二代〕本名、岡村藤兵衞、後、太兵衞。幼名巳三治郎。別號、紫雲庵。法名、琢磨院榮壽日理居士。享和二年江戸に生れ、安政二年（二五一五）九月二十六日江戸に歿す。享年五十四。墓所、深川淨心寺。初代の實子、文化十三年十五歳の元服の折、雲州不昧公自ら鋏を把つて前髪を切り、榮壽太夫の名と、雲州家の替紋帽切の紋所を拜領したといふ。同年五月初舞臺。文政二年正月榮壽太夫と改め、同十年三月に二代延壽太夫と改名。弘化二年十一月、中村座「其儘淺間嶽」に通稱太兵衞を藝名に改む。この頃、語り口が大分違つて來た。彼は世に名人太兵衞と呼ばれた一代の名手で、清元節は彼によつてその基礎を固めたのである。「お染」「梅の春」「喜撰」「文屋」「三社祭」「玉屋」「落人」「神田祭」「明烏」等の名曲を殘した。一男一女があり、男は早世し、女は後に、清元お葉といひ、明治時代音曲界の一名人に算へられた。彼の妻お礒も名人で、今日、その作曲が大分殘されてゐて、歳且物の「卯の花」はその一である。〔三代〕姓、町田氏。岡村家の養子となる。幼名、繁次郎。通稱、藤田屋齊助（二代）。法名、清澄院鷹譽延壽居士。文政五年江戸に生れ、安政五年（二五一八）八月十日病歿。享年三十

七。墓所、橋場の保元寺（現今は青山墓地に移轉）。淺草今戸町の村木商（一說に淺草藏前の鰹屋）藤田屋の一子。弘化二年、二代の門下となり、後、その妹聟となつて三代を襲名（襲名年月未詳、但、嘉永五年前後）。〔四代〕姓、齋藤、後、岡村。本名、藤兵衞。幼名、源之助。別號、紫雲庵。法名、松聲院榮壽日晴信士。天保三年江戸に生れ、明治三十七年三月十六日東京で歿した。享年七十三。墓所、深川淨心寺。江戸谷中善光寺坂下町の質商三河屋の男。彼は江戸屈指の舊家に生れ、初め清元千蔵について清元を學んだが、安政五年二十七歳の時、岡村家の聟となつて四代を襲名。その後、默阿彌と提携し、默阿彌は百餘の淨瑠璃を彼のために執筆したといはれ、從つて初代・二代の淨瑠璃とはその趣が全く違つた。明治二十四年に太兵衞、同二十六年に延壽翁と改名した。彼は美音家として稱せられ、「十六夜清心」「三千歳」「四君子」「青海波」「柏若葉」等は最も名高い。妻のお葉は市川九女八、三代哥澤芝金と共に女藝人の三幅對と呼ばれた。明治三十四年五月二日病歿。〔五代〕姓、齋藤、後、岡村。本名、庄吉。文久二年八月向島に生る。横濱市富貴樓お倉の義子（五代尾上菊五郎の養子、尾上菊之助の義兄）。青年時代、三井物產の社員の頃、清元を菊壽太夫について學んだが、明治二十二年、四代の養子となり、同二十七年九月、先代守田勘彌・田村成義等の肝煎で家元を相續し、榮壽太夫と名乘つた。同三十年六月、福地櫻痴作の清元「風流浮手拭」が歌舞伎座に上場されて、九代市川團十郎の屋實と五代尾上菊五郎の手拭賣とが、延壽太夫襲名の口上を述べた。彼は清元の品位を高め、向上發達を圖つて、遂に今日の地盤を作り上げたのである。

【詞章】劇場音樂として、多く濡場、道行、所作事等に用ひられたが、段物はなく、何れも端物でその長いものでも、「權八」「小糸」「明烏」等の如く上下二卷に過ぎない。作詞者の多くは狂言作者であり、他流の語物が多い。大部分は世話物で、「お半」「おはや」「かさね」「お染」「落人」「清心」等の道行物、「權八」「待人」「山姥」「明烏」「白糸」「三千歳」等の準狂言物、「鳥羽繪」「子守」「傀儡師」「納豆賣」「玉屋」「三社祭」「神田祭」等の浮世風俗物などが、その大半を占めてゐる。「文屋」「喜撰」等の類は少なく、「保名」の如き狂亂物は極めて少ない。又座敷淨瑠璃としては、「四季三葉」「北州」「梅の春」「卯の花」「雙六」「四君子」「青海波」等の祝儀物、歳且物が相當に多い。この他に富本節から將來した「長生」「夕霧」「淺間」「鳥賣」「忠信」等の曲が尠くない。【沿革】二代富本齋宮太夫が、豐後路清海太夫から清元延壽太夫と改めて文化十一年十一月、市村座の「御攝花吉野拾遺」（女夫蓑）を語つたに起るのであるが、曲節は初代富本齋宮太夫（後年の富本延壽）に發生したと見るべきである。現家元まで五代に及んでゐるが、大正十一年十一月、社中に紛爭が起り、遂に三絃の三代清元梅吉を盟主として家内太夫・喜久太夫等、太夫・三絃十數名脱退し、別に清元流を起して現今は宗家と清元流との二流となつてゐる。

【曲風】清元の曲風は淸艶且つ粹で、江戸淨瑠璃中最も派手で、イナセなものである。從つてその對象は、民衆階級の職人肌、勇み肌の意氣にあつた。義太夫節の如く理詰の義理人情も求めず、一中節や河東節の如く澁い風雅にもあらず、寧ろ輕妙洒脱な趣味がその生命であつた。然るに劇的な輕い語り口が漸く纖巧なものとなり、現家元に至つてイナセよりは上品に、派手よりは澁くといふ風に時勢に順應した語り口に變じつゝある。これがため清元本來の語り口が失はれて、漸次初代以前の富本節の感じに接近してゆく傾向がある。

【史的地位】東西の古淨瑠璃は、拍子の觀念が薄く、ユリの興味を本體としてゐたが、それ等の完成されたのが、京阪に於ける一中節と義太夫節、江戸に於ける半太夫節と河東節であつた。然るに劇場音樂としての利用が繁く、殊に所作事の發達につれてユリの興味を失ひ遂に拍子本位、特に四ツ間本位で組立てられるやうになつて、その完成されたものが、即ち清元節である。これは上方唄から小唄に到つたのとその軌を一にするので、三絃樂として發達し盡したものと見られる。

【傳存曲】總數三百を越えるといはれてゐるが、今日傳存の曲は、百三十餘曲に留まる。富本から將來した曲は別として、曲節の上から左の四種類に分つことが出來る。（一）富本風の影響を殘存してゐるもの。主に初代當時に出來た作品で、「今様須磨」「權八」「保名」「お半」「山姥」「お染」「落人」等。（二）清元獨特の趣味を生命としたもの。主に二代の活躍した大成時代の作品で、「鳥羽繪」「玉兎」「子守」「座頭」「喜撰」「文屋」「三社祭」「玉屋」「神田祭」等。（三）新内や端唄の影響を受けて、語り口が轉換したもの。主に二代の太兵衞時代から四代の前半期の作品で、「明烏」「白糸」「夕立」「三千歳」「雁金」等。（四）淨瑠璃の形式を離れかけて、歌謠に接近して來たもの。四代の後半期の作品で、例へば「四君子」「花かたみ」「青海波」「角田川」等。

【代表曲】北州千歳壽（通稱、北州。作詞、大田南畝。作曲、川口お直。開曲、文化十五年春）○梅の春（作詞、梅堂家齊門。作曲、同上。開曲、文政十年春）○深山櫻及兼樹振（通稱、保名）（別項）○御名殘押繪交張（通稱、鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（通稱、玉兎）○大和い手向五字（通稱、子守）（別項）○色彩間苅豆（通稱、かさね）（別項）○六歌仙容彩（通稱、文屋。喜撰）（六歌仙參照）○彌生の花淺草祭（通稱、三社祭。又義玉惡玉）（三社祭參照）○おどけ俄煮珠取（通稱、玉屋）○道行旅路の花聟（通稱、落人）（別項）○〆能色相圖（通稱、神田祭）（別項）○梅柳中宵月（通稱、十六夜、また清心）（小袖曾我薊色縫參照）○忍逢春雪解（通稱、三千歳）（天衣紛上野初花參照）等。

【參考】清元延壽太夫（名家談叢第廿五）（演藝畫報、第二ノ一二）○近世邦樂年表（豐後節之部）○江戸時代音樂通解（清元之部）町田博三○日本歌謠史 高野辰之○清元研究 忍頂寺務○清元節の歴史 中内蝶二・田村西男（日本音曲全集、第三卷）○歌舞伎圖說解說篇 守隨憲治・秋葉芳美共編○梅の春通解 河原英吉著 （秋葉）

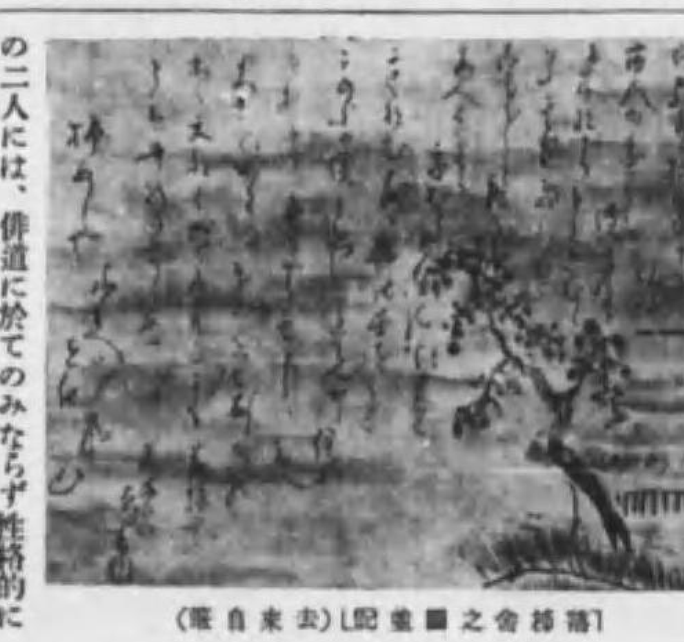
去來 きよらい 俳人【姓名】向井兼時、字は元淵、又は義焉子、幼名慶千代、通稱平次郎（父、平二郎）又、次郎太夫【別號】落柿舍【生歿】慶安四年に生れ、寶永元年（二三六四）九月十日歿す。享年五十四。（享年に異説があるが、寶永三年始稿の向井家系圖に五十四歳とあるに從ふべきであらう）。【墓所】東山眞如堂塔頭[illegible]【家系】父を元升といひ、長崎聖堂の祭酒である。母は久米氏。兄に元端（震軒）、弟に魯町・牡年、妹に千子。甥に叢田卯七、なほ親族に久米素行がある。魯町・牡年・千子・卯七・素行、共に蕉門の俳人で儒醫た

る質軒にさへ句があつた。妾の可南（かな）も俳人で、柳後園吾仲が享保十八年に歿した時これを悼んだ「吾仲老人のいたみ」（秋の名殘）の文も殘つてゐる。可南は、とみ・たみの二女を擧げ、去來の歿時頃には正妻に直されたらしく、尼名を貞從といつた。許六の「去來誄」に「思ふ人のなきにしもあらで」と云ひ、「娘の生先、其子の母の行末、いかに覺束なく見果つらん」とあるは、可南の事をいふものに相違ないが、丈草の潘川へ送つた手紙に、去來のことを云つて「此人も昔は具足を賣て傾城にかゝり候とて、其角なども大ほめのよし、自身にも笑ひ申候」とあるのは、可南との關係を云ふものかも知れない。「隨齋諧話」に引いてゐる原松（其角門）の手紙に、「去來妾在命。尼となりて今下長者町油ノ小路西へ入町に住す云々」とあつて、去來死後の傳書を秘藏したのを、支考が乾字金五十兩出して買ひ得て、後に翁直傳と稱して僞書し僞説をなしたとあるが、注意すべき傳へである。「蕉門諸生全傳」に去來の妾の名として在命尼を出してゐるのは、この原松の文を讀み誤つたのであらうとの穎原退藏氏の説は動かない所であらう。【師傳】芭蕉門。十哲の一人である。【經歴】幼少の時、叔父久米諸左衞門に養はれたが離縁し、八歳にして父に從つて上洛し、武藝を學び、騎を善くし、國主から仕官を懇望されたが、固辭したといふ。斯くて二十四五歳の頃に、弓矢を捨てたが、或る時は、親王・攝家の館にも伺候するなど、心ならぬ營みもした。陰陽の學に通じ、又畫も巧みで、芭蕉翁半身像があり、實眞清雅だと云はれてゐる。貞享の頃嵯峨に落柿舍を營んで隱棲の居とした。貞享元・二年の頃、妹千子を伴つて伊勢參宮をなし、「伊勢紀行」を草して、其角の紹介で芭蕉の批閲を乞うたが、この頃芭蕉に入門したやうだ。千子は本名を千代と云つたらしい。長崎のお船手（長崎奉行御用の調書問屋）清水藤右衞門に嫁し、一女を擧げたと傳へる。元祿元年五月十五日若くして歿したので、作句は「伊勢紀行」中のものの外多くは遺らないが、女俳人としては珍らしく傑出してゐる。去來は芭蕉に入門以後、その高弟として「曠野」に正風體の韻を示し、

向井去來（芭蕉堂歌仙圖）

落柿舍に師を請じては懇勤に仕へ、幻住庵にこれを訪うては、凡兆と共に「猿蓑」の撰を許され、幽玄閑寂の蕉境を示した同集は、俳諧の古今集と謳はれた。芭蕉が大阪に病篤きを聞くや、直に病床に馳せ參じ、看護到らざる所なく、義仲寺の葬式には、肩衣に鍬を携へていそしんだ。落柿舍は元祿の末に毀ち、東山南禪寺聖護院の邊に住み、專ら師風を守つて諸生をなつけ、越の浪化に助力しては「有磯海」「礪波山」を出さしめ、卯七を助けては「渡鳥集」を編ましめた。其角が師風に遠ざかるのを見、書を贈つて反省を促し、許六と不易流行を論じたりした。寶永元年芭蕉と同じく病疾を煩つて歿した。

【作風・地位】高雅清澁、能く蕉風の眞諦を捉へてゐる。天才肌ではないが、努めて到り得る極致に達したと云つた趣がある。許六の同門評判には、「花は三ツにして實は七ツなり。天性正しく生れつき給ふによりて、とりはやし少し缺けたり。（中略）、例へば衣冠束帶の正しき人遊女町に立てるが如し。（中略）、師説の月雪を經給ふ故に天晴中華門人の第一とは稱す。（中略）、師の句たりともなか〳〵上に立ちがたし」と云つてゐる。聊か過褒に失するが、花よりも實に傾くとの評は當つてゐよう。これが遂に所謂蕉翁の六感なるものの「實なること去來に及ばず」といふ事にもなつたのであらう。關西に於ける芭蕉の門人中では、その聲望に於て去來が第一位にあつたやうで、許六の「中華門人の第一」といふのも、強ち不稽の言ではない。芭蕉が杉風を東三十三箇國の俳諧奉行、去來を西三十三箇國の俳諧奉行と興じて言つたと云ふが、これは恐らく後世の去來觀であらうけれども、「猿蓑」と同年に出た貞門の「京羽二重」（別項）には、京都の蕉風俳諧師として、芭蕉・凡兆と共に去來が選ばれてゐる。東の其角・嵐雪に對して西の去來・丈草は定評的な對立になつて行き、果ては若海の「蕉門二哲考」や、西馬の「二翁四哲集」（別項）の如きが編まれた。其角に傾倒した蕪村も五子（鬼貫句選參照）に去來を選び、大魯閲の「俳諧五子稿」も去來を加へてゐる。蕉門に於ける去來の地位は、後に至るまで正に不動であつた。【人物】篤實は彼の性格であつた。併し全くの木强漢ではなく、一面洒落なところもあつたらしい。例へば「落柿舍制札」五條の中に、「雜魚寢には心得あるべし。大鼾をかくべからず」など云ふ事を規定してゐる。丈草から潘川へ送つた手紙にも、丈草が去來に長崎の唐人唄を所望したところ、それを謡つた甲頭巾の去來の影法師が壁にをかしく映つたことを書き、「隨分かたやも又をかしみの通ずる男にて御座候」と云つてゐるので、その性格の一面は明かであらう。斯く云ふ心友のこの二人には、俳道に於てのみならず性格的にも、どこか相通ずるところがある。


「落柿舍之圖並記」（去來自畫）

【編著】伊勢紀行（千子共著）○猿蓑（凡兆共著）○柿耆問答（花實集）○湖東問答（旅寢論）（以上別項）○去來文（寶永三年刊）

【參考】笈日記各務支考○鳥日記 同上○菊の枝（去來十三回忌追善）不竟○風俗文選森川許六○去來發句集蝶夢○落柿舍去來句集（俳諧五子稿の中）石原五晴輯○去來三部集蘿屋市兵衞○落柿舍日記井上重厚○去來抄暁臺出版○誹諧問答抄森川許六○落柿舍去來先生事實向井元仲○落柿先生行狀 佐々木鉤㝎（隨齋諧話所收）○芭蕉談 文曉○芭蕉翁反古文文曉○芭蕉翁傳竹田謙次○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳道系譜佐々政二○蕉門二哲考三浦若海○枝葉名書傳卷之三五○去來抄附錄（向井家系圖、學園院過去帳等）（校訂俳諧古典集）○去來及びその一家 大野洒竹（俳味四ノ八）○過渡漫錄 去來と丈草 藤井紫影（藝文昭和五ノ三・四）○去來私考 穎原退藏（藝文昭和三ノ一〇、四ノ五）

（志田・荻原）

去來抄（きよらいせう）

俳論 三冊【著者】向井去來【成立】現存する寫本の最も古いものは寶曆年間のものである等の點から、寶曆以前の成立と推定し得るのみである。【刊行】安永四年三月【由來】加藤暁臺が名古屋の㖯居士一番に筆耕させ、安永三年十月附で序を記し、井上士朗の跋を附して上梓した。【諸本】去來抄（俳諧名著文庫）・蕉門十哲集（俳諧文庫）・俳諧註釋集（俳諧叢書）・校訂俳諧古典集（俵山梓月校）・蕉門俳話集（俳書大系）等所收。【解説】本文は、芭蕉及び門下の俳論を集成したもので、第一冊「先師評」、第二冊「同門評」、第三冊「修行敎」の三部に分けられてゐる。「先師評」は、芭蕉が自作及び門下の句に就て批評した詞を主として集めてあるが、必ずしも芭蕉の詞とのみ限らず、一言でも芭蕉の詞のまじるものは、門下同士の評が大部分を占めたものでもこれを收めてゐる。「同門評」は蕉門の高足が師及び同門の句を評した詞を集め、「修行敎」は芭蕉及び門下が不易流行の説を始め俳諧の本質的問題を論じ、又俳諧の修行に關して述べた詞を集めたものである。然るに一番の「寂栞」に本書を四冊だといひ夏目成美の「隨齋諧話」（別項）にも、もと故實篇があつたのを流布本にはこれを省いて梓行してあると傳へてゐる。梓行以前の寫本に四冊本があり、これに故實篇が加はつてゐる所から見ると、板行のものは何かの事情があつて故實篇を除いたものと考へるのが至當であらう。故實篇は著者と卯七或は養町との間の蕉風の法式に關する問答を收めたもので、「同門評」と「修行敎」との中間に挿入されるべきものである。【價値・考證】蕉風の俳論集として非常によく調つたものであり、取扱はれた問題も蕉風の根本問題に觸れたものが多く、話者を離れて說のみとして考へれば、蕉風俳諧の本質を說くものとして實に有數の俳論書といへる。それ故、古來名著の一に數へられて來た。それと共に本書の著者も、自說を立てず師說を祖述した篤實な去來とされてゐる爲め、話者とされてゐるものもその儘に、本文の記述の凡ては殆ど無條件で信ぜられて來た。然るに本書には僞作說が立てられてゐる。即ち斯くの如き名著が著者の生前に世に現はれなかつたのみならず、傳來の徑路が曖昧であり、又同じ著者の「柿耆問答」（別項）にある評言と同じものを收めながら、話者の名を異にしたものが少なくないこと等が、僞作說の根據となつてゐるのである。これに就て考へるに、他書と比べて話者の名の變つてゐるものを見ると、その中の多くは去來に變つてゐる。又他書と比べて文言の變つてゐるものも、單に轉寫の際の誤りとのみ見られないふしがある。これ等の點から、本書の原本が去來に出たものとは考へにくく、去來の歿後、去來側の人によつて僞作された疑が濃厚になる。要するに僞作か否かの問題は、なほ十分研究を要しよう。

【參考】諸本の部に擧げた諸書の解題○去來抄荻原井泉水校註・穎原退藏校訂芭蕉文庫（各書）

許六（きよろく）

俳人【姓名】森川百仲。字は羽官。通稱五助。初め金平又は兵助と云ふ。【別號】五老井・菊阿佛・風狂堂・碌々庵・無々庵・横斜庵・如石齋・藤月堂・巴東樓・鞠葉宇。

森川許六（芭蕉堂歌仙圖）

【生歿】明暦二年彦根の城下に生れ、正德五年（一二三七五）九月二十六日歿す。享年六十。【法名】五老井無々道無居士【師傳】芭蕉門。彼の自讃之論によると、初學の時は北村季吟の俳諧を學び、中頃談林風（別項）に化せられ、田中常矩（別項）の門に入ること七八年、後芭蕉の附句に感じ、蕉門の撰集、殊に「曠野」「猿蓑」（各別項）の二集を精讀し、大津の尚白（別項）に二度對談し、遂に元祿五年八月九日、天野桃隣（別項）の紹介で、芭蕉を深川の芭蕉庵に訪ひ、師弟の契を結んだ。その時發句四五句を持參した中、「十團子も小粒になりぬ秋の風」の句が、芭蕉の嘆稱を得、芭蕉から「最老が魂を集にてさぐり當る人は、門弟子中に許子一人なり」と賞められたと得意に云つてゐる。生前自ら芭蕉血脈道統の門人であると稱してゐた。【經歴】江州彦根井伊侯の家臣で、三百石を領した。芭蕉も「長劍を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黑き羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま」（許六離別詞其角）と云つてゐる。蕉門著名の文章家・俳論家で、文集に「風俗文選」（別項）俳論に去來（別項）との往復の手紙が傳はつてゐる（俳諧問答）。又畫を狩野安信に學び、その筆致見るべきものがあつた。芭蕉は許六より、畫法を學んだのである。嘗て別墅を篩が原に造り、五老庵と名づけた。庵中に草宇藤・操揮豆・雲花園・紫芝岡の四聯があつた。芭蕉歿後、遺愛の樸樹を伐つて像を刻し、これを智月（別項）に贈つたり、手づから畫像を寫して野坡に贈り、深川の什物に寄附したりした。彦李由（別項）と殊に親しく、各務支考（別項）とは「本朝文選」の名に關する事から、死ぬまで支考を罵つてゐた。病臥六年寛に一日も起たずして逝いた。

許六筆蹟

辭世「一時打破尿囊袋。芬々臭氣俳梵天。下手ばかり死ぬることぞと思ひしに上手も死ねば屎上手なり。」一說に癩を病んで歿したといふが詳かでない。芭蕉歿後、彦根正風の一派を拓いて、「正風彦根體」（別項）といふ集を作つてゐる。友人には李由の外、直江木導があり、

門人に松井汶村・森野治天・山本孟遠・北川毛執等があつたが、その派の勢力は後代まで續かなかつた。
【作風】「發句は、畢竟取合せ物と思ひ侍るべし」(自得發明辯)と主張して、「俳諧の底をぬきて、古今に渡る者は、五老井一人なり」(二枚起請)と自負してゐる彼の句には、案外引立つた色が見えない。着實ではあるが技巧が冴えてゐない。尤も吉川五明の「をかしみに作を入るゝ」(小夜話)といふ評には同感されるが、三宅嘯山の、「枯淡肉少、率易無含蓄」(俳諧古選)といふ評には贊成出來ない。彼の作に枯淡率易を考へることは出來なからう。ただ彼には自負自慢するほどの力のない事は事實である。【人物】「自讃之論」「二枚起請」などに限らず、彼の凡ての著作を通じて自負心が漲つてゐる。それ程傲岸な人物かと思ふと、支考に欺瞞されたりして、存外正直な所があり(風俗文選參照)、自負の仕方から見ても稚氣愛すべきやうな所もある。「同門評判」その他で、同門の諸子を忌憚なく論評してゐる所を見ると、觀察力の優れたものも持つて居り、批評眼も冴えてゐる。「隱者韻話」に雪中庵蓼太の話として、許六は「常に溫厚謙遜の人」であつたといふ逸話を擧げてゐるが、蓼太は時代の降る人であり、他と比較して頗る信じ難いものである。
【著作】韻塞李由共撰○篇突同上○俳諧問答○宇陀の法師李由共撰○風俗文選(以上別項)○十三歌仙(芭蕉十三回忌追善)○正風彦根體(別項)○和訓三體詩○歷代滑稽傳(別項)
【參考】五老井發句集山編○許六全集大野洒竹○許六俳句集獲谷無編○湖東問答向井去來○桃の枝山本孟遠○去來抄○許六拾遺抄○雅文せうそこ(許野消息)三宅嘯山○井さらへ草深川飛川○俳諧新々式(傳書)○白砂人集(同)○芭蕉翁頭陀物語建部涼袋○誹諧世說高墨閣更○俳家奇人談竹內玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳林小傳中村丸久○俳人百家撰永谷靜亭○行脚怪談袋○俳諧人物便覽三浦若海　（荻原）

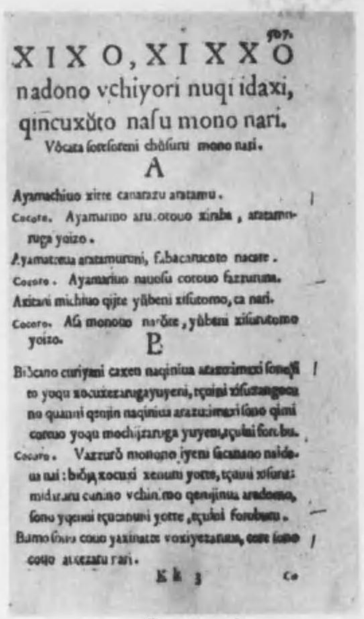
鬼卵 きらん　讀本作者【姓名】中山(後大須賀)周藏【別號】知白・陶山・栗杖亭・佛卵。【生歿】寬保元年に生れ、文政六年(二四八三)二月二十三日歿す。享年八十三。【墓所】遠江日坂長松院【閲歷】東海道日坂の住人、河內或は大阪の人と傳へるが、實は河內の出身らしい。始め中山氏、伊豆韮山に官吏となり失脚して日坂木綿屋大須賀氏を冒したと言はれる。鬼卵の號は、この屋號に據るのであらう。狂歌を善くし、その家、煙草を商つてゐたので、表の障子に「世の中の人と多葉粉のよしあしは煙となりて後にこそ知れ」と書き置き、白河樂翁通行の砌、これを見て褒美を賜つたといふ(み・袋)。又「戲作者考補遺」に柳亭種彥の門人たらんとして容れられなかつたとある。當時知られたる文人であつた事は、香川景樹もその「中空日記」に、「佐夜の中山こしはてて新坂(日坂)にとどまる。此里に大須賀知白とて、世に知られたる翁あり、又は鬼卵とも呼ぶ。茶汲む女に、此おち翁たひらかなりやと問へば、此さき一日年比の妻におくれて、乃ちこよひ初七日のたい夜に侍り。いといたはしきことと云ふ。もろともに老ての後のわか草のつまのわかれはいかにかなしき、おもひやる此の山中の夜なき石よる〳〵なかん君がこゝろを」と言つてゐるのでも知れる。多少畫も描き俳句も作つてゐたが、二十數部の讀本を以て世に聞えてゐた。また晩年長松院十四代密仙和尚に從つて禪を學び、それより佛卵と號したと傳へる。
【著作】四季物語春の卷五卷(一陽齋豐國畫、文化三年刊)○晉唐霧袋奇談五卷(淺山蘆國畫、同四年刊)○新編陽炎卷五卷(蔀關月畫、同年刊)○復讐蜻蛉卷五卷(同畫、同五年刊)○假名佛繪本俠夫傳(別項)○大橋竹箆太郎五卷(文化六年刊)○茶店墨繪草紙八卷(淺山蘆國畫、同七年刊)○長柄長者黃鳥塚(別項)○繪本更科草紙(別項)○お千代半兵衛今昔庚申譚(別項)○復讐奇談初瀨物語(葛飾北明畫、文化十年刊)○戀夢枕後篇五卷(一峰齋馬圓畫、同十一年刊)○ゞ錦浪花文章(東南西北雲畫、同十四年刊)○丹州鬼嶽傳五卷(北亭墨山畫、同年刊)○北野二葉の梅六卷(同畫、同年刊)○河內木綿團七縞(別項)○因果物語六卷(同畫、文政元年刊)○四季物語夏の卷五卷(同年刊)○染揚桂川水五卷(葛飾北明畫、同年刊)○繪本更科草紙(別項)○再咲高臺の梅(別項)○お長右衞門はん月桂新話十二卷(葛飾北寧・柳川重信畫、文政八年刊)○見聞小夜衣五卷(寫本)○東海道人物誌一卷(享和三年刊)
【作風】題材を淨瑠璃・歌舞伎に採り、或はそれ等によつて人口に膾炙してゐる口碑傳說巷談等を多く扱つてゐる。强ひて奇を求めないので、平凡な趣向のものが多いが、素樸な筆致で街氣のないところに、一種淡々たる風韻がある。「繪本更科草紙」の如きは、彼の傑作たるばかりでなく、讀本全體の上から見ても優れた作品であらう。當時相當に流行した讀本作者の一人で、二十數部の讀本を多く京阪の書肆から出版してゐる。　（笹野）

切兼曾我 きりかねそが　幸若舞曲(番外)二卷【成立】室町期【諸本】寬文年間板本。新群書類從第八舞曲部【題材】曾我物。兄弟幼時由井が濱で切られんとして重忠の命乞ひにより赦された事を作る。「曾我物語」(卷三)、謠曲「切兼曾我」と同材。
【梗概】東八箇國の大名小名伺候の席上、賴朝が伊豆配流中に於ける伊藤祐親入道の冷遇を述懷すると、工藤一﨟祐經は祐親の孫一萬・箱王の二人が父河津三郎の奧野の狩場で果てた後、母と共に曾我太郎祐信に養はれてゐる由を告げた。梶原源太景季主命を受けて曾我に赴き、母の悲歎するのを押して、十一歲の一萬と九歲の箱王を祐信と共に鎌倉へ伴ふと、昔祐親がその娘と賴朝との間に設けた子を殺させ、娘を八牧判官に嫁がせた恨のため、三浦義盛・宇都宮友綱・千葉介常高等、東八箇國の大名の命乞ひも賴朝の怒を宥め得なかつたが、秩父重忠が進み出で三世因果の理を說き、且つ容れられないならば兄弟の死出の案內に切腹せんと言ふので、遂に赦された。無事に歸つた兄弟の顏を見て、母は嬉し淚に暮れるより外はなかつた。
【影響】古河默阿彌作「富治三升扇曾我」(後に「比翼鶴千歲曾我」と改題、俗に「敷皮の曾我」)無論主として「曾我物語」から來て居る。　（島津）

切紙傳授 きりがみでんじゆ　「歌傳道授」を見よ。

吉利支丹叢書 きりしたんそうしよ　十八冊【編者】大阪每日新聞社【刊行】「珍書大觀」の一部を成すもので、昭和三年四月以降、同四年一月に亙つて豫約刊行した。【解說】我が國のキリシタン文化を物語る最も有力な資料を、德川[illegible]侯、その他、諸名家藏本中から選んで、體裁內容共に原本のまゝをコロタイプに附した。內容は「吉利支丹心得書」「ぎやどぺかどる」「吉利支丹法服諸器物目錄略圖」「羅甸文平假名書彌撒唱文及連禱斷簡」「吉利支丹抄物」「聖教要理」(ローマ字國和文)「吉利支丹古曆書斷簡」「西洋銅版書帖」「吉利支丹用語略簡斷簡」「破提宇子」(元和六年版)「佛書抄錄」「オラショ雜纂斷簡」「七科鍜今書」「吉利支丹十誡」(繪像)「諸聖人御作業書抄及宗門誤抄」「どちりな・きりしたん」「諸聖人記念日表」等十八種である。　（土井）

吉利支丹版 きりしたんばん　書誌學【解說】文祿・慶長の頃、西洋式印刷機械によつて基督教徒が出版した活字版の刊本の總稱。その刊行地によつて、加津佐版・天草版・長崎版など分けて呼ぶ事がある。【由來】室町時代に西洋人が始めて日本に渡來すると、數年の後には、耶蘇會(ゼスイト Jesuit)の教父等が日本に來つて、幾多の困難を凌いで基督教(吉利支丹)を弘め、天正の頃には九州から中國を經て近畿地方に及び、諸侯豪族の歸依する者も少くなく、處々に寺院や學校を置いて教徒を敎へたが、印度の耶蘇會州長(Provincial)アレッサンドロ・ヴァリニャーニ(Alexandro Valegnani)は、日本・支那の巡察使(Visitador)として、二回も我國に渡來して、布教の狀態を觀察した結果、書物文書を印刷に附するのが有益であると考へ、西曆一五九〇年(天正十八年)第三回目に渡來した時、歐洲から來た印刷機械をマカオから將來して耶蘇會學林に備へ附けしめ、且つ日本字を彫刻すべき職人をも伴つて來た。それより、耶蘇會や信徒の手によつて西洋式活版によるローマ字及び國字の刊本が日本で出るやうになつたのである。
【刊行書】刊行せられた書物は、かなり多かつたやうであるが、今殘存するものは、二十餘種で、しかもいづれも一二部又は二三部に過ぎない。內容は、基督教に關する宗門書と辭書・文典及び日本語教科書などの語學書であり、年代は西曆一五九一年(天正十九年)のものが最も古く、同一六一一年(慶長十六年)のものが最も新しい。刊行者は初は加津佐の學林、次に天草の學林、最後に長崎の學林であり、又個人としては長崎の後藤登明宗印、京都の原田アントニヨがある。ローマ字のものと國字のものとあつて、その內、ローマ字のものは早くよりあるが、國字のものは西曆一五九七年のものが最も早い。しかし刊年未詳の「どちりいな・きりしたん」(羅馬バルベリニ文庫藏)及び題名未詳の國字本教義書(伊藤長藏氏藏)は、文字稚拙であつてそれよりも古いものと考へられる。國字本は、行草體漢字平假名のものが普通であつて、やゝ後年の刊行に係るものは、字體優雅で、印刷鮮明である。日本の古活字版と違つて、每字の高さが一定せず、字形に應じて高低があつて、字の連續が自然である。裝幀はローマ字本は鳥の子紙に一紙兩面に印刷して西洋綴にしてあるが、國字本は、大抵美濃紙又は半紙に印刷して袋綴にしてある。
【書目】○サントスの御作業(*Sanctos no gosagueô no uchi nuqigaqi*)二卷一冊、西曆一五九一年加津佐學林刊(ローマ字)○ドチリィナ・キリシタン(*Doctrina Christan*)一冊、同一五九二年天草學林刊(ローマ字)○信心錄(*Fides no dôxi to xite P. F. Luis de Granada amaretare xo no riacu*)一冊、同一五九二年天草學林刊(ローマ字)○口譯平家物語(*Nippon no cotoba to Historia uo narai xiran to fossuru fito no tameni xeua ni yauaraguetaru Feiqe no monogatari*)四卷、ハビアン(Fabian)編、同一五九二年天草學林刊(ローマ字)○伊曾保物語(*Esopo no Fabulas*)二卷、同一五九三年天草學林(ローマ字)○金句集(*Xixo, Xiuo nado no uchiyori nugi idaxi, qiucuxuto nasu mono nari*)一卷、同一五九三年刊天草學林(ローマ字)、以上三部合一冊○アルバレス氏拉丁文典(*Emmanuelis Alvari e societate Iesu de institutione Grammatica Libri tres. Coniugationibus accessit interpretatio Iaponica*)三卷一冊、同一五九四年天草學林刊(ローマ字)○拉葡日對譯辭典(*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum exambrosii Calepini volum ine depromptum: in quo omissis nominibus proprijs tam locorum, quàm hominum, acquibusdam alijs minùs usitatis, omnes vocabulori significationes, elegantiores'q; dicendi modi apponuntur: in usum, & Gratiam Iaponicae iuventutis, quae Latino idiomati operam nauat, nec non Europeorum, qui Iaponicu sermonem addiscunt.*)三卷一冊、同年天草學林刊○コンテンツス・ムンヂ(*Contemptus mundi*)四卷一冊、同一五九六年學林刊(ローマ字)○どちりいな・きりしたん　一冊、刊年刊地未詳(國字)、羅馬バルベリニ文庫藏○題未詳教義書(卷初に「ばうちずもの授けやうとびやうじやにへにてんしやをすゝむるけうけの事」とある)一冊、刊年刊地未詳(國字本)、伊藤長藏氏藏○落葉集(*Racuyoxu*)一冊、同一五九八年學林刊(國字本)○サルバトウル・ムンヂ(*Salvator mundi*)一冊、同年學林刊(國字)○ぎやどぺかどる(*Guia do pecador*)二卷、同一五九九年學林刊(國字)○ドチリイナ・キリシタン(*Doctrina Christan*)一冊、同一六〇〇年學林刊(ローマ字)○どちりいな・きりしたん一冊、同年長崎後藤登明宗印刊(國字)○倭漢朗詠集上之卷一冊、同年學林刊(國字)○日葡辭典(*Vocabulario da lingoa de Iapam com adeclaração em Portugues*)一冊、同一六〇三年長崎學林刊(ローマ字)○日本文典(*Arte da lingoa de Iapam*)三卷一冊、ロドリゲス(Rodriguez)編、同一六〇四—八年長崎學林刊(ローマ字)○太平記拔書六卷、刊年刊地未詳、內野五郎三氏藏○サカラメンタ提要(*Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda*)一冊、セルケイラ(Cerqueira)編、同一六〇五年長崎學林刊(ローマ字)○スピリツアル修行鈔(*Spiritual xuguiŏ no tame yerabi atçumuru xuguan no Manual*)二冊、同一六〇七年長崎學林刊(ローマ字)○フロスクリ(*Flosculi ex Veteris, ac Novi Testamenti, S. Doctorum, et clarissimorum philosophorum floribus selecti*)一冊、バレト(Barreto)編、同一六一〇年長崎學林(ローマ字)○こんてむつす・むんぢ四卷一冊、同年京都原田アントニヨ(Antonio)刊(國字)○ひですの經、同一六一一年長崎後藤登明宗印刊(國字)
【影響】吉利支丹版の刊本は、德川幕府の嚴重なる吉利支丹禁遏のために、我國には殆ど絕え、その印刷術もこれを傳へるものなくして斷絕した。但し、西洋活版のはじめて傳はつたのは、我國で活字の本を作つた最初なる文祿二年より三年前であるから、或は日本の活字版に影響を與へたのであるまいかとの說がある(刊本參照)。

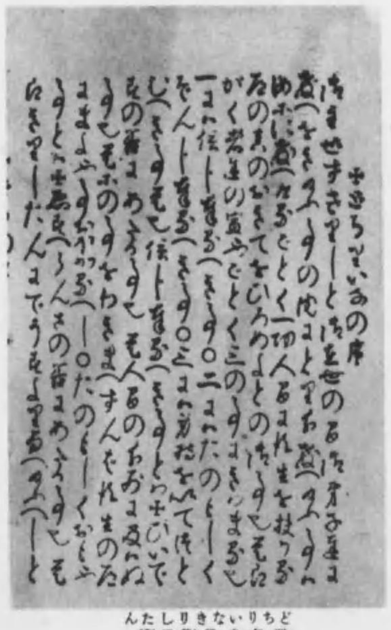


XIXO, XIXXO
nadono vchiyori nuqi idaxi,
qincuxŭto nasu mono nari.
Vôcata sorosoreni chôsuru mono nari.
A
Ayamachiuo xitte canarazu aratamu.
Cocoro. Ayamarino aru.otouo xinba, aratamruga yoizo.
Ayamatzeua aratamuruni, fabacarucoto nacute.
Cocoro. Ayamariuo nauosu corouo fazzuruna.
Axizari michiuo qitte yŭbeni xisutomo, ca nari.
Cocoro. Aŭ monouo narôde, yŭbeni xisuratomo yoizo.
B
Bôcano curiyani caxen naciniua atazzuimezi soneßi to yoqu socuzeraruga yuyeni, tçuini xisuraregeua no quanni qenqin naciniua arazuzimazi sino qimi coroua yoqu mochiiraruga yuyeni, çuini sonbu.
Cocoro. Vazzurŏ monono iyeni sucanano naideua nai: bŏçu socusi xeuuru yotte, tçuini xisuratamidararu cotono vchimo qenqinua aradomo, sono yoeni tçutomuru yotte, çuini sonbu.
Banno ŭuro couo yaxinatte voxiyetaraua, core sono couo atozzaru rari.
Kk 3 Co

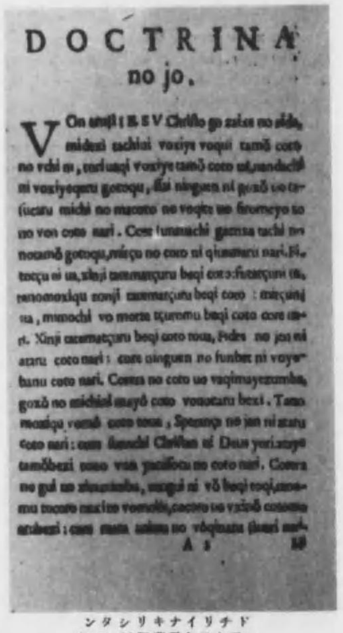
金句集
一五九三年天草版（八ッ切）

NIFONNO
COTOBA TO
Historia uo narai xiran to
FOSSVRV FITO NO TAMENI XEVA NI YAVA RAGVSTARV FEIQE NO MONOGATARI.
IESVS NO COMPANNIA NO
Collegio Amacusa ni voite fouponte no go mochiyo no sŏ no cotouo xiraretaqi ni qiuuta mono nari.
Qo mixxo yuo M.D.L.XXXXII.

口譯平家物語
一五九二年天草版（八ッ切）



そちりないきりしたん
刊年未詳（美濃判）



DOCTRINA
no jo.
Vn amiji ni Xe V Chriſto go zaiso no xide, midzui tachiui voxiye voqui tamô coto no vchi ni, tatoqi voxiye tamô coto ni, nanzuchi ni voxiyequru gotoqu, dai ninguen ni gozô no tçiuiçutaru michi no macoto no voqite no firomeye to no von coto nari. Core tanauchi gamna tachi no nozomô gotoqu, mŏçu no coto ni qiuuzuru nari. Firotçu ni ua, xinji zenmatçuru beqi coto: fuetçuni ua, zenonoxiqu zonji zenmatçuru beqi coto: mŏçuiqi ua, munochi vo morte tçuzumu beqi coto core nari. Xinji zenmatçuru beqi coto toua, Pedro no jo ni aratu coto nari: core ninguen no funbet ni voyobanu coto nari. Cotoua no coto uo vaqimayezumba, gozô no michini mayô coto voozatu bexi. Tatoqiqu vomô coto toua, Speranҫa no jo ni aratu coto nari: core ßuncti Chriſtan ni Deus yoritaxte tamôbezi sono vtu yacuiuo no coto nari. Coqera no gui no zŏzuitaba, uzugui ni vô beqi tooi, zenzenzu tooto naxite voroßi, cocoro uo vtôsô coto no atabeni: core mata zaiaku no vôjôzata ßuuri nari.
A 3 Mi

ドチリイナキリシタン
一五九二年天草版（八ッ切）

【参考】Ernest Mason Satow: *Jesuit Mission Press in Japan* (1591–1610). 1888.（大正十五年明治文化研究會に複製）‖ ——: *Jesuit Mission Press in Japan* (Transactions of the Asiatic Society of Japan. Vol. XXVII. Part II. 1899). ‖ Conde de la Viñaza: *Escritos de los Portugueses y Castellanos referentes á los lenguas de China y el Japón*—Estudio bibliográfico. Lisboa, 1892. ‖ Jard ño de Freitas: *A imprensa de tipos moveis em Macau e no Japão nos fins do seculo* XVII (Annais das Bibliotecas e Arquivos de Portugal. Outubro de 1915. Vol. I. No. 5.) ‖ 譯文十六世紀末に於ける基督教日本の活字印刷（東京朝日新聞昭和六年八月）‖ Luis Frois: *Die Geschichte Japans* (1549–1578), nach der Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon übersetzt und kommentiert von G. Schurhammer und F. A. Vorbisch. Leipzig, 1926.

○南蠻寺記　新村出○續南蠻記同上　○典籍叢談同上　○東洋文庫展覽會目○切支丹宗門の迫害と潜伏　姉崎正治　○切支丹傳來の影響同上　○日本耶蘇會刊行諸書」解說　帝國文化研究會　○吉利支丹文學抄　村岡典嗣　○天草本伊曾保物語　新村出校　○天草本平家物語同上　○羅葡日對譯字　○文祿元年天草版吉利支丹教義の研究　姉崎正治　○耶蘇會出版の太平記抄書　山田孝雄　○對外關係史料　英國大觀文庫　○隨筆南蠻記　第二編　諸書雜觀　○二つの吉利支丹書　岡本良知　○日本耶蘇會版佛典刪改集錄之上　井上哲次郎（原本）

吉利支丹文學　きりしたんぶんがく　【名義】一

詩篇を翻刻したと云ふ記錄もある位だから、宗教を通して西洋文學の東漸した經路は存外遠いところにあると言はねばならぬ。天草版の日本文典の中には、希臘・拉丁の詩文の斷片も散見し、宗教的な原書譯書の中に西洋古典より聖賢の語章が引用されてゐる。西洋の教訓文學からは、代表的なイソップ物語の抄譯が、最初は天草で口語體で出版され、後には京都で全く別系統の譯本が倍文錄で庶々改製印行された。後者は『伊曾保物語』と題して、慶長の末か元和中より寛永十六年に至つて數回活刷され、遂に萬治の整版繪入本に及び、その餘流は天保年間にまでも達してゐる（イソップ物語參照）。前者は、口語譯『平家物語』等と共に文祿の初年に出た。耶蘇會の刊本のうち最も有名なものは、トーマス・ア・ケンピス（Thomas à Kempis）の『基督現法』（Imitatio Christi）譯ふところの『聖徒』の翻譯であつて、『こんてんつす・むんぢ』（讀下經）と題して、初め慶長元年（1596）天草かで羅馬字を以て出版され、後に京都で慶長十五年（1610）假名交文を以て印刷された。次にはルイス・デ・グラナダ（Luis de Granada）の名著『ギヤ・デ・ペカドル』（罪人善導）を推すべく、それは慶長四年（1599）長崎かの出版で、德川初期及び以後の寫本も現存する。吉利支丹文學中最も廣く愛讀された本である。日本での著作では、日本最初の刊本たる加津佐版の『サントスの御作業』と題する聖者傳が、文章もよく出來てをり、吉利支丹文學の白眉と稱せられる。（文章の部本には、村岡典嗣氏の『吉利支丹文學抄』及び日本古典全集所收の『サヤ』を參照。）吉利支丹文學として、前記諸書の外、潜伏切支丹が幕末明治初年の十數年間に復活して、舊來口誦し傳へたところの聖歌の整理や讃歌や教義のたくひが筆錄された數種の書物を附加（ておかねばならぬ。それは傳聞宣教師ベルナルド・プチジャン（Bernard Petitjean）の功績を稱すべきだが、昭和六年長崎の切支丹文獻刊行會よりの複製本によつても知られてゐる。ハビアン（Fabian）と稱した日本のイルマン（修道士）が著はした『破吉利支丹』（慶長十年、1605）の如きは、吉利支丹の側の破邪顯正書の嚆矢として擧げられねばならぬ。同人改宗後の著作『破提宇子』（元和六年、1589）と共に飜譯や飜述を離れてゐた破邪書であつて相當の價値をたもつものである。【附記】吉利支丹排撃に關する著述、及び島原・天草戰亂に關する書物は頗る多いから、吉利支丹文學からは除くが至當であり、幕末明治初年から現はれ來る基督新教の譯述書聖教類、なほ又破邪書なども、こゝには加へない。

【參考】南蠻文學概觀（新村出）○日本文學講座（○南蠻文學同上（谷鼎譯）【新村】）　**霧太郎天狗酒醼**　きりたろうてんぐのさかもり　脚本　四幕十三場　時代物　【作者】並木正三　【名稱】

大詰に鶴太郎が公暁に天狗の通力を授けんとして酒盛りをするところからつけたが、これは愛宕社の元朝の儀式、天狗の宴に因んだものである。【異行】實朝十一年正月十五日初日、大阪角の芝居中山文七座、二の替り狂言。大當りの狂言で、その後、幕末に至るまで上方では屢々上演された。

【役割】藤澤四郎(沢潟分五郎)、江間小四郎(市野川庄四郎)、領城鶴野(山下金作)、領城鶴太郎(中村芳十郎)、玉川實は千代姫(中村芳十郎)、將軍實朝(市川升蔵)、鹽谷の前(嵐松之丞)、公暁(三枡大五郎)、喜之平(大江廣元(中山文七))、鶴太郎實は鬼一法眼(中山新九郎)、和田新左衛門(中山来助)等。

【諸本】實卿雪帳の外に、後世上演の寫本も數種あり、又絵入根本(德川文藝類聚第七所收)として、文政六年大阪河内屋版がある。これらは實卿雪帳と同一内容のものではない。【初演】享保十六年、文耕堂等の浮瑠璃「鬼一法眼三略巻」(別項)から鬼一法眼を拉し來り、「義經記」や、謡曲の「善界」などによつて、鬼一法眼に天狗の術を用ひさせた。

【梗概】(序幕)(鎌岡八幡社前)實朝の病氣平癒の祈りに人々がお百度を踏んでゐる所へ、狂風雲の實朝が現れて鹽谷の前と色めいた所作などある。領城鶴野が鹽人の江間小四郎を尋ね當てて喜ぶと、化粧坂の領城櫻木も神事の少女にやつして、小四郎に切ない胸を訴へた。藤澤四郎は鬼切丸を盜み出したが、闇の中に爭ふ響に、ふと來かゝつた喜之平の腰に太刀を差してしまつて、代りに喜之平の持つた拳の差札を刀の箱に收めた。實朝の行列が歸りかゝると、山伏姿で現れた鶴太郎が旋風を起してこれを留め、乘物に近寄らうとしたが、源家の白旗の威德に壓せられて果し得ず無念のこなし。(返し、渡船場)旅人を惱ますやつて藥を貰つてゐるが、性惡の姑も喜之平の不思議な術に恐れを感じた。(三幕)(揚屋花里屋)領城鶴野が、比企軍太の身請話に應ぜぬ故、種々苦しめられるのを、同じ領城の玉川が身を以て庇つてゐる。この玉川は實は標本なので、底意は鶴野から小四郎に打明けた。鶴太郎が本名鬼一法眼と明かし、玉川に對つて義經の一子千代姫ともあるものが敵を討たずして何事かと迫るが、玉川は遂に小四郎を思ひ切れぬため、喜之平からは鬼切丸を奪ひ、千代姫を引連れて消え去る。女房の縞でこの家の紛にされた喜之平は藥の差札から鬼切丸の號と疑はれて小四郎等に圍まれ、一方、鶴太郎からも太刀を渡せと迫られ、二人の主人の間に挟まつて終に切腹する。(四幕)(宮古路浮瑠璃流行)標本小四郎の遺行(實朝館)大江廣元は實朝の死後の源家の跡目であるとして、謀叛顯に破れ衣の公暁を敬ひ据ゑて、傍ら實の詮議に腐心してゐる。鬼一法眼も御殿法師となつて入り込んだが、とど廣元に計られて白旗と鬼切丸とを奪はれてしまふ。この上は鎌倉の天地を覆して謀殺にせんと、公暁にも天狗の通力を授けるため酒宴を始めたが、その酒は廣元の計略で、術を破壞さすべきものであつた。最早これまでと鬼一法眼は大笑れに笑れる。公暁の一切の行動は實は源氏のために粧ふものであつた。殺した筈の實朝も身代りであつた。

【所說】正三の時代物中、反逆物に屬し、鬼一法眼が天狗の術を驅使して、最後まで本名を明かさず、無氣味な雰圍氣を維持した點色は、本領をして傑作の一に推されるものたらしめた。そのためには、かなり筋向が凝らされてゐる。即ち公暁は鬼一法眼の鶴太郎の手下にされたと見えるが、實は反對に鶴太郎を完全に瞞いてゐる。さう見せるために公暁は始ど各場面で芝居を演じて、作全體の效果を擧げたが、畢竟、公暁に翻弄されたのは鶴太郎でなくして、觀衆であつた。當時、操り芝居は恰も全盛期の合作淨瑠璃の影響をうけて、各作家とも觀衆の意表に出づべき案を練つてゐたので、かゝる傾向の淨瑠璃と關係淺からぬ正三の作に、公暁の如き型の現れたのは當然であらう。本作の發表後、鬼一法眼が一面に惡の型を以て點色されて行つたのも、こゝに由來すると思ふ。「日本第一和布刈神事」(別項)がこの意味に於て、本作に負ふ所は多い。領城櫻木を義經の遺兒とする點尚も本作以前に屢々見えてゐて、その方面に重きを置かれた「男伊達初買賣教」(別項)の如き點色が生れてゐる。喜之平の居合抜は當時の流行を採り入れたもので、觀衆には相當興味を與へた所と思ふ。大詰、酒宴の惡尚も、同樣な意味で親しみを覺えさせたであらう。

【參考】點色節錄三編下の卷(鶴太郎天狗の考)

(守關)

西澤一鳳

鳳龍(ほうりゅう)【能樂】を見よ。

桐の花(きりのはな)歌集【著者】北原白秋【刊行】大正二年一月東雲堂。白秋全集第五卷所收。【内容】制作年代は明治四十二年頃より大正元年までで、約四百五十首を收めた處女歌集である。【思ひ出】(別項)「東京景物詩」等に現はれた感覺を短歌に及ぼしたもので、青春時代に於ける白秋の情熱と感興が溢れてゐる。主觀的な抒情の歌が最も多い。詩人白秋が、短歌にも一家の風格を樹てようと試みた第一歩として檢討の價値がある。勿論後年

ロドリゲス編日本語典
一六〇四年長崎版(西ア切)

こんてむつすむんぢ
一六一〇年京都版(美濃判)

どちりなきりしたん
一六〇〇年長崎版(美濃判)

の歌體は一變したけれど、「桐の花」にはそのスタートを切つたところに潑剌たる意氣が存してゐる。當時白秋自身の生活も轉々として變化多く、パンの會同人と提携して雜誌の發刊や、詩歌の會などに新しい刺戟を求めてゐた時で、その一面には又白秋の戀愛受難時代でもあつた。それらの感傷は「桐の花」中「哀傷篇」の諸作に、よく當時の若き日の純なる心境を訴へてゐる。彼の生涯の過程を知る上にも見逃すことはできないであらう。〔河井〕

霜夜物語 「豐臣記」を見よ。

桐一葉 きりひとは　史劇　六幕十五場【作者】坪内逍遙【發表】明治廿七年十一月より「早稻田文學」に連載【刊行】同二十九年二月春陽堂【初演】同三十七年三月東京座。

〔役割〕淀君・女馬子（中村芝翫）、右衛門）、片桐且元（片岡我當、現仁左衛門）、大野修理（先代澤村訥子）、石川伊豆守・秀次（市川段四郎）、木村重成（市川高麗藏、現幸四郎）、蜻蛉（市川門之助）、渡邊銀之丞（澤村宗十郎）、豐臣局（中村傳九郎）、大野道犬・大藏局（先代市川鶴美藏）、片桐主膳正（中村伸藏）等。

【諸本】最初刊行のものは讀本體であるが、大正六年四月帝國劇場の上演に際し、實演用として自ら改修したものがある。逍遙選集第一卷、日本戲曲全集現代篇第一輯所收。

【梗概】〔序幕〕豐臣家に對して干渉壓迫の政策を執つて來た徳川家康は、片桐市ノ正且元を駿府に呼び寄せ三ケ條の難題を提示した。その中の淀君を人質として江戸に下すといふ一ケ條は強ひて承諾させた。これを聞いた大阪城内は騷然とし、かねて且元に快からぬ大野一味は、一概短慮な石川伊豆守を唆かし、且元を亡きものにせんと計る。〔二幕〕淀君參の場。朝鮮征伐大勝利のお祝ひに吉野山の櫻狩り、太閤は奴、淀君は女馬士に扮して、賑やかに踊りぬく中、一變して物凄い畜生塚の場となり、秀次の亡靈に惱まされる事あつて夢は破れる。淀君は、懷刀を振り翳して走り出るので、饗庭局が介抱する。そこへ正榮尼と大藏卿とが來り、且元は關東へ内通せる不忠者なりと讒訴する。〔三幕〕且元は大阪に歸着するや、手嚴しい糺問を受ける。人質一ヶ條は深く辯明しないで退出する。石川伊豆守は、怒氣を含んで迫り、遂に足蹴にまでする。道犬等は直ちに討手を向けよと主張する。そこへ急を聞き病を押して木村重成が出頭し、大野を抑へ、今一應且元を糺問あるやうにと懇願し、直ちに上使となつて遣はされる。且元は重成に對して遠謀の計畫を述べ、豐家の衰運を嘆く。物蔭で聞いてゐた石川伊豆守は突如現れ、忠臣を見違へた詫びにと自ら片眼をゑぐり、切腹せんとするを且元が宥め諭す。〔四幕〕且元の娘蜻蛉（かげろふ）は、城内に人質となり、父への文通さへも許されないでゐる。茶道の珍柏は豐國神社前で蜻蛉に逢つたを幸ひ、明日のお召出しは且元の一命にも關はると告げるので、蜻蛉は驚き、敎へられるまゝに、許婚の重成に宛てて手紙を書くと、かねてから横戀慕の正榮尼の息子渡邊銀之丞に、それを奪はれた爲めに、蜻蛉は饗庭局に預けられる。〔五幕〕銀之丞は、蜻蛉への戀に狂はんばかりなので、正榮尼は銀之丞の戀を叶へるならば、且元の勸氣も許されるやう盡力するといふので、蜻蛉も承知したが、あとから饗庭局に意見されたので娘心に當惑して自害する。この報を聞いた銀之丞は亂心して泉水に身を投げる。一方淀君の發作は治まらず偶々寢所に入り來つた茶道の珍柏を斬る。〔六幕〕片桐邸の奧書院では、且元今日の出仕を奧方始め留めるも聞かず、御母公（淀君）の御血判ある上は、たとへ命を召さるゝとも登城せんと、後事を弟貞隆に任せて出掛けようとする所へ、家臣が城内に何事か變事のある由を報じ、石川伊豆守も來て出陣の用意をせよと勸めるが、且元はこれを退け、斯く百計悉く齟齬する上は後悔のあまり切腹する。大野の討手が迫つたので、且元も人々の諫めに從ひ、一旦居城茨木へ退去する事に決し、庭前に寂しく散りくる桐の葉を見て、そぞろに運命の數奇を喞つ。翌る日の朝まだきに長柄堤まで馬を進ませ、川霧の中に浮ぶ大阪城を眺め、感慨に耽つてゐる所へ、木村重成が驅け付けるので、今後の方針、籠城の計畫、防戰の手配り等まで敎示し、袂別する。

【價値】この作の生れた時代は、活歷物（別項）の盛んな時代であつたが、作者はそれに對して從來の歌舞伎的手法の美を認め主張するの意圖もあつて、院本式な挿話澤山の草雙紙式を加味した歌舞伎劇形式を取つて書いたものである。作者の戲曲中最初の作で、又最も著名なものである。結構の雄大、詞藻の豐富絢爛、舞臺技巧の優秀な點等に於て、文學者の手に成れる脚本として全く時流を抜き、劃期的な史劇である。この作以後、文學者の書いた史劇の多くには、何等かの意味に於て影響を與へてゐる。篇中、片桐邸奧書院の場、長柄堤袂別の場の如きは汎く知られ、後者は中等教科書中に早く採用された。

【參考】續々歌舞伎年代記（田村成義）〇明治劇壇五十年史（岡本綺堂）〔河竹〕

羇旅歌 きりよのうた　和歌【名稱】たびのうたとも。【性質】羇旅といふ詞は「萬葉集」にも羇旅作（卷七）とあり、又羇旅發思（卷十二）といふ部類も見える。更に卷七の卷末には羇旅歌として一首ある。しかし「萬葉集」では羇旅歌は明かな分類意識のもとに扱はれてゐないが、「古今集」になると羇旅歌は卷九を占めて十六首を收めてある。「後撰集」では卷十九を離別・羇旅で占めて居り、「拾遺集」は羇旅の部はなく、「後拾遺集」は卷九を羇旅歌で占めてゐる。「金葉集」「詞花集」は羇旅の部はなく、「千載集」には卷八を占め、「新古今集」では卷十を占めて居る。「新勅撰集」は卷八、「續後撰集」は卷十九、「續古今集」は卷十、「續拾遺集」は卷九、「新後撰集」は卷八を占めてゐる。「玉葉集」では卷八が旅歌となつてゐる。「續千載集」は卷八、「續後拾遺集」は卷九、「風雅集」は旅歌として卷九、「新千載集」は卷八、「新拾遺集」は卷九、「新後拾遺集」は卷十、「新續古今集」は卷十といふやうに一卷づつを占めてゐる。ただ「玉葉集」と「風雅集」だけが羇旅歌を旅歌と改めてゐるのは、注意すべきである。

【價値】羇旅歌は、以上の如く「古今集」以下の勅撰集の分類の一として量的にもその數は多くあるが、質的にも旅の歌には眞實感の豐かなものが多い。「萬葉集」時代に比して「古今集」時代以後では、地名も歌枕によつて詠んだものが多いのであるが、羇旅歌には流石に空想的な歌は尠い。もとより旅の範圍は、時代によつて異なり、又平安時代の如く旅に多く出でなかつた時代に於ては旅の歌も尠いのである。且つ旅の歌に女性の作の尠いのも旅をする者が主として男性であつたことを示してゐる。而して旅の歌は、その作者が多く自然に接するだけに、そこに自然觀の變遷が見られ、その内容にも影響する。從つて自然觀の持つ壯美・優美・靜寂などを羇旅の歌にも反映してゐるのである。〔久松〕

【參考】勅撰和歌集

羇旅漫錄 きりよまんろく　隨筆　三册【著者】瀧澤解（馬琴）【刊行】享和三年【解説】曲亭馬琴が三十六歲の享和二年、京阪に旅行した時、道中及び京攝地方で見聞の奇談を錄したもので、この遊歷は五月九日江戸出發、七月三日京都着、同二十四日大阪着、八月六日京都に復り、同八日京都出發、二十四日江戸歸着で、往復約三月半を費した。都門以外に足を踏み出すことを嫌つた人としては一生を通じての珍事であつたが、後年著作の資料をこれに獲たのも尠くなかつたらしい。上卷に大磯の懷古以下四十項、中卷に光廣卿の寛濶以下五十八項、下卷に契沖阿闍梨墓誌以下五十九項、三卷通計百五十七項を收め、所々に挿圖がある。上卷の首に撰者の自序、旅泊概略、凡言（例言）目錄があり、下卷の終に享和二年撰者の自跋がある。本書は明治年間、渥美正幹校の複刻本が出來てゐる。それには、川邊御楯・渡邊小華等の挿圖が存するので、容易に判る。〔和田〕

莫切自根金生木 きるなのねからかねのなるき　草雙紙　黃表紙　三册　十五丁二十圖【作者】唐來三和【畫工】千代女【名稱】[illegible]と角書がある。書名は廻文（別項）の凝つたものである。【刊行】天明五年【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・繪入黃表紙名作集（鵬根獸庵編）・黃表紙二十五種（日本名著全集）・黃表紙傑作集（三星社版）・黃表紙集（近代日本文學大系）・黃表紙集（特殊文學研究會）・色男十人三文（盛光館版）等に所收。【題材】御代之御寶（後出）、金銀先生再寢夢（後出）。

【梗概】金々先生の又隣の萬々先生は、金が有り過ぎる苦勞に堪へず、三日なりとも貧乏をして見たく、貧乏神の信仰、返濟の當の無い貸金、遊女の揚詰、豪遊、博奕、盜賊、米の買置等、あらゆる手段を盡すが、悉く反對の結果となる。遂に金銀先生のやつた通りに、藏の金を殘らず海に棄てさせる。棄てた金は世間の金を伴つて倍增しになつて金藏に飛び込む。家にもゐられず出奔すると、途中で債務者に捕へられて、返濟の金を押附けられる。夫婦は改心して我家へ歸つたが、金銀が充滿して居所もなくなる。

【構想】借金を質に取るを返濟の當の無い貸金とし、盜賊に身ぐるみ持つて行かれるを、逆に、賊がねこそぎ置いて行かうとするなどは「御代之御寶」に據り、金を海に捨てるは「金銀先生再寢夢」よりの構想である。貧乏神を祭るのは「日本永代藏」（別項）や「隱將軍勘略之卷」などの逆の構想である。富を喜び、貧を歎くのが世人の常で、しばしば江戸時代文學の主題となつてゐる。本書はこの慾望と努力の眞實に黃表紙的世界を見出してゐる。「江戸花一夜千兩」（天明六年版、山東京傳作）は早くもその色彩を傳へ、「金生樹譬種子寶」（後出）、「金隆譬年貢」（享和二年刊、自劒齋一九作）、「寶誠開」（文化二年版、樹下石上作）等、この系統に屬する物が續出してゐる。名作二十三部の一。

【備考】「御代之御寶」（天明元年版、市場通笑作）大富豪穀馬屋金藏は「持つたが病」に罹り、借金を質に取り、身代を無くして病が全快する。妻と共に乳母の家に身を寄せ、盜賊の難で裸になり、毘沙門天から授かつた呪文で諸人の願を叶へてやり、夥しい禮物を得て元の身代になる。

「金銀先生再寢夢」（安永八年版、戀川春町作）大富豪金銀先生は、手代の南鐐に誑かされて金を悉く西の海に捨てて赤貧となる。身の皮を剝がれる苦しさに、女房も出て行く。狐に賴んで化して貰ひ、吉原で遊興したが、狐と間違へられて松葉燻しにあふ所を番頭の小判に救はれ、歸れば借金取の襲擊。苦しまぎれに首を括らうとすれば、みんな夢。

「金生樹譬種子寶」（寬政十一年版、樹下石上作）大分限大福屋德兵衞は、置所の無いまでの金銀を費消しようとするが、容易に減らない。奢の限りを盡し、財產を減らすために江の島辨天で寶の安賣をしに出發する時、福の神が現れて、富貴天にあり人爲にては如何ともしがたしと示したので思ひ止まる。〔小池〕

切字 きれじ　連歌・俳諧【名義】連歌並に俳諧の發句に於て、その形式上、句を斷切する用をなす語辭をいふ。【成立】發句（別項）は早い頃から「必ず云ひ切るべし」といふことになり、即ち文法上完了した形式のものにすることになつて、他の平句（別項）とは異なるものになり、完全した想を一句獨立した短詩形で纏め上げねばならぬことになつたので、斯く短詩形で想を纏め上げる關係上、形式にも自然特殊な表現が生ずるやうになり、即ちこゝに切字といふことも、考へられるに至つた。切字といふ語は、俳諧時代に入つても續いて用ひられるが、江戸期の中頃、切字の考へ方も頗る進んでゐた時、蕪村は切字といふ語は字義が當らぬと云つて、新しく斷字と云つた（鬼貫抄序）。併しこの語は、一般化するには至らなかつた。また發句の斷切される個所を句切といふが、この語は、句の斷切といふことの考へ方の進歩と共にその用法も自然推移してゐて、始めは切字のある所を句切と云つたのであるが、句の斷切は切字の有無に關係がないと見るやうになつてからは、切字の有無に拘らず句意の斷切される所を句切といふやうになつた。切字は元來、發句に於て起り、發句に於て云ふことであるが、發句に切字が考へられるやうになると、發句以外の平句でも語辭の用法について考へられるやうになり、また發句の切字に用ひられる語辭で平句にも用ひられるものがありもするので、發句以外の句についても切字に對すると似た語辭の考へ方が起つてゐる。從つて切字に對する考へ方にも發句平句の兩方に共通するやうなものもある。斯かる點もあるので、いま發句以外の句に於て考へる語辭の名目や規定なども玆に一括して考へることにし、發句の切字を說いた後に說くことにする。

【切字の種類】〔十八の切字〕發句の切字に十八の切字と云はれるものがあつて、それは次の十八である。

かな　もがな　けり　ぞ　よ　や　か
いかに　ず　じ　ぬ　つ　らむ　け　せ
し　へ　れ

この中「け」「せ」「へ」「れ」の四つは、「吹け」「つくせ」「添へ」「氷れ」の如き當時の所謂下知の詞、即ち今日の動詞の命令形であり、「し」は形容詞の終止形、「けり」「つ」「ぬ」「ず」「じ」「らむ」（或は下の「む」だけ）は助動詞、「いかに」は副詞、他の六つは助詞である。京都帝大の平松家本「連歌用意抄」によると、この十八の切字は、救濟（別項）の所傳とあり、宗砌の「田舍への狀」や專順の「詞秘之事」、宗祇頃の「白髮

集」(別項)などに見えてゐる。手爾波を穿鑿して種々の說を立てたのは、二條良基(別項)の頃であるから、救濟とする說は攻究を要するとしても、大體の發生時代は知られる。良基の「擊蒙句法」(別項)の中にも、韻字の韓下に、かな留・よ留・つつ留以下の手爾波の中に、當世に用ふべきもの、用ふべからざるもの等、一々斷つてある。

〔二十二の切字〕十八の切字は、宗祇の時代には遵奉されてゐたが、紹巴(別項)の時代までに多少增減されて來たことは、紹巴が天正十年に明智光秀に書いて進上した「連歌至寶抄」によつて知られる。同書には二十二の切字を擧げてゐて、それは次の如きものである。

かな　や　し　ぞ　か　もなし　もがな
けり　ぬ　じ　む　を　さぞ　いさ
いつ　いかで　いづれ　いく　よ　こそ
は　げぢ(下知)

併し同人の「連歌教訓」には、大概として二十三と外に下知とを擧げてゐて、前の二十二とは出入もある。紹巴に教を受けた木食上人の「無言抄」(別項)にも、二十二の切字を擧げてゐるが、紹巴のものとは出入があり、二十二の外に下知を加へてゐる。幽齋の說を聞書した「耳底記別錄」にも二十二を擧げてゐるが、これが又紹巴及び木食のものとは出入がある。されば當時大體二十二の切字になり來つてゐるとは云へるが、確定的のものでもなかつたのである。

【句切の種類】句切の切れ方に、樣々の形式が生ずる。これを細密に差別し分類すれば、餘程の數のものにならうし、作風の變遷相異によつて如何にとも變動するわけであらうが、早くからこれ等の中、最も普通であるべきものが選ばれて名目が與へられ、切字の韓下で說かれてゐる。卽ち中の切、心の切(心切とも)、挨拶切、二字切、三字切、二段切(ふたつ切とも)、三段切(みつ切、みなぎれ、三所切とも)、を絕し、に絕し、玄妙切、大絕し、無名の切(無名切とも)などがそれである。併しこれ等の名目やその數は時代によつて多少增減されて行つてゐる。又これ等の中、時代によつてこれ等の名による切れ方の認め方が異つて行つてゐるものがある。例へば三段切は元は三句共に正體ある詞(物の名とも)を置いた發句といふのであるが、俳諧時代に入つては切字なしに別立した三句から成る發句をいふやうになつてゐる如きである。然るに定められた切字を入れても切れない句があり、定められた切字を入れないで切れる句がある所から、切れる切れぬの論が起つた。これは實は當然のことであつたので、この問題は俳諧時代に入つて解決されて行つてゐる。

〔押と留〕　脇・第三(各別項)を主に、その他の平句にも亙る語辭の呼應上考へたもので、發句にも共通する點がある。卽ち、後世の文法の係結法の起原をなすものである。「らむ」留りは上を「や」で押へ、「て」留りは「ぞ」「か」「よ」の三字で押へ、「にて」留りは「を」「は」「も」「からぬ」「らば」で押へ、「けり」留りは「に」で押へるといふが如きである。この中、「て」留りに對する三辭は「ぞかよ三字之事」と名目し、「にて」留りに對する五辭は「にてと留る五の次第」と名目し、「連歌用意抄」や「白髮集」以來、載せられてゐるものである。押へになる語辭を「押へ字」、留りになる語辭を「留り字」又は「留め字」といふ。卽ち今日の係辭・結辭に當る。これ等は今日から見ては文法上如何はしい點があるが、同時にまた後の文法の基礎をなすものでもあつた。

〔七のや〕「やの七の次第」ともいふ。卽ち「切るや」「中のや」「捨や」「疑のや」「はのや」「角のや」「口合のや」の七つである。これも句中の「や」の用法を文法上の呼應から考へたもので、「切るや」は句を云ひ切る「や」で、今いふ中間切れの「や」、「捨や」は今日の反語の「や」、「疑のや」は文字通り、「はのや」は「今ははや」の如きをいふと言ふので、品詞の認識不足に基いたもの、「角のや」は「思ふやと」の如きをいふと言ふので角は一句中に角を作るものの意であらうが、これも前者同樣、「口合のや」は「月や花」の如きをいふと云ふので、口合は調子の意であらうが今日の詠歎の「や」である。「連歌用意抄」や「白髮集」などに載せてゐるもので、「用意抄」には救濟の傳とある。併し宗祇の「連歌諸體祕傳抄」には九つの「や」になつてゐて、「てと留るや」「肩のや」の二種が增されてゐる。この後文法的認識の進んで行くに連れて、なほ名目や解釋の改められたものもある。「連誹祕訣抄」には、「捨や」を「とがむるや」と改め、別に住吉や・三芳野やの如きを「名所の捨や」と名づけ、「はのや」は「はや」と改め、「海づらや浪はるばると月澄みて」の如きを、「と」で押へる「や」と見て、これを「中道のや」と名づけて立て、その他にも解釋の改められてゐるものがある。要するに、この「や」の分類も、文法的研究發達の過程をなすものである。

〔剣字〕「ん」の字を持つ語辭をいふ。その中の「らん」は特に重要視されてゐて、自他及び自他以外と分つて「自らん」「他らん」「中道らん」としたり、時によつて分つて「過去のらん」「未來のらん」「現在のらん」としたり、句中に「らん」が二つ出るものを「重ねらん」と云つたりしてゐる。又「らん」に限らず「ん」を持つ語辭で、上に疑問詞なしに句末を結んでゐる時は、これを「一字剣」と云つてゐる。

〔抱字〕句中にあつて、上下が呼應するやうに調節を取つてゐる語辭をいふので、「連歌諸體祕傳抄」には、句末を「にて」と留める場合のものとして、「を」「は」「も」「からぬ」「あらは」「切目のは」の如き手爾波を擧げてゐる。併し句末を「にて」と留める場合に限られるものではない筈で、後には「にて」以外の場合にも考へられるやうになつてゐる。

〔三のし〕三種の「し」の意味で、「し」に過去未來現在を區別して考へ、見し・聞きしの類の「し」を「過去のし」、待ちなましなどの「し」を「未來のし」、遠し・近しの類の「し」を「現在のし」としてゐる。そして「未來のし」は、ましの「し」に限るといふ。(俳諧時代では、あらし、なからしなどの「し」も認めて來る)これも品詞の認識不足に基いてゐるものであることは一目瞭然であらう。

〔三のぬ〕「畢ぬ」「不ぬ」「らんぬ」の三つで、「畢ぬ」は、今日の文法でいふ現在完了の「ぬ」、「不のぬ」は打消の助動詞「ず」の連體形の「ぬ」、「らんぬ」は「らん」(推量の助動詞)に通ふものだといふのである。(以上潁原・志田)

【俳諧の切字】〔江戶時代〕俳諧の發句に於ける切字の說は、言ふまでもなく連歌で定められたものを襲用した。併し貞門の定めた切字の數は、人によつて一定してゐない。季吟の「埋木」(別項)には、大概として二十八と外に下知九つを擧げ、竹亭の「をだまき綱目」には、四十八と下知九つを擧げ、鷺水の「誹諧新式」

(別項)には三十九と下知八つを擧げてゐる。然るに蕉風に至つて切字に對する考が全然變り、切字を定めることは方便に過ぎないで、句切は切字の有無に關せず內容的なものであることが闡明された。卽ち芭蕉は「切字に用ふる時はいろは四十八字皆切字也。用ひざる時は一字もきれ字なし」(花實集)と云ひ、去來は「此定字を入るゝ時は、十に七八はをのづから句切るゝ也。殘二三は切れざる句、又不入して切るゝ句あり」(同)と云ひ、支考は「二十五箇條」(別項)に、「發句の切字といふは差別の心なり。(中略)切字ある發句とても、きれぬ時には發句にあらず」と云つてゐる。この後、蕉門のこの考が大體に於て遵奉されて行くが、それと共に、一方では指導的な意味で切字を數へ擧げた俳書や、學問的な見地から切字乃至俳諧手爾波を研究した書が幾らも出てゐる。例へば貞山の「俳諧手挾燈」に、六十ばかりの切字を擧げ、切字ならぬ分をも擧げたり、馬琴の「俳諧歲時記」(別項)に、芭蕉の語を引きながら二十四種の切字を擧げたりしてゐるのは、指導的な意味からで、この種のものはまだ〳〵あるのであるが、學的な立場から研究したものには、無腸の「也哉抄」(別項)を始めとして、本阿彌の「俳諧餘情錄」、御杖の「俳諧手爾波抄」、北元の「古學截斷字論」などがある。なほ指導的な意味の俳書類には、連歌の部で說いたやうなものは殆ど見て採つてゐる事は勿論で、ただそれが或る變改が加へられたり解釋が改められてゐたりする相違があるのみである。〔明治大正時代〕明治時代に入つても、舊派俳人の方では江戶時代の說をそのまゝ遵奉したので、それに便するものとして靑軒の「俳諧獨學」や鈞雪の「俳諧提要」の如きが出てゐる。新派の子規は切字及び句切について特別な說がなかつたが、大正の乙字はこの方面に於ても科學的な新見解を出した。句切を內容的に見たことは、云ふまでもないが、俳句は二句一章のものであることを科學的に論證したのである。(以上志田)

【參考】眞木柱　華文○誹諧曉山集　芳山○字陀法師　森川許六○俳諧古今抄　各務支考○俳諧其傘　相瀨貞山○白馬集　各務支考○俳諧有耶無耶關　著者不明○補綴改正俳諧歲時記栞草　馬琴編　青藍補○正風俳諧直指傳　田川鳳笠○乙字俳論集　大須賀乙字

棄老傳說（きらうでんせつ）　傳說

【內容】甲乙二種ある。(甲)昔、老衰を嫌忌する若い帝があつて、國中四十以上の男女の存在を許さぬ掟を嚴に布かれたので、七十近い兩親を持つ中將は、床下を掘つて密かに隱し養ふ中、支那の帝から、兩端同じき木の本末を示せ、同じ形の蛇の雌雄を分て、七曲の玉に緖を通せ等、次々に難題を提示したため、君臣困惑するのを、中將はその度に兩親の敎へに隨つて解き得たので、國の面目を墮さなかつた功により、その兩親を許されたのみならず、以後老親に對する禁令を解かれた。(乙)信濃國更科の男、親のやうに仕へてゐた姨の老衰したのを惡み厭ふ妻にせがまれて、やむなく寺に伴はうと僞つて、背負うて山に捨て歸つたが、八月十五夜の月色を眺めて、「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠じ、再び山に登り連れ歸つて孝養を盡した。【出典】(甲)枕草子「社は」(乙)今昔物語卷三十、信濃國姨母弃山語第九、大和物語卷下【解說】(甲)は原始習俗を反映する難題說話で、「枕草子」では蟻通明神の緣起と結び付けられてあるが、その本據は、實は「雜寶藏經」卷一棄老國緣第四に見える印度の棄老國傳說で、「今昔物語」卷五第三十二話にも載せてある。(乙)は所謂姨捨傳說で、「わが心慰めかねつ」の古歌(古今集雜)から胎生した地名傳說に、支那の棄老傳說、卽ち楚人原谷(詩含集卷三下には元啓)の孝行譚が日本化して合體したもの。原谷の傳說は、「今昔物語」卷九第四十五話にも載せ、又古く「萬葉集」卷十六、竹取翁の長歌にもこの故事を歌つた句が含まれてゐる。朝鮮說話にも全く同形のものがあり、支那及び日本のと互に交涉ある事は疑なく、特に原谷のは棄てられるのが祖父であるが、朝鮮のは祖母であるのは、一層姨捨に近い點で注目すべきである。なほ(甲)(乙)とも孝德と老人尊重を謳へてゐる點は共通してゐる。【影響】(乙)に取材した謠曲「姨捨」が有名である。日本お伽噺の「姨捨山」は兩種の傳說を混じた形になつてゐる。

【參考】攷證今昔物語集天竺震旦部及び本朝部下○日本傳說硏究第二卷　藤澤衛彥　(島津)

記錄（きろく）

【名義】もとカキシルス義、文字を以て言葉又は事柄を記載する意であつたが、後にはその記載せられたものを汎くこれを記錄といふやうになつた。大寶の「職員令」に「大內記二人、掌造詔勅、凡御所記錄事」と見え、又延喜の「內記式」に「凡內記、身候陣頭、掌記錄」とも見えて居るのは、その前者に屬するもので、「宮主秘事口傳」の九月伊勢例幣の條に、「幣使齋部官人間事、國史記錄文、分明之上者云々」と見えて居るのは、後者に屬するものである。記錄は又時代と場所とに依り、又これを使用する人に依つて、その意義を異にする。されば、これを廣義に解する時は、「古事記」「日本書紀」等の古典舊記は勿論、相手方に示す各種の文書や、記念のために、金石又は木竹の工作物等に筆記し、彫刻し、鑄造せる銘文・碑文・棟札等の類をも稱すべく、これを狹義に解する時は、單に日記のみをも言ふべきである。

【類別】記錄はこれを大別して、日記と部類記との二類とする。日記とは、遺忘に備へんがため、その日その日の晴雨を始め、自己の實行し、又は見聞したる事柄を記錄したものをいひ、部類記とは、日記に記すところの恒例臨時の儀式、年中行事等を分類してこれを編纂したものをいふのである。例へば御卽位に關する記事を類聚したものを「御卽位部類記」といひ、大嘗祭に關する事柄を抄出したものを「大嘗會部類記」と稱するが如きである。さて日記は、又その記載せる文體に依つてこれを眞字日記と假名日記との二種に分つことが出來る。眞字日記とは、謂ゆる記錄文體卽ち和習を帶びた漢文の體裁で書いた日記で、例へば、「小右記」「中右記」「台記」「玉葉」(各別項)の類をいひ、假名日記とは、多く平假名、もしくは片假名を交へて記した日記で、例へば「紫式部日記」「讃岐典侍日記」「辨內侍日記」(以上別項)「竹向の日記」「御湯殿の上の日記」の類をいふのである。眞字日記は何れも男子の筆記したもので、假名日記は殆ど女子の手に成つたものであつた。假名日記の最初の試みとして名高い紀貫之の「土佐日記」に「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとてするなり」と記せるは、これを證して餘りある。日記は又これを記錄した場所や人柄に依つて、公の日記と私の日記との二種に分つことが出來る。公の日記とは、專ら朝廷の公事、もしくは幕府の公用を記載したものであ

る。先づ朝廷の公事を記したものには、「殿上日記」「内記日記」「外記日記」「新抄」「番記」「番衆結所記」等の類があり、幕府の公用日記には、「吾妻鏡」「御殿」「花營三代記」「殿府政事條」「營中日記」等の類がある。私の日記に至つては、上は天皇・上皇・皇后・親王等を始め奉り、攝政以下の官人より、下は神官・僧侶・庶民等の一私人に至るまで、各々その日記を書き遺して居り、その書名の如きも、始と雖ぐるに遑がない程である。而して又後人が、これ等公私の日記に據つて編纂したものに、「日本紀略」「百練抄」(永盛三朝史略抄)等の類がある。但しこれ等後人の編纂にかゝるものには、稀に誤脱・錯簡・重複等の箇所があるから、これを引用するには大に注意を要するのである。

【日記と日日記】 日記は、「ニッキ」といひ、書くは又「ニキ」ともいつた。「伊呂波字類抄」に「記、日記を「ニキ」と訓し、又「土佐日記」「源氏物語」等に、假名で「にき」と書いてあるのでこれを知ることが出來る。併し「ニキ」と書いてあつても、日語で唱へる時には、これを「ニッキ」と促つて讀んだかも知れない。仁王會を「禁中名目抄」に「ニワウヱ」と書しながら、その本註に「俗で訓んで「ニムナウヱ可」云也、是連聲也」と書いてあるのがその適例である。日記は又これを日録ともいひ、又日次記ともいひ、或は日錄とも、日件錄とも、日用記ともいひ、或は又、手記・暦記・家記・名記・正記等とも稱することがある。日記にもまた記錄と同じく廣狹の二義があつて、狹義の場合は、吾人が通常稱する所の日記即ち日次記を指すが、廣義の場合は、汎く諮詢の文書、儀式の次第書、又は紀行・物語の類をもいふことがある。例へば「續日本後紀」二「日本紀略」二「御堂關白記」等には、犯罪者の罪狀を勘問して記錄したものを日記と記し、又「中右記」には「新儀式」や「年中行事」の如き書をも日記と稱してゐる。(續日本後紀以下和田)。又武家時代に行はれた「流鏑馬日記」「笠懸日記」の如きも、予が先年鎌倉の鶴岡八幡宮の境内で實見したところに依れば、ただ折紙に列記した射手の姓名の上に、的を射當てた時は白丸を記入し、中らない時は黑丸を記入し、その數に年月を書いただけのもので、普通に稱する日記とは、大にその趣を異にしたものである。又紀貫之の紀行文を「土佐日記」といひ、「多武峯少將物語」を「高光日記」と稱するのである。されば、後にはこれ等廣義のそれに區別せんがために、狹義の日記をば日日記と稱するやうになつた。「大内家壁書」の文明十五年八月一日、赤間關の兵船濱海關役の事をいつて「自今以後、可ゝ爲。此分之由儀定訖。則所ゝ被ゝ載ゝ壁中日々記ゝ、雖ゝ書如ゝ件」と見えて居るのは即ちそれである。「貞丈雜記」十六に「日記と日々記とは別の事也。日記とは表立たる事を記して後證の爲に記せるを云。日々記とは、其日々の晴雨を始め、雜事を記せるを云。御湯殿上之日記に、ひにつきと見ゆ。此ひにつきと云は、御湯殿の上にて、官女の其日々の事を記せし別の文と見えたり。されば蜷川親元が記せし殿中日々記と云へるも、即其日々の事を注せし故、日々記なるにや。日々記と唱へずしてひにつきと云へるなるべし」といへる、以て證すべきである。併し日記と日日記とは大體同じもので、近藤重藏の「御本日記附註」上に「日記トハ其日々記スル處ノモノヲ云フ。即チ日日記ナリ。又當時ノ通語也」と云へるは、頗る穩當な說である。

【日記の起原】 日記の名は、支那では、舊く周防國に配流せられ、同三年常陸國に移配せられたれば、かゝる醜名をも負ひしならん」と云はれたるは、如何にも尤な說である。きて斯樣に姓名を以て名づくるものには、以上十一種の差別がある。次に(二)官職を以て名づくるもの。これにも亦次の三種の別がある。(イ)官名を以て命ずるもの。例へば「外記記」又は「外記日記」の類。(ロ)官名を省略して名づくるもの。例へば、權大納言藤原行成の日記を「權記」といひ、春宮大夫藤原實資の日記を「春記」、太宰權帥源經信の日記を「帥記」といふ類又右大辨平時範の日記を「右大記」といひ、但馬守隆方の日記を「但記」といふも同例である。(ハ)官職の唐名を以て命ずるもの。皇后宮權大夫源師時の日記を「長秋記」といひ、左大臣藤原頼長の日記を「台記」といひ、權中納言光輔の日記を「醍記」といふ類で、「長秋」は皇后宮大夫の官名長秋監に取り、「台記」は大臣の唐名三台といふに取り、「醍記」「醍記」は、大中納言の唐名亞相と龍作とに採つたものである。又式部卿重明親王の日記を「李部王記」といふに就いては、古來學者間に疑問があつて、本居宣長の「玉勝間」四にも「李部王の記といふふみの名字心得がたし。西宮記、北山抄などに引かれたるには、吏字をのみかゝれたり、台記などにすら東字かゝれたり。李は後に誤れるなるべし」とあれど、佐藤博士は「古事類苑」官位部の式部省の條下に自ら按文を附して、「按メルニ、吏部ヲ李部ニ作ルハ、管子法令篇ニ、皐陶爲李ノ注ニ、古法録之官、作ル此李官、李同理トアルト、漢書公卿百官に、國史と並べて「曆注」と記してあるのは即ちそれである。支那から起つたので、我が國で予の日に編れた最古のものは、蓋し「東大寺正倉院文書」卷八と、「續修東大寺正倉院の殘篇二切である。これを「續日本紀」二三正經覽」等に參照するに、天平十八年二月及び三月のもので、二者の間に缺行がなく、その記事も亦國史の缺を補ふに足り、實に珍重すべきものである。

【日記の命名法】 日記の表題は、これを外題といふ。日記を書く目的は、大抵遺忘に備へるためであるから、他の書籍のやうに、初めから立派な書名を撰定してこれに命ずる事は稀で、通常その外題の無い場合が多い。偶々自ら外題を命ずるものがあつても、多くは卑下して、愚記とか、愚抄記などと書くを例とする。そこで日記の外題は多くその父祖又は他家の日記と撰定してこれに命名したものである。公の記錄でも、後から命名したものである。延喜の「式部官式」に「凡諸司年終帳、正月廿一日進之。(中略)加外題二下勘解由使」と見えてゐるのでこれを證する事が出來る。さて我が國で日記の外題に就て研究の纏緒を開いた者は、尾張の人天野信景の著「盬尻」三十二に「諸家名記の題目、或は唐名の官儀を付、又は居所を名付けし類、數ふるに遑あらず云々」と云つて、その例を擧げたのが初であらう。近來佐藤誠實・松本愛重・和田英松の三博士が、漸次その研究の歩を進められたが、予は今これ等の諸說に、更に私見を添へて、大體左の十類に分つて說明する事とする。(一)姓名を以て

名づくるもの。これには又次のやうな十一種の別がある。(イ)姓と名を併せて命ずるもの。例へば、「吉原重憲記」「大江佐國記」の類。(ロ)姓又は稱號と名の一字づつを取つて命ずるもの。平信範の日記を「平信記」、土御門右大臣源師房の日記を「土方記」といふ類。(ハ)姓のみを以て命ずるもの。例へば、「平記」の類。(ニ)姓又は稱號を省略して命ずるもの。大江匡房の日記を「江記」、花園左大臣源有仁の日記を「園記」、九條右大臣師輔の日記を「九暦」といふ類。(ホ)名のみを以て命ずるもの。藤原敦光の日記を「敦光記」、中原師元の日記を「師元記」といふ類。(ヘ)名の反切を以て命ずるもの。中山忠親の日記「山槐記」を「建幸記」といひ、その後嘉定親の日記を「嘉戒記」といふ類である。「後苑日抄」二の反名の條に、「此方人、多是撃名、國讀頗煩、古人或有ゝ取ゝ上下二音ゝ呼之者ゝ謂ゝ之反名ゝ」と見え、反名は一に「これを唐名とも云つた。大江匡房の門人藏人藤原實兼が、その師說を筆記した「江談抄」二に「古人名、唐名相通名等、三善清行卿、田忠臣謚曰、紀長谷雄曰嘉(中略)江納言朝綱、藤明衡宰相、江匡房論昌」と見えて居るので分る。即ち清行の名はキヨイキと訓んだに據つて、その唐名を居敬(注、居敬の敬をヒキと讀するが如し)と命じたもので、忠臣を達音、朝綱を達率と云ふのも同例である。以て忠親の日記を「達幸記」と稱する理由を怡るべきである。(ト)名の文字の偏旁を取りて命ずるもの。例へば「糸東記」「人車記」「糸言記」の類をいふ。「糸東記」は「左經記」の一名で、參議左大辨源經頼の名、「人車記」は「長綱記」の一名で、即ち洞院兵部卿平信範の名の二字の偏のみを取つて名づけ、「糸言記」は「師記」の一名で「太宰

天平十八年の具注曆斷簡(東大寺正倉院文書)

帥の權師源經信卿記」の一名で、糸はその名の經の偏、言は信の旁を取つて名づけたものである。後深草天皇の寛記を「水草記」といひ、清慎公小野宮實賴の日記を「水心記」といふも同例である。中古の書名にかゝる例の多かつたことは、醍醐寺の事を書いた「醍醐抄」を「西西抄」とも「重西抄」ともいひ、又「天木和歌抄」の外題も、その歌文に據つて見ると、日本國號の扶桑を憚つて「扶之字之木つくり、桑之字之木を取合て、天木和歌抄と名付」とあるので、これを知る事が出來る。(チ)姓に偏旁を附加して命ずるもの。例へば、中山内大臣忠親の日記を「糸言記」といふ類である。以て忠親の日記を「達幸記」と稱する理由を怡るべきである。(ト)名の文字の偏旁を取りて命ずるもの。例へば「糸東記」「人車記」「糸言記」の類をいふ。「糸東記」は「左經記」の一名で、參議左大辨源經頼の名、「人車記」は「長綱記」の一名で、即ち洞院兵部卿平信範の名の二字の偏のみを取つて名づけ、「糸言記」は「師記」の一名で「太宰

寺相國記」といひ、同遺長の日記を「法成寺攝政記」とも、「御堂關白記」ともいふが如きは、もと寺號より出でたれども、法住寺殿の日記、法成寺殿の日記の意なれば、亦この類と見做すことが出來る。次に小野宮右大臣藤原實資の日記を「小右記」といひ、中御門右大臣藤原宗忠の日記を「中右記」といひ、大宮右大臣藤原俊家の日記を「大右記」といふが如きは、稱號と官名との一字づつを取合せて名づけたもので、左大臣源俊房の日記を「水左記」といふは、姓の省略字に官名を添へ、左大辨源經頼の日記を「長綱記」といふは、官名と名との一字づつを取つて名づけたものである。(リ)職名を以て呼ぶもの。太宰權帥藤原季仲の日記を「玄記」といふ類で、縮めて稀な例である。和田博士の說に「平家物語」の五節夜闇撃の條に、太宰權帥季仲は、色の黑かりければ、黑帥とぞ申ける。普藏人頭たりし時、それも五節に、あな黑々、黑き頭哉、いかゞ成人の法ぬりけんとぞはやしたりければ云々と見えて、顔色殊の外黑かりければ、人呼んで黑帥と稱するに

よつて、その日記をも玄記と號せしならん、季仲は、後長治二年十二月日吉の祈に依つて

表ノ長吏ノ下ノ類師古ノ註ニ、吏理也トアルトヲ觀テ、其義ヲ知ルベシ、又我國ノ書ニ在リテモ、本朝續文粹卷二ニ載スル所ノ宮家殿勤答ニハ、居要ニ李陰陽ニ之吏任ニトアリテ、理ヲ李ニ作レリ、赤傍證ニ供スベシ」と辨ぜられたのは如何にも穩健な說である。(三)時を以て名づくるもの、これにも亦三種の別がある。(イ)年號に年數を添へて唱ふるもの。「康保二年記」「長保二年記」「寬仁三年記」などの類。(ロ)年號のみを冠して唱ふるもの。「寬平御記」「延喜御記」「天曆御記」「長曆御記」「延長御記」又は「康平記」「元弘日記」などいふ類。(ハ)年號を略して一字と爲し、更にこれを分析して唱ふるもの。例へば鷲尾權中納言藤原隆康の書いた永正・大永頃の日記を「二水記」とも、「一止記」ともいふの類である。按ふに、「二水」は永の字を分ちて二水となし、一止は正の字を析ちて一止としたものであらう。かかる例は極めて稀である。(四)居所を以て名づくるもの。「殿上日記」「內記所日記」「御湯殿の上の日記」の類。これにも亦居所の唐名を以て命じたものがある。例へば、中納言實綱の日記を「銅駝記」といひ、三條內大臣公教の日記を「敎業記」といひ、參議四條爲隆の日記を「永昌記」といひ、又攝關一條兼良が「玉蘂」「玉葉」を抜書したものを「桃華蘂葉」といふ類である。桃華・銅駝・敎業・永昌は、共に京都市中の坊城の唐名であることは、「拾芥抄」中末の京都坊名の條に「一條桃花坊、二條銅駝坊、三條敎業坊、四條永昌坊」等と見えて居るので明かである。(五)用紙を以て名づくるもの。日記は古く「具注曆」の裏に注記し、又はその紙背に書くのが常であつたから、日記の事を直に曆とも言つた。これは支那が本で、唐六典の尙書都省の條に「凡施行公文應印者、監印之官、考其事目、無或差繆、然後印之、必書於曆、每月終納諸庫」と見え、又東坡志林に「子由言、有一人、死而復生、問冥官、如何修身可以免罪、子宜置一卷曆、晝之所爲、夜必記之、不可記者、是不可言、不可作也」と見えて居る。わが國でも、「古今著聞集」に後一條天皇の萬壽二年踏歌節會の事を言つた所に、「入御ありけるに、三位中將師房をおきながら大納言齊信卿警蹕をせられければ、人々あやしみあへりけり。權大納言行成卿その失錯を曆にしるして、臥內にうちおかれたり。曆にしるさん爲に、先例には書たりけるにや」云々と見えて居るのが即ちそれである。かくて後には、日記を曆といふことが常となり、從つて日記に「御曆」「曆御曆」「愚曆」「果曆」「殿曆」「岡大曆」等の名が散見するやうになつた。(六)記事の內容に依つて名づけるもの。例へば「御即位記」「大嘗會記」「絡記」「冠記」「後鳥羽院御賀記」の類をいふ。中原師遠が大治二年鯨珠に關する和漢の勘例を書いた「鯨珠記」の如きも、亦この類である。(七)故事を以て名づくるもの。例へば「月記」「玉蘂」「百練抄」の類である。「月記」は桂大納言光賴の日記で、月中の桂の故事に據り、「玉蘂」は光明峯寺關白藤原道家の日記で、山岡俊明の「類聚名義抄」に從へば、その出典は「白氏文集」に見ゆる「虛白相向生、唐昌玉蘂花」といふ詩句に取り、「百練抄」も同書に依れば百鍊で、「百鍊の字は、皇神經世書に、金百鍊然後精、人亦如此、とあるを出所とするにや、白氏文集にもあり」と言つて居る。(八)父祖の日記に因みて名づくるもの。例へば、清愼公實賴の日記を「水心記」と稱したるに對して、その養子(實は孫)實資の「小右記」を「續水心記」といひ、又藤原宗俊の日記を「?林」と稱したるに對して、その子宗忠の日記を「愚林」といひ、宗忠の子宗能の日記を「愚葉」といひ、また藤原忠通の日記を「玉林」と稱せしに對して、その子兼實の日記を「玉葉」といひ、兼實の子孫たる道家・實經・經通等の日記を「玉蘂」「玉藻」「玉英」などと命名した類である。(九)卑下して名づくるもの。例へば上記の「愚林」「愚葉」、もしくは「愚昧記」「猪隈記」の如き類で、萬里小路宣房の日記を「萬一記」といひ、日野家の日記を「百一錄」といふも亦この類である。(十)尊重して名づくるもの。前記卑下の反對で多くは子孫がその父祖の日記を尊んで稱するものである。「台記」六、久安三年七月一日條に、故京極殿藤原師實の日記をその曾孫たる賴長が尊んで「御曆」といひ、「清獬眼抄」(凶事)に引くところの「宗河記」に、祖父公方の日記を「御曆記」と書けるも亦同例で、上記の「?林」「玉林」「玉蘂」「玉藻」「玉英」などもこれに數ふべきものである。この他、日記の書名には、所藏者に依つてその外題を異にするものがある。月輪關白九條兼實の日記を九條家では「玉葉」といひ、二條家では「玉海」といふが如きそれである。二條家本は夙く世に流布したから、「大日本史」や「古事類苑」には「玉海」として引用し、「大日本史料」は、後に九條家の原本に據つて、「玉葉」として引載してある。かく日記には、異名の同書があると同時に、同名の異書もあり、又同書で異名の頗る多いものもあることを知らなければならない。

【日記の書法】 平安時代には、日々の出來事を備忘のため、曆書に記入することが盛んに行はるゝに及び、これを以て搢紳家の日中行事の一と爲し、或はこれを遺誡に記して、その子孫を誡めたりしものすらあつた事は「拾芥抄」下末に收むる右大臣九條師輔の著「九條殿遺誡」(別項)を見てこれを知ることが出來る。それには次のやうにある、「先起稱屬星名字七遍微音、次取鏡見面、見曆知吉凶、次取楊枝向西洗手、次誦佛名及可念尋常所尊重神社、次記昨日事、事多日日中可記、次服粥、(中略)次有可用仕事、即服衣冠、不可懈緩、」とも、又年中行事の條には「夙興照鏡、先窺形體變、次見曆書、可知日之吉凶、年中行事、略注付件曆、每日視之次、先知其事、兼以用意、又昨日公事、若私不得止事等、爲備忽忘、又聊可注付件曆、但其中要樞公事、及君父所在事等、別以記之、可備後鑒」とも書いてある。而して若し曆書の表及びその紙背にも書き盡すことが出來ない場合には、曆を切離してその中間に新に紙を挿入し、或は別紙に記してこれを別記と稱した。「台記別記」などといふのは即ちそれである。而して、又當時藏人の職制を記した「侍中群要」(四)の日記の條に、先づ「殿上日記」の記者に就いて「成業の者か多く之を記す。但し古今の舊例を見るに、非成業の者と雖も、其事に堪へた者は亦之を記す」といひ、次にその記載の事項に就いて、「當日の事、巨細を漏さず記すべき也。記載すべからざる事用心すべし云々」と記し、又その用紙に就いて、「件の日記、凡そ反古に書く。多くは是れ假文の裏等なり。近代紙屋紙を以て之を書く」と記してあり、又同書の日記體といふ條には、その書き方を示して「日下に支干を書く。次に天の晴陰を注す。辰一刻格子を上ぐ。同四刻主水司御手水幷に御粥を供ず。巳一刻日次の

御贄を供ず、午一刻朝膳を供ず、酉一刻夕膳を供ず、戌一刻格子を下す、次に宿侍す。臨時の事は、或は次の刻限にこれを書く、多くは宿侍の後之を書く、記す藏人は宿侍に入らず、名所書かず。」と書いてあるが、これは獨り日記の書法を見るに足るのみならず、當代に於ける天皇の御起居をも窺ひ來ることが出來て甚だ貴重な史料である。

【日記の目的】 日記は固よりこれを記錄する人に依つて、各々その目的を異にするけれども、多くは日々の行事と、その見聞するところとを注記して、他日の遺忘に備へんがためである。而して公家たると武家たるとを問はず、樞要の地位に立てる人の日記は、その日々實踐躬行したところの儀式典禮を仔細に記錄して後鑒に備へ、或はこれをその子孫に書き遺し、他日子孫が父祖に代つて、その要職に當つた時の模範と爲さしむるに在つた。されば日記の目的は、單に自己の日記を手記するのみならず、その父祖、又は他家の日記をも抄寫し、更にこれ等を類聚して國家有事の際、公私の參考に供したものである。謂ゆる「御即位部類記」「大嘗會類記」の如きは、この必要に應じて作られたものである。國家の大禮大祀等に部類記の作られるのは固より當然であるが、一私人でもその必要を認めてこれを作つた著名な例は、中御門右大臣藤原宗忠の例である。即ち「中右記」の保安元年六月十七日の條に、同書の著者宗忠がその子四位少將宗能の、他日立身出世して納言や大臣となり、朝廷に奉仕する時の軌範とせんがために、自身が三十四年間に書いた十五帙百六十卷の日記を分類した事を言つて「今日私曆記、部類了、從寬治元年至此五月卅日、卅四年間曆記也、合十五帙、百六十卷也、從去々年至今日、分侍男共、且令書寫、且令切續、終其功也、是只四位少將家、若遂奉公之志者、爲勤公事所抄出也」と記せるのが即ちそれである。以て當時如何に搢紳家が、日記の必要を認めしかを見るに足るべきものである。又前に引用した「九條殿遺誡」に、昨日の公事もしくは私に止むを得ざる事等、忽忘に備へんがため、又聊か件の曆に注し付くべしといひ、又「その中、要樞の公事、及び君父所在の事等は、別記に記して後鑒に備ふべし」と言へるは、實に當時に於ける日記共通の目的を察するに足るものである。而して又近衞家熙の談を記せる「槐記」の享保九年九月七日の條には、更に日記本來の目的を詳說して、大要左の三項に約し、第一は、主上の御下問に對へ奉らんがため、第二は、記錄に精通して、政治の運用に便せんがため、第三は、子孫が父祖の官職を世襲したもののためであると明記してゐる。斯樣に日記は常にこれを精讀して政治の運用に供するばかりでなく、上は天皇の御諮詢に對へ奉り、下は子孫のために規模を垂るるものであるから、世官世職で、而も世系を尊重した封建時代に在つては、その祖先が親しく書き遺した記錄を傳ふると否とは、以てその家の正庶を識別する一の試金石ともなつて居たのである。「三內口決」の攝家清華の事を言へる條に、「近衞ハ、系圖之面雖爲宗領、名記無之、九條ハ雖爲庶流、峰關白(九條道家、光明峯寺と號す、「玉蘂」の著者)、月輪禪閤(道家の祖父九條兼實、「玉葉」の著者)、後京極攝政(道家の父良經「殿記」の著者)之御記、是ヲ三代ノ正記ト號メ、爲天下之鏡、然間九條ハ正統ト見へ候哉」と記せるが如き、即ちそれである。これ固より特例であらうけれども、亦以て當時如何に祖先の記錄を重要視してゐたかを察するに足るのである。

【記錄文體と記錄語】 記錄の文體は漢文でもなく和文でもなく、一種の和漢混淆文である。恰も今日の書簡文體の如く、我が國民の利便と必要に應じて自然に發達したものである。その一二の例を示せば、「小右記」寬仁二年十月十六日の條に、女御藤原威子が後一條天皇の皇后に冊立せられた時、その父道長が非常に喜んで和歌を詠じ、藤原實資に返歌を求めた時の事を書いて、「太閤(道長)招呼下官云、欲讀和歌、必可和者、答云、何不奉和乎。又云、誇たる歌になむ有る。但非宿構者。此世乎は我世と所思、望月乃虧たる事も無と思へは。余申云、御歌優美也。無方酬答、滿座只可誦此御歌、」云々と見え、又「玉葉」文治二年五月十日の條に「前攝政の可夜打とて被騷とこそは聞食しかと云々。凡如參如幻、愁生聞如此事、可悲々々。」又同十一日の條に、「前攝政ハ殊希惜ク思食人也。萬なとなき樣に可致沙汰。每事不可見放人云。付盧言云々、尤不便、耻かましき事云々。良久之後退出了」と見えたる類である。想ふに文句の終り每に「云々」又は「了」「者」等の文字を使用するは、記錄文の特徵である。而して又その漢字と漢字との中間に、片假名、平假名、又は萬葉假名を挿入して、巧みに國語を描出する書き方は、これを宣命文體と稱して、既に奈良朝以前から行はれて居たやうである。この方法はもと朝鮮人の發明で、即ち後の諺文に於いて見るが如く、支那の漢文を朝鮮文に轉化した方法に負ふ所が勘なくなかつたであらうと言はれてゐる。次に記錄語を硏究するには先づ左の二つの場合に注意するを要する。(一)は語の意義は同じでもその文字が異なる場合、(二)は文字は同じでもその意義が異なる場合である。前者は例へば國語の「ゆたに」(寬の意)を油緖と書き、更にこれを弓緖とも書き、又室內を裝飾する意味の「しつらひ」を室禮又は失禮とも書き、又「をこがまし」「をこ者」などの「をこ」を嗚呼又は尾籠と書き、後に尾籠をばビロウと音讀して、無禮の意となり、尾籠千萬などといふに至つたものである。又後者は例へば、大寶の考課令に、景迹といふ語がある。「令義解」に「景迹者、景像也。猶言狀迹」と解し、又「令集解」には「讚云、爾雅、景大也。謂人所履行之美惡大迹耳」とあつて、人々の行跡即ち品行を謂つたものである。これを奈良平安朝時代の書籍、即ち「萬葉集」十二には、「コヽロ」と訓み、「日本書紀」二十九には「ロヽロバセ」と訓み、「類聚名義抄」佛上には「ヲモハカル」と訓みて、漸次にその意義を轉換し、鎌倉時代に書いた「源平盛衰記」三十六や、「吾妻鏡」二十五や、春日神社文書三、東寺百合文書六十七等には、何れもこれを推量又は推察の意に使用してある。「史徵墨寶」第一編に收むるところの高尾の文覺上人の五月五日附の書狀には、景迹の景に辶を付けて遶に作り、「其外國中例境、文覺が不能遶止候也。且可有御遶迹候也」と書けるに依つて、「史徵墨寶考證」には、草體の字形の似て居るところから、これを遶遠と讀んであるのは誤であらう。又從容死につくなどいふ從容も平安朝から鎌倉時代には或は糸偏をつけて縱容とも書き、「伊呂波字類抄」や、「本朝文粹」七、「朝野群載」二、「明月記」の建保四年十一月一日の條などには、松

容とも書いてある。一般に容貌ともいう。【発音】キボウ【出典】大鏡【用例】容貌優美にして、心ばへ賢く、【参考】容貌は、容姿・容色・容顔・容儀などとも書く。

疑惑（ぎわく）　小説　【作者】近松秋江　【発表】大正二年十月『新小説』　【背景】大正二年十一月頃　【梗概】女に対する男の執着を、これほど深刻に身を以て描いた作品は、現代の日本には異数である。これほど虚飾を去り、見えを捨てて男の愛着心をぶちまけた作品は稀らしい。この作者の前作「別れた妻に送る手紙」、「霊と肉」等で、一夜漬として「鐘がなる今鐘が鳴る」（別項）、「文月悦子」（別項）、「狂恋七時間半」（別項）等である。提携環境では近松門左衛門や紀海音等の世話物の改作が多く、「八重霞浪花浜荻」（別項）等の外に挙げるべきものがない。明治に入つては、ざんぎり物主義三の「月宮殿明治東京」（明治五年十月、東京森田座）、西南戦争の「西南雲晴明朝東風」（同十一年三月、新富座）、高橋お伝の「綴合阿傳夜刄譚」（同十二年五月）、花井お梅須田屋殺しの「月梅薫朧夜夢」（同二十一年四月、中村座）等があり、何れも歌舞伎劇の作である。日清戦争には戦争劇続出し（川上音二郎参照）、その後時局を当込んだり、大きな事件を題色したものが絶えず上演された。【秋葉】

琴（きん）　楽器　【異称】「きんのこと」とも又七絃琴ともいふ。【構造】長さ三尺六寸内外、幅六寸内外、厚一寸位の木製長箱の胴の上面に七本（太古は五本）の絃を張り、左手指を以て絃の各所を押へ、右手の指爪を以て弾奏するものである。その大さ及び形は、時代で多少の差違があるが、図に示すものは極めて普通に行はれる。漆は黒色を普通とするが、稀には褐色または暗朱色のものがある。胴の裏面には二個の長指掛。

孔が　の磬

奏者が左手指にて絃を按ずる時の勘所の目安とするものである。絃は絹糸を撚つたもので、一絃毎にその太さを異にする。支那では昔から琴の人生に対する価値を重んじ、「琴は禁也。邪念を禁ずる也。」と稱し、君子身を修むるの具としてゐる。従つてその構造の上にも象形的解釈を与へ、長三尺六寸は一年三百六十日に象り、幅六寸は六合に象り、胴の上圓くして下方なるは天地に象り、五絃は五行に象る。又胴の磬孔を池といひ、胴の側面を落といふ。また琴を一羽の鳳凰に象り、右端を鳳首、左端を鳳尾とし、足を鳳足、絃を通す穴を眼とし、側面を鳳翅と呼ぶ。又これを一尾の龍に象り、龍舌・龍眼・龍尾・龍臆等と名づける。【用法】昔は歌の伴奏に主として用ひ、また管絃合奏にも用ひたが、絃楽器の一つと称する琴ことが普通であつた。それ故、琴瑟相和といふ熟語がある。然るに中世になつて瑟が衰へると共に、琴は多くは独奏用として用ひられるに至つたが、今日では一般に衰微してしまつた。【琴曲】古曲として今傳はるものは稀であるが、「琴操」（嵆の著書）には、古曲として五曲・十二操・九引の名が掲げられてゐる。五曲とは、「鹿鳴」、「伐檀」、「騶虞」、「翳里」、「白駒」で、何れも周代の作である。十二操とは、「猗蘭操」（以上孔子作）、「越裳操」（周公作）、「拘幽操」、「龜山操」（文王作）、「岐山操」（周人作）、「履霜操」（尹吉甫作）、「雉朝飛操」（衛宣姜作）、「別鶴操」（商陵牧子作）、「残形操」（曾子作）、「水仙操」（伯牙作）、「懐陵操」（同上）。九引とは、「列女引」（魯漆室女作）、「思帰引」（魯女作）、「伯姫引」（魯伯姫作）、「真女引」（魯漆室女作）、「思帰引」（衛女作）、「霹靂引」（楚霊均作）、「琴引」（楊門高作）、「琴引」（楊門高作）である。この外に地方的の琴歌は多くあつたが、これ等は何れも今日に傳はらない。現在残つてゐるものは後世の作である。

【調絃法】これに次の五種の調子がある。

調名	一絃	二絃	三絃	四絃	五絃	六絃	七絃
正宮調	平調下	無黄鐘	壱越	参上	無平調下	無平調下	無
飛角調	平調下	無亀玆	壱越	参上	無平調下	無平調下	無
望知調	平調下	無黄鐘	壱越	参壱越	平調下	無	
清商調	平調双	調黄鐘	壱越	参壱越	平調双	調	
搜宮調	調断金	下無亀玆	壱越	参上	無断金	下無	

【奏法】これを弾ずるに小指は全く用ひず、他の四指で弾ずる。左手で絃を押さずに離して右手で弾ずるのを散音といひ、左手指で絃を按じて出す音を実音といひ、左手を琴面に押し付けずに只絃を打ち、その時に右手を用ひるのを泛音といふ。右手指及び左手の用法には多くの種類がある。【琴譜】特種な文字を作つてこれを記す。今日用ひられるものは曹柔の作つたのだといはれ絃名と手法との略字を寄せた文字、例へば散挑の手法（向うから手前へかく法）は勹、挑の手法（手前より向うへ走る手法）は乚、また徽は女と記す。それ故勾は一絃の散絃にて挑の手をすること、蛮は三絃の散絃にて挑の手をすること、勃は三絃の九の徽を大指で按じて挑の手をすることである。【沿革】神農氏が作つたともいひ、或は伏義氏とも、黄帝ともいふ。要するに、琴は支那の太古に練めて古く存在してゐたものであることは明かである。初は五絃であつたが、周の初、文王・武王がこれに二絃を加へて七絃としてから盛んになつた。その後支那では盛衰はあつたが常に最も高尚な且つ重要な楽器として行はれた。近世では明朝に幾分盛んであつたが、清朝になつて急に衰へ、今日は極めて稀に好事家の中に弄ばれるに過ぎなくなつた。清の康熙帝頃から、孔子廟の祭器として行はれる外は、殆どその音を耳にしないまでになつてしまつた。琴の名手としては、古代に於ては、孔子・伯牙、漢に於ては馬融・蔡邕・三国にては諸葛孔明等最も史上に名高いものである。昔蔡邕は自ら琴の名器を作つたと稱するが、琴の名器と稱するは、唐の代に、雷威・雷肖・雷盛・雷珏・雷文・雷迅等、雷氏の一門が作つたもので、これは「雷琴」と稱し、今日まで琴の実器として重んぜられてゐる。この外、唐では馬承・沈鍊・張鎰・金儒衍、宋では、蔡襄・朱仁齋・衛志正・趙仁濟・馬希元・金温・金公路・陳亭道・馬大夫・楊四襲・老林泉、元では、盤王清・趙漢雲・施岑嶺・施牧州等が琴の名匠として名高い。琴が我が邦へ傳はつたのは明かでないが、法隆寺にも古琴がありまた東大寺献物帳にも記載があるから、奈良朝よりも少し以前らしい。併し、我が国の人がこの技を学んだ事の最も古い記録は「三代実録」にあり、即ち従五位下貞観後守高橋朝臣文室麻呂は九歳にして嵯峨天皇に仕へ、天皇より琴を学んでその技に長じ、琴師といふ誉を賜はつたといふ。又朱雀天皇承平三年三月二十七日の御遊には、長明親王琴を弾じ給ひ、村上天皇天暦元年正月二十三日の内宴には、重明親王琴を弾じ給うた等の記録がある。又「源氏物語」の中にも源氏の君が琴をよくし給うたと記してある如く、平安時代には貴族社会の間に、催かながら行はれてゐたものであるが、演奏の困難なる割に音が割く快味に乏しいので、何時か廃れてしまひ、江戸時代の

二ヶ月ばかりゐた。それからお前は家出した。だが、今初めて逢ひが解けた。

【解説】女に対する男の執着を、これほど深刻に身を以て描いた作品は、現代の日本には異数である。これほど虚飾を去り、見えを捨てて男の愛着心をぶちまけた作品は稀らしい。この作者の前作「別れた妻に送る手紙」、「霊と肉」等で、一夜漬として「鐘がなる今鐘が鳴る」（別項）、「文月悦子」（別項）、「狂恋七時間半」（別項）等である。提携環境では近松門左衛門や紀海音等の世話物の改作が多く、「八重霞浪花浜荻」（別項）等の外に挙げるべきものがない。明治に入つては、ざんぎり物主義三の「月宮殿明治東京」（明治五年十月、東京森田座）、西南戦争の「西南雲晴明朝東風」（同十一年三月、新富座）、高橋お伝の「綴合阿傳夜刄譚」（同十二年五月）、花井お梅須田屋殺しの「月梅薫朧夜夢」（同二十一年四月、中村座）等があり、何れも歌舞伎劇の作である。日清戦争には戦争劇続出し（川上音二郎参照）、その後時局を当込んだり、大きな事件を題色したものが絶えず上演された。【秋葉】

琴（きん）　楽器　【異称】「きんのこと」とも又七絃琴ともいふ。【構造】長さ三尺六寸内外、幅六寸内外、厚一寸位の木製長箱の胴の上面に七本（太古は五本）の絃を張り、左手指を以て絃の各所を押へ、右手の指爪を以て弾奏するものである。絃は絹糸を撚つたもので、一絃毎にその太さを異にする。支那では昔から琴の人生に対する価値を重んじ、「琴は禁也。邪念を禁ずる也。」と稱し、君子身を修むるの具としてゐる。従つてその構造の上にも象形的解釈を与へ、長三尺六寸は一年三百六十日に象り、幅六寸は六合に象り、胴の上圓くして下方なるは天地に象り、五絃は五行に象る。又胴の磬孔を池といひ、胴の側面を落といふ。また琴を一羽の鳳凰に象り、右端を鳳首、左端を鳳尾とし、足を鳳足、絃を通す穴を眼とし、側面を鳳翅と呼ぶ。又これを一尾の龍に象り、龍舌・龍眼・龍尾・龍臆等と名づける。【用法】昔は歌の伴奏に主として用ひ、また管絃合奏にも用ひたが、絃楽器の一つと称する琴ことが普通であつた。それ故、琴瑟相和といふ熟語がある。然るに中世になつて瑟が衰へると共に、琴は多くは独奏用として用ひられるに至つたが、今日では一般に衰微してしまつた。【琴曲】古曲として今傳はるものは稀であるが、「琴操」（嵆の著書）には、古曲として五曲・十二操・九引の名が掲げられてゐる。五曲とは、「鹿鳴」、「伐檀」、「騶虞」、「翳里」、「白駒」で、何れも周代の作である。十二操とは、「猗蘭操」（以上孔子作）、「越裳操」（周公作）、「拘幽操」、「龜山操」（文王作）、「岐山操」（周人作）、「履霜操」（尹吉甫作）、「雉朝飛操」（衛宣姜作）、「別鶴操」（商陵牧子作）、「残形操」（曾子作）、「水仙操」（伯牙作）、「懐陵操」（同上）。九引とは、「列女引」（魯漆室女作）、「思帰引」（魯女作）、「伯姫引」（魯伯姫作）、「真女引」（魯漆室女作）、「思帰引」（衛女作）、「霹靂引」（楚霊均作）、「琴引」（楊門高作）、「琴引」（楊門高作）である。この外に地方的の琴歌は多くあつたが、これ等は何れも今日に傳はらない。現在残つてゐるものは後世の作である。

【調絃法】これに次の五種の調子がある。

調名	一絃	二絃	三絃	四絃	五絃	六絃	七絃
正宮調	平調下	無黄鐘	壱越	参上	無平調下	無平調下	無
飛角調	平調下	無亀玆	壱越	参上	無平調下	無平調下	無
望知調	平調下	無黄鐘	壱越	参壱越	平調下	無	
清商調	平調双	調黄鐘	壱越	参壱越	平調双	調	
搜宮調	調断金	下無亀玆	壱越	参上	無断金	下無	

【奏法】これを弾ずるに小指は全く用ひず、他の四指で弾ずる。左手で絃を押さずに離して右手で弾ずるのを散音といひ、左手指で絃を按じて出す音を実音といひ、左手を琴面に押し付けずに只絃を打ち、その時に右手を用ひるのを泛音といふ。右手指及び左手の用法には多くの種類がある。【琴譜】特種な文字を作つてこれを記す。今日用ひられるものは曹柔の作つたのだといはれ絃名と手法との略字を寄せた文字、例へば散挑の手法（向うから手前へかく法）は勹、挑の手法（手前より向うへ走る手法）は乚、また徽は女と記す。それ故勾は一絃の散絃にて挑の手をすること、蛮は三絃の散絃にて挑の手をすること、勃は三絃の九の徽を大指で按じて挑の手をすることである。【沿革】神農氏が作つたともいひ、或は伏義氏とも、黄帝ともいふ。要するに、琴は支那の太古に練めて古く存在してゐたものであることは明かである。初は五絃であつたが、周の初、文王・武王がこれに二絃を加へて七絃としてから盛んになつた。その後支那では盛衰はあつたが常に最も高尚な且つ重要な楽器として行はれた。近世では明朝に幾分盛んであつたが、清朝になつて急に衰へ、今日は極めて稀に好事家の中に弄ばれるに過ぎなくなつた。清の康熙帝頃から、孔子廟の祭器として行はれる外は、殆どその音を耳にしないまでになつてしまつた。琴の名手としては、古代に於ては、孔子・伯牙、漢に於ては馬融・蔡邕・三国にては諸葛孔明等最も史上に名高いものである。昔蔡邕は自ら琴の名器を作つたと稱するが、琴の名器と稱するは、唐の代に、雷威・雷肖・雷盛・雷珏・雷文・雷迅等、雷氏の一門が作つたもので、これは「雷琴」と稱し、今日まで琴の実器として重んぜられてゐる。この外、唐では馬承・沈鍊・張鎰・金儒衍、宋では、蔡襄・朱仁齋・衛志正・趙仁濟・馬希元・金温・金公路・陳亭道・馬大夫・楊四襲・老林泉、元では、盤王清・趙漢雲・施岑嶺・施牧州等が琴の名匠として名高い。琴が我が邦へ傳はつたのは明かでないが、法隆寺にも古琴がありまた東大寺献物帳にも記載があるから、奈良朝よりも少し以前らしい。併し、我が国の人がこの技を学んだ事の最も古い記録は「三代実録」にあり、即ち従五位下貞観後守高橋朝臣文室麻呂は九歳にして嵯峨天皇に仕へ、天皇より琴を学んでその技に長じ、琴師といふ誉を賜はつたといふ。又朱雀天皇承平三年三月二十七日の御遊には、長明親王琴を弾じ給ひ、村上天皇天暦元年正月二十三日の内宴には、重明親王琴を弾じ給うた等の記録がある。又「源氏物語」の中にも源氏の君が琴をよくし給うたと記してある如く、平安時代には貴族社会の間に、催かながら行はれてゐたものであるが、演奏の困難なる割に音が割く快味に乏しいので、何時か廃れてしまひ、江戸時代の

座は女を吉川多門、男を中川金之丞、又、大和屋甚兵衛座では女を村上市之丞、男を山下半右衛門で演じた。次いで元禄二年板替の吉兵衛夫婦がお仕置になつたのを、翌三年正月には大阪岩井半四郎座で中村歌為と三原十太夫等で大当りをとり、笠屋三郎と西屋半七とが元禄八年十二月六日情死したのを、大阪岩井半四郎座で早速に脚色して、「お評判書の色揚」と題して、半七と杉山勘左衛門（三勝（花井あづま）、芳右衛門（座元半四郎）おつう）（岡本綺之助）等の役割で上演し、春まで打越して百五十日の大当りをとつたといひ、又、元禄十四年三月の浅野刃傷を、翌年三月、江戸山村座で「東山栄華舞臺」といふ名題を掲げて、横山小栗の世界に仕組んで演じたと傳へられ、翌十六年二月十六日から、江戸中村座では「曙曾我夜討」の狂言中に、義士討入を取入れて演じたが、公儀を憚つて僅か数日で停止した等の如き、更に元禄期の一特色ともいふべき開帳当込みの「けいせい浅間嶽」（別項）や、「傾城壬生大念佛」（別項）等の如き、元禄期が最も著しく、その後、安永頃まで盛んに行はれ、寛政を画して化政度以後、漸くその数が減少して現今に及び、今なほ行はれつゝある。操浄瑠璃も元禄期が最も多く、近松の「曾根崎心中」「心中重井筒」「心中天網島」（各別項）等その尤なるものである。その後、実歴期に入つて減少し、化政度以後は全くその作が絶えた。これ等の際物狂言は敢て遥のないほど夥しい数に上るが、その多くは腐滅に帰して、現存するものは寛政以降のものが大部分である。

その代表的なものを二三挙げると、「伊勢音頭恋寝刃」（別項）名作、「切腹噺」（安和元年八月、大阪中の芝居所演、作者近松徳叟。高橋猫助、増屋

寛文年間に、明の僧心越禪師、我が國に來つて水戸にゐたが、琴を善くし、これを江戸の杉浦琴川に傳へ、それより小野田東川に傳へた。享保に至り、東叡山の法親王、京都の伶人辻豐後守狛廣を召し下し、東川に就いて琴を學ばしめ、盛んに古曲を復活せしめられてから、また搢紳家の間に、幾分か行はれるやうになつたといふ。併し江戸時代の末より再び廢れ、今は殆どこれを手にするものを見ない狀態である。

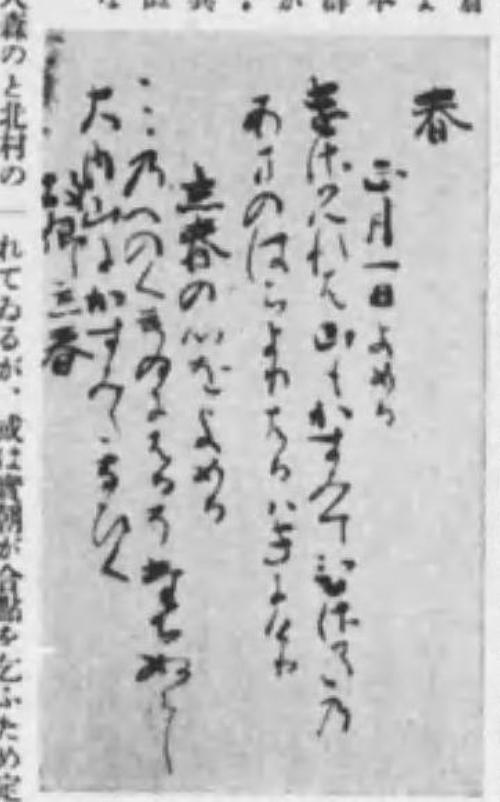
【研究書及び琴譜】琴操二卷 漢 蔡邕 ○琴學叢書三十二卷（琴粹四卷、琴話四卷、琴譜三卷、琴學隨筆二卷、琴餘漫錄二卷、琴鏡九卷、琴鏡補三卷、琴瑟合譜三卷、琴學問答一卷、藏琴錄一卷）民國 楊宗稷 ○琴學心聲二卷 淸 莊臻鳳 ○松風閣琴譜 淸 程雄 同上 ○自遠堂琴譜十二卷 淸 吳仕柏 ○五知齋琴譜八卷 淸 周魯封 ○陽春堂琴經十四卷 明 楊掄 ○東皐琴譜一卷 不詳、古寫本 ○白石道人琴曲古譜釋一卷 民國 楊宗稷 ○廣陵散譜一卷 同上 ○琴學入門二卷 淸 張鶴 ○琴學大意抄一卷 荻生徂徠 （田邊）

禁腋祕抄 きんえきひせう 有職 一卷【著者】未詳【成立】未詳。奧書に「享祿四年霜月二十七日右少辨」とある。【諸本】群書類從卷四六八所收【解說】紫宸・清涼二殿の調度・裝束の事を記し、清涼殿中の障圖四圖を入れたもので頗る參考とするに足る書である。（石村）

金華 きんくわ 儒者【姓名】平野氏。自ら修して平といふ。名は玄沖、字は子和。通稱は源右衞門。【生歿】元祿元年に生れ、享保十七年（二三九二）七月二十三日歿す。享年四十五。【私諡】文莊【閱歷】陸奧の人。初め醫を學ばうとして江戶に上つた。時に荻生徂徠は古文辭を唱へて英才を誘導してゐたが、金華を見て大にこれを奇となし、金華亦遂に徂徠に從つて詩文を學んだ。最も詩に長じ、守山侯松平氏の記室となつた。稟性、豪放磊落で酣飲縱談し、自ら檢束する所がなかつた。その著に「金華稿刪」六卷四冊がある。【詩風】その詩は彼の人と爲りの如く、甚だ佳なるものと然らざるものとがある。前者は風格華華であるが、後者は淺陋支離で、全く別手に出でたるが如くである。要するに才を恃んで精思することがないからであらう。（佐久）

金鶯 きんあう 「梅津金鶯」を見よ。

金槐和歌集 きんくわいわかしふ 歌集 一卷【作者】源實朝【名稱】本名「鎌倉右大臣家集」略名「金槐集」。【名義】金は鎌倉の鎌の偏、槐は大臣である事より起る。【傳本】貞享四年版本三冊、定家所傳本（寫）一冊、群書類從卷二三二所收本の三種がある。貞享本と類從本とは歌數・順序・部屬・語句等に於て大に異り、定家所傳本は類從本に近似してゐる。「夫木集」によるとなほ異本があるやうである。【諸本】貞享本は、出版書肆が大森のと北村のとあり、內題は「金槐和歌集」、外題は「鎌倉右大臣家集」又は「金槐和歌集」である。眞淵が書入を施したものを始め、訂正增補金槐集（森暉昌編二冊）・鎌倉右大臣家集（佐佐木信綱校）・國民文庫本・有朋堂文庫本・定本金槐和歌集（半田良平校）・岩波文庫本（齋藤茂吉校）等はこの本に據り、後の二者は類從本との相違を明記してゐる。圖書寮藏本（一冊、寫）も、同系統で本文中の註も一致するが、二首少く位置の異なる歌が三首あり、微細な語句の相違があつて異本との校合がある。定家所傳本は一部分が定家筆にて他は別筆、原本は松岡忠良氏藏で、昭和五年寫眞版にて刊行された。別に內閣文庫藏本（一冊、寫）は同系統にて、和學講談所舊藏である。鎌倉右大臣家集（藤原爲家校）・金槐和歌集（細島知一校）・歌學文庫本は類從本に據つてゐる。【編者】貞享本は、柳營亞槐（將軍にして大納言）の奧書があつて、部類を訂正した旨を記し、本文中に部類を訂正する際に歌を補つたといふ註があるが、柳營亞槐は實朝の次に將軍となつた賴經であらうと思ふ。定家所傳本は奧に定家の筆で、「建曆三年十二月十八日」と記されてゐるが、或は實朝が合點をこふため定家に送つた歌を定家が纏めたものとも考へられる。【內容】部類を春・夏・秋・冬・戀・雜と分け、貞享本はよく整頓してゐるが、他の二本は不整頓で、雜の部は特に甚しい。歌の數は貞享本七百十九首、贈答その他にて他人の歌が三首ある。定家所傳本は類從本より十首多いが、その歌はすべて貞享本にある。類從本は一本及び流布の印本にて校合し、一本及印本所載歌とした增補六十六首を加へて貞享本と同數になるが、その結果重出が二首ある事になる。なほ印本は貞享本を指すことに疑ひがない。前掲和學講談所舊藏の定家所傳本系統の寫本は、類從本の底本であるか一本であるか、或は全然無關係かであるが、若し關係ありとすれば一本は印本と同じく底本よりも歌が多いのであるから一本に當る。（實朝參照）



定家本「金槐集」（定家筆）

【註釋書】源實朝金槐和歌集評釋一冊 田中常憲 ○鎌倉右大臣金槐和歌集評解二冊 ○金槐和歌集通釋一冊 松野又五郎 ○金槐集評釋一冊 小林好日

【參考】金槐集私鈔 齋藤茂吉 ○鎌倉右大臣家集のはじめにしるせる詞及び書入 賀茂眞淵 ○新學○歌意考○國歌論臆說○初學○歌よみに與ふる書 正岡子規 ○藤原定家所傳本金槐和歌集解說 佐佐木信綱 （西下）

金閣寺の段 きんかくじのだん 「祇園祭禮信仰記」を見よ。

公麗 きんかず 有職家【姓】滋野井【生歿】享保十八年十一月十四日に生れ、天明元年（二四四一）九月七日薨ず。享年四十九。【家系】正二位前權大納言公澄の孫、前中納言藤原實全の子。【閱歷】右中將・右衞門督等を經て、明和二年從二位權中納言に進み、同五年正二位權大納言に昇つたが、次いでこれを辭した。祖父公澄有職の聞え高く「管見野水抄」三卷を著したが、公麗よくその遺志を繼ぎ、孜々として有職の學を講究し、典故に精しきを以て世に知られた。彼の大塚嘉樹の如きも公麗の門より出たものであつた。【著書】「禁祕抄階梯」三卷（安永五年二月九日の自識がある）は「禁祕抄」註釋書中の白眉として聞えてゐる。その他、「公事根源附梯」「滋草拾露」「裝束和抄」「裝束着用圖」等がある。（石村）

琴歌譜 きんかふ 譜本 一卷【書寫年代】天元四年【諸本】原本は近衞公爵家所藏で、大正十三年に佐佐木信綱博士が發見して「藝文」（大正十四年一月號）にその解說と共に全文が載せられた。後、古典保存會から玻璃版に撮つて刊行せられ、日本歌謠集成卷一には、山田孝雄氏の訓釋を附して收め、また武田祐吉氏の「上代文學集」及び「續萬葉集」にも訓釋と共に全歌が入つてゐる。【解說】和琴の譜本で、原本は卷子本、縱九寸六分の墨界ある楮紙九葉に記してある。大歌師前丹波掾多安樹より安家が借りて、天元四年十月二十一日に書寫し終つた本である。初めに序文があり、本文は先づ歌曲名を掲げ、その下に小さく二行に歌詞を萬葉假名で註し、次に本文に歌譜の長短緩急を、右傍に和琴の彈法を符號で朱書してある。所々に歌の作られた由來が記してある。平安朝初期に成つたものであらうと云ふ。所載の歌數二十二首、うち一首は同歌で譜調を異にするのみである。五首は記紀所傳の歌と等しく、一首は「神樂歌」に、一首は「古今集」に、一首は「年中行事祕抄」所引「本朝月令」所載の歌と似てゐる。他の十三首は未だ所見がないが、その歌詞は、記紀所載の歌と用語格調を同じうし、緣起も上代の傳說を記してゐるので、記紀時代の歌謠として見られる古謠で、歌曲名は次の如くである。

茲都歌　歌返　片降　高橋扶理　短埴安扶理　伊勢神歌　天人扶理　櫻根扶理　蒜立振　阿夫斯乃振　山口扶理　大直備歌　余美歌　宇吉歌　長埴安扶理　阿遊陀扶理　酒坐歌　茲良宣歌

「琴歌譜」卷首（近衞公爵家藏）

右のうち、「阿遊陀扶理」の前には「自餘小歌云々」とあるので、當時これ等の大歌の外に小歌の行はれた事が明かである。又、「余美歌」「宇吉歌」「長埴安扶理」は正月元日の宴會節會に、「酒坐歌」「茲良宣歌」は正月七日の白馬節會に、「阿遊陀扶理」は正月十六日の踏歌節會に奏せられた大歌と思はれる。これ等の節會に大歌立歌の奏せられたことは、儀式や年中行事の書に見えるところである。小歌は全然省略せられたと見えて本書には出てゐない。所載の傳說には記紀を引用して、それと異なる傳說を記したところもあり、「古歌抄」と云ふ書も引用してゐる。序文によると、本書以前にも同種の書があつたらしい。なほ本書は歌詞や歌曲名等に若干誤寫と思はれるものがあり、また脫字もあり、數行脫漏したものを補つたところもあるから注意を要する。【價値】歌謠に於て、傳說に於て、記紀を補ふ書として最も貴重な資料である。この書によつて上代の歌謠に新たに十數首を加へる事が出來、又記紀の歌謠や本文の校勘の資料として多大の價値を有する。又和琴の譜を附したのは、音樂史上の有益な資料である。【參考】新たに知られたる上代の歌謠に就いて 佐佐木信綱（藝文一六ノ一）○近衞公爵所藏琴歌譜解說 山田孝雄 （藤田）

金唐革 きんからかは 滑稽本風 一卷【作者】未詳【角書】風來紅葉【刊行】天明二年【諸本】德川文藝類聚第一編所收【解說】風來變人は外國語をよくし、ポウフラ・風でつぽう・ゑれきせる・金からかわ・とふめがね・ぜめがれの類を發明し、化物屋敷に住んでゐた。隣家の米屋德右衞門方の丁稚三太郎が屋根から落ちて死んだのを生き還らせる。後、三太郎のため密書を見られ陰謀露見して討手に圍まれる。そこで風來變人とは假の名、實は義經の家來平賀三郎と本名を名乘り、庄司重忠の情で蝦夷の義經のもとへ落ちてゆくといふ筋書。風來山人平賀源內のことを戲作したものであることは、卷末の識語によつて明かである。【備考】平賀源內は安永八年十一月二十日夜、病狂喪心し、人を殺して（米屋の子なりと云ふ）捕へられ、同十二月十八日獄中で病死し、橋場總泉寺に葬られたことになつてゐるが、一說には大老田沼主殿頭がその奇才を惜しみ、竊かに助命して蝦夷に走らしめたとも傳へられる。（水谷）

金玉集 きんぎよくしふ 歌集 一卷【撰者】藤原公任。但し內題の下には和歌得業生柿本末成撰とあるが、恐らくは公任の變名であつて、清輔が「奧義抄」（別項）に、前和歌得業生柿下朝臣撰と記してゐるが如くであらう。【名稱】「後拾遺集」の序、及び「古來風體抄」には、「黃金の玉の集」とあり、「袋草紙」「和歌現在書目錄」「和歌色葉集」「俊頼口傳集」には、「金玉集」とある。【諸本】群書類從卷一五九所收【解說】部類を春・夏・秋・冬・戀・雜の六に分けて秀歌七十八首を集めたもの、作者は貫之（八首）最も多く、躬恒（六首）、伊勢（五首）これに次ぎ、その他三首三人、二首五人、一首二十八人、合計三十九人の外、讀人不知が十二首あり、公任自らのはその讀人不知の中に一首ある。七十八首の內「古今集」から見え二十五首、「後撰集」から六首、「拾遺集」から三十七首、合計六十八首引用してある。「拾遺集」三十七首の內三十三首は「拾遺抄」にも見えてゐて、「拾遺集」及び「拾遺抄」が共に公任撰と稱せられてゐる點に注意を惹く。公任には別に作者を中心とした「三十六人撰」「十五番歌合」がある。【影響】公任は貫之に次いで歌道の權威とされたので、本集の如きも既に「後拾遺集」撰修の頃には流布し、歌論の上にも作歌の上にも影響することが多かつたのである。【參考】後拾遺集序○袋草紙○俊頼髓腦 （西下）

金々先生榮花夢 きんきんせんせいえいぐわのゆめ 草雙紙 黃表紙 二冊 十丁十二圖【作者】戀川春町【畫工】自畫【名稱】通人の榮花の夢の義、きんきんは當時の通言で、通人の立派な態度を意味してゐた。【刊行】安永四年。翌五年再版、寬政六年三版を出した。【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙集（近代日本文學大系）・黃表紙名作集には本文のみ。大通世界卷一・黃表紙二十五種（日本名著全集）・赤本黑本青本（名著文庫）に繪と本文とを載せてゐる。稀書複製會から複製された。【題材】謠曲「邯鄲」の輪廓を假りてゐる。【梗概】〔上冊〕（一）自序（二）江戶で一稼ぎするつもりで田舍から出て來た金村屋金兵衞が目黑の粟餅屋の店さきに立つてゐる。（三）同

形式態度と、各部分の密度または力の配分が類型上の、或は個性の表現手段の一つとして、色彩的効果を持つものと見做される。かくして建築上両和が感に於いて均衡を保つ。この均衡から「利用」も一種の均衡である。（百瀬）

今古奇観　ここのふるいこと　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　ここのふるいこと　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　ここのふるいこと　書名。「喩世明言」を見よ。

近古史談　きんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

近古小説新集　きんこしょうせつしんしゅう　小説集。一冊【著者】高田衛【刊行】昭和三十年四月。既刊は初編だけで、以下続刊の予定である。【内容】本文と考証の二部から成っている。本文は近古小説中、今更天保・弘化頃の江戸に流行の、いわゆる人情本作者の作品を主とし、他に読本作者の作品をも加えて、それぞれ一篇ずつを選び、原本の体裁を出来るだけ忠実に再現してある。考証は、本文の理解に必要な語句の解釈、作者の伝記、作品の書誌的研究、作品の評価などを、それぞれの担当者が分担して執筆してある。【参考】近代小説新集（昭和三十年、三一書房）

近古小説解題　きんこしょうせつかいだい　解題書。一冊【著者】市岡正一（後に市岡猛雄と改名）【刊行】昭和十年十二月【発売】青木嵩山堂（東京）【内容】明治四十年頃から大正初年にかけて刊行された、いわゆる新聞小説の中から、江戸の戯作者流の作品を選んで、それぞれの作者・内容・特色などを解説したもの。【参考】近代小説解題（昭和十年、春陽堂）

金瓶梅　きんぺいばい　書名。【別名】金瓶梅詞話・新刻金瓶梅詞話・繍像金瓶梅・第一奇書金瓶梅【著者】笑笑生【刊行】明代万暦年間（一五七三―一六一九）【内容】百回。北宋末期の山東省清河県の豪族西門慶が、潘金蓮・李瓶児・龐春梅・孟玉楼・宋恵蓮・林太太・呉月娘・孫雪娥の八人の妻妾を持ち、富と権勢とにまかせて淫蕩な生活を送り、ついに破滅するまでを描いた小説。【成立】万暦年間に、水滸伝の一部分として、または単独に、数種の異本が成立したらしいが、現存するものは、万暦丁巳（四十五年）の序文を持つ本と、崇禎本と呼ばれる本とである。【評価】明代小説中、最も写実的な作品として、また、人情の機微を描いた点で、高く評価されている。【参考】金瓶梅考証（昭和十年、上海雑誌公司）

金瓶梅詞話　きんぺいばいしわ　書名。「金瓶梅」を見よ。

均衡　きんこう　（Balance）【解説】美的形式原理の一つ。部分と部分、または部分と全体との間に、大きさ・形・色彩・質感などの上で、ある関係が成立していること。シンメトリーの場合は、中心軸の両側に同じ形のものが同じ位置に置かれるが、アシンメトリーの場合は、中心軸の両側に異った形のものが置かれる。しかし、その場合でも、重量感や、動勢などの点で、全体として均衡が保たれていなければならない。（百瀬）

金砂　きんしゃ　書名。「江戸人」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　こんこしょうせつ　書名。「喩世明言」を見よ。

今古史談　こんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

近古小説新集　きんこしょうせつしんしゅう　小説集。一冊【著者】鳥居久米【刊行】昭和三十年四月。既刊は初編だけで、以下続刊の予定である。【内容】本文と考証の二部から成っている。本文は近古小説中、今更天保・弘化頃の江戸に流行の、いわゆる人情本作者の作品を主とし、他に読本作者の作品をも加えて、それぞれ一篇ずつを選び、原本の体裁を出来るだけ忠実に再現してある。考証は、本文の理解に必要な語句の解釈、作者の伝記、作品の書誌的研究、作品の評価などを、それぞれの担当者が分担して執筆してある。【参考】近代小説新集（昭和三十年、三一書房）

近古小説解題　きんこしょうせつかいだい　解題書。一冊【著者】市岡正一（後に市岡猛雄と改名）【刊行】昭和十年十二月【発売】青木嵩山堂（東京）【内容】明治四十年頃から大正初年にかけて刊行された、いわゆる新聞小説の中から、江戸の戯作者流の作品を選んで、それぞれの作者・内容・特色などを解説したもの。【参考】近代小説解題（昭和十年、春陽堂）　（花）

金瓶梅　きんぺいばい　書名。【別名】金瓶梅詞話・新刻金瓶梅詞話・繍像金瓶梅・第一奇書金瓶梅【著者】笑笑生【刊行】明代万暦年間（一五七三―一六一九）【内容】百回。北宋末期の山東省清河県の豪族西門慶が、潘金蓮・李瓶児・龐春梅・孟玉楼・宋恵蓮・林太太・呉月娘・孫雪娥の八人の妻妾を持ち、富と権勢とにまかせて淫蕩な生活を送り、ついに破滅するまでを描いた小説。【成立】万暦年間に、水滸伝の一部分として、または単独に、数種の異本が成立したらしいが、現存するものは、万暦丁巳（四十五年）の序文を持つ本と、崇禎本と呼ばれる本とである。【評価】明代小説中、最も写実的な作品として、また、人情の機微を描いた点で、高く評価されている。【参考】金瓶梅考証（昭和十年、上海雑誌公司）

金瓶梅詞話　きんぺいばいしわ　書名。「金瓶梅」を見よ。

均衡　きんこう　（Balance）【解説】美的形式原理の一つ。部分と部分、または部分と全体との間に、大きさ・形・色彩・質感などの上で、ある関係が成立していること。シンメトリーの場合は、中心軸の両側に同じ形のものが同じ位置に置かれるが、アシンメトリーの場合は、中心軸の両側に異った形のものが置かれる。しかし、その場合でも、重量感や、動勢などの点で、全体として均衡が保たれていなければならない。（百瀬）

金砂　きんしゃ　書名。「江戸人」を見よ。

今古奇観　こんこきかん　書名。【別名】今古奇観続集・古今奇観【著者】抱甕老人【刊行】明代崇禎年間（一六二八―四四）【内容】四十巻。明代の短篇小説集で、「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」の三言と、「拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」の二拍とから、それぞれ十篇ずつを選んで、一冊ずつにまとめたもの。【成立】三言二拍の成立は、それぞれ別個であるが、今古奇観の成立は、明末清初の頃と推定されるが、詳しいことは不明。【評価】三言二拍の中から、特に優れたものを選んだだけに、今古奇観の評価は高く、三言二拍の原本を読まなくても、今古奇観だけで、ほぼ三言二拍の内容を知ることができるといわれる。【参考】今古奇観（昭和十年、春陽堂）

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　こんこしょうせつ　書名。「喩世明言」を見よ。

今古史談　こんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

近古小説新集　きんこしょうせつしんしゅう　小説集。一冊【著者】鳥居久米【刊行】昭和三十年四月。既刊は初編だけで、以下続刊の予定である。【内容】本文と考証の二部から成っている。本文は近古小説中、今更天保・弘化頃の江戸に流行の、いわゆる人情本作者の作品を主とし、他に読本作者の作品をも加えて、それぞれ一篇ずつを選び、原本の体裁を出来るだけ忠実に再現してある。考証は、本文の理解に必要な語句の解釈、作者の伝記、作品の書誌的研究、作品の評価などを、それぞれの担当者が分担して執筆してある。【参考】近代小説新集（昭和三十年、三一書房）

近古小説解題　きんこしょうせつかいだい　解題書。一冊【著者】市岡正一（後に市岡猛雄と改名）【刊行】昭和十年十二月【発売】青木嵩山堂（東京）【内容】明治四十年頃から大正初年にかけて刊行された、いわゆる新聞小説の中から、江戸の戯作者流の作品を選んで、それぞれの作者・内容・特色などを解説したもの。【参考】近代小説解題（昭和十年、春陽堂）　（花）

金瓶梅　きんぺいばい　書名。【別名】金瓶梅詞話・新刻金瓶梅詞話・繍像金瓶梅・第一奇書金瓶梅【著者】笑笑生【刊行】明代万暦年間（一五七三―一六一九）【内容】百回。北宋末期の山東省清河県の豪族西門慶が、潘金蓮・李瓶児・龐春梅・孟玉楼・宋恵蓮・林太太・呉月娘・孫雪娥の八人の妻妾を持ち、富と権勢とにまかせて淫蕩な生活を送り、ついに破滅するまでを描いた小説。【成立】万暦年間に、水滸伝の一部分として、または単独に、数種の異本が成立したらしいが、現存するものは、万暦丁巳（四十五年）の序文を持つ本と、崇禎本と呼ばれる本とである。【評価】明代小説中、最も写実的な作品として、また、人情の機微を描いた点で、高く評価されている。【参考】金瓶梅考証（昭和十年、上海雑誌公司）

金瓶梅詞話　きんぺいばいしわ　書名。「金瓶梅」を見よ。

均衡　きんこう　（Balance）【解説】美的形式原理の一つ。部分と部分、または部分と全体との間に、大きさ・形・色彩・質感などの上で、ある関係が成立していること。シンメトリーの場合は、中心軸の両側に同じ形のものが同じ位置に置かれるが、アシンメトリーの場合は、中心軸の両側に異った形のものが置かれる。しかし、その場合でも、重量感や、動勢などの点で、全体として均衡が保たれていなければならない。（百瀬）

金砂　きんしゃ　書名。「江戸人」を見よ。

今古奇観　こんこきかん　書名。【別名】今古奇観続集・古今奇観【著者】抱甕老人【刊行】明代崇禎年間（一六二八―四四）【内容】四十巻。明代の短篇小説集で、「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」の三言と、「拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」の二拍とから、それぞれ十篇ずつを選んで、一冊ずつにまとめたもの。【成立】三言二拍の成立は、それぞれ別個であるが、今古奇観の成立は、明末清初の頃と推定されるが、詳しいことは不明。【評価】三言二拍の中から、特に優れたものを選んだだけに、今古奇観の評価は高く、三言二拍の原本を読まなくても、今古奇観だけで、ほぼ三言二拍の内容を知ることができるといわれる。【参考】今古奇観（昭和十年、春陽堂）

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　こんこしょうせつ　書名。「喩世明言」を見よ。

今古史談　こんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

盧花草生先々金

【盧花草生先々金】　浮世絵。三枚続。【作者】歌川国貞（三代豊国）。【成立】文政十三年（一八三〇）。【内容】盧花草生先々金は、歌舞伎の外題。盧花草生は、盧花草の生えている所、先々金は、先々で金がたまるの意。この絵は、その外題を、人物の姿態によって表現したもの。

金瓶梅詞話　きんぺいばいしわ　書名。「金瓶梅」を見よ。

均衡　きんこう　（Balance）【解説】美的形式原理の一つ。部分と部分、または部分と全体との間に、大きさ・形・色彩・質感などの上で、ある関係が成立していること。シンメトリーの場合は、中心軸の両側に同じ形のものが同じ位置に置かれるが、アシンメトリーの場合は、中心軸の両側に異った形のものが置かれる。しかし、その場合でも、重量感や、動勢などの点で、全体として均衡が保たれていなければならない。（百瀬）

金砂　きんしゃ　書名。「江戸人」を見よ。

今古奇観　こんこきかん　書名。【別名】今古奇観続集・古今奇観【著者】抱甕老人【刊行】明代崇禎年間（一六二八―四四）【内容】四十巻。明代の短篇小説集で、「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」の三言と、「拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」の二拍とから、それぞれ十篇ずつを選んで、一冊ずつにまとめたもの。【成立】三言二拍の成立は、それぞれ別個であるが、今古奇観の成立は、明末清初の頃と推定されるが、詳しいことは不明。【評価】三言二拍の中から、特に優れたものを選んだだけに、今古奇観の評価は高く、三言二拍の原本を読まなくても、今古奇観だけで、ほぼ三言二拍の内容を知ることができるといわれる。【参考】今古奇観（昭和十年、春陽堂）

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　こんこしょうせつ　書名。「喩世明言」を見よ。

今古史談　こんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

近古小説新集　きんこしょうせつしんしゅう　小説集。一冊【著者】鳥居久米【刊行】昭和三十年四月。既刊は初編だけで、以下続刊の予定である。【内容】本文と考証の二部から成っている。本文は近古小説中、今更天保・弘化頃の江戸に流行の、いわゆる人情本作者の作品を主とし、他に読本作者の作品をも加えて、それぞれ一篇ずつを選び、原本の体裁を出来るだけ忠実に再現してある。考証は、本文の理解に必要な語句の解釈、作者の伝記、作品の書誌的研究、作品の評価などを、それぞれの担当者が分担して執筆してある。【参考】近代小説新集（昭和三十年、三一書房）

近古小説解題　きんこしょうせつかいだい　解題書。一冊【著者】市岡正一（後に市岡猛雄と改名）【刊行】昭和十年十二月【発売】青木嵩山堂（東京）【内容】明治四十年頃から大正初年にかけて刊行された、いわゆる新聞小説の中から、江戸の戯作者流の作品を選んで、それぞれの作者・内容・特色などを解説したもの。【参考】近代小説解題（昭和十年、春陽堂）　（花）

金瓶梅　きんぺいばい　書名。【別名】金瓶梅詞話・新刻金瓶梅詞話・繍像金瓶梅・第一奇書金瓶梅【著者】笑笑生【刊行】明代万暦年間（一五七三―一六一九）【内容】百回。北宋末期の山東省清河県の豪族西門慶が、潘金蓮・李瓶児・龐春梅・孟玉楼・宋恵蓮・林太太・呉月娘・孫雪娥の八人の妻妾を持ち、富と権勢とにまかせて淫蕩な生活を送り、ついに破滅するまでを描いた小説。【成立】万暦年間に、水滸伝の一部分として、または単独に、数種の異本が成立したらしいが、現存するものは、万暦丁巳（四十五年）の序文を持つ本と、崇禎本と呼ばれる本とである。【評価】明代小説中、最も写実的な作品として、また、人情の機微を描いた点で、高く評価されている。【参考】金瓶梅考証（昭和十年、上海雑誌公司）

金瓶梅詞話　きんぺいばいしわ　書名。「金瓶梅」を見よ。

均衡　きんこう　（Balance）【解説】美的形式原理の一つ。部分と部分、または部分と全体との間に、大きさ・形・色彩・質感などの上で、ある関係が成立していること。シンメトリーの場合は、中心軸の両側に同じ形のものが同じ位置に置かれるが、アシンメトリーの場合は、中心軸の両側に異った形のものが置かれる。しかし、その場合でも、重量感や、動勢などの点で、全体として均衡が保たれていなければならない。（百瀬）

金砂　きんしゃ　書名。「江戸人」を見よ。

今古奇観　こんこきかん　書名。【別名】今古奇観続集・古今奇観【著者】抱甕老人【刊行】明代崇禎年間（一六二八―四四）【内容】四十巻。明代の短篇小説集で、「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」の三言と、「拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」の二拍とから、それぞれ十篇ずつを選んで、一冊ずつにまとめたもの。【成立】三言二拍の成立は、それぞれ別個であるが、今古奇観の成立は、明末清初の頃と推定されるが、詳しいことは不明。【評価】三言二拍の中から、特に優れたものを選んだだけに、今古奇観の評価は高く、三言二拍の原本を読まなくても、今古奇観だけで、ほぼ三言二拍の内容を知ることができるといわれる。【参考】今古奇観（昭和十年、春陽堂）

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

今古小説　こんこしょうせつ　書名。「喩世明言」を見よ。

今古史談　こんこしだん　書名。「喩世明言」を見よ。

今古奇観続集　こんこきかんぞくしゅう　書名。「喩世明言」を見よ。

問錄二卷○稽古錄八卷○洙泗仁說一卷○仁說要義一卷○仁說三書三卷○錦城百律一卷○梧窓漫筆六卷○錦城文錄一卷○錦城詩稿三卷○鳳鳴集三卷○白湯集一卷。〔佐久〕

錦城茶話 きんじやうさわ　隨筆　二卷　寫【著者】太田元貞【別稱】白面嚼語【解說】大儒たる著者が、その思ひ付を漫然と書き集めたもので、極めて通俗的の題目が多い。上卷に、身力に不纏の事、食後話獸の事、素心先生蠡の事、好事不如無の事、眉間白毫の事、蝦夷地方の事、弓鐵炮の事等三十七條。下卷に、奉公を構ふ、一休和尚、木綿、和歌、人欲之事、和名、夜宴に燈に油を加ふる說等十五條を收めてゐる。序跋はない。〔和田〕

錦所談 きんしよだん　隨筆　二卷【著者】山田以文【刊行】天保五年【解說】有職故實に關する考證の雜集で、卷一に小稅・大稅・斤稅以下三十一則、卷二に御帛服帛・御裝束差別以下五十二則を收む。菅原聰長の序がある。卷頭に錦所以文識、孫有年錄とある。〔和田〕

近思錄 きんしろく　子書儒家類　十四卷【著者】朱熹及び呂祖謙（本書後序）。祖謙は字は伯恭、金華府の人、その祖先が嘗て山東の萊州に居つたので、東萊と號した。幼にして家學を承け、やゝ長じて林之奇・胡憲・汪應辰等に從つて學び、張栻・朱熹等を友として交はつた。孝宗に仕へて頻りに聖學を說き王道を奬めた。官は文學博士を經て、祕書郎國史院編修官・實錄院檢討官・著作郎・直祕閣等に歷任し、淳熙八年（皇紀一八四一）四十五歲を以て歿した。著書は本書の外に、「大事記」十二卷「東萊左氏博議」二十五卷「宋文鑑」一百五十卷等がある。【名義】「論語」子張篇に、「子夏曰く、博く學んで篤く志し、切に問うて近く思ふ、仁其の中に在り」とあるに基く。日常切近の事實を問ひ且つ思つて、敢て高遠の哲理に騖せない意を表したものである。【成立】宋の孝宗の淳熙二年の夏に起り、翌三年四月完成（本書序）。淳熙二年の夏、呂祖謙が浙江省の東陽から來て、建寧府の天湖の陽に在つた朱子の寒泉精舍を訪ねて十日餘り滯在したことがあつたが、その時に相與に「周子」「程子」「張子」の書を讀んで、その廣大閎博にして津涯なきが若くなるのを感歎すると共に、初學の者の入り易くない事を憾れ、これに因つて共にその大體に關し、且つ日用に切近なものを擇び取つて編輯したのが本書である（本書朱熹自序）。

【內容】本書は卷を分つこと十四、凡て六百二十二條、各卷その類を分つ毎に、周子・二程子・張子の順次によつて、これ等四子の言を列擧してゐる。初め朱子は、一、求端。二、用力。三、處己。四、治人。五、辨異端。六、觀聖賢の六綱に分ち、更に目を立てて、一、道體。二、爲學大要。三、格物窮理。四、存養。五、改過遷善・克己復禮。六、齊家之道。七、出處進退辭受之義。八、治國平天下之道。九、制度。十、君子處事之方。十一、敎學之道。十二、改過及人心疵病。十三、異端之學。十四、聖賢氣象としたが（朱子語類卷一〇五）、後人の記憶と檢出に不便であるために、葉采が集解を作るに及んで、その大意を取つて改修し、二字或は三字の簡明にして呼び易きものとし、爾來、これに從つてゐる。即ち、一、道體。二、爲學。三、致知。四、存養。五、克己。六、家道。七、出處。八、治體。九、治法。十、政事。十一、敎學。十二、警戒。十三、辨異端。十四、觀聖賢がこれである。〔道體類〕凡そ五十一條、所謂性の本源、道の體統を論ずるもので、周子の締說、程子の中說、及び張子の氣說等、何れもその一斑を揭げ、宋代哲學の根本的特色とする人性と宇宙との關係、理氣心性の說等の大要を收め、學者必讀の文字であるが、初學に於てはやゝ高遠に過ぎる觀がある。〔爲學類〕凡そ百十一條、學問の方法と用意、並に古今儒學の相違を述べて、學者を誡めたもの。〔致知類〕凡そ七十八條、知を致すこと、即ち讀書講學して、吾人の知識を養つて餘すところ無きを期し、主として讀書の方法と、その先後の次第を論じたもの。〔存養類〕凡そ七十條、修養を以て德を積むべきことを論じたもの。敬と云ひ、主一無適と云ひ、或は敬爲虛靜と云ひ、宋儒の盛んに提唱したところのものである。〔克己類〕凡そ四十一條、上の存養類が精神修養を主とするに對して、これは主としてその實踐躬行の要を力說する。〔家道類〕凡そ二十二條、以上の修身の道を基礎として、更にその上に齊家の必要を說く、先づ己を正しくして、然る後他に及ぶ所以である。〔出處類〕凡そ三十九條、士は當に出でて仕を求むべきであるが、その出處進退の標準は須らく義に據るべきことを說く。〔治體類〕凡そ二十五條、〔治法類〕凡そ二十七條、〔政事類〕凡そ六十四條、この三卷は互に相關聯して政治の道を說き、治體は政治の根本的綱領、治法はその方法、政事は在官者の心得を說く。〔敎學類〕凡そ二十一條、人を敎へる道を論じたもの。〔警戒類〕凡そ三十三條、修養の過程に於ける反省的戒愼の道を說く。〔辨異端類〕凡そ十四條、主として儒敎以外の佛道二敎に就て、彼我を比較評論して、自己の眞面目を明かにし、先王聖人の大道を高唱したもの。〔觀聖賢類〕凡そ二十六條、斯道が遠く堯舜に起り、禹・湯・文・武・周公を經て孔子に傳はり、その後、顏・曾・思・孟が相繼いでこれを宣揚し、孟子以後、漢に揚雄、隋に王通、唐に韓愈があるが、聖門の傳統は却つて宋代の周子がこれを受け、張・程がこれを恢弘した聖賢相傳の道統を論じ、併せてこれ等の聖賢の片影を傳へたものである。これを要するに、本書は廣汎なる宋代儒學の宗旨を要約して一書に收めたもので、葉采が「六經を七にす」と評したのは、些か誇張に過ぎる嫌ひがあるとしても、朱子が自ら「近思錄好く看よ。四子は六經の階梯、近思錄は四子の階梯」（朱子語類卷一〇五）と云ひ、又「身を修むるの法は小學備はれり、義理の精微は近思錄之を詳にす」（同上）と云つたのは當つてゐる。

【史的地位】宋代の儒學は支那に於ける儒學史上に一新紀元を劃したもので、その根本精神は學風の刷新、即ち傳統的な經典の訓詁的研究に對する着實な批判的態度が、即ちそれである。秦の焚書の後、前漢の初めに挾書の律が除かれて、廣く天下に遺書が覓められ、次いで儒敎が國敎と認められて、その經典である經書の研究が起つたが、前漢一代を通じて一經專文の學が主であり、後漢に入つて漸く比較研究が行はれ、その註釋書も續々と現れた。老莊の尙ばれた六朝時代には、經典の註釋も亦多くその臭を帶び、又前代の註を更に解釋する所謂義疏の學が起り、唐に入つて從來の解釋を一定するために太宗の時勅命によつて「五經正義」が作られたが、こゝに至るまでは全く經典の訓詁的解釋に終始し、從つてその方面の大成されると共に、又字義の末に走つて大義を顧みぬ弊害が伴つて起り、玆に經學は新に別の方面に研究の領域を發見する必要を生じ、漢來の煩瑣な訓詁的學風に拘泥せず、直に儒敎そのものを對象として自由に討究し、これを文字の上に解釋せず、顧つて精神上から闡明しようとする學風が起つたが、その準備となり、基礎となつたものに、佛道二敎の影響が少からず存在したことは云ふまでもない。かの邵康節が一たび形而上學から倫理學を演繹しようと企てて以來、學者は何れも皆これを繼承し、周・張・二程子を經て、朱子に至つて始めて大成され、陸象山は別に一家の見を立ててこれと對峙した。本書は朱子が呂東萊と謀つて特に意を用ひて編述したもので、宋代の中葉に於ける新しい哲學の入門書として重要な地位を占めるものであり、殊に我が國の朱子學者の間に於ては、尊信頗る篤いものがある。【影響】本書が一たび出て以來、朱子の門人蔡模は、朱子の學說を輯めて「近思續錄」十四卷を作り、又別に張栻・呂祖謙の說を採錄して「近思別錄」十四卷を作つて、周・張・二程子に繼ぎ、明の江起鵬は薛瑄・胡居仁・羅欽順等の所說の中、特に躬行に益するものだけを編集して「近思錄補」十四卷を著し、又淸の張伯行は「續近思錄」「廣近思錄」各々十四卷、劉源淥は「近思續錄」四卷を著し、汪佑は四子に朱子を加へて「五子近思錄」十四卷を編む等、本書の續篇を作る者が相次いで現れた。而して本書の註解は、朱子の歿後五十餘年を經て、建安の葉采が「集解」十四卷を撰したのを初めとする。【傳來】本書の我が國に傳はつたのは詳かでないが、その足利氏の末葉である事は疑ない。江戸時代に至つて、小倉三省が始めてこれを尊崇し、次いで山崎闇齋はこれを翻刻した。崎門の徒は特にこれを尊び、本書の十四目を「大學」の三綱領八條目に比して、決して增減すべからずとした。本書を註したのは貝原益軒の「近思錄備考」を以て第一とする。この書は嘗て淸朝の大儒茅星來の稱揚するところとなつた。

【註釋書】近思錄說（無卷數）中井履軒（竹山）○近思錄摘說　十四卷　澤田節（洪門）○近思錄欄外書　三卷　佐藤坦（一齋）○近思錄訓蒙輯疏　二卷　安部井褧　○近思錄集解便蒙詳說　二十四卷（漢文叢書本）葉采　○近思錄集注　十四卷　茅星來　○近思錄集注　十四卷　江永　○近思錄集解　十四卷　孝文稠　○近思錄備考　十四卷　貝原篤信（益軒）○鼇頭近思錄　十四卷　宇都宮三近（由的）○近思錄示蒙句解　十四卷　中村之欽　○近思錄鈔說　五卷　同　○近思錄說略　十四卷　澤田秀　○近思錄筆記　卷數未詳　三宅重固（尚齋）

【參考】日本朱子學派之哲學　井上哲次郎　○朱子研究　秋月胤繼　○儒學の目的と宋儒の活動　諸橋轍次　○宋學概論　小柳司氣太　○宋元學案　一百卷　淸　黃宗羲・全祖望　〔宇野・本多〕

金水 きんすい　「松風金水」を見よ。

金砂子 きんすなご　「俳諧金砂子」を見よ。

均齊 きんせい　「均衡」を見よ。

禁制 きんせい　古文書「條目」を見よ。

近世女風俗考 きんせいじよふうぞくかう　風俗　二卷一册【著者】生川春明【刊行・由來】著者生前柳亭種彥の許に稿本を送り、その校訂を得て刊行せんと望んだが、程なく種彥が歿したので、稿本は、その弟子四方梅彥の許に移り、爾後轉々して明治二十六年大槻如電によつて、漸く東陽堂から刊行された。【諸本】日本隨筆大成卷二所收【解說】江戸時代の初期から中期へかけての女の風俗を、頭髮の結び方から被り物・衣服・履物・携帶品に至るまで記述したもので、古書・古句の記載を一々古畫に引合はせて論證した點にその特徵がある。上卷は、髮を頭の上に結ぶ事、髮を結ぶ髓の事、前髮、鬢、額つくる事、眉に心を入る事、頰紅、爪紅、頭の飾、櫛枝簪、櫛、髷頭考。下卷は、伽羅を髮にとめし事、鑷、被衣、檜笠あみかさ、葛笠菅笠、綿帽子、振袖、縫箔金糸縫の小袖、裲襠、女合羽、日傘、煙草、帶、足袋、鬮金剛等の事を述べ、追考として古製の衣服之圖、表挿囊、簡守御伽母子の事を記してある。又七十一歲の梅彥の自筆序文、如電翁の著者の傳及び序がある。〔石村〕

近世怪談霜夜星 きんせいくわいだんしもよのほし　讀本　五卷【作者】柳亭種彥【插畫】葛飾北齋【刊行】文化五年【諸本】柳亭種彥集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】上總國笠森觀音の開帳の日、高西伊兵衞といふ士は、惡漢雲舞半六の手から美女花子を救うて戀されたが、その夜賊に襲はれ伊兵衞の刀が和田山の山神の怒に觸れた爲め花子を誘拐されてしまつた。こゝに武藏須崎の鹿士花方求次郎は、一日友人を招いて酒宴を張つた。その時、偶々侍女歌次の父天羽觀次が蛇にまつはられて苦しむを見て、一座の者にその由來を語つた。それはかの事件の後、伊兵衞は鎌ヶ谷に移り、道具屋三次の娘でお澤といふ醜婦に入聟したが、かの花子が伊藤快保といふ士の妾となつて芝浦に囲はれてゐる事を知り、その囲家に居を移して花子と通じた。やがて快保はこれを知つて、當時その侍女であつた歌次の父觀次を介し、却つて兩人を結ばせたので、伊兵衞は觀次と計つてお澤を水死させ、花子を娶つた。かくてお澤の怨靈は蛇と化し、彼等につき纏ふやうになつたといふのである。求次郎が語り終つた時、件の蛇は、歌次を襲うて狂亂させ死に至らせた。又、求次郎もこの因緣話をしたためか、その後遊女津島の許に遊んだ折、不思議にも所持の神符が血染となつた事から、宮太夫と稱してこの地に在つた雲舞半六の刄に斃れ、快保も怪死を遂げるに至つた。なほ伊兵衞は花子と共に鎌倉に隱棲してゐたが、一夜お澤の怨靈に惱まされて伴快五郎を喪ひ、程なく自分も娘お村と共に悶死した。さて求次郎を殺して血染の神符を奪つた宮太夫事半六は、その祟と惡業の報によつて、遂に沼田の渡に水死した。丁度、半六を狙ふ求次郎の僕佐助と、夫の遺言によつて尼となつた花子とが、この邊に世を避けてゐた求次郎の情人津島の庵に落ちあつて、半六の死を知り、その羽織を刺して恨を晴らした。後二人の尼は上總光明寺に庵を結び、そこで世を終つたが、寺は舞馬の禍に燒けて佛前にあつた鉦鼓が觀音の尊像の如くになり、靈驗著しとて鉦鼓觀音と仰がれた。

【構想】本書には、文化三年の識語がある。即ち種彥二十三歲の時の作で、その構想に就いては、文化四年の江戸柏庵玉來の序文に盡きてゐる。讀本の怪異を以て趣向を複雜にし、あくどく因果づくめとなつてゐる。これは、一途に怪異と殘酷と卑猥とを喜んだ當時の江戸の民衆の興味を迎へたためであらうと思ふ。文政八年七月、江戸中村座に上演された、鶴屋南北の「東海道四谷怪談」（別項）等に影響してゐる。

【參考】柳亭種彥集解說 （菅野）

近世畸人傳 きんせいきじんでん 傳記 五卷【著者】伴蒿蹊【補畫】花顚【成立】蒿蹊の自序、花顚三熊思孝の跋文は天明八年、釋慈周の序文は寛政二年である。【刊行】寛政二年【諸本】有朋堂文庫・日本古典全集第三期所收【解說】本書は「近世其名聞えたる人或は世にしられぬ人々のたぐひ希なる德行をはじめ、儒家・僧家・歌人・詩人・隱者・諸藝の人すへて奇なる行狀其人の詩歌文章に至るまで氣象の見るへきものを集め記したる」もので、その數百餘名、主なる者を記せば、第一卷に、中江藤樹・熊澤蕃山・貝原益軒・僧桃水・樵者七兵衞妻・宮崎圓・駿府義奴、第二卷に、三宅尚齋・綠眼・大石氏僕・遊女大橋・賣茶翁、第三卷に、下河邊長流・契沖・荷田春滿・長崎鎮人、第四卷に、柳澤淇園・池大雅及妻・似雲・惟然坊、第五卷に、戸田茂睡・丈艸・甲斐德本・美濃聾者・龜田窮樂等である。畸人の意味に就いて、著者は「仁義を任とせる諸老、忠孝の數子のごときは、世の人にたくらべて行ふところを奇とせるなり」とし、又、產を破り、放蕩せるものをも載せたのは、「風狂放蕩かくの如しといへども、其中趣味あり、取べき所あるを錄る也」と云つてゐる。なほ「續近世畸人傳」五卷五册は、三熊思孝の編纂したものを、蒿蹊の校閱を得て、寛政十年に出版した。 （土井）

近世奇跡考 きんせいきせきかう 隨筆 五卷【著者】岩瀨醒（山東京傳）【挿畫】喜多武清【刊行】文化元年【解說】江戸各時代市井の俗事、殊に文筆・諧藝・任俠・工藝に名ある人々の逸事等に就て、考證したもので、卷一に驪想文賓以下十八條、卷二に佐交山親書以下十三條、卷三に古畫相撲圖以下十條、卷四に夢市郎兵衞・明石志賀之助事以下十六條、卷五に英一蝶傳以下十四條、合計七十一條を收めてある。龜田鵬齋の序の中に、「頃老人就其無根之傳奇、兩考其有據之事跡、遠捜往時之實、近辨俗說之妄、題曰古今奇跡考云、」とある。俠客・遊女・俳人・俳優等の傳記に最も力を盡してゐる。文化元年鵬齋の序の外に、同年谷弘齋の序及び詩人一枚の題詩があつて、著者の例言を添へてゐる 同著者の「骨董集」（別項）と共に隨筆文學の白眉と稱せられる。 （和田）

近世國文學序說 きんせいこくぶんがくじよせつ【著者】藤村作【刊行】昭和二年雄山閣【成立】著者は、「近世國文學と武士生活」と題して、近世文學への道標を作らうとしてなした講演の筆記を出版（大正十二年）したが、その後更に又講演の手記によつて近世文學と町人生活の部を增補し、「近世國文學序說」と題して公にしたものである。【解說】第一章近世國文學の階級的二分野、第二章分、義理、人情の生活、第三章武士生活、第四章義理人情の衝突と近世文學の主題、第五・六章戲話樣式は、御家騷動・敵討に分れ、第七章判官贔屓と近世文學脚色の傾向、第八章町人生活、第九章富の憧憬崇拜と富の文學、第十章榮華生活と近世文學、第十一章江戸人、江戸趣味、江戸の通と江戸文學、第十二章安樂生活と江戸文學、第十三章生活の遊戲化と江戸文學、第十四章風雅生活と俳諧文學等である。全篇を通ずる一つの觀點は、江戸時代に經濟的勢力の增大に伴つて勃興した町人階級と、舊來の公轄文化とは又自ら別種の文化を成した武士階級の對立、卽ち階級的な立場であり、他の觀點は江戸の町人階級から生れた文學、卽ち飽くまで社會的な立場を基調にしたものである。國文學、少くとも近世文學をかゝる立場に於て說いたものは、本書に於て始めて完しと云ふべきであらう。內容に於て、第四章の義理人情の衝突と近世文學の主題、第七章の判官贔屓と近世文學脚色の傾向の二章は、著者獨自の見解であつて、近世國文學解釋の上に、一大光明を點じたものと見るべく、近世國文學の研究、鑑賞の手引としては、これに依つて始めて漸く體裁を成したものと言ふべきである。 （土井）

近世史の發展と國學者の運動 きんせいしのはつてんとこくがくしやのうんどう 一卷【著者】竹岡勝也【刊行】昭和二年九月【內容】序說に於ては、國學者の運動は、中世文化が現代文化に到達するために、先づ經過しなければならなかつた運動であつて、その中心意義は上代への復歸にあり、隨つて又上代の墮落を意味する中世の否定にあつて、斯くして導かれた明治維新は、政治的變動であると共に、宗教改革としての意義を有するものであるとして、國學者の運動を歷史的に槪觀してゐる。その他、神々の佛敎化、文學に於ける佛敎的要素、國學の發達、維新の改革と國學者の運動等の四章がある。【批評】國學精神の考察に先だち、國學によつて否定された中世文化の特質を考へ、又國學者の運動が明治維新の改革に如何なる意義を齎したかを、社會運動として、又宗教革命運動として理解しようとした所に、この書の新しい試みがある。隨つて著者が「國學者の運動を全體として把握し、その國學者の運動が如何に歷史の發展に與つてゐるか、殊にこの運動を操る根深き關係を過去の歷史に摸索する事によつて、この運動の歷史的地位を決定せん事を試みたものであつた」といふ意圖は、成功してゐる。ただ中世に於ける佛敎的文學論が國學者、殊に宣長によつて如何に否定されたかは注意しながら、中世の文學藝術上に著しく發達した幽玄の意義が國學者の文學觀と如何なる關係に立つかに考察を及ぼさなかつたこと、漢學者の廢佛運動が國學者の廢佛の先驅たる點は指摘しつゝ、漢學に於ける古學派・古文辭學派と、國學者の復古精神との交涉を吟味しなかつたこと、又宣長に至つて完成の極に達した國學が、やがて維新の改革を導き來る過程として、國民精神を發醒し、改革的情熱を喚起した點に於ては、平田篤胤の思想と運動とが極めて重要な契機をなすものであるにも拘らず、この點が十分考察されてゐない。併し、國學の意義をその業績たる國語・國文・國史・律令等の研究成果の上にのみ見ないで、更にそれ等研究の基底となり動力となつた根本精神に認め、而もそれが近世文化史上に如何に實現され、如何なる意義を齎したかを明かにしようとしてゐる點に於て、國學の史的研究に貢獻するところが多い。 （西尾）

近世先哲叢談 きんせいせんてつそうだん 傳記 二卷【著者】松村操、春風と號し、越後の人。一說には信濃の人といふ。明治十七年四月六日病歿した。【解說】中井竹山より安井息軒に至る近世の儒者・文人、二十二人の傳を漢文で書いたものである。 （佐久）

近世叢語 きんせいそうご 隨筆 八卷【著者】角田簡【解說】德行・言語・政事・文學等の諸目を立て、諸家の文集野乘等より材料を採り、慶長・元和以來の逸事遺聞を集錄したもので、漢文で書いてある。なほ弘化二年同體裁で續編が刊行された。【著者小傳】字は大可、一字は廉夫、九畹と號した。大阪に生れ、中井竹山に就て學び、豐後の岡藩に仕へ、安政二年十二月二十八日歿した。 （佐久）

近世日本國民史 きんせいにほんこくみんし 歷史【著者】德富蘇峰【刊行】大正七年十二月、第一篇「織田氏時代前篇」刊行、昭和七年四月第三十九篇「井伊直弼執政時代篇」刊行。今なほ「東京日々」「大阪每日」に續載中【編纂目的】著者は「修史述懷」（蘇峰叢書第八冊「昔書小錄」）で、本書編纂の理由と動機を說明し「明治天皇の威德大業と、天皇を輔翼したる維新の元勳、明治の良臣、其他國民の指導者たり率先者たる幾多の人物と、此の國家の興運に際して、活動發展したる一般國民とは、之を百世の龜鑑として、傳ふ可き必要ありと信ずるから」と言ひ、次に「操觚者として世に立つからには聖明を對揚し、實物教科を垂らし、後昆をして趨嚮する所を知らしむるは、偏に予が當然の任務と自覺したからである。」と言つてゐる。かくて「明治天皇御字史」を敍述せんと志し、前提として筆を織田豐臣時代から起した。大正七年の起稿だが、大正元年に思ひ立つたのであるといふ。【內容】第一篇「織田氏時代前篇」に於て足利時代末期の世相を敍し、その世相中から生れ出た織田信長の覇業創始時代を述べてゐる。同中篇に於ては信長の得意時代から沒落するまでを敍してゐる。第四篇より第六篇までは豐臣氏時代として、秀吉の擡頭より小田原征伐の時代に及び、第七篇から第九篇までは朝鮮役の始末、第十篇は桃山時代、第十一篇は關原役、第十二篇は大阪役。第十三篇は家康時代の槪觀で、以下鎖國篇、統制篇、思想篇等を執筆し、元祿時代に先立つ時勢粧を明かにした。第十七篇は元祿時代を槪觀し、義士篇、世相篇によつて、元祿文化の大要を說いた。第二十篇は「元祿享保中間時代」、第二十一篇は吉宗時代、第二十二篇は寶曆明和の時代、第二十三篇は田沼時代、第二十四篇は松平定信時代、第二十五篇は幕府の分解作用が漸く行はれ始めたことを記してゐる。第二十六篇は薩長及び水藩の勢力を述べ、第二十七篇は文政天保時代、第二十八篇は天保改革の眞相に言及し、第二十九篇以下は、幕末の多事多端な形勢を詳說してゐる。【價値】本書は大正十二年、「織田氏時代」三册に對し、帝國學士院から學士院賞を授與せられた。史家として近世日本を見るといふよりも、新聞記者として、經世家としての歷史眼から、近世日本を見ようとするのが著者の抱負である。學的にも遺漏なきことを期すると共に、特に史料の蒐集に力を集めてゐる。傾向は、大體に於て政治史に近いが、然し史家の政治史の如く型に捉らないで、可なり獨自の俊敏な見解があり、それに材料の取扱ひの立體的なところや、その卓越した敍述によつて、今までの日本史に見られない特色を持つて居る。ただ大體が政治史的色彩が強いために、綜合文化史としての日本史を要求するものに取つては、多少の不滿なきを得ないし、種々の點で專門史家の間にも異論がある。記述の體裁としては、引用文の多過ぎるのが、煩雜な感じを與へる。然し、浩瀚且つ精密な「近代日本史」として、既出のものに全く類例がない點で注目に價ひする。 （高須）

近世風俗 きんせいふうぞく 風俗【總說】江戸時代の民間風俗は、井原西鶴・菱川師宣を初めとして、次々の文學者・浮世繪師に依つて、或は浮世草子・黃表紙・洒落本に、或は繪本・一枚繪・錦繪に、如實に描き出されてある上に、和學者・漢學者・雜學者の無數の隨筆中に採錄されてゐるため、これを知るに役立つ資料は實に豐富なもので、殆ど枚擧に遑ない程であるが、專門的に叙述したものに至つては、さして多くない。一般的に系統を立て順序を逐うて總記したものには、藤岡作太郎・平出鏗二郎共著「日本風俗史」下卷、齋藤隆三氏著「近世世相史」、喜田川季莊著「類聚近世風俗志」一名守貞漫稿（別項）、喜多村信節著「嬉遊笑覽」等が主要なもので、なほ「日本風俗史講座」（雄山閣）中には、中村孝也氏の「江戸時代の風俗」、齋藤隆三氏の「江戸趣味」等がある。叢書には、「近古文藝溫知叢書」「燕石十種」「續燕石十種」「新燕石十種」「近世風俗見聞集」（別項）「鼠璞十種」「近世文藝叢書」（風俗）「珍書文庫百家叢說」「秘籍複製會刊行本等、隨筆を集めたものには、「正續百家說林」「珍書文庫隨筆大觀」「日本隨筆全集」「隨筆文學選集」「日本隨筆大成」等があり、繪畫には「日本風俗圖繪」十二輯、「江戸風俗浮世繪大鑑」三帖等が參照に最も便利である。年表には齋藤幸成著「武江年表」があるが、その國書刊行會第三期刊行の增訂本は、喜多村信節著「武江年表補正」（續燕石十種一）と、關根只誠の書入とを併せ記入したものである。雜誌には、「風俗畫報」「江戸會誌」「風俗志林」「此花」「風俗圖說」「江戸趣味」「風俗」「風俗研究」等があつて、有益な記事考說が載せられてゐる。【見聞錄】當時の見聞錄、又は後日追記の隨筆風の見聞錄で、時世の推移や世態の變遷を徵する資料とするに足るものも少くない。その比較的纏まつたものを擧げると、三浦淨心著「慶長見聞錄」自永祿至慶長（改定史籍集覽十）、同著「そぞろ物語」自慶長至寬永（近世風俗見聞集一）、新見正朝著「むかし〳〵物語」自明曆至延寶（同上）、加藤曳尾庵著「我衣」自寬文至寶曆（燕石十種一）、「久夢日記」自延寶至元享（近世風俗見聞集一）、「元祿寶永珍話」自元祿至寶永（同上）、本島知辰著「月堂見聞集」自元祿至享保（同一・二）、「元文世說雜錄」自享保至元文（燕石十種三）、「享保世話」享保七—十（同二）、「飛鳥川」自享保至文化（新燕石十種二）、小川顯道著「塵塚談」自元文至文化（燕石十種一）、「寬保延享江府風俗志」寬保延享（近世風俗見聞集三）、手柄岡持著「後は昔物語」自寶曆至享和（燕石十種一）、森山孝盛著「賤のをだまき」自延享至享和（同上）、瀨川如皐著「只今御笑草」自寶曆至寬政（續燕石十種一）、喜田有順著「親子草」自寶曆至寬政（新燕石十種一）、山田桂翁著「寶曆現來集」自寬政至天保（近世風俗見聞集三）、四時庵茂高著「忘れ殘り」（燕石十種一）、森島中良著「反古籠」明和前後（同上）、大田南畝著「奴師勞之」自明和至文化（同二）、二鐘亭半山著「見た京物語」天明（溫知叢書九）、岩瀨京山著「蜘蛛の糸卷」自天明至天保（燕石十種一）、齋藤彥麿著「神代餘波」自安永至天保（同二）、[illegible]著「扶桑管說」自寬政至安政（同三）、曉鐘成著「近世見聞噺の苗」自寬政至文化（近世風俗見聞集四）、式亭三馬著「式亭雜記」自文化至文化八（續燕石十種一）、石塚豐芥子著「豐芥子日記」文化十—十一（近世風俗見聞集三）、久須美祐雋著「浪華の風」安政（溫知叢書一）、「天弘錄」自天保至弘化（同上）、知堂閑人著「花吹雪隣手遊座」（近世風俗見聞集四）等がある。【考說】初期以來の風俗・習慣・言語・俚諺等に

就て考證し論究したもの、又はそれ等を集めたものには、山東京傳著「骨董集」(百家說林續中)、「近世奇跡考」(溫知叢書八)、「大晝舞考證」(燕石十種三)、柳亭種彥著「還魂紙料」(百家說林續上)、「柳亭記」(同續下二)、「柳亭筆記」(同上)、「足薪翁記」(同上)、「用捨箱」(溫知叢書二)、「柳亭遺稿」(續燕石十種二)、喜多村信節著「瓦礫雜考」(日本隨筆大成第一期二)、「筠庭雜考」(百家說林續下一)、山崎美成著「世事百談」(百家說林正下)、「麓の花」(燕石十種二)等がある。また古書・古實・香組・肴板等の零砕な風俗的資料を集めて短い解說を加へたものに、「寸錦雜綴」(日本隨筆大成第一期四)、「尙古造紙挿」(同一)、藤原吉迪著「睡餘小錄」(同三)等がある。

【服飾】衣服・染色に關しては、越智松久著「反古染」(續燕石十種一)、山東京傳著「無垢衣考」(同二)、野村正次郎氏著「有職研究」等があるが、染色・文様の圖錄には、江馬務氏編「誰が袖百種」、野村正次郎氏編「振袖と小袖」、岸本景春氏編「小袖幕」、風俗研究會編「江戸時代衣服文様集」、考古學會編「江戸時代衣服模樣百選」等があつて、いづれも印刷精妙を極め、參考の價値あるは勿論、普通鑑賞の具としても頗る人の目を樂しましめるものがある。

【女粧】女粧一般に關しては、「歷世女粧考」「近世女風俗考」(各別項)の二名著がある外に、「女鏡」「女重寶記」「女用訓蒙圖彙」「諸家奥女中袖鏡」等の參照すべきものがある。化粧の法に至つては「容顏美艶考」「女子愛敬都風俗化粧傳」(各別項)が最も著はれたものである。

【野郞】萬治二年刊の「野良蟲」(稀書複製會第三期)、寬文二年刊「剃野老」(同第一期)を初めとして、貞享の「野良三座記」、元祿の「養浪草」(稀書複製會第五期)、李記評林等の「役者評判記」に、その容貌・風俗を記述し批評してゐる。「上村吉彌と式亭三馬」記念號(風俗研究二十八號)には、上村吉彌考の吉彌結等に就いて記されてゐる。また「日本風俗史講座」には、伊藤趙氏の「遊女と若衆」の項がある。

【花街遊女】花街遊女の研究書中、最も獨匠的なので知られてゐるのは、畠山箕山著「色道大鏡」(續燕石十種二)で、全國の遊里を歷遊し、親しく見聞し研究すること三十年餘にして成つたものである。江戸吉原に關する書は、柳亭種彥著「吉原書籍目錄」(新群書類從七)、大久保葩雪氏著「續吉原書籍目錄」(同上)に網羅されてあるが、今一般に知られてゐるものを揭げると、庄司勝富著「異本洞房語園」(燕石十種三)、「同後集」(續燕石十種一)、徒然著「同異本考異」(溫知叢書六)、曲亭馬琴著「元吉原の記」(新燕石十種一)、柳亭種彥著「吉原十四ケ條」(同五)山崎美成著「新吉原略說附玉菊考」(燕石十種二)、「吉原雜話」(同三)、原盛和著「北里戯場隣の疝氣」(同上)、西村藐庵著「花街漫錄」(日本隨筆大成第一期五)、喜多村信節著「同正誤」(新燕石十種三)、宜閑樣住孝著「北里見聞錄」(近世風俗見聞集三)、澤田東江著と稱せられる「吉原大全」(近世文藝叢書風俗部)、秀山人著「柳花通誌」(同上)、「吉原大雜書」(稀書複製會第二期)、石塚豐芥子著「吉原大鑑」、石川雅望著「北里十二時」(百家說林正上)、桃華園著「菲花漫筆」(日本隨筆大成第二期二)等がある。又德永種久著と稱せられる「あづま物語」(近世文藝叢書風俗部)は元吉原の細見で、この種書籍閣板の嚆矢とされてゐる。明治以降の書では、關根金四郞氏著「江戸花街沿革誌」、大久保葩雪氏著「花街風俗誌」、西原柳雨氏著「川柳吉原志」、宮川曼魚氏著「江戸賣笑記」等がある。江戸の岡場所に就ては石橋眞國著「かくれさと」(近世文藝叢書風俗部)、石塚豐芥子著「岡場所考」がある。その他京の島原に就ては「島原大和曆」(近世文藝叢書風俗部)、斜天呑鵬著「一日千軒」(同上)、大阪の新町に就ては吟古市人著「大阪新町細見之圖澪標」(近世文藝叢書風俗部)、畠江閑著「廓中一覽一名浪花靑樓志」(同上)、香具屋先生著「虛實柳巷方言」(同上)「花街浪華色八卦」(同上)、新町初め島場所八ケ所の妓品風俗を評隲したものに「諸事評判」(同上)がある。なほ「浪華叢書」(別項)風俗部に、同種の書を收めてある。その他の諸國に就ては、「諸國遊里好色由來揃」(近世文藝叢書風俗部)「諸國遊所細見記」畠山箕山著「長崎土産」(稀書複製會第三期)等がある。又近く上村行彰氏著「日本遊里史」が刊行せられた。遊女に就て記したものには、榎本其角著「吉原源氏五十四君」(續燕石十種二)、原盛和著「高尾考」(燕石十種一)、山東京山著「京山高尾考」(續燕石十種二)、加藤雀庵著「高雄追々考」(鼠璞十種一)、柳亭種彥著「高尾年代記」、經邦著「吉野傳」(燕石十種三)、江馬務氏著「名妓吉野」、同氏著「灰屋紹益と吉野太夫」等がある。

【雜】一時代の人物風俗を書き記したものに、元祿時代の各階級の人物を畫いて說明を加へた「人倫訓蒙圖彙」(稀書複製會第二期)、明和・安永頃の通人の風俗を描いた洒落本「當世風俗通」(同第一期)、「後編女風俗通」(同上)、文化・文政頃の札差の風俗を叙した「十八大通」(日本隨筆大成第二期六)、繪本には菱川師宣の「和國百女」、西川祐信の「百人女郞品定」がある。日常の雜事に就て記したものには、菊岡沾涼著「本朝世事談綺」(溫知叢書三)、山崎美成著「同正誤」(同七)、久松祐之著「近世事物考」(同十二)、結髪には、安部玉腕子著「當世かもじ雛形」(安永八年刊)・田中何房著「男女頭髮考」、稻葉小千氏著「日本結髮史」。見世物には齋藤月岑著「百戲述略」(新燕石十種三)、小寺玉晁著「見世物雜誌」(同四)、茶番狂言には、川崎重恭著「猿樂沿革考一名茶番由來」(燕石十種一)、北流山人著「淸神秘錄」(續燕石十種)があり、その他楊弓・投扇等の雜藝は、國書刊行會本「雜藝叢書」(別項)に網羅されてある。 (石村)

近世風俗見聞集 きんせいふうぞくけんぶんしふ 風俗 四卷 【編者】國書刊行會、主として朝倉無聲の力に依つたものと云ふ。【刊行】大正元年八月より同二年七月に至る。【解說】慶長から慶應末年に至る約三百年間の江戸を中心として、京阪及び諸國の風俗並に巷談・風說を記した書を集め、これを年代順に排列したもので、卷一には「そゞろ物語」(三浦淨心)「むかしむかし物語」(新見正朝)「久夢日記」「元祿寶永珍話」「月堂見聞集上」(本島知辰)卷二には「月堂見聞集下」(同上)「享保世話」「元文世說雜錄」、卷三には「寬保延享江府風俗志」「寶曆現來集」(山田桂翁)「豐芥子日記」(石塚豐芥子)、卷四には「巷街贅說」(塵哉翁)「大弘錄」「花吹雪股手嬉臨」(鄙堂閑人)等十三種百卷を收めてある。 (石村)

近世文學 「江戸時代文學」を見よ。

近世文藝叢書 きんせいぶんげいそうしよ 叢書 十二冊 【編者】國書刊行會 【刊行】同會刊行書の第二期本に屬し、明治四十三年より四十五年に至る。【解說】第一・二卷は「江戸雀」「京雀」等の寬永以前の「名所記」、第三・四・五卷は、淺井了意・鈴木正三・北條團水・錦文流・八文字舍自笑等の浮世草子を收めた「小說」、第六卷は鹿野武左衞門・露の五郞兵衞・三笑亭可樂等の落語本を收めた「笑話」、第七卷は「擬物

語」で、「おさな源氏」「吉原徒然草」等を含み、第八・九卷は「誹風柳多留」を入れた「川柳」、第十卷は「風俗」で、三都の細見記とも云ふべき「好色由來揃」「一日千軒」「みをつくし」等を收め、第十一卷「俚謠」には、伴信友の「中古雜唱集」、黑川春村の「陸奥國田歌解」、小寺玉晁の「小歌志彙集」等を含み、第十二卷は、華山・馬琴・種彥・了阿・與淸・廣重・月岑・雪軒・枝直の日記を收めた「日記」で、收載する所の原本百二十五種、四百八十七卷に達し、就中、名所記・細見記等には、今は稀覯に屬してゐるものが多數である。 (土井)

近世邦樂年表 きんせいほうがくねんぺう 淨瑠璃 三卷 【編者】東京音樂學校邦樂調査係。主として黑木勘藏が實際に當つた。【解說】常磐津・富本・淸元の部(明治四十五年刊)、江戸長唄附大薩摩淨瑠璃の部(大正三年刊)、義太夫節の部(昭和二年刊)の三册に分れてゐる。各流派の發生當時から、幕末(慶應三年末)に至る事項を集成したものであつて、各種の番附、正本、年代記類等を資料として、興行名題を主とし、詞章の作者、出演者の連名、俳優或は人形の役割等に及び、主要人物の小傳・動靜等をも揭げ卷末に索引がある。書中最も力を注いだものは「義太夫節の部」で、各作品の簡單な梗概と共に先行作との關係等をも略記してある。なほ江戸時代にも主に各流派の內部の人々によつてこの種の編纂は試みられ、それらが本書の基礎になつた事は勿論であるが、本書は精細な調査によつてそれらに傳承された誤を正し、缺を補うた點が甚だ多く、今日この方面の研究には必須の參考年表である。 (細田・守隨)

近世物之本江戸作者部類 きんせいものゝほんえどさくしやぶるゐ 隨筆 二卷 【著者】蟹行散人(馬琴)【名稱】「江戸作者部類」「作者部類」とも略稱される。【成立・由來】天保五年正月の序に、この書の成れる由來を悉してゐる。また「蟹行散人蛟身田の能聲窟に稿す」とのみ署して、撰者の何人か不明であるが、種々の點から、また他に傍證もあつて、馬琴の作とされた。書中平賀鳩溪の歿した時が年十三であつたと見えるところから、馬琴六十八歲の著作と推定される。なほ二卷の凡例に「本書四卷を全部とす、一二の兩卷、稿本方に成れり、餘卷いまだ稿せず餘日暇あらん折、稿を續て錄すべし」とあるやうに、本來四卷まで書く筈であつたらしい。【諸本】溫知叢書(博文館)第五編所收。【內容】享保より天保に至る間、江戸に居住した戯作者の略傳・事蹟・逸話等が著者の見聞のまゝ書かれてゐる。從つてその記憶の繁簡は一樣でないが、大體に於て「遠きを略して近きを詳にする」を旨としてゐる。その好尙の程度に依り、事柄の性質に依り、叙述組織は、卷第一、赤本作者部、洒落本作者部、中本作者部。卷第二、讀本作者部上。卷第三、讀本作者部下、淨瑠璃本江戸作者部。卷第四、(以下闕錄)――近世浮世江戸畫工部、赤本讀本淨瑠璃本江戸畫工部、明和以來鋼人小錄。卷第三以下は遂に見られなかつたが、二卷に就いて見るに、卷第一は載する所の作者全部百二十一名、內赤本作者部百十一名、洒落本作者部、中本作者部併せて二十八名、內重複十八名、卷第二讀本作者部上は載する所九名、內重複四名で、この重複に就ては卷第二の初めに辨じてゐる。而して各部の初めに、赤本讀本等それ自體の性質と消長を說き、作者傳に及び、また隨所に諸本流行の消息を語つてゐる。【價値】當時文壇の重鎭であつた著者が、その細心にして博覽強記な才力を以て書いた本書は、江戸作者の評論として近世小說史に多くの資料を提供してゐる。ただ讀本部に於ける京傳と馬琴との比較に最も著しく見られる著者の性癖による獨斷偏重の見解の隨所にあるを考慮しなければならない。 (菅野)

近世和歌史 きんせいわかし 和歌 一卷 【著者】佐佐木信綱 【成立・刊行】東大文學部に於ける講義を讀み易いやうに叙述したもの。大正十二年一月博文館。【解說】著者は序說の中に、「近世和歌史上の諸歌人について評論し、諸流派發生の次第を明らかにし、諸歌風の變遷發達の意味を究めて、なるべく和歌史上の事實について具體的にこの問題を明らかにしてみようと思ふ」と述べてゐる。而して第一章に「細川幽齋及びその門流」を叙して、近世和歌の勃興前期の趨勢を論じ、以下、元祿古學興隆期、賀茂眞淵及び縣居派、荷田在滿、本居宣長及び鈴屋派、江戸派、元祿以後の二條派、小澤蘆庵、香川景樹及び桂園派、德川末期の諸章の下に、各歌人の略傳を叙し、作例を舉げて、その歌風を述べてゐる。本書は木瀨三之の傳記や、土佐に於ける萬葉學の源流に關する事實の如き近世和歌史上の新事實を發見した點もあり、又挿入した百三十餘の近世歌人の筆蹟も資料として注目されるが、和歌史としては啓蒙的性質が多い。 (藤川)

金石文 きんせきぶん 【語義】金文・石文の略稱。凡て金屬、岩石など耐久性の物質に表現せられた文字をいふ。支那傳來の語である。銘のある物質が、多くは金屬・岩石であるからこの名がある。【解說】銘のある物質は金屬・岩石・磚・瓦・木材等であるが、銘は本來不朽に傳へるためのものであるから、朽損し易い磚・瓦・木材等よりは耐久性のある金屬・岩石が多く選ばれる所以であり、また實際金屬・岩石に表はされた銘が多いのもそれがためである。普通金屬・岩石・磚・瓦・木材に表はされた文字ではあるが、埃及の石刻書象、支那の武陵祠の如き畫象石など、銘文でないものも包含させることがある。しかし古錢は別に專門學として除外されてゐる。銘文は通例、金石に彫刻されたものか、鑄出されたものであるから、支那では款識と云つて、文字が凹入してゐるもの(陰文)を款、文字の凸出してゐるもの(陽文)を識と區別してゐるけれど、銘には必ずしも彫刻したものばかりでなく、鑄型で鑄あらはしたもの、押型で押したもの、箆・針・釘などで書いたもの、また朱・墨・漆の類で書かれたものもある。

【銘文の種類】銘はこれを表現した物質との關係から二大別される。(一)銘そのものが主であつて、これをあらはす物質が從屬的のもの、例へば、人々の履歷・功績、或は開拓・橋梁・建築・城砦・陵墓などの由來、經文、敎訓はもとより、文學的な詩歌俳句の類までを刻した碑文の如きもので、銘文を永久ならしめるために耐久性の金屬、岩石の類を選んだに過ぎないもの、卽ち物質によつて、銘文の存續年月に長短が出來るのみで、銘文そのものには無關係である。(二)銘を表はす物質と形態とが主であつて、銘は從屬的であると云ふよりは、寧ろ必要としないもの、例へば、梵鐘・鰐口・雲版・佛像・神像・刀劍・鏡・擬寶珠その他諸器物の銘の如きもので、銘の有無によつて、その物質並に形態上の價値を左右したり、缺陷を來たさないものである。言ひ換へると銘は物質の作者・年代・由來などを說明するも

金石銘表現上の種類

1 彫刻銘(石) 下野那須國造碑の一部(文武、四年)
2 同(金) 大阪威奈大村卿墓誌銘の一部(文武、慶雲四年)
3 同(木) 下總香取神宮藏鏡奩銘の一部(後花園、寛正四年)
4 鑄銘(陽) 大和榮山寺鐘銘の一部(醍醐、延喜十七年)
5 同(陽) 宇都宮二荒神社鐵狛犬銘(後宇多、建治三年)
6 同(陰) 武藏金澤稱名寺鐘銘の一部(後伏見、正安三年)
7 篦書 伊勢小町塚發掘瓦製光背銘(高倉、承安四年)
8 針書 薩摩新田神社藏鏡背銘の一部(伏見、永仁二年)
9 鏨字 伊勢皇大神宮政印筒銘の一部(一條、長德四年)
10 朱書 相模元箱根興福院普賢菩薩銘(伏見、永仁五年)
11 墨書 下野河内郡田原村大字下田原藥師堂大日如來銘(後龜山、元中四年)
12 漆書 備前和氣郡伊部村妙國寺釋迦像銘(後村上、正平十三年)
13 押型 武藏都築郡古瓦銘
14 同 志度燒皿底裏銘(江戸中期)
15 石刻畫象 舊支那慈雲寺天士殿(東京帝國大學工學部藏)(漢代)
16 日本最古の金石銘 紀伊伊都郡隅田村隅田八幡社藏國寶人物畫象鏡(神功皇后攝政三年或は六十三年?)

ので、歴史的或は骨董的價値に差異を生ずるに過ぎない。【價値】書體・文體・思想・風俗はもとより、史的事實を正確にし、或は歴史の缺陷を補ひ、工藝・美術史の闡明に資するところが多い。

【日本の金石文】金石文の起原は、東西洋ともに極めて古い。支那では既に夏・殷・周の時代にあつた。わが國では、大陸との交通が開けてから現はれたもので、彼の神功皇后攝政三年或は六十三年と稱せらるゝ紀伊國伊都郡隅田村隅田八幡社所藏の國寶人物畫象鏡に「癸未年八月日十六王年□弟王在ニ意柴沙加宮ニ時斯麻念長奉ニ遣ニ開中費直穢人今州利二人等ニ取ニ白上同二百旱ニ作ニ此竟ニ」とあるのが現存最古の金石文であり、又國史に明記された以前のものである。これに次ぐ定說のものは、推古天皇四年の伊豫湯岡側碑と大和元興寺露盤銘とであるが、亡失して今は銘文のみを存するに過ぎない。その後、わが國の金石文としては、碑石・佛像・墓誌版・梵鐘・經筒・鏡・擬寶珠・燈臺・磬・鰐口・古瓦・棟札その他諸器物の銘など頗る廣汎なものとなつた。又金石文の研究は、支那ではかなり古くから行はれたが、わが國では江戸時代になつて、元祿四年に佐々宗淳が「那須國造碑考」を書いたのが最初であり、これに次ぐは松師點と井上玄桐とである。また摺拓は細井廣澤によつて始められた。これから我が國の金石文は一方には銘文そのものの研究となり、他方には銘文を摺拓して法帖とする事となつた。さうして寛政・文化・文政の頃になつて、金石文の研究が盛んとなり、山田以文・石井修融・岡崎信好・松平定信・日下部勝皐・屋代弘賢の徒が輩出し、狩谷棭齋は「古京遺文」を著はして、考證を附し、市川寛齋は一々銘文を摺拓して「金石搨本考」を著はし、西田直養は「金石年表」を編して研究に一歩を進めたが、明治時代に入つて金石文の研究も一層精密となり研究者も多くなつた。

【研究書】支那は別として、我が金石文の書籍は、元祿四年の佐々宗淳の「那須國造碑考」以後數多の書籍があらはれたが、大抵次のやうな種類に分れる。

一、銘文を蒐集せるもの。(イ)同種の銘を蒐めたもの。扶桑鐘銘集(岡崎信好)、古今鐘銘集(石井修融)。(ロ)異種の銘を蒐めたもの。金石私志(市川寛齋)、金石文(屋代弘賢)等。

二、銘文に考證を附けたもの。(イ)ただ一個の銘に關するもの。長谷寺多寶塔銘文解(林信友)、石川年足朝臣墓誌考證(山田以文)、藥師寺塔擦銘解(日下部勝皐)、文禰麿墓誌解(細井田以文)等。(ロ)多數の銘に關するもの。古京遺文(狩谷棭齋)、金石搨本考(市川寛齋)等。

三、年序に配せるもの。金石年表(西田直養)、日本金石年表(奥田一夫)、皇朝金石年表(畠田一郎)、國分金石年表(佐野長山)、倣古年表(山本勝倫)等。

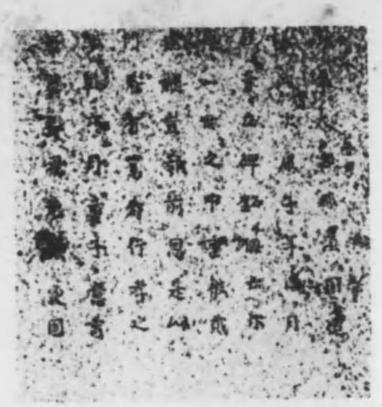
四、摸刻または拓本によつて、法帖としたもの。威奈卿大村墓誌銅器銘、道澄寺鐘銘、神護寺鐘銘、藥師寺塔銘等。

五、拓本または寫眞によつて、圖譜としたもの。集古十種銘部(松平定信)、日本金石象(木崎好尚)、及び紀年鏡鑑圖譜(考古學會編)等。 (入田)

近世說美少年錄 きんせせつびせうねんろく 讀本 五十卷 四十五冊 【作者】曲亭馬琴 【挿畫】第一輯歌川國貞、第二・三・四輯岩窪北溪、新局玉石童子訓一陽齋豐國。【名稱】容姿の美なる美少年、容姿美ならず性質美なる美少年、容姿性質共に美なる眞の美少年、これら三種の美少年の物語を一篇に仕組んだ所に、この名の由つて來るところがある。なほ續編四輯以下を「新局玉石童子訓」と題するのも、等しく美少年でも、その中には玉石相混ずることを表はす意から來てゐる。【刊行】第一輯文政十一年、第二輯同十二年、第三輯天保三年、第四輯同五年。河内屋茂兵衞、丁子屋平兵衞合板である。「馬琴日記」「近世物之本江戸作者部類」(各別項)に、この著作に關する事情を述べてある。次いで弘化二年、「新局玉石童子訓」の名を以て初四編二十卷を、翌年五編五卷を、更に嘉永元年六編五卷を續刊したが、その年十一月病歿して完結するに至らなかつた。この「童子訓」三十卷は、馬琴失明後に口授編纂されたもので、その代稿者は澤正次とある。【諸本】訂正新編美少年錄(大圖圖として發行を附してある)・帝國文庫・有朋堂文庫・國民文庫等所收 【題材】初めに和夏瀬十郎の挿話を取つてあるが、全篇の主位を占むる取材は、大内義隆を弑して逆に嚴島合戰に毛利元就のために誅された陶晴賢に關する史譚で、陶晴賢を末朱之介晴賢とし、毛利元就を大江杜四郎成勝として、その生立ちより叙してある。

「近世說美少年錄」第一輯

【梗概】(近世說美少年錄)足利義植の世、菊池武俊阿蘇山の古城に據つて威を振ふ。管領大内義興追討の總大將となつて西下し、大江弘元の諫を聽かず菊池家累城の際奇瑞を現はした古廟に障し、また衆人の諫言を斥けて白蛇の住むといふ虛木を燒いて禍胎を遺した。義興の近習に、陶瀬十郎興房といふ美少年があつた。女歌舞伎阿夏と契つて珠之介といふ子までなしたが、遂に別れることとなつた。瀬十郎は山口へ返され、阿夏も京を去つて鎌倉へ旅立つたが、途に山賊に誘拐された。一日賊の盗んだ五色の玉を持つて逃れ出でたが、玉は福富太夫次といふ長者の家寶、その孫女黄金の愛翫するところであつた。阿夏はこれを返してその家に留まること數年、瀬十郎を慕つて山口に赴いたが、瀬十郎は堺城の異變に赴いて、生死の程も不明といふ風說を耳にし、又既に路用も盡きたので再び歌妓となり、日野西兼顯卿の臣幸晋无四郎と契つた。无四郎は主君に珠之介を近習として預け、暇を乞うて、阿夏と共に歸國した。後、珠之介は香西元盛に愛された。元盛は義興に代つて管領となつた武藏守高國の權臣で、讒せられて尼ケ崎で討たれた時、珠之介は入水したが、不思議にも助かり、恰も堺の戰に破れた陶瀬十郎に邂逅し、名を末朱之介晴賢と改めて武藏河陰の扇谷朝興朝臣に託された。かくして朱之介十九の歳、朝興の命を受けて吉野六田川の



1

2

3

4

5

6

7

8

ほとりに如々来禅師を訪れて逢はず、慶長山に庵を結うて禎木家業の養女弥栄の難を救つてから、その家に寄寓し、弥栄を配されたが、悪事にのみ走つて賊の意計に陥つたため、深く前非を悔いた。その後落業から大金を預つて唐津を騙はうと堺に行つて計らず黄金と會ひ、一家離散の結果、母阿鶴の叔父の家にあることを知つた。朱之介これと通じて賊はれ、住吉の侠客十三屋九四郎に身を寄せた。

【新訂玉石童子問】朱之介は浮浪の後唐に渡び、恰もその後、相方の名娘今様が自害したので後妻を受けて獄に繋がれ、十三屋にも累を及ぼした。今様は菊池の残党緒方の情婦で、緒方が捕縛されたと聞いて、死についたのであつた。これより先、大江弘元は東國の治風を探るために遠遊に上つた。機て駿豆の浪人来張九四郎通世は、長女鷺緑をして旅情を慰めさせた。鷺緑は杜四郎成勝を儲けた。かの十三屋九四郎は鷺緑の弟であつたので、来弟柴六郎通館は、杜四郎と共に十三屋の疑を解かうとした。その頃偶々小松盆林寺を襲つた賊があり、柴六郎・杜四郎がこれを捕へると、緒方の支黨で、今様の死因も明かになつた。併し朱之介は着慈が顕はれて大和へ追放され、計らずも観音寺の城下で吉呈書延明といつて醫を業としてゐる无四郎と邂逅した。不正の事あつて郷里を追はれ、今はこゝに阿夏と愛女晩霜と共に住んでゐたのである。朱之介は晩霜を挑んで斥けられたので、拉し去らうとし、延明・晩霜を死に至らしめて逃電する。阿夏は寄るべなきまゝに阿鶴の家に寄寓したが、一日如々来禅師が訪れて兩人を救度し他門に歸せしめた。さて杜四郎・柴六郎は武藝の修行を志し、観音寺佐々木家の少年武藝大會に參して大勝を得、同家の近習曾根兄宗玄に斬まれ、長橋勢挙・象船知章をして討たせようと企でられるが、この二少年、却つて杜四郎等に暴れかかる矢傷の野猪を射留め、宗玄を刺して災厄を脱れ、武藝の士に富む上野の廿樂郡郡領荘に赴いた。こゝに力士鎌鍋権二郎・奈良櫛八重作の兄弟は、驚嘉松煙齋を虎げてその娘桜手を、日頃恩義を受けた鏑野郡司鏡的の妾に伸介しようとして聽かれず、これを怨んでゐたが、杜四郎・柴六郎の幇助によつて、松煙齋が、大内義興に遂はれた菊池武後を探すために、父問貫佐用六故實と共に東西に遊歴してゐた菊池家の忠臣防守筑四郎本彦である事を知つてその誼を謝し、なほその危きを助かんと妙義山麓の知邊に宿を移した。果して鏡的は盤鯨白日高十六郎をして権二郎に郡領家の短刀横領の誼を着せて投獄した。八重作等はこれを聞いて十六郎を引立てて郡領の館に誘へ権二郎を救つた。さる程に、もとの郡領郡領(こおりのりょう)区武茂の妾腹幟丸は、父を獄して家を亡した家臣鏡明の子鏡的を討つて恨みを晴らさうとし、多くの義士に擁せられて軍を起した。これより先、曾根兄宗玄の孫健宗は、佐々木家を追はれて獄に投ぜられてゐたが、この時獄を破つて鏡的を殺し、城主に立てられて對戦した。城からは任津神女の妖術によつて猛風を起して悩ますが、如々来禅師から傳へられた風避の神團符を以てこれに對し、奇妙の仙丹を投げて遂に妖女を仆し、又その鯉飛んで健宗を刺して城内の兵を歸服させた。やがて極魚丸郡領となり撲手を妻として隠居した。

【構想】勧懲主義の下に結構されたもので、朱之介はその出生の當初に於て、不倫關係に呪はれたものであり、大江杜四郎は正しき者の子であつた。これが二人の運命を宿命的に支配し續ける。而してこれから發生する凡ゆる物語の展開の上に、蛇精の不思議や聖僧の功力等、支那神仙譚を到る處に轉用してゐて、結局、それが悪を懲し善を助ける仕組になつてゐる。前半に於ては朱之介の成人に力を注ぎ、悪の成長發展の經路を描き出し、後半に於ては杜四郎を主として、これとの葛藤に由つて悪を制せしめてゐる。ただ馬琴としては珍しく人情を取扱つてゐるのが特色である。

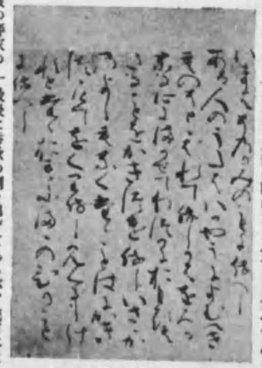
【價値】筆も想も圓熟した作者晩年の作品で、その勧懲主義も悪人の不幸、善人の幸福を單に因果・因果とのみは解釋せず、境遇の力に目を注ぎ、又巻を通じて男女の情事に筆を著けてゐるのは、作者一代の著作中最も注目すべきものである。馬琴の傑作として定評のある「弓張月」「三七全傳南柯夢」「皆用頭」等の右に出づるものではないが、悪の暗黒面をも提へ、よく人情を描いてゐる所は、彼の作品中別天地を拓いたものといへる。されば明治以後の評家の馬琴を論じて、その勧懲思想に煩らぬものも、「小說神髄」「勧懲實行錄」を始めとして、饗庭篁村・大町桂月等、何れも本篇には稱讃の言葉を列れてゐる。み體としては前半が優れ、後に至るに從つてだれてゐるのは、失明と共に漸く彼の精神體力の衰へたためであらう。

【參考】馬琴の美少年録とその人物 大町桂月(帝國文庫)○帝國文庫・有朋堂文庫・國民文庫等の解説 【蕾野】

近代圖書物語(きんだいとしょものがたり)【讀國民果物語】を見よ。

近代秀歌(きんだいしゅうか) 歌論書 一巻 【著者】藤原定家 【成立】未詳 【諸本】定家自筆本が酒井伯爵家に藏せられてあつた。流布寫本とは本文に異同がある。刊本としては群書類從に收められたのが初めであらう。【組織・内容】初めに歌の變遷を說き、次に、歌は心よりいでてみづから悟る物であると言つてゐる。さうして專に古を慕ひ、心は新しきを求め、高き姿を貴んで寛平以後の歌にならふべきを言つてゐる。最後に秀歌の例を擧げてあるが、流布本には二十餘首であるに對して自筆本には六十八首を擧げてある。その中、十八首は小倉百人一首と一致してゐる。【價値】定家の歌論書としては、所說簡單であるが、その例歌を尊重に擧げた所は重んずべく、且つ定家の自筆本の存することによつて、定家歌論書中最も信ずべきものであるところに、その大きな價値がある。

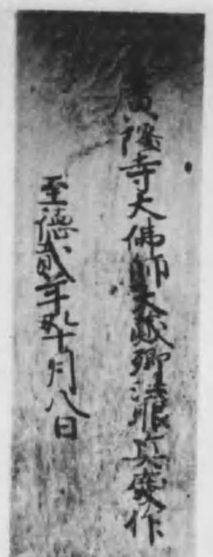
【參考】近代秀歌解說 佐佐木信綱 ○定家自筆近代秀歌に就て 同上六号の花三〇ノ九) (久松)



定家自筆本「近代秀歌」

9

10



12

11

13

14

15

16

近代小說史（きんだいしょうせつし）　一卷　國文學史

【著者】藤岡作太郎（ふじおかさくたろう）　【刊行】大正六年

近代日本文學大系（きんだいにほんぶんがくたいけい）　全三十五卷　【著者】上田萬年（うえだかずとし）・藤村作（ふじむらさく）・笹

川臨風（ささがわりんぷう）・藤井乙男（ふじいおとお）・諸氏（しょし）　【刊行】昭和三年

以降（いこう）、國民圖書株式會社（こくみんとしょかぶしきがいしゃ）【解說】本卷收錄作品（ほんかんしゅうろくさくひん）

本文學大系（ほんぶんがくたいけい）の續篇（ぞくへん）として編輯（へんしゅう）されたもの。卷一（まきいち）

假名草子集（かなぞうしゅう）　第二卷（だいにかん）井原西鶴集（いはらさいかくしゅう）　第三卷（だいさんかん）井原西鶴續集（いはらさいかくぞくしゅう）　第四卷（だいよんかん）西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも）・西鶴置土產（さいかくおきみやげ）・

西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第五卷（だいごかん）西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第六卷（だいろくかん）

八文字屋本集（やもじやぼんしゅう）　第七卷（だいしちかん）江戸生艷氣樺燒（えどいきえんきかばやき）・傾城禁短氣（けいせいきんたんき）　第八卷（だいはちかん）

傾城色三味線（けいせいいろじゃみせん）・其磧傳（きせきでん）　第九卷（だいきゅうかん）傾城色三味線（けいせいいろじゃみせん）・傾城色三味線後篇（けいせいいろじゃみせんこうへん）　第十卷（だいじっかん）

傾城色三味線（けいせいいろじゃみせん）・傾城色三味線後篇（けいせいいろじゃみせんこうへん）　第十一卷（だいじっかん）

傾城禁短氣（けいせいきんたんき）・傾城色三味線（けいせいいろじゃみせん）　第十二卷（だいじゅうにかん）傾城色三味線後篇（けいせいいろじゃみせんこうへん）　第十

三卷（だいじゅうさんかん）其磧小說集（きせきしょうせつしゅう）　第十四卷（だいじゅうよんかん）其磧浮世草子集（きせきうきよぞうしゅう）　第十

五卷（だいじゅうごかん）西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第十六卷（だいじゅうろくかん）西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・

本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第十七卷（だいじゅうしちかん）西鶴織留（さいかくおりどめ）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第十八卷（だいじゅうはちかん）

西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）・西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも）　第十九卷（だいじゅうきゅうかん）西鶴織留（さいかくおりどめ）　第二十卷（だいにじっかん）

八文字屋本集（やもじやぼんしゅう）　第二十一卷（だいにじっかん）八文字屋本集（やもじやぼんしゅう）　第二十二卷（だいにじっかん）西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも）・

西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第二十三卷（だいにじっさんかん）西鶴織留（さいかくおりどめ）　第二十四卷（だいにじっよんかん）西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・

本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第二十五卷（だいにじっごかん）西鶴置土產（さいかくおきみやげ）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第二十六卷（だいにじっろくかん）

西鶴織留（さいかくおりどめ）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第二十七卷（だいにじっしちかん）西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・

本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第二十八卷（だいにじっはちかん）西鶴織留（さいかくおりどめ）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第二十九卷（だいにじっきゅうかん）

西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第三十卷（だいさんじっかん）西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）・

西鶴織留（さいかくおりどめ）　第三十一卷（だいさんじっかん）八文字屋本集（やもじやぼんしゅう）　第三十二卷（だいさんじっかん）

西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第三十三卷（だいさんじっさんかん）西鶴諸國ばなし（さいかくしょこくばなし）・

本朝櫻陰比事（ほんちょうおういんひじ）　第三十四卷（だいさんじっよんかん）西鶴織留（さいかくおりどめ）・西鶴俗つれづれ（さいかくぞくつれづれ）　第三十五卷（だいさんじっごかん）

八文字屋本集（やもじやぼんしゅう）

近代文藝之研究（きんだいぶんげいのけんきゅう）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

近代日本文學大系（きんだいにほんぶんがくたいけい）　全三十五卷　【著者】上田萬年・藤村作・笹

川臨風・藤井乙男・諸氏　【刊行】昭和二年

以降、國民圖書株式會社　【解說】本卷收錄作品

本文學大系の續篇として編輯されたもの。卷一

假名草子集　第二卷井原西鶴集　第三卷井原西鶴續集　第四卷假名草子集・西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第五卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第六卷八文字屋本集　第七卷江戸生艷氣樺燒・傾城禁短氣　第八卷傾城色三味線・其磧傳　第九卷傾城色三味線後篇　第十卷傾城色三味線・傾城色三味線後篇　第十一卷傾城禁短氣・傾城色三味線　第十二卷傾城色三味線後篇　第十三卷其磧小說集　第十四卷其磧浮世草子集　第十五卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第十六卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第十七卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第十八卷西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第十九卷西鶴織留　第二十卷八文字屋本集　第二十一卷八文字屋本集　第二十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第二十三卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十四卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十五卷西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第二十六卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十七卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十八卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第二十九卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十卷西鶴俗つれづれ・西鶴織留　第三十一卷八文字屋本集　第三十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第三十三卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十四卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第三十五卷八文字屋本集

近代文藝之研究（きんだいぶんげいのけんきゅう）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

近代日本文學大系（きんだいにほんぶんがくたいけい）　全三十五卷　【著者】上田萬年・藤村作・笹

川臨風・藤井乙男・諸氏　【刊行】昭和二年

以降、國民圖書株式會社　【解說】本卷收錄作品

本文學大系の續篇として編輯されたもの。卷一

假名草子集　第二卷井原西鶴集　第三卷井原西鶴續集　第四卷假名草子集・西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第五卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第六卷八文字屋本集　第七卷江戸生艷氣樺燒・傾城禁短氣　第八卷傾城色三味線・其磧傳　第九卷傾城色三味線後篇　第十卷傾城色三味線・傾城色三味線後篇　第十一卷傾城禁短氣・傾城色三味線　第十二卷傾城色三味線後篇　第十三卷其磧小說集　第十四卷其磧浮世草子集　第十五卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第十六卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第十七卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第十八卷西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第十九卷西鶴織留　第二十卷八文字屋本集　第二十一卷八文字屋本集　第二十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第二十三卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十四卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十五卷西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第二十六卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十七卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十八卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第二十九卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十卷西鶴俗つれづれ・西鶴織留　第三十一卷八文字屋本集　第三十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第三十三卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十四卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第三十五卷八文字屋本集

近代文藝之研究（きんだいぶんげいのけんきゅう）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

近代小說史（きんだいしょうせつし）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

國文學史の續篇として編輯されたもの。卷一

假名草子集　第二卷井原西鶴集　第三卷井原西鶴續集　第四卷假名草子集・西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第五卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第六卷八文字屋本集　第七卷江戸生艷氣樺燒・傾城禁短氣　第八卷傾城色三味線・其磧傳　第九卷傾城色三味線後篇　第十卷傾城色三味線・傾城色三味線後篇　第十一卷傾城禁短氣・傾城色三味線　第十二卷傾城色三味線後篇　第十三卷其磧小說集　第十四卷其磧浮世草子集　第十五卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第十六卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第十七卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第十八卷西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第十九卷西鶴織留　第二十卷八文字屋本集　第二十一卷八文字屋本集　第二十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第二十三卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十四卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十五卷西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第二十六卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十七卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十八卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第二十九卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十卷西鶴俗つれづれ・西鶴織留　第三十一卷八文字屋本集　第三十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第三十三卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十四卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第三十五卷八文字屋本集

近代文藝之研究（きんだいぶんげいのけんきゅう）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

近代日本文學大系（きんだいにほんぶんがくたいけい）　全三十五卷　【著者】上田萬年・藤村作・笹

川臨風・藤井乙男・諸氏　【刊行】昭和二年

以降、國民圖書株式會社　【解說】本卷收錄作品

本文學大系の續篇として編輯されたもの。卷一

假名草子集　第二卷井原西鶴集　第三卷井原西鶴續集　第四卷假名草子集・西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第五卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第六卷八文字屋本集　第七卷江戸生艷氣樺燒・傾城禁短氣　第八卷傾城色三味線・其磧傳　第九卷傾城色三味線後篇　第十卷傾城色三味線・傾城色三味線後篇　第十一卷傾城禁短氣・傾城色三味線　第十二卷傾城色三味線後篇　第十三卷其磧小說集　第十四卷其磧浮世草子集　第十五卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第十六卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第十七卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第十八卷西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第十九卷西鶴織留　第二十卷八文字屋本集　第二十一卷八文字屋本集　第二十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第二十三卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十四卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十五卷西鶴置土產・西鶴俗つれづれ　第二十六卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第二十七卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第二十八卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ・西鶴名殘の友　第二十九卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十卷西鶴俗つれづれ・西鶴織留　第三十一卷八文字屋本集　第三十二卷西鶴名殘の友・西鶴俗つれづれ　第三十三卷西鶴諸國ばなし・本朝櫻陰比事　第三十四卷西鶴織留・西鶴俗つれづれ　第三十五卷八文字屋本集

近代文藝之研究（きんだいぶんげいのけんきゅう）　一卷　【著者】藤岡作太郎　【刊行】大正六年

享三丙寅歳孟春良辰　書肆　攝陽心齋橋筋角町　河内屋喜兵衛刊」【複本】珍本全集(帝國文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)・近代艶隠者(浮世草子)等所收。【題材】序中に見ると、本書中に記した多くの風流隠者は、故人や、在世の人々を一々筆にて書いたもので、明かにそれと言はないが、直にそれと察せられるとあるから、實在の人物を材としたもののやうである。併しこれも假託に過ぎないと言へばそれまでである。

【解説】作者が一日舟に乘つて海を渡り、貿山に到つて、その窟に入つて見ると甚だ淸げである。そこで神に逢つた。この神の「ここに留つて其樂をなせ」といふ教に從つて、草庵を結んで住んだ。この窟中で、種々な風流隠士に逢つた。作者が江戸に見た人達である。これ等の隠士を、一人一章に記して、卷一・二を成してゐる。それから、作者が世の有樣も見、又身の修行もしようと思ひ立つて、窟を出て足に任せて行き、洛外・嵯峨・大阪を始めとして諸國の隠士を見ることを卷三以下に記してある。隠逸的風流趣味は我が國文學に早くから流れてゐる。西鶴も亦「心葉」の中に、

[illegible]

とあるやうに、この風流趣味を一面に有した人である。本書を西鶴の作とすれば、この一面を表したものと見える。文章も彼の作としては、一種の氣取り方をしたものと言はねばならない。彼の他の作のそれとは多少趣を異にしてゐることは爭はれない。

【參考】近代艶隠者の考證　山口剛(早稻田文學二〇三)　(藤村)

公忠 きんただ　歌人(三十六歌仙の一)【姓名】姓は源。自らの名を隠して詠んだ歌に「唐衣ぬぎすてがたみ我やきんただめの前にかけてこそみめ」とある。別號滋野、滋野井辨。【生歿】寛平元年に生れ、天曆二年(一六〇八)十月(一説天曆三年)に歿す。享年六十。【閲歴】父は國紀。延喜・延長の頃、五位の藏人であつたが、延長八年九月、光孝天皇御讓位によつて殿上を下りたが、間もなく山城守になつたので、悲歎の餘り一旦頓死して蘇生したといふ。(藤原分?)歴。家集に「延喜の御門かくれ給ひて殿上もせざりける程に、山に雲のかゝりたるをみやりてよめる。おりのぼる見る甲斐もなし白雲の山とたのみし君もなければ」とあり、朱雀院の御代に再び藏人に補せられたので「百敷にかはらぬものは梅の花折りてかざせる匂ひなりけり」と詠んだ。その後山城守を兼ね、右中辨に任じ、天慶四年近江守に任じて下つた。同六年右大辨に進み、同年の日本紀竟宴に日濃命を詠んだ。同九年紀貫之は臨終の歌を彼に寄せた。【作品】家集「公忠朝臣集」。群書類從卷二四八所載本と歌仙家集本とは大略等しいが、後者は歌の數が三首多くて五十首(八首脱?)である。歌の順序は同じく、詞書がある。天慶三年小野好古が追捕使となつて下り、翌年は少將の勞にて四位に進む筈であり乍ら進まなかつたのを慰めた歌、朱雀院が藏におはしました頃、院の上におはしまして御手づから紅梅を折りけるを奉らせて、頭をもたげないで院に歌を詠めと仰せられて詠んだ歌などがある。勅撰集に入つた歌は、後撰二、拾遺四、その他凡そ十六首、合計凡そ二十一首。「古今集」には入つてゐない。【作風】明るい平和な情緒をはつきり詠んでゐるところに特色がある。「殿守のとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」「行きやらで山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしさに」の如き、その作例である。　(西下)

【參考】歌仙傳○尊卑分脈○大日本史九二

金太郎 きんたろう　童話【本據】相模國足柄山に金太郎と云ふ力量勝れた怪童がゐた。母の山姥に養育せられ、熊・猿・猪等を友として、自身は常に鉞を擔ぎ、角力・乘馬の遊びに日を送つてゐたが、或る時、勅定に依つた源頼光の臣、碓氷貞光(一説渡邊綱)に見出され、その推擧によつて頼光に仕へ、坂田公時と名告り、綱・貞光・季武(卜部)と併せて四天王と稱せられた。【出典】原形は金平淨瑠璃の「清原右大將」(寛文五年刊行)「公平誕生記」(同年刊行)「[illegible]源太郎」(寛文四年刊行)等に語られてゐるが、何れも幼名を金太郎とはしてゐない。「清原右大將」には怪童とのみ見え、近松の「嫗山姥」(元禄?)にも怪童丸としてある。後者では本童話は殆ど完成してゐる。「前太平記」(元禄)も亦金平公時としてこの説話を載せてゐるが、支那傳說の影響を受けた文章多く、且つ享和二年の序のある通俗説話(?)の作である。

【解説】英雄生立説話、山姥傳説と結合した怪童傳説の童話化したもの。主人公が史上英雄であるのと、場所が固定的なのが童話の定則を破つて傳說的成分が濃い。又山姥は民間傳説に本源を有し、謠曲「山姥」によつて有名な半神半人的な存在(一種の鬼女)で、本童話の形式に就いて、これに動物傳説系の變種とも云ふべきもの、即ち「子持山姥物語」「[illegible]卷の瀧藤傳説の生立物語が合體して、金太郎話の分子をも加へて來たものと推斷し得る。本童話の成立は室町末か徳川初世であらう。金太郎の名によつて呼ばれたのは遙に後であるらしく、歌舞伎の曲題の役名は大抵怪童丸であるが、文化六年四月中村座三代目瀬川如皐の十七回忌追善の所作「[illegible]」には、金太郎となつてゐる。その名の出現も金時の童話化に於て、桃太郎・浦島太郎(各項参照)等に同化した當然の結果であらう。なほ源頼光の臣としての坂田公時に關する逸話は、「今昔物語」卷二十八、「古今著聞集」卷九等に出てゐる。

【影響】山中鹿之助生立傳說は本童話の影響。又「金平淨瑠璃」(前出)の主人公金平は、金時の子として假作せられた勇者で、本童話の影響を受けてゐると共に、一面又本童話の完成をも助けてゐる。文學として本童話を取扱つたものは前記の戯曲の外、馬琴「金時一代記」「金時幼稚立」を初め夥數あるが、特に歌舞伎の所作として發達し、清元・常磐津・長唄等に作られてゐる中で、常磐津の「(四天王…)」(山姥金時)が最も有名である。

【參考】日本童話上卷附錄解説(資料日本童話集)○坂田公時の研究　香見一夫　(島津)

禁短氣三編 きんたんきさんぺん　浮世草子　五卷

【作者】二世八文字自笑【名稱】「禁短氣次編」(前項)の後編に仕立てた意【刊行】明和二年酉正月吉日　江戸大傳馬町三丁目　鶴鱗堂山野屋兵衛板【複本】珍本全集後編(帝國文庫)所收【内容】一之卷は、女郎に實のあるといふ話に、客は女郎小さよが年期を盡して金を調へ、男の一分を立てさせたといふ話を擧げ、女郎の誠實を守めて實情になれとの教へに、役者にのぼりつめた女郎が客を騙し、却つて散々に嬲られるといふ話を擧

る。二之卷は、むかしの六藏は今の世智辛い世の客とは似ても似つかぬとて、上京の金持といふ大盡の古一文字屋の大夫の仕方を語し、京家は隠人の心掛が悪く、殊に茶屋は下手稼業で客を野暮にしたと罵し、女郎の客の噂をする女は聞きづらいものと締める。三之卷は、むかし京に上つて女郎になじんだ西國の者の六十兩ばかり入れた財布を、仲居が料理人と謀し合せて二階から投げるが、客と約束あつて後から來た宿の手代に拾はれたといふ話から、今の客は女郎にぬかれまいとして却つて次々騙され、茶屋は客にはまるまいと戀の目からかしても戀の目かど放跡の所へはまるものだといひ、將監の痴情者人上人の女郎買の五常相續、女郎の綴を揃げたるを述べる。四之卷は、河内信貴山の日尻といはれる僧が、花村家之來といふ若衆となじんで失敗した話に、若衆事はとりがこはいと女道門に陥し、花川色之助といふ役者、願主して浪穂と云つた。若衆に振まれ、あつぱれ色若衆となつたのを、西の京の茶宇同屋の娘が見染めて茶屋へ呼び、その隠居要に驚いて、娘の男好みした顔と聞き話。贔屓の役者と語はうとする女郎が、七十ばかりの老人をたらし身受の相談をしたが、老人客の何もかも嫌ふての言分に客をたはけときずけんで嘉を嫌かれる事の誠とし、或る若衆が客を釣つておき、女郎と逢つてゐるうち大酒となりとうく〜となる所に、親類にせき立てられ夢中に客の所へ行くが、客を女郎と心得ての仕ぐさに、客は肝をつぶし話を聞かれたと、若・衆道の法談を終る。五之卷は、この證據の中から鏡路の梅永大倡の鍋男女蔑を探してゐた梅永の家來が、その講師を姦蔵と知り、その盡所・今川團太夫に逢つて國を立退かれた後、母大蔵が浪人乾戸太夫を語らつて大倡を殺したので、家老栗月八郎左衛門は今川と交蔵の黒髪絵を引き取り、交蔵を探してゐたことを語す。そこで交蔵は八郎左衛門・今川・藤藏と對面あり、仇大蔵を討ち、戸太夫は今川が蔵とわかつて自害しようとするを、その響を切つて濟ます。一回目出たく結語に歸つた。【構想】「傾城禁短氣」「禁短氣次編」(各項参照)の構想と同じである。殊に「次編」の續編として、「次編」の取つた狂言本「傾城佛の原」(前項)の趣向が、これの輪廓として完全に見られる。

【參考】珍本全集　明治廿四年版帝國文庫　解説　(笹野)

禁短氣次編 きんたんきじへん　浮世草子　五卷

【作者】二世八文字自笑【名稱】外題も内題も「禁短氣次編」とある。「傾城禁短氣」(前項)の後編に仕立てた意。【刊行】明和二年酉正月吉日　江戸大傳馬町三丁目　鶴鱗堂山野兵兵衛板。

【梗概】傾城に名高い梅永大倡の艶容文滿は、天性女の好く風俗をして關裾ぐるひの果、母當を受け同國澤谷寺の和尚が都の國帳に身を寄せ、毎日參詣の都の女中を見ては、胸緒とは父将監と昔を思ひ出してゐたが、年頃四十ばかりの町人に男色の趣を説かれたいと望まれて、宮川山將觀寺の衆徒淸玄の所へ忍ぶ高座に上り、男色淫道の成すゝめ、殊にも女面似善内心如夜叉とあるを説く。島原大坂屋の紅といふ太夫職が、大盡の身受を嫌つて、揚げ柄ふ新造屋の亀平部郎に隱つたが、後に竪藏は江洲甚戸村の長者となり共に榮えたといふ。太夫一生の榮花は情の一字に起り、顛沛醜の如く内心もやさしき故、内心如夜叉といふが誤ではないと說くに、講頭こゝは大事の處と日をすゑて、若道門の修所を以て爭ふが、設法者の女道門に言ひまるめられ、聽衆も贔屓の涙にくれて、その日の法談は終つた。さて大藏絞物の本懷を得るには嘘の噂、實の實といふことを得心せねばならぬとあつて、女郎は金で自由になるものと大金を打ち込んだ江戸の宜遊といふ大盡が失敗し、却つて田舎大盡の實な仕打に女郎が身請され、親里へ歸り返

「禁短氣次編」(表紙)

されて廓の取沙汰となつた例を引き、佛説馬鹿止觀に見える歡樂も止むべき時に止めよとの題意を說いては、江戸の大坂屋某人の傾城彦太郎が金山といふ大夫身請の大金を借り出さんとして勘當され、さうした身となつてもなほ金があれば諸き散らすか心とためされ、發心の緋を見脱けられて、親に許され金山を請出して家督を取つたといふ話を持出し、晩冥境町に醒の意を說いて、勤化僧の若衆ぐるひに大盡の妨げと覺悟をつかして、一寺中興の譽を得させたといふ若衆も誠にはあると述べるが、常住不退轉の女郎に如かずと言ひ、若衆には何事ぐるひのやうに疲れ物狂に身を落すことなしと、親兄弟に詰め寄せられて、若衆ぐるひに身代を失つた例を擧げて惡男を閉口させる。たゞ女郎に智慧のいるといふ事について、女郎の深く契つた客が他の女郎になじんだのを引き戻す手だてや、女郎が揚屋の亭

「禁短氣次編」(見返)

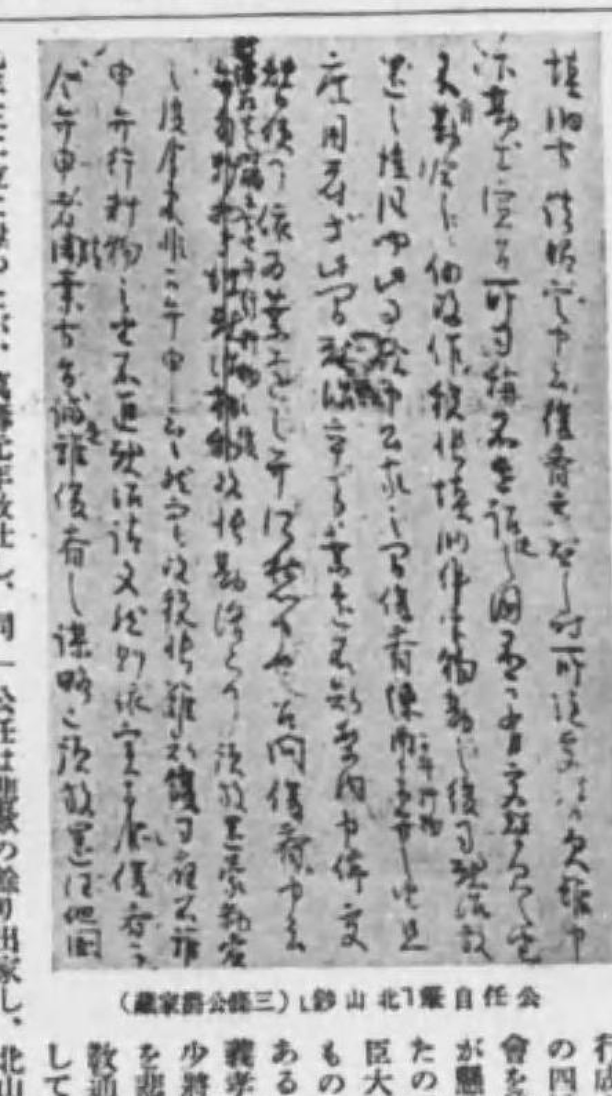
主に戀を仕かけられた身の振り方を問答し、替して女郎屋の亭主は日本第一と…といふ太夫のやうに客商する話をし、誠實の替は町の者にあるといふ證據には、泰然といふ大盡が身請をしようとする心を見て取つた八千代といふ女郎は親方と相談して高値にする手管を以てしたが、大盡笑つて體よく退いたといふ話がある。

【解説】横本五冊。所謂八文字屋の枕本で、

序に「佛原の狂言坂田大和山の昔を草紙に綴りなんと予が若かりし時書たる傾城禁短氣の後編に仕立た」とあり、狂言本「傾城佛の原」（別項）の趣向を借りたものとは言へ、僧侶の說法に擬して男色女色の優劣論をするといふ「傾城禁短氣」の趣向を襲ひ、女道門をすゝめ、遊興の極意を說く、踏襲の凡庸なるを以て見れば、序に「傾城禁短氣」がこの作者の若き時の作のやうに言はれてゐるも信ずるに足りない。卷末に「禁短氣三編」の「正月二日より本出し置申候」といふ廣告によれば、三編がこれより先に發行されたものらしく、江戸の書肆の出版になつたといふことも注意すべきであらう。（笹野）

錦天山房詩話 きんてんさんばうしわ　二冊【編者】友野霞舟【諸本】日本詩話叢書所收【解說】編者が藤原惺窩以下二百餘家の詩を蒐集し、「熙朝詩薈」（別項）を作る時に、漢文で作者の小傳と評論とを書き加へた。本書は「熙朝詩薈」から別に小傳と評論とを切り離したものである。江戸時代の詩風の變遷を観るに足る良書である。（佐久）

公任 きんたふ　歌人（中古三十六歌仙の一）【姓】藤原【別稱】四條大納言「金玉集」には「倭歌得業生柿本末成撰」とある【生殁】康保三年に生れ、長久二年（一〇四一）正月一日薨。享年七十六。【閲歴】頼忠の子、母は代明親王の御女、室は昭平親王の御女。道長と同年で佐理より二十二年の後輩、行成より六年の先輩である。天元三年正五位下に叙し、累進して長保元年從三位、同三年權中納言に任じ、正三位に陞つたが、齊信が公任を超えて從二位に陞つたので心平かでなく、上表して權中納言を辭さうとした。天皇は勅して藏人經通を遣はし給ひ、一階を加へて從二位に陞し給うた（續古事談）。この時の上表文を紀齊名・大江以言に書かせたが意に滿たず、改めて大江匡衡に囑した。匡衡が大に當惑してゐると、その妻赤染衞門が敎へて、公任は飾慢の人であるから家系がよいにも拘らず沈淪してゐる旨を書けば悅ぶだらうと言つたので、試みに前者の草案を見ると何れもその點に觸れてゐないので、妻の言に從ひ、公任の祖先から書き立てると、果して滿足されたといふ（袋草紙三、十訓抄七）。寛弘六年權大納言に進み九年正二位に陞つたが、萬壽元年致仕し、同三年出家した。曾て道長が大堰川に逍遙し、詩歌管絃の三船を浮べ、各々長ずる所に隨つて一船を選ばせたが、公任は三船の才を兼ねてゐたので、道長が彼の大納言は何れの船に乘るであらうかと言つたといふ話は有名である。この時、彼は和歌の船に乘り「小倉山嵐の風の寒ければ散る紅葉はをきぬ人ぞなき」を作り、花山院は「紅葉の錦」と改めて「拾遺集」に入れさせ給うたが、公任は御改作に不滿で



公任自筆「北山抄」（三條公爵家藏）

「拾遺抄」を撰したといはれてゐる。彼が「三十六人撰」を撰したのは、具平親王と人丸貫之の優劣論を試み、貫之に執した彼が負けたためであるといひ、初め「金玉集」に親王の御歌を入れ奉りながら、親王の薨去後、除いたといはれ、曾て長能の歌を容赦なく非難して遂に死に至らしめたといふ（袋草紙）。「公任集」には淸少納言との贈答歌がある。道長に對しては常に屈從してその意を迎へたやうであり、「朗詠集」は、道長の子敎通を婿にとつた時の引出物に撰したのであるといはれてゐる。曾て公任・行成・齊信・俊賢等の四納言が蹴鞠の會を催した時、鞠が懸りの外に落ちたので、公任は「大臣大將の子でないものが拾ふべきである」と言つて、父義孝が短命のため少將で終つた行成を悲しましめた。敎通の室は不幸にして早世したので、公任は悲歎の餘り出家し、北山の長谷に住んだ。蓋し彼は大臣に進めなかつた事を遺憾としたであらう。博學多藝なる上に名門であつたために、當時歌壇の唯一の權威者であつたことは、紫式部が公任に聞かれても恥しくない程には、歌はもとより作れないが、聲も出ないといひ（紫式部日記）、淸少納言も心がおかれて恥しいといつてゐる（枕草紙）のでも分る。【人物】彼は名譽心や自負心が強く、小事にも感情を發して執着した場合があつたやうだ。遠慮なく批評し、抑制なく哀愛を色に出して單純な滿足を感じたらしいが、而も一面には要領よく道長の意を迎へるだけの賢明さもあつたと思はれる。【著作】三十六人撰。（三十六歌仙ともいふ）○前十五番歌合（群書類從二一五。三十人の歌人を十五番に組合せたもので、歌人は三十六歌仙と大部分一致する）○和漢朗詠集（別項）○和歌九品（別項）○深窓祕抄 ○金玉集（別項）以上六種は後拾遺集序にその名が見える。○拾遺集（別項）二十卷。拾遺抄十卷の兩者又はその一が公任撰とされてゐる○新撰髓腦（別項）○諸國歌枕○家集に「前大納言公任集」（別項）○勅撰集に入つた歌は、拾遺十五首・後拾遺十九・詞花四・千載十一・新古今六、以下凡そ三十三首、合計凡そ八十八首、外に拾遺抄五首・玄々集六首・後葉集七首・續詞花集五首である。○北山鈔（別項）○古今集序註。（散佚してゐるが顯昭序註に引用せられてゐる）。

【業績】歌人としての彼には、二つの傾向が見える。一つは「後撰集」に見えるやうな、生活的情緒を歌ふ傾向であり、他は情緒を實感のまゝ露骨に表現するのでなく、必ず傳統的な形式を通さうとする傾向である。その時代とその生活とは彼の感興を無限に湧出させ、後世の歌人が歌合を中心として、萬人共通の情緒をただ表現によつて個性づけようとしたものとは大に趣を異にする。而も彼は客觀的表現が和歌に取つて必然的なものであることを十分自覺してをり、兩者を巧に調和させて或る程度の完成を得てゐる。「拾遺集」が彼の撰であるとすれば、採集した個々の歌に就ても、その編纂を表現形式から分類してゐる力量の點に就ても彼の態度と矛盾しない。後世の歌

學者は彼の穏健なる態度を永遠するに何等の不合理を感じなかつたであらう。彼は當時の歌界に於て、最高の權威者であつた。俊成・定家の出現によつて、その影を淡くしたけれども、日本歌學史上の大立物たるを失はない。然し貫之が各時代に亙つて偶像的に崇拜されたのには到底及ばない。貫之は「古今集」の撰者である外、その序文を書き、「土佐日記」を殘してゐるが故に有名であるが如く、公任も歌人、撰者であると共に「朗詠集」以下多くの撰著があるために有名であるといふ事は否定できない。その詩に關しては藤原伊周の如く、「公任、齊信は詩敵と謂ふべし」と言ひ、又大江匡衡の如く「一世の詩人」と稱する者もあるが、彼の詩の現存するもの十三首ばかりを以て見れば、それらの言は概ね過褒である。寧ろ大井川の逍遙に自ら和歌の舟を選んだ如く、歌人としての面目が最も顯著であつたらう。

【參考】大日本史百四十一○百人一首一夕話○榮華物語○大鏡○袋草紙○十訓抄○公卿補任○尊卑分脈○國文學全史平安朝篇（藤岡作太郎）○日本歌學史（佐佐木信綱）○國文學研究史 野村八良（西下・山岸）

金藤左衛門 きんとうざゑもん　能狂言【別名】女山賊 をんなさんぞく【內容】雲の上の金藤左衛門といふ山賊が、山へ出掛けて人を待つてゐると、折よく女が一人で通りかゝる。そこで嚇して目ぼしい物を取上げ、包みの中を開いて見てゐると、女は口惜しさに隙を見て金藤左衛門の長刀を奪ひ、却つて嚇しつけ、腰の物も、取られた品も取上げて去る。金藤左衛門は積善の餘慶と云ふことがあるから、施し物をした報があらうと言つて笑つて歸る。【解說】所謂「水破物」の一つで、筋は「瘦松」と殆ど同じである。山賊を扱つたものには、外に「手負山賊」「文山賊」などもある。「瘦松」は目ぼしい者が通ると瘦松と言ひ、目ぼしからぬ者が通ると肥松と言ふ山賊の合言葉を、題名としたもので、やはり通りかゝつた女のために、結局山賊が嚇されるものである。（篠田）

公任集 きんたふしふ　歌集　一卷【編者】未詳【名稱】前大納言公任卿集・大納言公任集・四條大納言公任家集等【諸本】群書類從卷二三六所收。圖書寮所藏本（寫一冊）も同系統である。【組織】卷の初め凡そ百八十首は春夏秋冬に分れてゐるが、それ以後の分類は漠然としてゐる。集團的な歌としては法華經二十八品の歌、維摩十喩の歌（この二つは赤染衞門集にも見ゆ）、粉河に詣でた旅の歌十九首等があり、旋頭歌一首がある。圖書寮本は五六六首で一首多いが、十一首の出入がある。本集は公任以外の人が整理したものである事が分る。【內容】本集には贈答歌が多いので、公任を中心とした當時の人事關係を知る事ができ、また詞書中に見える生活行事等の記錄から當時の文化の一端を知ることもできる。「宇津保物語」の人物仲忠・涼の二人を比較論爭した話は「枕草子」に見える所であるが、本集にも見え、圓融院の御時の事かとある。同じく「枕草子」に、淸少納言が齊信への返しに「草の庵を誰か尋ねん」と詠んで送り、宮中の評判となつたとあるが、この句は本集には公任の作となつてをり、且つ「たかたゞ」が「九重の花の都をおきながら」とつけてゐる。「白き紙に蟬を包みて蓮の花にさして」人の許にやるといふ趣味は「赤染衞門集」に見える所であるが、本集にも見える。改作で有名になつた「朝まだき」の歌は「法輪にまうで給ふ日あらし山にて、朝ぼらけ嵐の山の寒ければ散るもみぢばをきぬ人ぞなき」とあつて、作つた時の事情が「大鏡」にいふところとやゝ異なり、且つ初句も異なつてゐる。（西下）

近年諸國物語 きんねんしよこくものがたり　「西鶴諸國物語」を見よ。

金原亭馬生 きんばらていばせい　「馬生」を見よ。

禁祕抄 きんぴせう　有職　三卷又は二卷【著者】順德天皇【別名】順德院御抄・建曆御記・禁中抄。足利時代以降は「禁祕抄」の名に定まつた。【刊行】慶安五年【成立】「建曆御記」といふのは建曆帝御記といふほどの意味で、この年に成つたのでないことは、建曆年中には天皇は未だ十餘歲におはしたといふのでも知られる。それで荷田御風は、實所の條に「去去年內大臣被及ニ禁中一時、」とある句を考證して、內大臣を坊門內大臣信淸として建保六年の御作と定めた。書中承久三年の事實まで見えることから推して、この書が建保六年御起稿、承久三年御脫稿のものと見るべきであらう。藤貞幹の「好古日錄」に、「禁祕抄」は「建曆御記」の假名交りの文體であつたのを漢文體に書き改めたものだとの說を述べてゐるが、「河海鈔」などに見える「建曆御記」の文は皆漢文であつて、深い根據のある說とも思はれない。【諸本】群書類從・列聖全集等所收。【解說】宮中の故實・制度等を漢文で精細に書いたもので、多くの舊記を引いてこれを古今に徵し、詳かにその得失を論じられたものである。

上卷には、賢所、大刀契、晝御座御劍、玄上、鈴鹿、和琴、清涼殿、南殿、草木、恒例每日次第、每月事、御膳事、御装束事。中卷には、神事次第、臨時神事、佛事次第、可ニ遣ニ凡讀ニ事、諸藝能事、御書事、御使事、被ニ聽ニ雜袍ニ所ニ之人、聽ニ直衣ニ事、近習事、御持僧事、御侍讀事、殿上人、藏人事、藏人所雜色、醫道、陰陽道、凡僧、御厨殿別當、出納、小舍人、地下者、掌侍、女房、得選、采女、刀自、女官、主殿司、女嬬。下卷には、詔書、詔書覆奏、勅書、宣命、論奏、表、勅答、改元、勘文、天文密奏、焼亡奏、懸奏、配流、召返流人、解官、除籍、勅勘召人、召ニ起訴ニ事、召籍、給ニ馬部吉上ニ、內裏燒亡ニ遷御、宮官、奉ニ振ニ神輿ニ、赦令、御惱、日月蝕、雷鳴、止雨、祈雨、御卜、解除、御讀經、御祈、御修法、御遷御、殿舍渡御、交易御馬御覽、御殿儀、帥大貳諸國受領赴國、明經內論議、鷲山、大狩、鳥、蟲等、九十二項に就いて記されてある。

【註釋書】禁祕抄考註 六卷 平田篤泉（元祿十四年の自序あり。故實叢書第三輯）○禁祕抄註 速水房常 ○禁祕抄除蠹 一卷 平胤信（明和三年の自序あり）○禁祕抄階梯 三卷 鼓野井公崑（安永五年自跋あり。新註皇學叢書第五卷）○禁祕抄聞書 一卷 大藏藤樹○禁祕抄集註 一卷 河村秀根 ○禁祕抄講義 三卷 關根正直（明治三十四年二月刊、訂正大正十四年十月刊）

【參考】禁祕抄考 和田英松（史學雜誌一ノ一二）○皇室御撰解題 同上（列聖全集）（石村）

金平淨瑠璃 きんぴらじやうるり　淨瑠璃の一派【名義】脚色の主題が坂田金平の武勇談にある所から、その種の淨瑠璃を總稱した。金平なる名稱の發生については、慶長寛永頃、繪術を以て武勳を立てた友田金平なるものの名によつたものかとの說がある。【異稱】和泉太夫節【性質】源賴光は既に世を去り、その四天王の子達即ち綱の子竹綱、金時の子金平、季武の子末宗、定光の子定宗等の子四天王、及

び一人武者保昌の子鬼童丸が賴光の弟賴信の子頼義に仕へて賊徒を退治し、又様々に武勇を示す話から成り、或はこれに類する四天王ならぬ人物の武勇談から成る。金平はこれらを代表する人物と見られてゐる。かゝる粗豪な武勇説話と和泉太夫の殺伐粗野な浄瑠璃節との融合した荒唐さが江戸人の好尚に適ひ非常な成功をなしたのである。その結果、薩摩節や永閑節にも語られ、初めは江戸のみに行はれたが、後には上方にも流行した。これらの浄瑠璃正本を「金平本」(別項)といふ。作者としては主に岡清兵衛が與つたと傳へられる。

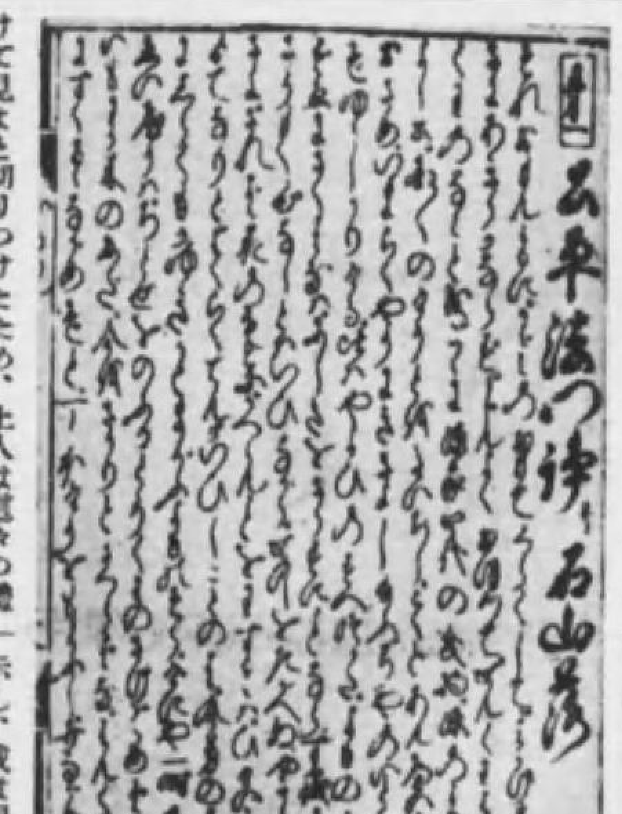
【沿革】 江戸の浄瑠璃は薩摩浄雲(別項)・杉山丹後掾等によつて創められたが、脚色の内容は室町時代末期の系統を引継いだものであつたから、新時代の新都市として基礎の成つた江戸は、漸く自身の浄瑠璃を求めねば止まなくなつた。この機運に乗じたのが金平浄瑠璃の出現である。明暦・萬治の頃起り、寛文を中心に榮え、やがて上方に影響して伊藤出羽掾・虎屋源太夫・虎屋喜右衛門等によつて弘められた。彼等の語り物には和泉太夫の正本もあつたが、新作も相當與へられる。和泉太夫は寛文年中受領して、櫻井丹波掾(別項)と名乗つたが、後、図らず罪を得て世の退轉を餘儀なくされ、一方新興浄瑠璃の勝退も急で、後に貞享・元祿の頃、衰滅の運命に接した。この間、曲に一様な脚色の武勇談に過ぎなかつたが多少の變遷は認められる。發生期にあつては「金平誕生記」「酒呑童子若壯」の如き、子四天王の生立談が流行した。これは金平浄瑠璃自身の説明とも見るべきで、脚色としては最も簡単な四天王説話の書替へに過ぎない。寛文年代の全盛期に入るや、「金平法門諍」「賴光跡目譜」(各別項)の如き、問答論議或は音曲の興を挿入する脚色が案出されたが、この形式は當時の流行を追つたもので他の劇様式にも屡々見出された。延寶・天和に及ぶと、内容の空虚な武勇談に満足されなくなつた結果、「金平讃の山入」とか「公平以前公」とかに見られるやうな艶や涙に新脚色の轉向を示した。かくて超人間的金平が人間性を取り戻したことは、當然金平が自己を破滅に導いたもので、結局新興浄瑠璃にその地位を讓らねばならなくなつたのである。【影響】天和・貞享の頃、江戸に新歌舞伎を創めた市川團十郎の所謂荒事は、その演出様式の祭を金平浄瑠璃に得て、一層これを劇化したものと思はれる。金平浄瑠璃は脚色の放恣的發展を試みて失敗したが、その點を繼承して成功を遂げたのは團十郎の荒事であつて、一面から言へば、荒事師は金平浄瑠璃の後繼者とも見られる。衰退後の金平浄瑠璃はその正本を一種の讀み物として、元祿以後に流行させたが、更に様式をかへて、後の赤本・黒本(各別項)となつて現はれた。

【參考】新群書類從第五〇新入浄瑠璃史 同上〇金平本全集 黑木勘藏 同上〇古浄瑠璃研究 同上(日本文學講座) 〔守隨〕

公平法門諍(きんぴらほふもんあらそひ) 浄瑠璃 六段

【作者】未詳【名義】金平が東山の上人と佛法の功徳を諍ふ事による。【成立】萬治・寛文の交に成つたものであるが、その原作は傳はらぬらしく、現存のものは寛文三年の作で、多少の加筆があらうとの説がある。【諸本】(一)和泉太夫正本、原作は江戸版であらうが、所傳をきかぬ。(二)上總掾正本、寛文三年九月山本九兵衛版、六段大本(三)(二)を省略したもの、享保鱗形屋版か、三段小本。【梗概】公平武勇談に謡曲「仲光」を加へたもの。

【梗概】(初段)(賴義館)源家四代の武將源頼義は、讒臣の言を宗として遊び盛んであるが、一日梅花の散るを眺めて無常を觀じ、二男加茂次郎義綱を出家させんとした。義綱は甚だ不服で、これを兵庫守公平に諮る。(二段)(受戒場)東山溜浄上人が御前に迎へられて受戒の儀が行はれんとする時、公平は赤旗の直垂の上に墨染の衣を着、兜の緒を締め大太刀を佩いて現れ、上人を散々愚弄した末、佛の功徳で受けて見よと切りつけたため、上人は這々の體で逃げのびる。公平は源家の跡目のために一人の公達も傷つけまじと義綱を擁くまで守護する決心を表べてその席を立つ。(三段)(賴義公御前)溜浄上人が公平の暴逆を賴義に讒訴したところから、賴義は長男八幡太郎義家・三浦和田左衛門・鎌倉權五郎の三人に義綱・公平討伐を命じた。(四段)(公平館)再與の事をゑ討手も矢を放つべくもなくて、まづ和田左衛門が公平に説いて義綱の剃髮を勸めたが、公平は源家のために背んじない。寄手の大将義家も遠慮したが、父からの督促の使が重なるため遂に攻寄せる事となつた。公平の雙子秩父十郎剛平と鎌倉權五郎と切結ぶのを渡邊兄弟が引分ける事などある。(五段)(公平館)公平は世をはかなみ、一度自害の意を固めたが、渡邊兄弟の策を容れて、夜に入つて館に火をかけ、義綱を護つて石山寺に落ちる。義家は焼跡から似寄りの首級を求めて、父の前に出す。(六段)(賴義館)賴義の御臺は義綱の死を歎き、仲光が美女丸を救つた例を以て義家を責め、その無情を恨んだ。併し軈て賴義父子は和睦すべき勅諚が下り、義綱も晴れて世に出で、源氏は彌々榮えた。



公平法門諍(正本)

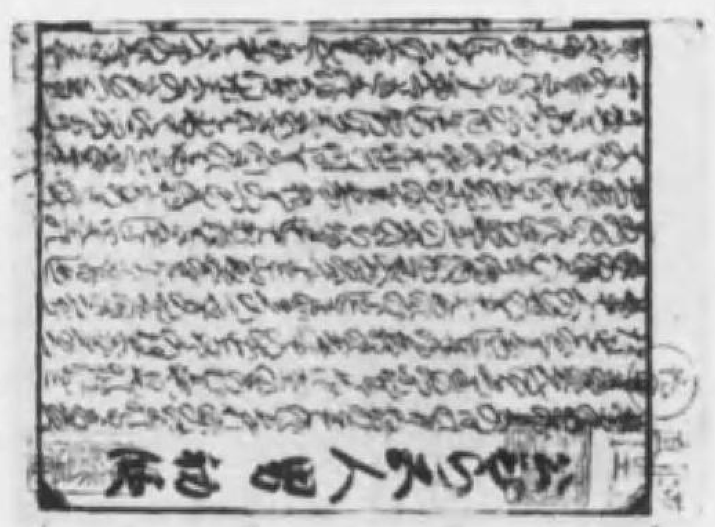
【構想】謡曲「仲光」に據る脚色であるとはいへ、かなり人間味を添へた描寫である。公平が溜浄上人に切りかける邊りには、その面目の躍如たるものがあつたが、時に分別を示し、或は現世を厭ずる如き態度を見せるなど、幾分の破綻を生じたのである。二個の異つた立場の題材の融合を試みた結果であらう。併し當年の金平浄瑠璃としては複雑な進歩した脚色と云ふべきものであつて、江戸に比べて多少文化的進歩の認められた上方の金平浄瑠璃として、決してその名を辱かしめぬが、流行を保ち得たのは、結局脚色に愁ひの要素を含めたが故であらう。後年、「忠臣身替物語」(別項)として、更に改作せられて流行を新にしたのも當然である。第一段で賴義

金平本

公平法門諍(挿繪)

公平五人男(挿繪)

公平法門諍(初頁)



公平五人男(初頁)

公平法門諍(表紙)

公平五人男(表紙)

の無常を觀ずる趣向は「かるかや」(別項)以來の案で、武勇談一方の金平淨瑠璃に劈頭一波紋を投げたものである。頼義の御傘が義家を責める條で、仲光の例を引いたために、計らずも題材を暴露してゐるが、これは古淨瑠璃には屢々接する態度であつて、寧ろ愛すべきものがある(金平淨瑠璃參照)。(中畑)

【參考】繪入淨瑠璃史　水谷不倒

金平本 きんぴらぼん　淨瑠璃本【名稱】元來、和泉太夫の語つた金平淨瑠璃の正本を指すのであるが、同時にそれを摸倣した他の作者の淨瑠璃正本までも併せ呼んだ。更に現代に至つては極めて廣義にとり、古淨瑠璃の正本を呼ぶに廣くこの語を用ひる場合も生じた。而して古淨瑠璃は多く六段であるところから、金平本を同時に六段本ともいふことがある。【解説】脚色内容に關しては「金平淨瑠璃」或は「古淨瑠璃」の項に讓り、狹義の金平本について、その樣式的な方面を見るに、紙數は十丁乃至二十丁の間で、毎丁十一二行の中文字が大本、十六行乃至十八行の細字が小本であることを標準とし、普通何れも挿繪がある。以下、特徴を列擧すると、(一)大いさが、江戸版は美濃半截判の小本、上方版は半紙判の大本である。よつて古く江戸に流行した時代は小本で、上方に於て大本となり、江戸の讀み本になつて再び小本となつた。江戸の版元は、早く、もずや・吉田屋・鱗形屋・山形屋等あつたが、鱗形屋は獨り後まで續いた。上方は、山本九兵衞と鶴屋喜右衞門とが並び榮えた。版行の目的から(イ)語り本と(ロ)讀み本とに二分して兩者の差を考へると、(二)文章に於て、(イ)が太夫の語つた正本のまゝの形式を維持しようとするに反して、(ロ)は省略の筆を用ひて、いはば筋書風の體裁である。しかも美文的部分の存置を忘れぬのは、語り本から出た讀みものの特質と見られる。(三)節章に於て、(イ)には多少ながら見えてゐる。萬治年中には既に、一曲の中に、地・ことば・ふし・いろふし・下・下ふし・おくり・うたひふし等の指摘し得るものもあるが、(ロ)には殺して省かれてゐる。段目をすら削除したものがある。(四)挿繪の畫風は、浮世繪にいふ寛文期が(イ)を代表して稚拙味豐かに、元祿期が(ロ)を代表して優雅な味を示すが、金平本が一般浮世繪の展開と異なるところは、(イ)に於て特に誇大な、一面怪奇趣味の横溢した描法を用ひた點であつて、これは正に金平淨瑠璃の特性の反應であるといへる。【史的地位】江戸書籍の版行は承應明曆頃、急激な進歩を遂げたと考へられる。それが、恰も金平本の發生と期を一にするので、金平本の流行が江戸版發展の氣運を醸成したかとの觀察もなされてゐる。淨瑠璃の詞章でのみあるべきものが挿繪を持つて流行したことは、歌舞伎芝居の出版物にも影響して、正本の一部或は繪入狂言本の樣式にも暗示を與へたところ尠からぬものがある。それ等の繪入本と共に、後の赤本・黑本を生んだことも注目すべきである。(中畑)

【參考】金平本全集解題　水谷不倒

近聞寓筆 きんぶんぐうひつ　隨筆　四卷二冊【著者】吉田漢宦【解説】漢文の隨筆で、天明・寛政頃の朝野の逸事遺聞を始め、經說・詩文話・醫方・地理・博物に係ることが多い。自家が醫者である所から奇疾治療談、また好書家である所から古典籍談もある。卷一に、今上皇帝賜伏原侍讀御製詩二首以下五十二條、卷二に大田南畝詠琉球國貢使一行詩以下三十三條、卷三に明陰良山著左傳附註等以下三十九條、卷四に自然來以下十八條を收めてゐる。文章は簡潔で頗る力があり、而も興味津々たるものがある。文政六年七十二歲森田興、同九年朝川鼎の兩序がある。【著者小傳】初名は坦、通稱坦藏、字は學儀、篁墩と號した。家は水戸藩の世臣であつたが、故あつて無祿となるや、姓を變じて佐々木と稱し、江戸に出て儒を以て業とした。嘗て井上金峨に學んで、考據の學に精しく、名聲大に著はれた。書籍の收貯に富み、その堂を留雲書屋と云つた。寛政十年九月歿。享年五十四。後の考證學者は篁墩の提撕に負ふところが多いと云ふ。「論語集解考異」「貫本古文孝經孔傳」「貫本墨子考」「活版經籍考」「足利學校書目附考」等の著がある。(和田)

近聞雜錄 きんぶんざつろく　隨筆　一卷【著者】吉田漢宦【刊行】文政六年【解説】考古及び博物學に關する雜件二十餘條を收め、多く植物の圖、古金幣の圖を挿んである。清康熙帝より元朝の子孫に錢幣の料銅を送る事、淺草寺附近發掘古石輪(寛治二年の記がある)の事、龍眼樹の事、者の字をていればと訓む事、會津領大疊村の聖井の事の奇聞等がある。文政九年雄公愷(定山)の跋文を載せてゐる。(和田)

公通 きんみち　神道家【姓】正親町【號】風水軒・白玉翁・須守靈社等【生歿】承應二年生れ、享保十八年(一七三三)歿す。享年八十一。【閲歷】權大納言正親町實豐の子で、從一位大納言となつた。山崎闇齋初め宋儒の說を講じたが、後、吉川惟足・度會延佳(各別項)の學統を傳へて、神道を說くに及び、一條兼冬・土御門泰廣・正親町實豐等の公卿、多くその門に入つて教を請うた。公通亦就いて學び、造詣甚だ深かつた。學統を玉木葦齋に傳へた時の言に曰く、「右、唯一宗源神道之極秘。垂加靈社之所ニ以授一子者、悉具ニ于此卷一。今復授ニ子玉木正英一。宜三永持而謹守二之。莫ニ失ニ夫傳受之心法一焉。從一位公通印」(玉籤集)と。【著書】「正親町公通口訣」「同雜話」「神道傳授」等。(田中)

金門五山桐 きんもんごさんのきり　「樓門」を見よ。

近葉菅根集 きんえふすがねしふ　「菅根集」を見よ。

金葉和歌集 きんえふわかしふ　歌集　十卷一冊又は二冊【撰者】源俊頼【名義】金は美稱、葉は歌の意。但、清輔は、佛が涅槃に入る時、金葉の花がふるとあるから不吉である。本集流布の後まもなく白河院が崩御になり、撰者も亦歿したのはその故であると非難してゐる(袋草紙)。【成立】天治元年(一一二四)白河法皇の院宣を奉じて撰修したが、御嘉納なく、改撰のものも矢張り同樣だつたので、更に改撰の上大治二年の頃、草案のまゝ奏上し始めて御嘉納を得た。【諸本】三度の奏上本をそれぞれ初度本・二度本(又は中度本)三度本(又は三奏本)といひ、二度本が世に流布した。初度本は三代集作者の歌を加へ、二度本は近世の歌を主としたが、「古今六帖」の歌や道濟・相模等の歌も加へ、三度本は「拾遺集」「玄々集」の歌や、紫式部・能宣等の歌を加へて初度本の傾向に復したといはれてゐる。【初度本】開卷は貫之の「袋のうちに春たつことを」の歌、次に尋罪法師の歌があつたが、貫之は歌仙であるが餘り古く、歌も三代集を洩れたものであり、尋罪法師も適當ではないなどと仰せられ、御在世中の三宮を御諱で輔仁親王と記し奉つた事も御思召に協はなかつた(今鏡)。開卷の歌一說には三宮の「年の内に春立ちくれば」であるともいふ。【二度本】開卷の歌は顯季の「打

ち讓き春は来にけり」である。この本が御思召に叶はなかつた理由は不明であるが、流布本となつた理由に就いては、松田直兄が當代の歌人を多く入れたためとしてゐる。〔三奏本〕開巻の歌は重之の「吉野山峯の白雪」である。【傳本】〔初度本〕一冊、零本にて巻五迄、傳爲相筆、靜嘉堂文庫藏。續群書類從第三六七所載の初度本は實は二度本である。〔二度本〕種類が甚だ多い。(イ)八代集本(ロ)同(ハ)八代集抄本を始め、井上通泰氏が紹介された。(ニ)圖書寮所藏一本(ホ)原六郎氏本(ヘ)井上通泰氏本、岡田希雄氏が紹介された。(ト)柳原本(チ)永安四年本(リ)續群書一覽に說明された穀岡本等の外(ヌ)所謂初度本は、總て二度本である。この内(イ)(ロ)(ハ)は同系統で歌が多く、(ニ)以下は若干宛歌が少く而も共通な歌を缺いてゐる。而して(ニ)以下に缺けてゐる歌は概して惡いから(イ)(ロ)(ハ)より後のものであらう。一方(ホ)(ト)には(イ)(ロ)(ハ)に無い同じ五首(八代集抄の異に見ゆ)があり、(リ)には四首だけ朱書されてゐる。(ヌ)には(イ)(ロ)(ハ)にない歌が六十五首あり、内十七首は俊頼の歌である。原本と考へられる寫本が阿波國文庫にあり不忍文庫舊藏である。「袋草紙」に記す二度本の歌數は連歌を除き六五四首とあるから、(イ)(ロ)(ハ)の六九一よりも(ホ)原氏本の六六〇(ト)柳原本の六六六が近い。(ト)柳原本の書入れに依つてわかる清輔本は、その巻毎の歌數が(ト)柳原本(ヘ)井上氏本に近い。〔三奏本〕二冊、天保九年刊、原本は傳京極良經筆、松田直兄の解說一冊を添ふ。續群書類從第三六六所載本は同系統である。兩本は脫落があるので、相互に補つて六百四十首とする事ができる。奏覽本は待賢門院に傳はり、門院の兄實行が拜借して書寫したが、餘り流布しなかつた。

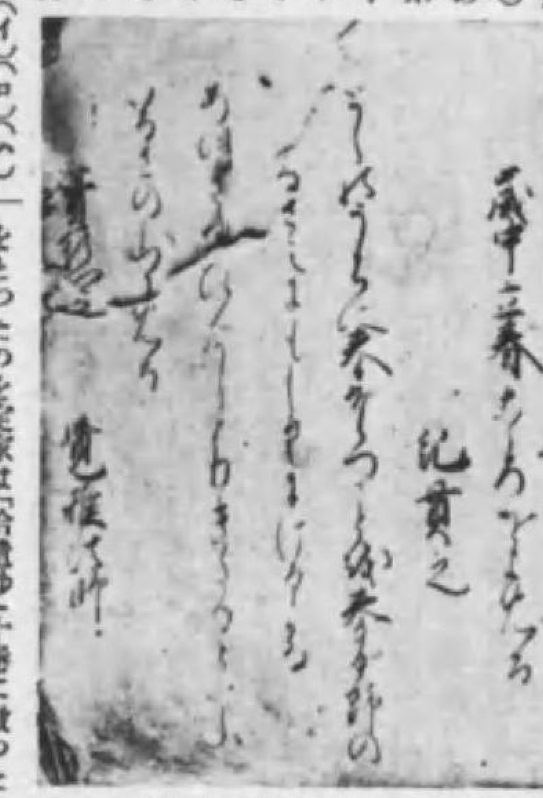
【內容】卷數が少いために部類も簡單で、春・夏・秋・冬・賀・別離・戀(上下)・雜(上下)に分ち、雜下に連歌十九首を收めてゐる。十卷の形式をとつたのを定家は「拾遺抄」十卷に倣つたものとしてゐる。作者は二百二十七人(内僧三十五人、女六十七人)、歌の多い作者俊頼(三五首)・經信(二七首)・顯季(二〇首)等で、「後撰集」以後、撰者の歌を入れる事は控へ目にされてゐたが、本集は撰者及びその父の歌を多く入れた(以上流布本)。【批評】俊頼は淨土敎の信仰をとり入れて敬虔な歌を詠み、また因はれない自由な立場から輕快な諧謔的の歌を詠んだ。而も本集編纂に於ては自らの趣味を固執することなく、寧ろ法皇の御思召に添ひ奉ることに努力した風が見える。隨つて本集には「散木奇歌集」(別項)に見える程の著明な異色は認められないが、「後拾遺集」(別項)には見えない新傾向が明瞭に現はれてゐる。「後拾遺集」までは主觀的のものが多いが、本集の歌は概して客觀的で、素朴な寫生的表現が多く、少數ではあるが寫生美を現はしたものもある。その一二を示せば、

入日さす夕紅の色はえて山下てらす山つつぢかな
(攝政左大臣家參川、春)

河霧のたちこめつれば高瀬舟わけ行く棹の音のみぞする(行家、秋)

の如くである。併し寫生的と觀念的な表現が一首の内に兩在して、不調和な感を與へる歌も多い。【註釋書】八代集抄北村季吟。

【參考】三奏本金葉集 附錄一卷松田直兄○校訂金葉集井上通泰○金葉集攷岡田希雄(藝文昭和二ノ四以降)○三奏本金葉集同上(同昭和三ノ六以降)○金葉集撰述の徑路同上(國語國文の研究昭和五ノ三・四)○初度本金葉集に關する考察松田武夫(國語と國文學昭和六ノ四)〔西下〕



初撰本「金葉集」(靜嘉堂文庫藏)

禁慾主義 きんよくしゆぎ 【語義】英語の Asceticism で、その起原はギリシャ語の Askesis に發してゐる。競技者の規律及び訓練を意味し且つ人間の中に存する慾望を征服して、精神能力を十分に發達させようとする理論、又は主張に與へられた名稱である。一般的には宗敎上・道德上の主義で、これに從へば人間は幸福になり、社會は健全な發達を遂げるといふのである。【由來】禁慾的傾向は、人類と共に發現したもので、その起原は古く且つ遠い。ギリシャの昔、支那の古代、日本の太古にも存してゐたことを證する資料が尠くない。けれどそれが組織立てられるやうになつたのは、西洋ではキリスト敎、印度では佛敎、支那では儒佛が起つた時代、そして日本では、儒佛が渡來してからである。禁慾主義が最も廣く說かれ且つ行はれたのは、歐羅巴では中世紀、日本では戰國時代である。中世紀の禁慾主義は、知識の禁慾と快樂の否定との二つが骨子をなしてゐた。

【禁慾主義と文學との關係】禁慾主義は、享樂主義と對立するものであるが、文學に於ては後者を根柢とした作者が非常に多いのに比較して、前者を標榜したものは至つて尠ない。享樂主義は文藝上の一思潮とさへなつたが、禁慾主義が文藝上の主義となつたことは曾てない。併し禁慾主義は、世界中で最も名高いまた最も傑れた文學作品を生んでゐる。即ち新舊聖書がそれである。これは純粹に禁慾主義の文學といふことが出來る。それから名僧智識の書いたものは多く勝れた文學として殘つてゐるが、小說や詩歌の形式をとつたものは殆どない。禁慾主義を取り入れた作品は、多く諷刺小說、お伽噺、勸懲小說などとなつて現はれてゐるが、傑作と稱すべきものはない。近代で禁慾主義に最も多くの關心を持つた作家はトルストイである。〔宮島〕

近來俳諧風體抄 きんらいはいかいふうたいせう 俳論二冊【著者】岡西惟中【名稱】「俳諧風體集」ともいふ。【刊行】延寶七年【由來】序、據ると、談林の俳風鼓吹のために著したもので、讃岐の香蝕の序、並に延寶七年冬十一月日附の浪速の梅林逸人の跋を附して上木されてゐる。【解說】著者が西山宗因の門にあつて見聞した談林俳諧の數を記し、國々の句を併せ錄したものである。二冊の中、上冊には先づ連歌の起原より連歌の式の由來を述べ、以下談林の俳風を祖述して、千句の式、百韻の稱呼、脇・第三・月・三鳥の句、切字・揚句に關する習を說き、俳諧の本義を明らめ、又「ぬけの句體」即ち當時流行した特殊な句體を論じて、それ〲作例を並べ、俳席上の心得として、地・紋即ち易らかに吟じた句と苦心した句との關係を解說し、字餘・留字・素秋の句に關する所信を述べ、俳席に於けるたしなみを說いた。下冊には、始めに再び俳席上の放埒を戒め、先哲の苦心を語り、常の詞を一作あらせて付けた附句の作例を示し、用語の卑俗に墮することを戒めて、その範とすべき作例を擧げ、據のある詞を抄錄して用語を取捨すべきことを敎へ、點印の長さを論じ、俳諧の品格・句柄に關する理想を語りなどし、最後に本文中に引例した發句・附句の作者を、それ〲の住國に從つて類編し、且つ各自の句數を表示してある。以上が本文の大要であるが、これを更に要約すれば、大體に於て、上冊は俳諧上の一般的問題を論じ、下冊は句作の實際に就て敎へたものである。〔各務〕

近來風體抄 きんらいふうたいせう 歌論書 一卷【作者】二條良基【名稱】「今來風體抄」とも云ふ。【成立】續群書類從本の奧書によると、道の數寄ある人に、老耄を顧みず書き送つた所、又聞傳へて見參ありたきと承つたので書付けたとして、辨内侍に正月二十四日の日附で送つたとある。正月といふのは嘉慶二年の比歟とある。古語深祕抄本では大體同樣な意味の奧書があり、嘉慶元年十一月十二日の日附がある。辨内侍の事はない。【諸本】續群書類從及び古語深祕抄所收【內容】歌に對する良基の見解を示したもので、爲定・爲忠・爲重・頓阿・慶運・兼好等多く良基時代の歌人を擧げて批評を加へてゐる。その他歌に對する種々の知識を記し、更に、ぬしあることば、制詞事、一向不可用詞を擧げてゐる。【價値】良基時代の歌人に對する見解が見られる點に注意すべきであり、殊に良基がその時代の權威者であつた點からも重きを置かるべきである。ただ良基も「連歌のことは多年の數寄によりて世の人もゆるし侍るにや。詠歌の事はすべて立いらざるみちにて侍れとも」云々とある如く、連歌の方に力を注いだために、歌論としては二條派系統の立場に從つて創見の見られないのはやむを得ない。

【參考】日本歌學史佐佐木信綱○歌書綜覽福井久藏〔中島〕

金陵 きんりよう 儒者【氏名】芳野世育。字は叔果。通稱は愿三郎、後立藏と改む。【別號】匏宇【生歿】享和二年十二月二十日下總國相馬郡小文間村の外家に生れ、明治十一年八月五日小石川大塚に歿す。享年七十七。【閲歷】世々下總國葛飾郡松崎村に住した。父に從つて江戶に出たのは文化十二年、十四歲の時である。龜田綾瀨に從つて學んだ。文政九年、居を淺草福井町にトし、生徒に敎授した。弘化四年、駿河田中藩主本多侯に仕へ、文久二年十二月、昌平黌の儒員に補せられ、明治二年十月二日、大學少博士となり、同月二十三日、中博士に進み、同三年三月、從六位に敍せられた。大學を廢せらるゝに及んで職を免ぜられた。【著書】「金陵文鈔」二卷○「金陵遺稿」十卷〔佐久〕

近路行者 きんろぎやうじや 讀本作者【姓名】都賀庭鐘。字は公聲、通稱は六藏。【別號】千里浪子・大江漁夫・巢古主人・草官散人・寄寓館【時代】著作の刊年等から推して、「京攝戲作者考」にいふ如く、寛延寶暦より明和の頃の人と考へられる。【閲歷】浪華の天滿十一丁目に住し、儒醫を業として書畫を善くした。併し本職の儒醫よりも、小說家として夙く著はれてゐたことは、明和年間の「三ケ津學者評判記」の所載によつても、ほぼ明かである。また「繁野話」(別項)の序に「行者の行藏常ならず。市に隱れ、山に棲み、卜を賣り字を鬻き、萍遊に違ふこと多し。」と言つてゐるのを見れば、彼の生活が決して安定したものでなかつたことが想はれる。同序には「去年の春また難波に過る」ともあつて、彼が浪華にばかり住まなかつたことを語つてゐる。儒者から俗文藝に轉向した彼は、その儒學や唐音を誰から學んだか、或はその作の隨所に見える國文の素養を如何にして得たかは明かでないが、當時、岡島冠山に始まつた唐音の研究を、岡白駒・松室式部・陶山南濤等が繼承してゐたので、この時流に從つたものであらう。なほ當時は漢學流行の一方、國學勃興の機運に滿ちてゐた。彼も亦この流行に乘じて、廣く我が古典に親しんだことであらう。大田南畝の「一話一言」に、上田秋成が庭鐘に就いて學んだとある。又浪華の博識蒹葭堂木村喜右衛門と深交があつた(蒹葭堂は「[illegible]」にその傳を載せてある)。庭鐘は彼に多くの益を受けたであらう。殊にその著作に於ける支那稗書の知識は、全くその賜であつたと思はれる。【人物】儒者にして醫師を兼ねる者は珍らしくなかつたが、儒醫にして俗文藝の戲作に名を得たのは、稀有とする所であつた。想ふにその不羈の性格が、かの「繁野話」の序が語るやうに、時代の風流才子の道に往かせたのであらう。大枝流芳の「煎茶仕用集」の序や、「全唐名譜」「笑明詩選」等に現はれるところも、明かに彼の風流子としての面目を語つてゐる。しかも、その性の飄逸は、著書に好んで匿名を用ひ、生活を常に動搖せしめて、遂には傳記を判然せしめないのである。

【著作】古今奇談英草紙○古今奇談繁野話○古今奇談莠句冊○古今奇談垣根草(以上別項)○通俗醫王耆婆傳五卷○投壺今格一卷○大江漁唱一卷○戲詠雜詩一卷○笑明詩選一卷○全唐名譜○李冀館漫筆三卷○康熙字[illegible]府一卷。

【作風】彼の小說の特色は、先づその文體にある。即ち歷史物語乃至傳奇小說といふべき內容を表現するに、簡勁な和漢混淆文を以て、浮世草子末期の平弱なる文體を遠く離れて、後の讀本の文體を確立したのである。その趣向は何れも「古今奇談」の語を冠した外題によつても察せられる通り、殆ど支那の傳奇小說の飜案で、我が古典の知識と和文の才を以て、多く南北朝頃の我が歷史物語の如くに表現した。要するにその文學價値は文體と趣向とにあるもので、漢學と國學とが融締した時代に投じて成功したのである。【史的地位】「一話一言」に「英草紙」「繁野話」の世に行はるゝことを敍し、「今の都下のよみ本の風はこれを學ぶに似たり」と見えるが、建部綾足(別項)を通して後の曲亭馬琴・山東京傳の讀本を誘發し、我が小說史上に讀本の一時期を劃せしめた功績は、歷史的に大きな意義を持つものである。

【參考】江戶時代戲曲小說通志○怪談名作集解說(日本名著全集)○讀本の發生山口剛(文學思想研究四)〔笹野〕

く

句 く　文法〔英〕clause【名稱】節ともいふ。【解說】文が獨立を失ひ、或る關係を以て他の文と結合し、他の文の一部をなす場合の稱。【種類】(一)名詞句(準體句)。體言と同樣な資格をもつ句。例、「年の立つのは早いものだ」「その二十日あまりに中納言の法師になり給ひにしこそあはれなりしか」(二)形容句(連體句)。體言を修飾する句。例、「日のはいる方が西です」「日影も見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし」(三)副詞句(修飾句)。用言を修飾する句。例、「年月は水の流るゝが如く速かなり」「汝不孝の子ならば、親にながきなげきあらせよ」(四)敍述句。敍述の用をなす句。例、「兄は力が强い」「象は體大なり」(五)對立句。對等の資格を以て結合してゐる句。例、「花もあり、實もある」「烏鷺たかくあらはれて半天の雲に入り、白尭あらたにみがきて滿月の光を耀かす」。句をすべて節と名づくる人があり、又對立句のみを特に節と名づけて、他の句と分つ人もある。（小林）

愚庵 ぐあん　歌人【本名】天田五郎。幼名久五郎。後剃髮して鐵眼と稱す。【生歿】安政元年七月二十日福島縣磐前郡今新田村に生れ、明治三十七年一月十七日、伏見桃山に歿す。享年五十一。【閱歷】平藩士甘田平太夫の末男である。戊辰の役に十五歳で兄と共に平城に籠つたが、戰後父母妹行方不明となり、彼は爾後二十年間その所在を探ねて殆ど全國を旅行した。即ち先づ中國より九州を廻り、明治七年臺灣征討に從ひ、同十年北海道より北陸を廻り、翌十一年大阪に行つて山岡鐵舟の門に入り、その關係で淸水次郎長の家に寓し、尋で同十五年、次郎長の養子となつた。又同十七年には大阪内外新報社の幹事となつたが、同二十年遂に剃髮し、同二十五年淸水產寧坂に庵を結び愚庵と號し、更に同三十三年桃山に移り、そこで世を去つた。彼には妻子がなかつた。その著作に「愚庵遺稿」一卷があり、出家以後の歌が收められてある。（以上相原）

【作風】愚庵の歌は、殆ど萬葉調で終始してゐると言つて可い。彼は漢詩から出發して、これをよくしたので、その短歌にも、漢詩の風格を傳へたものが少なくない。共に佛門に入る前からその作があつたが、短歌の方に精進したのは、漢詩より後で、鐵眼と稱してからである。「愚庵遺稿」の中に短歌の收められたのは旋頭歌と共に約四百五十首ある。與謝野倘綱(鐵眼と稱す、鐵幹の父)・福本日南等と親しかつたので、萬葉調の作風に相似たところがある。彼が正岡子規の作歌に影響を與へたのは、注目に値ひする。自然を對象としたものや、父母を懷かしんだものに佳作が多いが、彼の歌の範圍は、廣きに亙り、時事を諷詠したものや、回向院の大相撲を歌つたものさへ少なからず殘されてある。左に一二の例を擧げよう。

まさきくていませ父母み佛とけのめぐみの末にあはざらめやも

桃山の小松が下の茅刈りてきのふ苫葺き今日篩のふる

（以上金子）

【參考】愚庵遺稿○愚庵全集○愚庵和尙の歌　齋藤茂吉（短歌私鈔所收）○愚庵和尙その他　相馬御風○明覺と愚庵　同上

食道樂 くいだうらく　小說　四卷【作者】村井弦齋【刊行】明治三十六年六月より三十七年五月まで。春陽堂。【解說】春夏秋冬の四卷に分れ、和洋料理及び内外食料について、篇中の人物が問答し、その間に男女の情事などを交へて興味を唆りながら、料理法について次から次へ語り續けたもの。報知新聞に連載して非常に歡迎され、新聞小說としては稀有の長篇となつた。一種の通俗料理讀本で、料理法を小說風に面白く書いたといふだけのものに過ぎないが、新聞小說の大衆化といふ點では看過されぬものである。歌舞伎座に於て、梅幸を主役としてこれを上演し、舞臺で料理の實際を見せたこともあつた。（高須）

寓意小說 ぐういせうせつ【語義】〔英〕Allegory〔獨〕Allegorie〔佛〕Allégorie 何れもギリシャ語の Allegoria から出た語である。それは本來他事にこと寄せて或ることを語るといふ意味である。【解說】修辭法には寓意法といふのがある。諷喩法とも云つて、「表面上本義を全く隱してただ喩義のみを揭げ、喩義を通して本義を察せしむる所に趣味ある詞姿である。平たくいへば、餘所事を言つて眞意をつかましむるが主眼で、例へば木から落ちた猿の話に事よせて世渡り上手の成上り者を諷し、金の釜を掘り當てた孝子の物語に因果應報の理を寓する類ひである。」(五十嵐力「新文章講話」)。單に一句一節といふのでなく、この方法を一篇の小說に應用したのが、寓意小說である。イソップ譚や、多くのお伽噺など何れも初步の寓意小說である。しかし、これ等には、小說手法としての性格描寫、事件の展開等が重大視されてゐない。ところが、チェホフの「犬と猿」などになると、ずつと事件が複雜になり、最初に讀み出したところでは、何を描かうとしたのか、はつきり把握しにくい位であるが、讀んでしまふと、始めて人間の貪慾、利己主義に對する教訓を感得することが出來る。これは進んだ寓意小說である。バンヤンの「天路歷程」(Pilgrim's Progress)（別項）の如きは東西古今に亙つての代表的寓意小說である。又聖書中には、「放蕩息子」の如き優れた寓意小說的のものが多い。近代の文學には餘り寓意法は用ひられない。日本のものでは、馬琴の「夢想兵衞胡蝶物語」（別項）などが代表的である。又夏目漱石の「吾輩は猫である」（別項）の如きも、諷刺的要素に滿ちたものであるが、猫の生活に事寄せて、人間生活の如何に卑俗賤少なるかを仄めかした寓意小說といへる。なほ戲曲には寓意的な作が相當多く、チャペック兄弟の「蟲の生活」の如き秀れた作もある。【價値】この寓意小說は、話の筋が奇拔である點で、讀者に興味を起させるといふ特徵を持つてゐる。しかしこの場合の興味は、第二義的の興味であつて、小說の本質的興味ではない。眞に人間生活・社會生活について、眞面目に何物かを求めてゐる讀者に取つては、かゝる第二義的な興味のみでは滿足が出來ない。それ故、寓意小說は、多く人間生活の單純な、文化の幼稚な時代に現はれ、文化が進んで、社會生活が複雜になつて來てからは、さほど重要視されなくなつたのである。（宮島）

空海 くうかい　學僧【姓名】佐伯氏。幼名を眞魚と云ふ。【諡號】弘法大師【生歿】寶龜五年讃州多度津屏風浦に生れ、承和二年(一四九五)三月二十一日寂す。享年六十二。【閱歷】父は佐伯直田公、母は阿刀氏。延曆七年十五

歲の時外舅阿刀大足について儒學を學び、次いで阿刀氏に隨ひ奈良に入り、同八年十六歲、石淵の勤操に虛空藏の法を受けた。十八歲出遊して大學明經科に入り、直講味酒淨成に就いて「毛詩」「尙書」を、岡田博士に就いて「左氏春秋」を問ひ、經史を博く探り索めたが意に充たず、遂に眞を佛教に求むるの志を立つるに至つた。「聾瞽指歸」(三教指歸初稿)は即ちこの眞理探索時代の心境を示したもので、空海十八歲の時の起草、儒道佛三教の比較から佛教に歸する所以を宣言したものである。この邊りから彼の優婆塞生活が始まり、阿波の大龍嶽、土佐の室戸崎、その他各地の苦修練行を經、延曆十二年(二十歲)遂に和泉槇尾山寺に於て出家の望を遂げ、沙彌戒を受けて教海と稱した(後如空と改む)。延曆十四年二十二歲、東大寺に於て、具足戒を受け、法諱を空海と名づけた。この東大寺受戒前後、大安寺淨徒として佛典研究に潜心し、南都教學を研鑽したが意に充たず、偶々靈夢により「大日經」あることを知り、尋ね索めて一部を得た。一讀この聖典の理解に努めたが、よく領解することを得ないので、入唐し、明師を訪うて示教を受けんとする志を立てた。實に、この「大日經」を尋ね得たことが、彼の入唐の動機とも、密教興起の因緣ともなつたのである。二十二歲より三十歲(延曆二十二年)まで彼の傳は不明であるが、實は入唐準備に思を潜めてゐたのである。延曆二十三年、三十一歲準備全く成り、七月六日遣唐使一行と共に肥前松浦郡田浦を發し、同年八月十日福州に着到した。それより諸寺大德を歷訪し、惠果阿闍梨に兩部の祕法を受け、傳法灌頂を授かり、遍照金剛の號を得た。後、罽賓國般若三藏及び牟尼室利三藏に遇ひ、南天の婆羅門を訪れ、所譯の「六波羅密經」及び梵夾を受け、且つ梵語を學ぶ。後、不空三藏の弟子、曇貞に就いて悉曇の傳を受け、又韓方明に就いて書を習つた。かくて空海は密教の奧儀を究め、梵學を學習し、圖書等に力を致し、所求の願を果して歸朝の途に上らうとするや、唐の道俗詩を賦して贈別を惜しんだ。大同元年十月遣唐使の船に便乘して筑前に到着し、同二十二日直に請來の經論疏章等の目錄を朝廷に進獻した。その目錄に依れば、新譯經等一百四十二部二百四十七卷、梵字眞言讚四十二部四十四卷、論疏章三十二部一百七十卷に及んでゐる。時に空海三十三歲。大同二年四月勅により太宰府觀世音寺に住し、後入京、平城帝に謁して密教弘通の勅許を蒙る。かくて歸朝後の空海の活動が始まる。弘仁元年十月上表して高雄山寺に「仁王經」の大法を修し、同三年十一月、高雄山寺に祕密灌頂壇を築き、南北衆僧の請により兩部の灌頂を授けた。受くるもの最澄(傳教大師)等一百九十餘人。弘仁七年(四十三歲)紀州高野山の地を賜り、同八年結界を定め、諸弟子を督して土木の工を起し、道場を建立するに至つた。同十二年(四十八歲)讃岐萬農池の工事に勅請され、これを修築。同十三年勅に依り東大寺に灌頂道場を建立し、平城上皇に灌頂を授け奉つた。同十四年正月東寺を賜ひ、鎭護國家の祈禱道場とし、天皇行幸し給うて空海から灌頂を受けられた。淳和天皇立ち給ふに至り、殊に空海を歸依尊重し給うて、數度勅により宮中に祕法を修せしめられた。天長元年勅あつて、神泉苑に請雨法を修し、驗あつて少僧都に任ぜられた。時に五十一歲。同年東寺を永く眞言祕密の根本道場となすの勅あつて、教王護國寺と號した。同五年(五十五歲)京都九條に綜藝種智院を設立し、内外の學を貴賤の別なく授け教育せんとし、「綜藝種智院式」を制定した。八年疾を以て職を辭し、九年高野山に入り專ら修禪を事としたが、承和元年、京都に入り、奏請して宮中に眞言院を興し、國家安穩の修法をなした。同年五月高野山にあつて諸弟子に遺誡して後事を託し翌二年三月寂した。後弟子眞濟の上表により大僧正を賜はり、延喜二十一年觀賢の上表により弘法大師の諡號を贈られた。

空海肖像（觀王院藏）

【學說】眞言祕密の法は印度に興り、支那に傳はり大に興隆傳播したのであるが、天竺・震旦の密部研究の諸師多しと云へど、未だ諸宗に對する祕密教の位置を論說し、一宗としての組織を立てたものはなかつた。空海に至り始めて顯密二教の別を論じ、十住心を說いて祕密教の位置を定めたのであつた。即ち「大日經」住心品に依つて、佛教各宗、佛教諸經論を十種の階級に辨別し、その淺深優劣を判定し、祕密教を以て最高至深の教法なることを示したのである。この十住心教判はかく諸宗教に對する分類批判であるが、又人間精神の向上展開の順序を說示したものである。即ち人間精神の展開序次は、(一)無道德無信仰の心境(異生羝羊心)、(二)前心境よりやゝ出でて倫理意識の發生せる狀態(愚童持齋心)、(三)倫理意識を生じたる心境の上に出でて宗教に入り、低き解脫を成じたる心境(嬰童無畏心)、(四)佛教入門の初步、五蘊和合の身に本質なきを悟つて自我觀念を脫離する心境(唯蘊無我心)、(五)惑業は無明より出づるを以て、十二因緣觀によりその業因の種を拔除する心境(拔業因種心)、(六)利他心の初門であつて、萬法唯心の觀により同體大悲を起し、普く人類に平等利益を獲しむる境(他緣大乘心)、かくて(七)覺心不生心、(八)一道無爲心、(九)極無自性心と漸次高き心境に至り、遂に法身如來、身・口・意三密の加持により人間精神に潜む祕密莊嚴の曼荼羅を開顯し、眞の成佛を得たる狀態(祕密莊嚴心)に進む。而してこの第十住心地に立つ眞言教の深義は「六大無礙常瑜伽、四種曼荼各不離、三密加持速疾顯、重々帝網名即身」の四句にあつて、現實の身に成佛を認め、一切現實そのまゝに意義を附與せんとするもので、頗る實際に即してゐる。この眞言宗の教義には日本的な精神の深い展開を觀ることが出來るのであつて、日本精神史の上から十分注意されねばならぬ。

【業績】第一に舉ぐべきは、綜藝種智院の設立である。空海在唐中彼地の教育が發達してゐるのを見て、わが國教育の不振を慨き唐の閭塾に倣つて設立したものである。その特色は空海在世當時の學院が、一部貴族階級の子弟をのみ教容してゐたに反し、これは一般子弟を入學せしめ、教育の機會均等を謀つたことで、國民教育の先驅をなしたものである。な

はいま一つの特色は、僧俗共に内外典を併せ挙ばしめた事である。「若夫九流六藝、諸代之典誥、十歳五明、利人之恒實。故能三世如来依準而成、大聖、十方賢聖綜通而證。通知一字有二一味、作一善調一片言調、妙曲、者也」（遍照発揮性霊集巻）と云ふ如きは、空海の教育方針が窺はれる。更に空海が文学界に貢献した功績の大を論へねばならぬ。その最も著しきは「文鏡秘府論」（巻数）で我国に於ける修辞学書として最初のものであり、長く我国詩文作家の規範となつたのみならず、歌学の發達に寄與影響するところ甚だ大である。かく詩の法格を論ずると共に夥多なる才識、頴敏なる氣魄を以て、他の及ぶべからざる詩文を創作してゐる。唐土の文人詩人をして「士人如子矣」（性霊集序）と賞讃せしめたる一事を以てその卓越せる才能を知るべきである。嵯峨帝が空海を御製信遊ばされたことは、一には空海の文藝的才能を嘉せられたことにもよらう。空海と帝との深い御交はその詩文の贈答によつて窺ひ奉ることが出來る。空海が入唐帰朝し来つた典籍に文藝に關するもの多かつたことであらう。帝はそれ等典籍の牽進を御命あり、弘仁二年六月二十七日、「劉希夷集」四巻、「王昌齢詩格」一巻、「貞元英傑六言詩」三巻、「飛白書」一巻等を書寫牽献し、同三年七月二十九日勅により「金武章」二巻、「王昌齢集」一巻、「雑詩集」四巻、「朱書詩」一巻、「朱千乗詩」一巻、「詩勢」一巻、「王智章詩」一巻等を牽進してゐる。又嵯峨帝の御命による帝の代作文章も多數ある。空海がいろは歌と五十音圖を製作したといふ事が信じられるならば、その功績は實に偉大なものである。その製作當否については種々説がある故、これを措くが、空海が歌學普及の大家であつたことは語學史上永く銘記さるべきである。空海は「雇什委曲章」「曠波旭悉曇章」「悉曇字記」「悉曇輪等の梵書を請來したのみならず、空海自ら原典について原語を研究したのである（遍照発揮性霊集巻）。又自ら「悉曇字母釋義」「字母雑分釋」「悉曇雑集抄」等を撰述し、数學的の撰述も、梵語の深い造詣を以て解説されてゐ、佛教研究に一大進歩を與へた。空海の學習した悉曇は、中天、及び南天の悉曇であると云はれてゐる。以後我國にはこの二系統の悉曇が後世傳習研究されてゐる。又詩筆法、試筆の法は我國に於ては空海に始まり、諸の書體空海よりも出づと云はれて入木道（への寄與も甚だ大である。初め空海は典藥頭魚養に習ひ、入唐して韓方明に書法を受けたと云はれてゐるが、「勅諭時風書一表」に「作」詩考。以「華古體」爲「妙。不以寫「古詩」爲「能。書亦以「撥「古意」爲「貴。不以「似「古跡」爲「巧。」と記し、書の六十餘體（「皆人心感「物而作出」と唱げてゐるが如く、形式に拘泥するところなく體意を存して個性を現はさねばならぬとの意見である。

空海 風信帖（東寺藏）

【著書】（一）散學的の撰述數十部の中、殊に著名なのは「秘密曼荼羅付法傳」二巻、「秘密曼荼羅十住心論」十巻、「秘藏寶鑰」三巻、「即身成佛義」一巻、「吽字義」一巻、「般若心経秘鍵」一巻、「秘蔵記」二巻等である。悉曇關係の撰述書に「梵字悉曇字母并釋義」一巻、「悉曇輪等略釈」一巻、「大悉曇章」二巻等を傳へてゐる。「篆隷萬象名義」三十巻は、槇尾高山寺藏する所のもので確證はないが、空海の作と傳へてゐる。我國漢字書の最も古きものの一である。文學關係の撰述としては「遍照發揮性靈集」十巻（遍照編）、「文鏡秘府論」六巻、「文筆眼心抄」一巻、「三教指歸」三巻（以上別項）、「高野往来集」と少異）、「拾遺雑集」一巻等がある。なほ彼の詩は「御國集」（別項）にあり、所詠と傳ふる和歌、「新勅撰」「續千載」「風雅」等に載せてある。

【参考】弘法大師全集〇空海撰大僧都傳一巻（裏書、續群書類從第二〇六、史籍集覽二〇）〇空海撰大僧正傳一巻（裏書、續群書類從第二〇六）〇弘法大師行狀集記一巻（裏書、同二〇七）〇弘法大師傳燈一巻（同二〇八）〇弘傳略頌抄一巻（裏書、同二〇二）〇弘法大師略頌鈔一巻（圓明）〇弘法大師年譜十二巻（尊仁）〇弘法大師正傳一巻（高演）〇弘法大師行狀記十二巻〇弘法大師傳十巻〇弘法大師遊方記四巻〇弘法大師弟子傳二巻（智證）（筑土）

空華集（くうげ）詩文集 二十巻【著者】義堂周信【名稱】詳しくは「義堂和尚空華集」と云ふ。【諸本】寛永の頃刊行せられたが、編成全からぬため、元祿八年創點と云ふ者、刊本室町本を比較訂正して、一部二十巻として刊行した。明治三十九年一月、五山文學全集に所收。【内容】本書の首に、中關圓月の序文あり。序文の末に、延文己亥春中正望圓月とあり。次に明の全室宗泐の空華室歌あり。「空華室歌、爲義堂禪師作云々」とあつて、末に「洪武九年著雍在丙辰春二月五日己丑、龍河傳法正宗堂之東軒書、全室叟宗泐識」とある。巻一は、古詩、歌、楚辭、四言絶句、五言絶句、六言絶句、七言絶句。巻二・三・四・五は、七言絶句。巻六は五言律、五言排律。巻七・八・九は七言律。巻十は七言律。七言排律。巻十一・十二・十三・十四は序。巻十五・十六・十七は記。巻十八は記、書、題跋、雜著。巻十九は疏。巻二十は銘、祭文、跋である。五山禪林の詩文集は多いが、この集は詩文各體があつて、最も整つてゐるやうである。【書誌】

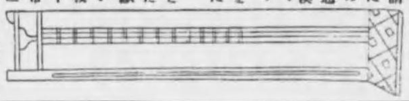
空華日工集（くうげにっくしゅう）日記 四巻三冊【著者】義堂周信【名稱】具さには「空華老師日用工夫略集」と云ふ。永和三年十月一日の條に、余以「日工」名「集、毎日爲「記、全月改「日用工夫集」爲「日工集」者、以發「省文」也とある。さればこの書は自ら「日工集」と名づけたものである。空華は義堂周信の別號である。

【諸本】初本は四十八巻あつた。今本は初本を抄略したものである。【解説】義堂周信の日記であつて平易な漢文で記述せられてゐる。第一巻は正中二年乙丑閏正月十六日土佐高岡に生れたるより起り、應安四年四十七歳に至る。康永元年壬午十八歳の條に、初有「日記」とあるから、正中二年以後十八年の間の事は、康永元年の追記にかゝるものであらう。第二巻は應安五年壬子四十八歳より永和五年己未五十五歳に至る。第三巻は康暦二年庚申五十六歳より同四年甲子六十歳に至る。第四巻は至徳二年乙丑六十一歳より嘉慶二年戊辰三月六十四歳に至り、自ら老病、會終りに臨んでゐることを記述してゐる。この巻末に夢窓國師の碑銘等がある。そして同年四月四日に示寂した。この日記は周信の生涯が知られるばかりでなく、當時の禪宗の有樣、諸禪僧の行動から、一面幕府の政治、叢軍足利義滿等の行動が窺はれるのである。【書誌】

篳篥（ひちりき）【名稱】又「くご」とも呼び、百濟琴・坎侯・空侯・箜篌（一説に篳篥と笳篥とは別の樂器であると言ふが、恐らくは同じものであらう）ともいふ。「杜氏通典」に記すところに依れば、この樂器は漢の武帝の時、樂人侯といふものが作り、その音が坎々として節に應ずるからこれを坎侯といつたのを、後に訛つて笳篥となつたといふが、この説は疑はしく、西域の稱呼を支那音に移したものらしい。【解説】東洋各地に行はれたる絃樂器の一で、西洋で所謂ハープと呼ぶものであつて、支那に於てこれを總稱して笳篥と呼ぶ。多くの種類があつて、「文獻通考」を見れば、大笳篥・小笳篥・竪笳篥（竪箜篌か）・臥笳篥・鳳首笳篥の名稱があり、その中で大笳篥及び小笳篥は支那の産である如く記してある。即ち漢の武帝が樂人侯爵をしてこれを作らしめたといひ、或は樂人侯調をして作らしめ、以て太一を祀るに用ひたと稱せられる。「博物志」には、帝辛封が師延に命じて笳篥を作らしめたとあるが、これは頗る疑はしい。併し又笳篥は胡樂であつて、漢の靈帝がこれを好んだとも記されて居る。「文獻通考」には漢の武帝が樂人侯調をしてこれを作らしめて太一を祠つたといふが、漢の世の郊廟の樂は先王の雅樂ではない。併し何れも胡中から來たとは言つてゐない。「陳氏樂書」には、これを胡部に入れて居るが、何の據り所があるのか判らないと言つてゐる。【圖】

第一圖

形琴に似て小さく、五絃を施し、撥を用ひて之を彈ず。但し今圖には四絃、柱あり。誠に琵琶に似たり」とある（第二圖）。竪笳篥は、普通に笳篥として最もよく知られて居るものであつて、即ち所謂ハープである。「隋書」音樂志に「立笳篥は西域より出づ。華夏の制器に非ず」とあり、又「杜氏通典」には通典を引いて、二十五絃或は二十三絃であるといふ。この絃數は惡と混同した誤ではないかと思はれる。「文獻通考」には「亦これを胡笳篥といふ。高麗等の國に竪笳篥・臥笳篥の樂あり。其引は即ち朝鮮津卒指里子高の作る所なり。漢靈帝此樂を好み、後世の教坊亦用ふ」とある。今この形を考へて見るに、二種類あるやうに思はれる。その一種は信西古樂圖に掲げられたもので（第三圖）、その形も小さく、絃數も少なく、これを床上に置いて奏するものであつて、指を以て絃を彈じた際に、床板がこれに共鳴するやうになつて居る。その原理は古代エヂプトなどにあるハープに同じい。古代エヂプトに於ける最大のものは二十一絃を有するが、その系統の二十二絃を有する大型のものが、中世時代に亞那に入つて來たのかとも考へられる。他の一種は我が奈良の正倉院に見られるもので、我が國ではこれを百濟琴と呼び、上方の曲線が北鳴胴になつて居り、下方が眞直な棒狀になつて居るものである（第四圖）。正倉院にある實物は、既に大破して、その殘骸を止めるのみであるが、大きさは高さ凡そ五尺位もある。これは古代アッシリアに多く見られる所のもので、所謂アッシリア式ハープである。これは古代アッシリアより中央アジアを經て、東洋に移入されたものと思はれる。支那に於ては、南北朝時代北魏の彫刻であるとされて居る所の黄花石四面石佛の中に、その小型のものを奏せる圖があるが、それは奏法がアッシリアと異なり、その絃を左手で握り、右手指で彈奏して居る。然るにアッシリアでは、その大型のもの、柄を腰に挿し、立ちながら、又は歩行しつゝ兩手でこれを彈奏して居る。その形及び奏法は朝鮮江原道平昌郡の上院寺にある銅鐘の面に彫刻してあるものと同じで、これは西暦七二五年（我が聖武天皇神龜二年）に鑄造されたものである。又、我が東大寺戒壇院所藏國



第二圖

第三圖

第四圖

鳳首圖は藤原末か鎌倉初の摸寫らしい）にある箜篌立奏の圖も、全く古代アッシリアのものと同様である。これ等によつて見れば、我が國に於て百濟琴として知られて居る所の箜篌は、古代アッシリアのハープが東漸して朝鮮に入り、それより百濟を經て我が國に入つたものらしく思はれる。鳳首箜篌に就ては、「文獻通考」に「天竺より出づ。其制作曲頸鳳形なり。扶南高昌等國の鳳首箜篌共上加奇好也」とある。これは印度で作られ、西域を經て支那に入つたものらしい。「杜氏通典」には「鳳首箜篌は箜篌に軫あり」とある。これ等の事から考へれば、印度のハープとして下部に胴を備へ、上方に曲頸あつて頸と軫を備へ、全形鳳首に似た所のもので、第五圖に示すやうなものらしい。これ等は凡て東洋に於ては、近世に至り絶えて用ひられなくなつた。

第五圖

【沿革】箜篌が我國へ傳來した年代を考へて見るに、「大寶令」の中には百濟樂師及び高麗樂師の名はあるが、箜篌の名稱はない。後に平城天皇の大同四年に、雅樂寮の雅樂師の制を定められた中には、高麗樂及び百濟樂には共に箜篌の名が明記してあるので、或は既に古く大寶以前から、高麗及び百濟からこの樂器が傳へられてゐたかも知れないが、それは明かでない。又「東大寺獻物帳」の中にも記してないが、光仁天皇の寶龜十一年に勘錄する所の「西大寺資財帳」の中には、その名が載つて居る。これによつて箜篌は少くとも奈良朝の中頃には、既に我が國に存在したことは明かである。それが繪畫の上に於て最も古く現れたのは、天平七年に描かれたと稱する「過去現在因果經」であつて、つゞいて前に述べた天平勝寶七年建立の東大寺戒壇院の扉繪である（尤もこの現存するものは後世の摸作であるが、多分それは原物の摸寫であらう）。それから「拾芥抄」に收められた承平四年に樂器目錄に記載されて居るが、最早その頃になつては、追々用ひられなくなつて來たものらしい。その後平安朝の中頃に惠心僧都が描いた「聖衆來迎圖」の中に、箜篌を持つて居る所が描かれて居るが、これは明かに前記の鳳首箜篌であつて、我が國へ傳來した百濟琴とは別物である。これによつて見ると、その頃はもはや百濟琴は絶えてしまつて、惠心僧都は別に印度の材料によつて、これを畫いたものと思はれる。つまり我が國に於ては、箜篌は奈良朝の中頃に朝鮮から傳へられ、平安朝の初めまで行はれ、仁明天皇の樂制改革の以後に用ひられなくなつてしまつたものと思はれる。

【參考】正倉院樂器の調査報告附錄　田邊尚雄（帝室博物館學報第二冊）〇日本音樂の研究　田邊尚雄 ≡ Paul Pelliot : *Le* 箜篌 *K'ong-heou et le qobuz*（内藤博士還暦祝賀支那學論叢の中）　（田邊）

空谷傳聲集　くうこくでんせいしふ　「やまびこしふ」を見よ。

空也念佛　くうやねんぶつ　舞踊【名稱】空也上人の始めた踊念佛【解説】鉢を叩いて念佛を唱へつゝ踊躍するもの、即ち鉢叩き（門附歌參照）である。今日の空也念佛修行の順序は、香偈・敬禮・祭文・懺悔文・空也上人御和讃・御歌五首、次いで歡喜踊躍と呼ぶ「思へば浮世に程もなし」云々の和讃、最後に拍子に乘つて念佛を唱へつゝ瓢を叩き、鉦を鳴らして踊りまはるのである。この鉢叩きは本來は鐵鉢を叩くことで、米錢を乞ふ意味である。だが鐵鉢が瓢簞の鉢に變化することは考へられぬ。昔、新羅の元曉と呼ぶ僧が還俗してから、時の俳優が瓢を巧みに使つて舞ふのを學び、自ら華嚴歌を作り、瓢を叩いて山々谷々の村里を歌ひつ舞ひつ敎化して歩いた。空也の瓢を叩くのと何等かの因緣が考へられる。（念佛踊參照）　（小寺）

陸羯南　くがかつなん　新聞記者【姓名】本姓は中田、名は實。陸の姓は羯南自身の好みでつけたものである。【生歿】安政四年青森縣中津輕郡清水村に生れ、明治四十年九月歿す。享年五十一。【閲歴】中田謙齋の第三子、長じて仙臺の師範學校に入り、後上京して司法省法律學校に學んだが、明治九年同窓の原敬等と共に、賄征伐をした爲め放校され、一年餘り浪人生活をしてから、歸鄕して「東奧日報」に執筆した。その後知人の推薦で、北海道紋別製糖所の飜譯係となつたが、再び上京して太政官御用係となり（同十六年）、文書局（後の官報局）の仕事をしてゐるうち、その文才識力を上長に認められ、編輯課長に昇進した。同十九年、二三先輩の後援により、相場新聞「商業電報」を買收し、「東京電報」と改めて發行した。同二十二年二月更に「日本」と改稱し、日本主義を紙上に宣言した。「日本」は國民精神の回復發揚を自任すと雖も、泰西文明の美點は之を知らざるにあらず。其權利自由及平等の說は之を重んじ、其哲學道義の理は是を存し、其風俗習慣も或る點までは之を愛し、特に理學・經濟・實業の事は最も之を欣慕す。然れども之を日本に採用するには、其泰西事物の名あるを以てせずして、且日本の利益及幸福に資するの實あるを以てす。といふのが羯南の主張であつた。「日本」は終始官僚主義と藩閥内閣を攻撃したが、殊に二十二年の條約改正問題に、日本主義の立場から、極力奮鬪したので、知識階級及び學生の間に愛讀せられ、羯南の雄大な文章が忽ち論壇の異彩となつた。社中に三宅雪嶺・池邊三山・福本日南・古島古一念（一雄）・正岡子規等があり、後に長谷川如是閑・河東碧梧桐等が參加した。そのため、「日本」は時事新報・國民新聞・東京日日新聞等の歐化主義・官僚主義に對抗して、新聞論壇の一角を占めたと共に、文藝趣味が豐かであり、子規を中心とする日本派の和歌・俳句、子規の評論・隨筆等によつて、文藝上の一權威となつた。また畫家中村不折が記者として長い間特色ある繪畫で紙面をかざつた。羯南は三十七年、日露戰爭前に歐羅巴を漫遊し、歸朝後病を得たので、三十九年「日本」を伊藤欽亮に讓り、鎌倉の極樂寺村で靜養したが、遂に四十年の秋に歿した。彼は平生權勢に屈せず、名利を念とせず、主張と信念に忠實で、一生、淸白剛骨を以て終始し、國士として先輩知友の間に重んぜられた。　（高須）

句格　くかく　「詩歌」を見よ。

愚管抄　ぐくわんせう　歷史書　七卷【著者】本書は故意に著者の名を隱してゐるので、その果して何人の著作であるかは、從來疑問とされてゐた。併し、古く鎌倉時代の末に成れる「本朝書籍目錄」には、これを慈鎭和尚の抄とし、ついで「椿葉記」「樵談治要」「小夜の寢覺」にも、慈鎭和尚の作としてゐるやうに見える。然るに近世に於ては黑川春村がこれを否定して跡かたもなき僞說とした。伴信友も初めは

否定說に傾いたが、後には肯定するに至つた。併しその肯定說が明確動かすべからざる根據を得たのは、三浦周行氏の研究による。氏の說は「愚管抄の研究」と題して「史林」（大正十年一月號）に揭げられてゐるが、靑蓮院の文書を捜つて、慈鎭和尚自筆又は轉寫の文書數通を得、それによつて本書が慈鎭和尚の著作である事を實證したのである。【成立】本書の記事を素直に信ずれば、承久二年の著作であつて、唯その第二卷「皇帝年代記」にのみ、少しく後年の書繼がある事となる。三浦氏はこの說である。これに對して津田左右吉氏は、表面承久二年の著作の如く裝つてはゐるが、實は承久亂後、貞應元年の著作であつて、その假託は隨所に破綻を見ると說いた（「思想」大正十三年九月號）。併し、それに對しては又村岡典嗣氏の反對があり（「思想」昭和二年五月號）、普通には、やはり承久二年說が行はれてゐる。【諸本】從來世間に流布してゐたのは、史籍集覽本と國史大系本とであるが、何れも善本とは言へなかつた。蓋し本書は、古寫本・古版本の依るべきものがなく、僅に江戸中期又は末期の寫本によるの外なかつたからである。而してそれらは多く文明八年の奧書ある片假名本を本としたのであるが、それとは系統を異にし、平假名を以て書かれたものに善本がある。その種の本は神宮文庫に二本あり、帝國圖書館に一本あり、宮内省圖書寮に一本あり、就中最後のものをよしとする。それには天明四年河村秀根自ら書寫した旨の識語を載せて居る。又國史大系の新訂増補本は、黑板勝美氏の手により、これ等の諸本によつて校合せられたものであるから、今のところ最も信據すべきものである。【解說】神武天皇より承久年間に至り、我が國歷史の大要を說いて、その歷史の底に流るゝ力、或はこの歷史を導く道理を明かにしたものである。「神皇正統記」が中世を超越した立場に在るに反し、本書はどこまでも中世的である。卽ち中世的、宗教的見地に立つて、我が國の歷史を解釋したものである。

【參考】愚管抄の研究　三浦周行（史林六ノ一）〇愚管抄考　村岡典嗣（思想昭和二ノ五）〇愚管抄の著者及說文　萩野雅二（國學院雜誌一四）〇愚管抄と慈鎭大僧正　中島悅次（國文教育五）〇愚管抄雜考　同上（國學院雜誌三五）〇鎌倉時代文學新論　野村八良〇國文學通史　坂井衡平〇愚管抄評釋　中島悅次　（平泉）

句兄弟　くきやうだい　俳諧集　三卷【著者】寶井其角【名義】其角の序に「謀作一智也。諸句兄弟也」とあつて、自他の類句を兄弟として對せしめたものである。【刊行】元祿七年【諸本】其角全集（俳諧文庫）・俳諧句合全集（同上）・其角全集（勝峯晋風編）所收。

【内容】上卷に、古今の秀逸なる句三十九句に自句を合せ、他句を兄とし自句を弟として自ら判詞を加へたものを收め、中卷には歌仙九卷と五十韻一卷（内未完四卷）及び芭蕉の東順傳を收め、下卷には艶絲（其角門）旅泊の日記なる其角一行の東海道及び紀和旅行の「隨緣紀行」を收め、卷末に句兄弟追考六格として、健句・新句・淸句・倖句・麗句・豪句と分ち、同門の發句百六十六句を附錄してゐる。其角の序、沾德の跋がある。【價値】序に「反轉の一格を立てた」と云つてゐるが、これは句境轉換を意味するので、兄の句に對して自作句たる弟の句を示して、所謂等類を遁れる工夫を指示したものである。茲に其角の等類觀と彼の新機軸とがある。中卷の萬物の詞を用ひた歌仙（唐山・晋子・彫棠三吟）や、眞行體の亡父追悼の「獨吟五十韻」（未完）や、行草體の亡父追善の「獨吟歌仙」（未完）なども一種の試みとして注意すべく、下卷の「隨緣紀行」は、芭蕉終焉の病床に行き逢ひ得た旅行として注目されるものであり、六格の句品の分類も句作の一參考となるものである。【影響】祇空門の魚貫がこれに倣つて「新句兄弟」（享保二十一年刊、俳諧文庫俳諧句合全集所收）を編し、涼袋門の一鼠の「俳諧瓜の實」や重厚の「句雙紙」の如きもこれの影響に成るものである。なほ江戸談林の素外（別項）は、これに示唆されて「誹諧類句辨」や同後篇を編してゐる。　（志田）

公卿政所下文　くぎやうまんどころくだしぶみ　「下文」を見よ。

句切　くぎれ　「切字」を見よ。

句空　くくう　俳人【本名】未詳【別號】柳陰庵（柳陰軒とも）【生歿】未詳【師傅】芭蕉門【閲歷】加賀の人で、武士出身らしく、知恩敎寺で剃髮し、金澤卯辰山に庵住してゐた。元祿二年、芭蕉北越行脚の際、柳陰庵にやどり、「散る柳主も我も鐘を聞く」の吟があつた。句空も翌三年に木曾塚の無名庵に芭蕉を訪ね、慷好の畫に讚を乞ひ、「秋の色ぬかみそ壺もなかりけり」の讚句を得た。それから山田に行き、翌四年吉野に遊行し、その歸路、再び無名庵の留守に入り「捨てゝ行く庵見よとや涅槃」の吟があつた。北枝・牧童・秋之坊・萬子（各別項）等と共に、北越蕉門の秀れた作者である。

【著作】北の山（別項）一冊（元祿五年刊）〇柞原二冊（同上）〇草庵集（別項）二冊（同十三年刊）〇干網集　一冊（寶永元年刊）

【參考】卯辰集　金子楚常・立花北枝〇誹諧世說　高桑闌更〇俳家奇人談　竹内玄々一〇蕉門諸生全傳　遠藤曰人〇俳林小傳　中村先久〇俳諧人物便覽　三浦若海〇北の山開題（蕉門珍書百種北の山）野田別天樓　（赤田）

傀儡子　くぐつ　【名義】莎草で製した袋を持つてゐた漂泊民であつたが故に名づくるとの說。或は歌舞、伎倆を事とする漂泊民といふ意味の朝鮮語から附いた名で、その漂泊民の持物が草で編んだ袋であつたから、このくぐつ族の持てる袋の原料を莎草といつたのだといふ說。或は、久求小野といふ川上住居の久久都彥、久久都媛の二柱の神に、くぐつが因緣を結んでゐはしまいかといふ說などあるが、朝鮮を經て、何處からか日本に渡つた漂泊民族か、或は、日本土着の先住民族である大水上神の子で、世界何れの民族にも偶發的に類似點のある漂泊民族であるかの二說に歸する。

【解說】我が國では、「和名類聚抄」や「辨散樂」中に見えたのが初めである。その生活は、「傀儡子記」（別項）によると、「無二定居一無二當家一、穹廬氈帳、逐二水草一以移徙、」とあり、その俗、北狄に似たるものがあるといつてゐるから、匡房時代に、なほ我日本民族と違つた風習が殘つてゐたものである。男は狩を事とし、弄劍、弄丸、木人桃梗を舞はし「生人の態を能す」とある。女は粧を施して倡歌淫樂、行人に枕席を薦めた一種の特殊民で、夜は「百神」を祭るとある。「百大夫」を祭つてゐたものであらう。初期の人形を操つた風俗を見る資料として、「今昔物語」の一節に「傀儡子ノ者共多ク館ニ來テ、守ノ前ニ並居テ、歌ヲ詠ヒ笛ヲ吹キ、謳ク遊ブニ、守モ此レヲ聞クニ我カ心地ニモ極クス丶ロハシク、謳ク思エケルニ、此ノ目代ノ印ヲ指スヲ見レハ、前ニハ

葬送

葬儀（そうぎ）
死者を送る儀式。

告別式（こくべつしき）
葬儀の中で、死者に別れを告げる儀式。

喪主（もしゅ）
葬儀を行う中心となる人。

遺族（いぞく）
死者の家族や親しい人。

会葬者（かいそうしゃ）
葬儀に参列する人。

弔辞（ちょうじ）
死者を悼む言葉。

香典（こうでん）
葬儀の費用の助けとして贈るお金。

通夜（つや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

火葬（かそう）
遺体を焼いて骨にすること。

墓（はか）
遺骨を納める場所。

位牌（いはい）
死者の名前を書いた木の札。

戒名（かいみょう）
仏教で死者につける名前。

喪服（もふく）
葬儀のときに着る黒い服。

数珠（じゅず）
仏具の一つ。

精進落とし（しょうじんおとし）
葬儀のあとの食事。

忌中（きちゅう）
死者の家で慎む期間。

喪中（もちゅう）
忌中のあとの期間。

法事（ほうじ）
死者の供養のための行事。

墓地（ぼち）
墓のある場所。

納骨（のうこつ）
骨を墓に入れること。

供養（くよう）
死者のために行う仏事。

仏壇（ぶつだん）
位牌を置く家の祭壇。

焼香（しょうこう）
香を焚いて拝むこと。

合掌（がっしょう）
両手を合わせること。

読経（どきょう）
お経を読むこと。

引導（いんどう）
死者を仏の道へ導くこと。

戒律（かいりつ）
仏教の守るべき決まり。

出家（しゅっけ）
家を離れて仏道に入ること。

僧侶（そうりょ）
仏教の修行者。

寺院（じいん）
僧侶が住む建物。

本堂（ほんどう）
寺院の中心となる建物。

庫裏（くり）
僧侶の住む建物。

山門（さんもん）
寺院の入口の門。

境内（けいだい）
寺院の敷地。

墓石（ぼせき）
墓に立てる石。

卒塔婆（そとば）
墓に立てる細長い板。

施餓鬼（せがき）
餓鬼に食物を施す法会。

盆（ぼん）
先祖の霊を迎える行事。

彼岸（ひがん）
春と秋の中日を中心とした七日間。

年忌（ねんき）
死後一定の年ごとに行う法事。

一周忌（いっしゅうき）
死後一年目の法事。

三回忌（さんかいき）
死後二年目の法事。

七回忌（ななかいき）
死後六年目の法事。

十三回忌（じゅうさんかいき）
死後十二年目の法事。

二十三回忌（にじゅうさんかいき）
死後二十二年目の法事。

三十三回忌（さんじゅうさんかいき）
死後三十二年目の法事。

五十回忌（ごじっかいき）
死後四十九年目の法事。

百回忌（ひゃっかいき）
死後九十九年目の法事。

永代供養（えいたいくよう）
寺が永く供養すること。

墓参り（はかまいり）
墓に参ること。

お盆（おぼん）
七月または八月に行う先祖の供養。

お彼岸（おひがん）
春分と秋分の日を中心とした七日間。

お寺（おてら）
僧侶が住む寺院。

お坊さん（おぼうさん）
僧侶のこと。

お経（おきょう）
仏の教えを説いた書物。

お線香（おせんこう）
香を焚くもの。

お焼香（おしょうこう）
香を焚いて拝むこと。

お数珠（おじゅず）
仏具の一つ。

お位牌（おいはい）
死者の名前を書いた木の札。

お墓（おはか）
遺骨を納める場所。

お供え（おそなえ）
仏前に供えるもの。

お花（おはな）
仏前に供える花。

お水（おみず）
仏前に供える水。

お灯明（おとうみょう）
仏前に灯す明かり。

お鈴（おりん）
仏具の一つ。

お仏壇（おぶつだん）
位牌を置く家の祭壇。

お戒名（おかいみょう）
死者につける名前。

お葬式（おそうしき）
葬儀のこと。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お告別式（おこくべつしき）
葬儀の中で、別れを告げる儀式。

お喪主（おもしゅ）
葬儀を行う中心となる人。

お遺族（おいぞく）
死者の家族や親しい人。

お会葬者（おかいそうしゃ）
葬儀に参列する人。

お弔辞（おちょうじ）
死者を悼む言葉。

お香典（おこうでん）
葬儀の費用の助けとして贈るお金。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お火葬（おかそう）
遺体を焼いて骨にすること。

お墓参り（おはかまいり）
墓に参ること。

お盆（おぼん）
七月または八月に行う先祖の供養。

お彼岸（おひがん）
春分と秋分の日を中心とした七日間。

お寺（おてら）
僧侶が住む寺院。

お坊さん（おぼうさん）
僧侶のこと。

お経（おきょう）
仏の教えを説いた書物。

お線香（おせんこう）
香を焚くもの。

お焼香（おしょうこう）
香を焚いて拝むこと。

お数珠（おじゅず）
仏具の一つ。

お位牌（おいはい）
死者の名前を書いた木の札。

お墓（おはか）
遺骨を納める場所。

お供え（おそなえ）
仏前に供えるもの。

お花（おはな）
仏前に供える花。

お水（おみず）
仏前に供える水。

お灯明（おとうみょう）
仏前に灯す明かり。

お鈴（おりん）
仏具の一つ。

お仏壇（おぶつだん）
位牌を置く家の祭壇。

お戒名（おかいみょう）
死者につける名前。

お葬式（おそうしき）
葬儀のこと。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お告別式（おこくべつしき）
葬儀の中で、別れを告げる儀式。

お喪主（おもしゅ）
葬儀を行う中心となる人。

お遺族（おいぞく）
死者の家族や親しい人。

お会葬者（おかいそうしゃ）
葬儀に参列する人。

お弔辞（おちょうじ）
死者を悼む言葉。

お香典（おこうでん）
葬儀の費用の助けとして贈るお金。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お火葬（おかそう）
遺体を焼いて骨にすること。

お墓参り（おはかまいり）
墓に参ること。

葬送

葬儀（そうぎ）
死者を送る儀式。

告別式（こくべつしき）
葬儀の中で、別れを告げる儀式。

喪主（もしゅ）
葬儀を行う中心となる人。

遺族（いぞく）
死者の家族や親しい人。

会葬者（かいそうしゃ）
葬儀に参列する人。

弔辞（ちょうじ）
死者を悼む言葉。

香典（こうでん）
葬儀の費用の助けとして贈るお金。

通夜（つや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

火葬（かそう）
遺体を焼いて骨にすること。

墓（はか）
遺骨を納める場所。

位牌（いはい）
死者の名前を書いた木の札。

戒名（かいみょう）
仏教で死者につける名前。

喪服（もふく）
葬儀のときに着る黒い服。

数珠（じゅず）
仏具の一つ。

精進落とし（しょうじんおとし）
葬儀のあとの食事。

忌中（きちゅう）
死者の家で慎む期間。

喪中（もちゅう）
忌中のあとの期間。

法事（ほうじ）
死者の供養のための行事。

墓地（ぼち）
墓のある場所。

納骨（のうこつ）
骨を墓に入れること。

供養（くよう）
死者のために行う仏事。

仏壇（ぶつだん）
位牌を置く家の祭壇。

焼香（しょうこう）
香を焚いて拝むこと。

合掌（がっしょう）
両手を合わせること。

読経（どきょう）
お経を読むこと。

引導（いんどう）
死者を仏の道へ導くこと。

戒律（かいりつ）
仏教の守るべき決まり。

出家（しゅっけ）
家を離れて仏道に入ること。

僧侶（そうりょ）
仏教の修行者。

寺院（じいん）
僧侶が住む建物。

本堂（ほんどう）
寺院の中心となる建物。

庫裏（くり）
僧侶の住む建物。

山門（さんもん）
寺院の入口の門。

境内（けいだい）
寺院の敷地。

墓石（ぼせき）
墓に立てる石。

卒塔婆（そとば）
墓に立てる細長い板。

施餓鬼（せがき）
餓鬼に食物を施す法会。

盆（ぼん）
先祖の霊を迎える行事。

彼岸（ひがん）
春と秋の中日を中心とした七日間。

年忌（ねんき）
死後一定の年ごとに行う法事。

一周忌（いっしゅうき）
死後一年目の法事。

三回忌（さんかいき）
死後二年目の法事。

七回忌（ななかいき）
死後六年目の法事。

十三回忌（じゅうさんかいき）
死後十二年目の法事。

二十三回忌（にじゅうさんかいき）
死後二十二年目の法事。

三十三回忌（さんじゅうさんかいき）
死後三十二年目の法事。

五十回忌（ごじっかいき）
死後四十九年目の法事。

百回忌（ひゃっかいき）
死後九十九年目の法事。

永代供養（えいたいくよう）
寺が永く供養すること。

墓参り（はかまいり）
墓に参ること。

お盆（おぼん）
七月または八月に行う先祖の供養。

お彼岸（おひがん）
春分と秋分の日を中心とした七日間。

お寺（おてら）
僧侶が住む寺院。

お坊さん（おぼうさん）
僧侶のこと。

お経（おきょう）
仏の教えを説いた書物。

お線香（おせんこう）
香を焚くもの。

お焼香（おしょうこう）
香を焚いて拝むこと。

お数珠（おじゅず）
仏具の一つ。

お位牌（おいはい）
死者の名前を書いた木の札。

お墓（おはか）
遺骨を納める場所。

お供え（おそなえ）
仏前に供えるもの。

お花（おはな）
仏前に供える花。

お水（おみず）
仏前に供える水。

お灯明（おとうみょう）
仏前に灯す明かり。

お鈴（おりん）
仏具の一つ。

お仏壇（おぶつだん）
位牌を置く家の祭壇。

お戒名（おかいみょう）
死者につける名前。

お葬式（おそうしき）
葬儀のこと。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お告別式（おこくべつしき）
葬儀の中で、別れを告げる儀式。

お喪主（おもしゅ）
葬儀を行う中心となる人。

お遺族（おいぞく）
死者の家族や親しい人。

お会葬者（おかいそうしゃ）
葬儀に参列する人。

お弔辞（おちょうじ）
死者を悼む言葉。

お香典（おこうでん）
葬儀の費用の助けとして贈るお金。

お通夜（おつや）
葬儀の前の夜に行う集まり。

お火葬（おかそう）
遺体を焼いて骨にすること。

お墓参り（おはかまいり）
墓に参ること。

りの大鰹大太刀を身につけ、馬を飛ばせて大磯の長の許に走れば、今しも結成は和田一門の宴席へ呼ばれて、盃論の最最中だといふ。五郎は次の間に立つて様子を窺ふ。朝比奈は鎧の背に耳を傾け、次の間に入つて、五郎に宴席へ出よといふ。いや出ぬといふ。朝比奈は、五郎の草摺に手をかけて力にまかせて曳く。草摺は三枚切れたが、五郎は居成を去らない。朝比奈はその草摺を看に、拳を握く納めるといふのである。【曲節】若山・外記・半太夫・河東・大薩摩・長唄・常磐津・富本・清元等に渉つてゐるが、多くは長唄である。

【主要曲目】長唄では、寛暦九年二月、市村座「十山彦業曽我」第二番目「鳥羽根元草摺引」（作詞、幡随二三次、作曲、杵屋忠次郎）が最古とされてゐるが、これ以前にも数曲がある。その後で知られてゐる主なるものは「ほどく分身草摺引」（文政十二年三月市村座）に始つて　新草摺引（明和元年正月中村座）「鞘引　鬢鬚五郎」（明和六年正月中村座）「心　時　勢草摺」（安永六年正月市村座）「蝶花若草摺」（又「傾城似顔絵草摺」安永六年正月市村座）「いきほひ高浦草摺」（又「傾城似顔絵草摺」安永七年六月中村座）「初約束手管草摺」（寛政二年正月中村座）、「御鳥屋根元草摺引」（文政五年正月市村座）、「国家根元草摺引」（文政九年正月市村座）等があり、大薩摩節では「江島桑草摺引」（三組の草摺引。寛延十三年二月中村座）等がある。今日傳存する主要なものについて、左に解説する。

【初演】天明七年正月、江戸桐座「雪薫源曽我」第一番目大詰（作詞）幷山金八（立唄）杵屋忠五郎（作曲）初代杵屋正次郎（振附）二代西川扇蔵（傳来）曲・振とも傳存。但し振は後に附けられたものであらう。（内容）五郎（市川高麗蔵）が遊澤潟の鰹を抱へて、工藤が館へ駈けつけんとする短慮を、化粧坂の少将（瀬川富三郎）が衣に縋つて止め、クドキから手踊り機縁で終る。朝比奈の代りに少将を使つただけに、芝事が和らか味を帯び、曲全体が非常に艶気に満ちてゐるのが特色。女草摺引の振向は古くから見えてゐるが、本曲は前記の「蝶花根元草摺引」等に負ふところが多い。

（初演東手曽我草摺引（長唄正本）

【根元草摺引】（角書）木家尚嶋　【通稱】正札附根元草摺　【角書】「初演」文化十一年正月、江戸森田座「双蝶々曽我」第一番目五立目大詰（作詞）本屋宗七（立唄）二代芳村伊三郎（作曲）四代杵屋六三郎（振附）藤間大助（後の二代勘十郎）（内容）工藤祐経にめぐり逢つた五郎（七代市川團十郎）が、遊澤潟の鰹をひつさげ駈け出さんとするところを、小林の朝比奈（初代市川男女蔵）が女の身振りではやまつてはならぬと種々傳授する所作で引止め、兩人の大見得で終る。文化期を代表する名曲で、軽妙洒脱、振にも変事気分と夢幻的手振が交錯されて、よく江戸根元歌舞伎の俤を窺して、現存する本格の唯一のもの。供奴の都合上、朝比奈を女の和田舞鶴とする場合もある。

【蝶花若草摺】（角書）時致魔拳　小林力蝶　【通稱】「蝶花石千歳草摺」文政十年正月、江戸市村座「蝶花曽我」第一番目大詰（作詞）二代瀬川如皐（曲節）長唄（作曲）四代杵屋六三郎（立唄）二代松永忠五郎（振附）藤間大助（後の二代勘十郎）（内容）矢の根を磨いた五郎（沼井鯨若）は、結継が許へ駈け出さんとする時、和田の舞鶴（澤村源之助）が現はれて引留め、手踊り機縁あつて草摺の見得。幕引に矢の根を加へたものである。

【参考】劇代集　二代瀬田左変　○浜世芳栄年表○長唄全集（日本音曲全集）中内蝶二・田村西男編　○日本歌謡集成巻九○歌謡音曲集（日本名著全集）○元禄歌舞伎傑作集上巻（高野辰之・鳥越文蔵校訂）○花江戸歌舞伎年代記続編（竹柴瓢助）○根元草摺鬼の變遷（郡司正勝・鳥越文蔵共著）大正七年

草雙紙

【名義】江戸時代小説の一体。廣義二義の別がある。廣義のものは赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻（各別項）の一系統をたすものの總稱であり、狭義のものはその中の合巻の特稱である。廣狭を通じて繪草紙ともいふ。毎頁に挿繪があり、而も繪が文よりも重要に於て重きをなすためである。尤も廣義の草雙紙が赤本に決定される以前に、その名はすでに存在してゐた。それは漠然たる意義によつて、廣く通俗低俗な讀み物、童幼婦女のためにするものを稱した。蓋し雙紙は冊子の普便及び假借であり、草は雑多とか粗雑とかの意を有するくさの當字である。即ち「くさざうし」とは、正格ならぬ安易な通俗書といふことである。時に草紙とも書いたが、草の重なりが紛れ易いので、草と雙とを別けて書くのが例となつた。かういふ用例による草雙紙は、假名草子と略ど同義のものであるが、中自ら成る特殊の種類を限定していふやうになつた。御伽草子式の構想を有ち、更に挿繪を数多く有するものこれである。大體に於て古物雙物を通俗化し、それを取扱ひの便宜から小冊子に仕立直した體裁をとつた。

【赤本】赤本は、それが一段と童蒙の玩弄を目ざして造んだものである。延寶頃から江戸の地に徐々に上梓され、享保頃には續りに行はれた。こゝに、従来の草雙紙に對する特定の新草雙紙が發生し、その一類が永く幕末明治初年に及んだのである。特殊な形式を有する點に於て、江戸時代小説中の一異類として考慮さるべき幾多の條件を備へてゐる。赤本の名はいふまでもなく表紙の赤色によつて命ぜられたのであるが、この色の子供らしさが、すでに紗綾形、萬字つなぎ、黒沙門龜甲形の所謂行成表紙の古雅なものを表紙とする從来の草雙紙といかに異なる内容を持つかを暗示する。尤も赤本の題材にもこれまで通りに鹽賣文太、義經鳥渡り、鉢頭姫などはあるが、その扱ひぶりにはかなりの相異があつて、筋を縒めて簡略にし、幼童に分り易くしてゐる。従つて従来のものに材料とならなかつた桃太郎・文覚茶釜の類が、續りにとり容れられた。これ等を通じて注意されるのは、すべてめでたい事で終る點向立である。一は教訓に資するためであるが、一は初春に刊行されて、幼童の贈り物となつた關係からであつた。この事實を多く用ひた。それにつれて敵討、化物退治、軍談、一代記の類が頻りに行はれた。また他の一面に於て、當時の世相にも觸れ、詞書の書き込みにも、當時の流行が少なからず攝入した。想ふに黒本の黒表紙は、その頃の浮瑠璃正本などの表紙に倣つたのであらうし、青本の青表紙は當世流行を追ふ心から、拓抜き、更に本文を離れて繪の中の人物の詞を並居の五枚一册の原則は、それが無意味になつた合巻にも、なほ形式的の名殘を見せ、すきがへしの印刷は精巧なる合巻の出現まで引き續いて、黄表紙が内容に於て通がかりながら、粗悪な印刷であることを却つていきであり酒落であると誇り、繪と本文と詞書の相互關係は草雙紙の推移と共に、或は緩漫に、或は緊密に、各時期獨自の興味を醸してゐた。

【黒本・青本】稚拙な赤本は、歴史的使命を終へて、その位置を黒本・青本に譲つた。二者は、略草頃から應行して行はれた。赤本は殆どすべて畫工の考案になつてゐたが、こゝには畫工以外作者も認められて来た。尤も作者がこれを考案し、これを作文し、畫工がこれを畫くのではない。畫工はただ作者の下繪を書き直すだけである。これは、黒本・青本作者だけでない。草雙紙作者一般の習はしであつて、従つて繪心のない作者は常に不利の地位に立ち、下繪に長じた作者は成功してゐた。山東京傳・柳亭種彦の成功の一半には、この事のあるのを忘れてはならない。黒本と青本とは表紙の色の黒と青とを異にするだけで、内容は略ど同一であるが、これ等のものは赤本が殘つた題材をやゝ精しく仕立直した外に、赤本ではその例の少い歌舞伎また浮瑠璃の梗概を多く用ひた。それにつれて敵討、化物退治、軍談、一代記の類が頻りに行はれた。また他の一面に於て、當時の世相にも觸れ、詞書の書き込みにも、當時の流行が少なからず攝入した。想ふに黒本の黒表紙は、その頃の浮瑠璃正本などの表紙に倣つたのであらうし、青本の青表紙は當世流行を追ふ心から、拓抜きけたものとして青色を選擇したのであらう。しかし、青本・黒本入交の體を見ると興趣は、その畫風が鳥居派によつて代表されるが如く、大體に於て歌舞伎浮瑠璃であり、これに伴ふマンチックな色調であつた。赤本以来の題材としての童話も、その色調で書き直され、畫き直されたといふべきであるから、作中の世相寫生も、酒落のとり容れも實はたゞ〳〵これに觸れたのに過ぎなかつた。

【黄表紙】安永四年の鱗川春町の「金々先生栄花夢」（別項）は、これに反して寫生と酒落を作の中心とした。草雙紙はこゝに一線を劃し、時代風俗の寫實を標榜するその以後の作に對して、黄表紙の名を與へた。その名が表紙のいきな萌黄によることは勿論である。かうなると草雙紙はもう子供の玩びでない。大人といふよりは通人たちの娯樂の對象となつた。ただ常に面白くをかしくといふことを作意としたことが、依然として赤本以来の童幼玩弄の心を失はない。故に寫實に立脚しながら、その穿ちを誇張し、現實を導らにしながら、思ひ切つた空想を操り合せ、通の世界に題とたわいもない童話の筋を絢交ぜにし、眼前の流行を問題にしながら芸唐無稽の史的説明を與へて、興味を失ひに集中した。評判記の形式を以て上梓された黄表紙批評の書、例せば「菊壽草」の如きは、巧拙の標準を離けてこの點においた。しかも繪の多くが忠實な時代風俗の寫生であることが、自ら一篇の構想との間に或る距離を保ち、筋を追ふ本文と書き込みの酒落の捻蔓辯も或る程度の距離を保ち、すべて悠長な氣分を湛はせた。即ち首尾を全うしてゐる構想を基てて考へれば、何處も此處も酒落本・滑稽本の一斷片であり、落語・川

筑紫琴】第二番目大切（作詞）二代瀬川如皐（曲節）長唄（作曲）四代杵屋六三郎（立唄）二代松永忠五郎（振附）藤間大助（後の二代勘十郎）（内容）矢の根を磨いた五郎（沼井鯨若）は、結継が許へ駈け出さんとする時、和田の舞鶴（澤村源之助）が現はれて引留め、手踊り機縁あつて草摺の見得。幕引に矢の根を加へたものである。

【参考】劇代集　二代瀬田左変　○浜世芳栄年表○長唄全集（日本音曲全集）中内蝶二・田村西男編　○日本歌謡集成巻九○歌謡音曲集（日本名著全集）○元禄歌舞伎傑作集上巻（高野辰之・鳥越文蔵校訂）○花江戸歌舞伎年代記続編（竹柴瓢助）○根元草摺鬼の變遷（郡司正勝・鳥越文蔵共著）大正七

草雙紙

【名義】江戸時代小説の一体。廣義二義の別がある。廣義のものは赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻（各別項）の一系統をたすものの總稱であり、狭義のものはその中の合巻の特稱である。廣狭を通じて繪草紙ともいふ。毎頁に挿繪があり、而も繪が文よりも重要に於て重きをなすためである。尤も廣義の草雙紙が赤本に決定される以前に、その名はすでに存在してゐた。それは漠然たる意義によつて、廣く通俗低俗な讀み物、童幼婦女のためにするものを稱した。蓋し雙紙は冊子の普便及び假借であり、草は雑多とか粗雑とかの意を有するくさの當字である。即ち「くさざうし」とは、正格ならぬ安易な通俗書といふことである。時に草紙とも書いたが、草の重なりが紛れ易いので、草と雙とを別けて書くのが例となつた。かういふ用例による草雙紙は、假名草子と略ど同義のものであるが、中自ら成る特殊の種類を限定していふやうになつた。御伽草子式の構想を有ち、更に挿繪を数多く有するものこれである。大體に於て古物雙物を通俗化し、それを取扱ひの便宜から小冊子に仕立直した體裁をとつた。

【赤本】赤本は、それが一段と童蒙の玩弄を目ざして造んだものである。延寶頃から江戸の地に徐々に上梓され、享保頃には續りに行はれた。こゝに、従来の草雙紙に對する特定の新草雙紙が發生し、その一類が永く幕末明治初年に及んだのである。特殊な形式を有する點に於て、江戸時代小説中の一異類として考慮さるべき幾多の條件を備へてゐる。赤本の名はいふまでもなく表紙の赤色によつて命ぜられたのであるが、この色の子供らしさが、すでに紗綾形、萬字つなぎ、黒沙門龜甲形の所謂行成表紙の古雅なものを表紙とする從来の草雙紙といかに異なる内容を持つかを暗示する。尤も赤本の題材にもこれまで通りに鹽賣文太、義經鳥渡り、鉢頭姫などはあるが、その扱ひぶりにはかなりの相異があつて、筋を縒めて簡略にし、幼童に分り易くしてゐる。従つて従来のものに材料とならなかつた桃太郎・文覚茶釜の類が、續りにとり容れられた。これ等を通じて注意されるのは、すべてめでたい事で終る點向立である。一は教訓に資するためであるが、一は初春に刊行されて、幼童の贈り物となつた關係からであつた。この事實を多く用ひた。それにつれて敵討、化物退治、軍談、一代記の類が頻りに行はれた。また他の一面に於て、當時の世相にも觸れ、詞書の書き込みにも、當時の流行が少なからず攝入した。想ふに黒本の黒表紙は、その頃の浮瑠璃正本などの表紙に倣つたのであらうし、青本の青表紙は當世流行を追ふ心から、拓抜き、更に本文を離れて繪の中の人物の詞を並居の五枚一册の原則は、それが無意味になつた合巻にも、なほ形式的の名殘を見せ、すきがへしの印刷は精巧なる合巻の出現まで引き續いて、黄表紙が内容に於て通がかりながら、粗悪な印刷であることを却つていきであり酒落であると誇り、繪と本文と詞書の相互關係は草雙紙の推移と共に、或は緩漫に、或は緊密に、各時期獨自の興味を醸してゐた。

【黒本・青本】稚拙な赤本は、歴史的使命を終へて、その位置を黒本・青本に譲つた。二者は、略草頃から應行して行はれた。赤本は殆どすべて畫工の考案になつてゐたが、こゝには畫工以外作者も認められて来た。尤も作者がこれを考案し、これを作文し、畫工がこれを畫くのではない。畫工はただ作者の下繪を書き直すだけである。これは、黒本・青本作者だけでない。草雙紙作者一般の習はしであつて、従つて繪心のない作者は常に不利の地位に立ち、下繪に長じた作者は成功してゐた。山東京傳・柳亭種彦の成功の一半には、この事のあるのを忘れてはならない。黒本と青本とは表紙の色の黒と青とを異にするだけで、内容は略ど同一であるが、これ等のものは赤本が殘つた題材をやゝ精しく仕立直した外に、赤本ではその例の少い歌舞伎また浮瑠璃の梗概を多く用ひた。それにつれて敵討、化物退治、軍談、一代記の類が頻りに行はれた。また他の一面に於て、當時の世相にも觸れ、詞書の書き込みにも、當時の流行が少なからず攝入した。想ふに黒本の黒表紙は、その頃の浮瑠璃正本などの表紙に倣つたのであらうし、青本の青表紙は當世流行を追ふ心から、拓抜きけたものとして青色を選擇したのであらう。しかし、青本・黒本入交の體を見ると興趣は、その畫風が鳥居派によつて代表されるが如く、大體に於て歌舞伎浮瑠璃であり、これに伴ふマンチックな色調であつた。赤本以来の題材としての童話も、その色調で書き直され、畫き直されたといふべきであるから、作中の世相寫生も、酒落のとり容れも實はたゞ〳〵これに觸れたのに過ぎなかつた。

【黄表紙】安永四年の鱗川春町の「金々先生栄花夢」（別項）は、これに反して寫生と酒落を作の中心とした。草雙紙はこゝに一線を劃し、時代風俗の寫實を標榜するその以後の作に對して、黄表紙の名を與へた。その名が表紙のいきな萌黄によることは勿論である。かうなると草雙紙はもう子供の玩びでない。大人といふよりは通人たちの娯樂の對象となつた。ただ常に面白くをかしくといふことを作意としたことが、依然として赤本以来の童幼玩弄の心を失はない。故に寫實に立脚しながら、その穿ちを誇張し、現實を導らにしながら、思ひ切つた空想を操り合せ、通の世界に題とたわいもない童話の筋を絢交ぜにし、眼前の流行を問題にしながら芸唐無稽の史的説明を與へて、興味を失ひに集中した。評判記の形式を以て上梓された黄表紙批評の書、例せば「菊壽草」の如きは、巧拙の標準を離けてこの點においた。しかも繪の多くが忠實な時代風俗の寫生であることが、自ら一篇の構想との間に或る距離を保ち、筋を追ふ本文と書き込みの酒落の捻蔓辯も或る程度の距離を保ち、すべて悠長な氣分を湛はせた。即ち首尾を全うしてゐる構想を基てて考へれば、何處も此處も酒落本・滑稽本の一斷片であり、落語・川

（正札附根元草摺引（文化十一年正月森田座）

【根元草摺引】（角書）むかしを今　【通稱】本調子の草摺（初演）明治十七年二月東京新富座「後風土記劇本讀」第二番目大切（作詞）三代河竹新七（前名竹柴金作）（曲節）長唄（作曲）三代杵屋正次郎（振附）花柳壽輔（内容）曾我五郎時致（九代市川團十郎）と小林朝比奈（四代中村芝翫）との草摺引で、「正札附」と同じであるが、手踊り機縁のところに木遣りを入れてある點が他の曲と異なつてゐる。末遣節の件は、常磐津三津朝床數組（文化九年正月市村座）の中にあるのを直したものである。朝比奈を和田の舞鶴で見せる場合もある。今日歌舞伎で行はれる「根元草摺引」は、この二つの中の何れかである。

常磐津節で名高く、且つ現存してゐるものは、「鞘寝化粧坂（春遊名大鏡）三津朝床數組」（四代瀬川路考）が數野の人形を、虎（二代瀬村田之助）が川津の人形を、朝比奈（三代坂東三津五郎）が行司の人形を持つてセリ出し、所作の後、五郎（七代市川團十郎）と草摺引になる趣向である。常本と長唄の掛合で出来た「三重襲紋數組鳥」（享和三年正月、中村座等）もあるが、通稱「三重襲後編節」（後編は前者の意）として長唄にのみ傳存してゐる。傍系的のものである。帯を草摺に見立て、引合ふ「帯引」がある。元禄十六年四月、江戸森田座所演「成田山分身不動」（別項）の中にも既に見えてゐるがその後流行して數十種の所作事が生れた中で同曲のみ傳存するものに左の一種がある。

【蝶鶴比翼の帯引】【本名題】錦優蔵駒彫　【通稱】　【初演】天保元年四月、江戸河原崎座「通

草雙紙の表紙

黒本「浅草川田舎源氏」（縦六寸横四寸二分）

赤本「猿蟹大太鼓島」（縦六寸横四寸二分）

合巻「偐紫田舎源氏」（縦五寸八分横三寸九分）

黄表紙「江戸生艶気樺焼」（縦五寸七分横四寸一分）

様・狂歌と同質のものの絵解本でもある。享楽の前には童心を發揮する江戸ッ子には恰好な玩びものであつた。かゝる特質を最も多く具備して黄表紙の隆盛を見せたのが、人を以ていへば春町・寛三二、時を以ていへば安永六七年から天明末年までであつた。それにしても黄表紙の流行期間は三十年の久しきに亘り、その題材はたゞ眼前の風俗の流行を追ふが故に、作風の推移も少くなかつた。殊に天明に續く寛政の治は急激の變化を黄表紙の作風に與へて、これをその前後の二期に峻別させた。所謂筋約令の發布された當時は、餘りに甚しい田沼時代との相異に、幾多の時世諷刺を、在來の黄表紙骨格構成の行過ぎの手法によつて試みたこと、例へば春町の「鸚鵡返文武二道」（別項）、喜三二の「文武二道萬石通」（別項）の如きもあつたが、爲政家の彈壓の手が一度下ると共に、反抗する力のない戯作者たちは直に方向を轉換して、頽落を理窟に、諷刺を敎訓にかへた。彼等の苦心は、いかにして心學の說理を面白い趣向の中にとり入れるかにあつた。『山東京傳の「心學早染草」（別項）はその作意に於ける成功作であつた。擅倣の作は相續いで出た。勿論さういふ趣向は直に行詰つたために、黒本時代の怪談物、敵討物が宮賞風に修正せられて復活した。わけて敵討物が大に流行した。さきに、天明三年に「敵討三味線由來」を出したが、つひに世間から默殺された南仙笑楚滿人が、寛政七年に「敵討義女英」（別項）を出すや、直に敵討物中興の祖と稱せられたことは、時好の變化を知ることが出來る。けだし敵討物は勸懲の理を說めるに都合がよく、また祝儀の出現などを配するので怪談の興味を盛る便宜があり、また事件として首尾一貫の構想を要求するので、理窟敎訓に偏してゐる當時の作風に最もよく適合する題材であつた。これ實に讀本の影響變化中の初期から行はれてゐたが、その風は年と共に盛になつた。作者はその下繪の人物にこれ等の傳奇を敍するに、その人物の性質がさうさせたのである。合巻の世界に戯作者達が當時の好事の機運に動かされながら、なほ未だ讀本にその知識を發揮するまでの力なく、假りに合巻を安易な見せどころとして、低級の誇りを得て滿足しようとし、讀者またこれを以て上品なり、高尚なりとした結果である。この和漢古典の翻案は、つひに長篇の續物を出す因となつた。『水滸傳』『西遊記』を原據とする『絵本水滸傳』『金毘羅利生譚』、『源氏物語』を原據とする『偐紫田舎源氏』の類の如きは、續刊數年の久しきに亙つた代表作である。一年數册づつを出版して、その續きを翌年の春に（暮末に近づくにつれて、春以外の中間期にも實り出される事もあつたが）待ちうけさせた合巻の魅力は、實に悠長な時代の相を示すに足りる。合巻は赤本以來の傳統を破つて、紙質もよく印刷も精巧になり、殊に表紙は華美の錦繪で飾り、圖柄は多く役者繪に倣つた艶麗優婉のものであり、その價格も高かつたが、なほ婦女子の愛玩は大方でないので實行よく、從つて板元が、これの出板に拂ふ努力は並々でなく、作者もまた讀本よりも報酬の割がよいので、好んでこれに應じた。これが驚くべき多數のものを刊行させた理由である。（赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻參照）

【附記】翻刻本としては、黄表紙百種（帝國文庫）・大通世界・黄表紙十種（有朋堂文庫）・黄表紙二十五種（日本名著全集）・黄表紙集（近代日本文學大系）・赤本黒本青本（名著文庫）・草雙紙集（同）・赤本黒本青本（名著文庫）・草雙

紙芝居等がある。

【参考】青本年表○好色青本年表(新群書類従所収)○新増青本年表(同上)○京伝外題集(同上)○近世物之本江戸作者部類(赤本の部)○戯作者撰集○戯作者小伝○式亭雑記○以波伝毛乃記○燕石の雑録○国字小説通○早稲田文学(昭和二年黄表紙研究號)○草雙紙のいろいろ(石田元季)　〔山口〕

禅史偉説年代記 草雙紙　黄表紙　三冊　十五丁十六図　【作者】式亭三馬　【畫工】自畫　【名義】角書に「又焼飛、鉢冠姫」とある。これは古くから草雙紙などに繰り返し書かれてゐる鉢冠姫を又も題材としたことの斷りであらう。禅史は草雙紙であり、偉説は鑑説すなはち牽強附会である。一篇の鉢冠姫物語に草雙紙年代記を附会した事を意味する。【刊行】享和二年西宮版　【諸本】稀書複製會本・黄表紙二十五種(日本名著全集)・黄表紙十種(有朋堂文庫)所收。

【梗概】(上冊)(一)禅史家不言實記と題して、赤實記其に、地本問屋の家名と商標を記し、また雙紙問屋の數を知る歌、赤本時代の嗣絆を早く覚ゆる歌を載せてゐる。(二)戯作者名寄、諧書乃名並と題して、草雙紙作者及び畫工の名を録してゐる。(三)赤本の材料を年代記に配記する。なほ引續いて時と各頁の本文の片隅に配記してゐる。(四)母親の死に臨んで娘の頭に鉢を冠せる。松會板の畫風。(五)父親、修行者に囑して娘の鉢を脱がせるやうに祈禱しても甲斐がない。鱗形の畫風。(六)繼母、鉢冠を折檻す。鳥居清信の畫風。(七)鉢冠、亡き母の墓を拜む。清倍の畫風。(八)家出した鉢冠、盜賊に遭ひ難儀する。清滿の畫風。(中冊)(九)鉢冠、色里に賣られる。清重及び宮川の豊風。(十)鉢冠不具者とのことで追出されて放浪する。昌信の畫風。(十一)乗合を拒まれて當惑してゐる鉢冠を、三人の江戸の衆が助ける。清經・清長・北尾重政、古風の勝川春町の畫風で、各人物を書きわける。(十二)江戸の衆、實は春駒の為めに、鉢冠觀國の見世物となる。北尾政演、北尾三治郎の畫風。(十三)見世物で當らなかつた鉢冠、爲者となつて辨言する。頭の鉢をとらせようと總撞着へ来て頼む。中古の清長、中古

〔禅史偉説年代記〕

の春町、中古の重政の畫風。(十四)鉢冠、精古所を出す。古風の春英、歌麿の畫風。(下冊)(十五)石錦の息子、鉢冠に心を寄する。鉢冠も心を通はす。春章・春朗の畫風。(十六)息子の一家親族、二人の仲を裂かうとしていろいろと意見をする。政美・政演の畫風。(十七)一家中騒ぐらべをして、鉢冠を辱しめようとする。鉢冠それを歎いて立ち去らうとする時、頭の鉢落ちる。歌麿・北斎の畫風。(十八)続くらべの座上、鉢冠の美しさに人々を驚かす。豊廣・長喜・豊國の畫風。(十九)鉢冠の繼母と實父と乞食となつてゐるのを鉢冠と夫が見出して引取り、安樂に暮らさせる。春英・北尾紅翠齋の畫風。(二十)作者名寄精畫、畫工名畫、昔から青本の畫を描いた人の名、名人戯作者六家撰、及び名作青本略記として二十三部の名を録してある。

【備考】作者は、草雙紙の變遷、特に文章の調子、また書き込みの言葉づかひ、洒落・地口の様子及び挿畫の具合の變遷を、一部の鉢冠姫の物語の筋の運びの中に見せようとしたのが趣向である。尤も、この趣向には、すでに先蹤がある。芝田杜芳の作、天明三年板の「草雙紙年代記」これである。四位少將と小町との戀物語を主題として、その文章と挿畫の中に草雙紙の變遷を具體的に示さうとしたのである。三馬はそれを據りどころとして、更に精密丁寧を加へたのである。「草雙紙年代記」では序文の中で片鱗を見せたに過ぎない畫風の年代記を、殆ど全部に亙らせたことがすでにその好例である。又杜芳の作は、書家の筆意をば、政演に模倣させたのであつたが、これは卷末に「右全部十五葉畫工並文稿式亭三馬戲画墨」とあるやうに、三馬が自ら畫いたのであるが、これにも道樂氣の徹底ぶりが見られる。なほ草雙紙に關するいろいろの事項を細かに叙したことも、杜芳の作にない工夫である。中には、隨分誤りもあるやうであるが、何かと便宜のために草雙紙の一史料として扱はれがちである。たとへば黄表紙名作二十三部(黄表)といへば、黄表紙の價値標準に於て相當の權威めいてゐるが、實は三馬がこの作で、名作青本略記として列擧したものを指していふのである。　〔山口〕

草雙紙年代記 草雙紙　黄表紙　二冊　十一丁十二図　【作者】岸田杜芳(鬮川・芝甘川・鬮ともいふ)　【畫工】北尾政演(山東京傳)　【名義】赤本黒本から黄表紙に至る過程を年代記に見立てたもの　【刊行】天明三年　井恭堂(泉市)版　【諸本】稀書複製會本　【題材】小野小町の傳説。大和物語百題部に住む男の話。黄表紙の歴史。

【梗概】陽成院の御時、僧正遍昭の勧めに小野小町を召された。小町は四位少將深草と契る。大友黒主は少將を讒し、小町を奪はうとしたが、鰹節の五郎が助けて二人を逃す。武州淺草のほとり丸屋小右衛門は小野家へ仕へてゐた者で、二人を隠匿して置き、古風な服裝が目立つからとて、隣家の金々先生を頼んで夫婦ともに大通に仕立てる。夫婦は雷門の鬼と相談のうへ雨乞の商賣をする。小町は雨乞を仕おほせたので、帝から近々に召還される事とな

〔草雙紙年代記〕

考談(寛)川北朝弘 ○國造本紀考栗田寛(存採叢書)○物部氏纂記同上(栗里先生雜著)○尾張氏纂記同上(同上)　(栗本)

孔雀船 くじゃくぶね　詩集【著者】伊良子清白【刊行】明治三十九年五月佐久良書房【內容】「文庫」「青年文」等に發表された清白の詩は約百四五十篇もあるが、その內より嚴選して十篇を收めた。詩作年代は明治三十三年より三十八年に及んでゐる。中で「漂泊」と「安乘の稚兒」は、本集中の傑作であるばかりでなく、彼の代表作として世に喧傳されてゐる。次に力作「夏日孔雀賦」、全く定型を脫した「駿馬問答」などがある。樣式から見ると、「漂泊」の起首「蠣戶に、秋風吹いて、河添の旅籠屋さびし」から全篇が五七である。「鳥」「安乘の稚兒」「初陣」も五七、「月光日光」「五月野」「花柑子」は五五、「不開の間」は五四五五五を五行一節とした變つた形式である。「華燭賦」は七七の調を基礎として、所々用語の觀念に應じて長短自由な格調を示してゐる。【批評】刊行以來二十餘年埋沒されてゐたが、大正昭和の詩壇隆興に際し、その價値を批評界に見出され、稀覯本として珍重されるに至つた。昭和四年四月、本文そのまゝのものに美しき裝幀を施して、日夏耿之介の解說、中山省三郎の覺え書を添へて刊行(梓書房)された。(伊良子清白參照)　(河井)

孔雀樓筆記 くじゃくろうひつき　隨筆　四卷【著者】清田絢【刊行】明和五年。堀榮吉・高調等所校【解說】經史その他和漢の雜事について所懷を述べたもので、儒家に關する論說ばかりではない。卷一に聖人ノ道から瀟辯に至る三十一條、卷二に初應野から柏原に至る三十六條、卷三に北野戲場から北村源四郎に至る三十二條、卷四に漢明士卒强弱から聖人追尊四條に至る三十五條を收めてある。此末のことについても時儒の言論に旨味のあるのが多い。明和五年堀榮吉、同年高調の序、同年伊藤聖訓の跋がある。【著者小傳】字は君錦、通稱文平、儋叟又孔雀樓主人と號した。伊藤龍洲の子で、儒業を京都に開き、詩文を以て鳴り、後、福井藩の儒員となつた。天明五年三月二十三日歿す、享年六十七。「五經旁訓」「史記排」「唐土行程記」「藝苑談」「藝苑譜」「孔雀樓文集」等の著述がある。　(和田)

具象性 ぐしょうせい　「文學の本質」「具象美」を見よ。

九條武子 くじょうたけこ　歌人【生歿】明治二十年十月、京都西本願寺に大谷光尊の次女として生れ、昭和三年二月七日歿す。享年四十二。【閱歷】十二歲まで師範附屬小學校に通ひ、その後は家庭教師に就いて諸藝を修めた。二十二歲で男爵九條良致に嫁ぎ、良人が正金銀行ロンドン支店詰となつたのに隨つてイギリスに赴き、滯在一年半。單獨歸國の後は孤獨を守ること十二年に及んだ。佐佐木信綱氏の竹柏會に加はつて、「金鈴」「薰染」等の歌集を公にし、また戲曲「洛北の秋」、隨筆集「無憂華」等がある。「見渡せば西も東も霞むなり君はかへらずまた春や來し」「わづらはし朝の人はあざみ行きぬゆふべの人はたたへて過ぎぬ」など、つつましやかな情緖を宗教的信念の中に包んだ、純眞な作品が多い。西本願寺佛教婦人會長、感化園、六華園長としても各種の社會慈善事業に盡し、才情兼備の麗人として知られた。　(土岐)

九條殿遺誡 くじょうどののゆいかい　教訓書　一卷【著者】九條殿は藤原師輔である。【名稱】九條殿遺誡と題してゐるが、內題としては更に遺誡並日中行事と記してゐる。【成立】遺誡と言ひ、先公の教を綴り古賢を訪ふ云々の奥書もあるから、恐らくは晚年のものであらう。【諸本】群書類從第四七五・勸王文庫・日本教育文庫(家訓篇)等所收【解說】日々の起居動作、言語、食物、修養等の事柄、應對の注意等を父兄に仕へる道、節儉の事、信仰の力、漢文で具體的に詳說してゐる。奥書には「我が後たる者、熟々此の由を存じ、たとひ如法に非ずとも必ず意を用ひて公私の事を勤むべし」と記してゐる。藤原時代の貴族生活中に於ける個人の道德、家族の遺德等を窺知し、また日常生活の規範或は公人としての心持等を知ることが出來る。かねて又師輔の人物を知るに十分な資料となる。【備考】「本朝書籍目錄」の公事の部には、「新撰年中行事」二卷を「九條右丞相抄」、「除目抄」八卷を「九條相國抄」と記してゐるが、今傳はらない。尤も群書類從第八三に收めてある「九條年中行事」は古いものであるから、これが或は「新撰年中行事」の缺本であらうかとも考へられるが、的證はない。但、類從本の古いものであることだけは確實である。　(山岸)

具象美 ぐしょうび　藝術論 (英) Beauty of Concreteness. (獨) Konkret-Schöne【解說】具體美といつても同じである。すべて美的客體は、吾々によつて直觀的(觀照的)に把握される一面を持たねばならない。この對象の性質を美的具象性(別項)といふ。故に藝術について云へば、すべて藝術は知覺的にか、或は想像的にか、何れにしても具體的に吾々の直觀に入る側面を有する筈である。かくて具象美といふことは、美的客體の美の重要な方面を指すのであるが、藝術形式の相違によつて具象的性質に程度の差があり、造形美術などと異なり、文學の如きは、その具象美は間接的に吾々の想像の上で把握されるのである。具象的美の相異を標準にして、藝術を分類する人もある。なほ「美の具象段階」「美的觀照」「藝術の分類」の項參照。　(村田)

鯨帶博多合三國 くじらおびはかたよみくに　草雙紙　合卷　六册合二册【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【角書】(出村新兵衞 小町屋宗七)【名稱】博多小女郎と三國小女郎とを女主人公とする淨瑠璃歌舞伎脚本を綴り合せた作の意、鯨帶とは表裏色異なる帶の稱である。【刊行】文政五年、伊藤與兵衞版【諸本】種彥短篇傑作集(續帝國文庫)所收。【梗概】攝津島羽鄉手の空源寺に、笠掛家の臣小町淺香之丞が住職雲水法師を導師として切腹する。臨終の折、弟宗七に主君よりお預りの寶刀を海賊玄海灘右衞門に奪はれた申譯であること、宗七と雙生兒の一人が大阪の町人玉屋新兵衞であるから、それを賴つて寶刀を詮議して吳れと賴む。宗七、兄を葬つて歸る途中、その冤罪を目掛けて發砲するものがあつた。(三四年經過)玉屋新兵衞は商用で博多に往來してゐたが、そこの馴染の藝者小女郎を出村新兵衞のために身請される。玉屋は小女郎と諜し合はせて、辻淨瑠璃語り廉緑芥太夫を小女郎の父親の武士に仕立てゝ、出村から小女郎を騙り取る。出村はそれを承知で渡しておいて、自ら玄海灘右衞門と名乘り、玉屋を脅迫して海賊の仲間に引き入れる。玉屋は小女郎のために連判帳に血判し、出村から仲間の印の割符を受取る。玉屋と小女郎の去つたあとで、出村は手下の毛剃利工右衞門に、空源寺の雲水を殺してその名を騙つた

こと、淺香之丞に切腹させ、宗七を銃殺したこと、宗七と雙生兒の玉屋は油斷の出來ぬ器量人なので、かう計つたのだと話す。それを芥太夫が立聞きする。さて玉屋は大阪に歸つたが、小女郎をつれて來た事が母の怒りに觸れて長町に別居してゐる。(一年經過)玉屋夫婦が上京して、新兵衞妹のおほめが一人留守してゐる所へ、母が來て世帶の贅澤ぶりを見て、これは正業でないと推察し、懲しめのため道具屋を呼んで家財道具を賣り拂ふ。そこへ夫婦が歸宅して驚いてゐる時、灘右衞門が來て家の樣子を見て、仲間から逃れるものと合點し、船割符の返却を迫る。割符は賣られた簞笥の中にあつたので返すことが出來ず、新兵衞と灘右衞門とは斬合ひ又格鬪する。母が急を聞いて割符を持參し、灘右衞門はそれを受取つて去る。母は頻りに新兵衞に正業に就けと勸めるが、これを聞き容れない。立聞きしてゐた工右衞門が新兵衞の本心を知つて、今までの割符は新兵衞を試すための贋物であつたと告げ、眞の割符を渡して去る。こゝに新兵衞實は小町宗七は武士姿となり、おほめ實は眞の玉屋新兵衞、及び眞の雲水法師の弟たる芥太夫を初め、道具屋に身を窶してゐた武士どもを從へて、灘右衞門實は足利家を仇と覘ふ赤松滿祐の一子喜見丸の乘船に亂入してこれを討つてとる。寶刀は灘右衞門が帶してゐたのであるが、さきに格鬪の折、小女郎が巧みに取り替へて戾しておいた。これといふのもすべて淺香之丞の苦肉の計によつて成功したのである。卽ちわざと贋雲水の灘右衞門の面前で切腹して、宗七に灘右衞門の顏を見覺えさせ、又、灘右衞門に油斷させるために、大阪に住ひする乳母の子玉屋新兵衞を宗七の雙生兒の兄弟であると僞り、宗七を變身さして寶刀詮議の便を得させようとした。宗七また早くも合點し、空鐵砲の策で灘右衞門の鐵砲を免れ、その後新兵衞の名の下に灘右衞門に接近したのである。【構想】外題に、角書に、序文に、明かにしてゐるやうに、この作は、近松の「博多小女郎浪枕」と、並木五瓶の「富岡戀山開」を綴り合せた

「鯨帶博多合三」圖

ものであるが、いづれもの筋の中心を避けて別に探偵小說的興味のものを構成したのである。五瓶の作は、出村新兵衞・玉屋新兵衞の二人物の存在によつて二人新兵衞とも稱せられてゐる狂言であるが、種彥はその二人の名を假用しながら、それ等を互に相手を謀るための變名なりとし、また眞の玉屋新兵衞をば女裝して敵を謀らせるなどの點に、斬新と複雜の趣向があつた。卽ち三人新兵衞とも、二人玉屋新兵衞ともいふべきものである。宗七が玉屋新兵衞を名乘つて、しかも相手に看破されないのが、宗七と新兵衞とを雙生兒であるとした事によるなどは、いかにも歌舞伎らしく、種彥得意の趣向であつたらう。種彥はまた挿繪を通じて贋雲水と出村新兵衞とが實は灘右衞門である事を灘右衞門自身の說き明し以前に讀者に知らせておきながら、玉屋新兵衞が宗七であり、おほめが眞の新兵衞である事は最後まで知らさない。これも讀者に探偵的興味を與へる一つの工夫である。要するにこの作は互に相手の謀の裏を搔かうとする點を趣向の骨子としてゐるが、歸するところは變裝變名による事の運びにある。おもふに種彥は筋の表面を近松と五瓶の二つの作に循りながら、實は三國小女郎と玉屋新兵衞を主人公とする浮世草子の「傾城歌三味線」(別項)に據つたのであらう。その作に於ける遊女小女郎は、所々に住み替へて妓名を變へると、新兵衞またこれを追うて身を變へ名を變へ、新兵衞の色敵も亦變名してこれに迫る筋がある。種彥がこれを利用してこの作を成した事は、彼が「歌三味線」を翻案した他の作に於ける手法から推定することが出來る。　(山口)

國栖 くず　「古傳說物の謠曲」を見よ。

國栖歌 くずうた　歌謠【名稱】國栖とは吉野の國栖村に住する人々の事で、太古の先住民族の後裔だと云ふ。この國栖が宮中に來つて奏する風俗歌を國栖歌と言ふ。【出典】「古事記」應神の條に一首(應神紀にも同歌出づ)。【沿革】應神天皇十九年十月朔日に、吉野宮に行幸し給うた時、國栖人が酒を獻じ、その際口鼓を打つて伎をなしつゝ歌つた歌が後世に傳へられたもので、後世の儀式にも、國栖人がこの歌を奏する際には口を打つて仰ぎ笑つたとある。平安時代では、元旦の朝賀宴會、正月七日の白馬節會、同十六日の踏歌節會、十一月の新嘗會、その他、正月十七日、五月五日、七月廿五日、九月九日等に行はれる宮中の節會の儀式には、大歌立歌を奏すると共に、必ず國栖人が來り、承明門外に於て國栖歌及び笛を奏し、御贄(土地の產物なる菓・菌・年魚等)を獻じたのである。(但、諒闇參列の時には、これ等の國風を奏さない例である)。而してこれ等の節會の際には、國栖十二人、笛工五人(その中二人は山城國綴喜郡に住す)、合計十七人の人が歌笛を奏し、大嘗祭の日には、國栖、笛工各十二人づつが參入した。然るに寬弘八年正月元日に國栖の奏なく、この頃より吉野の國栖は參入しなくなつたので(小右記)その代りに宮中の樂人が國栖人として歌笛を奏した。鎌倉室町時代となつては、僅に樂人一人が南階の下に祗候したに過ぎない(內裏式・內裏儀式・貞觀儀式・延喜式・北山抄・江家次第・公事根元・古事記傳)。歌詞は、

白檮の生に、橫臼を作り、橫臼に、釀みし(書紀、釀める)大御酒、甘らに、聞し以ち(書紀、聞し食し)飲せ、麻呂が父

なほ「古事記」應神の條には、吉野の國栖が大雀命の佩き給へる御太刀を見て歌つた歌が一首出てゐるが、これも國栖歌と云ふべきであらうか。その歌形より考へるに、志都歌(別項)の歌返の一歌と酷似してゐるから、これと關係があるであらう。　(藤田)

楠昔噺 くすのきむかしばなし　淨瑠璃　五段　時代物【作者】並木千柳・三好松洛・竹田小出雲【角書】(祖父は山へ柴刈に 祖母は川へ洗濯に)【名稱】三段目口の老夫婦の生活に因んで作の主要人物楠の活動を利かせたもの。通稱「どんぶりこ」(端午の

幕山主基（ばくざんすき）

【国技館】十二日目、幕山は主基を寄せ切って、全勝を守った。

中京相撲（ちゅうきょうずもう）

【名古屋】中京相撲は、十一日目、全勝の幕山と、一敗の千代ノ山が対戦した。

曲芸（きょくげい）

【浅草】浅草の曲芸師、松井源水さんは、十一日、十二日の二日間、浅草公園で、曲芸を演じる。

女子青年団（じょしせいねんだん）

【東京】東京都の女子青年団は、十一日、十二日の二日間、日比谷公会堂で、大会を開く。

国債（こくさい）の値（ね）

【東京】国債の値は、十一日、次のとおり。

（一）甲種国債　九十円

（二）乙種国債　八十円

花柳（かりゅう）

【東京】花柳さんは、十一日、十二日の二日間、歌舞伎座で、舞踊を演じる。

曲芸（きょくげい）

【浅草】浅草の曲芸師、松井源水さんは、十一日、十二日の二日間、浅草公園で、曲芸を演じる。

女子青年団（じょしせいねんだん）

【東京】東京都の女子青年団は、十一日、十二日の二日間、日比谷公会堂で、大会を開く。

国債（こくさい）の値（ね）

【東京】国債の値は、十一日、次のとおり。

（一）甲種国債　九十円

（二）乙種国債　八十円

幕山主基（ばくざんすき）

【国技館】十二日目、幕山は主基を寄せ切って、全勝を守った。

中京相撲（ちゅうきょうずもう）

【名古屋】中京相撲は、十一日目、全勝の幕山と、一敗の千代ノ山が対戦した。

曲芸（きょくげい）

【浅草】浅草の曲芸師、松井源水さんは、十一日、十二日の二日間、浅草公園で、曲芸を演じる。

女子青年団（じょしせいねんだん）

【東京】東京都の女子青年団は、十一日、十二日の二日間、日比谷公会堂で、大会を開く。

国債（こくさい）の値（ね）

【東京】国債の値は、十一日、次のとおり。

（一）甲種国債　九十円

（二）乙種国債　八十円

花柳（かりゅう）

【東京】花柳さんは、十一日、十二日の二日間、歌舞伎座で、舞踊を演じる。

【參考】日本歌謠史　高野辰之〇曲舞辨疑　西村榮明（謠曲界二三ノ四）　（佐成）

口宣 くぜん　古文書【解說】口宣案とも。宣旨の一種で、主として叙位・任官の場合に出される文書。元來叙位・任官は叙位・除目の日に叙任せられたものであるが、平安朝の半頃より次第に「消息宣下」とて、職事藏人（藏人頭或は五位藏人）が勅命を奉じて口宣を書き、それに消息を添へて太政官の上卿に送り、上卿はまた消息を添へて内記（位の場合）或は外記（官の場合）に宣下することを生じ、内記或は外記は口宣の本紙は各自局に留め、その寫を叙任せらるゝ本人に渡すのである。（伊木）

（口宣案）

「口宣案」
上卿三條大納言
應永廿九年八月十九日　宣旨
　菅原高長先
　　宜任備前守
　　　藏人頭右少辨藤原朝臣俊直奉

具體美 ぐたいび　→「美的段階」を見よ。

下文 くだしぶみ　古文書【解說】官宣旨（別項）の式に依り、公武の所管より被官に下す文書で、公的儀式的のものである。院廳下文・門院廳下文・法親王廳下文・藏人所下文・檢非違使廳下文・雜訴決斷所下文・國守下文・留守所下文・公卿政所下文・勸學院政所下文・社寺政所下文・武家下文・武家政所下文等がこれに屬し、我が國の文書のうちで、奉書（御教書）の式と共に、最も多く行はれた式である。その樣式は大體に於て二通りあり、一は最初に「何々廳下」或は「何々政所下」などあり、他は單に「下」とあるものである。前者は終りに役人の連署があり、後者は端或は奥に差出者の署判ある場合が多い。國守下文及び武家下文の外は大抵前者に屬してゐる。〔院廳下文〕院宣（別項）と共に院政の主要文書であり、院廳（上皇或は法皇の政を聽き給ふ所）より下さるゝ公文書。主として諸國の在

院廳下　備後國在廳官人等
　可令早任國司廳宣、以尾道村田島伍町爲大田庄倉敷地、兼又開發寺領尾
　道村餘王荒野同御領事
右、東義朝臣今月　日解狀偁、……者、任申請之旨、以件尾道村田島伍町爲倉
敷、兼又令開發寺領尾道村餘王荒野、相加寺御領、本色御年貢六丈布佰端
之外、可增高伍拾端之狀、所仰如件、在廳官人等宜承知、不可違失、故下、
　　嘉應元年十一月二十三日　　主典代大藏權少輔中原朝臣（花押）
別當權大納言藤原朝臣（花押）　判官代勘解由次官平朝臣（花押）
權中納言兼右衞門督平朝臣（花押）　少納言兼侍從高階朝臣（花押）
太皇太后權大夫藤原朝臣（花押）　右衞門權佐藤原朝臣（花押）
刑部卿藤原朝臣　左衞門權佐藤原朝臣（花押）
左近衞權少將兼美濃守藤原朝臣（花押）　右少辨藤原朝臣
權右中辨兼備後權守平朝臣（花押）
右近衞權少將兼皇后宮權亮藤原朝臣（花押）

廳官人・莊官・社寺等に所領、年貢を始め種々の事柄に就て下される。樣式は官宣旨（別項）に據り、連署は大抵上段は四位以上、下段は五位以下で、主典代が終りである。なほ後院廳・門院廳・法親王廳等にも、院廳に準じて同じ形式の下文がある。〔檢非違使廳下文〕別當宣（別項）と共に、檢非違使廳の公文書であるが、下文の方がより公的である。その樣式は、院廳下文に準じて居り、連署の役人は多き場合と少い場合とがある。なほこれには諸官の評定目錄が添うてゐることが多い。〔雜訴決斷所下文〕雜訴決斷所は、後醍醐天皇の建武中興の時に置かれた役所で、その文書に下文と牒とがある。下文は命令的で、牒は多少對等の意味がある。共に中興の政の破壞と共に廢絶したが、割合に多く現存し、當時の所領經濟關係の研究に、好資料を提供してゐる。〔國守下文〕在京の遙任國守から、在國の留守所（在廳官人）に下す文書で、初に「下　留守所」とし、國守の袖判がある。〔留守所下文〕留守所から、その下の郡司、郷、個人等に下す文書、終りに目代、判官代等役人の連署がある。〔公卿政所下文〕攝關家始め公卿の政所からその莊園等一家の事柄に關して出す文書、樣式は院廳下文と同樣であるが、書出しはその人に依り、「攝政家政所下」「關白家政所下」「太政大臣家政所下」など、いろ〳〵あり、終りの連署は、別當以下の家司である。また書出しが單に「下」となつてゐることもある。〔武家下文〕鎌倉室町兩時代共にある。鎌倉時代の下文は御家人・莊園の住人・僧侶神人などに對して、地頭の補任その他諸種の事柄に用ひられたが、その樣式に大體二通りある。一は袖判のあるもので、

雜訴決斷所下　島津上總入道々鑑所
　筑前國雷山千如寺衆徒等申當寺造營用途事
右件造營用途事、任去二月廿九日當所評定目錄、可致沙汰之旨、被仰
下之處、于今無沙汰云々、太不可然、所詮來六月中宜令究濟之狀、下
知如件、
　建武二年五月十九日　　前筑後守藤原朝臣（花押）
中納言兼大藏卿左京大（花押）　明法博士兼左衞門權少尉（花押）
夫大判事侍從藤原朝臣（花押）　左京大進中原朝臣
修理大夫藤原朝臣（花押）　左衞門權佐兼少納言侍從藤原朝臣
正三位藤原朝臣　左少辨藤原朝臣

（花押）泰時朝
下　周防國伊保庄竈戸關矢島柱島等住人
　可早停止土肥實平妨井土人大野七郎遠正不當
　僉領家濫止事
右件庄々者、皆爲別當社御領云々、而土肥實平寇
日發押領之上、土人大野七郎遠正令誡亡庄内之由、
依社司訴、自院所被仰下也、仍而開實平之處、於
兵糧米者、悉除了、况無押領之由所申也、何况之
謀計乎、雖又遠正令誡亡庄内之條、甚以不當也、
自今以後停止彼等之濫行、可從社家進止之狀如件、
以下、
　　文治二年九月五日

今一は建久二年政所設置後のもので、

將軍家政所下　周防國安田保住人
　補任下司職事
　　藤原弘貢
右人補任彼職之狀、所仰如件、住人宜承知、勿違
失、以下、
　　建久四年四月十六日　　案主清原（花押）
令大藏丞藤原（花押）　知家事中原（花押）
別當前因幡守中原朝臣（花押）
散位藤原朝臣（花押）

次に室町時代には政所下文はなく、唯の下文だけであるが、その代り、袖判の場合と、奥の上方に署判ある場合とがある。（伊木）

百濟樂 くだらがく　舞樂【解說】古く百濟國

から我が國へ傳へられた樂舞の總稱である。樂器は高麗の樂と同じく、百濟琴（箜篌）・莫目・横笛を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は、恐らく後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられ、以て今日に傳はつてゐるであらう。【沿革】百濟の樂が我邦へ初めて傳はつたのは不明であるが、國史に傳へられる所では、欽明天皇の十五年二月に、樂人施德三斤・季德己麻次・季德進奴・對德進陀を我國に遣り、請に依つて代らしめるとあるから、その以前から百濟の樂人が來てゐたに相違ない。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には、高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並び行はれてゐたものらしい。その後大寶令、天平三年の雅樂寮制度、大同四年の制度などには、常に百濟樂師が他の高麗樂師・新羅樂師と併び記されてゐるから、仁明天皇の頃迄は、古風のまゝの百濟樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方とに分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと共に右方の樂に編入されてしまつたので、古い儘の百濟樂は兎に角消滅したものと考へられる。（田邊）

百濟琴 くだらごと　→「箜篌」を見よ。

朽木櫻 くちきざくら　御伽草子　一卷【作者】未詳【成立】室町季世か【諸本】古刊本なし。室町時代小說集所收。【梗概】奥州松島の生れむねのぶと、筑紫の人むねやすとは二條大納言の御内に仕へて時めき、且つ互に睦しく生死を同じくせんと誓ひ合つてゐた。或る時、連立つて東山の櫻を見て無常を觀じ、共に世を捨て後生を願はうと約束して歸つたが、翌朝むねやすが訪れたむねのぶ方では、夜の内の主人の急死に騷いでゐた。葬送に列し茶毘の火中に入らんとして人々に止められたむねやすは、妻子の許へ弓矢を形見に送つたまゝ行方知れずとなつた。むねのぶには子なく、むねやすには六歳の女子あり、又、身重であつた妻はその九月男子を生んだが、三年後、歎きが重なつて重い病にかゝり、幼い二人を殘して他界した。娘は通りがかりの僧を頼んで遺骸を鳥邊野に弔つた。丁度筑紫國行脚の果に來合せたむねやす入道が、人に聞いて總てを知り、名告りたい煩惱に苦しみながら密かに二人の樣子を窺つてゐると、娘は母の手箱から鏡を取出し、父母に似た互の顏を寫し見た後、町に出てそれを賣り、父とも知らずむねやすに道を問うて清水へ同伴せられ、鏡の代を供養に納めたが、歸途、五條の橋で投身を企てた。驚いたむねやすが押止めて親子の名告りをすると、群集の中に大納言の御内の者あつて急報し、恩賞を懸けて歸參を促されたが、入道は二子の上を頼んで行方をくらました。大納言に養はれて男子は父の所領の外、むねのぶの領まで讓られ、女子は后の位に上つて榮えた。【解說】遁世物、石童丸型の哀話、「三人法師」（別項）の第三話及び謠曲「土車」の構想に酷似し、「元亨釋書」の釋常觀吉野譜の條にも類し、むねやす入道が筑紫の人といふので、刈萱桑門の傳說とも交渉がある。結末が父子名告り合ひの喜びといふ點が「土車」と同巧で、悲劇的でない。部分的には謠曲「松山鏡」の影響も認められ、卷首のむねのぶ・むねやす兩士の件は、文中の記載に暗示されてゐる通り、西行の遁世傳說から脫化してゐること明白である。【參考】室町時代小說集解題（島津）

口眞似 くちまね　能狂言【別名】耳引・柳樽【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【内容】或る男、外から柳樽を貰つたので、誰かを招いて面白く飲まうと思ひ、冠者に言付けて親しい方を迎へにやる。冠者が立ち歸つたので、主はどなたを呼んで來たと聞くと、某だとの返事である。主はあの人は殊のほか酔狂の人だから、あの人の前で使ふ者がないが困つたものだと呟く。冠者はそれがしをお使ひなさいと言ふ。汝は躾の無い者だから使はれぬのだが、仕方がないから何事も身共の言ふやうにしろと言聞かせる。いよ〳〵正座へ招じて酒になると、冠者は一切主の眞似ばかりする。主が立腹して冠者を呼んで打ち、耳をひき、引き廻すのを、冠者は又その通り客人にする。【備考】文祿二年十月の禁裏御能の時、秀吉と家康とが演じてゐる。その時の番組で見ると、大藏流の狂言であつたらしい。（藤田）

沓冠 くつかむり　雜俳【別名】沓附【解說】課せられた七文字に上五と下五とを附けて十七文字の一句立とするもの。たとへば、
口上も―おなじことなり―配餅
お袋の―あちらへむくも―一つ穴
（西原）

沓附 くつづけ　雜俳【解說】冠附を顛倒したもので、點者の出した下の五文字に上五、中七の句を附して十七文字の一句立とするものである。例へば、
相撲取投げられた手を―とつて見る
石よりもくゝり枕が―おそろしい
（西原）

屈折語 くっせつご　言語學【名稱】（英）An inflectional language（獨）Eine flektierende Sprache（佛）Une langue à flection【解說】言語の形態的分類の一。或る單語が、その形の一部を變化し、これによつて、文中に於ける他の語に對する文法的關係を示す方法を屈折と名づける。例へばラテン語 amo (=I love); amas (=thou lovest); amat (=he loves) の如き變化、又は英語の sing, sang, sung の如き變化はこれである。或る場合には屈折と膠着との區別の明かでない事もある。ガベレンツも「インドヨーロッパ語族に於て屈折は膠着の程度の進んだものに過ぎない」(*Die Sprachwissenschaft*. 1891. S. 333) と言つてゐる。而して或る國語に於て、これを組織する單語が主として屈折の形態を有する時、その國語を屈折語といふ。インドヨーロッパ語族（別項）・セミティク語族に屬する諸國語は、屈折語であると稱せられる。（孤立語・膠着語・綜合語・抱合語參照）（神保）

句讀法 くとうほう　【名義】文や語句の斷續を知り易くするために、句點や讀點などの符號を文字と共に用ひる法則をいふ。【由來】和漢洋いづれの文章にも、もとは句讀點を附けなかつた。これを附けるやうになつたのは、後世になつてからのことである。太宰春臺の「倭讀要領」（享保十三年刊）の中に、漢文の句讀について「句讀ヲ點ズルコトハ、其法一樣ナラズ。或ハ圈ヲ用ヒ或ハ批ヲ用フ。圈トハ、○ナリ。批トハ、丶ナリ。（中略）句ニハ圈ヲ用ヒ、讀ニハ批ヲ用ルコトアリ。其時ハ句モ讀モ皆傍ニ點ズ。又句ト讀トヲ別タズ、皆圈ヲ用ヒ、皆批ヲ用ルコトアリ。其時モ句讀トモニ傍ニ點ズ。人々ノ意ニテ、時ニ臨テ何レノ式ヲモ用ルナリ。」云々　なほ同書に、文章の評點や段落を分ける鉤畫などの事を說いて

ゐる。明治二十年權田直助は「國文句讀考」を著して句讀法を解説し、同二十九年井上賴圀等これを增補訂正して出版した。【句讀法案】同三十七年國定教科書の制度行はれ、文部省の圖書課に於て「句讀法案」の取調があり、教科書調査委員會の審議を經て、同三十九年二月發表された。その總則に、

一、本法ハ文ト文トノ關係、文中ノ語・句・節ノ相互ノ關係ヲ明カニスルヲ以テ目的トス
二、前項ノ目的ノタメニ左ノ五種ノ符號ヲ使用ス
。マル　、テン　・ボツ　「」カギ　『』フタヘカギ
三、マルノ符號ヲ除ク外、讀語ノ配合ニヨリテハ誤解ヲ生ゼザル限ニ於テ、本法ノ規定ニ拘ラズ符號ヲ省キ、又ハ之ヲ加ヘ施スコトヲ得

次にその細則を摘要する。

第一章　マル
マルハ文ノ終止スル場合ニ施ス
第二章　テン
テンハ左ノ諸種ノ場合ニ施ス
一、形式ヨリ見レバ終止シタレドモ意義ヨリ考フレバ次ノ文ニ連續セルモノノ下
二、二ツ以上重ミタル同種ノ文ノ下
　但シ最後ノ文ノ下ハ此限ニ在ラズ
三、獨立ノ感歎詞及ビ呼掛ノ語ノ下
　但シ關係シテ續キタルトキハ其前後
四、動詞・形容詞・助動詞ノ中止法ヲ用ヒテ續ケタル同種ノ語・句・節ノ下
五、並列セル同種ノ名詞句・名詞節ノ間
六、並列セル同種ノ形容的修飾語・形容的修飾句・形容的修飾節ノ間
七、並列セル同種ノ副詞的修飾語・副詞的修飾句ノ下
八、複文ノ副詞節ノ下
九、從屬節ヲ含メル副部ノ下
十、複文ノ主節ノ主語ノ下ニ從屬節來レルトキ主語ノ下
十一、或成分ニ相當スル語ヲ特ニ提示セルトキ其下
　但シ客語ニ相當セル場合ハ此限ニアラズ
十二、名詞節ノ下ニ天爾乎波ノ無キトキ其下
十三、主部長キトキ其下
十四、修ノ語ヲ修飾スベキ副詞・副詞句ガ下ニ來ル語ヲ修飾スルガ如ク見ユル處アルトキ其下
十五、修ノ語ヲ修飾スベキ形容的修飾語ガ下ニ來ル語ヲ修飾スルガ如ク見ユル處アルトキ其下
十六、主語(主部)ガ客語ノ形容的修飾語ノ主ナルガ如ク見ユル處アルトキ其下
十七、個々ノ名詞ガ熟語名詞ト紛レ易キ處アルトキ其間
十八、主語ガ客語ト粘著スル處アルトキ其下
十九、假名ニテ書ケルトキ語ト語ト粘著スル處アルトキ其下
二十、形容的修飾語・形容的修飾句・形容的修飾節ガ並列セル同類ノ有ラユル語句ヲ修飾セルトキ其下
二十一、或句ガ上ナル語ト同格ナルトキ其前後
第三章　ボツ
ボツハ並列セル同類ノ名詞ノ間ニ施ス
　但シヤ・モ・トナドノ天爾乎波ニテ並列セル場合、接續詞ニテ二ツノ名詞ヲ並列セル場合、及ビ分別書方ヲ用ヒタルトキハ此限ニアラズ
第四章　カギ
カギハ左ノ諸種ノ場合ノ右ノ肩ト左ノ脚トニ施ス
一、對話ノ文　二、獨語ノ文
三、黙思ノ文　四、引用ノ文
第五章　フタヘカギ
フタヘカギハ對話ノ文、獨語ノ文、黙思ノ文、引用ノ文ノ中ニ更ニ他ノ對話ノ文、獨語ノ文、黙思ノ文、引用ノ文ヲ引用セルトキ其右ノ肩ト左ノ脚トニ施ス

右は、縱書の漢字假名倂用文又は假名文に適用するものである。横書の文に於ては、或は從來の縱書用の句讀點を用ひ、或は西洋文流の句讀點を用ひてゐる。後者については加茂正一著「パンクテュエイシャン」(大正十五年刊)に詳述してある。兩者の符號を對照すれば、

。に．ピリオド
、に，；：コンマ又はセミコロン又はコロン
・に，コンマ
「」または『』に""または''クォーテーション マーク

なほ疑問符？感歎符！省略符…ハイフン(連字の短線)ダッシュ(未完や停頓や挿入などを示す長線)なども用ひる。（日下部）

愚得隨筆附考 ぐとくずゐひつふかう　故實　十卷十一册　附考三卷【著者】日下部景衡。伊勢貞丈附考【成立・由來】景衡がこの隨筆の世に行はれないうちに歿したのを惜しんで、その書を集錄し、それに貞丈のこの書を讀んで得た考を附錄した。貞丈の序說及び附考の奥書は共に明和七年五月十二日となつてゐる。【內容】隨筆は武器・甲冑の考說を集錄したもので、卷一・二は刀劍類、卷三・四は甲冑類、卷五・六は弓矢類、卷七は旗旗類、卷八・九は鞍馬類、卷十は雜類とし、各類を多くの項目に分け、項目毎に說明を爲し、その項目に關係ある國史・記錄などの舊記を列記したものである。うち、附考に見えるものは朱筆で「見附考」と記して檢索に便にしてある。附考は上中下三卷に分れ、或は隨筆の誤を糺し、或は自己の意見を述べたものである。【影響】景衡は、新井白石の妻の弟で、白石のために「軍器考圖式」を作つた位であるが、貞丈は、この書の奥に「貞丈按、白石の軍器考は、此愚得隨筆を本にして書ける歟。隨筆に誤る事は軍器考にも亦誤れり。隨筆に引書の名を書違たるは軍器考にも亦書違たり。隨筆は軍器考の母なるべし。」と言つてゐる。これは貞丈の他の書にも述べてゐる事であるが、或は反對の事も言へるかも知れず、とにかく兩書に密接な關係のあつたことは疑はれない。（石村）

國雄 くにを　國學者【姓】林【號】松園・大船眞楫・常磐居【別稱】山崎平右衛門【生歿】寶曆八年生、文政二年(二四七九)二月二十七日歿。享年六十二。【墓所】東京大木戶四谷山狹寺【閱歷】國雄は常陸國水戶の人であるが、江戶へ出て、甲府勤番支配の八木丹後守に仕へてゐた。その頃から狂歌を好み、眞顏(別項)の門に入つた。後、本居宣長(別項)に就て國學を學んだ。八木家を退き、一時山崎某の養子になつてゐたが、此處も出て、江戶で狂歌を以て自立した。關東の諸國、奥羽・越後・信濃その他へ、狂歌を詠みつゝ旅行したことがある。養子舞雄は越後の人で門人である。家は晚年江戶の四谷荒豆店御先手組屋敷にあつて此處で病歿した。【著書】著書は二十餘部。國語國文の方面には注意すべきものがある。○詞の緒環(別項)○皇國之言靈一册(文政八年刊、「語意考」(別項)を素稿として五十音に就いて記したもの)○宇那伎波奈理辨々一册(前田夏蔭の「宇奈伎波奈理辨」を反駁したもの)○立花乃億考一册(寫)○皇國之言靈標一册(寫)○倚古類語抄五册(寫)○假名類語抄一册(寫)○源注餘覓○萬葉常磐舍○興歌考○片歌新釋道二册(寫)○日本書紀寫誤考五册(寫)○二神三名考一卷(寫)○鎭魂二册(寫)○三元論三册(寫)○宮陵略記一册○讀令私記三册○蟋母との葉○河蝦考一册○松葉集一册○續松葉集一册○遊歷餘話二册○遊歷雜記五册。【參考】林國雄傳(四谷庵月良・帝國文學三ノ一二)（龜田）

國臣 くにおみ　歌人【姓】平野【本名】二郎、

通稱次郎、幼名巳之吉。【生歿】文政十年三月二十九日筑前早良郡地行下町に生れ、元治元年(二五二四)七月二十日、三十七歲にて入牢中殺さる。【閱歷・人物】福岡藩士平野吉三の次男。文武諸藝に通じ、國學に精しく、月廼舍・柏舍と號した。初め小金丸種一の養子となり、二男一女を擧げたが、王室の式微を慨して大に國事に盡さうとし、養家を去つて本姓に復した。安政五年、幕吏に追はれて僧月照と共に九州に走り、月照の死後、或は備中に隱れ、或は馬關に潜伏し、文久二年島津久光を擁して京都に事を擧げんとして福岡藩のために捕へられ、翌三年赦されて京都に入り、學習院御用掛となつたが、同年十月、但馬生野に義兵を擧げて失敗し、捕はれて京都六條の獄に繫がれた。獄中常に「神皇正統記」を誦じた。元治元年二月義擧の徒刑せられる時、國臣も殺された。彼は色黑く痘痕まばらに顴骨高く、白髮であつたため三十代で六十翁の如くに見えたと云ふ。沈着剛毅、人を畏服せしめた。【歌風】歌人としての國臣には、「平野國臣歌集」「囹圄消光」がある。後者は獄中紙捻をつくつて書きとめたものといふ。彼の歌の長所は、幕末の勤王歌人としての佐久良東雄・伴林光平・佐久間象山・久坂通武・野村望東尼等と共に、その表現上の技巧や洗練よりも、熱烈なる至情の溢れてゐる點にある。

わがむねのもゆるおもひにくらぶれば煙はうすし櫻島山
大丈夫のつくすまことの大方は百代の後や人に知られむ

の如きその熱情を示すものであらう。同時に彼が國のために妻子を捨てたことに對する人情のあふれた歌に、

わが心岩木と人やおもふらむ世の爲めすてしあたら妻子を
世の爲めにすてはすてしが年へても忘れぬものは吾子なりけり

の如きがある。
【參考】平野國臣宮部天民○近世和歌史 佐佐木信綱（久松）

國木田獨歩 くにきだどつぽ　詩人・小說家【本名】哲夫【號】最初は己が詩作を獨歩吟と稱し、從つて獨歩吟客と號しもした。【生歿】明治四年七月十五日下總國銚子港なる母の生家に生れ、明治四十一年六月二十三日、相模茅ヶ崎南湖院にて病歿す(肺結核)。享年三十八【墓所】東京青山【家系】父は舊播州龍野藩士國木田專八。母はまん子。異母兄二人あり。弟國木田收二、北斗と號す。

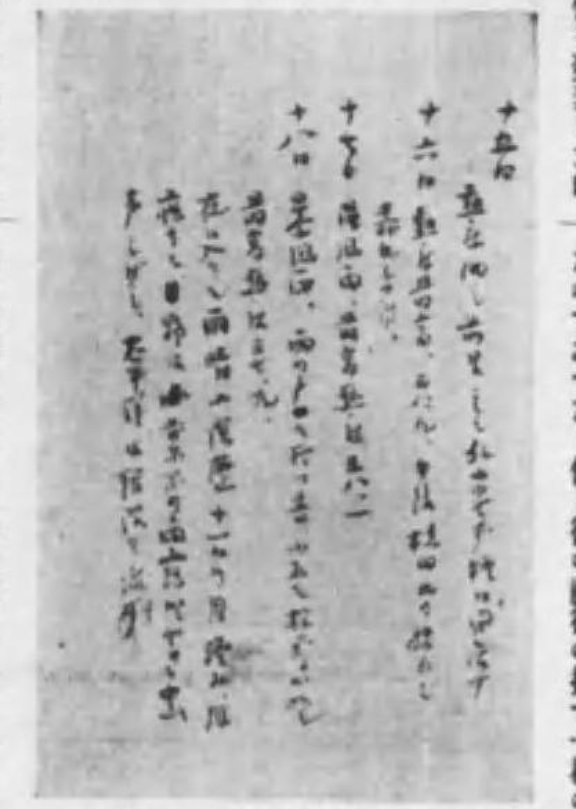
國木田獨歩

獨歩の觀戰報告「愛弟通信」は、この人に當てて書いた體裁にしてある。【閱歷】幼名は龜吉と稱し、母の生家に育ち、四歲の時(明治七年)初めて母に伴はれて上京。一家下谷徒士町脇阪侯の邸內に住す。六歲、父が職を周防岩國裁判所に奉ずる時、一家同地轉住し、翌年一家廣島に轉住、更に翌年岩國へ歸住す。八歲同地錦見小學校へ入學。十一歲(明治十四年)、一家山口に轉住し、今道小學校へ轉學す。同十八年山口中學校入學。十七歲(二十年)上京。東京專門學校英語專修科入學、後、英語政治科へ轉ず。十九歲、植村正久より洗禮を受け、熱心なるクリスト教徒となる。二十歲(二十三年)鳩山和夫が東京專門學校々長となるや、排斥運動をして容れられず、退學。一家居住せる山口縣熊毛郡麻鄉村に赴き、高青邱、ワーヅワァス、カアライル等を愛讀し耽樂す。翌年その隣村田布施に私塾を開き、吉田松陰の松下村塾に擬す。二十二歲(二十五年)遂に決心して再び上京、友人數名と青年文學會を起し、雜誌「青年文學」を發行す。その翌年二月金森通倫の自由新聞に入り、記者として月給參圓を支給さる。その間二ケ月。同年九月、德富蘇峰・矢野龍溪の推擧により豐後佐伯鶴谷館へ教頭として聘せられた。この佐伯の地は獨歩の諸作に種々の背景を供してゐる。當時は最も熱心なる基督教徒であつた。二十四歲(二十七年)、七月日清戰爭起る。九月弟及び塾生四人と上京、牛込南榎町に自炊生活、同月國民新聞社へ入社。十月觀戰記者として軍艦千代田に搭乘。翌年三月歸還、雜誌「國民之友」の編輯に從ふ。六月「愛弟通信」を國民新聞紙上に送つた。翌年三月佐々木信子と相識り戀愛に陷つた。九月北海道空知川岸邊に赴き、開拓地を求めんとしたが意に委かせず歸京。十一月信子を妻とし、相模逗子に居をトす。翌年四月信子失踪、失戀の苦悶甚しく、米國渡航を企てゝ成らず。秋、澁谷にト居し、初めて田山花袋・柳田國男と相識る。翌三十年(二十七歲)四月、花袋と日光照尊院に寄寓し、小說處女作「源をぢ」を書いた。「獨歩吟」を共同詩集「抒情詩」(別項)へ、翌年一月、第二「獨歩吟」を、同「山高水長」へ收錄。次いで、報知新聞へ入社。翌三十二年(二十九歲)治子と結婚。その翌年五月同社を退き、十二月民聲新聞社へ入社。翌三十四年三月十一日、第一文集「武藏野」出版。代議士たらん希望にて銚子地方に運動した。民聲社を退き、十二月單獨にて駿河臺西園寺公望侯邸に寄寓。翌三十五年二月鎌倉に友人等とト居。十二月、矢野龍溪經營の近事畫報社に入る。三十八年七月、小說集第一「獨歩集」出版、當時いまだ賣行き多からず。翌三十九年三月「運命」出版、近事畫報社衰運に向ふ。八月近事畫報社を承けて獨歩社を組織し、雜誌書籍の出版をなす。獨歩の評價漸く高まる。翌四十年四月獨歩社破產。五月「濤聲」出版。六月湯ケ原に、十一月常陸濤町に病を養ふ。四十一年(三十八歲)二月、茅ヶ崎南湖院へ入院。同所にて歿し六月二十九日葬儀を行ふ。八月第二「獨歩集」、十月「欺かざるの記」出版。

【著作】國木田獨歩全集八卷、改造社○獨歩叢書十卷、新潮社○武藏野(別項)○獨歩集○濤聲○第二獨歩集○欺かざるの記(別項)○渚(明治四十三年九月)○獨歩病牀錄(四十一年七月)○獨歩書簡(四十三年五月)○獨歩遺文(四十四年十月)○獨歩全集前後二卷(四十三年)○縮刷獨歩全集(大正九年十二月)(以上單行本)。代表的作品としては、○忘れえぬ人々(國民之友三十年二月)○源をぢ(別項)○歸去來(新小說三十四年五月)○牛肉と馬鈴薯(別項)○鎌倉夫人(太平洋三十五年十月)○酒中日記(別項)○運命論者(別項)○惡魔(文藝界)(別項)○女難(別項)○號外(別項)○泣き笑ひ(新古文林四十年三月)○窮死(文藝俱樂部四十年七月)○竹の木戶(中央公論四十一年一月)。○空知川の岸邊○正直者○富岡先生○春の鳥(以上年月未詳)等。

【業績】國木田獨歩の創作年代を、三期に分つて考ふるのが至當である。第一期は抒情時代とも言ふべく、「獨歩吟」の譚詩と、「忘れえぬ

人々」「源をぢ」「河霧」「武藏野」その他が作られた時代であり、「歸去來」をもつて、この期の終末と見るべきである。明治二十七年から三十四年までである。「忘れえぬ人々」が獨歩の初一歩を示すと同時に、彼の終生の傾向を明示してゐるのである。そしてこの時代に彼を　て文藝家（彼自身の語によれば詩人）たる明確な目醒めを覺えしめたる失戀事件もあつた。第二期は明治三十四年より三十七年頃まで、「牛肉と馬鈴薯」以下、最も獨歩らしき作品と何人でも思ふ實の入つた創作を發表した時代である。理想と現實、運命と個性、社會と實生活との對照の間に最も理智的な浪漫主義者らしき姿を見せてゐる。第三期は明治三十七年より四十一年の初夏までの晩年期である。書報社・獨歩社などの事業とその失敗、創作には一轉機を劃したと言はる。「泣き笑ひ」「號外」「窮死」「竹の木戸」など、第二期の作品に比して一層客觀的であり、社會的でもある。「號外」はこの期の作中第一の完作であり、作者最も得意のものである。「泣き笑ひ」は親子の情の發露と獨歩式簡潔描寫の尤なるもの、「窮死」は第一期の「源をぢ」を最もロマンティクの代表作とすれば、これはその終結を具する自然主義的な表出の代表と言へる。要するに獨歩は明治時代に於ける理智的浪漫派文藝の絕好の代表者であり、その自然美の愛好、純眞戀愛の渴仰、理想對現實、個人對社會、運命對個性といふ題材に對しても決してセンティメンタルではなく、默想し、



獨歩筆蹟（病床の日記）

反省し、熟慮する。舊來日本の文藝の影響は全く受けないで、最初はクリスト敎の信仰、やがてカアライル、エマソンなどの歴史觀、ワッズワァス、ツルゲーネフの情緒などの國外よりの刺戟を受けたのであるが、つまりは明治の十年代二十年代三十年代の急速な文化の進展に伴うて、初めて情熱に目覺めたる新人が、その理智性を賢明に働かして、ロマンティクの傾向を現實性に進展せしめ、個人生活を社會的觀點より眺めんとする點にまで到達したのであつた。併し彼の藝術の持つ一種の淸澄な悲調は、大きな時の波を背景として、その中に出沒する人事事象を捉へて表象的に浮ばしめようとする對照描法から來てゐるのであつて、やはり最も好き意味のロマンティクの傾向であると、文學史的には言ふべきである。そして共處に彼自身も言つてゐた如く、彼が眞の意味の詩人であつて散文家的文藝家でなく、寫生的小說家でない所以が存するのである。彼の詩としては「山林に自由存す」なども有名であつたが、作としては「秋の入日」が絕唱であり、小說としては「忘れえぬ人々」「牛肉と馬鈴薯」「號外」「窮死」なぞが獨歩を知る上には代表的な作品である。

【參考】國木田獨歩（新潮明治四一ノ九〇文豪國木田獨歩（趣味明治四一ノ八）　（吉江）

國言的音頭　「五大力」を見よ。

思邦歌　歌謠　【名稱】日本武尊が能褒野で國を思ひ給うた御歌（古事記）又は景行天皇十三年三月、天皇が日向國子湯縣に行幸して、丹裳小野で野中の大石に登り、京都の方を思ひ給うた御歌（日本書紀）であるから、かく名づけた。【出典】「古事記」景行の條思國歌二首、同片歌一首。「日本書紀」景行の卷、思邦歌三首（編者同歌）。【解說】雅樂寮で敎習した大歌の一であるが、「古事記」と「日本書紀」とでは、所傳を異にしてゐる。歌詞は殆ど同じで、ただ三首の順序を異にするのみである。左に「日本書紀」によつてその歌詞を揭げる。（括弧内は古事記所載の歌詞を質にしてゐる部分。）

はしきよ（けや）し　わぎ家の方ゆ（よ）　雲居立ち來も

倭は　國のまほらま（ろば）　たたなつく　青垣山こもれる　倭しうるはし

命の　まそ（た）けむ人は　疊薦　平群の山の　白（熊）橿が枝（葉）を　うずに挿せ　こ（そ）の子

「古事記」では、右の第一歌を第三歌として、「此歌者片歌也」とあるが、正しくは思國歌の片歌と稱すべきであらう。且つこの三歌の順序は、「本岐歌之片歌」（別項）を參照して考へるに、「古事記」の順序の方が正しいと思はれる。二首の思國歌は大體に於て六句形式で、佛足石歌體に近い。これに三句の片歌形式の歌を附して、三首一聯より成つてゐる。（藤田）

國太夫節　「豐後節」を見よ。

國神 くにつかみ　神話【名稱】國津神・地祇とも書く。【解說】天神に對する語辭で、高天原系でない神を總稱する。詳しく言へば、古くこの國土に生成もしくは存在した神である。併し時としては、天神の裔で天孫降臨以前に土着した神をも含めることがある。矢野玄道が、國神に四種ある、天之神に對するものはその一、先づこの地を宰するものはその二、產土神はその三、海中之神はその四となしたのは、決して適切ではない。天孫系民族が主位に立つ國家組織が成立する以前に、多くの土族が本土・九州等に棲息してゐた。それ等の中には天孫系民族と同種のものもあり異種のものもあつたが、何れも自己の宗敎と神話とを有した形跡が歷然としてゐる。そしてそれ等の土族の神は、それが自然を發生原體とするものたると、文化的價値經驗の神格化たると、はた社會集團の一般成員の中から昇華せられた人間たるとを問はず、天孫系民族の興隆と共に完成した神道神話系體に於て、悉く國神と呼ばれた。（松村）

國文世々の跡 くにつよよみのあと　文章史　三冊【著者】伴蒿蹊【刊行】安永六年孟夏。題簽に「再考」とあるから、それ以前に成つたのであらう。【解說】日本の文章の變遷を文例を擧げて說いたもので、全體の組織は題言十條、古體（第一冊）、中古體、近體（第二冊、但、近體例の一部第三冊に亙る）、假名書牘之條、譯文條（第三冊）に分れて居る。題言十條には、弟子との問答に擬して著者の文章觀を述べて居るが、例へば歌の方が重んぜられて、文章の事は比較的輕んぜられたが、文章も必要であるとして、歌も詞書によつてその內容の明かになる場合が多いとして居る如き、假名文と眞名文との區別をして居る如き、假名文の女性に書かれた理由、歌と文との相違を說いて居る如き、著者の獨特なる見解が見られる。次に著者は日本の文章を古體・中古體・近體として居るが、古體の例として「日本紀」「祝詞」「宣命」等の文を擧げ、中古體として「大井川行幸和歌序」「枕草子」等の文を擧げてある。近體は大體鎌倉以後近世に至る文章を指して居るが、其後の抄物も近體であるとあるから、時代的にのみ見ず、和漢混淆文的性質の文體を指してゐるやうである。向阿上人の「歸命本願抄」、兼良の「藤川記」、季吟の「幡山十景和歌序」、契沖の「古今餘材抄序」等を擧げ、終りに書牘の例と譯文の例とを擧げてその性質を說明してある。【價値】本書は日本文章史の先驅として注意すべきものである。和歌に於ては俊成の「古來風體抄」を始め、富士谷成章の「六運辨」の如き史的變遷を說いたものが多少あるが、文章の變遷を說いたものは尠ない點から言つて、本書の組織がなほ不完全で、文例を主としたやうなものでありながら注意すべき價値がある。（久松）

國引神話 くにびきしんわ　神話【神話梗概】八束水臣津野命が、「出雲國は幅の狹い稚國である。初國造りに小さく造つたのである。大きくしよう。」と云つて、志羅紀之三埼・北門佐岐之國・北門良渡乃國・高志之都々乃三埼に見ゆる國に、大きな綱をかけて、大勢で引き寄せて、それを出雲國に結びつけたといふ神話が「出雲風土記」に出てゐる。【解說】この物語は、一種の部分的な國造りの說話である。これが諾冊二神の國造り（若しくは國生み）と如何なる關係があるかは、風土記の「初國小所作」の解釋によつて異なつて來る。栗田寬博士は「標注古風土記」で、この言辭を「諾冊二神國作リノ時小サク造リ玉ヘル由也。」と解してゐる。さうすれば、國引は諾冊二神の國造り事業の繼承、もしくは補遺となるわけであるが、然し「出雲風土記」が、その全體に亙つて諾冊二神に殆ど觸れてゐないこと、八束水臣津野命が「古事記」に擧げた大國主神の祖淤美豆奴神と同一の神であるらしく、從つて出雲系の神格であること、「出雲風土記」の諸所にこの神の名や行動が見えて、出雲文化の促進に大きな功績のあつた人物と信ぜられてゐたらしいこと（この點は、本居宣長も「古事記傳」で指摘してゐる）、この說話の書きざまが、本居宣長が云つたやうに、「いともいとも上つ代の雅言」であること、出雲系民族は高天原系民族のそれから獨立した國土生成の神話群を有してゐたらしい形跡が存することなどから推して、諾冊二神の國造り神話とは別にして考ふべきものであらうと思ふ。國引事業に土地の一部を寄與した國土については諸說があるが、その中に朝鮮が含まれてゐる事は拒み難い事實である。これは素戔嗚尊の渡韓說話、五十猛神の植樹說話等と併せ考へて、出雲と朝鮮との交通的政治的關係を示唆するものとして注目すべきであらう。

【參考】標注古風土記　栗田寬○出雲風土記考證　後藤藏四郎　（松村）

國茂　「仲文」を見よ。

國基　歌人【姓】津守、住吉はもと津にて津を守るの意といふ。【生歿】治安三年に生れ、康和四年（一一〇二）七月歿す。享年八十。【閱歷】忠讓の子、康平三年住吉神社の神主に補し、延久元年從五位下に叙した。經信・範永・良暹・賀茂成助等の歌人と交りがあり、嘉保二年經信が筑紫に下る時、これを送つた歌が「詞花集」卷六に見える。【人物】「袋草紙」三に依れば、負けず嫌ひで人が秀歌を詠んだときくと、寢食を忘れて秀歌を案じ、人の歌に對しては僻みをもつて故ら非難する癖があつたやうに見える。「後拾遺集」が撰進せられた時には、撰者通俊に小鯵を賄して歌を入れて貰つたといふので、同集が「小鯵集」と異名をつけられたと言はれてゐる。【作品】家集に「津守國基集」（群書類從卷二五三所載本は短歌一五四首を收め、四季・戀・雜の順に配列されてゐる）があり、勅撰集に入つた歌は後拾遺三首、金葉三、詞花二、以下凡そ十二首、合計凡そ二十首、私撰集に入るものは後葉集一首、續詞花集七首である。その歌には唯美的な所がある。「薄墨にかく玉章と見ゆるかな霞める空に歸る雁がね」（後拾遺集卷一）が有名であるのも、その作風の特殊な點を考へ得られよう。

【參考】住吉社神主幷一族系圖（續群書類從一八一）○作者部類○袋草紙　（西下）

國讓神話 くにゆづりしんわ　神話【名義】出雲系の大國主命が、その經營してゐた國土を高天原系の神に讓り渡す始末を說く神話を云ふ。【神話梗概】高御產巢日神・天照大御神の命によつて、葦原中國を平治すべく、初めに天菩日比神、次に天若日子が降つて行つたが、何れも大國主命に媚從して復命しない。最後に天尾羽張神の子建御雷神を遣はされる。建御雷神は出雲の伊那佐の小濱に降り、大國主命に國土を讓り渡すべき由を交渉した。命とその一子八重事代主神はこれに應じたが、他の一子建御名方神は千引石を擎げ來つて、建御雷神に手の摑み比べを挑んだ。建御雷神はおのが手を摑まれると、これを立氷や劔に化せしめて、建御名方神を驚かした後、その手を摑つて若葦の如く摑み拉いたので、建御名方神は科野國洲羽海に逃げて恭順を誓つた。かくて葦原中國は、天神の御子のものになつた（古事記）。【解說】この神話は、高天原系民族と出雲系民族との葛藤といふ文化事實の反映として大切である。建御雷神は劔の威力の神格化とするのが通說であるが、また雷電の人格化となす者があり（松岡靜雄「日本神話の研究」）、雄偉の武神となす者がある（日本古語大辭典）。建御名方神は、「日本書紀」「古語拾遺」に見えず、「古事記」にも大國主命の子を擧げた段に見えず、「舊事紀」に高志の沼河姬の子とあるだけである。かくて「みなかた」を「むなかた」（宗像）の轉呼として、諏訪族の祖先であらうとなす者がある（日本古語大辭典）。兩神が手の摑み比べをしたのは、古代に於ける係爭問題解決法であらう。低い文化期の民衆は、部族間の爭を決するために、双方から代表者を出して肉體的な競爭を行ふが常である。波斯の史詩シャーナメー（Shah Nameh）の中の一傳說にも、ルステム（Rustem）が波斯王の命を受けて、マザンデラン王に國土の讓與を勸告に行つた時、敵方の勇士と手の摑み比べをなして秋の木の葉の如く摑み拉いたので、係爭問題は直ちに解決し、マザンデラン王は波斯王に國土を讓つたとある。建御名方神が諏訪湖まで逃げて、こゝに留まる事を誓つたといふのは、諏訪地方が古く皇祖側に對抗する一勢力をなし、而して同神がその勢力の一代表者とされてゐたからであらう。（松村）

愚人贅漢居積借金　洒落本　一冊【作者】蓬萊山人歸橋【名稱】「五人男五雁金」のもぢり、即ち「男作五雁金」

女の周囲を飾られた数通児の縁丈。主人公がその夢を今度にして、また自分の女房に受けられるのも今度にして、また自分の女房に受けられるのも今度にして、

れたれども数つた数通に成る人々の話を聴り込みで、実名の女を探しあ作家に、巧みな作品構想のもので、ふとした人情味を表現に、

者が座からうらうらと女との回想の話の川下と、藤尾の貴生活の手面が彼はれる。明治家が、

実はスカルの小説【作者】宇野浩二【発表】大正七年一月【内容】一人の女に関する男の話、男と女の話、男と男の話、女と女の話、

【内容】一連の中心（男）と共に作者の代表作の一つである。作者自身の経験から四回に

取材し、女難に悩む人間の心情を、一人称で軽妙に描き出した自叙的作品で、前後篇構成を通じ、私と呼ばれている男の家

人公に、彼と彼の情人で私のもと妻とも呼ばれようとして、婦人公園の手を離れたりして行きづまり、彼が主人公との間の奇妙な関係から三度の縁の話に出して、自身は妻の下宿生活に戻るという三度の縁の話をも語

まり、彼を主人公と出手の三人が変る外に、家に一人で居られない哀れな男が、昭和の現代日本文学の大家上司小剣（宇野浩二）を主人公に、彼と彼の情人で私のもと妻とも呼ばれようとして、婦人公園の手を離れたりして行きづまり、彼が主人公との間の奇妙な関係から三度の縁の話に出して、自身は妻の下宿生活に戻るという三度の縁の話をも語

【構想】各々貴生の人物の妻生活の手面が彼はれる。明治家が、

【構成】前後篇各々三章、同書及版第四巻所収。

【内容】第一の女と云はれる藤尾の妻生活

十月【発表】明治四十年六月二十三日より同年十月二十九日まで『東京朝日新聞』及び『大阪朝日新聞』に連載。【刊行】翌年一月春陽堂。

【参考】作者は明治四十年、一切の創作を断つて朝日新聞に入つた。その同、約三箇月間京都に滞在、数篇の作品を発表したが、その一部をなつて成る。

作品の本質は作者「前の創造に成るものでなく、

作品の上のたり、逼出をされたりした。それが素材に

【解説】作家の妻生活の手面が彼はれる。

【発表】明治四十年六月十七日記之事」とあるが、信に誰い。【参考】古泉千樫『青牛集』所収。【内容】

古泉千樫『青牛集』所収。【内容】

【参考】関東名物の一つ。

感秘抄（かんぴしょう）　歌論書　一巻一冊　【成立】【作者】

書簡形式で、この歌人男、今日は参しく書簡人

【構想】各々貴生の人物の妻生活で、どこまでがお事実で、どこまでが虚構であるか不明であるが、作者自身の事件は書いて居ないので、仲間しいので、

【解説】

喜切歌（きぎりうた）　和歌【解説】三十一音の短歌形式に従う歌謡の一つとされるものである。【刊行】

【参考】関東名物の一つ。

愚秘抄（ぐひしょう）　歌論書　一巻一冊　【成立】【作者】

書簡形式で、この歌人男、今日は参しく書簡人

【構想】各々貴生の人物の妻生活で、どこまでがお事実で、どこまでが虚構であるか不明であるが、作者自身の事件は書いて居ないので、仲間しいので、

【解説】

それから東京に歸つて「虞美人草」を執筆したのであつた。（野上）

首引（くびひき）　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎の二代のうちの作と傳へられる。【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）【題材】「保元物語」の「爲朝鬼島渡並最期事」に見えて居る鬼ケ島退治の口碑を基として作つたものであらう。「看聞御記」應永廿六年七月十五日の記事にも、「爲朝鬼仕風情」の風流のあつた事が見られるし、「桂川地藏記」の風流にも、「或有ㇾ役ㇾ鬼入二而筑紫上洛之勇夫一」と見えて居るから、鬼ケ島退治の傳説は隨分有名だつたものらしい。但、鬼の娘と力競べするといふのは創作であらう。

【梗概】鎭西八郎爲朝が筑紫より上洛の途次、夜更けて播磨の印南野を通りかゝる。すると鬼が出て、娘に食はせてしまはうと言つて娘に食へと命ずる。娘が食はうとすると爲朝は色々防ぎ、結局鬼神に横道なしと云ふから、何か勝負して負けたら食はれようと言ふ。鬼も承知して娘と腕押しをさせたり首引をさせたりするが、爲朝が負けないので、多勢の鬼が一度に首引に參加するのを爲朝は轉倒させて入る。

【解説】人數物の鬼物である。首引の話は、後世の文學にも見出されるけれど、狂言の首引がその源泉であるとするのは誣言ではあるまい。古本に鬼の娘が「乙姫」と呼ばれて居るものがあるが、さうなれば又、爲朝館宮に到ると云ふ例の俗説にも關係がある事になる。この俗説に就ては「廣益俗説辨」卷十一に、「鎭西八郎爲朝館宮にゆく説」として考證が見えて居る。曲中爲朝が鬼に賴む所は、下世話に云ふ、鬼も頼めば人食はぬを當て込んだ物であらうか。なほ印南野には野中の淸水がある（袖中抄）といふ事になつてゐるから、能狂言「淸水」に、「野中の淸水に鬼が出る」とある言葉も思ひ合はされて面白い。「淸水」は、水汲にやられた太郎冠者が、野中の淸水に鬼が出たといつて主を僞り、確かめに行く主を鬼の面を冠つて嚇すうちに露顯するといふ筋である。共に鬼物であるが、後者には印南野に關係する言葉は見えて居ない。（篠田）

首振り芝居（くびふりしばゐ）　演劇【異稱】チンコ芝居、身振り狂言、肉あやつり。【解説】操淨瑠璃の人形の代りに子供役者をつかひ、役者は淨瑠璃につれて白なしの身振のみを演ずる子供芝居（別項）の一種。【沿革】操淨瑠璃の一變態である竹田機關（別項）に胚胎するもので、我が近世演劇史上に於ける歌舞伎と操芝居との極めて錯綜した競爭と妥協の一局面を示すものである。その由來に就いては、「攝陽奇觀」天明八年の條に、「五月、チンコ首振り狂言初む。首ふり狂言といふ事、京都にては先年より興行致す事にて、是を肉あやつりともいへり。今年竹本政太夫思ひ立て歌舞伎役者の子供十歳前後を集め、堀江此太夫芝居にて興行なし大當り、同七月道頓堀東の芝居へ引越す。夫より追々首ふり芝居繁昌にて座摩稻荷の宮地にて打續き興行し、大阪にてはチンコ芝居といふ。云々」とて當時出版された「役者糸操子」と稱する評判記を掲げて居るが、その子供役者連名中の加賀屋福之助は後年の三代中村歌右衞門である。その後、首振り狂言は子供芝居の流行と共に小芝居或は寄席藝として盛に行はれ、子供役者の一種の修行課程となつてゐたが、明治中頃以降は殆どその跡を絶つに至つた。昭和四年一月東京本鄕座に於ける中村吉右衞門の指導する梨苑座の稽古芝居に珍しくこれを復活した。（飯塚）

句佛（くぶつ）　俳人【姓名】大谷光演、幼名光養麿【別號】愚峯【法名】釋彰如【出生】明治八年二月二十七日【閲歴】東本願寺第二十二世伯爵現如上人の第二子で、邸内で普通教育を經へ、派内の學者に就て宗乘餘乘を研學。明治十七年九月、十歳で得度、三十三年五月、眞宗大谷派副管長となり、四十一年十月、第二十三世の法燈を繼いで管長となつた。昭和二年、管長を辭して退隱し、四年、宗則に觸れて法籍を除かれた。書は杉山三郊に、畫は幸野楳嶺・竹内栖鳳に學び、俳句は京都に在るの日夙く指を染め、明治三十一年、淺草別院と滯在中、「ホトトギス」によつて子規の風格を偲び、延いて蕪村を愛好するの餘り、その句を手寫して註釋を施したほどであつたといふ。後、虚子に次いで碧梧桐に選評を乞うたが、漸く新傾向を喜ばず、大正三年八月、「我は我」と題して自作句を「懸葵」（懸葵參照）に發表して、その欲するが儘に步みを進めて以來、繼續今日に至つてゐる。「懸葵」を主宰したのはその第二巻からで、それまでを第一期とすれば、それ以後四十二年頃までを第二期とすべく、四十三年頃から大正二年までを第三期とすべきで、「我は我」以後を句佛上人の本然の姿の見られる時期と言つてよからう。「涼しさや塵なき風の茂り吹く」「勿體なや祖師は紙衣の九十年」などがその代表作で、高雅と宗教味とをその特色とすべく、浪化上人、後ありといふべきであらう。（白田）

窪田空穗（くぼたうつぼ）　歌人【本名】通治【出生】明治十年六月、長野縣東筑摩郡和田村に生る。【閲歴】長野縣松本中學校を卒へ、東京專門學校（現、早稻田大學）文學部に入り、英語及び國漢文を修め、卒業後、新聞記者・雜誌記者の職を經て、現在早稻田大學文學部教授。明治三十二年（二十三歳）初めて和歌に志し、新詩社（別項）に入つて、「明星」（別項）に作品を發表したが、幾ばくもなく去つて、自己の往くべき道を拓き、今日に至る。彼は一方また年少の子弟を多く養成した。電報新聞記者時代に歌欄の選者であつた關係から、彼を中心として集まつた人々が、同三十九年十月、十月會を結んだ。それが雜誌「國民文學」（別項）をつくる基礎となつた。

【著作】（歌集）まひる野（別項）〇明暗（水野葉舟と合著）〇濁れる川〇空穗歌集（「まひる野」と「明暗」にその後の新作を加へたもの）〇鳥聲集〇泉のほとり〇土を眺めて〇朴の葉〇青水沫〇鏡葉〇槻の木（「泉のほとり」から「青水沫」までの歌集より自選したもの）〇青朽葉〇その他、文集、小說集、古典の註釋書、作歌入門の書等。

【作風】彼の歌集で、時代的に最も注目せられるものは、第一歌集「まひる野」であらう。當時の明星派の歌風とは本質的に異つた一種淸婉の趣と現實的な傾向とを有してゐた。而してこの現實味は、年と共に濃厚になり、大正四年「濁れる川」を刊行する頃には、彼の歌風は質實性が增して平明になつた。調子なども一種の萬葉調に近いものになりつゝあつた。これは一面では、既に歌壇に萬葉調の興る機運が充ちて居り、彼もそれらと交流した所に自然かうした變化が生じたのであらう。「濁れる川」は、思想的にもかなり飛躍したあとを殘してゐるが、その飛躍の次に、形態的にも

非常に均齊を保つた「鳥聲集」が生れたことは意義の深いことである。彼の作品の中で、最もその特長を示したものは、大正七年刊行の「土を眺めて」と、同十五年刊行の「鏡葉」であらう。前者はその妻を失つた前後の作品を集めたもので、作の素材は多く妻の死から取られて居り、後者は漸く年齢が齎す思想上の落着きが、老境に入つたことを示して、その作品を甚だ靜觀的なものにしてゐる。なほ彼の歌風は「土を眺めて」に來つて、確然と獨自の境を開くに至つたのであるが、それと共に、長歌に新生命を吹き込んで、短歌と全く異なつた味ひを齎すことを實證したことも、この集の特色として注目に値ひする。（松村）

久保田俊彥（くぼたとしひこ）　「島木赤彥」を見よ。

久保田彥作（くぼたひこさく）　戲作者・狂言作者【通稱】竹柴幸次、又村岡幸次【別號】村柑子【生歿】弘化三年に生れ、明治三十一年一月三日歿す、享年五十三。【閲歴】假名垣魯文の門下ではないが、假名讀新聞の記者であつた。彼は幕臣の家に養はれ、相當の教育を受けたが、放蕩の結果、五代目菊五郎が市村家橘と言つた頃、その附人作者となつて村柑子と號し、後、村岡幸次を繼ぎ、維新後、一時斯界を去り、明治六年頃、東京府學區取締を拜命し、府下小學校の建設に携はつたこともある。明治八年頃から默阿彌の門下となり、同十二年「歌舞伎新報」が生れると同時にその主筆となつた。默阿彌四天王の一人と呼ばれた程ではあるが、中村鶴治郎のために「箱根產屋皮玉章」を書いたばかりであつた。達筆ではあつたが、脚色に所謂山を造るに拙であつたと傳へられる。後、歌舞伎座に入つたが、九代目團十郎や福地櫻痴などと合はなかつたので、不遇のうちに世を去つた。【著作】戲作として今日殘つてゐるものは、左の數種に過ぎない。

鳥追阿松海上新話（別項）	九冊	明治十一年
菊種延命袋	十八冊	同　十二年
讀賣江の島新話	九冊	同　十三年
荒磯割烹鯛膾	十五冊	同　十四年

以上の内「鳥追阿松」は、彼の處女作として又毒婦物の最初に現はれた新聞續物の、單行本となつて刊行された嚆矢として、注意すべき作物の一つである。他の三書も當時の戲作者に比較して相當見るべき價値がある。何れも芝居の筋書を延長したやうなものばかりで、扱はれた事件も芝居に關係したものばかりを選んで居る。殊に「荒磯割烹」の如きは八代目市川團十郎の生立から最後の自刄までを綴つた一代記とも見るべきものである。作者當年三十六歳の血氣旺盛時の作で、何故かこれ以來戲作の筆を絶つたらしく、殆ど見當らない。

【參考】鳥追阿松海上新話解題（明治文學名著全集（第十卷））〇續々歌舞伎年代記 〇寫實主義以前の小說 石川巖（日本文學講座）　（石川〔巖〕）

久保田万太郎（くぼたまんたらう）　劇作家【俳號】暮雨。後、傘雨と改む。【出生】明治二十二年十一月七日、東京淺草田原町三丁目に生る。【閲歴】淺草小學校高等科に進んでから、傍ら千束町や今戸の私塾で補習教育を受けた。同三十六年東京府立第三中學に入學した頃から文學に親しみ、頻りに小說を耽讀して落第した爲め、慶應義塾の普通部に轉學、同四十二年春卒業して、同大學の文科豫科に進んだ。その翌年、文科に大刷新が行はれ、森鷗外・上田敏を顧問に、永井荷風・小山内薰・小宮豐隆等を教授に迎へ、同時に機關雜誌「三田文學」が發刊された。彼はこの新機運に直面して、作家として立たうとする志向き、始めて創作の筆を執つた。同四十四年六月「三田文學」に載つた小說の處女作「朝顏」は、小宮豐隆に認められたばかりでなく、その批評が文壇の論爭を釀したので、若き作者の名が一時に世評に上つた時、雜誌「太陽」の懸賞募集に應じた戲曲「プロロオグ」が、選者小山内薰の採るところとなつて、當選發表された（同年七月）。かくの如く殆ど時を同じくして、新進戲曲家としても注目され、以後次々と小說戲曲を發表して、大正三年卒業するまでには、既に二冊の著書を持ち、拔くべからざる地步を文壇に占めつゝ作家生活に入り、世に「淺草の詩人」と云はれるやうに同十二年の大震災まではずつと淺草に住んで、主として淺草の生活を描いて來た。なほ實際舞臺に關する造詣深く、屢々演出のことにたづさはり、自作上演の場合は、殆ど皆、自らこれに當つた。喜多村綠郎と年來の交誼がある故に、延いて新派の俳優が門を叩いて教を乞ふ者も多く、大正八年、慶應義塾大學囑託となり、昭和二年、東京中央放送局の囑託となつた。【著作】多くの戲曲のうち、「暮れがた」「雪」「雨空」「心ごゝろ」「短夜」「大寺學校」等は、すでに上演されたが、他に代表作として擧ぐべきものに「四月盡」「不幸」「あぶらでり」「舊友」「辰巳巷談」「夜鶯」及びラヂオ・ドラマとして書かれた「浮世床小景」等がある。小說では「朝顏」「ふゆぞら」「末枯」「九月頃」「寂しければ」「春泥」等を數ふべきであらう。主なる著作集は「淺草」「雪」「東京夜話」「わかもの」（以上短篇集）、「万太郎戲曲集」「心ごゝろ」「夜鶯」（以上戲曲集）、長篇は「春泥」「寂しければ」等あり。隨筆集・童話劇集などの著もある。

【作風】芥川龍之介は、彼を「歎かひ」の詩人と言ひ、水上瀧太郎氏は、彼の本質は「情緒的寫實主義」の作家であると言つた。彼は處女作以來、常にこの境地をわが世界として、只管に精進をつゞけて、ユニイクな藝術を作つて來たのである。地方色ある下町（したまち）の生活描寫の巧みなことは定評があるが、特に彼の戲曲に於ける情緒的寫實主義手法に就いて擧ぐべきものは、その會話の妙と「間」の使驅とであらう。市井人の言葉の陰影、會話のイキを舞臺に生かして、しかも彼ほど藝術的成功を收めた人は少い。所謂芝居らしい芝居を嫌ふ戲曲家でありながら、よく魅力ある舞臺を現存せしめ得るは、一にこれに依るものである。更に彼はまた「間」を以て舞臺の情緒を深め、餘韻ある暗示の技巧として、これに生命を與へることに於て第一人者である。

【參考】「貝殼追放」水上瀧太郎　（水木）

久保天隨（くぼてんずゐ）　詩人・漢學者【本名】得二【別號】兜城【出生】明治八年七月、東京市下谷區徒士町和泉橋畔に生れた。【家系】本姓は藤科氏。世々兵法を以て信州高遠藩主内藤氏に仕へ、父讓次は藩主の命に依り、その生母久保氏の姓を稱した。【閲歴】明治三十二年帝國大學漢文科を卒業し、「帝國文學」その他の文學雜誌に、盛んに評論・隨筆の筆を揮ひ、嶺雲・鯉洋・臨風・羽衣・桂月等の赤門出の青年文士等と共に、紀行・美文・支那人物傳等の著述或は短文によつて、當時の文藝界の一角を占めた。又、漢籍の評釋その他の著述をもなした。大正四五年の頃、遞信省・大藏記錄編纂委員會・陸軍經理學校等の囑託となり、

九年九月宮内省圖書寮編修官となる。昭和二年十一月文學博士を授けられ、四年三月臺北帝國大學教授に任ぜられ、現にその職に在る。昭和二年四月、佐藤六石の死するに及び、その遺嘱により隨鷗吟社主事となつた。【批評】文章は勁健で詞藻に豐かに、「帝國文學」に出た「發椿評」批評の如き、特に注目された。漢詩に於ては初め師承なく、後、森川竹磎と相識つて師友となり、野口寧齋・北條鷗所に從つて益を乞うた。その詩は近清を宗とし、古詩は吳梅村を規模する。諸體兼ね長じてゐる。【著作】明治三十二年、淺野馮虛・戸澤姑射との合著、美文「白露集」、紀行・隨章の集「山水美論」等あり、漢文漢詩の評釋に關する著書が最も多く、中に一家の見を立てたものがある。詩集として、「秋碧吟廬詩鈔」「謝科游草」「國内游草」「續國内游草」「槎城游草」「滾濤游草」「茶前詩稿」等。（佐久）

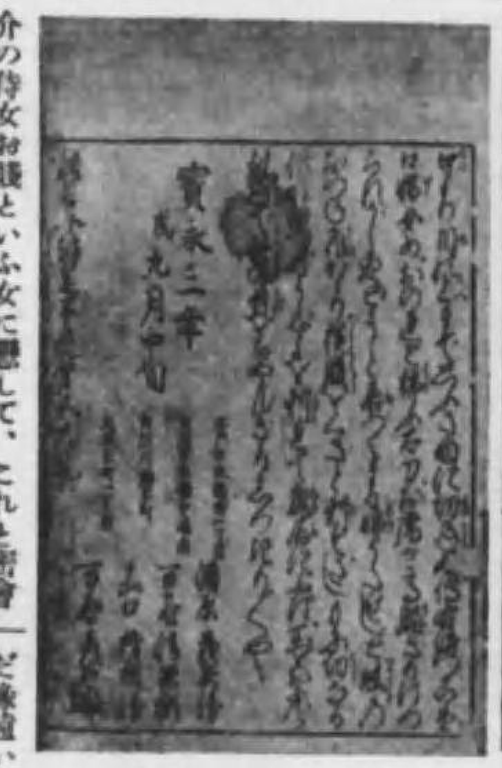
久保之取蛇尾（くぼのすさび）　隨筆　初編三卷【著者】入江昌喜【名稱】一名「眞珠の船」【刊行】天明四年【解説】古歌の用語、雅俗の世話、近代語の古調、物語・草紙等所出の和歌の評釋、その他歌話類を集めたもの。上卷に玄旨の語以下六十四條、中卷に蟬丸以下五十五條、下卷に定家卿語以下二十三條を收め、下卷後半は「徒然草」中の詞に係る問題である。古語・古典研究の一資料にならう。無年紀著者の自序がある。本書奧付に「次卷近刻」とあるけれど、上刊は初編三卷のみと思はれる。【著者小傳】入江昌喜は大阪の賈人で、通稱橫釜屋半大郎（又長助）、白澤老人・幽遠蝸・狡猊子・幽子齋等の號があつた。曾て慨するところあり國學を以て身を立てようとして果さず、家業に勵むこと二十餘年、その後產を義子に讓つて、高津の里に退棲し、幽遠蝸と稱して學事に勤めた。その名が次第に著はるゝや、寛政七年妙法院親王の命により「萬葉類葉抄」を著して旨に協ひ、次いで又「萬葉集師說」百餘卷を著した。これ等の事業に就ては僧契沖の著書に負ふところが多い。寛政十二年八月十二日歿、享年七十八。別に「異名分類抄」「青陽唱和」「幽遠隨筆」等の著があり、「分類抄」が最もあらはれてゐる。（和田）

九品和歌（くほんわか）　「和歌九品」を見よ。

熊谷陣屋（くまがいじんや）　「一谷嫩軍記」を見よ。

熊谷女編笠（くまがやをんなあみがさ）　浮世草子　五冊【作者】錦文流【刊行】寶永三年八月【諸本】珍本全集上卷（帝國文庫）所收【題材】序に據れば、寶永三年六月七日、京下立賣堀河東へ入ル民屋に於て、婦女二人姉の讐を討ち取つた事實を材としたものである事が知られる。この事實は、「月堂見聞集」寶永三年六月七日の條に記してある。敵討としても、女二人の敵討は稀有であつたので、世間の耳目を聳動したに相違ない。現に本書より一ケ月前の板に、森本東烏の「京縫鎖帷子」といふ四冊本があつて、同材を取扱つてゐる。僅に出板の一ケ月の差から見れば、二書の間に直接の影響はなかつた筈である。翌年二月十五日を初日に、竹本座に興行した近松門左衛門の「堀川波鼓」も同じ事件を脚色したものであるが、この淨瑠璃には二書の影響はあつたと思はれる。少くとも近松はこれらを藥籠中のものとしたに相違ない。ともかくも、以上三作の間に存する事件の異同のどれだけが、三作家の想像に屬するかは知り難い。【梗概】奈良の町人、角屋の與三左衛門の子與三次は、相場に失敗して手代と共に大阪に出で、新町の遊女狂ひをする（以上一・二の卷）。與三次は放蕩のために、父に追はれて江戸に下つたが、故郷戀ひしくなつて歸つて見ると、兩親は早この世の人ではなかつた。こゝに於て鼓の師匠の世話で中國方の大守に仕へて、宮城傳右衛門と稱し、藩中の並川源太左衛門の長女おたねを娶つた。偶々同藩の千葉蜂之介の侍女お賤といふ女に戀して、これと密會を續けてゐた（以上三の卷）。傳右衛門はお賤を家に入れようとして、おたねを冷遇し始めた。おたねは貞操節義を守つて、傳右衛門に乘ずべき機會を與へなかつたが、餘りの心勞に病氣となつた。見舞に來た妹おとら（熊谷直右衛門の妻）に、密かに夫の心變りと暗殺の意のある事を告げ、若し自分に萬一の事があつて、死狀に異しむべきことがあらば、仇を報じてくれと頼んだ。偶々こゝに袴屋の娘お銀といふもの、傳右衛門が鼓の門弟長十郎と契つてゐたが、お銀の危急を救うた百兩の金の事から、長十郎は出奔してしまつた。傳右衛門はこれを利用して、おたね長十郎姦通と、おたねの父に密告した。物堅い父はこれを信じ、怒つておたねを殺してしまつた。傳右衛門は京に上つて、嘗て助けたことのある者の手に隱れてゐた（以上四の卷）。長十郎は百兩の金を儲け貯へて、江戸から歸つた。それでおたね長十郎姦通の噂は虛傳であつたことが分明し、妹おとら・おつね（妻子並川三之丞許嫁）の二人、夫の後見を得て敵討を思ひ立ち、寶永三年六月七日拂曉、傳右衛門お賤が京都の隱家に踏み込んで、これを討つた（以上五の卷）。

「熊谷女編笠」表紙


同　奥附

【構想】その結末から見れば、敵討說話であるが、敵討のことは最後の卷のみに見え、四の卷はその直接の原因、三の卷はその遠因、一・二の卷に至つては、甚だ緣遠い敵傳右衛門の前半生の遊情生活を書いてある。それで全篇を敵討說話として見れば、三の卷以下で十分である。一・二の卷は敵討の遠因が好色事件に在るので、更に溯つて傳右衛門の前半生の好色的生活と性情を穿つたのだと見れば見られるが、實は作者自身の

興味と、時代の好尚に導かれて、自然に好色本的性質を濃厚にしたものであるに相違ない。「京縫鎖帷子」と「堀川波鼓」の說話は、共に妻敵討事件である。原事實もそれであつたと思はれるが、文流の本書は、これを普通の敵討としてゐる。これに關しては赤松得知（新小說一〇ノ一二）及び藤岡作太郎博士（東圃遺稿）にも說があるが、その頃から社會の妻敵討に對する思想或は感情が變遷して、必ずしも妻敵討を一般の敵討同樣に、武士道の美事としなくなつてゐるので、妻敵討を避けたものであらうといふのであるが、これは首肯される說である。（藤村）

熊坂（くまさか）　謠　「判官物の謠曲」を見よ。

熊坂今物語（くまさかいまものがたり）　浮世草子　五冊【作者】西澤一風【刊行】享保十四年、京寺町菊屋板【題材】自序の中に「我つれ〳〵の餘り、片岡仁左衛門存命の折から、あまた有狂言の中に、熊谷今物語といひし三番續、今思へば近代のあたり狂言、拙者覺自慢をさいはい、ざつと書とめ置ぬ」とある。【梗概】熊坂三郎のら國、同四郎高なしといふ長崎丸山の遊廓に諸國の商人を誘引し、喧嘩の尻押しなどする良からぬ兄弟がある。三郎は百兩ばかりの金に窮し、四郎と謀つて、大寄せの一座に出で、家傳の祕術を以て、座敷を海となし、その騷ぎに京七なるものの金五十兩を隱し、併せて一座の面々より四兩餘づつ出させて、水を治めた。かくて二百兩の金を得て、妓花鳥を身請けせんとしたが、身の代金五百兩といふに手詰り、梅ケ崎の天神に祈ると、故人定家（善女）の靈現れて、丸山の廓の衰微するのは、唐人客の跋扈のためである。今生前貯へ置いた舶來の織物の多くを與へるから、それを多くの客に與へて、丸山を繁昌させよといひ、翌日三郎の宅に絹卷物入の長持を屆けさせたので、三郎はこれで遊客の費用を辨じてやつた。これがために廓は大繁昌し、唐人の客を取る遊女はなくなつた。唐人ほるてい日本人客の中に混つて遊ばうとしたのを見つけられ、絹卷物數多出して漸く赦された。廓に於てはかゝる繁昌を喜び、編岡屋の一室に定家の繪像を掛けて祀る。こゝに遊女かほるの馴染三郎治といふ客がゐた。或る日三郎治は施主となつて定家の靈を祭つた事から騷動が起つたので、役人と稱するもの二人來て、三郎治を縛して行かうとするを、熊坂兄弟が支へ、かほるはその縛を切り解いてやる。そこに三郎治の兄三郎左衛門來りて、三郎治に早く難波へ逃げよと勸める。三郎治が濱邊まで出た所に代官所の役人來りて捕へんとする。かほる三郎治を縞の中に隱す。そこに誰とも知れず、三郎治の身代りになつて役人に捕はれて行つたものがあつたので、三郎治は辛うじて難を免れる。丸山の騷動から罪の及ぶを恐れて、熊坂兄弟も所を去らうと決心し、角前髮に容を變へて行く途に、馴染める妓の小ざつま、長門等客と共に花見幕の中に、自分等の噂をして惡口してゐるのに逢つた。大に憤慨して妓等の歸路に先廻りして待ち受けて懲らさうとしたが、妓等が、そこに泊つたので意を果さなかつた。闘番細川小野右衛門、熊坂兄弟の跡を追うて楠川に於て捕へようとすると、二人は川を滑りて逃げ、小野右衛門は河童のために食ひ殺される。これ全く熊坂兄弟のなす業と考へ、小野右衛門の弟折之介、兄の敵熊坂兄弟を討つべき許可を得て出て行く。堺にて兄の首に逢ひ、その詭によつて自分の體を兄に貸す約をなした。かくて折之介は二人力となつて、熊坂兄弟の跡を追うた。箱崎八幡宮に參詣して、こゝに意外の武士に出逢うた。この武士といふは落合求右衛門（もとめ）といつて、兄を熊坂三郎に討たれ、敵討のために、諸國を廻つてゐるものであつた。互に身の上を知つて兄弟の約をなし、共に敵を探すこととした。熊坂兄弟は柳町の遊廓に入り込みて、折之介・求右衛門に出會うた。又所の代官所の侍共も、お尋ね者の兄弟を探しに來たので、兄弟は絶體絶命、終に二人に討たれた。兩人は兄弟の首を持つて長崎に急ぐ途に楠川を過ぎ、百姓を集め、川を干し、河童を打殺して、兄の怨みをはらし、長崎に歸つて主君に兄弟の首を實檢に供した。【解說】說話の性質からいへば敵討話で、說話樣式としての敵討物の要件を具備するものではない。興味本位に、奇術を以て座敷を海にしたこと、定家の靈に關すること、河童に關することなど、荒唐な事件を構へた幼稚な作品である。併し、そこに一風の作風があるともいへる。淨瑠璃風の道行を織り込んでゐるのも、赤彼の一癖である。（藤村）

隈取（くまどり）　演劇【名稱】略して隈とも。【性質】俳優が顏面をゑどる一種の化粧法。英雄豪傑や妖鬼怪獸などの超自然物の相貌を、綺裝的表現に强調せんとする場合に應用される。かゝる誇張的な化粧法は文明國の劇壇には、支那と日本とを除いてはどこにもなく、支那の臉譜は說明的で、人物の思想性格を形狀にさへ表すので、そのためには鳥の翼、蝶の羽、蝙蝠の形、又は文字をも描く事がある。日本の隈の引き方は如何にも單純で、暗示的な效果を覘ひ、その色彩も豪壯と奸佞、陽性と陰性などによつて、赤とか青とか類別される位のもので、あとは自然の顏の陰翳と、血管の怒張を高調して、線を太く引くに過ぎない。九代目團十郎は加藤や、男之助などの隈を取る時には、血管を怒張させて置いて、その上をなどると、如何にも豪壯な線が引けると言つてゐた事がある。【由來】初代市川團十郎が、當時支那から傳來した燈籠に、彼地の俳人の扮裝した似顏が描かれてゐたのを見て、これに倣ひ、隈取りを始めたといふ傳說がある。故に日本の隈取が支那の臉譜から出たといふ解釋は、强ち牽强附會の說とも言ひ兼ねるが、なほ一槪に定め難い理由も考へられる。兎に角、市川家は初代以來荒事の名家であるから、從つて隈取には苦心したらしく、現に彼家には七代團十郎自ら種々な隈取の形を描き、長子八代團十郎これが序を記し、弟九代團十郎（當時の河原崎權十郎）に與へた一卷さへある。その卷頭には、元祖團十郎や二代團十郎のものが掲げてあつて、江戸荒事の初期時代から盛んに用ひられたことが分る。【種類】（一）色による分類は、紅隈・藍隈・墨隈の三種とする。（二）形式からの分類には、各種ある中、主なものを擧げると、筋隈（梅王、矢根五郎、暫、紅流の和藤内等）。一本隈（樓門の和藤内・男之助・暫の腹出し等）。火炎隈（鳥居前の忠信等）。猿隈（對面の朝比奈等）。剝身（むきみ）（對面の五郎など）。公家荒（青隈で、車曳の時平等）。更にこれを役の方から見ると、無慮百餘種に及び、なほ數は增すのみである。市川新十郎もその晩年に新隈取を三種創作してゐる。歌川豐國の衣鉢を傳へる梅堂豐齋の手寫した「歌川風隈取百種」の目錄を列記し

ておく。

景清、鷺流、鬼女、狐忠信、辨慶、朝比奈、鐵太郎、菊、調玉、曾我五郎、不動、金太郎、二本隈、鯰坊主、獅子、隈出し、隈取安宅、土蜘蛛、奴凧、茨木、松王丸、梅王丸、辨慶（勧進帳）、元祿奴、丹前、鬼夜叉、魯智深、はね隈、岩永、關羽、火焔隈、熊坂、般若座頭、摩利支天、戸隠山神、獅子隈、仙人、毛剃、捉頭、入道、石橋、蛸仙人、三番、虎隈、大物の知盛、知盛靈、鳴雷王子、毘沙門天、勢力、布袋、地藏、仁王、時平、閻魔、猿公家、隠表、討入五郎、鳥羽繪、むきみ隈、猿飛、木鼠、鞘隈、助多隈、水隈、金昆羅、死神、鬼ケ谷、猿々、鯰坊、男之助、寛江、怪猫丸、河童、鯉羽、猿の上、三荘太夫、神代隈、大天狗、日の出鳥、金藤次、猫、薄隈、捉頭平次、天邪鬼、野干平、隈々、道隈、鰻七、鬼若丸、鳳凰、酒呑童子、烏天狗、雀をどり、元祿隈、赤鬼、大人隈、髭番（一つ家）、暫兵衛。　〔松居〕

隈取安宅松（くまどりあたかのまつ）　江戸長唄　【名義】謡曲の「安宅」を隈取つて長唄風に改めた意。松は安宅の名木。【成立】明和六年十一月江戸の市村座で「雪梅顔見世」を興行した時、大切に出した所作事の地。唄浄瑠璃。想は近松門左衛門作「愛錦胎内捜」の義經道行から取つたもので、義經の奥州落の時、武藏坊辨慶は鞍馬の僧正坊の化現が、安宅の關で、名木の松の下にゐた兒どもに都扇を與へて平泉への近道を敎へて貰ふ處を仕組んだもの。作者不明。作曲者は藤間勘左衛門か。囃子は大鼓と小鼓とだけで笛は用ひない。【曲風】能の如く次第に起つて、浄瑠璃風に入り、次で本調子の歌の合方の處から全く唄にくだけ、更に二上りに轉調してヲドリ歌の

「裏のなア、裏の背戸やの今年竹。●笛にしようもの尊笛に。笛になりたや寂ぶ夜の笛は昼を口うつし。ア・ア・しよんがいなく\。●会聚ぶく\その身は安宅の松よ。会聚の夜毎の汐風にもまれもまれて立ちつくし。ありして会これして、しよんがいな面白や。

で踊るに便し、次いで拍子にかゝつて十分に踊らせ、さて臺詞に入り、浄瑠璃式の三重トメで結んだもの。　〔高野〕

熊野權現開帳（くまのごんげんかいちやう）「祇園女御九重錦」を見よ。

熊野の本地（くまののほんぢ）　御伽草子　三卷　【作者】未詳【成立】室町季世か。【諸本】古板本は寛永整版本。刊行未詳の古板本（平のや佐）。【題材】本地物。五衰殿傳説。熊野權現が印度から飛來垂跡した由來。觀音信仰の靈驗により屍が男子を育てる奇蹟が異色で、動物傳育の奇瑞も附加せられてゐる。（「まんじゆのまへ」（別項）の構想は此處から來てゐる。）熊野權現の縁起は「寺社元要記」「諸神本懐集」等にも見え、古くからの傳承で、本書の内容と少異をなす傳説は、舞曲「高館」（別項）の挿話をなし、「朝顔の露の宮」（別項）にも、この權現の事が見える。【梗概】昔、摩伽陀國の太子せいさい王は嗣なく、博士の卜筮に從つて娘を持つ大臣等に獻らせて千人の妃を容れたが、一人の不足に充てた中御門宰相しげたかの娘の美しさを嫉んだ他の妃達が、その低き身分を蔑み排斥して一里程離れた千町松原といふ山蔭に宮を建ててこれを置き、五衰殿、又、せんわう女御と呼ばせた。妃の數は多く、而もその讒奏によつて五衰殿へ王の通ふことなく六年を過ぎたが、女御の信仰する十一面觀音の慈悲か、王は妃一人の見えぬに氣付いて下問あり、あめの大臣の奏上によつて通ひ始め、寵愛深く、やがて懐胎したが、それを秘してゐると、下仕花つむの放言に露れて、又も妃達の謀議する所となつた。陰陽師の呪詛も觀音の再來である五衰殿には驗がなかつたが、隣國きうし國の名高い相人を用ひて王に讒したので、遂にきんし國の中山ほくせきが窟に首を剣られた。終りに臨んで五衰殿が佛神に祈誓して王子を生み、且つその將來を語り聞かせた通り、屍の乳房は王子を哺ましめ、虎狼野干は從ひ馴くうち、三歳の時りやうせん寺の柱に蟲喰が生じたので、五衰殿の兄ちけん上人は山中を尋ねてこれを救ひ、その手に養はれて

「熊野の本地」（繪巻）

非凡の頭才を示し、五歳で兒學匠となつた。七歳になると、偶々かの王の重病の祈禱に召され、平癒の布施に母の首を請うて總ては明かとなつた。讓位を辭した王子は、王・上人と共に萬里の飛車に乗つて人の心の和かなる日本國へ志し、紀伊國和歌浦に着き、音無川の邊に鎭つて熊野神社と崇められた。證誠殿は大王、兩所權現は五衰殿、聖宮は上人である。王を追つた妃達は途中鬼輪に溺死、その靈はあかむしとなり、虎杖の葉に乘つて歸つた。【影響】説經節「五すゐでん」（改題、熊野之御本地）。三升屋兵庫作「和國五翠殿」（元祿十三年三月森田座興行）。青本にも「五衰殿熊野本地」（寶暦十一年刊）がある。【參考】廣益俗説辨正編卷三（神祇）〇近古小説解題　〔島津〕

九萬字（くまんじ）　俳人　【本名】島田隈治【別號】有一、又は優逸【出生】明治九年三月四日長野縣更科に生る。【閲歴】中山儀作の男で、後、長野市の島田氏を嗣いだ。尋常小學を卒へて商家の丁稚となつた事があるが、今は印判商を營んでゐる。俳句は初め舊派千曲堂左通に學んだが、碧梧桐系の雜誌「鵜牛」に於いて新進作家として認められ、雜誌「石楠」創刊頃から漸く名を成すに至り、大正五年俳誌「山」を出して同十三年に及んだ。作風堅實を以て稱されてゐる。句集「山鶯」及び「九萬字句集」がある。　〔日田〕

組歌（くみうた）　歌謡　【解説】組合せた歌の意である。これに三味線曲用と箏曲用とある。【三味線の組歌】形の上にも内容の上にも、何の聯絡もない小歌數首を連ねたもの。これに本手・端手・裏組の三區分がある。各七組づつあつて、歌の總數は一百三十三首。これに關する諸書の記載は必ずしも一様でないが、元祿十六年刊行の「松の葉」の所掲によつて示せば、本手は琉球組・鳥組・腰組・不詳組・飛驒組・忍組・浮世組の七曲四十二首の歌から成つて、一にこれを本曲ともいふ。「糸竹初心集」によれば琉球組は三味線を傳來した石村檢校（寛永十九年歿）の制定、他は石村の門人虎澤（承應三年歿）の作。琉球組は今もなほ京都の盲人の間に傳はつてゐる。本調子で、左手は居所替だけで、旋律はまる曲調、六首の小歌を續けて謡ひ、文句も聞き分け難くて、一篇の長歌のやうに感ぜしめられる。歌は多く男女間の愛情をうたつたもので、踊歌・流行歌又は在來の俗謡から採つたのであるが、その歌詞だけを借り用ひて、曲調は取入れてない。今京都方面には琉球組の外に鳥組と飛驒組の曲が傳はつてゐ、残餘の曲も大阪方面には遺存するといふ。やはり本調子で、甚だ厭氣を催すもの。各曲の歌は長短一様ならず、十句以上からのもあるが、通じては四句又は五句から成るものが多く、七七七五形のものは僅に一首あるだけで、その古態を存することは隆達節の歌に酷似する。二三の例を示す。

島もかよはぬ山なれど、住めば都よわが里よ。（島組）

思ふまいとの鉦を、ちんからころりと、打ては轄やら顔おもはるゝ。（不詳組）

思ふまいよの、やれそれほどに、顔に紅葉の立田山。（忍組）

比翼連理よの。天に照る月は十五夜がさかり、あの君様はいつもさかりよの。（琉球組）

あすは出よずもの、鶴が出よずもの、思ひたけもなとお顔る殿御や。あ・お顔る殿御や。飛驒の踊を一踊りく\。（飛驒組）

端手は破手とあるべく、本手の古風なのに對して、賑やかな當世風の曲の意。待つにござれ・葛の葉・比良や小松・長崎・下總ほそり・京鹿子・端手片撥の七曲、四十三首の歌から成る。柳川檢校の作で、一にこれを新曲ともいふ。曲は皆遺存する。歌の形の複雑なことは本手と同じいが、近代式の

待つにござりたいとしの君やノウ、今夜ござらにやとがれ死の。（待つにござりた）

門に立つたは八もじ樋か、夜風身の霜らちござれ。（比良や小松）

吹けよ松風あがれよすだれ、今の小歌のぬし見たや。（京鹿子）

の如きものが多くなり、別に石曳歌で、慶長十五年名古屋築城の時流行したものもあり、外國關係のものでは、

昔より今に渡り來る黒船、縁がつくれば鰐の餌となる。●マリヤ。（長崎）

の如き注目すべきものがある。裏組（別項）も同じく七曲から成る。柳川檢校の作。以上の外に、江戸の中世、深草檢校が、本手新組と題して一年十二ケ月の歌曲を作成した（寛延四年刊「琴線和歌の糸」所載）。專ら三味線用のためであつたらしいが、世に行はれなかつた。

【箏の組歌】近代箏曲の大成者八橋檢校（貞享二年歿、享年七十二）の編成。寛永の末年には既に古歌曲の外に當時の小歌をも箏に合せて謡つてゐたのを、慶安年中、八橋は古曲の如く高雅に驕せず、小歌の如く卑俗に墮せぬものを制定しようとして作つたのが組歌で、これに表組と裏組（各別項）とある。今様歌に近いほぼ同形の歌數首を列ねて、これに何組といふ名を附したのであつて、表は六組、裏は七組。歌の想は「源氏物語」や古歌から出たものが多いが、各首の間に意味の聯絡を缺いてゐる。八橋の歿後、諸檢校によつて新作せられるに及んで、前述のを古曲と稱し、新作のに古新曲・中古新曲・新曲等の名を附するに至つた（●歌參照）。これ等新曲の歌は、表裏二組のに比すれば、曲も新様であり、歌數首の上にも多少統合の致が見出される。作者は明かでない。俳人・好事家、殊に堂上方の筆に成つたのもあつたであらう。これ等新曲の外に、名古屋の人吉澤檢校によつて、古今組と稱する「千鳥」「春」「夏」「秋」「冬」の五曲、新古今組と稱する「山櫻」「唐衣」「初瀬川」「雪月花」「夕の曲」「三つの御法」の六曲が作られたが、さう世に行はれなかつた。通観するに、組歌には典雅といふ長所はあつても、文意の暢達を缺き、到底妙齢の子女や目に文字ある者の滿足し得るものでない。彼の創意性に於てこれに優る上方歌が箏歌として迎へられたのはそのためである（箏曲・上方歌・箏歌參照）。【參考】三味線の組歌　高野辰之（許舞名曲選所收）〇箏曲大意抄　山田松黒〇箏曲と地唄の味ひ方　藤田斗南〇絃曲大榛抄　菊舎退翁　〔高野〕

久米歌（くめうた）　歌謡　【名稱】久米部が歌つた歌であるからかく名づける。「日本書紀」には久米部歌とも記してゐる。【出典】「日本書紀」神武の卷來目歌八首、その中六首は、「古事記」神武の條に同歌出づ。【解説】雅樂寮で敎習した大歌の一で、神武紀所載の八首の中、神武天皇の御製五首、道臣命の作一首（以上六首「古事記」と同じ）、及び皇軍の兵卒の歌へる歌二首。何れも軍歌に類する歌と思はれる。その第一歌

宇陀の　高城に　鴫罠張る　我が待つや　鴫は障らず　いすくはし　鯨障り　前妻が　魚乞はさば　立柧棱の　實の無けくを　扱きしひゑね　後妻が　魚乞はさば　いちさかき　實の多けくを　扱きたひゑね

は歌の内容によつて考へると、田夫の民謡で、太古の兵卒は屯田兵の如きものであつたらしいから、久米部の兵卒が田野の間に歌ひ出した民謡を、軍歌にも採り用ひたものかと思はれる。他の歌は大概「撃ちてし止まむ」で終る勇壯な歌である。その中、

みつ〳〵し　久米の子らが　粟生には　臭韮一本　其のが本　其根芽繋ぎて　撃ちてし止まむ

この歌の第三句の「垣もとに」は、この次に

みつ〳〵し　久米の子等が　垣もとに　植ゑし椒　口ひゞく　我は忘れず　撃ちてし止まむ

と出でた歌の、第三句が攙入したもので、「古事記」に出でた同歌に、此の一句のないのが正しい傳と思はれる。かくて、久米歌の形式は、何れも奇數句より成り、終末句が七七で終る長歌の形式である。なほ「古事記」所載の歌

忍坂の　大室屋に　人多に　來入り居り　人多に　入り居りとも　みつ〳〵し　久米の子らが　頭椎　石椎持ち　撃ちてし止まむ　みつ〳〵し　久米の子らが　頭椎　石椎持ち　今撃たば宜らし

これは長歌の後に短歌の附随した形式で、即ち、この短歌の部分は、「萬葉集」に云へる反歌と同じ性質のものである。「書紀」では短歌の部分だけ脱してゐる。これは、前の長歌の終りの部分の反復調であるとも考へられるから、脱しても差支へないものであらう。ただ反歌の起原として注意すべきである。次に、

今はよ　今はよ　ああしやを　今だにも　吾子よ　今だにも　吾子よ

とある歌は、獨立した歌でなく、久米歌の各歌を歌ひ終つた後に歌ふ囃子詞に類したものである。「古事記」では、これを「ええしやこし

や　是は嘲ふぞ　あゝしやこしや　是は嘲咲ふぞ」と註してゐる。久米歌には、斯樣な歡聲に類した囃子詞があつた。軍歌であるからであらう。書紀に出た歌、

神風の　伊勢の海の　大石にや　い這ひ廻る　細螺の　「細螺の吾子よ　吾子よ　細螺の」　い這ひ廻り　擊ちてし止まむ　「擊ちてし止まむ」

とある括弧內の句も、同樣に囃子詞で、「古事記」にはこの句がない。これ等の句を除けば、完全な長歌の形式となる。次に、

愛瀰詩を　一人　百な人　人は云へども　手向ひもせず

この歌は「古事記」には出てゐない。これだけが短歌形式である。なほこれには舞を伴つてゐた。（久米舞參照）

【參考】久米舞考證〔河村益根〕○久米舞の說〔鳥川眞頼（皇典講究所講演集一〇九）〕○雅樂攝要〔宮島春松（如蘭社話三二）〕　〔藤田〕

久米舞　くめまひ

舞踊【名稱】久米歌に伴ひ久米氏の舞ふところの舞の意味【解說】いはゆる軍事的舞踊に屬するもので、もとは武裝して敵と戰ふ有樣を舞つた筈で、最後にドッと聲をあげて歡呼するといふ型も、昔ては當然あつたと思はれる。久米氏が、久米舞を有してゐた如く、安倍氏は吉士舞を有してゐた。彼は土蜘蛛退治を永久に誇つた如く、これは新羅征討を誇つた。今日、舞人は四名から成り、裝束は劵纓の冠、老懸、闕腋の袍、半臂、下襲、大口、表袴、劍、靴の姿で、歌人、和琴、篳篥、笛等の樂の音につれる舞の手振に昔を忍ぶ由もない。吉士舞の裝束は甲冑に身を堅め、鉾を取つて舞ひ、更に劍を拔いたとも云ふ。以て久米舞の古い形を想像すべきである。

【沿革】古くより樂府で敎習して來たので、「書紀」には「今樂府奏₂此歌₁者猶有₂手量大小及音聲巨細₁、此古之遺式也」と記してゐる。手量の大小とは舞の手であらう。久米部は、後、大伴氏に屬し、更に大伴氏より分れた佐伯氏があり、この大伴・佐伯兩氏が、武人として久米舞を敎習した。大伴氏は琴を彈じ、佐伯氏は刀を持つて蜘蛛を斬る樣を舞つたが、後、兩氏を分たず、琴彈二人、舞人八人となり（令集解）、天平勝寶四年四月、盧舍那佛開眼の日これを奏した事もあつた（續日本紀）。平安時代となつては、踐祚大嘗會の午日に大伴・佐伯兩氏が奏する例で、琴彈六人、舞人二十人より成る（貞觀儀式北山抄）。その舞は駿河舞に甚だ似てゐたと云ふ。歌は早く亡び、次いで舞も亡んだが、文政元年十一月二十四日午日に再興せられ、明治十一年に、紀元節の日始めてこの舞が奏せられて以來恒例となつた（田歌參照）。現今再興の久米歌は、壹越調の唱歌で、和琴・篳篥・笛で伴奏し、初めに笛と篳篥で音取があり、次に參入音聲（宇陀の高城より鷹らさやるまで、殿前迄歩きつつ奏する）、次に二段揚拍子（こなみがより終りまで、舞臺で舞ふ）、次に退出音聲（今はよ云々の笑ふ詞、これを奏しながら退出する）。以上四部より成る。譜本も存してゐる。吉士舞もやがて亡び、同じく近世改作せられたが、今は行はれぬやうである。

【參考】日本舞踊史〔若槻小藤太〕○近代舞踊史論〔小寺融吉〕○日本音樂講話〔田邊尚雄〕○古事類苑樂舞部二　〔小寺〕

久米正雄　くめまさを

小說家・劇作家【出生】明治二十四年十一月二十三日長野縣小縣郡上田町で生れた。【閱歷】八歲の時、父の自殺に會ひ、母の實家のある福島縣安積郡桑野村に移り少年時代を送る。縣立安積中學校、第一高等學校を經て大正二年東京帝國大學英文科に入學。中學以來三汀と號して河東碧梧桐の門に入り、新傾向（別項）の句をよくしたが、やがて劇作家たらんと志した。同三年第三次「新思潮」（別項）の創刊に際して、その同人に加はり、同誌の第二號に處女作、社會劇「牛乳屋の兄弟」（別項）を書いた。後、夏目漱石の門に入り、又第四次「新思潮」同人となつて小說にも筆をとるやうになつた。同五年大學を卒業し、一時中學校の敎師となつたが、同七年頃から作家生活に入つた。以後新現實主義の人氣作家として數多の短篇を作つた外、「螢草」以來、十數篇の長篇小說をも書いてゐる。その間、同八年同好の人達と國民文藝會を起し、また別に雜誌「人間」を發刊した。後には時事新報社客員となり、同十二年奧野艶子と結婚し、更に東京放送局顧問をも兼ね、昭和三年外遊、翌年歸朝し、今日に及んでゐる。

【作品】短篇集に、「學生時代」（別項）「鶴人の愛」「木靴」等があり、「受驗生の手記」「競爭」「手品師」「敗者」「山鳥」「良友惡友」「和靈」「墓參」等有名な短篇が收めてある。また長篇小說に「螢草」「不死鳥」「赤光」「冷火」「曉夜」「青眉」「空華」「破船」「嘆きの市」「天と地と」「虹を架ける」等がある。なほ、久米正雄全集十二卷があり、又感想小品集「微苦笑藝術」を初め多くの隨筆・評論がある。【作風】新技巧派（別項）の作家として小說も戲曲も書いてゐるが、小說方面では輕快な技巧と明朗な機智を適度に織り込み、好んで人間のナイイヴな心持を素直に描き出してゐる。思想的に深みはないが、流暢な行文の間に柔美な情趣を出してゐる。前期には學生生活を取扱つたものや、氣のきいた着想の上にユーモラスな氣分を漂はせた類のものを主とし、後期には自傳的、心境小說的な作品を主として書いてゐるが、元來安易な態度と、通俗味の多い作家で、一方では新聞雜誌向きの長篇小說を書き、通俗作家としても活躍してゐる。　〔藤森〕

天衣紛上野初花　くもにまがふうへののはつはな

脚本　七幕十六場　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】河內山、三千歲【初演】明治十四年三月、東京新富座。

【役割】河內山宗俊・使僧道海實は宗俊（市川團十郎）、片岡直次郎（尾上菊五郎）、大口屋の抱へ三千歲・國元讃岐（岩井半四郎）、寺田幸兵衞・高木小左衞門（中村宗十郎）、金子市之丞・比企東左衞門（市川左團次）、松江出雲守・鳥井手代牛七（坂東家橘）、くらやみの丑松・宮崎數馬（市川小團次）、暗闇辰兵衞・老女岩崎・角實藤五郎（中村鶴藏）、幸兵衞女房おもと・東左衞門娘おてい（坂東しうか）、北村大膳・番頭傳右衞門・番頭九兵衞（市川團右衞門）、按摩丈賀・中間勘八（尾上梅五郎）等。

【讀本】默阿彌全集第十六卷所收【題材】二代目の松林伯圓が立案して、明治五年の冬、高座にかけた「天保六花撰」の講釋によつて脚色したもの。一度、同七年十月河原崎座に「雲上野三衣策前」と題し、團十郎（河內山）、三十郎（直次郎）、家橘（松江侯）等によつて上演、それをなほ一層複雜に增訂し、全く面目を一新せしめた。

【梗概】〔序幕〕金子市之丞が湯島天神の境內で奉納の劍術試合をする事となつたが、黑闇の丑松は渡りをつけずに小屋を掛けたことから大喧嘩になつたのを、河內山宗俊が仲裁した。その後、長者町の上州屋へ貰入に來た宗俊は、その家の娘のお藤が四年前から松江侯へ小姓に上つてゐたのが、お眼にとまり、是非妾に上げよとの命令に一同は困つてゐるのを知り、宗俊はこれを取戻すことを約し、手附に百兩を受取る。〔二幕〕吉原大口屋の抱へ三千歲には御家人の片岡直次郎——通稱直侍と云ふ情夫があつたため、常に金に苦しんでゐた。遣手のお熊から借りた金も、張りあつてゐる金子市之丞から出てゐたため、苦しい羽目に立つのを宗俊が來て救つてくれる。〔三幕〕宗俊は上野の使僧と僞つて松江侯の屋敷へ乘込み、お藤を救ひだし、歸る時、玄關先で北村大膳のために見現はされたが、家老高木小左衞門の才智で、そのまゝ悠々と歸る。〔四幕〕筆職人寺田幸兵衞は宿下りに來た伜新之助のために鋼を盜んだのを、角實藤五郎に責められるが、立寄つた直次郎と三千歲に救はれる。幸兵衞の妻おもとの弟島屋の手代牛七は、比企の邸で不正の藤宮（富籤の一種）にかゝり、二百兩奪はれ、店へも歸れないから姉に逢ひ、自害しようとしてやつてくる。この話を聞いた直次郎は、その金を取返しに比企の邸へ赴く。〔五幕〕直次郎は牛七と同じやうに隆慶橋の茶店から比企の邸へ連れて行かれたが、直侍だと見現はされたので居直つて二百兩を奪ひ返す。〔六幕〕比企の邸に手がはひり、直侍も危くなつたので高飛をしようとして三千歲に逢ひに雪の中を入谷の寮まで來た（淸元「忍逢春雪解」）。そこへ市之丞も來合せ、散々彼を罵つた後、年季證文を叩きつけ歸つてゆく。中間の丑松の訴へで捕手が來るが直次郎は逃げる。〔大切〕宗俊も直次郎も終に捕へられる。三千歲は引かれて行く宗俊と直次郎に逢ひにゆく途中市之丞に逢ひ、宗俊が腹違ひの兄であると知れ毒を呑んでこの世の別れをする。

【脚色】作者の全作を通じ、特に世話狂言中での一代表作である。講談に材を取つたとは言ひながら、河內山・金子市之丞・直侍の三人を九代團十郎・先代左團次・五代菊五郎の三名優に配して、雄大なる結構の下に脚色したもので、明治劇壇の所產中最も大きな世話狂言の一つと言ふべきものであらう。松江邸に於ける贋の使僧の條、入谷の寮に於ける三千歲と直侍の情調等の如きは、今日もなほ舞臺生命を保つてゐる。

【參考】河竹默阿彌〔河竹繁俊〕○明治劇壇五十年史〔關根默庵〕○續々歌舞伎年代記○市川團十郎〔伊原青々園〕　〔河竹〕

蜘蛛の絲　くものいと

「土蜘蛛」を見よ。

蜘蛛の絲卷　くものいとまき

隨筆　二卷【著者】岩瀨百樹（京山）【成立】弘化三年【讀本】久しく寫本で傳はり、明治以降に上刊せられたもの數種ある（燕石十種、その他の叢書の內に收められてゐる）。【解說】著者が幼年の頃より見聞せる江戶市井の風俗の變遷を敍述したもので（著者七十八歲の時）、弘化三年七十九翁齋藤彥麿、同年著者の兩序がある。本編一卷、追加一卷、中に茶番、開帳實見世いかのぼり、女髮結の起立、中洲假宅、十八大通、鼻紙袋の始、天鼓羅のはじまり、料理茶屋、行人坂の大火、うちこはし、市中の人數、天明中戲作者馬琴略傳、草雙紙の變格、手遊盆太鼓、町飛脚、芝居三日替り、春駒園の戶高尾の淨瑠璃、山王祭禮等、凡そ四十三項を收めてゐる。往々著者の僻見と見るべきこともあるけれど、江戶市風俗史の資料とするに足る。　〔和田〕

雲妙間雨夜月　くものたえまあまよのつき

讀本　五卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】歌川豐廣【名稱】作中の人物、妙の孝行を標榜して名付けたものである。又角書に、雲雷鼓掣電降雹澍大雨念彼觀音力應時得消散とあるは、全篇の奇異を說くものである。【刊行】文化五年【諸本】明治九年、獨逸人フィズマイエルに依つて獨譯せられ、同十九年米人エドワード・グリーに依つて英譯された。曲亭馬琴翁叢書（明治二十三年刊）・繪入文庫・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）所收。【題材】歌舞伎の「鳴神上人」を改作したもので、「金瓶梅」に據つたところが多い。また名鷹・雷獸等の奇譚をも配した孝子の敵討物語である。

【梗概】攝津國神崎に近き讃岐院の僧西啓は、ふとした迷ひに神崎の遊女蓮葉の所で一夜を明かしてからは禪業を廢するに至り、故鄕近江に赴く途中、牛を騙取し、奸計を以て瀨田の邊りに住む浪人伊原武章に賣り、金をととのへて更に鎌倉に向つた。やがて武章は相州底倉の兄武泰の許へ出立した後、西啓の奸計のために病中の妻を亡ひ、二人の子、妙と太次吉を代官に引立てられた。武章は兄の妻となつてゐた蓮葉の戀を退けて匆々歸國して見るとこの始末である。そこで再び東國に西啓を探ねて行つた。然るに西啓は里人を欺いて底倉の無住寺の庵主になりすまし、雷法師と呼ばれてゐたが、蓮葉はその西啓なるを知つて心動き、法要にことよせて誘じ入れた。その時近江から下つた武章は端なくもこれを看破して斬つて掛り、誤つて蓮葉を殺したので、兄の遺愛の鷹に遺書を結び付けて放ちやり、自首して刑を受けた。不思議にも鷹は罪なきことが判つて許された太次吉に射止められ、二人の遺兒は父の最期を知つて益々復讐の念を固くした。さて武章の刄を逃れた雷法師は、近江の旅路で雷獸を助け風雨を呼ぶ祕術を敎はり、岩戶山に立籠つて城中の士民を苦しめんと呪法を執行したが、妙と太次吉は鷹の靈に祕策を授かつて、その術を破り、首尾よく父の仇を討つた。

【構想】作者は、この敵討物語を構成するに、破戒者雷法師の一代を敍することに力を用ひてゐる。これは惡を表現して種々の事件を捲き起させるためである。又雷神の術といふ奇怪な力をも與へ、しかもこれを討ち取り得たのも矢張り不可思議な力に依つてゐる。かうして說話を奇拔にし變化を富し、複雜な仕組によつて、因果應報の理に節義の觀念を絡ました。怪異は只その方便に用ひられたに過ぎない。【價値】多く人口に膾炙してゐる說話を取り、怪異を附隨して敵討物を作つた時代の所產で、その怪異の取扱方が低級な讀者を相手に娛樂敎訓のための方便とし、文學の材としては有效に用ひられなかつたにせよ、複雜な說話を巧みに展開させた點は認めねばならぬ。また筆致は技巧を弄しない自然の雅馴さもあつて、價値の低い初期の讀本中の佳篇と言はれる。　〔笹野〕

雲のゆくへ　くものゆくへ

小說【作者】德田秋聲【發表】明治三十三年八月、讀賣新聞【刊行】同三十四年九月、春陽堂。

【梗概】或る日、比企子爵の邸へお國といふ女が尋ねて來た。それは當主の寛が繪に凝つてゐた頃、よく寫生旅行に行つた土地で懇意になつた人の娘だつた。女は寛が妻に迎へるといつた不圖した言葉を空頼みにしてゐたが、父の急逝に遇ひ藝者にまで身を落してゐた。寛は妻の手前もあり、女の不意の來訪に當惑した。妻の牧子も不安を感じ、自分が手切金を出すことにして、それを義弟の均に託した。

均は友達に、その金を義理で融通したが、それがなか〳〵戻らないのが元でお關と妙な關係になつた。一方寛の友人の實家と戀愛に陷つたため勘當同樣になつてゐた寛の妹の子の咲子が引取られて來た。生れ落ちるから母を亡つた咲子は貧乏な父親の手一つで漁師の子供達に混つて育つた。この咲子は均（先代が女中に生ませた子）だけを頼りにしてゐた。その後、寛は楡村といふ男に騙されて鑛山事業に手を出してゐた。牧子と楡村の間にも怪しい筋が多かつた。均はこの家庭に堪へられなくなつて、咲子を連れて別居した。するとお關がそこへ入り浸つてゐる。咲子はお關を嫌つて均の外出中に父のところへ逃げ歸つてしまつた。咲子は非常に變つた性格の女で、神經の恐しく鋭い割に何處かぼんやりしてゐて、することも他人の意表に出ることが多かつた。均が咲子を迎ひに行つた留守中に、子爵家では寛が急に發狂して、古井戸に陷ちて死んだ。又お關は以前の情夫のために重傷を負はされた。お關は均の胤を宿してゐた。楡村は均を惡しざまに言振らした。咲子は明かに、戀に似た感情を均に對して抱いてゐるらしい。均は成功した楡村らしい男の噂をふと耳にした。

【批評】作者の通俗的作品中の第一作である。作者自身、氣分の鬱結、筆路の澁滯を打開する爲め思ひ切つて奔放に書き、それによつて却つて好結果を得た作だと語つてゐる。筋のやゝ散漫なのはこの奔放さのためであらう。全篇のうち、咲子親娘の生活及び咲子の性格は多分にロマンチックな筆で書かれてはあるが、硯友社の他の作家には見られない現實味を、かなりよく現はしてゐる。併しながら、「新世帶」（別項）以後の諸作との間には、可なり甚だしい徑庭がある。作者の出世作であると共に、その過渡期的作品として注目すべきであらう。〔加藤〕

愚問賢註 ぐもんけんちゆう

歌論書　一卷　【作者】二條良基・頓阿　【成立】良基の奧書によると、良基の問に對して頓阿の答へたものを良基が錄して、貞治二年に頓阿の許に遣したとあるから多分この頃成つたものであらう。【諸本】刊本としては續群書類從本があり、古寫本では、山崎宗鑑の筆と思はれるものがある。內容は同樣である。【內容】問答の體裁になつて居り、頓阿の歌論的見解が主として述べられてゐる。この書の第一章には良基の問として、或る說によると歌は本質的に存する自然の情であつて、それが現れて正義といふやうな差別が起るのである。卽ち情が內にあつてその自然の現れが歌である。かくの如きである故に「萬葉集」も「三代集」以下も凡て古人の糟粕であつて、ただ風雲草木に向つて觸目する自然の風貌をありのまゝに歌ふべきであつて、古歌に依據するのは愚であり、殊に「三代集」以下の花を主としたものは學ぶべきでないとした。これに對して或る說では、思ふこと感ずる事をすべて歌ふべきではなく、その中で風情のあるところに從つて詠ずべきであり、天地を動かすのも花をかざり風情を求むるところにあるからして、古代の雅正なる言葉を學び俗言を去るべきであり、かくして世の俗を正しくすべきであるとするが、この何れに從ふべきかとある。これは、爲兼派と爲世派との新舊の立場に外ならないが、これに對して頓阿は、歌は思ふ事をそのまゝにいひ出して、褒貶邪正にかゝはるべきではないとするも一理ないではないが、和歌盛んにおこり、六義や十體が定まつた後に、なほ淳朴の體を學ぶべきであるとするのは偏見であるとするのである。歌式などの定まつた今に於て、これを無視するのは誤であると述べてゐる。卽ち歌の本質に於て爲兼等の立場にやゝ贊しつゝも、後世の歌式や病を打破して自然人的態度に歸る事をし得なかつたのである。この爲世派の保守的な考を有しつゝそれを大膽に主張しなかつたのが彼の立場であつた。この妥協的な立場から種々の問題を論じてゐる。その中の二三の點を舉げて見ると、（一）和歌の變遷の上に於て、寛平・延喜時代を中心とすべき事を言つてゐるのは、頓阿の平淡味の由つて來る所を示す上にも注意せられる。（二）心と詞との關係に於てその優劣前後の關係は無いといふ。心に風情を得る事も難く、風情を得て詞をなす事も難い。人の未だ得ない風情をば、やすらかに艶ある詞でつゞくべきであるとしてゐる。而して心詞ともに得がたいのを案じて詠むのが稽古であるとする。この論は從來の心詞論をそのまゝ繼承したもので別に創見は見られないが、稽古といふ點を高唱した所に注目すべきである。その他、長歌短歌に就いて、上代に多く長歌を詠ずるのは上代人は物を感ずる事が深く、その心が切なるために三十一文字で意を盡すことが出來ないからであつて、中古にも「拾遺集」に見える兼家の歌や「千載集」に見える俊頼の歌の如きは、深き心のために短歌に收まり難いから長歌となつたのであるが、今世に長歌が稀になつたのは人の心が淺になつたのであるとしてゐる。頓阿のやうに古代人が感ずる心が深いためにといふやうに解釋して居るのは從ふ事は出來ないが、長歌の衰へた理由についてかく解釋を下した所に多少注意せられる。なほ本歌や制禁、ぬしある言葉、題詞等に就いても一々說いてゐるが、二條派の言說をそのまゝに踏襲してゐる點が多い。【價値】本書はその學說に於て、殆ど創見はないが、しかし頓阿の歌說を最も組織的に示してゐる點に於て注目すべきものである。【參考】日本歌學史　佐佐木信綱〇歌書綜覽　福井久藏　〔久松〕

供養 くやう

「願文」を見よ。

藏意抄 くらいせう

滑稽本　一册　【作者】葛葉山人正二作、式亭三馬補筆　【名稱】假名手本と角書がしてある。「藏意抄」は、忠臣藏に因んで藏衣裳を洒落たもの。【成立】文化八年に三馬が補筆し、序文も同年に記されてゐるが、發賣されたのは文化十年の春である。【諸本】滑稽本集（日本名著全集）所收。【內容】高師直が、顏世御前に送つた所々に蟲食のある艶書を舉げて說明し、若狹之介の枕自鳴鐘の圖を表はし、加古川本藏の工夫で、出仕に遲刻せぬやうに仕掛けたものだと言つてゐる。千崎所持の弓張提燈は傘の如くに作つて、劍先提燈と言つたといふ辨をあげ、伯州藩士分限帳に藩士の祿高を記してある。狩人言上書の縮寫は、獵師彌八・角兵衞・六兵衞等が山崎街道で與市兵衞の死骸を發見した顚末の上書であり、一力の書出しは鷺坂伴內宛のものである。その他、おかるの名標紙や、天川義平の子由松の玩具泣辨慶の切拔繪など、漫然と舉げ記してゐる。【解說】三馬の補綴以前、卽ち文化元年刊行のものに、高瀨川路考・篠田樓々堂編輯の「假名手本穿鑿抄」一册が上方板として出てゐる。高瀨川路考は有名な俳優瀨川路考の名をもぢつたものであらうが、篠田樓々堂は狂言作者の篠田金治であり、萬壽亭正二、或は葛葉散人とも號してゐた。故に「藏意抄」と「穿鑿抄」とを比較する時、自ら三馬の補筆の跡も知られる筈である。兩書はその目次に多少の增減が見られる。「穿鑿抄」の品目は、高師直艶書、桃井若狹之助枕自鳴鐘、足利館四足門古額、伯州藩士分限帳、山崎邑狩人三人訴狀寫、於加留弘札、一力紅楊鉢繪、金閣寺拜見信牌、本藏尺八露取、良松達子牌、太田了竹紹書の十一品である。併し「藏意抄」は十四品になつて居り、「穿鑿抄」の四品の代りに七品を加へたのである。三馬の補筆の跡と思はれる點は、要するに細微な穿ちと註釋とである。山口剛氏が滑稽本集の解題に三馬が多く加筆したのは「狩人言上書之縮寫」であつて、「穿鑿抄」にはただ訴狀本文の寫書で、「藏意抄」には註釋と說明とがあつて、一段の面白さを見せてゐると記してゐられるのは、全くその通りである。要するに三馬の補筆によつて「藏意抄」はひきしまつてゐる。やはり三馬は、かうした方面に重要な役目を持つ作者であることが知られる。〔小池〕

倉田百三 くらたももざう

劇作家・評論家　【出生】明治二十四年二月二十三日、廣島縣比婆郡庄原町字庄原に生る。【閱歷】父は吳服商。小學校卒業後、縣下三次中學に入學、文藝熱はその頃からであつた。中學を經て第一高等學校に入學してから、文藝部・辯論部に活躍した。當時は主として哲學的論文を以て鳴らしてゐたが、後、病を得て半途退學した。その後京都の西田幾多郎博士の哲學に傾倒し、また更に大正三年には西田天香の一燈園に入つた。卽ちこの間專ら思想的精進を續けたのであるが、同五年千家元麿・犬養健等と、雜誌「生命の川」を發行し、それに處女戲曲「歌はぬ人」を發表したが、更に第二作「出家とその弟子」（別項）を單行本として出すに至つて、俄然讀書界に一大センセーションを起す程の反響を呼び、一時、作の主人公親鸞研究時代を惹起した程であつた。かうして一躍文壇に進出した。爾來、戲曲「俊寛」「父の心配」「布施太子の入山」等の名作を出すと共に、それ〳〵上演されて著しい世評を呼び、なほ進んで、社會問題を扱つた大作「赤い靈魂」などをも發表した。昭和元年强迫觀念症にかゝり、以後苦惱を繼續した。この年雜誌「生活者」を發行、昭和五年に廢刊。「强迫觀念のため、卻つて心機一轉し、多年の病臥狀態より全く脫し起居普通人と異ならざるに至る」と、自ら昭和五年の年譜に書いてある。【作風・傾向】彼の戲曲の特徵は、過去の思想的精進の結果として當然宗教的であり、徹底的に信と愛とを說く求道者の姿があり、その執拗な程の熱情は、他に類を見ない觀がある。「俊寛」に於ける生への執着、「出家とその弟子」、及び「布施太子の入山」に於ける求道の眞摯さ、蓋しモラリスティックな情熱を描いて、彼の如きは稀であらう。雜誌「生活者」では、いよ〳〵求道の一念を追求し、唯物史觀を否定して、同胞愛と人間愛に徹しようとする信念が純化し、安定して來たやうに見えた。【著書】前記の戲曲の外、論文も少なくない。「愛と認識との出發」（別項）「靜思」「轉身」「超克」「希臘主義と基督教主義との調和の道」「一夫一婦か自由戀愛か」等、何れも思想家としての彼の面目を傳へるもののみである。中に最も世に行はれたものは、論文集「愛と認識との出發」である。一卷に溢るゝ燃ゆるが如き情熱は、深く青年を動かして、盛んな愛讀を受けた。〔關口〕

藏の中 くらのなか

小說　【作者】宇野浩二　【發表】大正八年四月「文章世界」【刊行】大正八年十月短篇集「藏の中」に收む。【內容】山路といふ情け者の小說家を主人公とし、彼が下宿屋の喧騷から脫れ、且つ自分の着物に對する愛着を滿たさうために、行きつけの質屋に入れてある數多の着物を質屋の藏の中で蟲干することを、ふと思ひつき、質屋に賴み、藏の二階で着物を出して眺め樂しんでゐる折柄、質屋の主人の妹で出戾りのヒステリイ女と知り合ひになるが、やがて瞞られ、元の默阿彌になる筋道にからんで、主人公の風變りな人柄と生活が枝道澤山に述べ立てられてゐる。彼はおしやれで女のやうに着物を愛し、その數々を揃へるが、工面のために片端から入質して了ひ、且つ一日に三度も寢起きする程の變り者であり、同時に自墮落なばかりか、並はづれて女が好きで、これも亦少年時代から妙な階級の女とのみ關係しながら、四十歲の今迄をそのために費して來たといふやうな男で、その彼が着物から聯想される種々の女との交涉等を、私といふ一人稱で無秩序に話し續けてゆくといつた工合で、大部分が饒談から出來上つてゐる。【解說】作者が文壇的に發表した處女作で、「苦の世界」と共に、出世作となつたものである。作意に諧謔の調子はあるが、この作者特有の哀感は薄い。併し自傳的經驗といふよりも、むしろ身邊の見聞中に微妙の好話材を見出し、第三者に直接話しかける態で、意外の方面に話頭を起しながら、いつか巧みに本筋に運んでゆくといふよりも、餘談そのものが主體となり、而も馬鹿話の底に一向なものを含んでゐる等の諸點に於て、この作者の特色の一面を濃く示してゐる。〔湯淺〕

鞍馬出 くらまいで

幸若舞曲（番外）　一卷　【別名】東下り　【成立】室町期　【諸本】舞の本（上田萬年博士校訂）・同再刻舞の本（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部等所收。筒附本は全曲ではないが、越前幸若家元祿のものを日本歌謠集成卷五に收めてある。【內容】判官物。武勇傳說。蹴上げの水の傳說。鞍馬の牛若、母常盤の文により身の危急を知り脫出を決意し、毘沙門天に祈つて夢想を得た曉朝、三條の金商人吉次に逢ひ奧州下りの同行を約した。夜、東光坊を脫して松坂で吉次を待合せる折柄、美濃國から上洛の途上にある平家の侍關原與一の一行に遇ひ、與一の馬が淸水を蹴上げて、牛若の直垂を濡した無禮を咎めて落馬の恥辱を與へた上、打懲して自身は奧州へ下る。謠曲「關原與市」と同材。但、謠曲では美濃山中の出來事とし、與市は命を預ける事になつて居る。前半吉次との約束の條は、「義經記」（卷一）と同材。〔島津〕

鞍馬獅子 くらまじし

所作事　獅子物　【本名題】峠風や伊勢の內外の太神樂、紋はお家の爲九郎、今での振袖今での振袖ふたつ緒で夫婦酒替奴中仲　【初演】安永六年十一月一日初日、江戶市村座「見華表飛入阿紫」第二番目　【作詞】中村重助　【曲節】富本節　【太夫】二代富本豐前太夫　【作曲】名見崎德治　【振附】二代西川扇藏　【傳來】曲・振とも前半のみ傳存。但、曲は富本節以外に、清元節にも改調されて、現今では、寧ろ清元節を用ひる方が普通になつてゐる。振も清元節によつて再演

された時のを更に改訂したものである。【題材】能狂言の「餅酒」を翻案したもの。【讀本】徳川文藝類聚俗曲上卷・富本新内全集(日本音曲全集第九卷)・清元全集(同上第三卷)・日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集(日本名著全集)・舞踊劇集(日本戯曲全集)等所收。【内容】伊勢三郎妹玉章、實は靜御前(三代瀬川菊之丞)が、鞍馬に隱れた義經が殺されたと誑られて悲しみの餘り狂氣し、父が形見の薙刀を持つて伊勢の國御裳濯川のほとりを狂ひ歩く。太神樂曲獅子の角兵衞(初代中村仲藏)がこれに揃んで獅子を舞ふ。そこへ饅頭賣の女(初代中村富十郎)と酒賣の男(九代市村羽左衞門)とが來かゝり、互に賣物の效能に寄せて踊る。遂に太神樂の角兵衞は實は御厩の喜三太と名乘り、名鏡をかざした徳で靜御前の狂氣は癒え、同時に饅頭賣は日向の國姥ケ嶽の雌狐、酒賣は伊勢山田ケ原の雄狐と本性を顯はし、

「夫婦酒替奴中仲」繪本番附(初演)

預かつた義經の一子を渡し、名鏡を貰ひ受けて消え失せる。喜三太と辨慶(二役羽左衞門)とは靜御前を鞍馬へ送る。【價値】曲・振ともにこの期の代表作の一で、殊に曲は後の獅子物、「越後獅子」(別項)や「角兵衞獅子」等に影響を與へてゐる。【備考】天保七年十一月、江戸森田座「勢源氏貢扇」第一番目四立目「鞍馬獅子其影形」(作曲、清元齋兵衞)として清元節に移されて再演。但、初演の前半を添削したもので、この時の下卷は「石橋」であつた。太神樂(一)源之丞實は薩摩守忠度(澤村訥升、後の五代宗十郎)、俊成卿の息女菊の前(尾上菊次郎)等の役名で演じた。今日行はれてゐるのは靜御前でも菊の前でもなく、卿の君の役名である。(秋葉)

鞍馬天狗 くらまてんぐ 「判官物の謠曲」を見よ。

鞍馬常盤 くらまときは 「常盤問答」を見よ。

栗隈神明 くりくまじんめい 能狂言【別名】今神明【格式】内神交濟相傳の部(大藏流)【内容】伏見の里の松の太郎といふ者が、女房を伴つて宇治神明の御神事に茶店を出す。そのうち大勢の參詣人が立寄り、當社神明の由來を問ふので、太郎は、栗隈山神明の縁起を語る。皆々目出たい話を承つたと言つて、太郎得意の松の囃子物を所望し、舞ひ納める。【解説】和泉流の「今神明」は、當込んだ茶が賣れず、店を疊んで歸るもので、筋は大分違つてゐるが、「栗隈神明」は後世の加筆があるからであらう。やはり「今神明」と「栗隈神明」とは同じ狂言で、大藏流でも古くは「今神明」と言つてゐる。(篠田)

栗毛後駿足 くりげのしりうま 滑稽本 三編六册【作者】瀧亭鯉丈【名稱】初編上卷には「大山道中膝栗毛」と記し、下卷には「大山道中栗毛後駿足」とし、以下これを踏襲してゐる。【刊行】初編は文化十四年、二編は同十五年、即ち文政元年、三編は文政五年。【諸本】滑稽名作集(帝國文庫)下卷所收【内容】「膝栗毛」物の滑稽本の一つで、大山石尊參詣道中を背景にして、百編屋徳郎兵衞と福七との二人物の活動から起る樣々の滑稽事を綴つたものである。淺草八丁堀に住む百編屋徳郎兵衞が子分の福七を誘つて大山參詣をする。福七は初山であるから徳郎兵衞が萬事呑込み顔に案内をするが、實は彼の知つたか振に過ぎない。彼自身にはそこに不安があるが、讀者にはそれが哄笑の原因となるのである。先づ徳郎兵衞は、大山開きの六月二十七日を十七日と考へ違つて、十三日の未明に出立する。道者の跡について行けば路順はよく知らなくても大山へ行けると思つた當も外れて、道者は大抵富士詣であつた。足の疲れぬため草鞋の間へ牛糞を入れよと敎へて、福七と二人さうして行くと、通り掛りの馬方に足熱を取るのは馬糞だと注意されて、茶屋に入つて洗足をする。この類を始めとして彌次喜多風の失敗の連續で道中を續けることを書いてある。【解説】鯉丈の滑稽本は、出場人物の多過ぎる嫌ひがあつて、「八笑人」「和合人」、或は「箱根草」(各別項)でも同種同型の人物の多く出過ぎる所に煩はしさがある。何れも一役は勤めてゐるやうなものの、それはただ外面的な役廻りを持つてゐるに過ぎない。性格・思想等から來る本質的な役割を持つものではない。一九の「膝栗毛」でもその傾向はある。所が本書の徳郎兵衞と福七とには主從關係も比較的鮮明であつて、萬歳と才藏との關係である。その上に徳郎兵衞の知つた振、利いた風がすべて失敗の原因となつて行き、福七の無抵抗主義的な態度も亦災の原因となつてゐる。徳郎兵衞は内心不安は抱きながら平氣を裝ふだけの圖々しさを持つて押して行く。福七は同じ不安を持ちながら又暢氣にも徳郎兵衞に引きずられて行く。二人を取り捲いて湧く滑稽がこの二人の性格的特徴に關してゐることが、一應了解されるので面白い。本書の滑稽は多くさうした所に存する。なほ「箱根草」は伊左衞門の如き惡洒落に富んでゐるが、本書にはそれらは少ない。(小池)

栗田寛 くりたひろし 國史家・神道家【通稱】初め八十吉、後、利三郎、字は叔通【號】栗里・蕉窓・銀巷【生歿】天保六年九月十四日、水戸下町本六丁目に生れ、明治三十二年一月二十六日、東京牛込矢來町の自邸に歿す。享年六十五。【墓所】茨城縣東茨城郡稲荷村六段田六地藏寺【閲歴】北河原守彜・石河明善・藤田東湖・會澤正志・豐田天功等に就いて學び、安政五年(二十四歳)始めて彰考館に出仕し、留付格・彰考館物書役を經て維新の後、水戸藩家扶、次いで彰考館編修となる。明治五年茨城縣出仕、翌年平野神社少宮司兼大講義、次いで敎部省出仕、同十年太政官修史館掌記、翌年辭任、同十七年再び出でて元老院准奏任御用掛、二十二年辭任、二十五年帝國大學文科大學敎授となつた。文學博士。【人物・業績】幕末、水戸藩でも藩論稍々に分れ、兵火を以て相見ゆるに至つた。この間彼は侃諤の議を唱へ、地位の低きと年少の故と

栗田寛

を以て反對黨の指目を免れてゐたのを奇貨とし、百方斡旋して掉議高見の士を敵の毒手から救ひ、或は自ら武器を執つて敵に當り、水藩歴代學事の淵叢たる彰考館を兵燹から救ふなど、幾度も死線を越えて國事に奔走した。しかし彼の本領は學究生活にあつた。少壯の頃、早くも修史に志を立て、彰考館に出仕するに及んで「大日本史」の編修を以て畢生の業とした。維新後、官途に就いたこともあつたが、修史の業は官務の餘暇、寸時もこれを廢しなかつた。元來健康が餘り勝れなかつたので、修史の進捗に支障を來す事を恐れ、一切の公職を辭し、全く世事を放擲して專心修史の業に沒頭した。かくて「大日本史志表」の編纂を完成した。又古代の歴史・地理・法制・職官・氏姓の研究にも力を竭し、殊に彰考館出仕後、館藏無數の典籍を自由に披閲することを得て、その學愈々深邃精緻を來すと共に、その成果は益々擧り、毎歳、少なくとも二三の編著を成稿し、逝去の年まで更に變ることがなかつた。從つて、その編著九十有餘種の多きに達し、「標注古風土記」「纂訂古風土記逸文」「風土記逸文考證」「神祇志料」「新撰姓氏録考證」の如き、その重なるものである。なほ神道に關しても、一家の見を抱いてゐた。即ち〔神道論〕本居・平田派の古代には、道あつて敎なしとせるに反し、彼は道も敎もあり、從つて學も亦あつたと説き、その道・敎・學に就いて「天地開闢の始、未だ文字あらざる時、天祖あり、天神あり、天祖の行ふ所、天神の云ふ所のもの、萬民從つて之に經由し、之を襲承して違ふことなきを道と云ひ、敎と云ふ。是乃學也」と説き、天照大神の生民を愛せられ、君徳の大なるを説き、大神の天窟に隱れらるゝや群神奔走せらるゝは人臣の禮を識されたものとし、以て君臣の義儼として存せるを説き、又寶鏡を授け給へる時の神勅、及びこれに從ひて皇孫の奉齋せらるゝは、父子の親を示さるゝものとし、その他太古の敎によつて敎ぶる事の存在を知ると云ふ風に、一々上代の事實に就いて、道・敎・學の存在を説いて居る。水戸派の學統を受け儒敎によつて神道を説かうとしたので、動もすれば「朱儒糢眼の非難」などといひ、偏狹に走るの弊なしとしない。然し一面「後世學者狹隘の見を懷き、同を合せ異を兼ねること能はず」と云ひ、偏狹、徒らに他を排斥するを歎ぜるによつて、その志の存する所を知ることが出來る。【編著】〔歴史・傳記〕古史六册(神武—推古に至るもの、風土記又は古記録によつて記紀の記載を補つたもの)〇日本史例始考〇史論叢書〇水戸人物傳〇修史物語。〔地誌〕纂訂古風土記逸文〇標注古風土記〇古風土記逸文考證(各別項)〇和名鈔郡鄕考證〇常陸務事考〇校補新編常陸國誌(明治三十二年刊、中山信名原撰、栗田寛增補)。〔官職・氏姓〕國造本紀考(明治十八年刊)〇封建考〇上古職官考〇中古職官考〇鎌倉職官考〇室町職官考〇守護地頭考〇足利時代守護地頭考〇新撰姓氏録考證二十二册(同三十三年刊)〇姓氏分類考〇氏族考。〔神道〕神祇志料十七册〇神祇志料附考十六册〇神器考證〇特撰神名牒十六册〇二所皇太神宮神德考〇伊勢大神宮神領考〇神祇典禮考〇祭禮私考〇葬禮私考〇葬祭式〇葬祭式考證〇渡夫理和謝考〇常陸式社考〇常磐物語〇天朝正學二册〇神聖實訓廣義。〔雜〕栗里先生雜著三册(和裝本十六册)〇枝威男健(一名古語拾遺講義)〇合講義稿〇釈詞集釋〇學之言草〇文學史贅言〇考古餘録〇皇國乃手夫理〇古謠集〇勵文考〇文籍考略〇禮樂略考【參考】栗里先生年譜(栗田勤)〇栗田寛先生著書目録〇彰考館圖書目録〇栗田寛先生三論周行(日本史の研究第二輯)(田中(義)・宣)

栗の本 くりのもと 「有心無心連歌」を見よ。

グリム童話 ぐりむどうわ 【編者】獨逸人で、兄をヤーコップ・ルードヰヒ・グリム(Jakob Ludwig Grimm. 1785—1863)と云ひ、弟をヰルヘルム・カール・グリム(Wilhelm Karl Grimm. 1786—1859)と云ふ兄弟の共編である。【成立・由來】創作ではなく、獨逸民間の口碑を蒐集したものである。西暦一八一二年に第一卷(八十五篇)、一八一五年に第二卷(七十篇)が刊行され、後版を重ねる毎に增補訂正して内容を豐富にし、且つ材料を吟味して純粹の獨逸民族童話のみとする事に苦心した。(金田鬼一邦譯の「グリム童話集」には、グリム生前刊行のもの二百二十一篇、遺稿から採つたもの九篇、それに斷篇八篇及び「兒童向の聖者傳説」十篇を加へ、總計二百四十八篇を以てグリム童話の全體だと云つてゐる。)【邦譯書】グリム童話集金田鬼一(世界童話大系第二卷)〇グリム童話集菊池寛(小學生全集第四編)〇グリム童話集(日本兒童文庫)。その外には、巖谷小波の「世界お伽噺」、鈴木三重吉の「世界童話集」(各別項)、楠山正雄の「世界童話寶玉集」等の中にも多數譯出されてゐる。【價値】由來民間の口碑なるものは、これを適當な時に集録しておかないと、或るものは消滅し、或るものは新時代の影響を受けて形の變る虞れがある。こゝに着眼したのがグリム兄弟で、その後半生を殆どこの爲めに傾倒したほどである。これを筆録するに當つては、語り傳へられてゐるまゝ、聞いたまゝのものに聊かの潤色も加へることなく、そのまゝに記録する事に努力した。此處に特色があり價値があるので、それらの古き物語の有りのまゝなる存在、生れたまゝの生命の保存こそ、やがてそのものの永遠性を價値づけるのである。この意味に於てグリムの童話は、ゲルマン民族の搖籃の唄であると共に、全人類の空想と道徳の源泉である。グリムの童話を目して「兒童の世界の聖書」であり、「久遠の若さに生きる人間の心の糧」であるといふのは決して不當でない。【影響】世界各國の學界に、民間口碑蒐集の風潮を起すに至つた事は顯著であるが、殊に我國に於ては、童話の新しき形態を示すものとして、アンデルセン童話(別項)と並んで甚大なる影響を受けた。(巖谷・山內)

グリムの法則 ぐりむのはふそく 言語學【名稱】Grimm's law 正しくは The law of the Germanic consonant-shift【獨】Germanische Lautverschiebungsgesetz(ゲルマン派音聲推移の法則)といふ。【解説】音聲法則(別項)の一つ。インドヨーロッパ語族(別項)の原始語(未だ各分派に分れない史前の假想語)の中にあつた子音の中の或るものが、ゲルマン派に限り特殊な變化を締めて規則正しく受けた。この事實を記したものをゲルマン派音聲推移の法則と名づける。かゝる事實の存在を始めて發見したのはデンマークの學者ラスク(Rasmus Rask. 1787—1832)で、「古代ノルス語起原に關する探究」と題する論文(1818)にこれを發表した。併しこの事實を精しく調査し整頓した形に纏めたのは、ヤーコップ・グ

リム（Jakob Grimm. 1785—1863）である。このためにグリムの法則と呼ばれるやうになつた。グリムの研究はその著「ドイツ文法」（Deutsche Grammatik）の第二版（1822）に發表された。多くの實例を示した後、同書五八三頁に下のやうな表を掲げた。これは例へば、ギリシャ語でP音を使ふ所にゴート語（ゲルマン語中の一古語）ではF音を使ひ、古代高ドイツ語（今日のドイツ語の古い時代）ではB音又はV音を使ふ（以下同樣）といふ意味である（缺欄‥符は實例のない事を示す）。グリム以後今日まで研究が進んで、今日では全く面目を一新し、右の表の樣な簡單なものではなくなつてゐる。今日ではグリムのやうにギリシャ語の某音がゴート語の某音に相應する等の言ひ方をせず、原始語の某音が一方ギリシャ語等では某音に變り、他方ゲルマン語では、某音に變るといふ如き、言ひ方をすることになつてゐる。【參考】H. C. Wyld: *Historical Study of the Mother Tongue.* London (John Murray 1906). 〔神保〕

Griechisch（ギリシャ語）	P. B. F.	T. D. TH.	K. G. KH.
Gothisch（ゴート語）	F. P. B.	TH. T. D.	‥ K. G.
Althochdeutsch（古代高ドイツ語）	B(v). F. P.	D. Z. T.	G. CH. K.

栗本鋤雲 くりもと じようん　評論家・新聞記者【號】匏庵【生歿】安政五年生、明治三十年三月歿、享年七十六。【閲歴】幕府の醫官喜多村槐園の第三子、幕府に仕へて諸官に歴任し、軍艦奉行から外國奉行となり、安藝守に任ぜられた。後、フランスに遊學、明治四年歸朝すると、明治の新政となつてゐたので、舊幕臣としての操節を守り、歸農して再び官途に就かなかつた。同六年九月、郵便報知新聞に聘せられて入社、斯界の先輩福澤諭吉と親交のある關係から、慶應義塾の出身者たる藤田鳴鶴・牛場卓造・犬養毅等を同新聞に迎へた。鋤雲は博學で能文、且つ卓見に富み、最も隨筆に巧みで、報知紙上に掲げた「出鱈目」「五月雨草紙」等は、朝野新聞の成島柳北の雜報と竝んで、新聞界の双璧といはれた。報知に在社すること十二年、明治十一年には學士會院會員となつた。門下として犬養木堂（毅）の書いた「栗本鋤雲先生傳略」は、最もよく鋤雲を語つて剩すところがない。【著書】隨筆集「匏庵十種」が最も有名。且つ代表的なもので、彼の見聞になる海外諸國の情報を丹念に記述してゐる。同三十三年五月「匏庵遺稿」が出たが、それには近世經濟史の資料たるべき記事が少なくない。〔高須〕

厨川白村 くりやがは はくそん　評論家【本名】辰夫【生歿】明治十三年十一月京都に生れ、大正十二年九月二日鎌倉に歿す。享年四十四。【閲歴】第三高等學校を經て、東京帝國大學英文科に入り、明治三十七年卒業。第五高等學校・第三高等學校教授を經て、京都帝國大學文學部助教授となつた。この間、同四十四年に「近代文學十講」を著し、名聲を得た。なほ大學院に於けるその研究題目は「詩文に現はれたる戀愛の研究」であつた。大正四年文部省海外留學生となり、同六年歸朝、同八年文學博士の學位を受け、京都帝大教授となつたが、同十二年九月一日、關東大震災の日、鎌倉の別莊にあつて海嘯に襲はれ、附近の田圃の中に打ち上げられてゐたのを家人に發見され、應急手當を施されたが、その效なく、翌二日歿した。【著書】厨川白村全集（全六卷）○近代文學十講（別項）○印象記○象牙の塔を出でて○小泉先生○近代の戀愛觀○苦悶の象徴○文藝思潮論等。【業績】徹して獨創的な見解には乏しいが、近代文學に就いての該博な知識と妥當な識見とのために、大正時代の文藝評論界に大きな足跡を殘した。殊に「近代文學十講」の如きは歐米の近代文學を體系的に日本に紹介した最初の著述として記錄さるべきものである。「文藝思潮論」はその姉妹篇をなすもので、最近の歐洲文學思潮を論評したものであるが、これには前者のやうな粗雜がない。兎に角、彼は近代西洋文學の通俗解説家としては、珍らしい資格を具へてゐた。而も彼の業績は文藝の領域のみに止まらず、更に文藝思潮を背景とした文明批評家として進出し、大正末期の啓蒙期に於て、有島武郎と竝んで、時代の若い男女に強い感化を與へた。「近代の戀愛觀」（大正十一年）の如きはその著しいものである。一つは彼の流麗暢達な文章が何人にも理解され得たからでもあらう。〔平林〕

車還合戰櫻 くるまがへし かつせんざくら　淨瑠璃　五段續　時代物【作者】文耕堂【角書】太平記住吉譬【初演】享保十八年四月八日より竹本座【内容】楠正成が湊川で討死後六年目の事で、足利尊氏が正成七年忌追善のために湊川に建碑の計畫を進めて居る一方、坊門宰相清忠は叛逆を企て、大森彦七の舅阿波入道家延が傳であつた關係上大森を味方に引入れ、且つ正成より依託の寶刀を奪はうとする筋と、大塔宮の若宮郎の宮を匿まひ奉るために後醍醐天皇の牛飼仙洞丸夫婦、本間孫四郎等が或は住吉踊にやつし或は餅賣とまでなり、又は身代りを立てなどする筋とを大きく抱合せて、結局正行と尊氏と握手して清忠を滅すといふ仕組であるが、全篇の山たる四段目大森彦七住狂の場が歴史的に注目すべき箇所である。この段は「太平記」二十三卷大森彦七の事を題材としたもので、大森は以前に正成の女二葉の前と許嫁の仲であつた際、正成から後醍醐天皇より賜つた日の御座に立てられた寶刀を後に正行に渡すやうにと託されてゐた。然るに天下を窺ふ坊門宰相がこれを手に入れようと多年心を碎いた擧句、その雜掌藤右馬尉を伴ひ大森の居城に遣し、現在の舅阿波入道を通じて大森に件の寶刀を渡すべく迫らせた。大森は右馬尉歡待のための猿樂の場へ彼を案内の途上、密かに山陰で寶刀を二葉の前に渡し、折柄の天候を利用して正成の怨靈に寶刀を奪はれようとしたとて物狂はしき樣をなし、歸城後も狂氣の狀態を續け、遂に我子を犧牲にするも厭はずして舅の本心を看破して右馬尉を屠り、寶刀は正成の怨靈に奪はれたといふ事にする仕組である。今日行はるゝ新歌舞伎十八番の一「大森彦七」（別項）の原據をなす作である。〔關本〕

車僧 くるまぞう　「天狗物の謠曲」を見よ。

車人形 くるまにんぎやう　演劇【名稱】人形を轆轤の仕掛によつて動かす所からいふ。【性質】江戸の一人遣の系統を受けた簡易なる人形舞はしで、説經節を語る人形芝居の一形式である。實演に當つて、劇場や寄席を要せず、座敷でも娯樂的に上演されてゐる。勾欄はなく、平舞臺で、遣ひ手が黒子に扮付を穿いて、兩

膝を立てて小さい箱（長さ八寸一分幅五寸高さ中央四寸八分兩端六寸）に腰を下す。この箱の内部に轆轤（直徑約三寸）が仕掛けてあり、轆轤の滑走によつて、遣ひ手が自由に動作する。この小箱は人形遣ひの腰に紡はへてあり、人形の足の踵に垂下する足がかりがある。遣ひ手は膝を立てて、その足指でこの足がかりを挾んでゐるから足遣ひを要しない。そして遣ひ手の左手は胴串を握り右手で手を遣ひ、尻の小箱の轆轤の滑走で人形全體の動作をする。【沿革】文久・元治の頃、埼玉縣入間郡落合村阿津の人、西川古柳（本名西川柳吉）は、人形を西川伊三郎に、説經を八王子の説經津笑太夫に學んだ。車人形の創始者はこの津笑太夫だともいふが、實演者としては古柳である。說經淨瑠璃座（別項）の復興を計り、三人遣ひを簡易に演ずべき方法を考案したものである。古柳は津笑太夫の孫雀家妻三郎と一緒に、明治十七八年の頃までは東京の寄席を打つてゐたが、後八王子に轉じ、同二十一年故鄉の落合村阿津で死んだ。今日の車人形は、八王子の農閑時に於ける民衆娯樂の目的を以て、祭禮の折などに上演されるに過ぎない。【曲目】現行の曲目を擧げると、「高野山愛染櫻」（石童丸）「三荘太夫錦」「小栗武勇傳紙鏡」「蘆屋道滿大内鑑」「出世景清大佛傳記」「日向島屋島日記」「熊谷館騒動」「小牧盛切鏡」「淺倉草紙楓短册」「明石騒動」「勸進帳」「日高川入相櫻」「竹生島辨天由來」「一ノ谷嫩軍記」「小夜中山夜啼由來」などである。右の内「竹生島辨天由來」は、必ず開幕御祝儀として、太夫がこの一段を語ると、直ぐ笛と小鼓一人づつの囃子のみで式三番がある。尤も翁も千歳もない三番叟のみで、足拍子の代りにツケを打ち、太夫は座で「おゝさい〳〵」を唱へるのが古例である。【參考】江戸新根元記○民俗藝術（一ノ三・五）○娯樂の江戸（三田村鳶魚）〔石割〕

車人形（三荘太夫「山別の段」）

車百合 くるまゆり　俳諧雜誌【創刊】明治三十二年十月、大阪市車百合發行所【解說】主幹青木月兎（後月斗）、當時子規系統の地方俳諧雜誌として起つたものゝ一つで、同三十三年七月第一卷を終り、第七號を改めて第二卷第一號とし、當時東京から歸阪した松瀨青々の手によつて續刊されるはずであつたが、豫告のみで廢刊した。後、金尾文淵堂から暫く同名の雜誌を出した事がある。〔石井〕

久流留 くるゝ　俳書　横本五卷【編者】山本西武【名義】長頭丸（貞德）の跋に、「此一册も自己の寶藏につれはをさめて用のあらん時のみひらき見給へと云心にくるゝと名付てまゐらする者也」とある。柱には「樞」とある。【刊行】慶安三年九月、京都秋田屋平左衞門板【内容】西武が貞德に師事してゐる間、俳諧の指合去嫌について不審の生じた都度聞き質して置いた事を、纏めて世に弘うしたものである。「いせの神」以下「今數」に至るまで、伊呂波順に詞を排列し、各語の下に例へば「いなづま 月日不嫌。つまといふ字には二句去也。秋也」といふ體裁で一々説明を附してある。即ち「御傘」（別項）と全く同種の書であるが、「御傘」に比すれば語數も少なく、説明も簡略である。併しその刊行は「御傘」よりも先んじてゐるから、俳諧の指合去嫌を說いたものとしては「花火草」（別項）に次いで古く、而もそれより遙かに詳細なものとして注目するに足る。但、本書に次いで直ぐ師貞德の「御傘」が、慶安四年に出版されたためか、本書は比較的汎く世に行はれず、隨つて今日傳本も少い。〔潁原〕

久流留巻一

「久流留」（帝國圖書館藏）

廓宇久爲寄 くるわうたよせ　「廓の花」を見よ。

廓雜談 くるわざつだん　人情本　三編九册【作者】鼻山人（細川東里山人）【畫工】渓齋英泉【名稱】内題には「永明廓雜談」とある。「永明」は安永・天明の間の義。【刊行】前編・後編は文政九年。第三編は「文政九内戌のとし季秋菊月」と自序にあるが、翌年の刊行でなく、やはり同年刊であらう。【題材】卷頭發端に「昔廓の時花唄にきぶれにあらぬ黒介のいなりのやしろねどろかし、ぇんゐをもやす鍛輪の火、てら〳〵と鍛樋にしんくの房のうつくしく、かほは互に緋ぢりめん、之は其頃數多屋逸曆、中近江屋の花里を身うけし大恩寺に閑ゐ、女房悋氣せしより起りしなり」と說き、逸曆の作詠まで上げてある點から見て、安永・天明間に起つた實話を材料にしたものと推測される。數多屋は吉原江戸町にあつた上總屋であらう。篇中色林の七賢婦として擧げた遊女、例へば大木屋たき川（扇屋瀧川）、松田屋瀬川（松葉屋）、多滿屋千束（玉屋）、雷文珠屋雛楨（大文字屋）、和哥名屋白妙（若菜屋）、寶珠屋名山（寶字屋）は皆實在の遊女で、これと共に入れる數多屋揚卷は上總屋揚卷で、これ亦實在の遊女である。市川八百藏・岩井半四郎が揚卷・助六の狂言をした時、この揚卷の衣裳を、そのまゝ摸した話もあるし、十八大通の一人たる大口屋金翠（八兵衞）がこの揚卷と馴染んで、宗十郎の意休に小袖・

羽織を贈つた逸話も存する、その揚巻が篇中に見えて居る。また大ふく屋宗六が篇中に現れ、「此廓へはじめて藝者の見板を目論見出せし」と說明してある。これは大黒屋秀民(勘四郎)で、烏亭焉馬の「碁太平記白石噺」(別項)に大黒屋宗六と云ふ樓主のモデルになつた人物で、やはり十八大通の一人である。篇中「倉まへの文魚さん」とあるは、日本橋西河岸の材木商山城屋太郎次で、晩年零落して駿河岸に住んでゐた折のことをさす。かく實在の人物を材としたと共に、主材も亦實話を脚色した事が明瞭である。

【梗概】吉原揚屋町に、鶴賀屋金兵衛と云ふ富豪の質屋があつた。江戸町の大數多屋が微祿した時、同情して五百兩を貸したが、その借金を半分返却せぬ中、數多屋の主人が病死し、後家と評判娘おりか(梨花とも書く)の二人で途方に暮れてゐた。鶴賀屋の一子鬢藏はおりかに戀して出入するうち通じ、金兵衛も獨身でありいつか後家と通じた。そこで鬢藏とおりかとを夫婦として數多屋を再興させた。數多屋には、揚巻・白玉などの評判の高い遊女がゐたので、又營業し始めた。鬢藏は十八大通の中に入り、俳號を逸應と云つた。おりかは貞淑ではあつたが、嫉妬深いので彼はこれに絶えず惱まされた。逸應は或る時、友人大ふく屋宗六と江の島へ參詣し、その歸すがら、去年の暮の折、自分の抱へ遊女白玉と中近江屋の花里とで曾我狂言を出演したのが縁となり、逸應は花里と戀仲となつた事を語つた。花里の親元が兒ヶ淵附近の農家であるので身請の相談に出かけたが、父親勝作は既に死し、後家と豐吉とが殘つてゐたが、後家は花里が遊女になつた理由を語り、年が明けたら是非歸郷するやうに取計らつてくれと頼むので、逸應は案に相違し、失望して江戸に歸つた。そして宗六に依頼し身請して大恩寺前に圍ひ、乳母のおさんをつけて置いた。おりかはこれを聞いて嫉妬に堪へず、黒介稲荷に立願し、花里を呪ふと、その一念火の玉と化して大恩寺前へ通つた。花里は夢におりかに襲はれ恐れたが、おりかの所業を聞いて憤り、此方も負けずに呪詛を行ふと、おりかが花里の怖ろしい幻影に襲はれる。抱へ遊女の卷しのを花里と思ひ込み締め殺したので、今度は卷しのの怨靈が現はれ、おりかは遂に病死する。臨終に遺言して決して花里と夫婦になつてくれるなと頼んだが、逸應は表面は承諾しつゝ、密かに花里を今戸村に移した。花里は既に懷妊してゐたのである。或る夜見知らぬ產婆が來て彼女を責めた。いつかその顏はおりかになつてゐた。又暫間頼んで置いた產婆の勝英婆が來たが、これ亦おりかの怨靈であつた。間もなく產氣づいて月足らずの男兒を生み、花里は衰弱して死んだ。何も知らず花里に會ひに來た豐吉達は、仔細を聞いて悲しんだ。逸應は豐吉のため郷里に百石の田地を買ひ與へて慰めた。おりかの母は娘の噂のよからぬを聞き剃髪した。數多屋は三人の亡靈が現れると云ふ評判があつて衰微したので店をやめ、逸應は一子と共に別に松枝屋を開業し、めでたく繁昌した。

【構想】本書は怪談が主題となつて居る。この種の作品は既に前に洒落本として横町の唄女辨天おとよと、木挽町の唄女おとみが、通人露時雨への戀で嫉妬を起し、果は怪談めいた終局に至る「妓者呼子鳥」(別項)がある。これとよく似て居る。「妓者呼子鳥」が既に洒落本の典型を脱して居るのであるが、本書も亦人情本の典型に至る過渡時代の作品で、卷頭に當時の有名な遊女を擧げて、その特徴・服裝等を描いた點は、洒落本の名殘を示して居る。なほ第三編卷末に、「此松枝屋の家名も故あつて斷絶におよびし事別の物語なれば爰に存略なす。その餘興の始末は、倘出版の時を待べし」とあり、「文政十年廓雜談餘興」と冠し、「北里通」が發表された。各々獨立し、一方では續編の形式をなせる所謂二部作である。　(山崎)

廓の大帳 くるわのだいちやう　洒落本　一册【作者】山東京傳【畫工】自畫【名稱】閨中狂言と角書がある。大帳は臺帳で、芝居の脚本帳の義と吉原五丁を大町と云ふのをかけてある。【刊行】寛政元年【諸本】江戸時代文藝資料第一編・洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系所收。【題材】最初に芝居の臺帳そのままの書方がしてある。これは「世界の幕なし」(天明二年)の趣向を採つたのである。書中の狂言は「雲錦角田川」(元文五年)「江戸名所都鳥道」(明和二年)などの系統をひいて、天明七年上演された「都鳥囃生渡」などの筋らしく見られる。卽ち梅若丸說話であつて、それに猿島惣太都鳥の一卷を奪ふ事が書いてある。又篇中に客と遊女とが芝居の噂をする所は、天明八年の中村座顏見世狂言「唐相撲花江戸方」の市川門之助(小田春長)、坂田半五郎(武智光秀)、市川高麗藏(曾我丸)をさしてゐるのであらう。又、天明八年大阪下り淺尾爲十郎が市村座に出場した事、作者初代櫻田治助(狂言堂左交)が「唐相撲花江戸方」の中に、淨瑠璃所作事「辰巳色相肩」を書き、幸四郎・仲藏に演ぜしめた事、中村・市村兩座の顏見世狂言の當つた事等を當てて書いてゐる。その外男藝者が落語を演ずる事は、現存の落語「三人不具」その儘である。

【梗概】男藝者達が眞崎稲荷の境內で、茶番をする。不意に茶屋の簾の中から、女が歌をよみかける。それは遊女稲鶴であつた。客の鶴擧がさうさせたのであつた。それから酒宴となり、茶番、芝居の噂、奥女中の批評などして、夕方に歸り支度をする。日も暮れて吉原は螢のやうな賑かさである。大居の部屋持女郎は格子先に來た情人と物語りをしてゐる。山の手通の二人連、格子先で冷かして立ち去る。折柄眞崎稲荷より鶴擧・稲鶴等の一行が、どや〳〵と歸つて來る。二階にあがり、土產物などを分ける。鶴擧の隣の部屋では、新造卷鶴・村鶴の二人、火鉢に帆立貝をかけ飯をたべながら、客人の噂など喋り散らす。下座敷では烏口といふ客が、女に振られて憤つて女を打つところへ、二階から鶴擧、迎へに起され下りて來る。

【構想】京傳の洒落本は多いが、演劇の通を述べたものは珍しい。京傳の多方面な趣味を表はしてゐる。その獨特の細かな穿つた觀察も見えるが、彼の作としては秀でたものではない。例に依つてそつの無い作と云ふだけであらう。　(山崎)

廓文章 くるわぶんしやう　「夕霧阿波鳴渡」を見よ。

暮の二十八日 くれのにじふはちにち　小說【作者】魯庵香生(內田不知庵)【發表】明治三十一年三月「新著月刊」【刊行】現代日本文學全集四十一編所收。

【梗概】年の暮二十八日、たつた一日に於ける三人の行動を主として敍したもの。人物の第一は有川純之助、敎養の豐かな氣宇の濶達な、メキシコ開拓を終生の事業にしてゐる冒險志士的夢想家である。第二はその妻のお吉、家附の娘でお人好しだが、物わかりの惡い、無敎養な我儘女である。第三は中條靜江、これは純之助の亡友の妹、基督敎信者の學校敎師で、聰明な純潔な可憐な佳人。二人の間には久しい間兄妹のやうに濃い交情がある。純之助はメキシコ渡航を條件としてお吉と結婚したのだが、仲人の老婆心からそれがお吉一家に通じてゐなかつた。それにお吉は、純之助と靜江と不純な關係があるものと疑つてゐる。それで、純之助がメキシコ渡航を言ひ出すと、お吉はすぐ自分の財產だけを取つて自分、を棄てるものと速斷して、ひどいヒステリーを起す。純之助を戀ふる心があるだけ一層それが甚しい。かういふ行き詰つた夫婦關係が暮の二十八日に頂點に達する。純之助は自分と靜江とに浴せたお吉の罵言に堪へかね、靜江を連れて家を飛び出す。二人はいつともなく上野の山內を逍遙する。靜江の言動の隱約の間に、昔純之助を戀してゐたことが窺はれるが、彼女は悲しくそれを諦めてゐる。純之助の心にも同じく靜江への戀の芽生があつたことが知られるが、これも運命の惡戲を今初めて悟る。純之助は靜江から、自分が功名心の惡魔となつて、家庭を犧牲にしてゐる不德を責められ慄然と悔いる。さうして一時功名心を抑へて、夫としての愛で先づ妻の心を改めようと決心する。

【解說】この作物が現はれた當時から、明治文壇の傑作として評判された。どの人物も類型的であり、事件が複雜した割合に、事件の繫がりと心理の描寫が、外面的で荒けづりである。これはこの作者の作物に共通する缺陷である。それにも拘はらず、この作物が當時の文壇の注意を呼んだのは、メキシコ渡航といふやうな、その頃にあつては奇抜な事件を家庭問題と戀愛問題に結び付けたところの清新な着想にあつた。三十一年頃の明治文壇の傾向が最もこの種の作物を要求する場合に現はれたので、光明小說・宗敎小說・家庭小說・社會小說等のいづれにも先驅した作物と見られたのである。無論、この作者の作物中での傑作であり、また彼の社會小說は、この一作から出發してゐるけれども、この作物の價値の半ばは、寧ろかうした文學史的なものに深い意義を持つであらう。なほ彼は、「腹案なる長篇の發端と見るべきもの」と附記して居る。なるほど小說の構成として見れば、全體の形式が發端的で、事件はむしろこれから發展すべきものと思へる。【附記】この小說は、暮の二十八日に脫稿したので、さう題されたと傳はつて居り、作者自身も、後年かう書いてゐるが、「新著月刊」の分には、明治三十一年二月十九日脫稿としてある。　(藤田(泉))

吳羽 くれは　「新事物の謠曲」を見よ。

黒い眼と茶色の目 くろいめとちやいろのめ　小說【作者】德富健次郎(蘆花)【刊行】大正三年十二月警醒社。蘆花全集第十卷所收。

【梗概】十三歲の時、中途退學した京都の協志社へ敬二が再入學したのは、明治十九年であつたが、いつしか校長飯島先生の妻多惠子の姪の山下壽代といふ女學生を戀するやうになつた。手紙の往復、寫眞の交換から、遂には密に會合して語り合つたりした。この事が敎頭・校長の知る所となり、二人の間は引分けられてしまつた。同二十年、敬二は死を覺悟して協志社を脫出し、鹿兒島まで走つたが死地を得ず、東京に歸り、兄の新聞社に入つて記者となり、樂しからぬ生活を續けてゐる。同二十六年の夏、赤坂氷川町の兄の家で、門側に取付けた郵便箱を開けて山下壽代の死亡通知書を見た。

【解說】協志社とは同志社で、飯島先生は同社の創立者新島襄、敎頭能勢又雄は、伊勢時雄(横井小楠の長男)で、壽代とは新島襄夫人の姪、伊勢時雄夫人の妹山本久榮である。著者は幾度かこの久榮との初戀を小說化せんと企てたが、一は孝心深い著者は、斯かる一身上の失敗を、父母の生存中に天下に公表する事が、兩親の患ひであると思ひ、一には夫人と自己との間に、愛情の罅隙を生ずる事を恐れて、執筆に躊躇してゐた。そして、老父一敬翁が歿した卽日、始めてこの小說執筆の決心をした。卽ち著者は大正三年五月二十六日を以て第二の誕生日となし、九月十四日始めてその序詞を書き、十月十八日遂に完結を告げた。なほ黒い眼とは、同志社々長新島襄であり、茶色の目とは山本久榮である。　(以上神野)

【批評】小說といふべく、餘りに自傳的な小說である。取扱はれた中心の戀愛問題は、著者の獨り合點のみが多く、讀者の胸には案外深く浸み入らない缺陷がある。その外、讀者にとつて[illegible]のない混雜などは勘定外に置いて、事件と人物を、我武者羅に積み重ねて行く手法等も、まるで小說常識を破つて居るに拘らず、最後の一頁まで、讀み了らねば止まない魅力を與へるのは、一に著者の一本氣な情熱と、どんな題材を描いても、如實の暖かみを與へずに措かない著者の多角的な理解性によるものである。それと、この全體が含んで居る時代相にも強く惹き入れられる。　(以上千葉)

黒岩涙香 くろいはるいかう　飜譯家・新聞記者

【本名】周六。少時「大」と稱したことがある。【別號】古概・半士半商人・香骨居士・冷眼子・民鐵、その他夥しい數に上る。涙香は主として飜譯小說の雅號で、香奩體の詩「紅涙香」から採つた。【生歿】文久二年九月二十九日高知縣安藝郡川北村前島に生れ、大正九年十月六日東京に歿した。享年五十九。【閱歷】父市郎は郷士の出で、數理の造詣深く、村塾を開いて敎授してゐたことがある。涙香は幼年から高知その他の家塾で主に漢學を學び、明治十一年大阪に出て英語を學んだ。翌年上京して成立學舍・慶應義塾等に入つたが、中途退學、專ら文章と演說とに熱中した。明治十三年、大岡育造の「東京輿論新誌」に執筆して文名を揚げ、又盛んに政談演說を試みた。十六年から同盟改進新聞・日本たいむす・繪入自由新聞・今日新聞(後の都新聞)等に居た。今日新聞に始めて飜譯した「法廷の美人」で素晴しい好評を得たのみならず、社說雜報まで書いて特色を發揮したが、楠本正隆が都新聞を買收したので、二十五年十一月去つて朝報社を起し、萬朝報を創刊した。「眼無王公、手有斧鉞」を標語として峻烈な社說を書く傍ら、探偵小說を飜譯して連載した。これが一層世間の歡迎を受け、そのためばかりではないが萬朝報は、一時、東都新聞第一の發行高を見るに至つた。その後、三十五年に思想結社理想團を起して社會の淨化を計つた外、精力主義、靈魂不滅論を唱へて絶えず人心の警醒に努力し、又は社內に人材を集めて、萬朝

黒岩涙香

た事が分る。彼の作には近江の地名が甚だ多い。持統帝に供奉して、三河・吉野へも赴いてゐる。『萬葉集』巻十七の、三國五百國が傳へ誦して家持に知らせたとする黒人の「婦負の野に」の歌を信ずれば、越中國婦負郡のあたりへも旅した事になる。今日見得る彼の作は皆この旅の中に成つたもののみが傳へられてゐる故、彼の旅行の多い經歴と彼の作品とは分つべからざる關係に在る。

【作品】『萬葉集』に出づ。全部旅の歌であることは他に例のない特色である。『萬葉集』巻一に二首、巻三に十二首(「斯く故に」の歌は、或る本の傳へによれば黒人ではなく、小辨の傳記不明の作だと云ふ)。巻十七に三國五百國が傳へたと云ふ黒人の歌が一首。以上十五首が確かに知り得る彼の作である。すべて短歌である。他に彼の作かと疑はれるのが若干ある。巻九雜歌部の半頃に「高市ノ歌一首」と題する「率ひて」の歌は、契沖の言ふ如く黒人の作と見て良い。(「萬葉集巻九管考」森本治吉、國語と國文學昭和三ノ一一參照)。次に、巻一雜歌部の「高市古人、感傷近江舊堵作歌。或書云高市連黒人」(「或書」以下は細字の註の文)」と題詞のある短歌二首は、「古人」は「黒人」の誤りだと一般にされてゐるが、疑問がある。次に巻三の「高市連黒人ノ羇旅ノ歌八首」の中の第七首「妹も我も」の歌の次に「一本云」として載する短歌は、黒人の作でなく、内容から判ずるに、黒人の妻か何かの作と見るべきである。

【作風】今日傳はる彼の作が、全部旅の歌であると云ふ事が彼の面目を物語つてゐる。勿論旅の歌以外の作も作つた事であらう。それが傳はらないのは偶然傳はらなかつたのでもあらうが、又一方、旅の歌が最も彼の特色を發揮し、黒人と云へば『萬葉』編纂の當時に於て「旅の歌人」として記憶されてゐたと云ふ事情にも依るであらう。而して同じ旅の歌ながら他の歌人と違つて、海、殊に船に關する歌の多い事は他の歌人に類を見ない特色である。「何所にか船泊てしけむ安禮の崎漕ぎ廻みゆきし棚無し小舟(巻一)」「旅にしてもの戀ほしきに山下の赤のそほ船沖に漕ぐ見ゆ(巻三)」「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隱る棚無し小舟(巻三)」の如くで、この他、五首の海・舟の歌があつて、彼の作の半數以上は、この種の作で占められてゐる。次にその歌が、右の例歌でも分るやうに、甚だ客觀的な歌風である事も注目すべき彼の特色である。『萬葉』の歌は奈良時代に入つて著しく客觀的な色彩を增加して、終に赤人の如き純客觀歌風の歌人をすら出したが、その客觀歌風の先驅者は黒人である。人麿や、黒麿の時代に、客觀の新歌風を開いて、我國の歌に全く闢けてゐた一面のある事を教へた點で、彼も亦獨特の歌人と云ふべきである。この客觀歌風の成立は、漢詩の影響に基づくものであらうことは、先人の既に説いてゐる所である。〔森本〕

黒蜻蛉（くろとかげ）　小説【作者】廣津柳浪【發表】明治二十八年五月「文藝倶樂部」【刊行】現代日本文學全集七編所收。

【梗概】大工の與太郎は、仲間から愚圖と云はれ交際知らずと罵られるのも關はず、養父の吉五郎の不機嫌な顔を見るのが厭さに、ただせつせと稼いで暮して來た。併し養父が鐘馗の入墨をしてゐるわからずやな上に、朝から晩まで大胡坐で酒びたりになつてゐる飲んだくれなので、いくら働いても、その酒代には始終追つかけられてゐるのだつた。二十五六にもなり一人前の腕前になつたので、棟梁はしきりに女房を持てと勸めても斷るので、吉五郎に逢つて無理に承知させた。ところが、最初の女が二十三日目に逃げ歸つたのを手初めに、第二第三、六人までも女房は三十日と居附かないで暇を取つて行く。それは皆舅の不倫な仕打を恐れたためだつた。それに懲りた與太郎が父に迫られて七人目の女房として迎へたのがお都賀である。「名から松皮と呼ばるゝ黒瘦貌、目さへ左には星入りたり。眉毛は赤土の土手に、枯木のまばらなるも嘶くや。」のひどい醜女で、舅は口ぎたなく「牛目の蜥蜴」と罵つてゐる舅に、このお都賀にさへ魔手を延ばさうとした。しかしお都賀は優しい良人の愛情に縋つて、逃げて行きもせず、その後はなほつらく當る舅におとなしく仕へて暮すうちに、夫婦の間には子が出來た。舅の不機嫌は頂點に達して、孫に手荒なことさへしかねないし、夫婦に對しては、一層つらく當つた。與太郎を仕事に出した後、お都賀は幼兒の笑顔を唯一の慰めとして忍苦の日々を送つてゐたが、或る日、井戸端で世間話をしてゐるうちに「亭主殺げるにや、どの手がよかろ、青い蜥蜴に蜘取蜘蛛混ぜて」といふ昔の小唄を教へられ、わが身うちの思ひにそれが毒矢の如くさゝるのを覺えてぞつとした。それから四五日後、與太郎が夜更けて歸宅すると、父吉五郎が血を吐いて死んでゐる傍に、お都賀の遺書が殘されてゐた。「……お前さまを樂にしたい、他に願ふ事は何にもないのです……恐くて居ても立つてもゐられませぬ、死にゝ參り申候。」

【解説】作者が開拓した獨得の境地たる悲慘小説の一つであるが、折柄批評家が要求してゐた深刻小説の旨に合したので、文壇の讃辭を集めることが出來た作である。從來の小説の主人公といへば美男美女に限られる觀があつたのに、これは片はな醜貌の女を拉し來り、鬼の如き暴戻な舅に、虐げられる境遇に置いて、その悲慘な運命を描いてゐる。これまでの作家が顧みなかつた方面に觀察眼を向けて、人生の新境地を示した事は時代的に見て正に作者の手柄と言はなければならない。但、取材的には十分深刻であり得ても、内容的にはさまで深刻に感じ得ないのは、まだ人物の個性描寫・性格描寫に、不足するものがあるためである。それにしても、當時紅葉の寫實主義、露伴の浪漫主義と鼎立せしめる時、これら氏の作品群が敢て見劣りするものでないことは言ひ添へて置く必要があらう。〔小島〕

黒主（くろぬし）　歌人（六歌仙の一）【姓】大友、大伴とも書く。但、大伴は遣臣命の後、大友は近江國滋賀郡の郷名にて黒主は近江の人であるから大友が正しい。古今集眞名序には、大友とあるのに作者名を大伴としてゐるのは本源を知らぬための誤寫であらう(年山紀聞)。【別號】志賀黒主(歌語)【時代】貞觀・延喜の頃か。【家系】猿丸大夫の三子(古今集目錄)大友皇子の後で、與多の孫(和漢三才圖會)。【閲歴・作風】園城寺の地主であつたが、奏狀して園城寺を延暦寺の別院としたといひ(歌語)、亭子院の石山御幸に際して歌を獻じ(大和物語・新千載集巻十六)、志賀の唐崎にて祓をしてゐる人の處に參りきて、下仕の女に戲れ、祓が終了して祿をもらつた(袋草紙)といふから、近江に住んでゐた事がわかり、祓に祿をもらつた點から陰陽師で(歌語)、神祇伯の官人であらう(名物考)とされてゐる。仁和の初めに大嘗會の歌を獻じ(「歌仙傳」猿丸大夫の孫、續後拾遺集巻十)「仁和御時御息所家歌合」の歌を詠んだ(元永本古今集巻二)。謠曲「志賀」は歌仙黒主を取扱ひ、謠曲「草紙洗小町」は腹黒い黒主を取扱ひ、或は形よりも心が優しく、隣の女が心を動かして言ひ寄つたけれども、應じなかつた(十訓抄)といふ。勅撰集に入る歌は、「古今」三、「後撰」三、その他凡そ四首で、その歌風に就いては、「古今集」序に「そのさまいやし、いはば薪を負へる山人の花のかげにやすめるが如し」とある。滋賀の黒主明神(或は志賀明神)は黒主を祀つたものである。

【參考】古今集目錄 ○顯昭古今集序註○大日本史二一八　〔西下〕

黒船（くろふね）　歌舞伎・淨瑠璃【題材】大阪北野神明鳥居の南伏見屋裏に住居してゐた堂島の仲仕住吉屋四郎右衛門は、綽號を根津と呼ばれたが、性俠氣に富み、諸事の達引に譚をたてるのを常とした名物男であつた。事件は寶永の頃、大阪北濱加島屋の丁稚が、男色の事から上町の町奴で、茶筌組の頭分(一説に馬士頭)庄兵衛といふ者に米切手を奪はれたのを、四郎右衛門が新町橋で取返したといふのである。【沿革】寶永末頃、大阪嵐三右衛門座に於て、作者、中田嘉右衛門が始めて脚色し、染川十郎兵衛の黒船忠右衛門で大入大評判をとつたと傳へられる。上演年月は未詳。染川の型に姉川新四郎が工夫を加へて遂に自己の藝とした。彼の初演は享保三年大阪嵐座に於てであらう。この時の役割は、

忠右衛門(姉川新四郎)、野手庄兵衛(桐野谷權十郎)、判じ物喜兵衛(山本喜五郎)、孫三郎(鐵山四郎三郎)、五郎八(三代嵐三右衛門)、右兵衛左衛門(竹中藤三郎)、黒船女房(二代上村吉彌)、傾城瀬川(松島兵太郎)等。

次いで享保七年二月、大阪角の芝居「男一匹出入湊」(三國彌五四郎作)に、又、同年九月、同座、京上りの暇乞狂言に、同年十一月、京都早雲座「男模様二枚繪形」(篠山勘助作)に、四度目を上演した。同十年三月、大阪角の芝居「黒船出入湊」の評判によつて江戸にも流行したが、同年七月京都早雲座では女に書替へられた。更に「出入湊」と、當時有名な奴の小萬を併せ脚色した「奴の小萬黒船出入湊」(元文四年七月、大阪大西芝居、中田萬助・津打治兵衛作)とによつて、淨瑠璃の「昔話の男作今様の女作」(正月豐竹座、並木丈助等作)や、「北濱名物黒船噺」(明和六年七月北堀江座、菅專助作)や、「性根競姉川頭巾」(安永三年四月竹本座、近松半二等作)等が生れた。かくて俠客狂言(別項)としては最も流行したので、殊に京阪ではその第一位にあつた。この系統とは少しく別に、角力取宇波(?)の吉兵衛との達引を見せた「攝津國四郎右衛門北濱名物男」(寶暦五年十二月大阪角の芝居、古實作兵衛等作)や、同じく早川又兵衛等の出入を見せた「年中行事」(明和七年四月大阪角の芝居、並木正三作)等の當り狂言がある。〔秋葉〕

【參考】黒船一代男狂言の話(續奇作者樣編中卷)○黒船忠右衛門の實說(松村操「實事譚」第三十編)○攝陽奇觀(寶暦十二年條・浪花叢書)

黒本（くろほん）　草雙紙の一種【解説】黒本とはその表紙が黒色なるための命名である。赤本(別項)の後を嗣いで、延享・寛延・寶暦・明和・安永の初期に亙つて、江戸で刊行された草雙紙の特稱である。體裁は五丁を以て一冊とすること、中本形であること、すべて赤本以來の傳統を守つてゐる。外題は黒表紙の上に赤青の色に印刷したものを貼つて、それには繪も描いてある。内容はお伽噺の筋を採つたものが多いが、やゝ筋を複雜にしてゐる。芝居の荒筋、淨瑠璃の輪郭、歴史傳記なども少なくない。敵討物また相應に行はれてゐた。何等かの形で當時の世相にも觸れようとする傾向も見られる。繪組も赤本よりは複雜になつて、必ずしも幼童の玩びのみと考へなくなり、文章も幾分か筋を立てるやうになり、幼稚ながら繪解小説の體を取つてゐる。はじめは、畫工・作者の名を署さないものが多かつたが、漸次畫工の名を明かにし、且つ丈阿・和祥等より作者名を示すやうになつた。畫工は富川房信(吟雪)・鳥居清滿・清經などが多く、板元は鱗形屋・山本屋・鶴屋などが多い。黒本は又青本(別項)と密接な交渉を有つてゐる。流行期間殆ど同じく、内容も亦同じく、要は本の表紙の差にある(青本參照)。黒本には、以上の外、又別種の意義に於て用ひられるものがある。去年新版された青本の、今年になつて黒表紙を附けかへて世に出たのも黒本の名で呼んだ。この場合には、いふまでもなく新版の青本に對する古版の青本を意味する。(草雙紙參照)〔山口〕

黒本「鬼鹿毛無佐志鐙」(冨川吟雪畫)

畔柳芥舟（くろやなぎかいしう）　評論家・飜譯家【本名】都太郎【生歿】明治四年五月十七日生、大正十二年二月十二日歿。享年五十三。【閲歴】東京帝國大學英文科出身。高山樗牛の少年時代からの友人で、一時は「帝國文學」に、盛んに文藝評論を執筆したが、批評家としての特色はなかつた。本領は英文學の研究にあつて、その方面に該博な知識を有つてゐた。明治四十年七月刊行の「文談花談」は、彼の著述中異色を放つもので、時流文壇に關する意見を多く收めてある。また文藝の病理學的研究を試し、東西文學上に現れた植物美を論ずる等、趣味的に文學を涉獵する傾向があり、それが晩年までつづいた。大正五年、姉崎嘲風等と雜誌「人文」に關係したが、その後は文壇から離れ、一高教授たるの傍ら、「英和大辭典」(三省堂)の編輯に盡くした。〔高須〕

桑名屋德藏入舟物語（くはなやとくぞういりふねものがたり）　脚本　五幕十二場　時代物【作者】並木正三【名稱】脚色の中心人物の名を示し、船乘である所から緣起を祝つた名題である。角書に「一番讚謡　一代無破損」とある。【興行】明和七年十二月二十七日初日、大阪中の芝居、小川吉太郎座興行。大詰に宮薗節を用ふ。太夫は、宮薗金太夫、ワキ宮薗淺太夫。

【役割】高丸龜次郎・桑名のお霜(小川吉太郎)、多賀律一角・德藏實は多賀律新藏・藤姬(三枡大五

郎)、新藏女房小汐(助川大吉)、石堂帶刀・白子の六郎兵衞(市の川箕四郎)、相模五郎時行・船名屋傳藏(中村歌右衞門)、敎物詰館後に足利荒次郎(嵐實又太郎)、山名巳之丞(嵐實吾五郎)、傾城檜垣(中村粂太郎)等。

【脚本】書卸臺帳の傳はる外、多少省略された筋の文政五年大阪河内屋版繪入根本「桑名屋德藏入船噺」がある。書卸臺帳は歌舞伎脚本集(日本名著全集)・德川文藝類聚脚本下等に所收。【題材】桑名屋德藏といふ不敵な名船乘があつて、海上に亡靈と問答したといふ說話を、讃州丸龜のお家騷動に假託したものである。

【梗概】(序幕)(深川揚屋の場)足利尊氏が金毘羅權現の利生をうけた故例に從ひ、將軍宣下のために、新將軍義滿と勅使とが象頭山に參るので、讃州高丸家の若殿龜次郎は饗應役に命ぜられたが、歸國の日も忘れて吉原の傾城檜垣に迷ひ、象頭山の饗餐金も費消してしまつた。家老多波井一角の苦衷を察したのは日付役石堂帶刀であつた。(返、吉原揚屋の場)檜垣が馴染の山名巳之丞に操を立て通した事から、巳之丞が龜次郎に切付けて廓中の大騷ぎとなつたが、こゝに駈けつけた日付役大館勘解由は一味の巳之丞に金を與へて、檜垣を身請してしまふ。所がこの騷動は、檜垣が巳之丞に身請金を出さす手段で、すべて帶刀の謀であつた。龜次郎と檜垣とは一角によつて長持に隱されて深川の揚屋に運ばれる。(返、遠州灘船中の場)龜次郎が踊子の櫻と春雨とを揚げて騷ぎの席へ、一角が現れて始めて檜垣は船頭德藏に殺させたと明かし、揚屋の簪のこの席も讃岐へ向ふ船中と告げた。踊子達も別家の淡路大領家の姬であつた。(引道具、同じく舳の場)船足が重くなり、波が高まると、檜垣の亡靈が現れ、德藏が親より大事なお主のために殺したのだと言ふと、その言葉を忘れるなといつて消え失せた。〔二幕〕(高丸館の場)新將軍の叔父足利荒次郎は相模五郎・淡路大領等と共に謀反を企てゝゐる。相模五郎と德藏とが瓜二つな所から、荒次郎は五郎と思つて德藏に祕密を打明けた。德藏が去就に迷つてゐると、檜垣の靈が現れて、主のために盡せと言つた。相模五郎が僞勅使となつて入込み、一角の策の裏をかいて遂に一角に切腹させた。船路によつて上洛を急ぐ將軍にも危險が迫つたが、德藏の忠節で恙なきを得た。(返、洲崎の場)荒次郎は、水練の達者な水夫灘六に、將軍の船を覘へと命ずる。(前の館の場)捕手は五郎を圍んだが、錦幟を仕掛けた笏を掴られて、悶絶する。〔三幕〕(濱邊釜木の場)巳之丞は父の鄕領から命ぜられて、龜次郎所持の家傳の色紙を奪はんとして恰も柿の木金助が飛脚を殺して色紙の箱を手に入れたのを見すまして百兩で買ひ取つたが、中に色紙はなかつた。金助事、多渡津新藏に謀られたのである。白子の六兵衞が孫娘おでんに金を持たせて來たのを、新藏は龜次郎の金調達のために、我子と知らず殺して奪ひ取る。〔四幕〕(桑名屋德藏内の場)德藏夫婦は、龜次郎と檜垣を匿まひ長持に入れた。この德藏は先代が十年以來歸らぬ所から入聟となつた多渡津新藏だが、こゝに相模五郎が先代の德藏と名乘つて入込んで來た。新藏は鄕領から龜次郎の首を討つやう命ぜられたが、先代德藏と言ひ交した桑名のお濱が五郎と知らずに、今度の德藏を追つて來たのを、守袋によつて龜次郎の異母妹と知つたので、これを討つて龜次郎の身代りに立てた。五郎を覘つた鐵砲玉は長持に中つたが、龜次郎は檜垣の靈に護られてゐた。尋ね寄つた白子の六兵衞に讃岐明神が憑つて、五郎には即刻この場を落ちよと告げる。〔五幕〕(淡路大領館の場)大領は將軍家世襲の寶をこの館に隱し、軍勢を催すべき機の至るを待つた。龜次郎は奴駒藏と名乘つて住み込み、糸姬・櫻・春雨等に纏ひ付かれてゐる。糸姬は父の罪をも輕め、我が戀も叶へたさに、鎌祭の酒をあふつて酒亂を現し、親姉妹を追ひ廻し、寶を掴出し、終に時計に仕掛けた烽火をあげる。一味の諸大名が集つたが、大領の言譯に抄怒り立つた。遠く(向ふ座敷)の櫻樹の上から、帶刀は遠眼鏡でこれを眺めてゐる。(返、住吉明神の場)淡路の方に狼煙が上つたが、燒金の如き光に眼を射られた相模五郎は天命の盡きたを覺つた。捕手が寄せる。(返、元の館)大領と荒次郎とは帶刀・德藏等に圍まれた。龜次郎は寶を探した功により知行元の如く下され、糸姬は本妻、妹二人は妾と決まる。荒次郎は切腹。相模五郎は多度津新藏に追はれ、祕法を以て大蛇と化して、奥の築山に逃げた。(返、奥座敷の場)五郎の祕法も金毘羅權現の金幣の前には效かずして、新藏の手に押へられる。

【構想・價値】正三作の反逆物の中に、將軍を覘ふ題材の一類で、相模五郎によつて武略を示し、敎異法師事足利荒次郎によつて超人的な威力を加へた。更に脚色の中心とも見るべき桑名屋德藏の豪放不敵の性格が時代物としての重味を增したことといふまでもない。又複雜味を添へるために、敵味方互に祕策を弄して相當舞臺效果をあげてゐるが、これはいはば見物が策に乘ぜられた氣味に見える。併し淨瑠璃芝居に於て、この興味に慣らされた當時の見物としては、これらに劇の本質的價値を認めたことと思ふ。巳之丞對檜垣の身請問題や、深川の揚屋が忽ち變じて遠州灘の船中になつたことや、僞勅使を一度看破しながら結局謀られたのや、惡方に色紙の僞箱を摑ますために飛脚を殺すなど、これ等の脚色は相當に舞臺效果を舉げて、時代物の一特性を形造つてゐる。本作は又一面に各幕の巧妙な逆行をも認めなくてはならない。高丸館で惡方の計略が着々成功してゆくために味はへる緊張味、大領館で前半の淨瑠璃を用ひた戀の場面と、後半の降つて湧いたやうな大騷亂の場面との照應など、即ちそれである。大領館の龜次郎對姬の關係は「鬼一法眼三略卷」(別項)の菊畑、德藏のおでん殺しは「菅染野中の隱井」(別項)の長吉殺し等の如き、先行作の影響も當然發見せられるが、その部分的脚色から見ても、正三の一傑作たる地位は堅固なものがある。僞德藏を出し、お濱の龜次郎身代りの如き、一人の役者の利用でもあるが、僞德藏の出現は脚色に非常な興味を與へた。金毘羅權現に譚はれを附けたのは、當年の流行風俗を採り入れたと見られるであらう。かくて本作に正三の最も圓熟した筆致が發見せられるが、これを活かした當代隨一の實惡中村歌右衞門の演出をも、併せ考ふべきものがある。【影響】本作はその後、上方に於て屢々上演せられて幕末に及んでゐるが、江戸に於ては、類似の天竺德兵衞の脚色に多く吸收せられて、直接本作の上演は殆どない。部分的には檜垣の亡靈が多く利用された。鶴屋南北作「獨道中五十三驛」の如き一例である。【參考】歌舞伎脚本集(日本名著全集第八卷)解題 守隨憲治 (守隨)

桑の實(くはのみ)

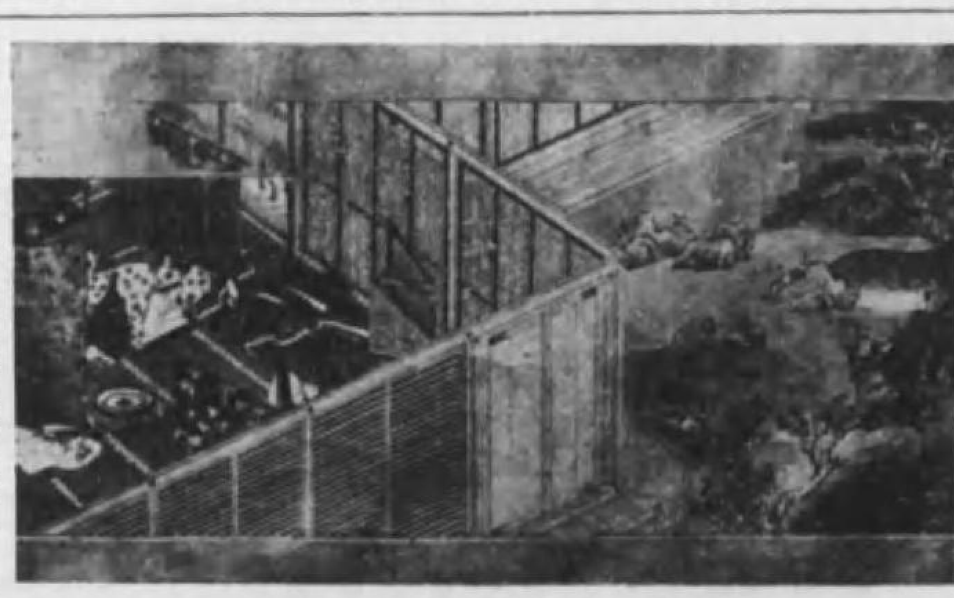
小說【著者】鈴木三重吉【發表・刊行】大正二年七―十月國民新聞連載。同三年一月、春陽堂刊。鈴木三重吉全集第九卷・明治大正文學全集第二十八卷所收。【梗概】おくみは二つの年に一人の父を喪ひ十一の年まで繼母の手で大きくなつた。かくして四十歲までも一人を守り通して來た繼母はおくみを人手に渡して再婚した。今では上海に居るとの事だが何の消息もない。おくみの貰はれた先は繼母の勸めてゐた赤十字病院の書記であつた。かくて彼女は十四になつて女學校へ上らうとする間際に養父は死に、再び養母と女二人の生活に入つた。彼女は生活の矢面に立たねばならなくなつて、或る時は商品陳列館の賣子となり、或る時は會社の給仕となつたが、一日、新聞の案內廣告で、平河といふ洋畫家の未亡人が小石川水道町に小さな手藝の店を開いて生徒を集めてゐた處へ女中代りに入ることになつたが、未亡人は彼女を妹か弄子のやうに慈しんだ。間もなくその店は閉され、千駄木へミルクホールを出した時には彼女も十六となつた。その店も亦失敗に終り種々迷つた擧句、未亡人は現在のカフェーを經營する事になつた。おくみはもう二十なので、身の振り方も考へねばならず、その上、今は雇人ともつかず、家族ともつかず、妙な立場で身を寄せてゐる矢先、水道町以來見知越の青木と云ふ洋畫家から、新しい婆やの見つかるまで、子供の面倒を見て貰ひたいと云ふので、彼女は喜んで彼の家へ行くことになつた。青木の妻は餘りに派手過ぎる性格やその他の事情から、一人の子供を殘し、今は殆ど離緣の形で實家へ歸つてゐるのだつた。彼女は、全然雇人の心を離れて細かいところまで氣を配つて働いた。そのために子供が先づ彼女に懷き、主人もその弟も親しい心で彼女に接した。アトリエの裏では毎日温かい乳を生む二頭の山羊が鳴いた。生垣の外には桑の實が熟れてゐた。或る日、彼女は主人のアトリエで彼の求めるまゝに、その夢について語つた。「私の氣のせゐでございませうか。美しい中に何となく寂しい氣がいたします。」それは彼女の心境であると同時に彼の心境でもあり、藝術境でもあつた。このよき鑑賞者を得て彼の心に仄かな光が點ぜられた。やがてその夢を中心に彼女の部屋が彼の藝術によつて次第に裝飾されて行つた。併しそれは戀と云ふべく餘りに地味な果實であつた。恰も桑の實の如く。やがて、彼女は彼の家を去らねばならぬ日が來た。約束によつて、未亡人が新しい婆やを見つけて來たのだ。そこで、彼女はそつと帶の表を解き、彼のために輕い夏布團を縫ふのであつた。

【解說】二十五歲で處女作「千鳥」を、二十九歲で長篇「小鳥の巢」を發表したこの作家は、三十二歲の成熟期に、この長篇「桑の實」を發表し、その後二三の短篇を書いただけで、作家としての頁を閉ぢた。「桑の實」は、作品としての價値からも、時代的な意味からも、作家の創作家的生活からも、意義の多い作物である。明治四十年代の一主潮であつた「ホトトギス」派から出發したこの作家は、事件を外から平面的に寫象するだけで、決して人物の心境や心理を說明しない。現在詞止めも寫生文派の特徵である。それにかゝはらず他の寫生文派のやうに無味に陷らず、光つた感覺と詩的な純情が、讀者を刺戟するのは、この作家の特殊な高い天分によるもので、それが明治の文壇に於いても、この作家を比類のない獨特な地位に置く。それと同時に「桑の實」の構成なり、色調なりに浮ぶメルヘン的な純潔さと超現實さは、この作家がこの作品の直後に轉換したところの、童話作家としての傾向を有機的に結び付けてゐるもので、作者がこの作を自評して、人間的證券や、人生上の提示が無いことを指摘して居るが、「桑の實」には、それを少くとも必要としないほどユニイクであり、日常些事のみの積み重ねのみなのに、何等の煩瑣をも感じさせず、しみ〲とした哀愁に滿ちたこの作品は、優にこの作家の完成した代表作といへる。(千葉)

桑實寺緣起(くはのみでらえんぎ)

繪卷　二卷

【解說】享祿四年以來、足利將軍義晴は細川氏の亂を避けて本寺に假寓すること三年に及んだが、この滯在中、天文元年に義晴が本寺に寄進したのが即ち本繪卷であつて、繪は土佐光茂、詞は後奈良天皇を初め、青蓮院宮尊鎭法親王や三條西實隆の筆である。この緣起によれば、天地混沌の中一株の桑樹あり、その實落ちて山となる。これが即ち寺名の由來である。後、天智天皇の第四の姬阿閇皇女が病に罹つた時、或る夜の夢に、湖上に瑠璃の光七寶の燈火の如く輝いたので、定惠和尚を召して法會を營ませた。ところが湖中より生身の藥師如來が光明赫奕として現れ、その光が皇女の玉衾の中に映じて病は忽ちに平癒したので、この藥師を本尊として玉殿を建立し給うた。これが即ち桑實寺の濫觴であるといふ。畫者光茂は光信の男で、土佐守繪所預となつた斯派の直系である。この繪卷は構圖描法が整頓し盡してやゝ型に嵌つた感があり、細巧な描線に胡粉や岩繪具を盛つて、ひたすらに描寫の克明と色調の艷麗とを期してゐる所に當時のこの派の趣向も窺はれる。併し光茂の繪としては、實に宮廷や將軍家の關與に成る努力の作で、その製作由來も確かな點で代表作と云ふべきである。近江桑實寺藏。(田中〈一〉)



「桑實寺緣起」(桑實寺藏)

訓(くん)

國語學【名稱】和訓・字訓・よみともいふ。【解說】我國に於ける漢字のよみ方の一種。漢字の意味を示す日本語が、その字のよみ方として固定したもの。漢字は支那語をあらはすもので、これが我國に輸入せられても、支那に於けるが如く支那語(即ち字音)でよんだが、その意味を明かにするために日

初刊。文化十一年再刊。又昭和六年に刊行せられた「群書一覽」は、本書に入田整三氏が補註を加へ、索引等を附したもの。【解說】大阪で書肆を業としてゐた著者が、三十年來涉獵した群書について、その篇目・大意等をしるしたもの。本書は和書之部である。一千七百三十種を國史・神書・雜史・記錄・有職・氏族・字書・往來・法帖・物語・草子・日記・和文・紀行・撰集・私撰・家集・歌合・百首・千首・類題・和歌雜・撰歌・歌學・詩文・醫書・敎訓・釋書・管絃・地理・名所・農業・雜書・群書類從の三十四類に分けて收めてゐる。著者の聞見は頗る廣範圍に亙つて居り、その解說も要を得て居て、後世に與へた利益は少なくない。著者は更に增補を行ひ、且つ漢籍に關する解題をも著述上梓せんとしたが果さなかつた。【備考】「群書一覽別錄」と題する寫本が傳はつて居り、又「(參照)群書一覽」中にも收められたが、これは種々の書の抄錄を集めたものである。京都の人西村兼文は「續群書一覽」(明治二十五年成)を著はして雅嘉の志をついだ。一千四百四十六種を收錄し、その分類も雅嘉のに從つたが小異がある。(昭和二年、入田整三氏はこれに校訂を加へ、索引を附して「(補)續群書一覽」として刊行した。)（植松）

群書索引 ぐんしよさくいん　索引　【著者】物集高見　【刊行】大正五年　【解說】件名によつて群書の記事を檢出し得るやうにした索引。和漢書・佛書中の記事內容を、自由に求め得る事を目的として著述されたもので、件名を五十音順に配列し、個々の件名の下に、その事件を記載してゐる書籍を擧げ、その卷數丁數をも記してゐる。項目數は約五萬に及び、著者が涉獵した書籍は、一萬餘部十餘萬卷に達してゐると云ふ。(廣文庫參照)　（岩橋）

群書備考 ぐんしよびかう　書目　二十三卷　【編者】村井敬義　【成立】文政十年　【諸本】寫本で傳はつてゐたが、大正五年國書刊行會より刊行。【解說】著者が十餘年來涉獵せし書籍中から、我が群書の評論にわたるものを抄錄したもので、書籍得失及び撰者年代等に關する說がある。卷端に假名引の總目を擧げて、搜索に便じてゐる。（植松）

群書類從 ぐんしよるゐじゆう　叢書　正篇五百三十卷六百六十六冊　續篇一千卷一千一百八十五冊　【編者】塙保己一。門下生中山信名・屋代弘賢等、これを助けて編纂校訂に從つた。【成立・刊行】編者は支那に於ける叢書に倣つて、古書の蒐集刊行を思ひ立ち、安永八年編纂を始め、文政二年、四十一年を費して正篇の刊行を終つた。その間、編者は毎朝轉味をたち、「般若心經」百二十卷を讀誦して開版の速かならんことを願ひ、又幕府もその擧に賛して、板木藏の敷地、出版費等を貸與した。而してこの類從の刊行に際しては、先づ值段を附した目錄を印行して世に頒ち、豫約出版の如き形式に據つたらしい。保己一は更に續集を企て、文政五年にその編纂を完了したが間もなく歿したので、當時刊行されたのは、「續羣書類從目錄」等七冊のみであつた。【諸本】（正篇）最初の印本の外、遺存した版木によつて（現在溫故學會に保管せらる）、明治四十四年、大正元年及び大正八年の三度、溫故學會で印行した。又、經濟雜誌社刊行本十八冊目錄一冊（初版、明治二十六年—二十七年。再版同三十一年—三十五年）・續羣書類從完成會刊行本三十冊（昭和三年—）・內外書籍株式會社の新校羣書類從（同年—）・羣書類從刊行會の羣書類從（原刻木の複製、昭和六年—）がある。明治十六年に羣書類從出版所より翻刻が企てられたが、實際世に出たのは、その中の一部分に過ぎなかつた。【續篇】寫本が數部傳はつてゐるが何れも完本ではなく、岩崎文庫に藏する塙家舊藏本が、比較的完全なものである。刊本としては經濟雜誌社刊行本（明治三十五年—大正元年、十九冊にて中絕）・續羣書類從完成會刊行本七十冊（大正十二年—昭和三年）がある。【解說】我が國古今の國書を集大成した一大叢書で、特に散佚に備へるため、主として小冊のものを撰び、正篇一千二百七十種、續篇二千一百三種を集錄した。これを正續共に、神祇・帝王・補任・系譜・傳・官職・律令・公事・裝束・文筆・消息・和歌・連歌・物語・日記・紀行・管絃・蹴鞠・鷹・遊戲・飲食・合戰・武家・釋家・雜の二十五の部門に分類してゐる。この書は我が國に於ける古今の叢書中最も浩瀚なものの一であり、且つ上世より中世へかけての、我が國文化史料の根幹となるべき各種の貴重な文獻を網羅したことは、大きな特色である。また編纂に際して、流布本は避けて成るべく異本をとり、出來得る限り善本を撰ぶと言ふ態度をとつたのであるが、これは、編者の識見が高かつた結果、この書を一層價値あらしめた。類從本として學者の遵據する所となり、學界に與へた恩惠は甚だ大きい。【備考】この書が出てから以後、土佐國群書類從・吉備群書類從・新群書類從（別項）・續々群書類從（別項）等、叢書で何々群書類從を名乘るものが多い。（保己一參照）　（岩橋）

【參考】羣書類從目錄（經濟雜誌社編）○羣書類從正續分類總目錄（續羣書類從完成會編）○塙檢校評傳（埼玉縣敎育會編）

軍忠狀 ぐんちゆうじやう　古文書　【解說】合戰或は警固等の忠節を盡した時に、これを大將に書き出して證判を乞ひ、以て後證に供する文書。裏判のことが多い。大將の證明は奧か端か或は裏にある。戰國頃となれば、軍忠注文の形式となつて來る。（伊木）

市村王石丸代後藤彌四郞信明、去五月十一日馳參御方、同十五日於分倍原御合戰仁、依捨身命、令分捕頸壹、同入見參畢、同十八日於前濱一向堂前、依散々實戰、右足被射疵畢、給御判、爲備後代龜鏡、仍目安如件、
元弘三年六月十四日
承候了（花押）○新田義貞

訓點 くんてん　國語學・漢文學　【名稱】點・和點・倭點ともいふ。點は乎古止點から出た名で、乎古止點が廢れて後もなほ用ひられてゐる。【解說】漢文の訓讀（別項）を明かに示すために、漢文に附する假名及び符號をいふ。近世及び現代に用ひられるものは次の通りである。（一）助詞・助動詞・活用語尾、その他漢字に附け加へて讀むべきもの、及び訓の紛らはしいもの、又は不明なものを如何に讀むべきかを示すには、片假名を漢字の右傍に（稀に左傍に）添へる（これを捨假名といふ。漢字の訓を示したものを傍訓といふ）。（二）漢文に於ける漢字の順序に從はず、順序をかへて讀むには、レ、一二三、上中下、甲乙丙等を漢字の左下方に添へる（これを返點といふ。古くはレを雁金點と云つたが、又これを返點と云ひ、一二三、上中下、甲乙丙などを大がへりとも云つた）。（三）句讀を示すには、字の右傍に○又は、を附ける。○を圈と云ひ、、を批といふ。句を○で、讀（逗とも）を、で示す事もある。また讀には、字の下の中央に小圈を用ひる事もある（これ等を符句讀點といふ）。（四）字音で讀むには字の右傍に一（音點といふ）を附し、訓で讀むには左傍に一を附ける。（五）二字以上の漢字を字音で讀むには、字間の中央又は字間の右方に一を附け、訓に讀むには、字間の左方に一を附ける。（六）漢字は四聲（別項）の區別があつて、同じ漢字でも聲の相違によつて意味がかはる事がある故、これを區別するために、字の四隅に○をつける事がある（これを圈點、又は圈發といふ。古くは聲點といつた。平聲は左下に、上聲は左上に、去聲は右上に、入聲は右下に附ける）。（七）地名・人名等の區別を示すために、朱を以て字の面に線を附する事がある（これを朱引といふ）。地名は字の中央よりも右方に單線を、國名は右方に複線を、人名は中央に單線を、書名は中央に複線を、官名は中央よりも左方に單線を、年號は左方に複線を加へる。

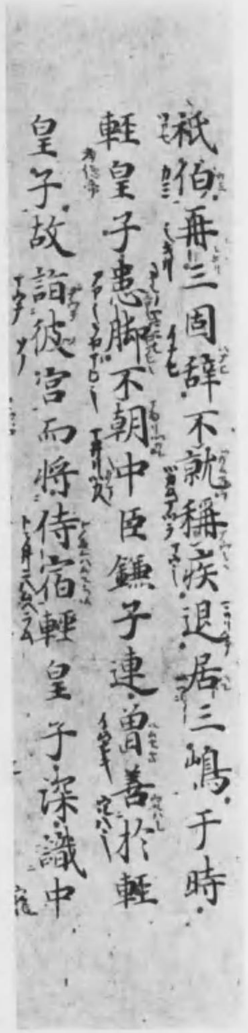
〔乎古止點〕古くは、訓點には主として乎古止點（別項）が用ひられ、假名はその補助として用ひられるに過ぎなかつた。卽ち、乎古止點は、上述の諸項をあらはし得べき組織になつてゐるのである。それは主として（一）の事項を示すべき符號の相違であつて、その他の諸項に於ては多くは一致してゐる（但、それも後世のものとは必ずしも同じでない）。

〔加點・移點・點本〕訓點を附することを「加點」、または「點ず」と云ひ、一の本の訓點を他の本に書寫することを「移點」といふ。訓點を附した本を「點本」「加點本」または「附點本」といふ。

【沿革】古く漢文を國語に譯した事はあつたであらうけれども、その譯讀しやうを直に漢文に書き誌す方法はまだ無かつたが、佛教及び漢文學の隆盛になるに伴ひ、佛典漢籍が攻究せられるやうになつて、備忘のため漢文の傍に萬葉假名を以てその讀み方を附する事が起り、同時に、多分支那で行はれた四聲の點發に示唆せられて、文字の一定の場所に或符號を加へて訓讀を示す方法、卽ち乎古止點も工夫せられ、はじめて訓點が出來たのである。さうして、これは讀者自身の心覺えのためであつたから、萬葉假名も極めて省略した體を用ひたので、遂にこれから片假名が發達したと共に、乎古止點も、初めは簡單な形で、常にあらはれる助詞の類のみを示したであらうが、後には、複雜な形をも用ひて、あらゆる必要な語をあらはし得るやうに進んだのである。かやうに片假名と乎古止點とが漢文の訓點を示す方法として發生した時期は、現存せる資料の示すところでは、まだ平安朝初期以前には溯ることが出來ない。この最も古い時代の訓點研究資料としては、正倉院・石山寺、その他に存する佛經の類が主なるもので、漢籍としては、岩崎男爵所藏の古文尙書などあるが、これ等は何れも乎古止點を主として、これによつて普通の送假名にあたるものや、返點・句讀などを示し、假名は、おもに各字の訓や音を示したもので、乎古止點と相補ふやうになつてゐる。思ふに、乎古止點は假名を以て代へることが出來ない句讀・返點などをも示すと共に、常にあらはれる助詞・助動詞などは、假名を用ひるよりは乎古止點を用ひる方がこれを附するに簡便であり、且つ目立たぬためであらう。さうして點も假名も共に胡粉又は朱を用ひるのが普通であつた。また假名の字體や乎古止點の形式が、人によつて異り多種多樣であるのも亦、人々自身の心覺えだけに附した極めて私的なものであつたからであらう。かやうに訓點を附するのは自己のためであつたけれども、訓點を附した本は他人にも便利であるために、他人もこれを寫すことがあり、又加點の法式は師匠から弟子に、又同門の間に傳はつて次第に弘まつて行つたが、平安朝中期まではまだかなりまちまちであつた。院政鎌倉時代は漢文の訓讀法がほぼ固定した時代で、訓點も甚だ重大視せられ、假名は墨で、乎古止點は朱で附せられたものも多く出來たが、この時代に至つて、片假名も次第に異體が少なくなると共に、乎古止點よりも假名を用ひるものが次第に多くなつて行き、返點なども、乎古止點とは形式を異にしたレや一二三などが發生して、次第に行はれるやうになつた。室町時代に入つては、宋代の新註が用ひられ、經書の訓點も改まつたが、これは主として五山の禪僧の間に行はれて次第に世に弘まつた。この社會では、もはや乎古止點を用ひず、假名と、新しい形式の符號（句讀點や返點など）による訓點を附したのである。これが今日まで行はれる訓點の起原である。乎古止點は朝廷の博士家には傳はつてゐたが、社會には行はれなくなつた。江戶時代に入つて、林道春をはじめ、山崎闇齋・野中兼山、その他諸家の點本が出たが、それの異なる所は主として訓讀法にあつて、訓點、卽ち訓讀を示す方法は、室町以來のものとあまり差異がなく、現代に及んでゐる。その間、やゝ注意すべきは太宰純の如き、支那の方法を學んで、朱引の法に少しの變更を加へた事である（人名には字の右に單線を引き、地名には字の右に複線を引いた）。現代に於ては訓點はやゝ簡單になり、捨假名と返點と句讀點とだけを附するのが普通である。（訓讀・乎古止點參照）　（橋本）

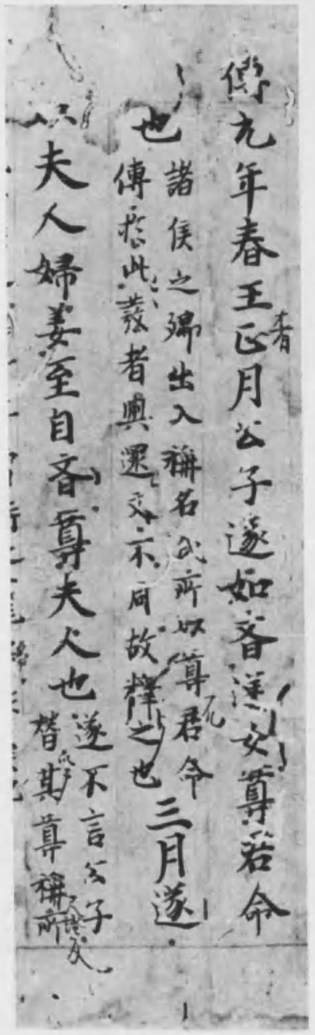
【參考】桂庵和尙家法倭點○點例（貝原益軒）○和讀要領（太宰純）○訓點復古（日尾荊山）○文敎溫故（山崎美成）○本朝學原浪華抄（眞野時綱）○漢學紀源（伊地知季安）○點本書目（吉澤義則）

訓讀 くんどく　國語學・漢文學　【名稱】倭讀（和讀）ともいふ。【解說】漢字漢文を一定の日本語に譯して讀むこと。漢字の訓讀と漢文の訓讀とで多少趣を異にした點がある。【漢字の訓讀】漢字を訓（別項）でよむこと。【漢文の訓讀】漢文を一定の法式により日本語に譯して讀むこと。これが現代日本に於ける漢文の普通の讀み方である。かやうにして讀めば、全文としては日本語になるが、箇々の語は訓讀するものもあり音讀するものもあつて、必ずしも皆日本語に譯せられるのではない。漢文を最初から全部字音で讀めば、全文は支那語となる。我國でも甚だ古い時代には、かやうな讀み方があつたであらうが、それは廢れてかなり古くから專ら訓讀する習慣になつてゐる（但、佛經のみは今までも音讀が殘つてゐる）。【漢文訓讀法の特徵】漢文の訓讀は、その日本語譯とは必ずしも同一でなく、原文の形を少しも變へずして、しかもこれを日本語にして讀むのである。その日本語も言義さへ同じであれば、どんな語を用ひてもよいのではなく、箇々の文字に隨つて、大抵一定した譯語（訓）を用ひ（勿論音讀すべき語は音讀するが）、一定の語法（口語と文語と分離した時代では、文語の語法の一種とすべきもの）に隨つてこれを讀む。さうして語を逐うて順次



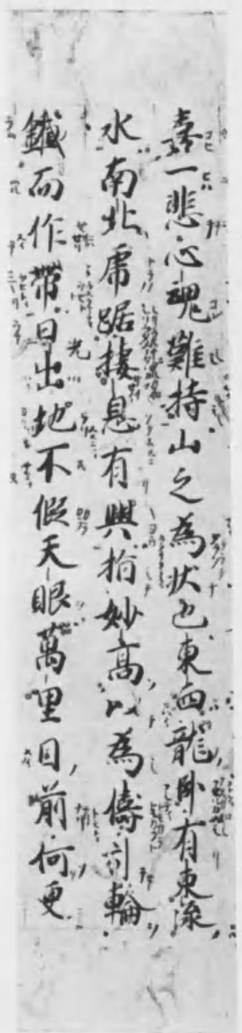
紙伯再三固辭不就稱疾退居三鳩于時
軽皇子患脚不朝中臣鎌子連曽善於軽
皇子故詣彼宮而將侍宿軽皇子深識中

岩崎本日本書紀



僞元年春王正月公子遂如晉逆女尊君命
也諸侯之婦出入稱名此所以尊君令
傳於此義者興還文不可故釋之也三月遂
夫人婦姜至自晉尊夫人也遂不言女子
賢其尊夫人也遂之為狀色東面龍脚有東梁
水南北屑踞接息有興指妙高以為儔前輪
鐵而作帶日出地不假天眼萬里目前何更

春秋左氏傳



善一悲心魂難持山之為狀色東面龍脚有東梁
水南北屑踞接息有興指妙高以為儔前輪
鐵而作帶日出地不假天眼萬里目前何更

性靈集

に譯し、語の順序が漢文と同じくない所は、日本語の順序に隨つて讀むのである。かやうに訓讀は自由な譯ではなく、漢字に卽したものである故、古くは、同じ字を音讀して更にこれを訓讀することがあつた。これを交讀といふ。例へば、「關々雎鳩」クワンクワンタリシヨキウノミサゴハと讀み、「窈窕淑女」をエウテウトシユビカナルシユクヂヨノヨキムスメハと讀む類である。

【漢文訓讀法の沿革】〔上古〕上古のことは明かでないが、漢文渡來後、漢文を學ぶに當つて、これを全部音讀したと共に、また日本語に譯してその意味を解したことは疑ない。その譯語の用語は、勿論當時の口語であつて、特別のものでなかつたに違ひない。しかし外國語を譯すのであるから、從來の日本語にはなかつた直譯風の言ひ方もまじり、譯し得ないものは、漢語のまゝを用ひたところもあつたであらう。佛敎が渡來して漢譯の佛典を傳へ、支那との國交がひらけて、彼の地の文物を輸入するに及んで、漢文が盛に行はれたが、當時に於ても漢文を訓讀したこと、及びその用語が當時の口語であつたことは以前と同樣であつたであらう。さうして奈良朝に於て、普通の語句の訓讀法が、ほゞ一定してゐたことは、「古事記」の撰者が、日本語を寫すに、萬葉假名を用ひる代りに、漢文式書法を用ひた所が多いによつても推測される。〔平安鎌倉時代〕平安朝の初期、漢文學が隆盛であつたが、この頃から學古止點と假名を以て、訓讀法を記入することが始まり、これが次第に廣く行はれて、訓讀はたゞ口で傳へるばかりでなく、文字符號にしるされて、いくらか固定する勢を助けたと思はれる。さうして平安朝中期から院政時代になると、支那との國交も絶え、漢文學も漸く衰へて、漢文を音讀することも多分なくなつた事とおもはれ、訓讀も師說を墨守するやうになつて訓點を附した本が重んぜられ、いよ〳〵訓讀法が固定化するやうになつた。さうしてこの頃までは、訓讀に用ひる言語は、大體に於て、殊に語法に於ては、大槪當時の口語に伴つて變遷して來たが、鎌倉時代以後、口語と文語との間に次第に差異が著しくなつた時代に於て、漢文訓讀は主として平安朝以來のものに隨つた爲め、口語と差異を生ずるに至つた。〔室町時代〕鎌倉時代末期以後、宋の新譯が次第に行はれて、訓讀の文の解釋も以前と異り、從つて訓讀の改定が行はれて、主として五山の僧侶から社會に弘まつた。始めて新註によつて訓點を附けたのは室町初期の岐陽和尙であると傳へられ、後、桂庵が少しくこれを改め、文之にいたつて、更にまた多少の改訂を加へたといふ。僧侶の訓讀には、舊來の傳統を無視して勝手な訓讀法を用ひたものもあつて、保守的な堂上の儒家の非難を招いたが、しかしなほ言語としては、舊來の特徵を多く存してゐた。〔江戶時代〕藤原惺窩は、朱子の學說によつて四書五經に新に訓を下したが、その弟子林道春は山の「訓點復古」など)。しかしその復古といつても、道春の訓點に復するをいふのであつた。實際江戶時代には道春以下甚だ多くの點本が出たが、藩により、また學者によつてその用ひるところを異にし、統一しなかつた。しかし幕末には、一齊點や後藤點が勢力があつたやうである。〔明治以後〕維新後も、江戶時代以來の訓讀法が行はれたが、近年學校に於て課する漢文の訓讀法は、所謂和文の文法を用ひるやうになつて、長い傳統を有する訓讀法は、その特徵を失はうとしてゐる。

【漢文訓讀に用ひる言語の系統】江戶時代以來の漢文訓讀に用ひる言語は、前述の如く、平安朝中期から院政時代頃の口語（ことに男子の言語）から出たもので、鎌倉室町時代に於て、その特徵がいよ〳〵明かになつたものと思はれる。普便形を常に用ひるなどは、さうである。しかし、また中には、一層古い時代の言語の特徵を殘してゐるものもある。例へば、「行かざるべけむや」の「べけむや」の如きは、奈良朝以前に存し、平安朝の口語には絶えた語法である。節々の文字の訓に於ても、漢文訓讀に用ひるものは、古く定まつた正しい訓であつて、漢字を日本語に示すために用ひたによつて後に生じた訓（讀み方）の如きは用ひない（この項、「訓」「訓點」「平古止點」參照。以上述べたのは正式の漢文の訓讀についてである。日本で出來た變格の漢文には必ずしも該當しない。）

【參考】「訓點」の參考を見よ。

群芳綺話（ぐんぱうきわ）　【譯者】大久保初三郎。茉城縣の人、傳未詳。【角書】諺訓雜語【原作】伊太利の文豪ボッカチオの「デカメロン」（十日物語）【刊行】明治十五年六月、博聞社。初編一册刊。

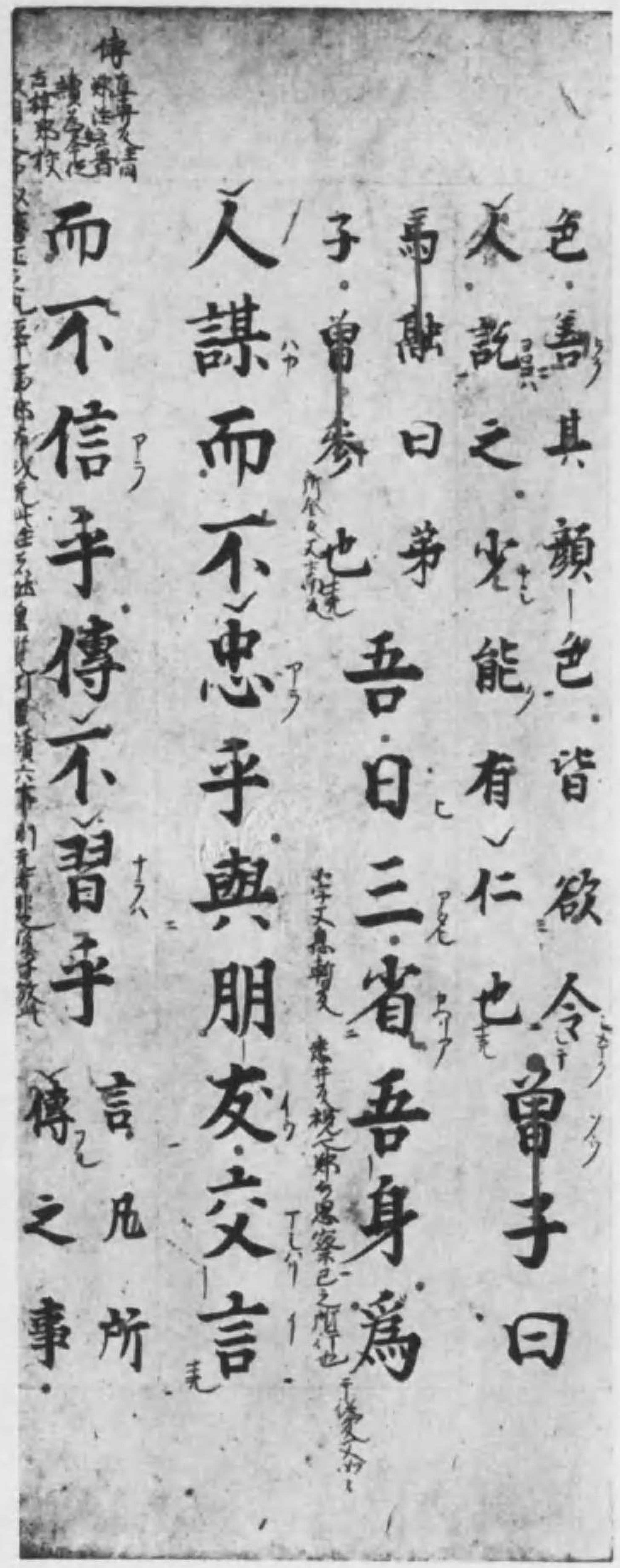
【解說】譯文の體は、漢文直譯調を和文の物語調で和げたもの。この譯の底本は、中の人物の稱呼などに見て、フランス譯からの重譯らしい。牧歌の物語は都合七篇、第一の「月下氷人」、第二分奇緣」には、原本二日目の物語の第三話で、僧に扮した英國王女が厩馬に上る途中良緣を得る話、第三「生佳人」は「死佳

人」は十日目の物語の第四話で、日頃他家の夫人に戀慕してゐた紳士が、その夫人の死後いま一度顔を見たさから發掘すると夫人が蘇生した話。第三「術僧不闕、濟度鸞鳳」は三日目の物語の第三話で、美人が正直な僧を欺いて青年貴族との不義の仲介をさせた話。第四「哀情怨玉、歡樂怨來」は五日目の物語の第七話で、主人の娘と戀に落ちた奴隷少年が罪に當てられ、刑に臨んで生みの父に救はれると、偶然身分が知れてその娘と婚する話。第五「名花多情、却失宿緣」は四日目の物語の第十話に當り、誤つて麻醉劑を呑んだ醫師の妻の情人が死人と誤られた爲めに種々の喜劇を生ずる話。第六「主尼誤冠、衆尼滅法」は九日目の物語の第二話で、尼僧院長が部下の尼僧の醜行を責めんとして却つて自家の醜事を暴露する話。第七「奇夢符合、蜘蛛失偶」は四日目の物語の第六話で、戀人の死んだ夢を見た美人が、翌日戀人と密會中夢の通り戀人に頓死されて、無實の咎をうける話。以上七話である。【備考】抄譯ではあるが忠實に原作を傳へてゐる。明治初期の「デカメロン」の譯として有名なものには、他に「想夫戀」(明治十九年、明福)「鴛鴦奇觀」「繫夫之奇獄」(同二十年)の三種あるが、原作を忠實に傳へたものとしては、この「群芳綺話」のみである。有名な事、珍重されてゐることに於ては「想夫戀」が第一であるが、文獻的にいへば、明治最初の忠實な「デカメロン」紹介の功は、「群芳綺話」の占むべきものであらう。且つ他の三種は何れも「群芳綺話」の中の、何の物語かを翻作的に敷衍したものだといふことも指摘されていゝ點である。(柳田(泉))

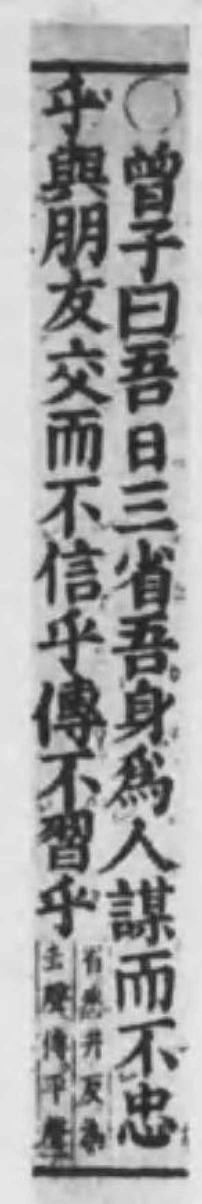
軍法富士見西行 ぐんぽふふじみさいぎやう　淨瑠璃

五段　時代物【作者】並木千柳・小川半平・竹田小出雲【初演】延享二年二月十三日、竹本座【譜本】並木宗輔淨瑠璃集(續帝國文庫)所收【題材】軍記物で知られた篠原合戰、義仲都入り、平家沒落などを背景として、木曾方と平家方との鬪爭を經とし、「東鑑」「撰集抄」「古今著聞集」等の所說や又は「山家集」等から史實として或は俗說化しつゝ、更に謠曲の西行物等を通して近世化されてゐた西行法師の逸事を緯として組立てられてゐる。【梗概】(初段)(大磯八幡宮社頭)賴朝は京都に於ける法皇の皇居移徙の供奉に擬して假りに行列を作つて神前に詣でる。佐藤則清は剃髮して圓位と名乘り、東大寺大佛殿建立勸進のため東國に向ひ旅を續けてゐたが、この場で見咎められて、賴朝のために軍法の奥儀を語り文武の嗜みを示すので、賴朝は義仲の心底を探るやう依賴し、銀猫の香爐を與へて去らしめる。圓位は西に行くからと西行と名を改める。(京下河原)義仲の臣手塚太郎は、篠原の合戰で實盛を討つたため主君の勘氣を蒙り浪々の身であるが、義仲近頃の放埓を憂へ且つ歸參の機をも得んものと、面賣りに身を窶して京の街々を徘徊してゐる。鼓判官、岩淵權藏主從と猫間中將の雜掌蟹坂梓内の三人は、猫間中將を上使に仕立て、判官の戀する義仲の愛妾葵御前を盗み出す密談、それを立聞いた手塚太郎は蟹坂を懲して密書を奪ふ。(葵御前別殿)義仲は江口の廓に入り浸つてゐるので、家臣の妻娘達を集めて葵御前は能の稽古をしてゐる。執權伊達庄司の娘妻菊は、折柄忍んで來た許嫁の手塚太郎と逢つて判官等の奸計を知る。父の庄司が出仕するので妻菊は男を「道成寺」に使ふ鐘の中に隱す。猫間中將の岩淵が判官と共に現れるが、豫て企みを知つてゐる女達は、鞠や和歌で假公卿を困らせた上惡計を暴露する。判官は葵御前を奪ひ出すが、手塚は巧みにこれを救ひ惡人等を懲しめる。(二段目)(伏見の里、墨染橋のほとり)西行の舊臣松波瓢負は盲ひた身を一子乙石に護られ、謠をうたひつゝ合力を乞うてゐる。彼は舊主遁世後十七年間赤貧の中に遺孤宮綺姫を守護し續けてゐるのである。折しも西行が來かゝつてそれと察するが、わざと名告らず銀猫の香爐を與へて立去る。通り合せた鼓判官の弟十郎は、それが賴朝の所持品なる事を怪しみ父子を打擲する所へ、瓢負の妻お六の兄で齋藤實盛の遺兒同苗五郎が出て救ふ。(葛葉の里、瓢負侘住居)西行の娘宮綺姫と、齋藤五郎から託された平家の息女六代君とがこの家に匿まはれてゐる。瓢負父子が歸宅していつもの如く、貧借の紋服大小に改まり貧を隱す苦心の最中、債鬼がどや〳〵と押しかけるが、三十兩の小判を投げつけて追返す。瓢負は獨斷で妻のお六を江口の廓に賣る約束を決めて來たのである。廓から迎への駕籠が來る。お六は悲嘆に暮れるが主君のためと決意する。立聞いた宮綺姫はお六の身代りとなり密かに駕籠に乘つて江口へ走る。遺書を見て夫婦が仰天する所へ、鼓十郎が六代君の詮議に來るので、お六は君を米櫃に隱すが、瓢負は倅乙石を身代りにする計畫で同じ櫃の中に入れる。十郎のために櫃が開かれようとする時、園家の男がこれを遮り櫃を持ち去る。瓢負は十郎と相討に斃れるが、件の隣人が木曾方の臣手塚太郎と判るので、お六・齋藤五郎は切腹する。(三段目)(禪堤)義仲は五緒の車を轟かせ、奸臣石黒左衞門を從へ、江口の里に向ふ途中、猫間中將等の公卿に狼藉する。執權伊達庄司が來合せ義仲を諫め石黒を懲しめる。廓からは二人禿が迎へに來るので、大盡姿に變つた義仲は「蟬丸道行」に擬して牛の背に乘り江口へ向ふ(道行戀身交字)。(江口の揚屋鶴屋)義仲の寵妓瀬屋の逢坂山は今日初見世の妹女郎宮綺を連れて來る。僞僧の客が登樓して逢坂山を所望するので、宮綺を姉女郎に仕立てて出す。石黒實は平家方の瀨尾太郎は娘逢坂山に計畫通り義仲を刺せと迫る。宮綺は銀猫の香爐と綺姿を出して父を戀ひ焦れるが、客は僞僧と見せた風呂敷包を取つて西行の姿を現はし、義仲を溺らせる逢坂山なら殺さねばならぬと云ふ。宮綺は最前拾つた密書を見せるので、西行は石黒の素性を知り、義仲の部屋に赴く。義仲は瀨尾を殺し富士を描いた唐紙に擬へて、今まで放埓を裝うた苦肉の計を語り、西行が鳥羽院から託されて肌身を離さぬ風呂敷包の中の神鏡を乞ひ受け、逢坂山の髪を切る。西行も娘を尼とし逢坂山に伴はしめ、自らは又旅へと志す。唐紙の繪を用ひて「富士見西行」の見立て。(四段)(五條手塚住居)太郎は奪つて來た六代君と乙石とを匿まつてゐる。鼓判官と太郎の許嫁妻菊とが前後して六代君を受取りに來る。この家の老母は表に惡人を裝ひ、巧みに妻菊と計つて、乙石の首級を六代の身代りに立て判官を欺き歸す。(義仲の館)精靈祭の夜、齋藤實盛の娘お六は腰元となつて入り込み、兄の齋藤五郎を手引きして義仲を討たうとするが手塚太郎と妻菊が出て爭ふ。五郎は父實盛の仇、太郎を斬るが、折からの雨に染めた髪が洗はれて、手負ひは忽ち白髪の老人となる。伊達庄司が娘聟の身代りになつたのである。義仲

訓點　二


色善其顔色皆欲令曾子曰
人説之少能有仁也
馬融曰弟子曾參也吾日三省吾身爲
人謀而不忠乎與朋友交
而不信乎傳不習乎言凡所
傳之事

正和本論語


○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

道春點

○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

嘉點

曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

山子點

○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

一齋點

○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

後藤點

は手塚の勘當を許し、六代君を齋藤に返す。

〔五段〕節事「源平花合戰」。義仲は、鵯越、須磨浦、八島の扇の的、錣引等の有樣をまざまざと夢見て源平の將來を知る。折しも鎌倉の討手と欺いて、攻寄せた鼓判官の勢を迎へて散々に打ちひしぐ。

【構想】鎌倉と京との、兩源氏と平氏とのそれぞれの人物事件の交渉を、時代淨瑠璃の定型的手法で組立ててあるが、西行といふ一人物をそれらの媒介として比較的飛綫なく驅使してをり、弓馬の講釋や鳴立澤の詠歌や銀の猫や「鳥柴樓」や「江口」や「富士見西行」の畫題の見得等を使つて觀衆の豫備知識に呼びかけ、又二段では主從の、三段では親子の、それぞれの情と、佛の道との葛藤を描いて、傳へられた西行の人となりの輪郭を描いてゐる所に、先づ本曲の面白味がある。更に時代淨瑠璃の基本的要素たる身代りや贋首についても、四段の手塚住家に於ける「一つの首で二度欺す、身代りぢやない二がはり」と作者も多少自負氣味の首の扱ひ方や、同じく義仲館に於ける白髮染の實盛の穴を行く庄司の身代り等は面白い。本曲の山は言ふまでもなく、二段目の切の駿員住家と、三段目の切の揚屋とであるが、なほ初段の切、奏御前別殿は謠曲「道成寺」の趣向で巧みに一貫してをり甚だ妙である。本曲は三段目までは相當繰返し上演され、上方では歌舞伎にも移された。江口・西行を取扱つた歌舞伎や所作事は相當あるが、本曲と直接關係を有するものはない。〔近藤〕

軍用記（ぐんようき）　故實　七卷　【著者】伊勢貞丈。千賀春城增補【成立】寶曆十一年十月六日の自序があり、卷尾に明和六年五月十一日改正とある。又、千賀春城の跋に、本書增補刊行の事情を述べて、天保五年から同十四年に至る十餘年間、書を讀む每にこの記に關係ある語を採摭したものが集つて百卷ほどになり、これを部類抄と稱したが、その中から肝要なものを抜き出してこの記に補入し、また高島千春・痲生知明に依賴して圖を畫かせたものであると云ふ。【諸本】帝國圖書館藏本に、七卷四冊の書寫本がある。圖が刊本よりは精細で、刊本の圖に載せてない所まで畫いてあつて、圖に關する說明も少し多い。「故實叢書」（別項）中にも收められてあるが、それは千賀春城補の刊本に據つて七卷一冊としたもので、ただ貞丈の序が卷尾に置かれてあるのと、圖のみを集めて「軍用記附圖」と題して別卷にしてあるのとが違つてゐる。

【內容】家傳の書に據つて、武具・甲冑及び軍陣の作法等の概要を記したもので、自序中にも「我家は殿中の立ふるまひを教る家にて、軍陣の作法教る家にあらず。然共昔より家に殘り傳りし、軍陣の事記るせる舊記もあり、其外諸說とり集て一書となし、軍用記と名づく。」とある。卷一には、鎧下小袖、鎧直垂、同袴、小大口、梨子打烏帽子、引立烏帽子、折烏帽子、鉢卷、脛巾、四幅袴等。卷二には、冑、鍬形、冑緒、面頰、鎧、脇楯、袖、鳩尾板、栴檀板、小手、膝鎧、臑當、頰貫、上帶、鎧櫃、同覆、鎧掛、御目事等。卷三には、鎧威毛大意、革威、綾威、練緯威、絲威、大荒目、鐵胴、相生相剋鎧、四姓鎧、腹當、袖鎧、笠注、御鎧召次第の事等。卷四には、太刀、刀、打刀、弓、征矢、箙、弓袋、韝、敷皮、床机等。卷五には扇、團扇、麾、保呂、矢母呂等。卷六には、馬具、旗、幕等。卷七には、軍禮、首實檢、鎧着初、正月鎧の餅等の解說があつて、各卷の終には圖を集めてある。これ等の圖は、もと解說の中に挿入してあつたのであるが、刊本とした際に便宜上卷後に集めたもので、簡單な彩色を施したものが少し交つてゐる。春城增補の文は、多く欄外に記され、圖も少しく補入されてゐる。【價値】武具・甲冑・軍禮等の大要を圖解した點に於いて、初學入門の書として最も好適なものとされ、重きを置かれたものであつた。今に於いても、大要を知るには最も都合のよいものの一である。〔石村〕

け

解（げ）　古文書【解說】凡て解とは被管より所管に上る所謂上達文書で、符と正反對のものである。八省以下中央の諸司及び諸國等にもあるが、諸國のものは「國解」或は「解文」と稱へる。大寶令の公式令規定の解の樣式は、

式部省解申其事
其事云々、謹解。〇太政官へは「謹解」、その他へは多く「以解」
年月日　大錄位姓名
卿位姓名　大丞位姓名
大輔位姓名　少丞位姓名
少輔位姓名　少錄位姓名

諸司諸國の外、官人、社寺等の解もあるが、大體同じやうなものである。殊に後世武家時代に至つてまでも、訴訟文書等の上申書にはこの形式を襲用してゐるものが少くない。これを「解狀」ともいふ。〔伊木〕

河內國金剛寺住僧等謹解　申請　鑒裁事
請被特蒙　鑒裁、依舊勤仕例、停止造野宮作所米幷課人夫等子細狀
副進
建久二年　宣旨第一通
今度切符第一通
右、謹案案內、當寺者弘法大師之建立、有緣之伽藍也、靈佛靈神之閒、官國兩方無牢籠事、已達　天聽、勅免不輸之儀明著、（中略）就訴、早任建久宣旨、依舊勤仕例、尤可停止其儀之由、欲召賜國司御廳宣矣、仍勤事狀、謹以解。
嘉祿三年七月　日　金剛寺住僧等上

啓（けい）　古文書【解說】大寶令の公式令の規定に依れば、啓は皇太子・三后に進言する公文書となつてゐる。その樣式は、

春宮坊啓
其事云々、謹啓。
年月日　大夫位姓名
亮、位姓名
亮　位　姓
准令、依將・若不依將者、卽云、令處分、云々、

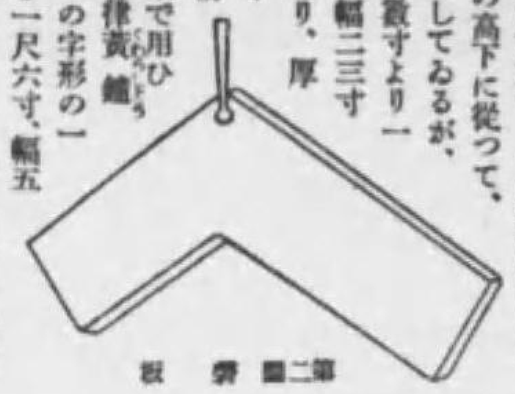
なほ、上官に上る解（別項）の代りにも用ひられ、更に個人間の互通文書として多く用ひられた。隨つて本來私文書たる狀（別項）と混同して「啓狀」とも云ふべき式となつてゐる。

藥大寺請啓
請辨衣料幷裝等直事
右、爲請作物、染小子進上、乞付處分、謹啓。
正月廿七日　付勇萬呂
謹上　藥島疋幷請尊座下
〔伊木〕

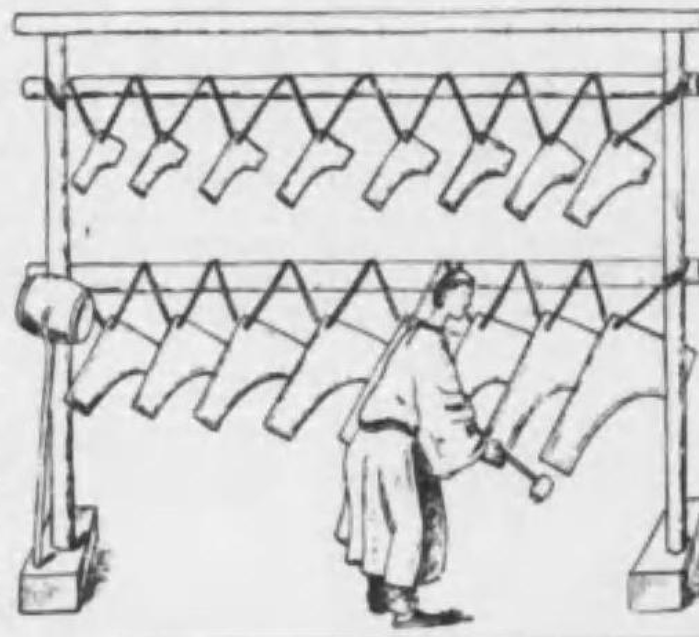
磬（けい）　樂器【名稱】打樂器の一で、石板を打つて鳴らし、石に響あるよりこの名があるか。また玉磬ともいふ。【種類】石板一個を用ひるものを特磬といひ、多數を配列して用ひるものを編磬といふ。【構造】南陽石の板を吊してこれを打つて鳴らす。その響は非常に

美しい。佛家では主として一枚の板を吊下げたところの特磬を用ひる。それには種々の形のものがある。我が興福寺に國寶として傳へられる洞簫磬（第一圖）は、唐代の製品であつて特殊な形をしてゐる（同寺にこれと並んで華厚磬といふものがあるが、これは實は磬ではなくて銅鉦である）。雅樂音樂に於て用ひられるところの磬は、第二圖に示す如き、への字形をなして居り、その音律の高下に從つて、大小厚薄を異にしてゐるが、一個の大さ長さ數寸より一尺數寸に及び、幅二三寸より七八寸に至り、厚さ五分より一寸有餘に至る。朝鮮李王家の雅樂で用ひられる特磬の音律黃鐘なるものは、への字形の一方長い枝は長さ一尺六寸、幅五寸三分、短い枝は長さ一尺七分、幅五寸三分、厚さは一寸ある。磬は方響と同樣の枠（これを栒簴といふ）を用ひ、その中間に橫に架した紐（これを業といふ）に、これを懸垂する。編磬も同じく大きな栒簴を用ひ、これに上下二段に業を架し、磬板十六枚を十二律の順にそれに懸垂したものである（上段に八枚、下段に八枚を懸ける）。その音律の順は、方響に同じく、下段は低音で上段は高音になり、下段右端を黃鐘として、十二律の順に左端は林鐘となり、上端は左端夷則より始め、順に十二律を追うて右端は淸夾鐘となる。磬を打つには角製の槌を用ひ、その一角を打つ。我が邦では編磬を用ひず、特磬のみを佛家に於て用ひる。【沿革】支那に於ては極めて古くから行はれたらしく、傳說には黃帝の時に磬氏これを作るとあるが、それは信ぜられない。併し殷の頃には、もはや存在したらしく、周代に於て相當に用ひられてゐた。我が邦では奈良朝の頃特磬は既に傳來してゐたらしく、主として佛寺に於て用ひられた。編磬は遂に傳來しなかつたやうである。朝鮮李王家の雅樂に於ては、特磬・編磬共に用ひられ、今なほ合奏として行はれてゐるが、朝鮮へは高麗朝の睿宗王十九年に明から輸入されたものであるといふ。〔田邊〕

第一圖　洞簫磬


第二圖　磬板

第三圖　特磬


第四圖　編磬

溪雲問答（けいうんもんだふ）　歌論書　二册【著者】中院通茂の說を、その弟子松井幸隆の筆記せるもの。【別名】中院內大臣通茂公御記、又は通茂公口傳【成立】第一册の中以後に寶永二年九月朔日云々とあり、第二册の終りの部分に寶永七年正月の記事が見え、大體として通茂が晩年に話した事を記してゐる點からほぼその成立年代は推定される。一時に全部書いたものではなく、數年間に順次書きとどめたものであらう。【諸本】輪池叢書三十九に收められてゐるものは大體同じ書である。【內容】最初に「初學抄に歌をよまんには先題をよく思ひとき心得べしと有。詠歌一體にも題をよく〳〵心得とくべき事と載られたり。又、顯昭貫註に歌の題の心を得て讀べしと云云。これらをもて思ふに題に向ひて歌をよむに其題を我こころに能心得ずしては詠出の歌の道理もそむけ侍るべし。題を不誤やうに辨へ知るべき事なり。（後略）」とあつて、立春・初春・早春の區別以下の歌道に就て說明し、次に「詞は三代集を不可出と詠歌大概に有、又三代集にも聞よろしからぬをば取よむまじきよし古抄にみえたり。然ば善惡の差別辨へ知たき物に侍れど管見には其譯はわきがたく侍る。仍て三代集の中何とやらんやすらかに聞えす、つまりたる詞とも少々書拔候。」とて「袖ひちて」以下百三十ばかりの言葉をあげてゐる。而して次に古歌又は他人の詠草に就て、主として用語の妥當又は題意に適不適の見地から批評した實例、和歌に就ての故事、作法等を斷片的に記してゐるもので、大部分は題詠の慣習、用語の規則等無意義煩瑣なる知識を述べたもので、純粹歌論と見なさるべきものは尠い。「（前略）一首の首尾を合點ゆかぬ中にうはつらの姿の吟味役にたたぬ故に候。一首の譯よく聞ゆるほどに讀なす事先成かたき事に候。歌の善惡を知事肝要に候。詠歌大概、百人一首は定家卿撰おかれたる秀逸に候。此よき所を能心得、未來記、雨中吟のあしき所をよくよく合點して我歌を吟味したるが能候。」とあるが如きは、何等獨創的な見解ではないが、かゝる作歌法を示した部分は比較的價少である。【價値】本質的價値に於ては兎も角、通茂、特にその晩年の消息乃至歌を中心とした考を知るため、且つ又近世に於て、なほ堂上方面に勢力を有してゐた二條家歌學の正體の如何なるものであつたかを示してゐる點に於ても、一讀を要するものである。〔藤川〕

慶雲樂（けいうんらく）　雅樂曲【名義】慶雲年間に改作したので、この名があるとの說がある。【異稱】景雲樂・兩鬼樂【性質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。拍子十。四返する。【沿革】「教訓抄」に、「或記云、大國の法、食事の時奏二此曲一於二大唐一望レ食有二二鬼一、名二食鬼一云二飲鬼一、盤二字人食一惱レ人、而聞二此樂音曲一、彼鬼神去二七十里一云々、此樂本名謂二兩鬼樂一、我朝にて慶雲年中渡て改レ名、或說唐有二此曲一大同享皆用レ之」とある。唐にこの曲あることに就て、「大日本史」禮樂志に、「按唐書、上元舞、高宗所レ作、其中有二慶雲之曲一、通典、燕樂有二景雲舞一、教訓抄、體源抄並云、文武帝慶雲中傳二此樂一故名、恐誤二慶雲字一爲レ說者、不レ取」

とある。何れが正しいか決定し難い。（田邊）

桂園一枝（けいゑんいつし） 歌集　三卷【作者】香川景樹【成立】文政十一年【刊行】文政十三年【諸本】香川景樹翁全集上卷（續日本歌學全書）・近代名家歌選（校註國歌大系）・近代諸家集第四卷（校註和歌叢書）・有朋堂文庫所收。【內容】文政十一年十月の平清樹の序文がある。四季・戀・雜、及び長歌・旋頭歌・俳諧歌の雜體に部類別し、その間に「事につき時にふれたる」と云ふ部立が設けられてゐる。而して秀歌はその中に多い。他は多く題詠の歌であるが、また贈答の作や書讃の歌も散見する。【歌風】景樹の和歌の主張は、調べにあると云ふ。彼の和歌に關する意見は、感情の自然の發表であると云ふ點に於て、小澤蘆庵の說と異ならず、蘆庵の影響を受けた事は疑はれない。ただその上に出でて、調べと云ふ事を說いたのは大なる進步である。調べの說と云ふのは、歌の內容たる思想とその形式たる辭句との調和と云ふ事と、詞のつゞけがらの整ひと云ふ事との二つの意味を含んでゐる。この調べが歌の生命であると云ふその見地から、情感に調子に自然優美を特色とした「古今集」の歌風を理想とし、貫之を歌の聖とした。これは賀茂眞淵の萬葉崇拜に反抗したのと、一つはその歌論の主張と個人の趣味性とから來てゐると思はれる。彼の歌はその主張を裏切らず、非凡の才能はよく「古今集」に優れる作品をも作り出してゐる。景樹の歌風は清新の感じに富んでゐると云ふ點では蘆庵以上で、更にその抒情・敍景、二つながら優れてゐると云ふ點では、その才が一頭地を拔いてゐる。併し短所としては、想の平凡と、なだらか過ぎて調子の弱々しくなつてゐる點とが擧げられる。彼の書讃の歌には輕妙清新なる作がある。

大井川かへらぬ水にかげみえて今年もさける山櫻かな
富士の嶺を木の間〳〵にかへりみて松のかげふむ浮島が原

【備考】本書出でてより、辯難駁擊の書が數多く世に現れた。「筆のさが」（文政十三年成）は、加藤千蔭及び村田春海が、北際希・地藏院の匿名で、景樹の歌十首に批評を加へ、これを小川布淑・佐々木眞足が轉讀し、伴蒿蹊が奧書を加へ、更に村田春門・八田知紀の批評を下せるもので、知紀の文政十三年の序文がある。その他、

桂園誣歌撰　保田範雲（批難）
桂園誣歌辨評　廣田大兵（右の書の駁）
桂の曲枝　宮下正岑（批難）
桂園一枝評　秋山光彪（批難）
大ぬさ　中川自休（右の書の駁論）
怪謗　黑川春村（前二書の批評）
鶯のよる諷　相川枋童（同前）
大ぬさ辨　丹羽長暉（大ぬさの駁論）
大鷲辨評　中島廣足（桂園一枝評及び大ぬさの批評）
秋の初風　戸塚義令（同前）
大ぬさ評　石橋眞國（大ぬさの批評）
ひくてあまた　鈴木眞殉（花井有年の大鷲評判に、近江の人寺事が辯を加へ、更に直殉の評を加へたるもの）

なほ註釋書には、「新釋香川景樹歌集」（今田良平）がある。

【附記】「桂園一枝拾遺」一卷は、渡忠秋が集錄して景樹の子景恆に版行の事を請ひ、平忠兄・源貞・法橋如一とも相談して、景樹の七回忌の嘉永二年に上木したものである事が、忠秋の同二年七月八日の序文に見えてゐる。同三年刊。體裁すべて本集による。香川景樹翁全集上卷（續日本歌學全書）、近代諸家集第四卷（校註國歌大系）所收。この書にも、小林歌城の「桂園一枝拾遺評」（嘉永六年成）、仲田顯忠の「桂園一枝拾遺再評」（同上）等の批難辯駁の書が出でた。以上の論辯の書は、殆ど「桂園叢書」「桂園遺稿」等に入つてゐる。（佐佐木）

桂園一枝拾遺（けいゑんいつしじふゐ）「桂園一枝」を見よ。

桂園遺文（けいゑんゐぶん） 歌論書　二卷【編者】鈴木光尙【成立】安政六年【諸本】萬延元年刊本あり。續日本歌學全書第五編所收【解說】香川景樹が門人達の詠草の奧に記し、或は門人に與へた文、歌に關する隨筆の類を門人鈴木光尙が編輯したものである。その間に景樹の歌論の見られるものが尠くない。例へば、「世の中の言の葉は、調べありて後ことわり聞ゆる物なり、ことわりありて後調べありと覺ゆるは誤てり、」（何讀人たすくが詠草の奧に）の如きはその根本的見解といふべく、「古今集をのみ見給へ、いさゝか會得の道あるべし、古今も打聽遠鏡などの注は見給ふべからず、千里の誤ち出で來べし、只本文を見給へ、同じくは古今も見ずして實物に向ひて今の平語にてよみ給ふべし、」（同上）の如きは「古今集」を尊重する態度から進んで現代的立場も見られる。「文句は古今に隨ひ都鄙によりて變りゆくものなれば頼み難きもの也、此調べのみは古今を貫徹するの具にていさゝかも違はざる也、只大和言葉のみならず、からもえぞも變らぬもの也、されば此調といふものを捨てて歌はなき事に侍り、さて其調はいかなる物ぞといふに常にいひ扱ふ平語いさゝかも調に違ひたる事なし、さらば平語ぞ規矩なるべき、歌は此平語に歸るのみ、」（同じ詠草の和文の奧に）には詞よりも調を尊重する立場が見られる。斷片的なものではあるが、却つて端的に景樹の主張に觸れる事が出來る。彼の歌學說を見る上に「新學異見」「古今集正義總論」の如き纏まつたものと共に、缺くことの出來ぬ書である。【參考】日本歌學史 佐佐木信綱○國語國文の研究 吉澤義則○香川景樹のしらべに就いて 久松潛一（東亞の光 昭和三ノ一・五・一〇）（中島）

蘐燕偶記（けいえんぐうき） 隨筆　一卷　寫【著者】賀島因【名稱】蘐燕と名づけたのは、筆錄の時が恰も初夏で杜鵑が日夕叫んだから、杜鵑の古名を取つたのであると云ふ。【解說】文化二年五月頃、著者眼疾に罹つて靜養中、嘗て見聞した雜事を憶記して從者に筆錄させた漢文の隨筆である。曲玉聰邦の日光會圖、江戸城內紅葉山書府、樂善堂集、京師の幻術者、享祿版韻鏡、鐘馗の圖、光雲寺秋、池野貸成、梅里山人の棗等、和漢の雅俗雜事數十項を揭ぐ。文化二年成島司直の跋がある。【著者小傳】通稱金之丞、字は孟緊、號は蘭岡。幕府の世臣で、自らは儒を以て立ち、後、昌平黌に敎授した。天保十年（二四九九）歿、享年七十一。著述に「讀易小言」「讀左筆記」等がある。（和田）

藝園鉏莠（げいゑんそいう） 二卷【著者】松邨九山【刊行】文化八年正月、江戸將山堂【解說】山本北山の「作文率」「孝經樓詩話」二書の說を述べ、假名交り文で論駁したもので、「詞壇骨鯁」（別項）と併せ觀るべきものである。（佐久）

藝苑談（げいゑんだん） 隨筆　一卷【著者】清田絢【刊行】明和五年【解說】詩文を作る心得、詩文に用ひる文字の斟酌、圈點の事、假名文の事、撰書の心得、風雅の尙ぶべき事、輕薄を誡むべき事、唐・宋・元・明・清の詩文の月旦等數十項を收めてゐる。詩文を學ぶ人の參考

に資すべき書である。明和五年著者の兄江村綬（北海）の長序がある。門人西澤見・高岡の所校。（和田）

藝苑日涉（げいゑんにつせふ） 隨筆　十二卷【著者】村瀨之熙【刊行】文政二年刊、安政四年補刻。【解說】漢文で書いた隨筆で、和漢藝苑の事、古今品物の稱謂、俗間歲節の原委・變遷、方言の事、音韻の事、樂律の事、諸技・雜藝の事、飲食・被服の事等を汎博の見識を以て考證したもの。卷一に國號三條以下十則、卷二に國音五十母字以下三則、卷三に諸侯儀從以下二十八則、卷四に本邦樂律以下十四則、卷五に山櫻・山茶・陸船以下九則、卷六・七に民間歲節、卷八に蒸飯以下二十二則、卷九に乾飯以下二十則、卷十に寒具以下二十五則、卷十一に木棉以下十二則、卷十二に代指以下十八則を收めてある。無年紀岡本完亮、同山本信有の序がある。議論の確實正大なる點は我邦稀有の評がある。殊に卷三の國音五十母字の一項、又漢音・吳音の一項の如きは國學者も熟覽すべき價値を有つてゐる。【著者小傳】通稱嘉右衞門、字は君績、栲亭また神州と號し、自ら土岐中書と稱した。京都に出でて諸生に敎授してゐる間に、秋田藩佐竹侯に知られてその儒員に擧げられ、政務に參與して獻替するところ少くない。晚年致仕して京都に歸り、又敎授を事とした。文政元年（二四七八）二月歿、享年七十。【著書】「論語集義」「孫康集義」「周易拾象編」「栲亭集」等がある。（和田）

瓊音（けいおん） 俳人【姓名】沼波武夫（ぬなみたけを）【生歿】明治十年十月一日、名古屋市玉屋町一丁目に生れ（瓊音の號は、この玉屋町に因んだものと云ふ）、昭和二年七月十九日、東京市本鄉區西片町瑞穗會會議室に歿した。享年五十一。【法名】精進院勇參瓊音居士【墓所】東京市小石川區音羽護國寺墓地【家系】銕之助の長男。家世々漢法醫を業とした。【閱歷】愛知縣尋常中學校・第一高等學校を經て、明治三十一年七月、東京帝國大學國文科に入學。俳句に志して筑波會に入り、大野洒竹・笹川臨風等に就いて學んだ。中にも洒竹とは下宿を共にして交情最も密だつたので、俳諧の造詣も深まり、卒業前既に「俳諧音調論」を著すに至つた。三十四年七月大學を卒業、十月三重縣第三中學校敎諭として赴任、芭蕉の遺跡、蓑蟲庵の偶々空屋となれるに假寓した。翌年二月村田たき子と婚し、十一月辭任上京。三十六年

沼波瓊音

一月文部省囑託となり傍ら著作に從事した。三十九年十二月辭任、翌年一月から萬朝報社員となつた。この間世評に先んじて國木田獨步を推稱する等（「中央公論」に於て）漸く文筆の人として知らるゝに至つた。俳諧講習會を開催し、「俳諧講義錄」「俳味」（別項）等の編輯に從事したのも當時の事である。四十四年三月萬朝報社を退き、專ら「俳味」の編輯に從事し、大正二年、野上臼川と謀つて自由講座を本鄉壹岐坂に開き、文藝の講習會を設けた。この頃から宇宙に對する懷疑の念のため、煩悶懊惱を續け、五年三月巢鴨の至誠殿に赴いて熱烈な信者となり、遂に「俳味」をも廢刊、十月駿河の山に入り、翌年二月須磨御影地方に傳道すること月餘、その間一時文筆を絕つた。六年四月故あつて至誠殿を離れ、また俳書の調査を始めた。翌年六月拓殖局囑託、九年四月から法政大學・東京女子大學・東洋大學等に敎鞭をとり、翌十年四月には第一高等學校の講師となり、又東京帝國大學文學部講師として「芭蕉研究」の題下に俳諧史の講義を始めた。翌年三月には第一高等學校敎授に任ぜられ、翌十二年十一月から雜誌「朝風」を自費發刊した。この年十二月二十七日、虎の門不祥事件の突發するや、悲憤慷慨、當路者に建策警告した。且つ自ら日本精神の闡明、新國學の建設に努力することに決し、帝國大學を始め諸大學に日本精神の講義を開始した。又そのため翌年東洋大學を、十五年帝國大學及び東京女子大學を辭し、文部省敎科用圖書囑託となつた。これより先き「國の會」を設けて有志及び學生と日本精神の闡明に從事したが、十五年二月第一高等學校內に瑞穗會を興して日本精神研究の機關とし、青年の鼓舞作興に力を注いだ。その年十月、不治の病を得て臥床し、昭和二年四月第一高等學校休職となり、同七月歿した。妻たき子との間に一男七女がある。【人物】資性純眞、直情徑行、情誼に厚く、門下の熱烈な思慕崇敬を受けた。唯その感情の激烈なるがために、往々極端から極端に馳せる嫌があつたが、萬事徹底的で些の曖昧を許さなかつた。【著書】（俳諧）俳諧音調論（明治三十三年刊）○蓮風（同三十八年刊。後「芭蕉と其周圍」と改題、昭和三年刊）○俳諧奇調集（明治三十九年刊）○俳句講話（同上）○俳論史（同四十年刊）○芭蕉句選講話（大正二年刊）○瓊音句集（同上）その他があり、俳書の校訂編纂には、○俳諧古選新選（明治四十二年刊）○芭蕉句選年考（洒竹共校、同四十四年刊）○芭蕉全集（大正十年刊。後「改訂增補芭蕉全集」昭和三年刊）〔評釋〕新釋源氏物語（未完、與謝野・醍醐・臨風合著、明治四十四年刊）○徒然草講話（大正三年刊）○柳樽評釋（同六年刊）〔文集・紀行〕さへづり（明治三十八年刊）以來四集あり、紀行には、○三紀行（明治四十三年刊）〔創作その他〕芭蕉の臨終（小說）附、鮮滿風物記（大正九年刊）○野人惟然坊（大正二年刊）○武藏と伊織（脚本、同三年新小說所載）○大疑の前（同二年刊）○始めて確信し得たる全實在（同上）等もある。【參考】瓊音沼波武夫君追悼錄（國語と國文學、日本精神研究號）○噫瓊音沼波武夫先生（石村）

景戒（けいかい） 僧侶【生歿】未詳【閱歷】景戒は延曆六年九月、靈夢を感じて慚愧の心を發し、貧困に處して修養し、同七年三月再び靈夢を感じ、後、得度して西の京藥師寺に入り、同十四年十二月三十日傳燈住位を得、同十六年以後、數々靈異を感じた。景戒自ら謂ふ、「震旦に「冥報記」「般若驗記」あつて靈異を記錄す。我國にも靈異あり記錄すべきである」と。乃ち「日本國現報善惡靈異記」三卷（別項）を撰し、弘仁十三年の頃に筆を擱き、世に傳へた。（鷲尾）

京學（けいがく）「洛學」を見よ。

京華集（けいくわしふ） 詩文集　十三冊　寫【著者】橫川景三【成立】作者が應仁の戰亂を避けて、數年の間、近江に滯留し、後、京都に歸り、相國寺永德院に入つたのであるが、當時自ら作るところの詩文を編錄し、岩栖院村庵靈彥に示すと、靈彥は「京華集」と云ふ名を與へたのである。その後、作者が自ら作るところの詩文を編錄したものに、「補庵東遊集」「補庵東遊續集」「補庵東遊後集」「補庵京華後

集」「補庵京華續集」「補庵京華新集」「補庵京華外集」等がある。今この「京華集」十三册は、後人がこれ等の諸集を綜合して編成したものであらう。【内容】「京華集」十三册の第一册は、内題に「小補集」とあつて、瑞溪周鳳の序がある。序の末に「寛永五年甲申臘月念七、臥雲山人周鳳」とある。文明四年から同八年に亘る間の作者の詩文を收む。詩が多く文は少なく、詩は七言絶句が多い。第二册は、内題に「小補東遊集」とあり、作者が近江に歴遊中の詩文を收む。瑞溪周鳳の後序がある。第三册は同じく瑞溪周鳳の後序がある。第四册は、内題に「小補東遊後集」とあり、同じく瑞溪周鳳の序文がある。第五册は、文明四年以後十餘年間の作者の詩文を收め、第六册は文明・長享・延德の間の作者の詩文を收む、文は説があり銘がある。第七册は銘贊等を、第八・九・十册は拈香法語等を、第十一册は贊、第十二册は皷頌を收む。第十三册は内題に「補庵京華別集上」とあり、文明十五・十六年頃の作者の詩文を收む。これ等諸册は概ね別本があるが、第四册は別本がない。【備考】補庵京華集一册(寫)。これは「京華集」十三册本の第一册に同じきものである。○補庵京華別集附絶句一册(寫)。これは「京華集」十三册本の第十三册に同じきもので、附絶句とあるは、「東遊集」絶句百餘首を附收するものである。○補庵東遊續集一册(寫)。文明二年同三年頃作者が近江に歴遊せる時の詩文を收む。○補庵京華後集一册(寫)。文明九・十・十一・十二年頃の作者の詩文を收む。○補庵京華續集一册(寫)。文明十二年より同十四年頃迄の詩文を收む。○補庵京華新集一册(寫)。文明十七・十八年、長享元年頃の詩文を收む。文は入寺法語等である。○補庵京華外集上下二册(寫)。長享二・三年、延德元年より四年頃までの詩文を收む。文は拈香法語・字説・像贊等である。〔鷲尾〕

桂館漫筆 けいくわんまんぴつ　「桂館野乗」を見よ。

桂館野乗 けいくわんやじよう　隨筆　一卷　【著者】原瑜(過庭紀談參照)　【刊行】文化十四年　【解説】「桂館漫筆」と合册して刊行された。「野乗」は、我が國史上の人物、源頼政・太田道灌・陶晴賢・森蘭丸・荒木村重・明智光秀・伊達政宗・豊臣秀吉等の逸事を漢文に綴つたもので、中に蒲生四郎・池田市郎兵衛の如き無名の節義の士もある。「漫筆」は、著者が儒者としての一家言を述べたもので、道・德・性・情・意・仁・義・禮・智等の義理を明かにし、宋儒・物徂徠・伊藤仁齋・宇野明霞・太宰春臺・服部南郭等の學問才識を批評してゐる。最後に漫筆數條を添へ、更に卷尾に「復埼彦敬書」一篇を附錄としてゐる。いはば三種各別のものを合刻したもので、全部を纒めて普通の隨筆と同一視することは出來ないけれど、書名が漫筆とあるので、姑く隨筆の一種として置く。實曆九年青木敦書の序がある。〔和田〕

經驗科學的美學 けいけんくわがくてきびがく　(獨) Empirische Aesthetik　【解説】經驗科學を基礎とする美學。即ちそれは美を以て在來の形而上學的美學が究めようとした吾々の經驗以上の實在として考へることを廢し、これを一の經驗的事實として、自然科學・經驗科學の見地から觀察しようとする態度である。隨つてその研究方法が事實を敍述し説明してゆく事になるので、それは又敍述的美學(Deskriptive Aesthetik)とも説明的美學(Erklärende Aesthetik)とも呼ばれてゐる。然るに事實は、これが組織的方面と發生的方面との二方面から觀察される。從つて美を以て經驗的事實として觀察する經驗科學的美學も、また美的事實の組織的方面を究むるものと、これが發生的方面を究むるものとの二つに分れる。又その何れの方面を執るにしてもこれを經驗的事實として究むる故に、それは形而上學的美學の如く最上概念から出發するのでなく、現前の事實に出發點を置くので、この方法の建設者たるフェヒナー(Fechner)の語によつて形而上學的美學を「上から(von Oben)の美學」(別項)と稱し、これに對して經驗科學的美學は「下から(von Unten)の美學」(別項)と稱されてゐる。その組織的方面から美的事實を究める經驗科學的方法の美學としては、心理學的美學・生理學的美學・生理心理學的美學・社會學的美學(各別項)がある。また發生的方面から究める美學としては、生物學的美學・人類學的美學・民族心理學的美學(各別項)がある。〔渡邊〕

經驗心理學的美學 けいけんしんりがくてきびがく　「心理學的美學」を見よ。

敬語 けいご　國語學【解説】敬語は人を敬ひ己を謙る心持の言語に現れたもの。外國にも敬語は多少あるが、我が國の如く發達してゐる所は稀れである。上古醇樸の世に於ては敬語も簡單であつた。臣下が天皇を呼び奉るにも、「汝が命」といふ代名詞を用ひてゐる。王朝時代より武家時代に至つて主從の關係が複雜になり、敬語も煩瑣なるに至つた。狂言記の如きを見れば、その時代に待遇により代名詞の異常なる發達をしてゐたのに驚くであらう。今日は再び平等の時代に復つた。王朝以來、次第に發達した多樣な敬語は、減るのが當然であり、現に減つて行きつゝある。併し言語の上に敬語のある事は、我が國語の特徴で、今後に於て全く無くなることは想像出來ない。支那の言葉のやうに、「王巡狩」といふやうに、君主の行動をいふ場合にも、全く敬意を含めぬ言ひ方をするやうなことは到底あるまい。「行く」といふことを言ふのでも、尊長の動作には、「いらつしやる」といひ、自分の動作には「參ります」と云ふ。目下に云ふ場合でも、話の相手としては、「おいで」「おいでなさい」と云ふのが國語の美點である。教養のある人の言葉に品格のあるのは、一面、この點に原因がある。【種類】(一)尊位もしくは話の相手に關する事物や動作に對して、特に尊敬の意を表する場合、(二)卑位もしくは自己に關する事物・動作に對して、卑下の意を表する場合、(三)尊卑に關せず、自己たると相手たるとを問はず、事物・動作を丁寧に言ふ場合とある。「陛下便殿に入らせ給ふ」「君はいつ御轉宅をなさいますか」の如きは尊敬の言ひ方であり、「首相閣下に骸骨を乞ひ奉る」「私は明日參上致します」の如きは卑下の言ひ方、「これは吳鳳といふ人のおかげだと申します」の如きは丁寧な言ひ方である。これ等を言ひあらはす方法を敬語法といふ。【敬語法】には、全くちがつた語を用ひる場合(「行く」のかはりに「參る」、「去る」のかはりに「まかる」の類)と、文法上の手段を用ひて、同じ語に添へて言ひあらはすものとあるが、後者について略述すると、名詞には、「お」「み」「おん」「ご」などの接頭語、「どの」「さま」「さん」などの接尾語を用ひ、又兩者を併せても用ひ、丁寧の言ひ方には、「お茶」「御酒」など尊敬の接頭語をかり用ひる。代名詞は人代名詞の尊敬に「御許」「貴殿」の如く、名詞から轉

じたもの、「あなた」「どなた」の如く指示代名詞から轉じたもの、「殿下」「閣下」の如く接尾語から轉じたもの等、概ね轉用語を用ひる。動詞には「あそばす」「います」「おはします」「おぼしめす」「きこしめす」「たまふ」「御覽ず」(以上文語)。「あがる」(食ふ、飲むの意)「めしあがる」「いらつしやる」「おつしやる」「くださる」「なさる」「あそばす」(以上口語)等、尊敬を表はすもの、「うけたまはる」「きこゆ」「さぶらふ」「たてまつる」「たまはる」「つかまつる」「まゐる」「はべり」(以上文語)。「あがる」(訪ねる意)「うかがふ」「あげる」「さしあげる」「いたす」「いただく」「うけたまはる」「存ずる」「まうす」「まうしあげる」「まゐる」(以上口語)等卑下を表はすものなど、特別の語がある。丁寧には「侍り」「申す」「ござる」等尊敬・卑下から轉じたものがある。助動詞には「る」「らる」「れる」「られる」「せらる」「せられる」等、尊敬を表はす本來のものがあり、「授け給ふ」「返し奉る」「お泊りなさる」「お歸りになる」「お待ち申す」「お頼み致す」の如く、敬語動詞から轉じた尊敬・卑下の言ひ方もある。丁寧を表はすには、「日も高くなり侍り」「こゝは山科と申し候」「みな人おどろきて見給へし」等動詞から轉じたものがあり、口語には「あの人も歸ります」「違うございます」「こゝは室町です」等の言ひ方がある。形容詞・準形容詞・副詞には「おん」「お」「ご」などの接頭語をつけて「おんいたはし」「おなつかしい」「御親切な」「御壯健に」「ごゆるり」などいひ、丁寧には、「お寒うございます」「お廣くございます」など尊敬のものを轉用してゐる。【參考】敬語法の研究山田孝雄○文語口語對照語法吉岡郷甫〔小林〕

傾向藝術 けいかうげいじゆつ　(獨) Tendenzkunst, Problem-kunst　【解説】作家自身が自己の抱懐する一定の主義・目的、例へば社會的・政治的觀念を藝術を通して實現し、宣傳する藝術である。制作の動機に於て第二義的であり、藝術はその主義宣傳の手段として意義づけられ易い。從つて一般的には藝術的價値の低いものが多いが、併し作家が有する人生觀或は社會觀は、直接或は間接に、制作心理に關係し、作品に一種の規定を與へる事は否まれない。故に文化が複雜になり社會的階級觀念が強くなれば、特に文藝などの方面で傾向的な作品が多くなる傾きとなる。而して作家の社會文化に對する批判が透徹し、且つ藝術的表現の才能が豐かな場合には偉大なる文藝を見出す事が出來る。ユーゴーの「レ・ミゼラブル」の如きはその例であらう。而もこの種の文學には、一面理想主義的特色を見出すことが出來る。(問題藝術參照)〔村田〕

鷄口集 けいこうしふ　俳文集　二册　【著者】入江襟風　【名義】「戰國策」の「寧爲鷄口、無爲牛後」による。【成立】天保十一年春　【刊行】弘化二年秋　【由來】序によると、著者は古來支考編の俳文集「本朝文鑑」「和漢文操」(各別項)が世に行はれてゐるけれども、兩書とも範とするに足らずとして、進んで右兩書と拮抗し、世の無識を啓發しようとして本書を著はしたのである。起風が纂校し、入江氏藏版で梓行したもので、天保庚子(十一年)仲春の吉備仁科幹(白谷)の漢文序がある。【讀本】俳人逸話紀行集(俳諧叢書)所收　【解説】著者の俳文三十四篇を集めたものである。醉古堂自序・有馬紀行・憤者辯辭・森遠行辨辭・天橋立眺望記・頭播磨聯集・克彦句帖序・枕説・福綠壽讃・蕉翁像讃・與父古瑞等、その文體は種々である。而してその措辭は概ね平淡、その趣味は大凡溫雅、亦見るに足るものがある。が既述の如く著者は支考一派の所謂美濃派の文章を排した人、隨つてこの點からいふと、本書は確かに「本朝文鑑」や「和漢文操」と趣を異にしてゐるが、その成績からいへば、著者の自負したほど右兩書に拮抗するに足る程には至つてゐない。【著者小傳】襟風は播磨國印南郡曾根村の人、名は重房、通稱清兵衛。累代製鹽を業とした。始め龜洞、中頃泥中と號し、晩年襟風と改め、別に濯纓とも號し、別邸を醉古堂と稱した。若冠より俳諧を好んで諸方に遊歴し、士朗・几董・蒼虬・梅逸等と深交があり、俳人・文士のその家に寄寓する者多く、殊に漢學者仁科白谷は殆ど半生を醉古堂に送つたといふ。性甚だ酒を好む。嘉永元年十二月五日歿、享年五十七。〔各務〕

傾向小説 けいかうせうせつ　(英) Tendency novel, Novel with a purpose　【語義】藝術的な意味でなく、寧ろ藝術を手段として、作者の抱いてゐる或る目的乃至理想を傳へようとする小説である。それには必ず何等かの目的や主張があるので、この點からして目的小説とも呼ばれてゐる。【解説】小説の目的を、教化のため、或は改革のためと解して、作家が筆を執る以上、純粹の藝術的效果を覘つてゐないことは明かである。けれども藝術的に成功しないで、目的を果すといふ事はあり得ないであらう。こゝに傾向小説の全問題が懸つてゐる。邪惡な又は劣惡な法律の撤廢を唱へ、或は女權の擴張、婦人參政權を主張し、又は宗教の腐敗墮落の非を鳴らし、もしくは牢獄の改革を説くなど、作品の表面に、作者の理想や目的を露骨に現はしはするが、而もなほ、それが藝術的表現に於て勝れてゐる場合、始めて傾向小説は成功したものといへるのである。【日本の傾向小説】勸善懲惡を主眼とし、封建道德の鼓吹につとめた馬琴の「八犬傳」を始め、德川期の多くの作品は一種の傾向小説である。明治になつてからは、その十年代に幾多の政論家が現はれて、政治上の意見とか、社會改良の思想とかを小説の形式に託して表現することが流行となつた。その結果、東海散士の「佳人之奇遇」、矢野龍溪の「經國美談」、末廣鐵腸の「雪中梅」「花間鶯」、須藤南翠の「綠簑談」(各別項)等の所謂政治小説(別項)の出現を見るに至つたが、これ等は皆傾向小説である。更に木下尚江の「[illegible]」「勞働」等の小説は、彼の抱懐せる社會主義思想を盛り上げた傾向小説である。大正十年前後から勃興して昭和三四年前後には文藝界の主要傾向となつたプロレタリア文學中の小説なども、廣い意味では傾向小説といへよう。〔宮島〕

經國集 けいこくしふ　詩文集　二十卷(現存するものは六卷)　【名稱】經國の語の出典は、魏の文帝の「文章經國大業、不朽之盛事」に出で、既に「凌雲集」の序にも見えて居る。【撰者・成立】淳和帝が良岑安世に詔して、詩文を集輯せしめられたもので、恐らく序文に見える天長四年の初め頃であらう。その詔によつて、南淵弘貞・菅原清公・安野文繼・安部吉人等と編輯した。序に天長四年五月十四日の記載があるから、その頃成立したものと考へられる。【諸本】群書類從卷一二五所收。その他に傳來する寫本も皆類從本と同じく、現存六卷

小說の材料は現代に於てもつとも缺乏した」といふ一般の攻撃に對して、「すべての素材を新しく生かすためには、その素材に現代の生活形式を附與しさへすればよい。形式の方向から見る時、如何なる素材も新しい。且つ素材自身も絶えず動いてゐるといふのが眞實である」と答へる。故に形式主義者の任務は、あらゆる社會の素材を、新文學の形式に構造し直すことにあると言ひ、彼等は自ら「この强力なる形式についての關心は、片手落ちの內容主義を、又政治によつて文學を縫らうとする誤謬を、見事に征服するに相違ない」と樂觀する。〔宮島〕

形式主義的美學 けいしきしゆぎてきびがく 〔獨〕Formalistische Aesthetik 【解說】美の成立の根據を美的對象の形式にありとする美學。內包美學(別項)の對語。即ち、美は調和・律奏・統一等の表象關係の形式によつて成立するので、その形式によつて現はるゝ內包なるものは、單に美的對象を成立せしむる材料たるに過ぎないといふ考へ方。主としてヘルバルト(Herbart)の美學に由來する多くの心理學的美學者の主張するところの說である。〔義清〕

形式美 けいしきび 〔英〕Beauty of form 〔獨〕Formschöne 【解說】內容美に對立する概念をいふ。普通は美的對象(自然、藝術)の直觀的感覺的方面全般に基く美をいふ。美的形式(別項)の概念は複雜であるが、特に對象の感覺的各要素の結合關係のみを指す場合に、それに基く美は藝術の美の主要な部分であると解釋され、こゝに內容美學に對立して形式美學(形式主義)の立場が生れる。從つて造形美術の形式美が多く主張されるのであるが、詩歌の如きも、その音的リズムの感覺的要素は形式美の條件を具有するのみならず、文學者の中には文字の視覺的形式に或はその配列の仕方に美を認める者もある。また文學的表現に於て、種々の思想や感情、又は人間の運命が互に交錯して叙述される關係に一種の形式美があるとされる。「具象美」(別項)「形相美」といふ語が用ひられる事もある。〔村田〕

形而上學的美學 けいじじやうがくてきびがく 〔獨〕Metaphysische Aesthetik 【解說】形而上學を背景とする美學。即ち吾々の感官に與へらるゝ現象の世界の背後に、實在の世界を精神によつて假定し、この實在の世界を根據として、美又は藝術の本質を說明しようとする。その實在の本質が如何なるものかは、その形而上學者の解釋によつて異なるが、少なくとも、これが現象と區別されたる實在を假定する點に於ては相通じてゐる。隨つてその研究方法が實在を思辨して論證してゆくので、形而上學的美學は亦、思辨的美學(Spekulative Aesthetik)とも呼ばれる。近代に於てはヘーゲル(Hegel)の影響に基くテオドール・フィッシャー(Theodor Vischer)、シャスラー(Schasler)、ヘルトゥマン(Hartmann)等は、この方法をとる。〔義清〕

繫思談 けいしだん 飜譯小說 【譯者】尾崎庸夫譯(報知社員、傳未詳)、藤田茂吉佐譯纂評 【角書】諷世嘲俗 【原作】英國リットン卿作「ケネルム・チリングリー・彼の言行」と題するもの。【刊行】明治十八年十一月初編、同二十一年五月中編、下編未刊 【內容】譯し振りは、純然たる逐字譯で、一種新奇な所謂周密文體を用ひてゐる。編章の分け方も、原本と略と同じである。ただその頃の例によつて各章の下に駢句の題號めくものを附けてある。筋は、一人息子のケネルムが世間知らずの變物で、沈鬱遁世的な性格なのを父は心配し、世の中の實際を見せるために旅行させる。著者は、ケネルムに種々な「冒險」に出會はせ人生の神秘と情趣を味はせて、彼の人生觀を根柢から築き直させる一方、著者一流の理想的立場から當時の英國社會のあらゆる現實を觀察批評してゐる。俳優に戀して家出した男裝少女とケネルムの義俠、或は農家の手傳ひとなつて、主人と婦人無用論を論じ、或は可憐の少女とその戀のために惡少年を懲して改心させ、又は一處不住の行脚の客と人生を論じ、得意の戀愛罪惡論を戰はしたり、名家の令嬢に戀されて外國に逃れたり、少女リリイと逢つて持論の獨身主義が壞れかけたり、或は政治社會に出入してその虛僞罪惡駈引に愛想をつかしたり、樣々な社會、樣々な人物に接觸したとどのつまり、失戀の苦と戀人の死から心身の革命となり、再生したケネルムが出て來る。さうして始めて人生の偉大と久遠を知り、偉大な英國の舊傳統によつて人生の戰士として立たうと覺悟する。

「繫思談」扉

【史的地位】この譯書の出現と共に、明治の飜譯文學界は更に一轉化の機に逢着した。森田思軒はこの書について、「藤田氏ノ繫思談ヲ譯スルニ及デ造句措辭別ニ一機軸ヲ出シ。或ハ艱奧ニシテ通ジ難キモノ無キニ非ズト雖モ。其ノ原本ヲ臨スル謹嚴精緻。今日無數ノ周密文體ハ其紀元ヲ此ニ溯求セザルヲ得ズ」(「夜と朝」序)といつてゐる。この書の飜譯の態度について其の例言の大意を摘めば、小說は藝術である以上、「構案」と「文辭」と相俟つてその妙を見るべきであるが、從來の飜譯家は「構案」だけを取つて「文辭」を顧みない。これでは藝術の害を譯する本意ではない。それで今一種の譯文體を創意し、語格の許す限りは努めて原文の形貌面目を存せんことを期し、些末に渉つた邦文の法度などは寧ろ破つても顧みない事にした、精緻の思想を叙述するに當つてはこれも止むを得ないからである云々。所謂周密文體はこれから生じたものである。併し、この譯書の周密文體そのものは、先驅だけに、成功したものではないが、この飜譯態度によつて、明治の飜譯界の主潮を定めるに貢獻したといふ點では劃期的である。〔柳田(泉)〕

妓者呼子鳥 げいしやよぶこどり 洒落本 一册 【作者】田にし金魚 【畫工】湖龍齋 【刊行】安永六年 【諸本】妓者虎之卷(天明七年改題再板。徳川文藝類聚第五編・近代日本文學大系第十一編・洒落本大系第二卷所收 【題材】横町の女藝者で、評判の高かつた辨天お豐に關する噂を主材とし、併せて當時の江戸町藝者の風俗を描かうと試みたもの。篇中の藝者は恐らく皆實在の人物であらう。

【梗槪】兩國元柳橋の片ほとりの臥猪庵を訪れた通人がある。露時雨と云ふ。諸所の町藝者の噂、横町のお豐に切れ文をやつた話、木挽町のお富が自分に熱くなつて、十四五日看病してくれた話、など語つて歸る。横町で、辨天お豐といはれる評判の美人、露時雨からの切れ文が氣にかゝり逢うて怨みを言はうとしてゐる折柄、屋敷客に招かれて行くと、客の一人文甫に腕の文身を無理に見られる。二世も三世も露時雨女房と彫つてある。文甫は何氣なく「木挽町のお富の腕にも露時雨とほつてあつた」と語る。お豐は露時雨が緣を切ると云ふ理由が始めて解り、はつと上氣すると共に狂亂し、側なる火鉢をとつて文甫に投げつける。侍客の一人がお豐を縛つて駕籠に押込み横町へ送り返す。お豐は全く狂氣し、秋葉の宮に夜な〱通つて呪釘を打つた。上方店の中可通晋義が臥猪庵を訪れ、お富を取持つてくれと頼むので、早速お富を招いて、舟で眞崎稲荷へ出かけた。秋葉の森を眺めるとお富は急にぞつと寒氣を感じた。眞崎稲荷に上り、つた屋に入つた。臥猪は密かにお富を呼び、「露時雨はお前故に、お豐と切れる事となつたが、ついてはお豐に出させた金二十兩を返濟せねばならぬ。彼にそれが出來ないで困つてゐる、晋義を一時だましてその金を作つてくれまいか」と語つた。お富は諾々承諾する。晋義は、友人の濡水・玉河を誘ひお富を呼び、露時雨とある文身を消せと云ふ。お富はこれも露時雨ゆゑと艾で燒き消す。この噂を聞いた露時雨は烈火の如く憤りお富の家に飛び込んで責め、言葉の行き違ひからお富を脇差で刺す。死際にお富の苦心を聞いた彼は今更の如く悔み、同じ刄に伏して死んだ。お豐はいよ〱口惜しがり、その生靈が人魂となつて毎夜お富の墓を襲うた。或る浪人これを聞き、人魂を眞二つに切ると、今まで正體なく床についてゐたお豐は、深夜にわつと叫ぶと共に息絶えた。

【構想】色を通する通人露時雨にも、眞情の燃える時があつて、お富の變心を信じ遂に命までも捨てるに至る。一體に血の浮くやうな通人臭に蔽はれて、洒落本のもつ缺點が遺憾なく現はされてゐる。なほ本篇は洒落本の本質たる情調を描くところが少なく、事件の展開に主眼を置いた作で、翌年發表の「契情買虎之卷」(別項)と共に、やがて人情本の發生を豫想せしむる作品である。〔山崎〕

閨秀俳家全集 けいしうはいかぜんしふ 俳諧集 一册 【編者】勝峰晋風 【刊行】大正十一年 【內容】明治以前に出板された女流俳人の撰、或は作の俳諧集十二種を撰び輯め、籔蹟及び肖像を口繪としてゐる。即ち「菊の道」(紫白女撰)、「菊の塵」(園女撰)(各別項)、「鶴の杖」(園女六十賀集、園女撰)「千代尼句集」(既白撰)、「姫の式」(兎路撰)、「松の聲」(諸千代尼句集、既白撰)(別項)、「海山」(田女句集、鶴口撰)、「其しをり」(古友尼撰)、「松がさね」(古友尼句集、奈里撰)、「諸九尼發句集」(湖柱撰)、「星布尼句集」(映之編)、「手折菊」(菊舍尼著)。〔荻原〕

藝術 げいじゆつ 〔英〕Art 〔獨〕Die Kunst 【解說】語義に於ては技術と同義であるが、一般の概念としては、美的效果を喚起する特殊な技術的生產活動及びその結果たるところのものを謂ふ。その形式的側面に於ては具體的直觀的性質を帶ぐべく、主觀的側面から見れば所詮吾人の生活感情の表現である。然し技術が「具體的な事物を生產する能力」と云ふ限定された意味に解釋される場合には、技術的生產の結果たるものは所謂造形的意義が强調され、從つて藝術は造形美術(特に彫刻繪畫)の意味に解釋される傾きがある。蓋し藝術の定義は古來數多く存するが、藝術の本質に關する點から大別すれば、(一)それを個人的自我の所產として解釋するか、(二)社會的に觀察するかである。(一)の場合に於ても、藝術家個人の活動の特殊な性質を顧みなければならぬから(獨創性・個性・素質參照)、一樣に藝術を定義することは危險である。個人の內面的體驗の具象的表現であると考へられても、生產の動因・目標・手段・材料、或は固有の思想又は生理的素質等、各方面から考へられなければならない(創作の心理參照)。即ち個人的方面から藝術の本質を理解するためには、(イ)人としての藝術家、(ロ)その生產活動、(ハ)具體的表現等各々を精密に觀察せねばならない。(二)藝術は又社會的に觀察されるが、蓋しそれは一般に人間の社會的生活のそれ〱の發展段階に依存し、又社會的に作用するからである。然し社會的關係に於て藝術の本質を理解し定義する事は、なほ多くの問題を止揚せねばならない。藝術の社會學的研究に於てそれ〱特色ある考察をなせるものに、テーヌ、ギュヨー、ハウゼンシュタイン、プレハーノフ、フリィチエ、メーリング、ル・メルテン等がある(藝術の分類參照)

【參考】美學及一般藝術學(Wundt: *Die Kunst*)〇深田康算全集第三卷〇トルストイ、テーヌ、ワイルド、ホルツ、ゴールチエ等の藝術論的著作〔村田〕

藝術意欲 げいじゆついよく 〔獨〕Kunstwollen 【解說】藝術史の方法論上の概念として、ウィーン派の美術史家リーグル(Alois Riegle)が唱へた言葉で、その後ウォリンゲル、パノフスキー、ウィンド等の學者の間に多くの論議が行はれた。リーグルは藝術品を進化史的な關係に配列するための概念として用ひたのであつて、藝術意欲とは「一時代の多少意識的な一般的造形衝動を意味するのではない、寧ろ時代のすべての藝術創造を顧慮した結果得られるところの純粹な抽象、即ち一時代の藝術的表徵から得た綜合を意味する」のである。故に、それは藝術家の個人的志向でもなく、又一時代の意識的目的でもないので、作品及びその生產を總始規定するところの意識的無意識的諸原動力の綜合を意味するのである。然し、この概念は後に美術史的基本概念として論議を經て、遂には藝術學上の用語として、藝術的時代精神、樣式目的、藝術觀、或は造形目的等の種々な意味に用ひられてゐる。もとリーグルの考へでは、ゼムペルなどが考へたやうに、藝術樣式を決定するものは材料の性質や技術或は歷史的條件であるといふ唯物論的解釋に反對して形式的にも內容的にも藝術品を內から組織する力を認め、この力を示す概念として藝術意欲といふ言葉にしたのである。然し、パノフスキーの考によれば、藝術意欲を、(一)作家の意欲又は目的と同一に考へることも、(二)時代精神といふやうな意味に考へることも、(三)作品の評價者の藝術的意圖に重きを置いて考へることも、皆誤りである。藝術學的認識の對象としての藝術意欲は「心理的な現實のもの」ではなくして、客觀的に藝術現象の中に在るもの、作品の內在的意味(Immanente Sinn)であると解釋してゐる。

【參考】Riegl: *Spätrömische Kunstindustrie.* ‖ —— : *Stilfragen.* ‖ Worringer : *Abstraktion u. Einfühlung.* ‖ E. Wind : *Zur Systematik d. Künstl. Probleme.* (Zeitsch. f. Aes. Bd. 18). ‖ Panofsky : *Über das Verhältnis d. Kunstgeschichte zur Kunsttheorie.* (Zeitsch. f. Aes. Bd. 18). ‖ A. Dorner : *Die Erkenntnis des Kunstwollens durch Kunstgeschichte.* (op. cit. Bd. 16). 〔村田〕

藝術家 げいじゅつか 〔英〕Artist 〔獨〕Künstler 【解說】藝術家は、ギリシヤでは技術家として理解された。伊太利ルネサンス以後次第にその個性的主觀的方面が發揮され、他方藝術鑑賞の上で内容主義が流行し、文化史的意義も認められるやうになつて「人」としての藝術家は特殊な存在となつた。藝術家は彼獨得の空想活動によつて美的作品を創作し、それを通して一種の快樂を公衆に與へ、一國の或は一時代の文化向上に參與する人々であるといふ事が出來る。藝術家の創作活動(藝術の心理參照)は、その素質、表現上の特殊な才能の相違、環境等によつて支配される點があるために、種々の藝術家の型を區別することが出來る。大別して感情的動的型と知的靜的型に區別する。ニイチエはディオニソス的とアポロン的とに分けた。併し概して藝術家に於ては普通よりも官能的感情的體驗の點に特異な心的特徵を見受ける。(天才・創作活動・素質參照)

【參考】Utitz : *Der Künstler.* ‖ K. Piper : *Künstlertypen u. Kunstprobleme* ‖ Volkelt : *Aes. Bd. III.* ‖ Dessoir : *Aes. u. allg. Kunstwiss.* 〔村田〕

藝術科學 げいじゅつかがく 「藝術學」を見よ。

藝術學 げいじゅつがく 〔獨〕Kunstwissenschaft 【異稱】藝術科學ともいふ。【解說】藝術を對象とする科學。但、多くの場合藝術史を除外する。カントは既に自然美と藝術美とを分つたが、藝術美を論ずるになほ美一般論を以てし、而もこれを「純粹美」に比して「附屬美」であるといふやうに、藝術を美の概念の下に包合せしめて說明した。然るに近代に至つて、一方、藝術史の研究の興隆すると共に、美學上經驗科學的美學の隆盛となるに伴つて、美一般の概念を究めるにしても、先づ客觀的・具體的・固定的な性質をもつ藝術作品を觀察する事によつて究める方が確實であると主張せらるゝに至つて、藝術科學 Kunstwissenschaft の名稱が生じて來る。詩學又(Poetik)とか、演劇論(Dramaturgie)とか、音樂科學(Musikwissenschaft)とかいふやうに、各藝術特殊な性質が別に研究されるやうになり、いはゆる特殊藝術科學(Einzelne Kunstwissenschaft)が興隆する。これに對して、一方各藝術共通の藝術一般の本質を究めようとする學が、一般藝術科學(Allgemeine Kunstwissenschaft)と呼ばれる。然るに遂に藝術は美とは異なる獨自な特質をもつといふ事が主張せらるゝと共に、茲に在來の美學と離れて別個に藝術科學なる科學が主張せらるゝに至る。藝術科學の概念がこゝに至ると、美學一般の對象内容たる美と藝術が、明確に別個のものとして區別せらるゝことが明かになると共に、かくの如く美と異なる藝術を對象とする藝術科學なるものは、美を對象とする美學と、その方法上亦異なつた方法に依らなければならぬかといふ問題を生ずる。こゝに又藝術科學の種々なる立場の解釋が現はれる。

【學說】既にグロッセ(Grosse)によつても、藝術を觀察するには、在來二つの方法がある。その一は藝術史的の觀察であり、一は藝術哲學的の觀察である。前者は藝術並びに藝術家の發達に於ける歷史的事實を研究し、これが事實を確立することを目的とする藝術史である。後者は藝術の本質・條件・目的に關する一般的考察である。併しこれを思辨的形而上學によつて求むることでは事實の說明たり得ない。むしろ藝術の一般的法則は事實の中から見出されなければならぬ、これを見出すことこそ藝術科學の問題である。即ち藝術史は、藝術の個々の事實を敍述し、藝術科學は、藝術の一般法則を說明することを目的とする。それで藝術科學の目的は、藝術現象を對象として、敍述・說明の方法によつてその對象を明かにすることにあるが、この對象たる藝術現象には、個人心理方面と民族社會的方面とがある。前者は心理學的問題であり、後者は社會學的問題であるといふ。そしてこの社會學的問題の研究は、先づ原始民族の藝術現象を對象として人類學的に究めらるべきである。コンラッド・ランゲ(Konrad Lange)によれば、科學としての藝術論は先驗的な形而上學的假定に依らずして、經驗的に藝術生活自身の事實から藝術創作や享受の法則を求めなければならぬ。在來藝術研究も美學といはれてゐたが、自然美と藝術美とは相異なる。自然に於て醜い女も藝術上繪に描くと新しい繪の材料となる。隨つて自然と藝術とを分つて考へなければならぬ。吾々が藝術に對する科學的研究は美學でなく、藝術論と稱せらるべきである。そして、この藝術の形式・内容の發達の問題と藝術一般の本質の問題とがある。前者は藝術史の問題であり、後者は藝術哲學である。併しこれが研究の方法はフェヒネルが言つたやうに、「下から」の美學でなければならぬ。シュマルソー(Schmarsow)によれば、藝術の歷史的・具體的事實のうちに、藝術形相の形式としての一般的なものを求むることが藝術科學の問題である。藝術を獨自な對象とする藝術科學にとつては、一切の心理學的說明も、たゞその藝術作品の形式的條件の說明のためでなければならぬ。固より藝術作品はこれを制作する主觀によつて作られるのであるから、その作を構成する心理的な動機をも明かにしなければならぬが、それは作品に於ける與ひ方を說明する手段であつて目的ではない。藝術科學は單なる心理學でなく、心理學をも方法とする科學で、その對象は、藝術作品自身の形相の形式にある。デッソア(Dessoir)によれば、從來一切の美的なるものや藝術やを說明する總括語として、美といふ概念が用ひられてゐたが、藝術では悲壯とか滑稽とかの外に美とは反對の醜までも扱はれる故に、美の概念だけで藝術の一切を說くことはできぬ。それは生活上の美と藝術に於ける美とが同一でないからである。例へば人物畫は生活に於ける人物と異なり、女であるから男の注意を惹くといふやうな性的關係なく、恰も風景畫のやうな獨自な形相として現れる。反對に又森林の自然美を味はふ如き場合には、香のやうな低級感覺もその美感を味ふことに關はつて來るが、藝術を味ふ場合にはそれがない。その代りに藝術美の中には、作家の人格や技巧の力を味ふことができる。斯くの如き美一般を究むる美學には求められぬ藝術的事實の特質を究める事が一般藝術科

學の問題である。既に藝術史と共に各藝術の特殊研究が詩學として、又音樂論として究められてゐるが、これらの特殊藝術科學の觀念・方法・目的を認識論的に明かにし、又それ等の研究の結果を集めて比較する事が、一般藝術科學の問題である。ウティッツ(Utitz)によれば、自然主義の藝術とか藝術の起原とかいふものは、單に美といふ概念では說明ができぬ。又美しい顏とそれを描いた美しさとは同一でない。隨つて藝術は美しい事實狀態を表現したものでなく、事實狀態を美しく表現したものである。かくすると美といふ意味が異なる二樣の意味に用ひられる。又崇高とか悲壯とかいふ如きものも異なる美とは異るもので、寧ろ美以外の要素から規定される。斯くの如く美といふ概念以外に亙る多くの現象が、藝術現象として現れる故に、美を說く純粹美學によつては藝術現象を明かになし得ない。美學と離れて藝術の本質を究むるところに一般藝術學の本領がある。

【參考】K. Lange : *Das Wesen der Kunst.* 1901. ‖ A. Schmarsow : *Grundbegriffe der Kunstwissenschaft.* 1909. ‖ —— : *Kunstwissenschaft und Völkerpsychologie. Zeitsch. f. Aes. u. allg. Kunstwiss. Bd. II.* 1907. ‖ M. Dessoir : *Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft.* 1906. ‖ —— : *Sinn und Aufgabe der allgemeinen Kunstwissenschaft Philosophische Monatshefte der Kants-Studien. I. 4. Sonderheft.* 1925. 〔[illegible]〕

藝術活動 げいじゅつかつどう 「創作の心理」を見よ。

藝術家の類型 げいじゅつかのるゐけい 〔獨〕Künstler-Typen 【解說】藝術家の個人的特性をその生得の素質(氣質)の上から分ければ、おそらく無數の類型が可能であつて、藝術學的研究の一部門とも考へられる。例へば詩人の間でも如何なる感覺的表現をとるか、色彩の表象にすぐれてゐるか、音の表象にすぐれてゐるかなど、それぞれ幾つかの型に分類される。畫家についても、線的表現と色彩的表現の何れかに強く傾いてゐる等のことから型が別れる。ミュラア・フライエンフェルスの試みた自我の類型を圖式に示せば、次の如くである。

(一)藝術生活型(主觀的)
 (イ)受動的・主觀的(鑑賞型)ノヴァリス等
 (ロ)能動的・主觀的(實演型)ニイチエ等
  特徵型┬純美的型
     └藝術的型
     ┬文學的(又は社會的感情型)
     └性生活の感情型
     ┬靜的型
     └動的型
(二)藝術生活型(客觀的)
 (イ)觀照的・知覺生活的(觀照的空想型)
 (ロ)製作的當體的
  特徵型┬特殊な方向へ觀察を行ふ型
     └觀察的なものへ觀察する型
     ┬綜合(總合)型
     └非總合型
     ┬感覺的・靜的型
     └感覺的・動的型

【參考】Müller-Freienfels : *Persönlichkeit u. Weltanschauung.* ‖ —— : *Psychologie d. Kunst.* 〔村田〕

藝術觀 げいじゅつくわん 〔獨〕Kunstanschauung 【解說】藝術の本質や任務は何であるか、藝術は如何なるものであるかといふことについての理解を云ふ。この藝術に對する見地は個人個人の把握の仕方、標準によつて異なり、藝術觀には種類が生ずるが、古來二つの對立する藝術觀があり、從つて多くの藝術論・藝術體系の上にもこの對立が見受けられる。即ち、その一つは、藝術は吾人に何等か教訓を與ふるもの、教ふるものであるといふ見地。その二つは、藝術は吾人に娛樂を與ふるもの、樂しませるものであるといふ見地。前者は理性または理智の方面を主眼にして藝術を觀る立場であつて、ギリシヤ思潮に多く見受けられる藝術觀である。この立場からすれば、藝術の價値は結局、眞・善と一致する。藝術は教訓であり、眞でなければならぬ。作家は道德家または哲人たることが要求され、技術が尊重され、個性的自由が否定される。形式主義・主知主義の藝術論に發展する。後者は主情主義的で藝術は美といふ獨自の價値創造であり、藝術家に個性的自由が許され、天才として特殊的地位と技能が認められる。從つて内容主義、主情主義の藝術論に發展する傾が生ずる。この藝術觀は歐洲に於ては比較的近世に現はれ、十五世紀伊太利文藝復興期以後、大に發展した考である。(美學史・藝術論・藝術の分類參照)

【參考】深田康算全集第三卷 〔村田〕

藝術教育 げいじゅつけういく 〔英〕Art education 〔獨〕Kunsterziehung 〔佛〕Éducation artistique 【解說】藝術が持つ特徵及びその生產の狀態が從來の科學思想や倫理の說くるところと異なつて個性的であり、情操本位であるといふ點に關心して、寧ろ感情の方面から人を陶冶しようとする教育論である。このやうな主張は、古くシラアの論文「美的教育を論ずる書」の中に現はれてゐるが、積極的主張となつたのは十九世紀末からである。藝術の重大な特徵の一つはそれが個性的であるといふ點、二つにはそれが情操の表現であつて、主知的でないといふ點である。かくして(一)個性尊重、天才主義的教育が主張され、(二)知的にでなく感情的に人の品性を陶冶高尚にする教育が是認される。これは藝術に就ての教育方針となつてくる。而して他方に、藝術的好尙趣味の涵養は國民全體の品位を高め、一國の文化を向上せしめるといふ見解から、藝術にまでの教育といふことが主張される。E. Weber の如きは、教育の仕方を藝術といつてゐる。

【參考】藝術教育 [illegible] ○藝術教育 [illegible] ○教育的美學 佐々木吉三郎 ‖ Volkelt : *Kunst. u. Volkserziehung.* Schiller : *Über die aes. Erziehung d. Menschen.* ‖ K. Lange : *Künsterische Erziehung d. deut. Jugend.* ‖ E. Weber : *Aes. als pädagogische Grundwiss.* ‖ A. Lichtwark : *Die Grundlagen d. Künstl. Bildung.* ‖ K. Groos : *Zum Problem d. aes. Erziehung.* 〔村田〕

藝術形態 げいじゅつけいたい 「美的形態」を見よ。

藝術座 げいじゅつざ 演劇【創立】大正二年坪内逍遙の文藝協會解散の前後、新劇第二次の運動として文藝協會の溫和な文藝教化主義に慊らず、演劇による直接の思想的刺戟を求めた早稻田派少壯文學者により組織された新劇團。【沿革】曩に文藝協會の幹事を勤め中年輪の英國放浪の旅から歸つた島村抱月を擁して主盟とし、中村吉藏・秋田雨雀・川村花菱・水谷竹紫・仲木貞一等の演劇關係者及び片上伸・相馬御風・中村星湖等、早稻田文學社同人十餘名

を幹事とし、同年夏牛込江戸川端清風亭に第一回會合を開き、俳優にはこれより先、文藝協會を退はれた松井須磨子を座長格に、舊文藝協會二三期生の男優澤田正二郎・倉橋仙太郎・狂本甲午・森野誠一等、及び背景畫家の小林徳三郎等を加へて一座を組織、劇團の名義を藝術座・新劇場二案のうち前者に決定、暗にモスクワのそれに比擬した。同年九月麴町丸の内有樂座に第一回公演、マーテルリンクの戯曲二種、「モンナ・ヴァンナ」と「内部」を島村・秋田二氏の譯によつて上場した。島村氏の脚本選定にはいつも多少の自傳的内省的興味の纏綿する例であつたから、ヴァンナの悲劇の暗示する新舊世界の對立には、自家現在の境遇に比して新しき自由及び藝術の感傷的な勝利を誇張したとも見られたが、而も幕切のヴァンナの豪語に所謂「美しい夢が始まる」期待は儚なく裏切られて、この初演は興行的にはとにかく藝術的には殆ど獲る所がなかつたのみならず、後年永くこの劇團の禍根となつた須磨子をめぐる座中の紛爭は早くこの時に始まつた。まづ抱月擁立の主動者であつた早稲田派文士の大部分はこの時を限りに抱月及び座員の男女俳優を孤立の儘に遺して離反し去つた。而も座員の間にも不平は絶えなかつたから、翌三年一月ともかくも第二回の一層不成績な有樂座公演(海の夫人・熊)を終ると間もなく爆發し、三月の帝劇にトルストイの「復活」公演を前にして澤田正二郎以下舊文藝協會系男優の大部分の脱退を見るに至つた。「復活」の脚色上演は二回の不成績に懲りて一層大衆的な曲目の選定に苦しんだ藝術座が楠山正雄の發案により、フランスのアンリ・バタイユの脚色本に基づいて抱月親ら「再脚色」したものであつたが、原作のもつ甘美な人道主義的情調が恰も好し大正初年の世潮に投じ、これに加へて劇中須磨子によつて唄はれた相馬御風作詞、中山晉平作曲の「カチューシャの歌」が歌曲自らのもつ哀調と當時須磨子の孤獨な境涯に對する同情と相扶けて一種の情趣を生じ、應急の粗末な座組にも拘らず興行は意外の大成功を以て終り、以後この劇は藝術座地方巡業の獨參湯となり、これと共に「カチューシャの歌」は日本全土を風靡し、よつて藝術座乃至新劇の大衆的進出を確實にし、「トルストイの復活は藝術座の復活」とまで云はれた。同時にこれは民衆音樂家としての中山晉平の華々し

藝術座第一回公演のポスター

き發途でもあり、今日流行の所謂演劇・映畫主題歌の萌芽でもあつた。これより後、抱月は世間一部の非難と嘲笑に拘らず、絶えざる家庭の葛藤、座員の内爭の間に孤獨忍從、あらゆる艱苦と屈辱に耐へて、一意藝術座の經濟的・大衆的基礎のために努力を續け、須磨子及び中井哲・田邊若男等數名の男優を率ゐて、或は淺草公園に兩國國技館に普及興行を行ひ、或は滿鮮浦鹽にまで巡業した。この間藝術座大衆興行の主なる曲目は、飜譯乃至飜案劇に、「サロメ」「その前夜」(劇中歌・吉井勇作ゴンドラの唄)「マクダ」「人形の家」「思ひ出」(アルトハイデルベルヒ改題)「ボーラ」(第二タンカーレー夫人改題)「生ける屍」(北原白秋作さすらひの唄)「クレオパトラ」「沈鐘」(島村・楠山合作、森の娘の唄)「緑の朝」「カルメン」等があり、創作劇に中村吉藏の「飯」「剃刀」「眞人間」「爆發」「帽子ピン」等があつた。晩年多少の餘裕を得て牛込横寺町に研究所、藝術倶樂部を建て附屬の舞臺の設備されるに及び、抱月は再び小劇場的演出に興味を感じ來り、研究劇の名の下に、一たび澤田正二郎を聘して「闇の力」を、又中村吉藏・秋田雨雀・長田秀雄・楠山正雄等を脚本部員として有島武郎の「死とその前後」を演出して並びに好評を得た。かくインテリ觀劇者階級の藝術的再把握に努めると同時に、一方に松竹合名社との企業的提携により徐ろに經濟的安定を策して、更に大衆的進出に一歩を進める意圖であつたが、不幸、大正七年十一月五日、抱月の急死に次ぐ須磨子の自殺(同八年一月五日)により一切が崩解し去つた。而も如何なる揣摩臆測に拘らずこの間の事情は、意外に單純簡明であつて、須磨子は體力氣力共に非凡な女性ではあつたが、藝術的には、元來抱月によつて魂づけられた人形に過ぎず、一旦人形師の死と共に、自ら踊る力を失つて可憐にも狂躁しつゝ斃れたといふを當れりとする。

【業績】かくして前後六年に亙り、新劇團として同じき荊の道は踏みながら、比較的廣い親しみ深い觀劇大衆によつて支持せられ、ことに「復活」の興行化以後は、通俗的・卑俗的と罵られながら、また半ばメロドラマ的でありながら、ともかくも、平明な舞臺上の現實主義を大衆の間に浸潤させる事に成功した。これによつて新劇に對する理解乃至嗜好を一般に深めたのみならず、歌舞伎乃至新派劇の專門俳優にも明白な影響を及ぼし、それだけに空虚な舊劇の形式化に對する不滿又は焦燥は、追々に動かし難いものになつた。今日わが演劇界を蔽ふ神經病的現象を超えて、何等か明日の革新を望むことができるとすれば、そこに當然全國にわたつた藝術座往年の直截な新劇教化運動が想ひ起されなければならないであらう。抱月・須磨子の名によつて、藝術座は長く新劇の眉目であり、よかれあしかれ、これ以上に強き個性によつて輝く劇團のつづいて起るものを今に見ないのである。(楠山)

藝術史 げいじゅつし 【獨】Kunstgeschichte

【解說】藝術を對象とする歴史、即ち藝術の發展關係を說明する學。隨つて藝術家や藝術品の單なる年代的記錄や、それに對する年代順の價値評價や、それを通じて求める自然法則の研究等は、記錄・實際批評・自然科學に過ぎずして、それ等と區別されたる意味の歴史學としての藝術史たることができぬ。併し歴史學として藝術の發展關係を說明するにしても一般文化史の一部として、即ち一般文化の發展の過程としての藝術現象を說く文化史的藝術史と、藝術自身の發展過程を說く純粹の藝術史とがある。併しまたこの純粹の藝術史に於ても、藝術品の構成能力の發展を說く藝術史と、民族性の藝術意欲の發展を說く藝術史とがある。前者の方法をとる學者としては美術史上のヱルフリン(Wölfflin)、文學史上の

シュトゥリッヒ(Strich)があり、後者の方法をとる學者としては、美術史上のリーグル(Riegl)ヴォーリンガー(Worringer)等がある。

【參考】H. Wölfflin: *Kunstgeschichtliche Grundbegriffe*. 1915. ‖ F. Strich: *Deutsche Klassik und Romantik*. 1922. ‖ A. Riegl: *Die spätrömische Kunstindustrie*. 1901. ‖ W. Worringer: *Abstraktion und Einfühlung*. 1908. (宮島)

藝術至上主義 げいじゅつしじょうしゅぎ 【英】Art for art's sake 【佛】L'art pour l'art

【語義】藝術はその發生から見ても絶對至上自律的なものであるから、その目的や價値も亦絶對で、それ自身が目的であり、價値であると說く藝術理論の一つである。人生のための藝術(art for life's sake)に對峙するもの。

【由來】獨逸のシルレル、英國のスペンサアなぞの主張する學說、即ち藝術の起原は遊戲本能の發動にあるといふ信條を出發點とし、藝術はこの實用本能乃至功利觀とは全く關係のない遊戲本能、もしくは快樂衝動のために表現されるのであつて、その他に何の目的もないといふ考へが生じた。スペンサアの說く所に依れば、我々には種々の本能があるが、その中の遊戲本能は、遊戲すること自體が目的で、他に目的はない。そしてこの遊戲本能が表示するものは即ち美である。從つて美は功利とか有用とかいふ觀念を離れて存在する。實際的な有用目的を目ざす行動には美は伴はず、功利を目的とすれば美は姿を消してしまふ。そこで美は美のために存在し、その美を表現する藝術は藝術そのもののために存在する。この「藝術のための藝術」なる概念をはつきり規定し、この語を始めて用ひたのは佛の哲學者にして美學者であるヴィクトル・クーザンであるといはれる。なほこの主義を最初に文藝作品へ實現したのは、佛蘭西の浪漫派の作家テオフィル・ゴオティエである。彼の代表作「マドムワゼル・ド・モウパン」についてゐる序文は藝術至上主義の宣言書といつてよろしい。それを要略すれば、美が實用的でなく、實用的なものが醜であることは、實用から遠ざかつてゐるサロンの如きが最も美しく、最も實用的な臺所や便所が美しくないのでも分る。美と實用とは全然別である。それ故その美の表現たる藝術は實用目的乃至價値から引離して、それ自身の自由な活動と評價とに委さなければならぬ、といふにある。英國の唯美派作家の說くところも、ほぼこれと同じである。その派の巨匠オスカア・ワイルドは「架空の頽廢」といふ論文の中で、藝術は人生から遊離し、これを超脱しなくてはならぬ、さうでない限り完全な藝術は生れないと言ひ、また藝術はそれ自身のみ現をはす、藝術には獨立の生命がある、つまり美の表現といふ生命・目的を持つてゐるとも說いてゐる。

【日本に於ける藝術至上主義】日本では「人生のための藝術」一點張りの自然主義全盛の跡に、その反動として藝術派作家が現はれ、プロレタリア文學に對して或は新感覺派、或は新興藝術派の如きが現はれて、藝術至上主義的傾向を示したが、劃期的運動にはならなかつた。

【批判】この主義は「人生のための藝術」說が、やゝもすれば藝術を單に政治・道德・宗教乃至社會のための方便としようとするのに對し、藝術そのものの本質を明かにすることに相當の效果はあるが、矢張り一面的な藝術理論である。從つて「金錢のための金錢」とか、「科學のための科學」とかいふ標語が無意味である如く、何等價値のない說であるといふ非難をさへ受けてゐる。この主張を完膚なきまでに攻擊したのはトルストイである(彼の著「藝術論」)。又マルクス主義藝術理論家からも手痛く排擊されてゐる。(宮島)

藝術小說 げいじゅつしょうせつ

【語義】藝術的良心に訴へて書いた小說、または藝術的效果を強く讀者に與へる小說の意。通俗小說、乃至目的小說・傾向小說・問題小說などに對するもの。

【解說】藝術を手段として、作者が自己の抱懷する思想問題・社會問題、又は敎訓などを傳へる目的で書くのとは違つて、飽くまでも藝術的良心と感興とに從つて書く、讀者の人氣等を眼中に置かない小說である。藝術小說は、その作者が人間生活の根本を究めてゐれば、深い人生の味ひを表現することが出來て自然優れた作品にもなるが、人生の經驗に乏しい作家によつて描かれると、所謂藝術のための小說に墮してしまふ虞れがある。而して藝術小說の本來の意味は前述の通りであるが、近來は多少違つた意味に用ひられるやうになつて來た。即ち浪漫主義全盛の時代に於ては、情熱的な憧憬的な、從つて陶醉的な、所謂藝術小說が正しい小說と考へられてゐたが、人道主義の擡頭となり、人生のための藝術が高唱され、自然主義の主張によつて現實主義が重んぜられるやうになつてからは、藝術小說が必ずしも唯一の正しい小說ではなくなつた。更にプロレタリア文學が主流となつてからは、遂に藝術小說といふ名稱は、やゝ輕侮の意味にさへ使用されるやうになつて來た。即ち藝術小說とは、寧ろ現實味のない小說で、この世の生活の苦しさ、慘めさを餘所にして、徒らに理想に憧れ、架空的な生活を讃美し、或は享樂生活を高調するやうな、暢氣な小說の意味に用ひられるに至つた。また今日では、プロレタリア文學に對して、ブルジョア文學を代表する言葉の意味にも用ひられてゐる。一體に外國に藝術小說といふやうなテクニックがあるか否かは判然しない。日本でもこの造語はさう古くから用ひられてゐた譯ではない。昭和二三年頃、通俗小說が文藝界に有力な地步を占めるやうになつて來たので、それに對して、在來の小說を藝術小說と呼び、その市場價値を保たんがために藝術尊重を唱へるものがあつて、何時しか藝術小說の名稱が起つて來たのである。その藝術小說と通俗小說との比較が、文藝批評界の問題となつたのも、その頃のことである。(宮島)

藝術的眞 げいじゅつてきしん 「美的眞」を見よ。

藝術的素質 げいじゅつてきそしつ 「素質」を見よ。

藝術的態度 げいじゅつてきたいど 「美的態度」を見よ。

藝術哲學 げいじゅつてつがく 【獨】Kunstphilosophie, Philosophie der Kunst

【解說】藝術を對象とする哲學。ウティッツは藝術科學をこの藝術哲學の意味にも用ひてゐる。一般に現象學的美學の學說に於ては、現象的見地が經驗科學でなく、哲學上の一見地でありながら經驗科學の如く具體的事實を對象として用ひる上から、藝術哲學と藝術科學とが同義に用ひられることが多い。經驗科學上に於て、美學の外に藝術學が主張せらるゝと同樣な論理によつて、即ち美的一般のみを對象としては藝術に對する理解は不十分であるといふ理由と、又一方、美的一般の發展せる形式が藝術形式であるといふが如き見地とから、哲學的

の印から所謂天の聖者に終る（子音・母音・半母音・鼻音の区別まである）。

【参考】 Sir W. Jones : *Sanskrit Grammar*. 1807. ‖ Max Müller : *Sanskrit Grammar*. 1859. ‖ Whitney : *Sanskrit Grammar*. 1879. ‖ Wackernagel : *Altindische Grammatik*. 1896. ‖ Macdonell : *Sanskrit Grammar*. 1927. ‖ Speijer : *Sanskrit Syntax*. 1886. ‖ Renou : *Grammaire de la langue védique*. 1930. ‖ Renou : *Grammaire sanskrite*. 1930. ‖ Renou : *Grammaire de la langue épique*. 1930. ‖ Renou : *Grammaire de la langue classique*. 1930. ‖ Renou : *Terminologie grammaticale du Sanskrit*. 1942. ‖ Renou : *Histoire de la langue sanskrite*. 1956. ‖ Renou : *Grammaire sanskrite*. 1961. ‖ Renou : *Manuel pour étudier le sanskrit*. 1962. ‖ Renou : *Grammaire élémentaire du sanskrit*. 1963. ‖ Renou : *Grammaire de la langue védique*. 1966. ‖ Renou : *Grammaire de la langue épique*. 1968. ‖ Renou : *Grammaire de la langue classique*. 1968. ‖ Renou : *Terminologie grammaticale du Sanskrit*. 1968. ‖ Renou : *Histoire de la langue sanskrite*. 1968. ‖ Renou : *Grammaire sanskrite*. 1968. ‖ Renou : *Manuel pour étudier le sanskrit*. 1968. ‖ Renou : *Grammaire élémentaire du sanskrit*. 1968. ‖ Renou : *Grammaire de la langue védique*. 1968

又は精神的全性質の反響であつて、論理によつて成立するものではない。けれども、かゝる好惡も亦原因なくしては生じ得ない。この好惡の心理的原因を求める事が科學的問題の一部である。かくして吾々の藝術感覺のうちに作用する吾々の精神生活の法則、換言すれば、藝術法則を明かにすることが、藝術批評の任務であり、かゝる普遍的法則をもたぬ判斷は勝手な個人的判斷に過ぎぬ。クローチェ(Croce)によれば藝術哲學に基く藝術批評として、美學的批評と歴史的批評とがあるが、この二種の批評と似而非なる僞美學的(又は唯美主義的)批評と僞歴史的(又は歴史主義的)批評とがある。僞美學的、即ち唯美主義的批評は、哲學を輕んじ藝術の概念を斥ける。僞歴史的、即ち歴史主義的批評は、時間空間上の事實のみを語つて藝術の事實を語ることができぬ。これに反して眞の美學的批評は、哲學の見地から藝術概念として作用する。眞の歴史的批評は、藝術以外のものによらずに、想像生産の歴史的事實をもとめる。この意味に於て眞の美學的批評と眞の歴史的批評とは同一のものである。即ち前者は藝術理解の必然性を見、後者はこれが觀察の歴史的客觀性を見る。そして歴史は一の目的意味をもつ構成的全體として成立する故に、歴史的客觀性を觀察する歴史的批評は、藝術の目的意味を示す藝術概念を示す美學的批評と一致する。

【參考】Th. Alt : *Die Möglichkeit der Kritik neuer Kunstschöpfungen und der Zeitgeschmach.* 1910. ‖ M. Diez : *Kunstkritik und Kunstgesetze.* 1911. ‖ B. Croce : *Kunstkritik und Kunstgeschichte. Grundriss der Aesthetik.* 1913. ‖ Dresdner : *Kunstkritik. I.* 1915. 〔高橋〕

藝術品 げいじゆつひん　美學　〔英〕Art product 〔獨〕Kunstwerk 【解說】藝術家(美學)の製作したところのもの。即ち創作活動の結果たるもの。美學及び一般藝術學の研究對象として自然と對立するもの。リップスは美的觀察の對象として、藝術作品と自然とを比較し、藝術品の觀察には(一)現實性を除去して觀る必要がないこと、(二)理念的であること、(三)その美は構作であり固定的であることを擧げてゐる。フェヒネルによれば、藝術作品とは、(一)感官的手段によつて直接に快感を與へ、價値ある理念を表示するものであり、(二)理念を明確に感官的に表出するものであり、(三)直接的全體的に好感するものを與へるための法則を有するものであるとする。ウティツは、現象學的な立場からして、感情體驗を構成によつて表現するものが藝術であるとし、作品の美はそれが假象であり幻覺であるために生ずるのではない。むしろ作品の美は表現の方法又は構成の形式の中にあると考へてゐる。然し、藝術品の意義に關しては一般に個人的解釋と社會的解釋とがある。(一)作品は作家の個人的所產で、個人の內面的體驗を客觀的直觀的に表現したものであるといふ見解と、(二)作品及び作家自身も彼の時代、民族、社會的生活の精神的潮流等に依據するものであるとして、作品の社會的作用を認める見解とがある。(藝術の社會學參照)〔井田〕

【參考】Utitz : *Grundlegung d. allg. Kunstwiss.* ‖ Lipps : *Aes. Bd. II.*

藝術本能說 げいじゆつほんのうせつ　美學　〔英〕Art-instinct 〔獨〕Kunsttrieb 【解說】藝術的活動の精神的原因・動機を人間の特殊の衝動から說くもの一般を藝術本能說といふが、(一)人間の衝動の種類は反射的運動から目的的觀念によつて規定される運動に至るまで甚だ複雜であり、(二)論者の藝術觀察の方面の相異すること、即ち種類(音樂・文學・美術等)に從つて重心の置き所を異にするために多種な說を見る。主なる本能說を擧げるならば、(一)遊用本能說、(二)模倣本能說、(三)裝飾本能說(以上前項)、(四)表的(表現)本能說。グローヌは模倣本能と共にこの本能を認める。動物が自身の身體を裝飾にし、飾るといふことは一種の本能であるとして、この點から藝術裝飾發生の因を求めようとする。(五)性的本能說。創作活動を性的な牽引の活動から考へようとする說。ダーヴィン及びスペンサアに認められる。藝術が快感的であり享樂的活動であると考へられる一面からして、性的活動から創作活動の本質を導かうとする。併し種族保存の本能として性的本能は排他的であり功利的である事を本質としてゐる。性的快感は肉體的一時的快感であるに對して、藝術創造に於ても、鑑賞に於ても美的快感は異なる快感ではない(美的快感參照)。(六)遊戲本能說。(遊戲衝動・民族藝術・藝術の起源參照)。

【參考】美學概論キイマン(安倍能成譯)〔井田〕

藝術論 げいじゆつろん　美學　〔獨〕Kunstlehre 【解說】藝術を對象とする理論。この「論」を「科學」としてのみ許す場合は、藝術學(美學)乃至藝術科學(美學)、並びに美學(美學)內に於ける藝術論を意味する。ランゲ(K. Lange)は、これを藝術學と同義に解してゐる。この「論」を未だ「科學」の域に達せざる斷片的・斷片的理論として解する場合は、ゲーテ、トルストイ、ラスキン、エマースン等の論の如き、主として藝術家・藝術批評家等の藝術觀に基く理論を意味する。これを最も廣義に解する時は、以上の二者を總稱せる意味、即ち藝術を對象とする一切の論の意味に於て用ひられてゐる。

【參考】深田康算全集第三卷 ‖ Panofsky : *Ueber das Verhältniss d. Kunstgeschichte zur Kunsttheorie.* ‖ Borinski : *Die Antike in Poetik u. Kunsttheorie.* ‖ Müller : *Geschichte d. Theorie d. Kunst bei d. Alten.* 〔高橋〕

經書 けいしよ　儒學 【名義】孔子を中心として、聖賢の述作したところのものを總稱して經と言ふ。經の字義に就いては、許愼の「說文」には「織從絲也」と言ひ、段玉裁の「注」には「織の從絲、これを經と謂ふ。必ず經ありて而る後に緯あり」とあり、劉熙の「釋名」には「經徑也」と言ひ、且つこれを敷衍して「徑路の通ぜざる所なきが如く、常に用ふ可きなり」と云ふ。即ち前說は根本の意とし、後說は常用すべきものと解してゐるが、二說必ずしも背反するものではなく、經とは常用すべき道、根本的なる道を記述した典籍を稱する名である。【由來・解說】傳說に據れば、上古伏羲氏が八卦を畫し、書契を造つて、結繩の政に代へて以來、始めて文籍を生じ、その書及び神農・黃帝の書を「三墳」と云ひ、「少昊」「顓頊」「高辛」「唐」「虞」の書を五典と云ひ、また八卦の說を記した「八索」、九州の志を錄した「九丘」等の書があり、楚の左史倚相が能くこれ等の書を讀んだと言ふ(孔安國尙書序)。蓋しこれ等は支那に於ける最古のものであり、且つまた國家の大道、常道を記述したものであると言はれてゐるけれども、未だ嘗て經と稱したことはなく、また「周禮」には、邦國の典法を初めとして、古今の諸々の典籍・記錄を含む多くの官職が擧げられてゐるが、その內にも亦經の名は見えてゐない。典籍もしくは書寫の名として經の字を用ひた例は、周の中葉以後の書に於て初めてこれを見る。「荀子」に「夫れ學は經を誦するに始まり、禮を讀むに終る」(勸學)、及び「道經に曰く、人心惟れ危しとし、道心惟れ微なり」(解蔽)の語があり、道經の經は、前後の關係から見て明かに「詩」「書」「禮」「樂」「春秋」を指して居り、道經とは、楊倞の注には蓋し有道の經なりと言ひ、阮元は黃老の古說なりと言つてゐる。更に「墨子」には經上下・經說上下があり、「管子」には經言九及びその牧民篇中には士經があり、「韓非子」の內儲說上・外儲說右上・儲說右には、それぞれ數ケ條の經と稱するものがあり、「淮南子」には本經訓があり、而して又「呂氏春秋」には「孝經に曰く、高くして危からざるは長く貴を守る所なり」(察微)の句があり、「莊子」には「南方の墨者、俱に墨經を誦す」(天下)の句があり、又「孔子老聃に謂つて曰く、詩書禮樂易春秋の六經は、自ら以て久しと爲せり」(天運)、「老子曰く、夫れ六經は先王の陳迹なり」(同上)の句がある。「孝經」の語が典籍の上に現れたのは、上の「呂氏春秋」の語を以て最初のものとし、「詩」「書」「禮」「樂」「易」「春秋」の六籍を六經と稱したのは、この「莊子」の書を以て最古とする。玆に注意すべきことは、孔子の正系を繼いだ儒家の書に於て、先秦時代に典籍の名として經の字を用ひたのは、上揭の「荀子」の語が殆ど唯一のものであつて、儒家以外の諸子の間に於て、その學派に於ける典籍、或は今日の所謂經書に屬するものを、經の名を以て呼んでゐるに對して、儒家の間に於ては却つて傳の字を多く用ひて居つたことであつて、この事實は孟荀二子の書に徵しても明かである。傳の字義に就ては、「說文」には遽なりと云ひ、段玉裁の「注」には「引伸傳遽の義なり、則ち凡そ展轉引伸の稱、皆傳と曰ふ、而して傳注流傳是れなり」と言ひ、「釋名」では「傳は傳なり、以て後人に傳示するなり」と解釋してゐる。後世に於ては、傳とは經に對してこれを解釋するものに名づけたもので、陸德明が「春秋傳」に於て「傳は經を述ぶる所以なり」と言つたのは最も明確な定義を與へたもので、王充が「聖人其の經を作り、賢者其の傳を作る」(論衡正說篇)と言ひ、「尙書緯」に引く所の「博物志」に「聖人の制作を經と曰ひ、賢者の著述を傳と曰ふ」と云つてゐるのは、陸德明の說の先驅となつたものであるが、先秦時代に於ては、經と傳とはそれぞれ或る部局の人々の間に於て別々に用ひられたもので、その間に必ずしも陸德明の所謂傳は經を述ぶる所以の關係が存在したのではなくして、儒家は主として傳の字を用ひ、經の字は却つて諸子の間に多く用ひられて居つた。ただ「禮記」に經解篇があり、「其の國に入りて其の敎知るべきなり。溫柔敦厚は詩の敎なり、疏通知遠は書の敎なり、廣博易良は樂の敎なり、潔靜精微は易の敎なり、恭儉莊敬は禮の敎なり、屬辭比事は春秋の敎なり。故に詩の失や愚、書の失や誣、樂の失や奢、易の失や賊、禮の失や煩、春秋の失や亂」と言ひ、六經の批評をしてゐるので、孔穎達は「其の經と稱するの理は則ち久しく前に在り、故に禮記經解に云ふ、潔靜精微は易の敎なりと。既に經解の篇に在り、是れ易に經と稱するの理あり。案ずるに經解の篇、備に六藝を論ずれば、則ち詩書禮樂並びに合に經と稱すべし」(周易正義序)と言つて、「詩」「書」「易」の類も亦先秦時代に古く經と稱したかの如く言つてゐるが、未だ確信とするに足らぬ。又「孝經」の題名は孔子の自らなづけたものとする學者もあるが、その論據とする何休の「公羊傳」序等の語は、緯書に基づいたもので、信ずることは出來ない。要するに儒家に於てその重要視する根本的な典籍に對して經の字を用ひたのは、戰國末期乃至漢初の事であらうと思はれる。而して經名が漸く稱するに至つたのは、賈誼が「傳に因つて經の名あること、猶ほ是れ孔子に因つて父の號を立つるがごとし」([illegible])と言つた如く、所謂六經を說明敷衍する傳及びその名稱が先じて、然る後に說明し敷衍せらるべき六經そのものに、傳に對して經の名稱を附けたものであらう。而して後世儒家の人々が從來慣用せられてゐた經の名をその典籍に附與するに當つては、或る限界を設けたので、即ち經の名は後世の宗師とする孔子の手定を經た「詩」「書」「易」「禮」「樂」「春秋」、即ち所謂六經に限つてこれを用ひ、また傳の名は六經を注釋し祖述する典籍のみを稱するに至つた。即ち孔子の手定なる條件が戰國末期乃至漢初に至るまでの儒家の間に於て典籍の名稱としての經の字に特殊の意義を與へたのである。故に漢初の儒家は、「論語」「孝經」「易」の繫辭、「禮」の喪服等、孔子の手定を經たものの外は、總てこれを傳と稱して居り、更に後世經書の內容が次第に擴大せらるるに及んでも、常に孔子を中心として定められてゐる。この事は近人皮錫瑞の著「經學歷史」の初めにも「孔子以前に經あることを得ざるは、猶ほ之れ李耳既に出でて始めて五千の言を著し、釋迦未だ生ぜずして七佛の論を傳ふべからざるがごとし」と言つてゐる。即ち孔子の手定が從來の典籍に新たなる意義と權威とを與へた事を意味してゐる。又これより先、鄭樵が「六經未作の前は、一世一聖人を生ずるも足らず、六經の後は、千萬世、一聖にして餘あり」(六經奧論)と言つたのも、亦同樣の意を述べたものである。その初めは專ら上記の六に限つて經と稱したので、その數に從つてこれを六經(もしくは六藝)と言ひ、秦火に「樂經」が亡んだので五經の目を生じ、既に漸く六經の內容が損ぜられると共に、他方「論語」「孝經」等は經として六藝中に加へられ(漢志)、又七經の目も起り、一方には讖緯の如く六經損益の不可を論ずる者も現れた(隋書經籍志)。唐代に及んで九經(孔穎達は易・書・詩・禮・樂・春秋・論語・孝經・小學を以て九經とし、陸德明の「經典釋文序錄」は易・書・詩・三禮・春秋・孝經・論語とし徐堅の「初學記」は易・書・詩・三禮・春秋・公羊傳・穀梁傳としてゐる)の目を生じ、後十三經を數ふるに至つた。十三經は明の焦竑の「國史」經籍志には「唐注疏を定めて、始めて十三經と爲す」と言ひ、又蔣の「十三經注疏」序にも、既に唐の石經中に十三經と謂してゐたと云つてゐると言ひ、顧炎武の「日知錄」(卷十八)には明代に始まると言つてゐるが、王應麟の「玉海」に據れば、今日の「易」「書」「詩」「三禮」「三傳」「論語」「孝經」「爾雅」「孟子」を內容とする十三經の目が、北宋時代に存在したことは明かである。その後、「爾雅」「孟子」に代ふるに、老莊二子を以てして、同じく十三經と呼んだこともあるが、殆ど行はれず、今日經書と云へば、上の十三經を意味してゐる。

謂ふ所の「十三經注疏」とは、周易注疏十卷(魏王弼・晉韓康伯注、唐孔穎達等正義)・尚書注疏二十卷(舊題漢孔安國傳、唐孔穎達等正義)・毛詩注疏二十卷(舊題漢毛亨傳、鄭玄箋、唐孔穎達等正義)・周禮注疏四十二卷(漢鄭玄注、唐賈公彥疏)・儀禮注疏十七卷(漢鄭玄注、唐賈公彥疏)・禮記注疏六十三卷(漢鄭玄注、唐孔穎達等正義)・春秋左傳注疏六十卷(晉杜預集解、唐孔穎達等正義)・春秋公羊注疏二十八卷(漢何休解詁、唐徐彥疏)・春秋穀梁注疏二十卷(晉范甯集解、唐楊士勛疏)・論語注疏二十卷(魏何晏集解、宋邢昺疏)・孝經注疏九卷(唐玄宗御注、宋邢昺疏)・爾雅注疏十一卷(晉郭璞注、宋邢昺疏)・孟子注疏十四卷(漢趙岐注、舊題宋孫奭疏)を言ひ、この中、「周易」「尚書」「毛詩」「禮記」「左傳」の所謂五經の疏は、勅命によつて作られたものであるから、もと正義と言ふ。周公謹の「癸辛雜識後集」に據れば、賈似道が「十三經注疏」を上梓せんとして果さなかつたと言ふが、これを合刻したのは明の正德に始まり、爾後數種の刻本がある。因に言ふ、「歷代書目」に收むる所の經部の內容及び分類を見るに、「漢書」藝文志は「易」「書」「詩」「禮」「樂」「春秋」「孝經」「論語」「小學」の九類に分ち、梁の阮孝緒の「七錄」も亦これに同じく、「隋書」經籍志は「爾雅」「五經總義」「讖緯」の三類を增し、宋の「崇文總目」は「漢志」に從ひ、「通志藝文略」は「隋志」に從つて、「讖緯類」を除いて、「五經總義」を「經解」と改め、「文獻通考」「經籍考」はこれに從つて「孟子」「儀注」の二類を加へ、「四庫全書總目提要」は、通志の上に別に四書類を增して十類に分つてゐる。

【研究史】上項に述べた如く、儒家の間に於て限定せられると共に、經學といふ言葉が生じた。文獻の上では「漢書」兒寬傳に、「寬上に見えて經學を語る」とあるに始まる。經學とは經に關する學を謂ふのであるが、これを一言にして定義することは困難である。その目的とする所は、やがて孔子が所謂六經の上に認めて居つた意義、或はこれを手定するに當つて與へた意義によつて規定せられるものであるが、上項に引いた「禮記」經解篇の孔子の語、或は「史記」に引く所の「孔子曰く、六藝の治に於けるや一なり。禮は以て人を節し、樂は以て和を發し、書は以て事を道ひ、詩は以て意を達し、易は以て化を神にし、春秋は以て義を道ふ」(滑稽列傳)の語、又は「漢書」儒林傳の「古の儒者は博く六藝の文を學ぶ。六學は王教の典籍にして、先聖の天道を明かにし人倫を正しくして、至治の成法を致す所以なり」の語等によつてこれを觀れば、修己治人の道、即ち個人並びに社會の理想を規定した學であつて、倫理道德、政治經濟を中心として、これに哲學・宗教・文學・藝術等の要素を加へた頗る廣汎な內容を有つたものである。而して經學の內容は、源を遠く唐虞三代に發し、孔子によつて組織づけられたものであるが、孔子の時に所謂經學なるものがあつたのではない。それは、孔子を中心とする教團に於て、その具體的な人格的中心たる孔子を失つた後、即ち孔子の歿後漸次發達したものである。今その歷史的發展の迹を觀るに、大凡三つの時代に區分し得る。即ち秦漢から唐に至るまでを第一期とし、宋から明に至るまでを第二期とし、清朝を第三期とする。周末乃至秦代は、法家・黃老・陰陽・楊墨等の所謂異端雜說と並存し、或は時にこれ等に壓倒されんとする經學の萌芽時代である。漢初に至つて王室の保護を受けると共に次第に勃興の機運に向つたが、當時の經學は專ら師法即ち傳統を重んじ、その研究も經書の校訂と訓詁とを先とし、而も概ね一經もしくは二經を專攻して、これを專門の學と言つた。武帝は董仲舒の對策を納れて、百家を罷黜して六經を表章せんがために五經博士を置くに至り、經學は他の諸子百家の學に對して漸く特殊の地步を占めるやうになつた。後漢の經學は大體前漢の經學を繼承したものであるが、皮錫瑞が「前漢は師法を重んじ、後漢は家法を重んず」(經學歷史)と言つてゐるやうに、學術の隆昌と共に、學說も亦多端になつた。而して前漢では一經專門の學風であつたが、後漢に至つては通經、即ち經書の比較研究乃至綜合的研究の風が次第に重んぜられるやうになつた。更に最も後漢の經學を特色づけるのは、前漢の今文學に對する古文學の勃興である。今文・古文とは、經書のテキストの文字の形體の相違を言ふのであるが、兩學派はそのテキストのみならず、その主張・學風も相異つて居り、この二つの傾向の對立は永く後代の經學の內に見ることが出來る。而して前後漢の經學は、從來の今文・古文の諸說を普く綜合して、多くの經書を整理統一せんとした鄭玄に至つて大成したものと見られる。三國乃至六朝の經學は、新來の佛教と、從來の老莊と交渉してその影響を受け、殊に南北兩朝對立の時代は經學も亦南北各々特異の學風を以て對立し、北學は純ら兩漢の學を傳へたが、南學は魏晉以來の所謂玄學がその主流となり、佛教の微細な經論研究の餘波を蒙つて、舊來の注の上に更に義疏なるものを生じ、訓詁學上に一新時期を劃した。「北史」(卷八十二)儒林傳の序に、「南人は約簡にして其の英華を得、北學は深蕪にして其の枝葉を窮む」と評した南北の經學は、南北朝が隋に依つて政治的に統一せられると共に、亦統一せられたが、實は樸素朴實な北學が亡んで、簡明洗練を貴ぶ南學に統一せられたのであつた。唐代に入つて太宗は經學の統一を企てて、貞觀中孔穎達等に命じて、諸儒と共に「五經正義」を作らしめ、高宗の時に及んでこれを天下に頒つて、爾後これによつて試に應ぜしめることとした。これは或は太宗の英斷ではあるが、經學を全く固定して、その進步を阻害する結果を招いた。その「五經正義」は義疏の學の統一であるが、既に隋代に於ける南學の北學統一は、こゝに至つて全く確立する事となつた。而して「五經正義」そのものに對しても、「彼此互異」「曲徇經文」「雜引讖緯」等の非難があり、また老莊學の影響も少くないと言はれてゐる。これまでを經學の第一期とする。各々時代的な特色はあるが、專ら訓詁的方面を中心としてゐるので、漢唐注疏の學などと呼ぶ。宋代に入つて經學は一變して、原始的儒教、又は兩漢の經學とはやゝ異なる方面へ進み、經典の解釋に於ても、從來の傳統的解釋を排して、篤實な態度を以て批評的に研究し、更に佛老二教を融合して、性理學(理學、道學とも云ふ)と稱する一種の哲學を組織した。その中心人物を通常その出身地によつて濂洛關閩(周濂溪・二程子・張横渠・朱晦庵)と云ふ。元明の經學は殆ど宋學の繼承に過ぎない。宋より明の間を經學の第二期とする。その中心とする論點によつて、宋明性理の學、或は義理の學などと言ふ。清朝に入つて、やゝもすれば空疏不學の弊に陷り易い前代の經學に對して、黃宗羲・顧炎武等によつて、漢學復歸の新學風が開かれて、

以後の經學は專ら事實を考證して、歷史的に論證することを貴ぶに至つた。併しながら、康熙時代までは宋學・漢學折衷の時代で、乾隆以後に始めて一般に純然たる漢學になつた。中に漢唐の注疏によつて經書の解釋に努める吳派と、更に一步を進めて文字言語の研究に從事して、精確なる研究をなさんとする皖派の二大派の別がある。然るに考證の學は愈々精密を加へると共に、漸く岐路に入り、訓詁派・音韻派・金石派・校勘派・輯佚派等に分れ、遂に考證に沒頭するものさへ出るに至つた。玆に於て道咸以後、主として後漢の古文學を中心とした前清の經學に對して、局面を轉換せんとして、師法を重んずる前漢の今文學こそ經學の正統であり、孔孟の眞意を闡明するためには宜しく前漢今文學を復興すべしと主張する學派が起り、以て清朝末期に及んだ。これを經學の第三期とし、通常清朝考證學と呼ぶ。我が國の經學も亦支那に於ける學風の變遷と步調を一にし、王朝時代は專ら訓詁の學が行はれ、南北朝以後江戶初期頃までは性理の學が盛んに、江戶中期以後は考證の學が流行した。

【參考】理學宗傳二十六卷(清孫奇逢)○正誼堂全書(清張伯行編)○明儒學案六十二卷(清黃宗羲)○學案小識(清唐鑑)十四卷末一卷(清唐鑑)○國朝漢學師承記八卷附三卷(清江藩)○清代樸學大師列傳二十五卷(支偉成)○清代學術概論(梁啓超)○儒學史(宇野哲人)○支那哲學概論(同上)○支那哲學史(高瀨武次郎)○十三經注疏四百十六卷○十三經注疏二百四十三卷(清阮元)○經典釋文三十卷(唐陸元朗德明)○通志堂經解(清納蘭性德編)○古經解彙函附小學彙函(清鍾謙鈞編)○皇清經解一千四百卷(清阮元編)○皇清經解續編一千四百三十卷(清王先謙編)○經學通論五卷(同上)○經學歷史一卷(清皮錫瑞)○今古學攷二卷(清廖平)○宋元學案一百卷(清黃宗羲・全祖望)○支那經學史論(本田成之)○儒學の目的と宋儒の活動(諸橋轍次)　(宇野・木多)

契狀 けいじやう　古文書【解說】或る事柄に就き他人と契約する文書。契約狀ともいふ。これに一方的のものと相互共同的のものとがある。何れにするも終に起請の文句のある場合は一種の起請文(別項)と見られる。(伊木)

中合條々事

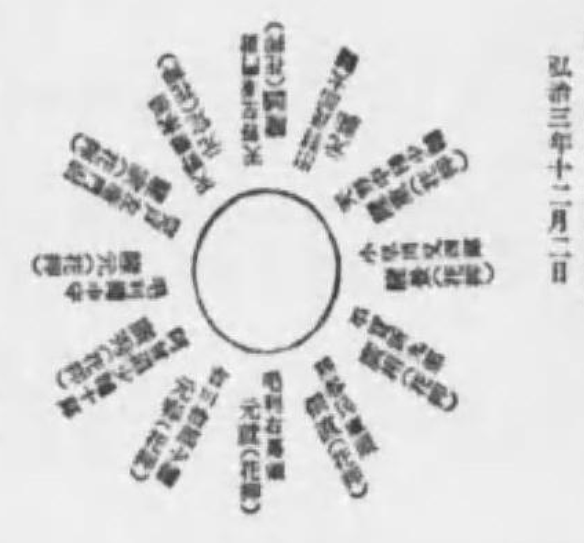
一、軍勢狼藉之儀、雖堅加制止、更無停止之儀、於向後、此中合衆中家人等、少茂於有狼藉者、則可討果事、

一、向後陣拂仕間敷候、於背此旨輩者、是又右同前可討果事、

一、依在所、狼藉可有不苦儀候、其儀者以衆議可免事、

八幡大菩薩、鹿島大明神可有御照覽候、此旨不可有相違候、仍誓文如件、

弘治三年十二月二日



契約申　攝津國中島宮原北庄請家職事

右當庄者南都興福院御領也、而於下地者、任當島之法、一圓致管領、至御年貢半分(但貢錢增減、可致內納)者、每年無懈怠、於當所可渡申守家雜掌御方、若此條有不法之儀者、可及異御沙汰、更不可申子細、仍契狀如件、

應安七年十月四日　式部丞貞綱(花押)

左衞門尉行直(花押)

形象藝術 けいしやうげいじゅつ　形相藝術とも書く。(獨) Bildkunst

【解說】一般に空間に形成されるところの藝術を言ふ。リップスによれば、これを二種に分類する。即ち自然の形象を描寫せずに自由な形象の藝術、つまり空間そのものを形成するものを空間藝術(別項)と言ひ、他方を別に描寫藝術とする。これは具體的事物の形相を與へる藝術で、吾人の感官的現象を再現描寫し、又は變形することによつて、具體的に吾々は把握觀察し得るものを言ひ、立體的形相藝術(丸彫)、平面形相藝術(繪畫)、及びその中間の浮彫とを區別することが出來る。(藝術の分類參照)

【參考】Schmarsow: *Beiträge d. Kunstwiss.* ○形式の問題 ヒルデブラント(清水清譯)○藝術論 フィドラア(金田廉譯)　(村田)

形象性 けいしやうせい　「美的形相性」を見よ。

景徐周麟 けいじよしうりん　「周麟」を見よ。

傾城 けいせい　所作事　變化物【性質】傾城はいふまでもなく遊女のことで、「官女」「禿」等と共に變化舞踊の色どりとして取入れられたものである。その內容も、多くは大同小異で、傾城の生業のはかなさ、苦しさや、客に對する情事、口說等を述べるのが主である。特に傾城何某ではなくして、ただ單に傾城といふものを表現するに留まるのは、官女等と同じである。【沿革】變化舞踊として取入れられたのでは、寛延元年十一月、江戶中村座「女文字平家物語」第二番目に、中村粂太郎が四變化の一として演じたのが最も古い。その後、慶應まで三十有餘の種々の「傾城」が現はれ、その數に於いて、江戶時代に如何に人氣があつてあることは、變化舞踊中、第一位に迎へられたかが知られ、又、傾城と時代思想との關係が覗はれる。この數多い「傾城」が、現今に至つて僅かに數種を殘すの外、廢滅の運命に遭遇したのは、舞踊として優れたものでないのみでなく、時代に適應しなくなつたことを如實に示してゐるのである。これ等數多い「傾城」は、殆ど長唄の地によつて演ぜられ、これを區別するために、唄ひ出しや演ずる俳優によつて種々の稱呼が附せられてゐる。唄ひ出しの「約束の來るか〳〵」とあるので「約束の傾城」、「かりそめの夢も浮寢の徒枕」とあるので「かりそめの傾城」等の類。又、俳優の名によるのは中村松江(二代)が演じたので「松江の傾城」、中村芝翫(二代)が演じたので「芝翫の傾城」等の類である。「傾城」を演じた主なる俳優は、二代瀨川菊之丞、中村富十郎、四代・五代岩井半四郎、三代・四代中村歌右衞門、三代坂東三津五郎、二代關三十郎、七代市川團十郎、三代尾上菊五郎、三代嵐三五郎、十二代市村羽左衞門、四代市川小團次等である。

【曲目】左に重要なるものを揭げる。(傾城の傾城)(本名題)文化八年三月十五日初日、江戶中村座「年々歲々濱石川」第二番目大切、(作詞)桜井幸三(曲節)長唄(立唄)富士田千藏(作曲)九代杵屋六左衞門(振附)市山七十郎(傳來)曲は傳存、振は廢滅に瀕しつつある。(內容)卷紙に文を認めながら傾城